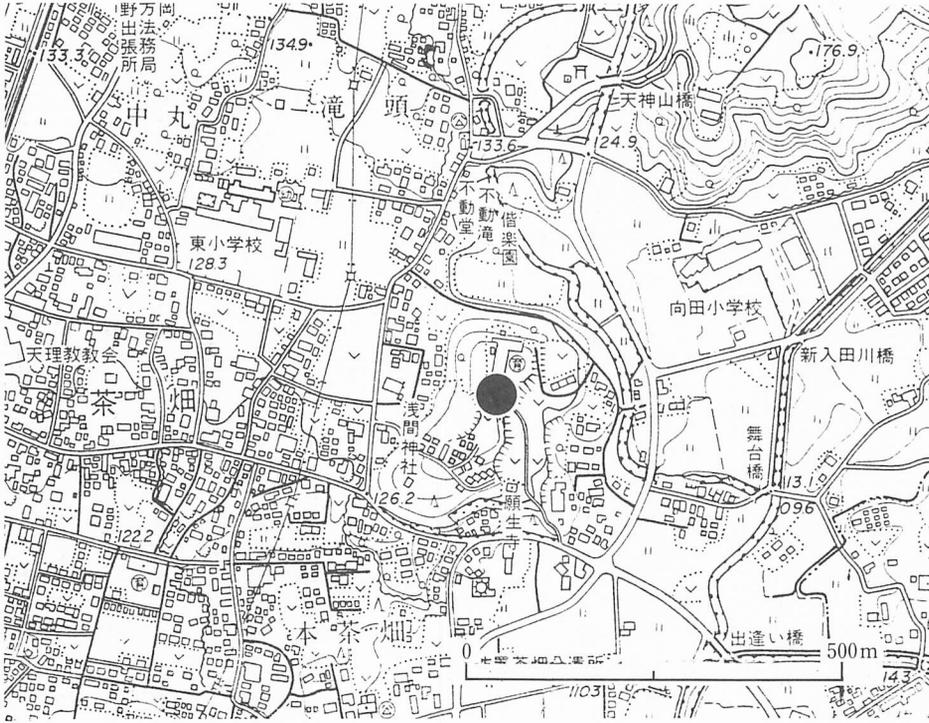


第二章 繩文時代

道場山遺跡
どうばやま

所在地 裾野市茶畑字道場山



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 道場山遺跡は、裾野市の東南部、箱根西麓よりの海拔

一四七・九mの道場山という独立丘に位置し、丘陵上全体が遺跡である。地元では浅間神社のある南側一帯を浅間山遺跡、北側一帯を上ノ山遺跡としてきたが、字名にしたがって道場山遺跡とした。本遺跡丘陵の東側裾部を泉川が流れ、南方は、箱根山より泉川を合流した境川が流れて、沖積地が開けている。西側一帯は、富士山溶岩流の台状地形となっている。本遺跡東方六〇〇mの箱根山麓末端の丘陵上には、縄文時代中期の天神山・屯屋敷遺跡がある。

発見と調査 本遺跡は、昭和四年（一九二九）、柴田常恵によって「泉村

茶畑遺跡」として紹介され、また静岡県史第一巻（昭和五年）には、駿東郡泉村遺跡として「同村大字茶畑浅間神社及屯屋敷から土器・石匙凹石及打製石斧を発見してゐる」と記載されている。昭和四〇年（一九六五）、静岡県教育委員会が編集した遺跡台帳には「浅間遺跡」とあり、縄文時代中期遺跡としている。土地の人の話によると、昭和二六年（一九五二）頃、完形土器が出土し、石棺らしいものが発見されたという。昭和四一年（一九六六）、裾野市郷土資料展には裾野郷土研究会が、本

遺跡出土の中期の土器と石棒を展示している。昭和四五年頃、浅間神社北側の宅地造成工事の際に、現場から大量の縄文土器片が出土した。昭和五〇年（一九七五）、遺跡内に富岳台保育園の建設が始まり、工事に先

立って、裾野市教育委員会により緊急の発掘調査が実施された。調査は、日本考古学協会員笹津海祥と裾野市文化財保護審議委員芹沢充寛及び東海大学考古学研究室学生井上輝夫が担当し、これに日本大学三島高等学校、県立沼津工業高等学校、県立修善寺工業高等学校の郷土

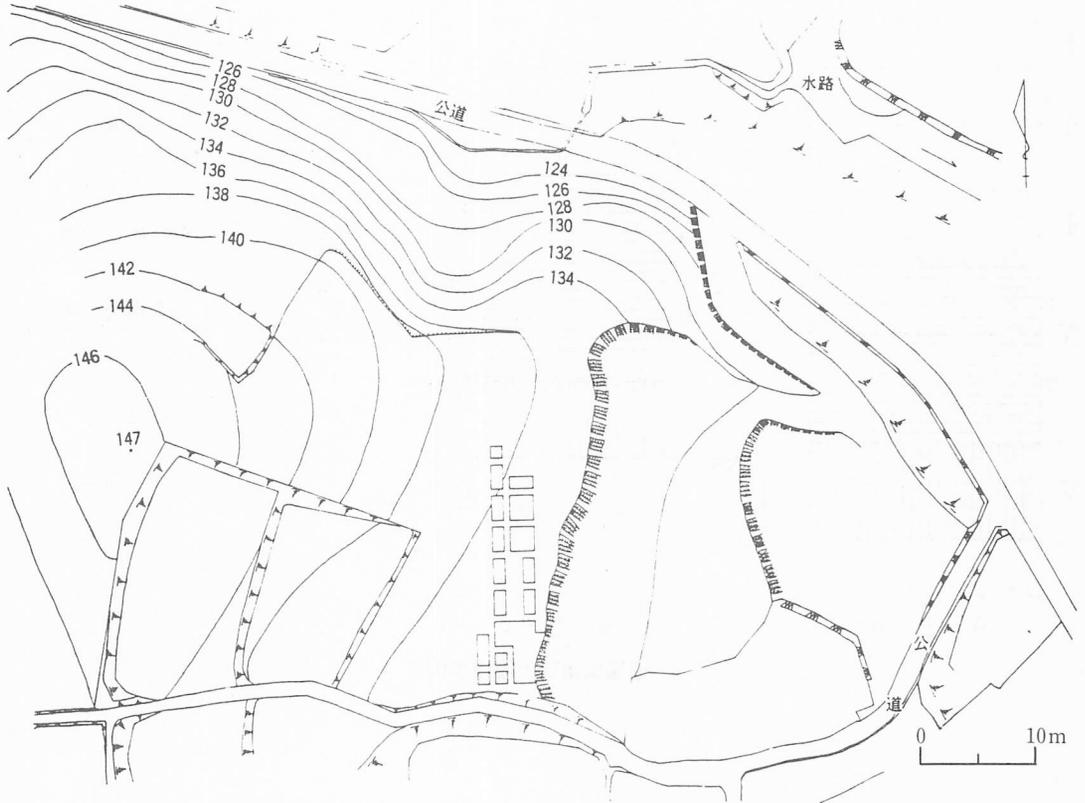
研究部員、裾野郷土研究会員、地元の人々が参加した。

遺跡は、永年におよぶ耕作地のため、広範囲にわたり遺物包含層から下部のローム層までが攪乱され、また近年の宅地造成のため、東斜面の遺跡主要部分は消滅していた。

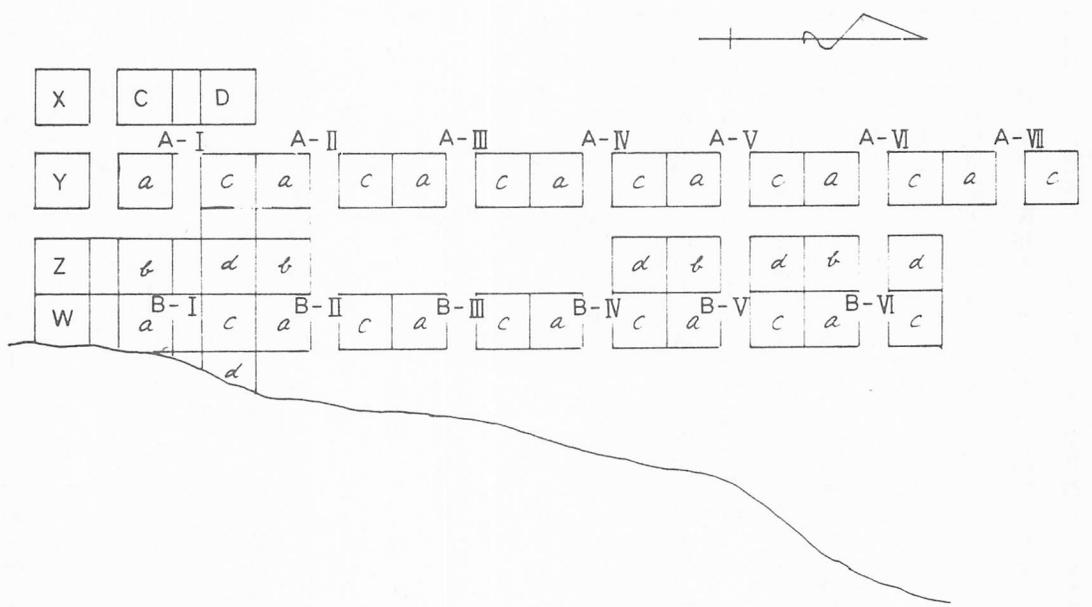
調査は、地形図・発掘平面図に示したように、A―IとVII、B―IとVIまで調査区を設定し発掘調査を行なった。この結果、A―I―a区からは、地表下約七〇cmの黒褐色土層上面から縄文中期土器の底部、石斧を発見し、豊富な遺物包含層を確認、またV字溝を検出した。そこでA―I区を中心に発掘区X、C、Dを東に拡張し、さらにB―I―b、d、B―II―a、c、d区を発掘し、溝状遺構、集石、炉址、埋没土器を検出した。A―III―aからVII区にかけては、西南方向から北東方向に延びる溝状遺構を検出し、A―III区からA―V区までは攪乱されていた。

層序と遺構 層序は、土層模型図に示した通りで、黒褐色土層上層より下層までの約四〇〜五〇cmの間が、縄文時代中期初頭の包含層で、遺物は黒褐色土層中でも、四層にわたり出土することが確認された。

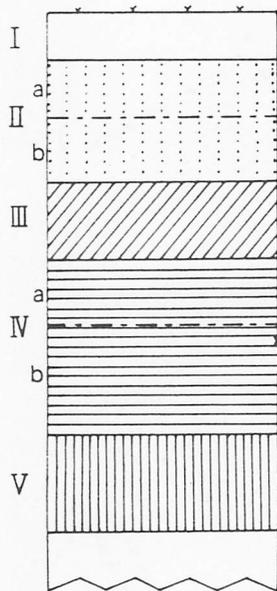
遺構は、溝状遺構二カ所と集石遺構、石囲い炉址、埋没土器が検出されている。集石遺構はc区から検出され、径一〇cm位の河原石三〇個で、四七cm×三〇cmの範囲に、楕円状に集石されていた。V字状構の北壁に形成され、礫に焼痕が認められた。集石は、二四個の群と六個の群の二ブロックからなっていた。溝状遺構のうちV字溝は、A―I―aからc、d区にかけて検出され、最大幅二〇二cm、深さ一一六cmあり、下部よりゆるやかにV字状に立ちあがる。長さ五〇五cmで、南



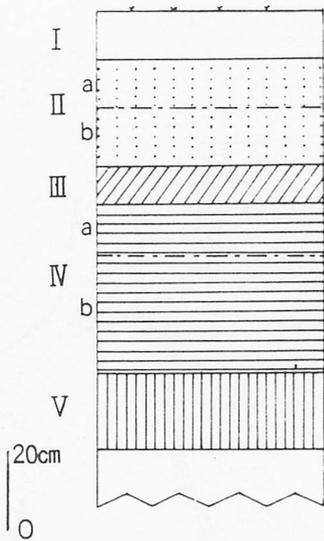
道場山遺跡地形図



道場山遺跡発掘平面図



A-I-a



B-II-c

道場山遺跡土層模型図

- 耕作土
- 黒色土層
- 黒色土層 (パーミスを含む)
- 茶褐色土層
- 黒茶褐色土層
- 黒茶褐色土層 (パーミスを含む)
- 黒褐色土層
- ローム層

東斜面に落ち込み、A-I-b区で形状を失う。下部で縄文時代中期土器、覆土上面で古銭一枚が出土している。石囲い炉址はA-I-c区のV字状溝の南側から検出された。四五cm×五〇cmの長方形で、板状立石の下部に、厚さ一〇〜一五cmの焼土があり、縁石の南一〇cmの位置に半月形の石刀と思われる石器一点と、黒曜石製のサイドスクレーパー(片側に刃のついたもの)一点が出土している。埋没土器は石囲い炉址の西約四〇cmの位置に、直立の形で出土し、胴部下半約一〇cmは破損しており、底部中央部も打ち貫かれていた。溝状遺構A-VI-aからA-VII-c区にかけて検出された。最大幅一八〇cm、深さ七九cm、長さ九〇五cmあり、断面は、U字状で、東側斜面に曲線をえがき延長される。遺物は、覆土上面から須恵器片、古銭二枚、下部から弥生土器、縄文土器が検出された。土坑は、A-VI-c区のU字状溝底面から検出された。円形で底径五二cm、上面径六〇cmありローム層に掘り込まれていた。

遺物 調査区域の南側斜面の地点から遺物が集中的に出土し、打製石斧、乳棒状石斧、石包丁に似た石斧など一〇五点、石錘八点、石匙九点、石鏃一点のほか、縄文土器は大量に出土しており、また弥生土器と須恵器も少量出土した。昭和五一年(一九七六)以後、出土遺物の大部分は未整理のまま富士山資料館に保管されていたが、その一部の主なものを整理して図版にした。

第一群土器 縄文時代早期後半に属する土器群で、二類に分けられる。第一類は、胎土に若干の繊維を含み、器形は深鉢形、口縁は太めの粘土紐をはり付け、口縁帯をつくる。無文でヘラ状器具による斜方

向の整形痕がみられる(第1図1)。第二類は、絡条体圧痕文のみられるものである(第1図2・3)。ともに数量は少ない。

第二群土器 縄文時代中期前半に属する土器で、胎土に多量の雲母と白色石粒を含む。数類に分けることができる。第一類は、半截竹管による集合沈線を施すもので、本類だけ色調は明灰褐色を呈する(第1図4)。第二類は、連続の花弁状文を施すもの(第1図5・15)、第三類は、流れ三角刻印文のあるもの(第2図2・5・8)、第四類は、隆線と沈線文を組合せたもので、地文に縄文を施すものもある(第2図6・10、第4図2)。第五類は、地文に縄文を施し、口縁帯に隆線を置き粘土紐を貼付する(第4図1)。第二類から第五類までは、色調が暗黒褐色で雲母のみ顕著に目立つ。第六類は、胎土に角のとれた小石を含み、暗灰色から灰褐色をした薄手の土器で、硬く焼き締まる。隆帯があり、半截竹管で爪形に押し入れた文様のもの(第4図7)、縄文の施されたもの(第4図11)、細鋭利な沈線文のもの(第4図10)、などがある。

第三群土器は、縄文時代中期中葉に属する土器で、胎土、文様によって、次のように分類できる。第一類は、隆起線区画文内を角押し文で文様を構成する。胎土に雲母を多量に含むものと、白色白粒を含むものがあり、色調は暗い(第3図1・4・16、第4図12・18、第5図8)。第二類は、隆起線区画文内を連続三角押し文と爪形文で文様を構成する。胎土に白色石粒を含む(第5図1・7・9・12・14)。

第三類は、隆起線区画文内を爪形文で文様を構成し、地文に縄文を施すものがある(第6図9・13・16・19、第7図2・5・7・10・11・

14・15)。第四類は、地文に縄文を施し、太めの半截竹管で区画文を構成し、内側に刻目を入れる(第7図13)。第五類は、地をよく整形し、断面三角形の隆起線で大きく区画文帯を構成する(第7図18、第8図1)。第六類は、隆起線文の土器で、渦状、重円文を主体に文様を構成する(第8図2)。

第四群土器は、縄文時代中期後半に属するものを本群としたが、数量は少ない(第9図14)。

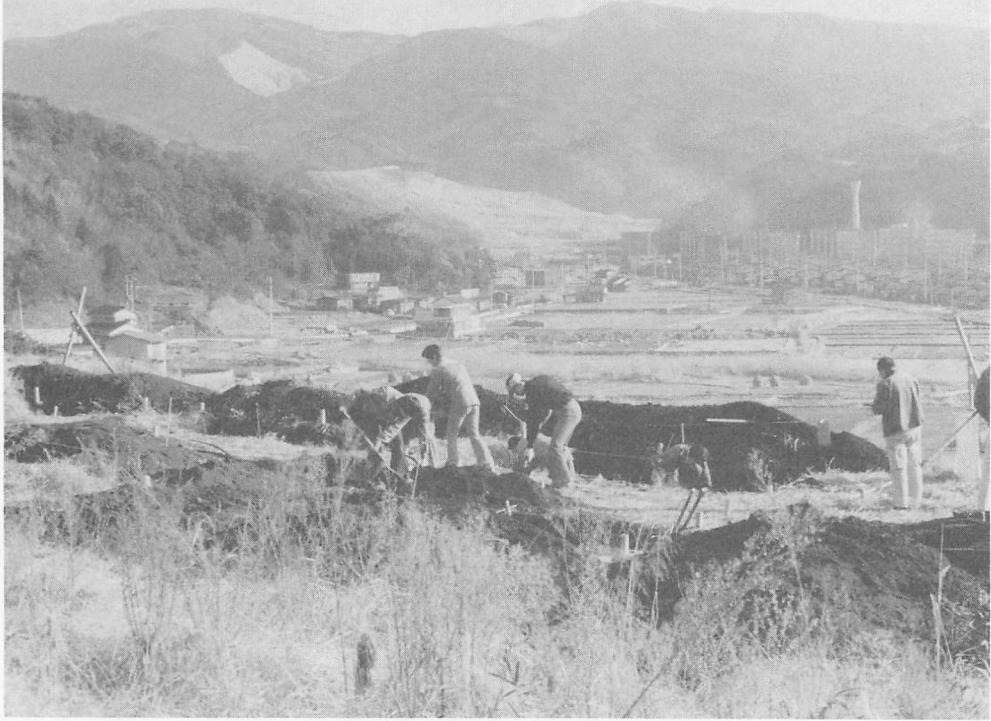
石器 石器類は、安山岩、玄武岩製の磨製石斧、打製石斧(第10図1・9)、石錘(第10図10)、黒曜石製のサイドスクレーパー(第10図11)、黒曜石製ポイント状石器(第10図12)がある。

遺跡の特徴 出土の土器からみると、縄文時代中期前葉から中葉の土器が主体を占める遺跡である。

現状 道場山丘陵の平坦部の大部分は、現在、住宅地となり遺跡は消滅している。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

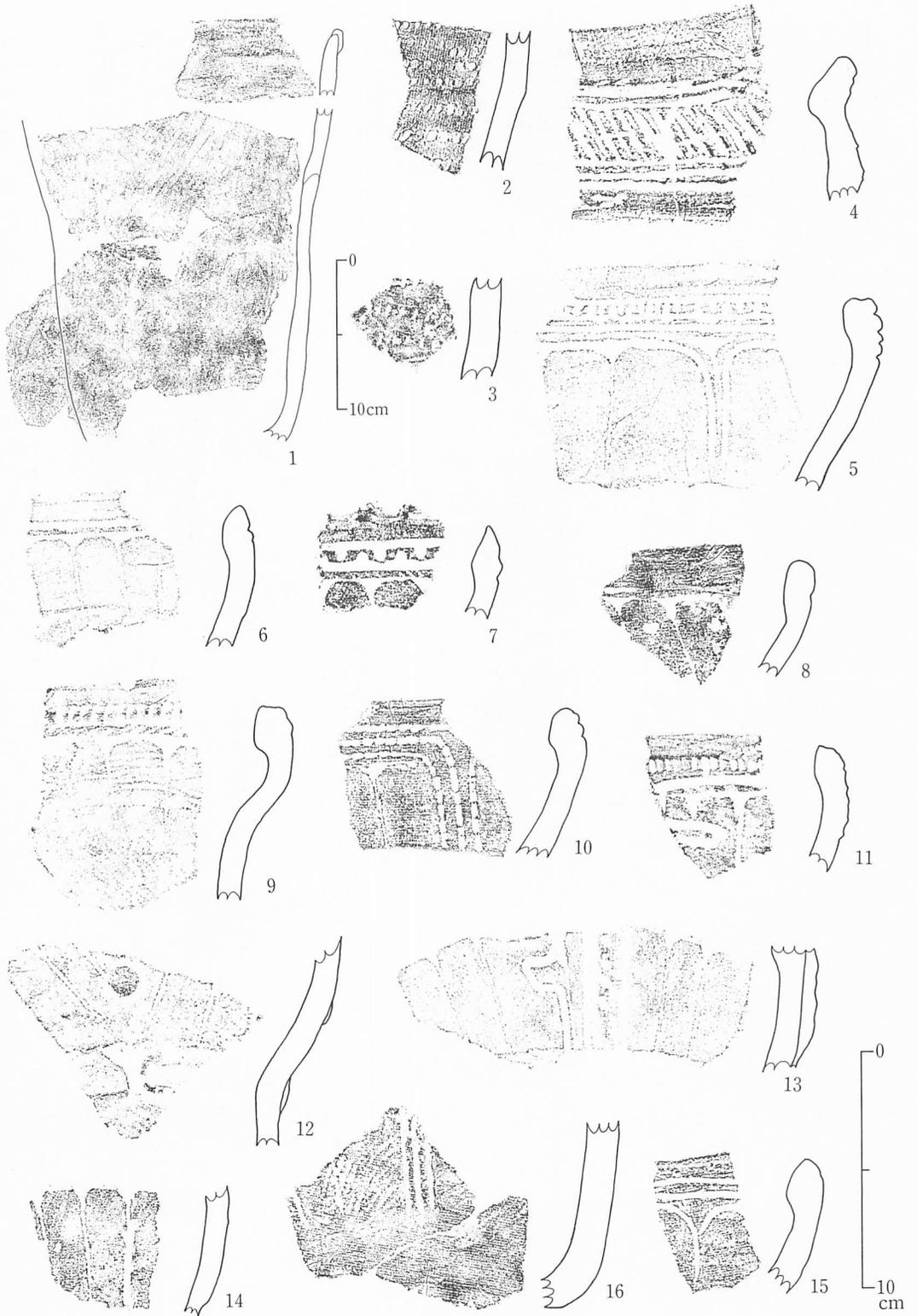
文献 笹津海祥ほか「裾野市茶畑道場山遺跡発掘調査概報」裾野市教育委員会 一九七六



道場山遺跡発掘現場



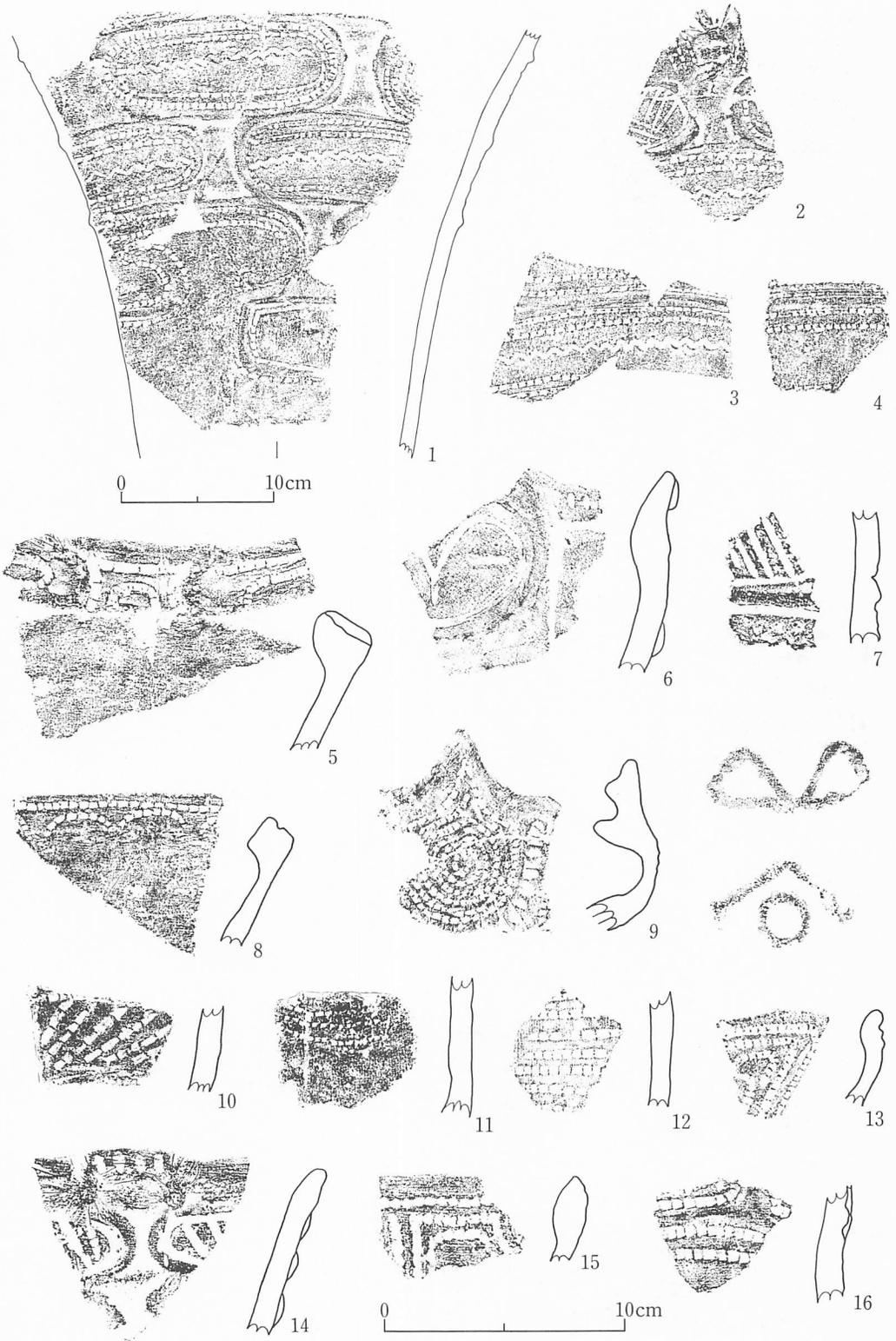
道場山遺跡土器の出土状況



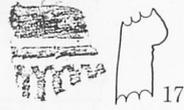
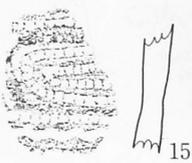
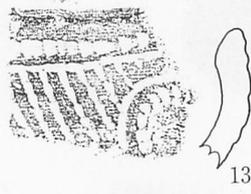
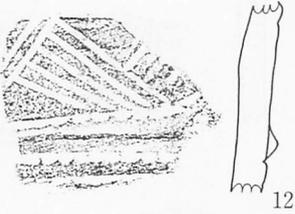
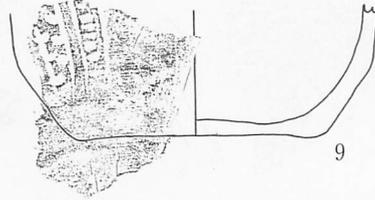
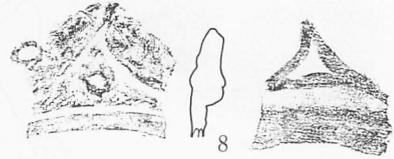
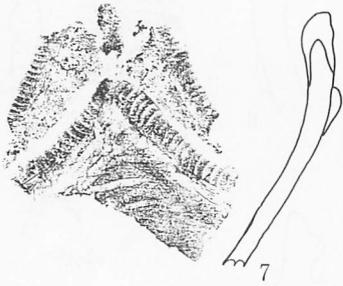
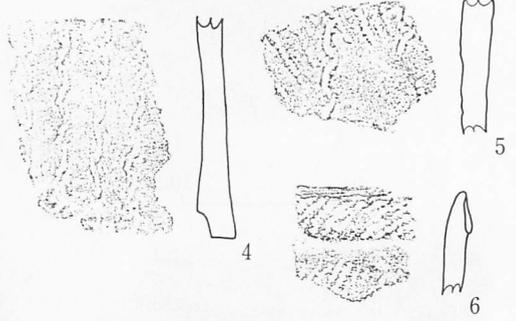
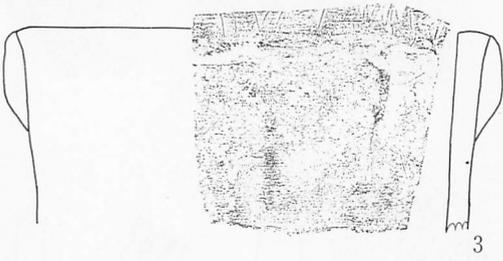
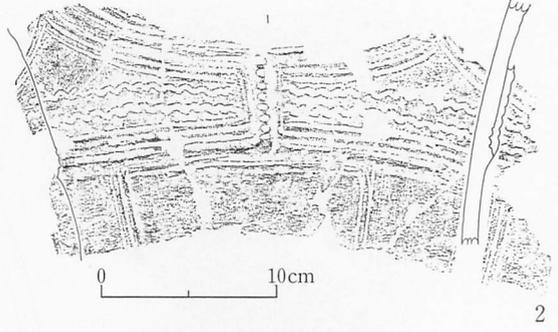
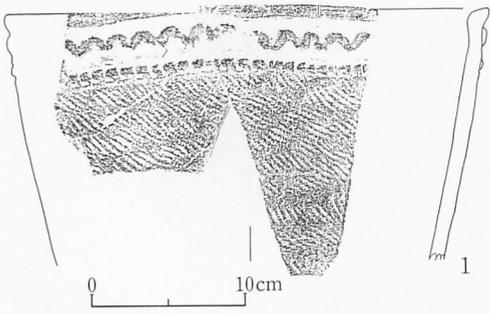
第1図 道場山遺跡出土土器拓影



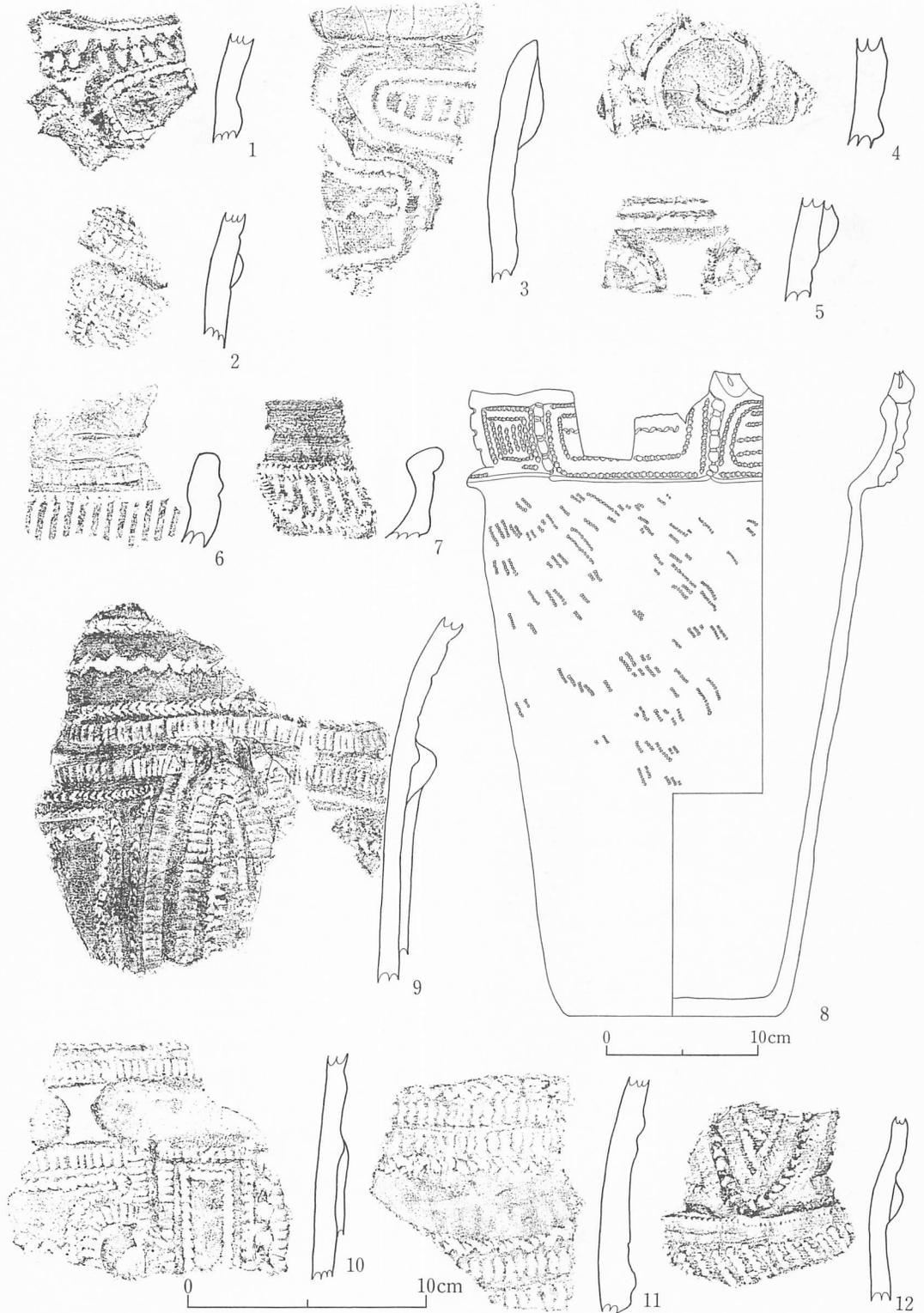
第2図 道場山遺跡出土土器拓影



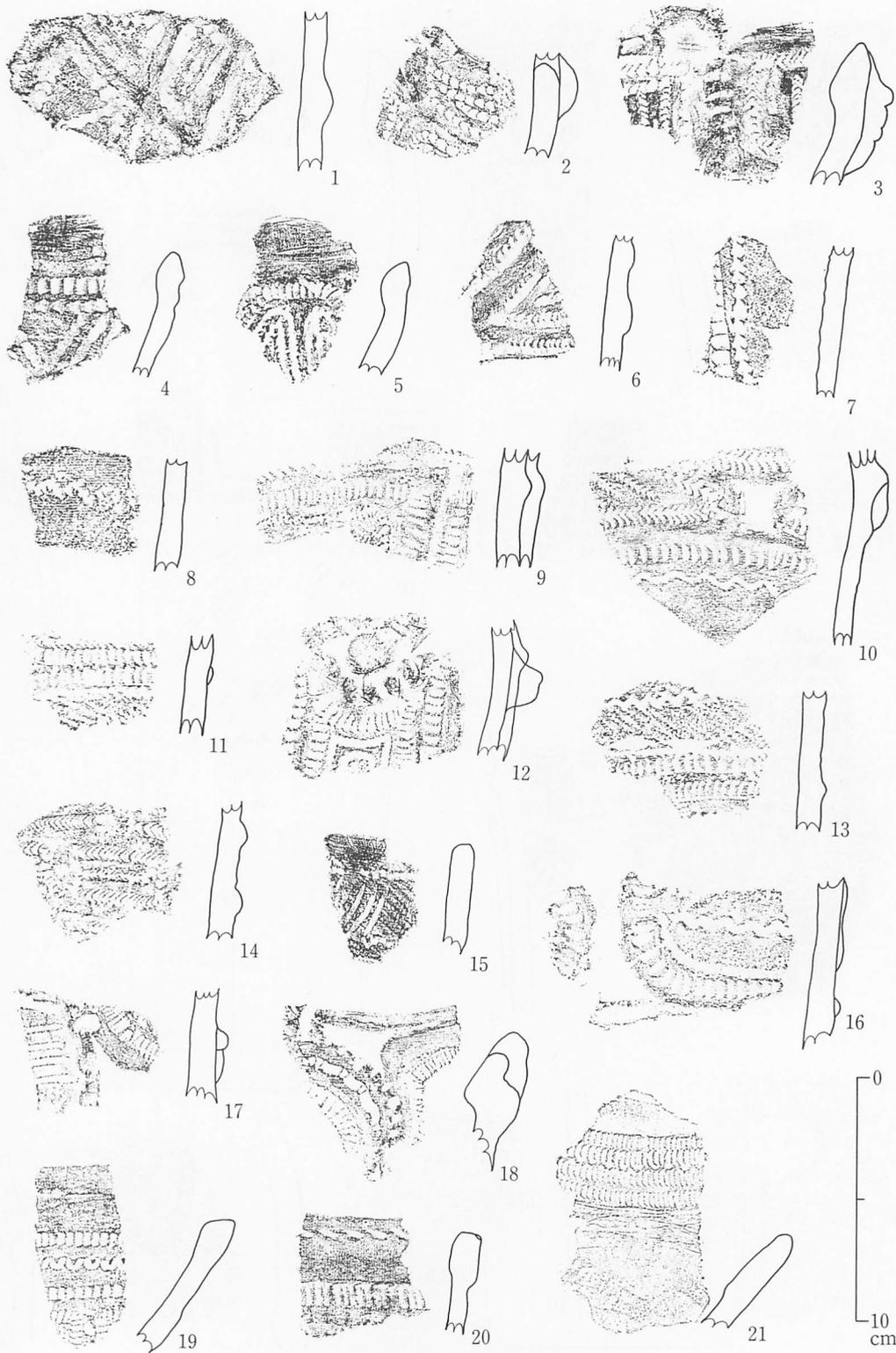
第3図 道場山遺跡出土土器拓影



第4図 道場山遺跡出土土器拓影



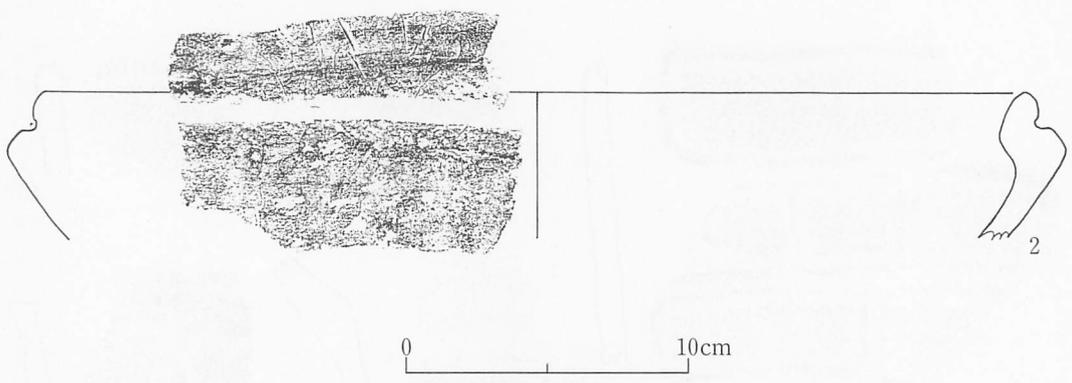
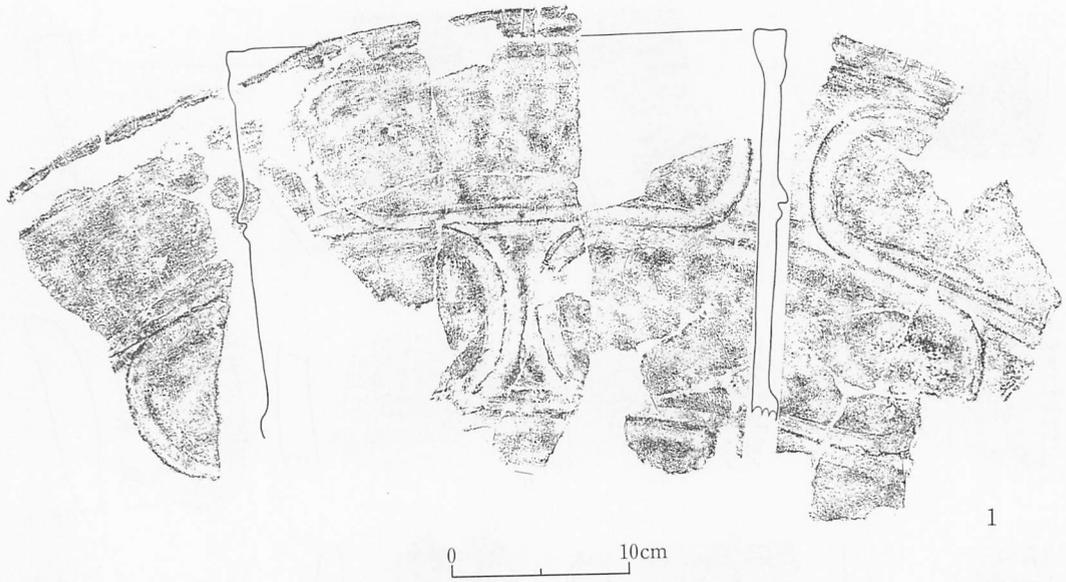
第5図 道場山遺跡出土土器拓影



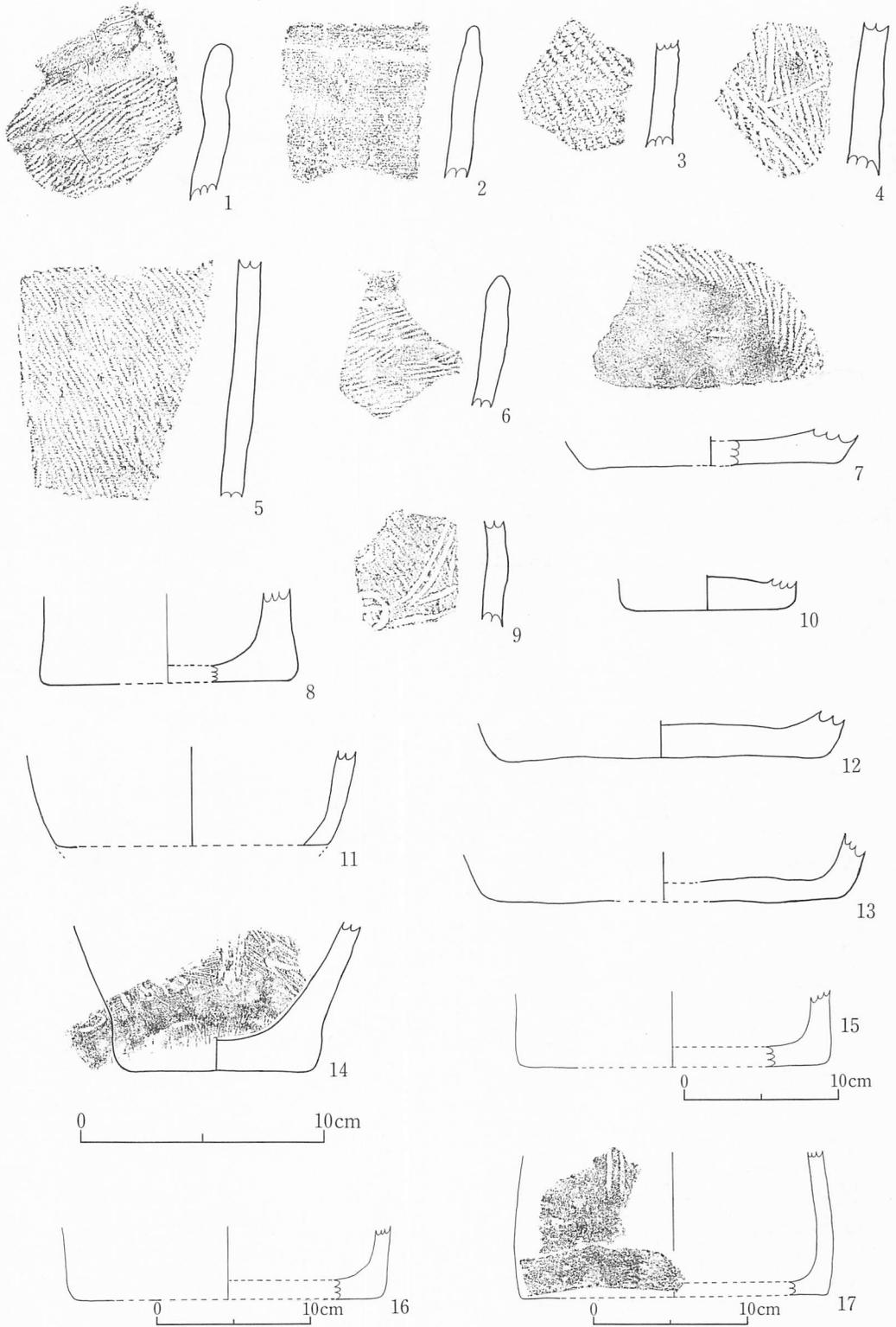
第6图 道場山遺跡出土土器拓影



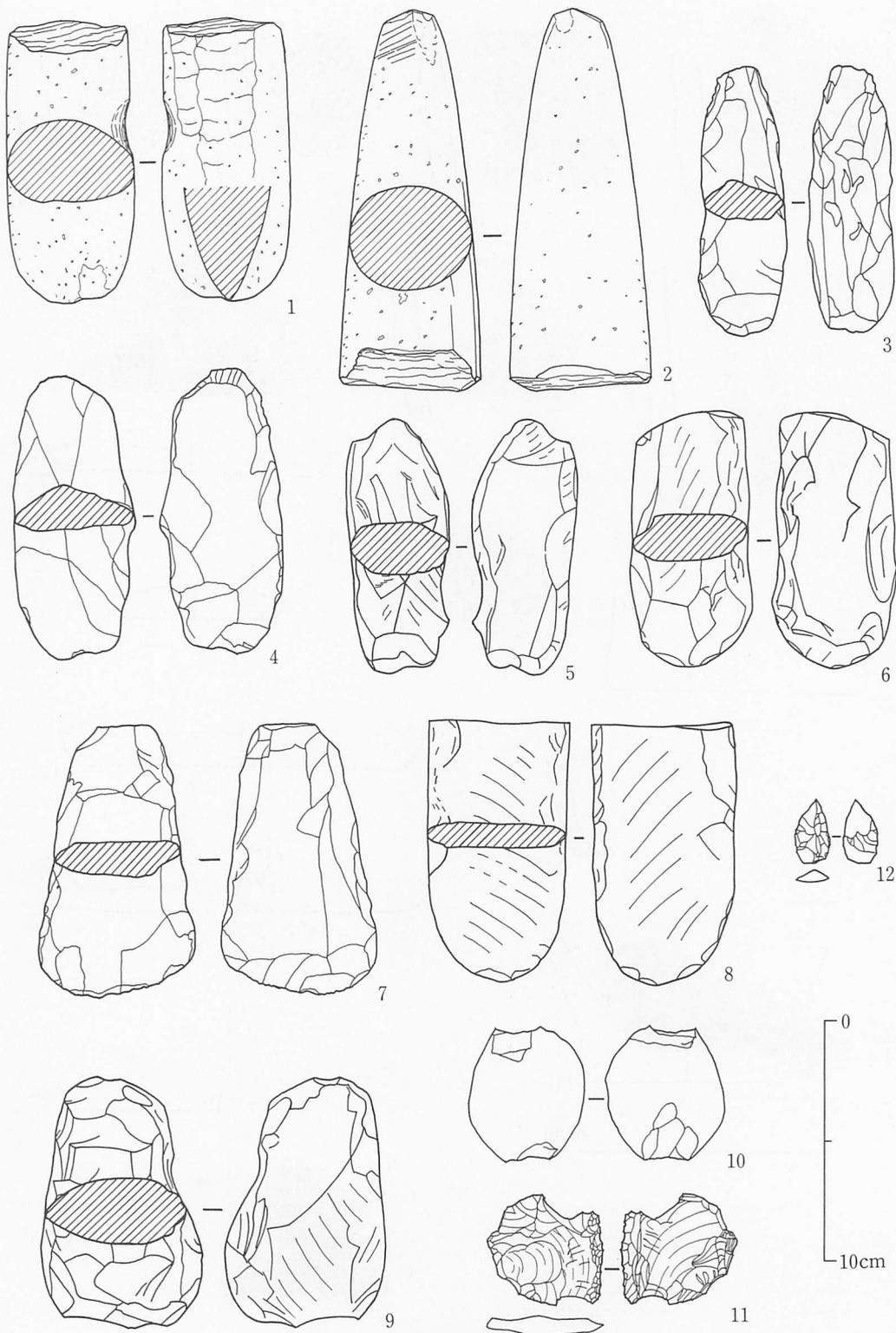
第7図 道場山遺跡出土土器拓影



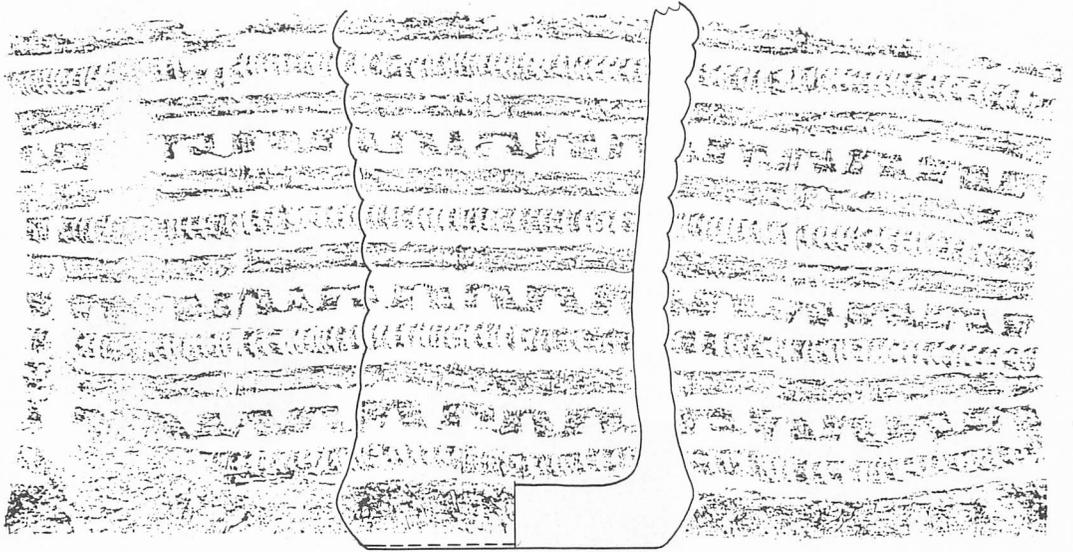
第 8 図 道場山遺跡出土土器拓影



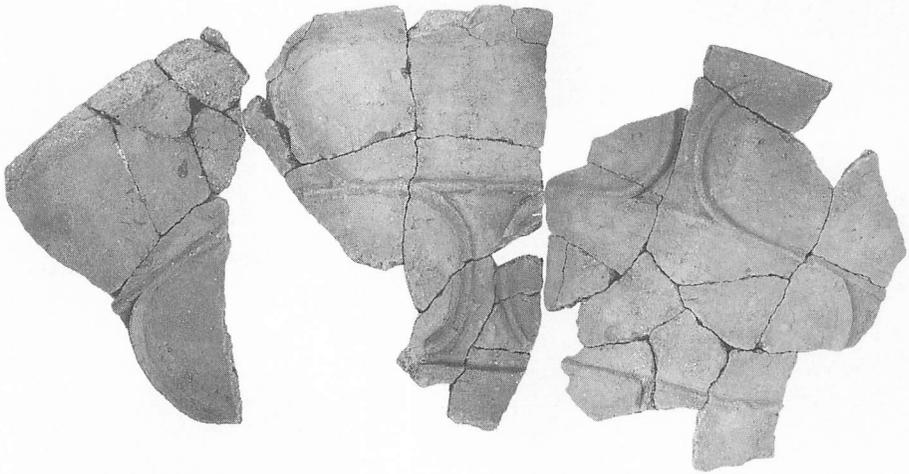
第9図 道場山遺跡出土土器拓影



第 10 图 道場山遺跡出土石器実測图



道場山遺跡表面採集の土器拓影

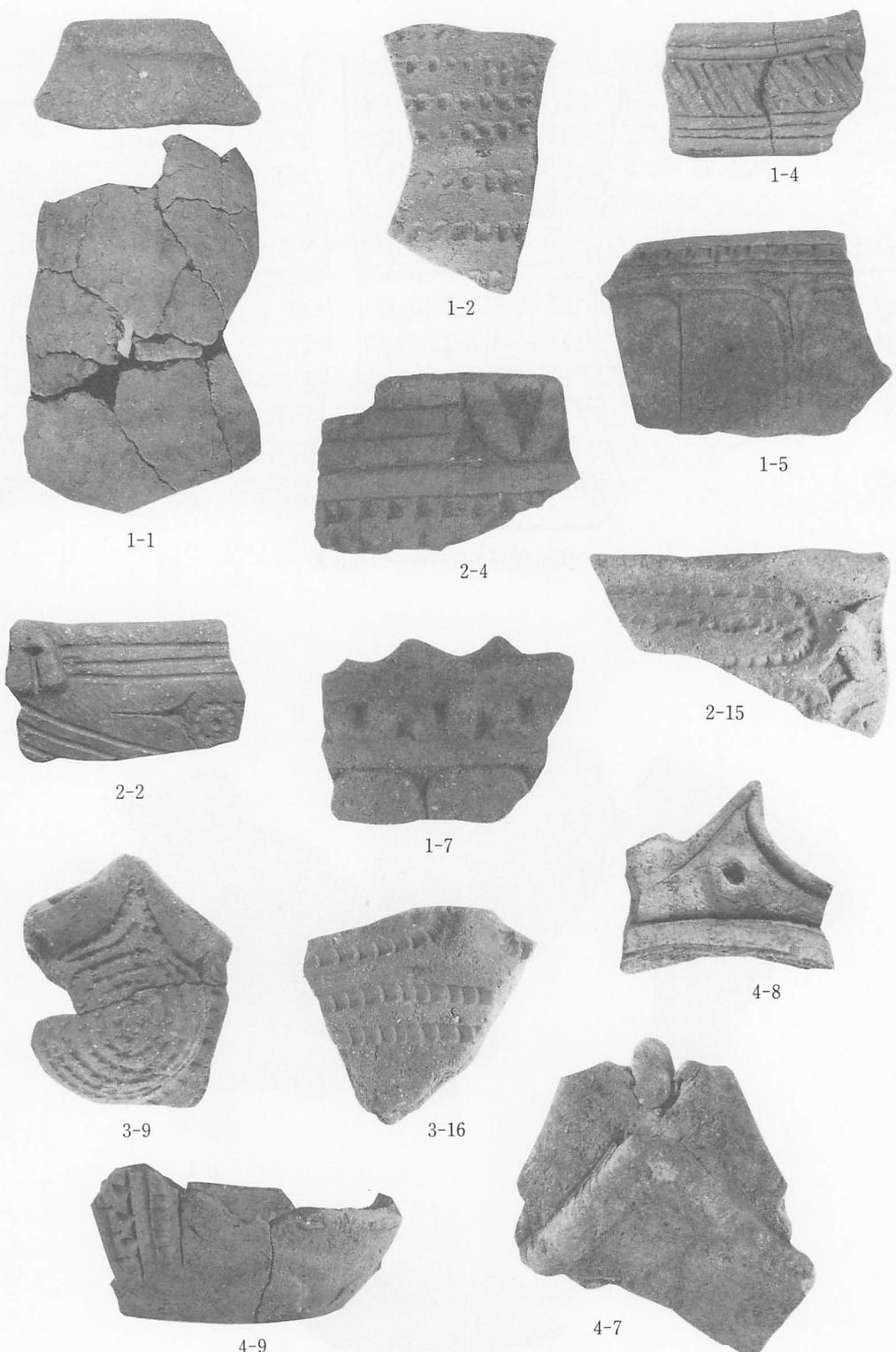


8-1



8-2

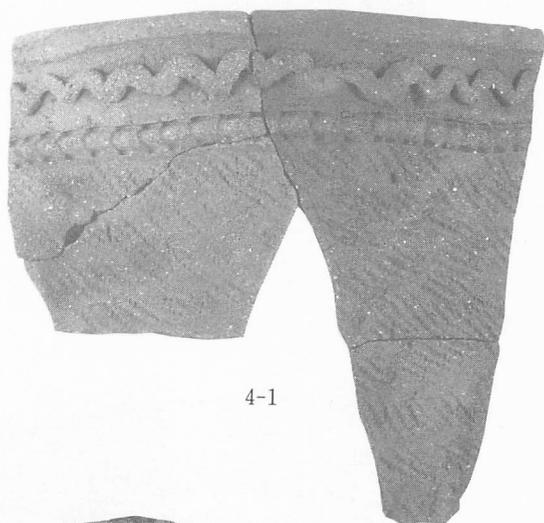
図版 1 道場山遺跡出土土器



图版 2 道場山遺跡出土土器



3-1



4-1



4-2

図版3 道場山遺跡出土土器



5-9



5-8

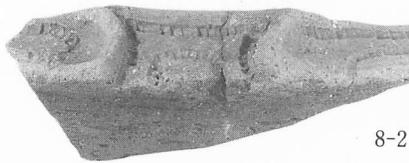
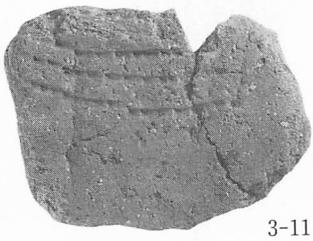
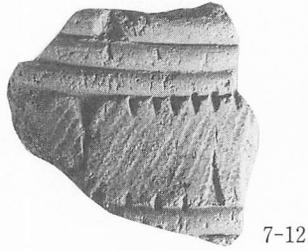
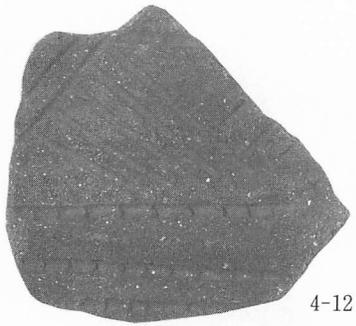


7-13



表採の土器

図版4 道場山遺跡出土土器



図版5 道場山遺跡出土土器



10-1



10-2



10-4



10-5



10-7



10-8



10-12



10-9



10-10

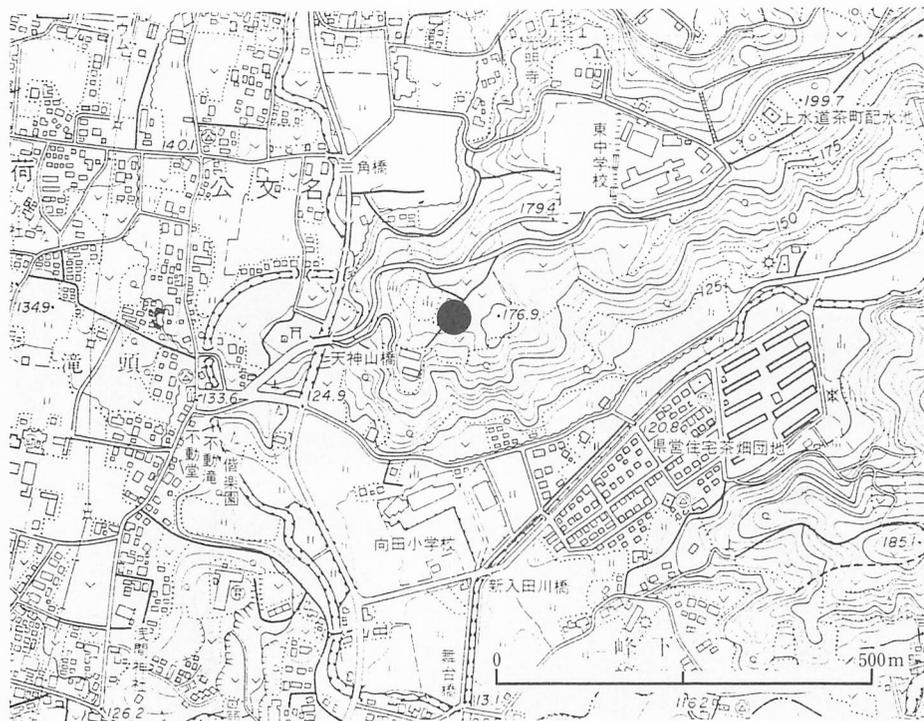


10-11

图版 6 道場山遺跡出土石器

天神山・屯屋敷遺跡

所在地 裾野市茶畑字屯屋敷二〇六四番地ほか



位置図



遺跡範囲図



天神山・屯屋敷遺跡遠望(南西から)

位置と立地 本遺跡は、箱根外輪山の三国山から南西に延びた尾根の末端、海拔一七五mの丘陵上に位置する。西側と南側の丘陵脚部を泉川と入田川が流れ、流路に沿って狭い沖積地を形成している。本遺跡の丘陵上には、箱根外輪山に向かって日向、丸山Ⅰ、丸山Ⅱ遺跡が連続して存在する。

発見と調査 本遺跡は古くから知られており、昭和四年(一九二九)、柴田常恵は「泉村茶畑遺跡」(道場山遺跡参照)として紹介し、また静岡県史第一巻(昭和五年)には、「泉村遺跡」として、同村大字茶畑浅間神社(道場山遺跡)及び屯屋敷から土器、石匙、凹石及び打製石斧を発見していると記載されている。昭和三〇年代に入って、駿豆考古学会、県立沼津東高等学校郷土研究部などによって現地の踏査が行われている。昭和四八年(一九七三)、日邦工業株式会社によって、宅地造成工事が開始され、遺跡の一部が破壊されることになったため、裾野市教育委員会では、笹津海祥、芹沢充寛に緊急の発掘調査を依頼し、これに裾野郷土研究会、県立裾野高等学校郷土研究部、裾野ボーイスカウト第一団、裾野市立深良小学校児童(指導教員を含む)が協力参加して、発掘調査が実施された。調査の段階で、すでに表土の大部分は削り取られており、残った部分を確認するため、丘陵を横断する幅二m、長さ三〇mのトレンチ(試掘溝)を設置し調査を実施した。この結果、トレンチの東端に近い一〇mの範囲に、遺物の包含層を検出し、また南側部分の状態を確認するため、幅一・五m、長さ五mのトレンチ三本を入れたところ、C区の南端で柱穴、E区で焼土、A区の拡張区で焼土と、その北側部分で東西に細長い溝を検出した。

層序と遺構 C区で柱穴四個を検出したが、住居址は確認されていない。A区、B区で、それぞれ焼土を検出したが、細い段状に粘土の焼結したものであった。溝は、幅七五cm、長さ九m、深さ一・二五m、北端に階段が造り出されていた。

遺物 土器、石器が出土し、土器は縄文、沈線文、隆起線文、無文の土器片と、橋状把手の土器片、土製円板があり、石器には、打製石斧三点、乳棒状石斧一点、小形磨製石斧一点、スクレーパー一点、磨石九点^(注)が出土した。図版は、昭和九年(一九三三)頃から昭和四〇年代までに、採集された資料をもとにして作製したものである。

第1図1~7は、把手付土器の把手部分の破片である。彫刻的な沈線で文様が構成される。

第2図1は、胎土に少量の繊維を含み、焼きが悪い。縦に捺糸文が施される。2は、連続した三角の押引文、3は、沈線文、4~8は、隆起線文の土器で、隆起帯に連続した刻目を入れたり、渦状文、連鎖文で文様を構成する。9~15は、隆起線、粘土紐の貼付、切り込んだ沈線で文様を構成する。16~23は、縄文の施文を主体にしたもの、24~26は、引掻状の沈線で文様を構成したもの、26は、土器片のへりを磨^すって円板にした、土製円板である。27は、縄文の地文に爪形文が施してある。1は、縄文時代早期、そのほかは縄文時代中期の土器である。15には「駿東郡小泉村茶畑天神山出土 昭和九、九、一三」の裏書があるが、小泉村は、泉村の誤りで採集者の誤認であろう。

第3図1~20は、低い隆線に沈線を引掻文を施して文様を構成した土器群である。このうち12~14は、猫の爪で引掻いたような櫛歯状文、

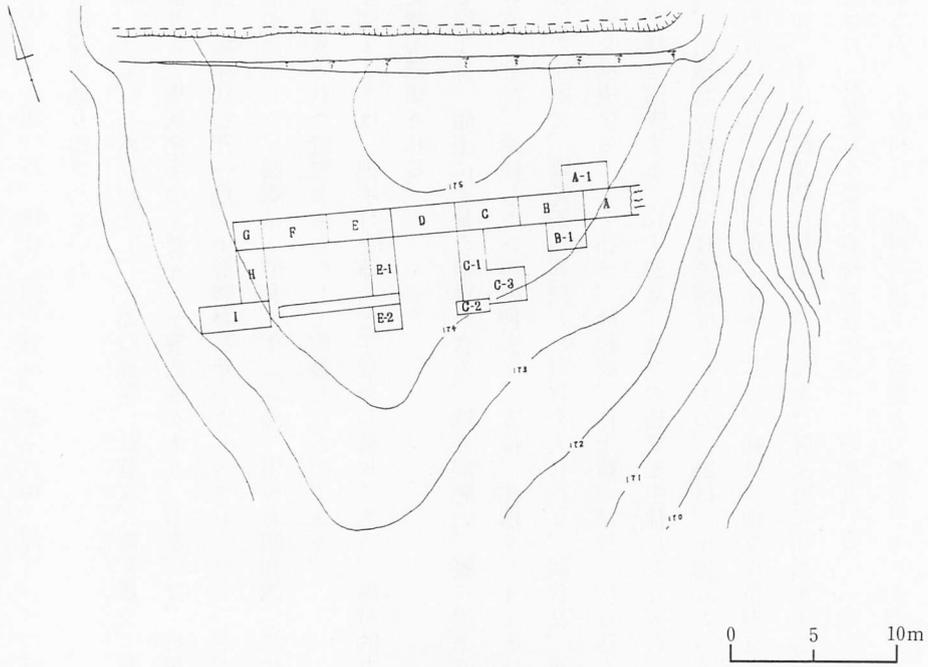
16~20は、ハの字状文である。以上第3図の土器群は、縄文時代中期後半のものである。

第4図は、第1図の土器と同じ把手付土器破片、2は、地文に沈線を施し粘土紐を貼付して文様を構成したもの、3~8は、沈線文を主とした土器、10~11は、底部である。9は、沈線と引掻文で文様を構成した土器で、口縁の径二二・八cm、高さ二二・五cm、底径九・七cmの深鉢形土器である。本土器は、県立沼津東高等学校郷土研究部が採集したものである。第4図の土器は、いずれも縄文時代中期後半に属するものである。

第5図は、口縁部に幅広の沈線と低い隆起帯で、以下、胴部は低い隆起帯とハの字の引掻文で文様を構成した土器で、口径三〇cm、高さ三〇・三cm、底径七・七cmの深鉢形土器である。第4図の9と同じものとしてよからう。縄文時代中期後半のものである。第5図下段の土器は、浅鉢形の土器で、同じ時期のものである。

第6図は、器台で径二一・三cm、器高五・九cm、沈線文が二カ所対に刻まれている。裾野市桃園尾畑遺跡出土の顔面把手付土器と共に、類例の少ない土器である。縄文時代中期に属する。第7図1~8は、打製石斧で、3・5~8は、左右から挟^くりを入れた分銅形をしている。石質は1~6・8は安山岩、7は玄武岩である。9・10は、石匙といわれるものであるが、ある種の刃器である。「皮はぎ」ともいう。石質は、9が玄武岩、10は硬質の頁岩である。

遺跡の特徴 本遺跡は、日向、丸山I・II遺跡と同じ丘陵上に連続し、その西端に位置している。極めて少量の縄文時代早期の土器片が



屯屋敷遺跡発掘平面図

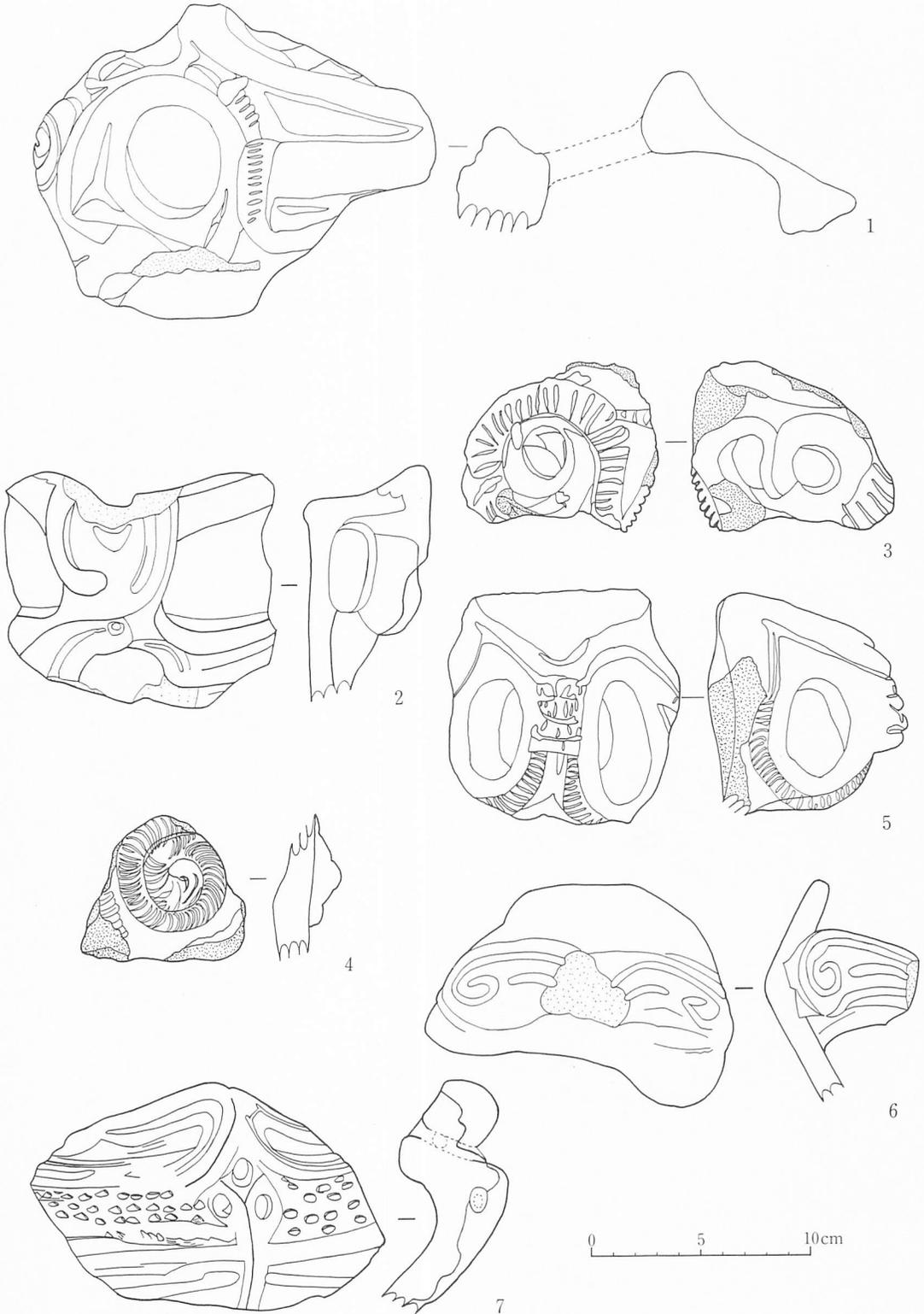
検出されているが、大部分は縄文時代中期後半のもので量的にも多い。裾野市内に於いて中期を代表する遺跡の一つとしてよからう。従来、天神山遺跡ともいわれてきたが、遺跡の主体は屯屋敷であるため、標題の遺跡とした。

現状 一部分宅地となっているが、山林、畑地である。

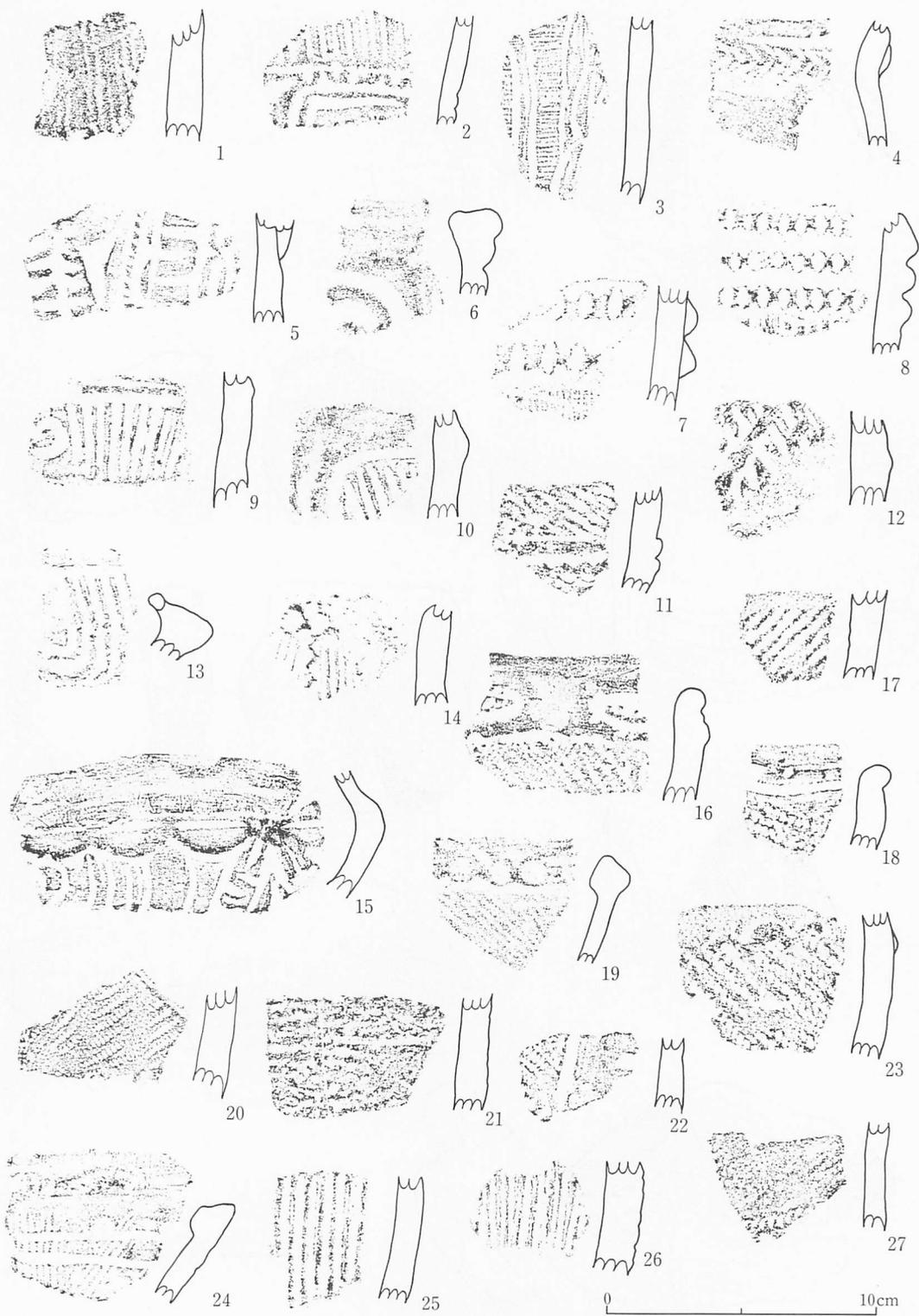
資料の所在 裾野市教育委員会、沼津市歴史民俗資料館 保管

文献 笹津海祥、芹沢充寛「裾野市屯屋敷遺跡発掘調査報告書」
裾野市教育委員会 一九七四

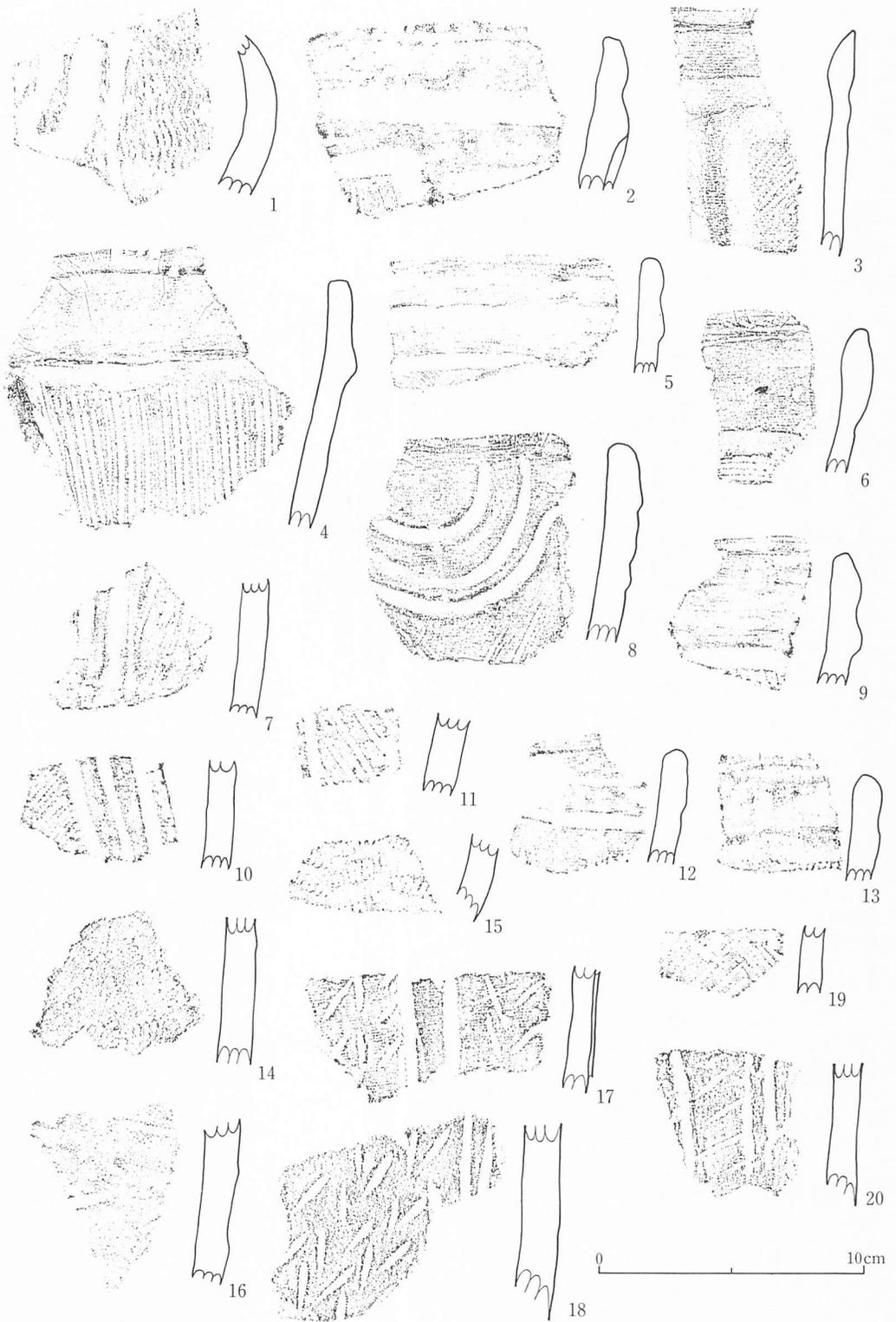
(注) スクレーパー 削器のこと。物を削るための石器である。



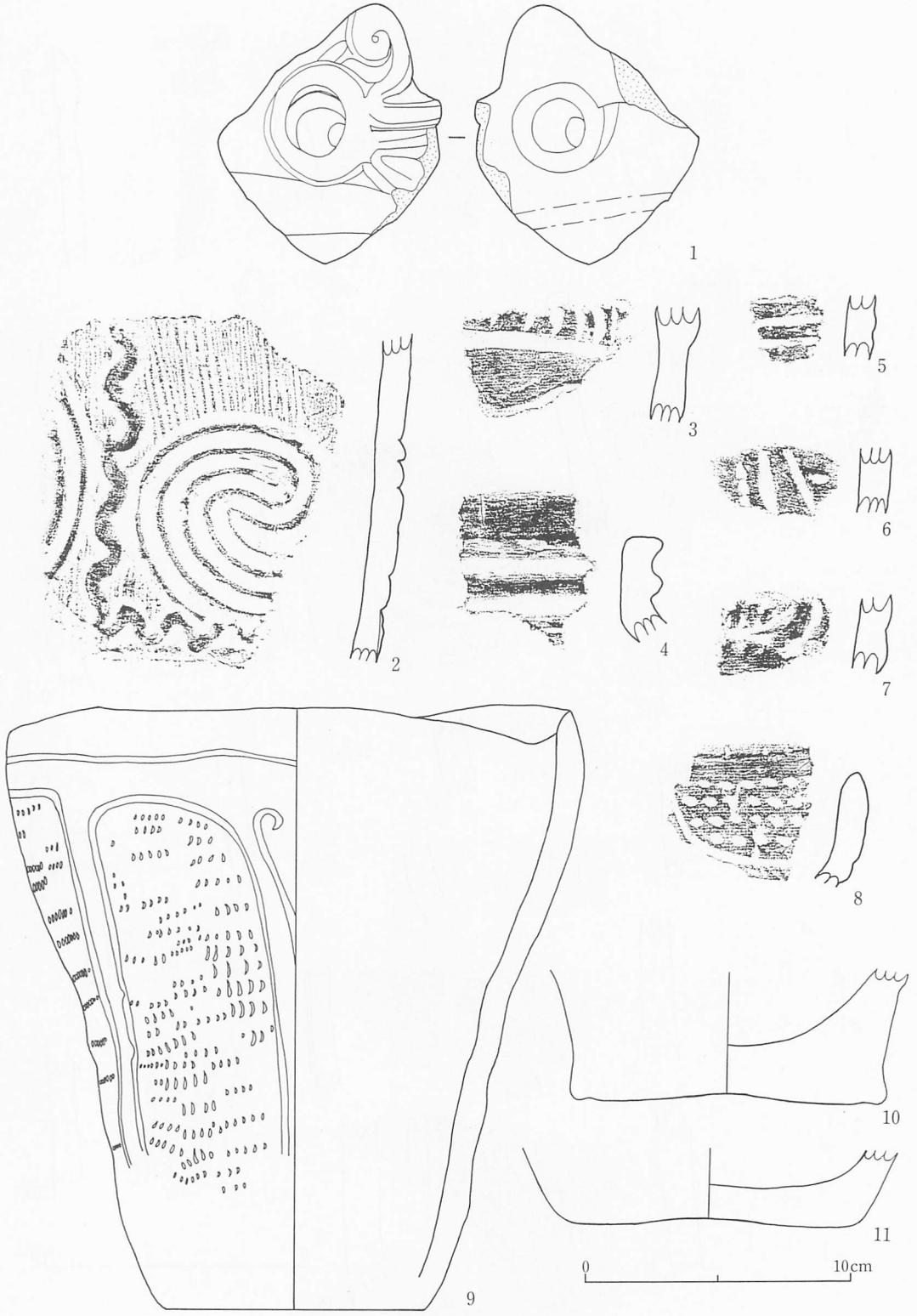
第1図 屯屋敷遺跡出土土器実測図



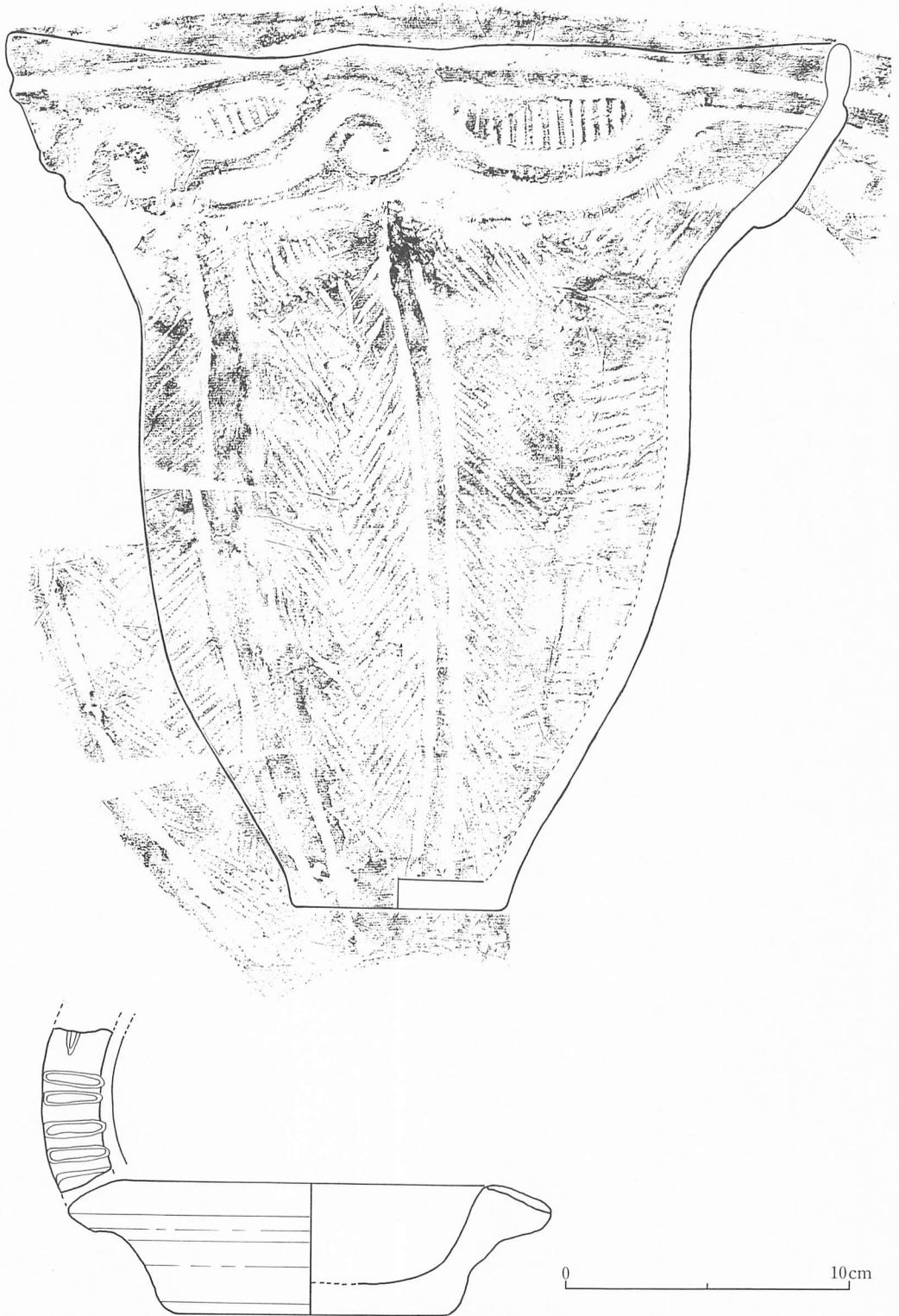
第2图 屯屋敷遺跡出土土器拓影



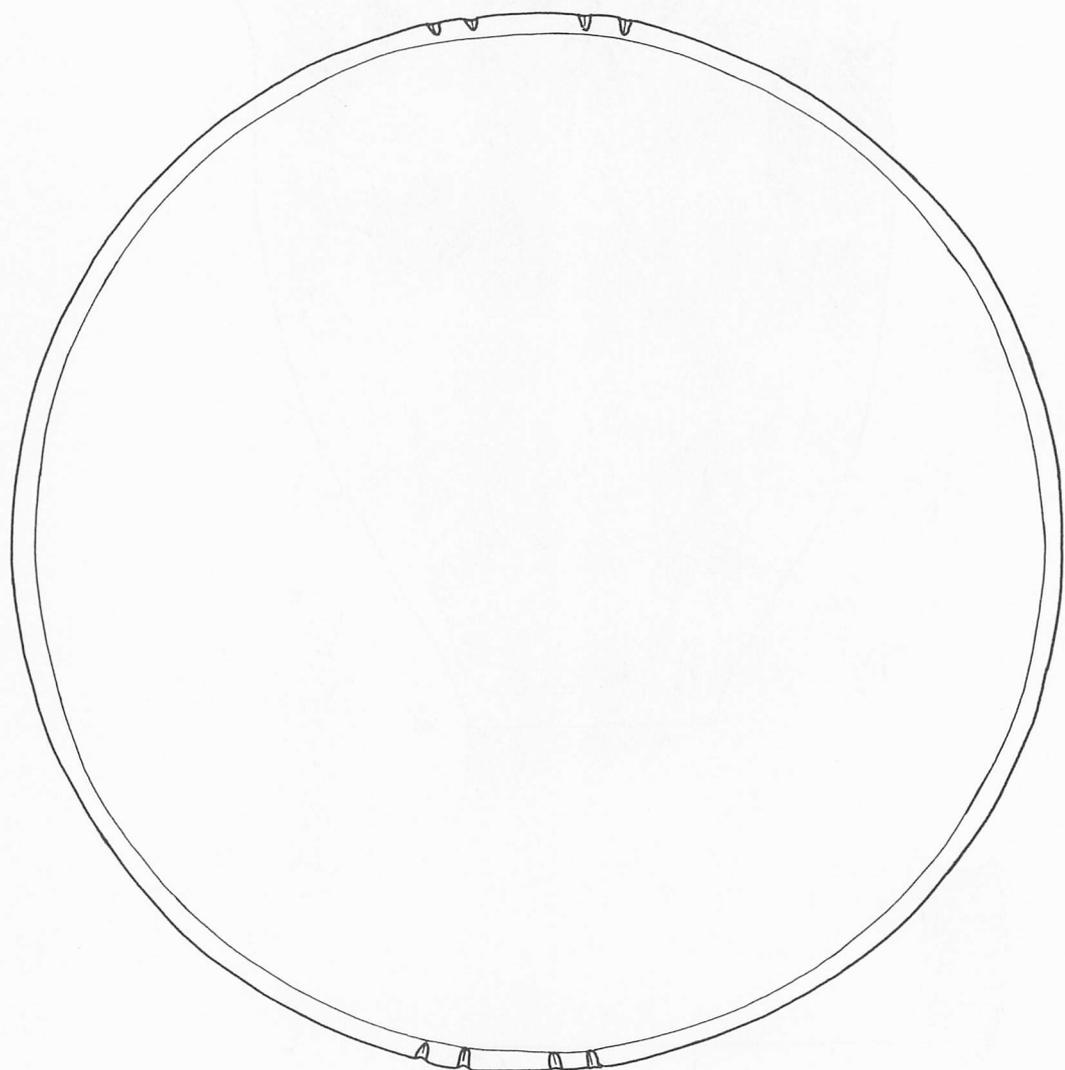
第3図 屯屋敷遺跡出土土器拓影



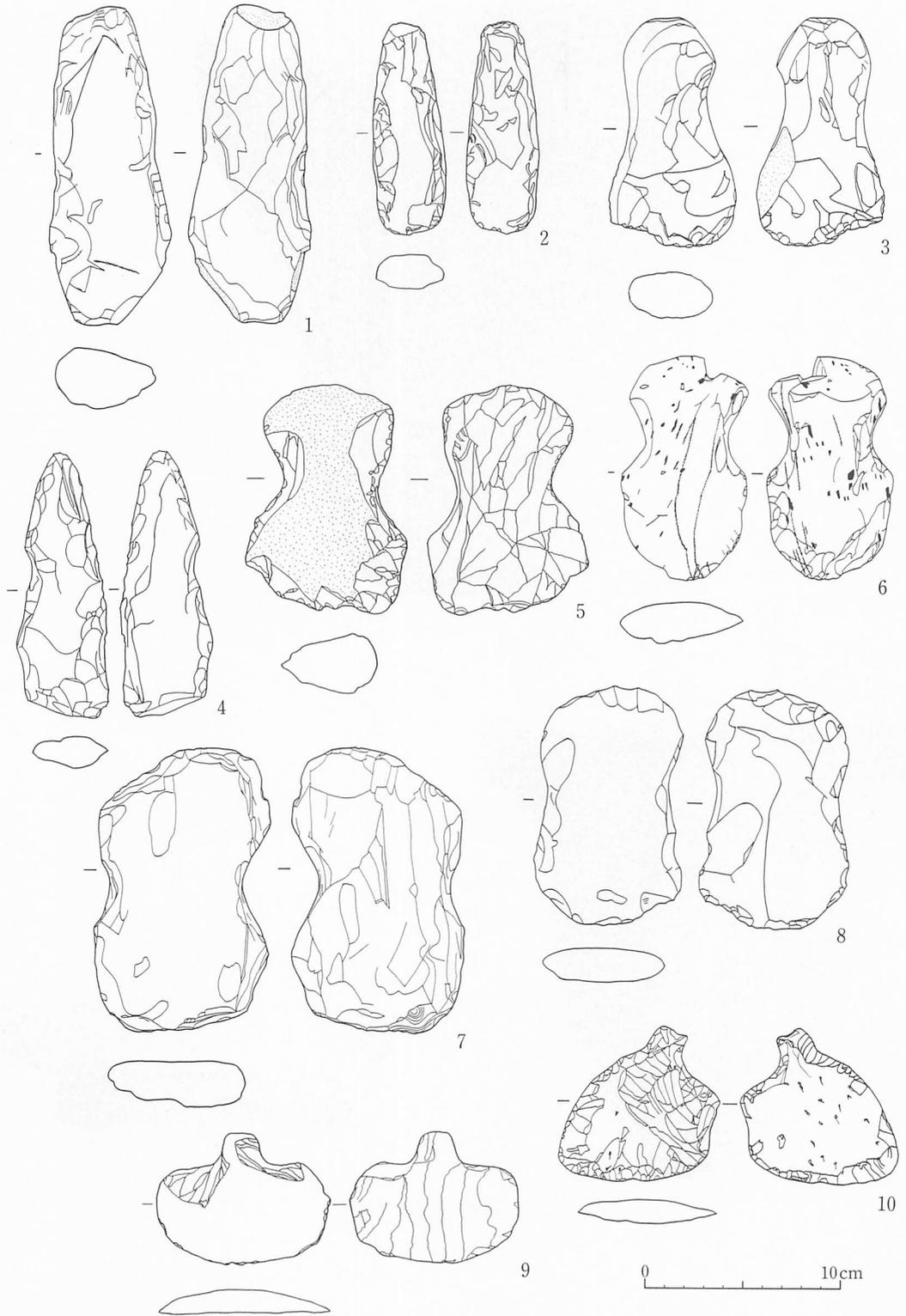
第4图 屯屋敷遺跡出土土器拓影



第5圖 屯屋敷遺跡出土土器拓影



第 6 図 屯屋敷遺跡出土器台実測図



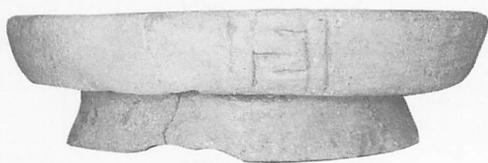
第7図 屯屋敷遺跡出土石器実測図



4-9



5-1



图版1 屯屋敷遺跡出土土器



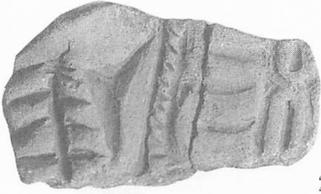
2-14



2-3



2-2



2-5



4-3



2-9



2-8



2-15



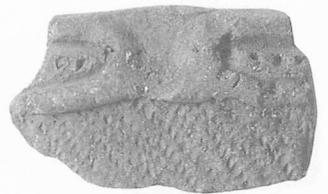
2-26



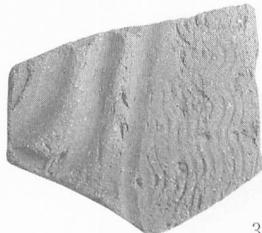
3-4



3-15



2-16



3-1

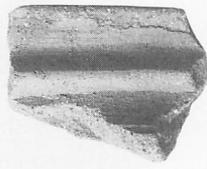


3-17

図版 2 屯屋敷遺跡出土土器



4-4



3-9



3-6



4-7



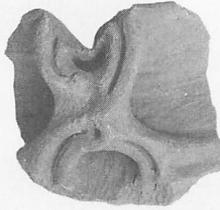
4-8



4-9



1-1



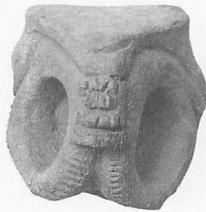
1-2



1-3



3-14



1-5



1-6



1-7



4-1



4-2

图版 3 屯屋敷遺跡出土土器



6-1



6-2



6-3



6-4



6-5



6-6



6-7



6-8



6-9

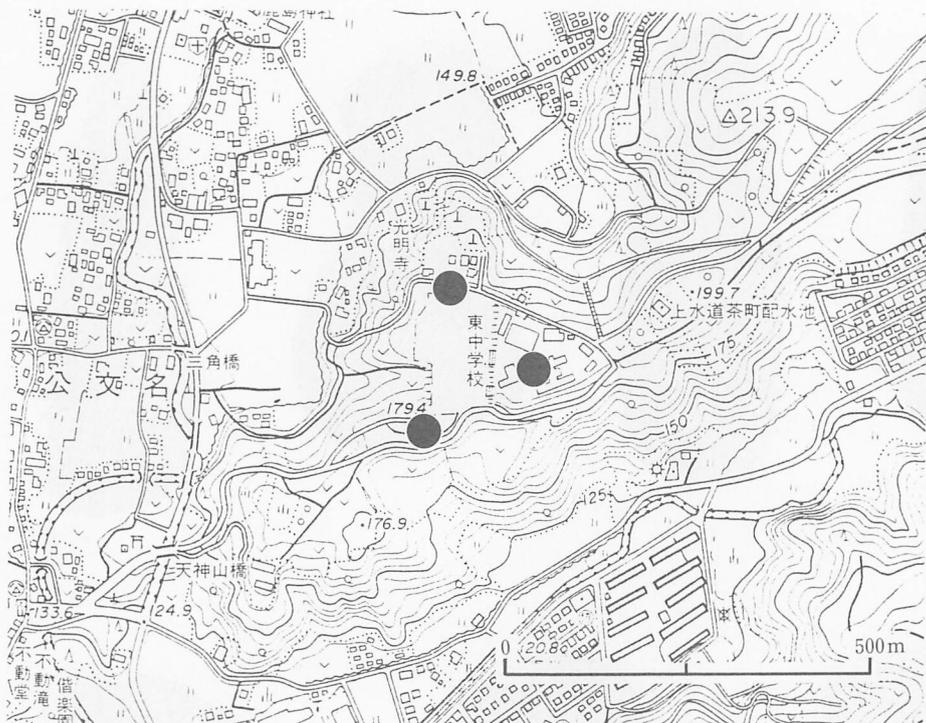


6-10

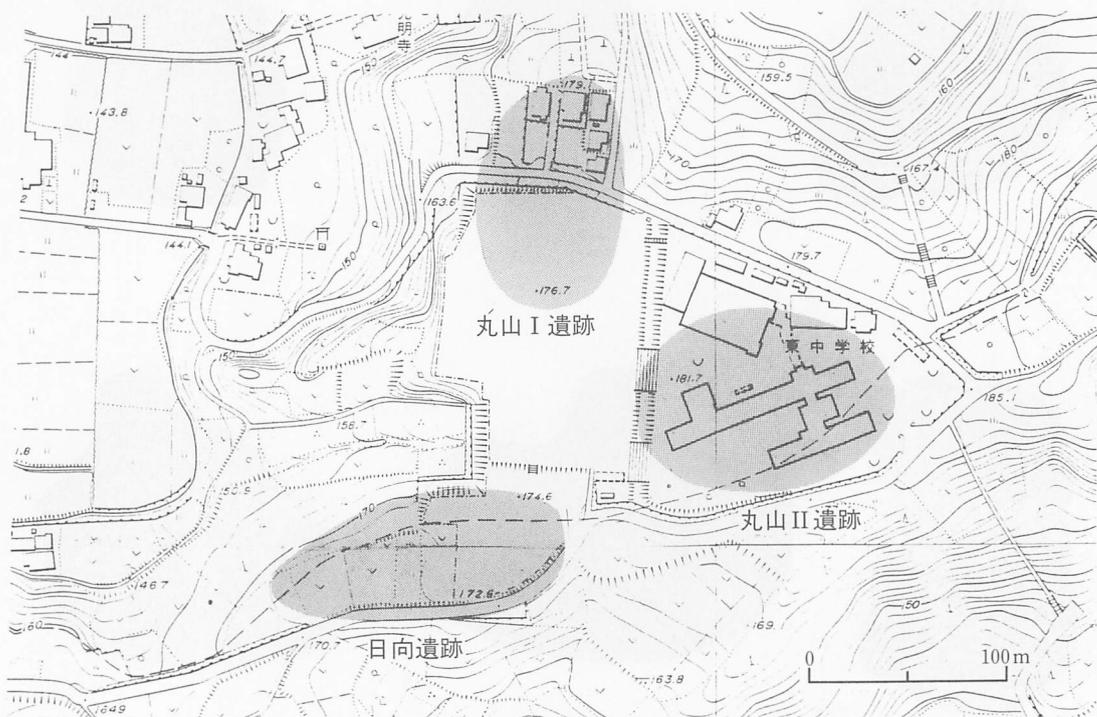
図版4 屯屋敷遺跡出土石器

8 ひなた
日向遺跡

所在地 裾野市公文名字日向



位置図



遺跡範囲図



日向遺跡遠望

位置と立地 本遺跡は、箱根外輪山の三国山から南西に延びた尾根の末端、海拔一七七・九五mの丘陵上にあり、南西に続いて屯屋敷遺跡がある。東西に細長く、南北は急斜面となっている。

発見と調査 本遺跡は、昭和二五年（一九五〇）頃、道場山、屯屋敷遺跡と共に、県立沼津商業高等学校の郷土研究部員鈴木恒治が注目した遺跡で、その後、昭和三〇年（一九五五）に沼津女子高等学校の小野真一が踏査し、縄文時代早期の遺跡としての位置づけをしている。昭和四八年（一九七三）、本遺跡は、丸山Ⅰ・丸山Ⅱ遺跡と共に、裾野市立東中学校の建設工事によって破壊消滅することになったため、裾野市教育委員会が主体となり、日本考古学協会員笹津海祥に発掘調査を依頼、これに県文化財調査員芹沢充寛、慶応大学学生、東中学校教員、同PTA、東海大学学生、須山学生会、裾野郷土研究会、地元出身の学生、裾野カブスカウト第三団、建築研究会ろばた会等が参加協力した。遺跡の東半分は、東西五〇m、南北六〇mの調査区を設置し、このうち一〇m区画一九カ所、五m区画六四カ所、二m区画三七カ所が発掘調査された。

層序と遺構 貯蔵用いも穴等で攪乱されていたが、未攪乱部分で六層の土層が検出された。第一層は耕作土、第二層はその下部層、第三層は黒褐色土層で、1・2・3層に分離され、この三層とも遺物包含層で、本層の下部は、ローム層となっている。攪乱が著しく遺構は検出できなかった。

遺物 土器片は、文様によって九類に分けられている。

第一類土器 無文土器（第1図10・17・38）、色調は茶褐色、焼成は

良好、繊維を含むものと含まないものがある。量的に最も多く、胴部破片も多いが、復原できない。

第二类土器 条痕文土器で第一類に次いで、量的に多い。口縁は平縁、波状口縁の二種があり、小さな耳たぶ状の把手(第2図1・2・3・5・6)、ボタン状の突起(第1図4)のついたものも見られる。貝殻腹縁によって、縦、横、斜め、格子状等ほぼ直線の条痕が施されているが、土器の表面、裏面、表裏面に施されたものがある。色調は茶褐色、焼成は良好、繊維を含むものと含まないものがある。更に文様構成によって分類すると、次の四種に分類出来る。イ、条痕のみのもの(第1図15・16・19・24・26・29・30・31・35、第2図45・54)、口縁は平縁で刻み目が施される。ロ、隆起線(第1図12・14、39・44)、口縁は波状口縁、又は平縁で、隆起線によって口縁部に文様帯を構成している。口縁、隆起線は刻み目が施される。ハ、貝殻腹縁による鋸歯文を施したものの(第1図4、第2図59・65・67)、施文の位置は口縁の近くから胴部に及んでいる。口縁に突起帯を施したものがあ(第1図4)。なお鋸歯文ではないが貝殻腹縁文を横に平行に施した例が一例ある(第2図62)。ニ、列点文を施したものの(第1図27、第2図50・55)、口縁下に横に一列に列点文を施したものである。ホ、細い沈線で菱形の格子目を描いたもの(第12図60)、第二类土器の器形は第3図の復原図に示したようになるが、底部は第3図の如く丸底に近い尖底になる。

第三類土器 隆起線文土器(一七片)(第1図39・40)、第二类土器の口縁と同様な土器であるが条痕文を伴わないものである。

第四類土器 貝殻腹縁文(一六片)(第2図63)、第二类土器のハと同様な土器であるが条痕文を伴わないものである。

第五類土器 列点文土器(一片)(第1図38)、第二类土器のニと同様な土器であるが条痕文を伴わないものである。

第六類土器 沈線文土器(一八片)(第2図52・56)、第二类土器のホと同様な土器であるが条痕文を伴わないものである。

第七類土器 絡状体圧痕文を施された小破片が一片だけ出土した。

第八類土器 薄手土器(第2図73・91)、厚さ二・三mmの非常に薄手の土器で、色調は黒色、焼成は良好で繊維を含まない。無文が多いが、73・91のように沈線文の施されたものもある。

第九類土器 縄文中期土器(第2図70)の小破片が、全体に散漫さんまんに出土した。

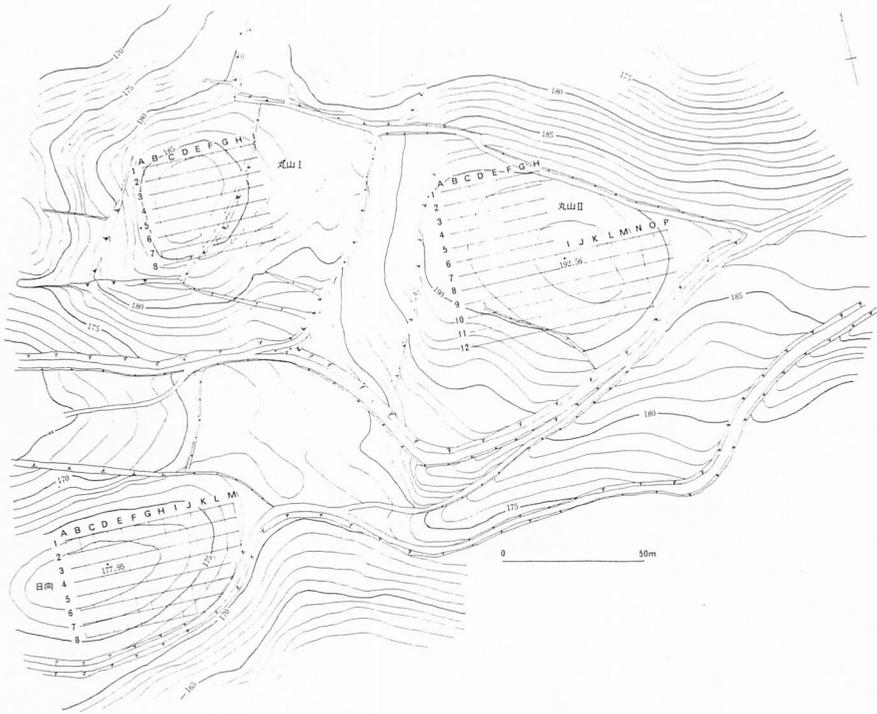
石器は、石鏃(第3図)が一三点出土し、内三点はチャート製で、他は黒曜石製である。そのほか剝片石器二点、打製石斧三点、磨石一点が出土し、うち二点は凹みがある。

遺跡の特徴 大部分の土器片は、縄文時代早期後半に属するものと考えられ、この時期を代表する遺跡の一つとしてよからう。

現状 発掘調査後は、裾野市立東中学校敷地となり、遺跡の大半は消滅した。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 笹津海祥ほか「裾野市公文名日向・丸山I・丸山II遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九七五

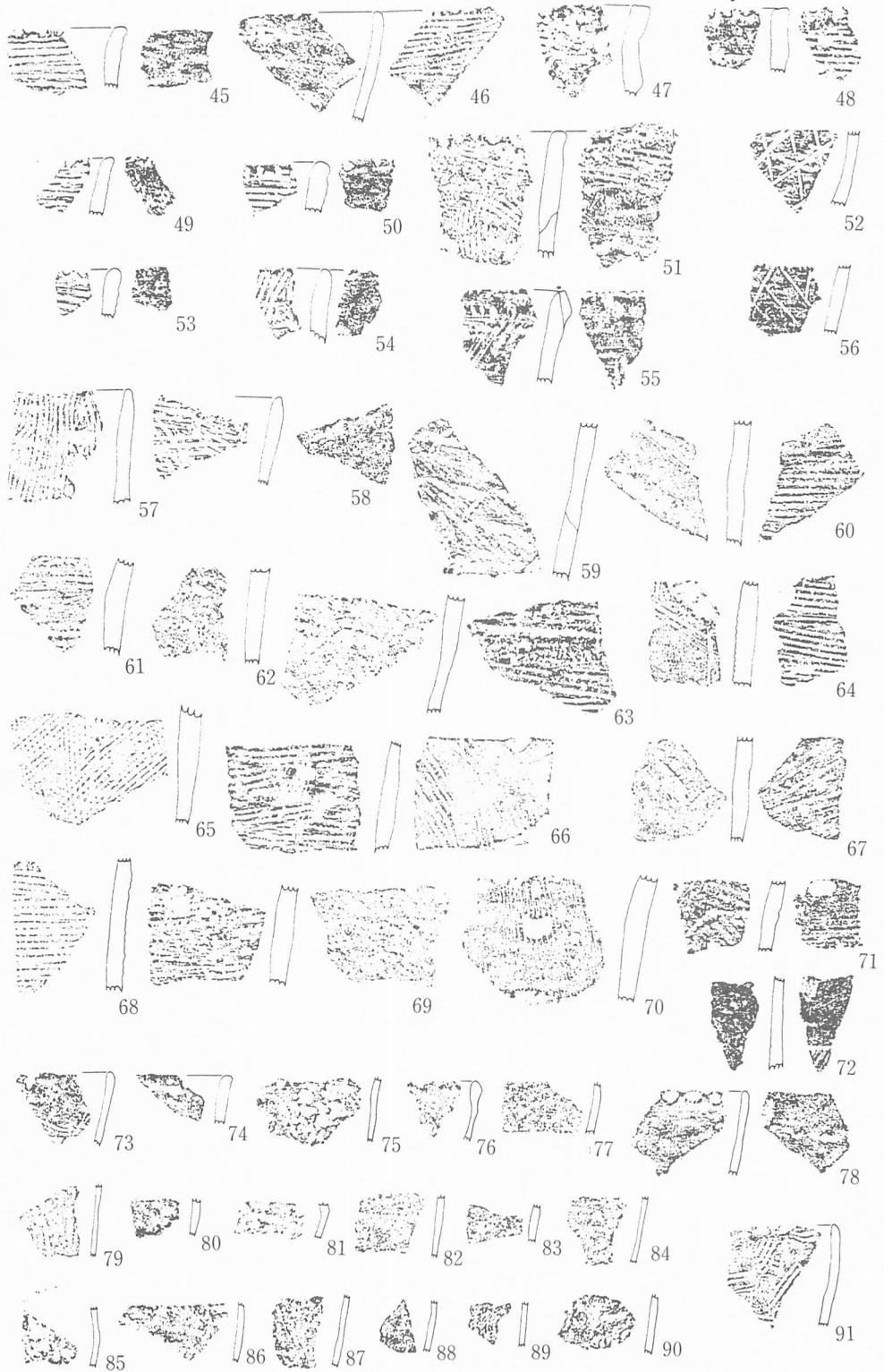


日向遺跡発掘調査図

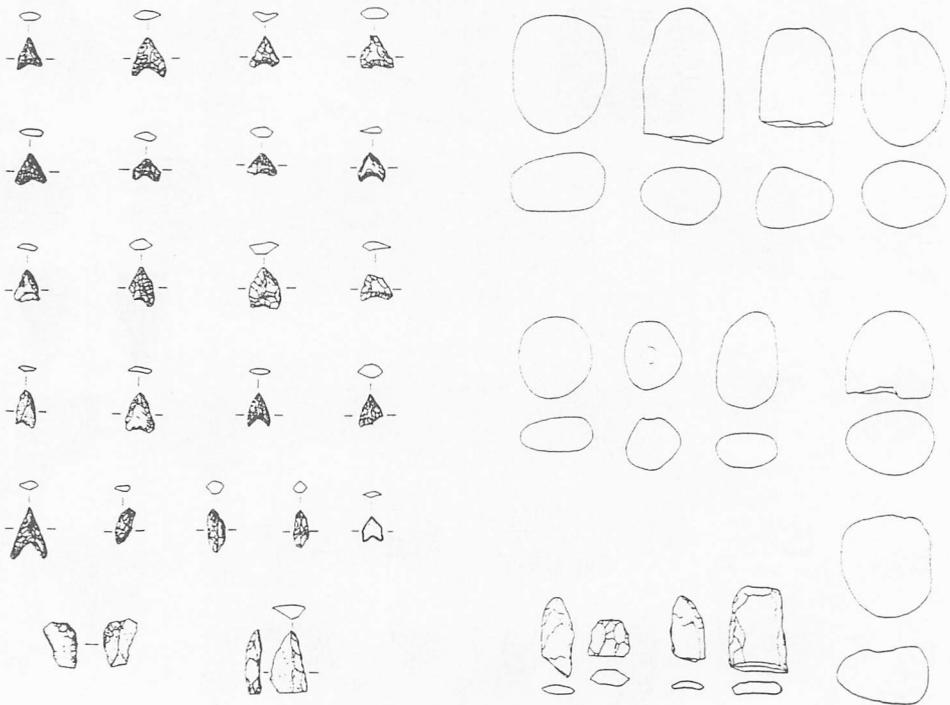
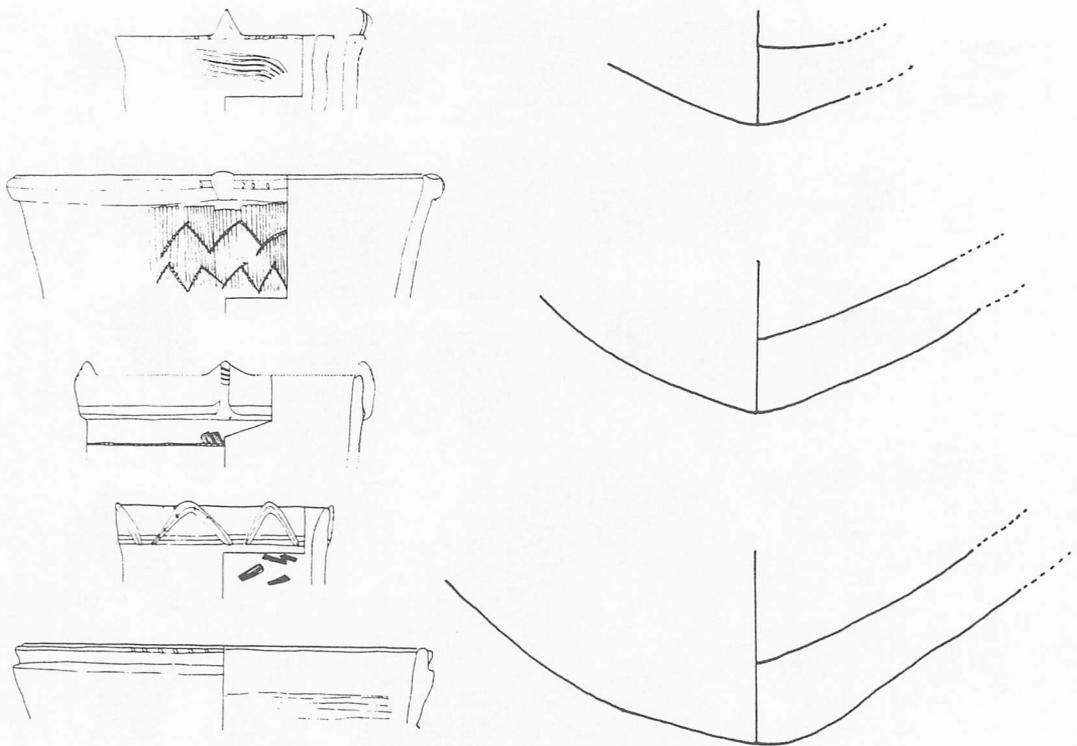
(注) 本遺跡出土の土器にみられるように、赤貝のような凹凸のある貝殻の腹縁を利用して施文具とし、土器面に条痕をつけた文様を貝殻腹縁文または貝殻条痕文といい、この文様の土器を貝殻腹縁文、貝殻条痕文土器といっている。文様は縦、横、斜めの条痕文、これを組合わせた交差文、格子目文、貝殻の縁部を押し付けて連続した山形文、鋸歯文(第1図4)にしたもの等がある。形態は、しもぶくれの底の尖った土器である。この種の土器は埼玉県南部から東京都、神奈川県、静岡県東部の地域に分布し、縄文時代早期後半に位置づけられている。



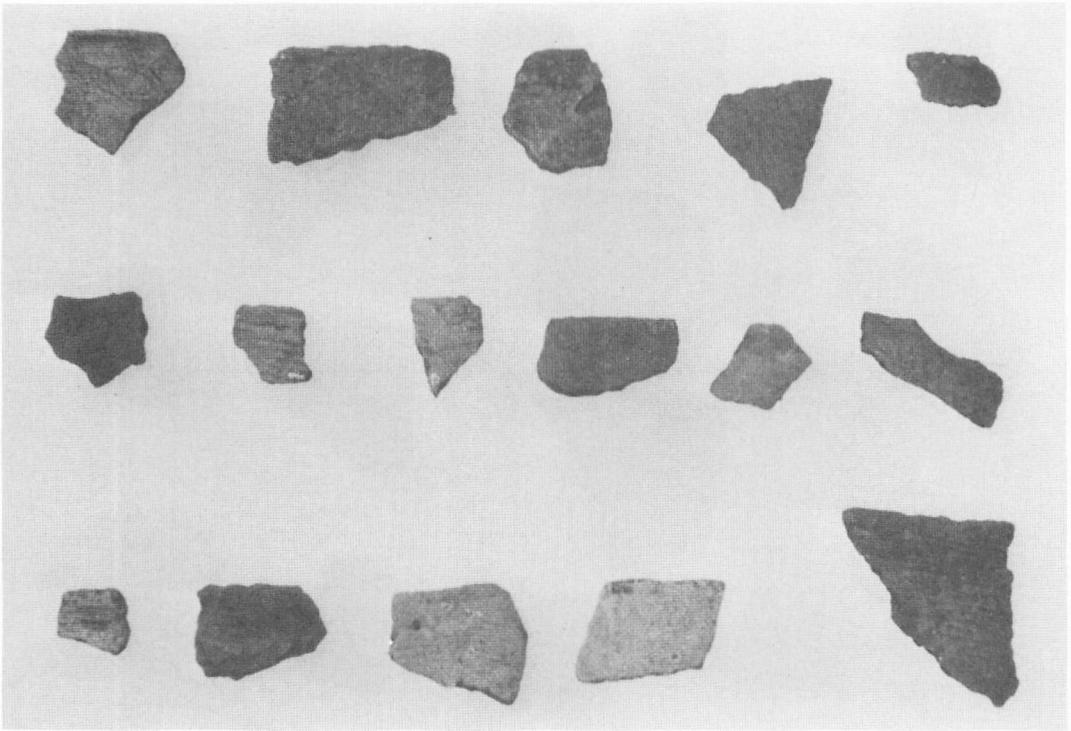
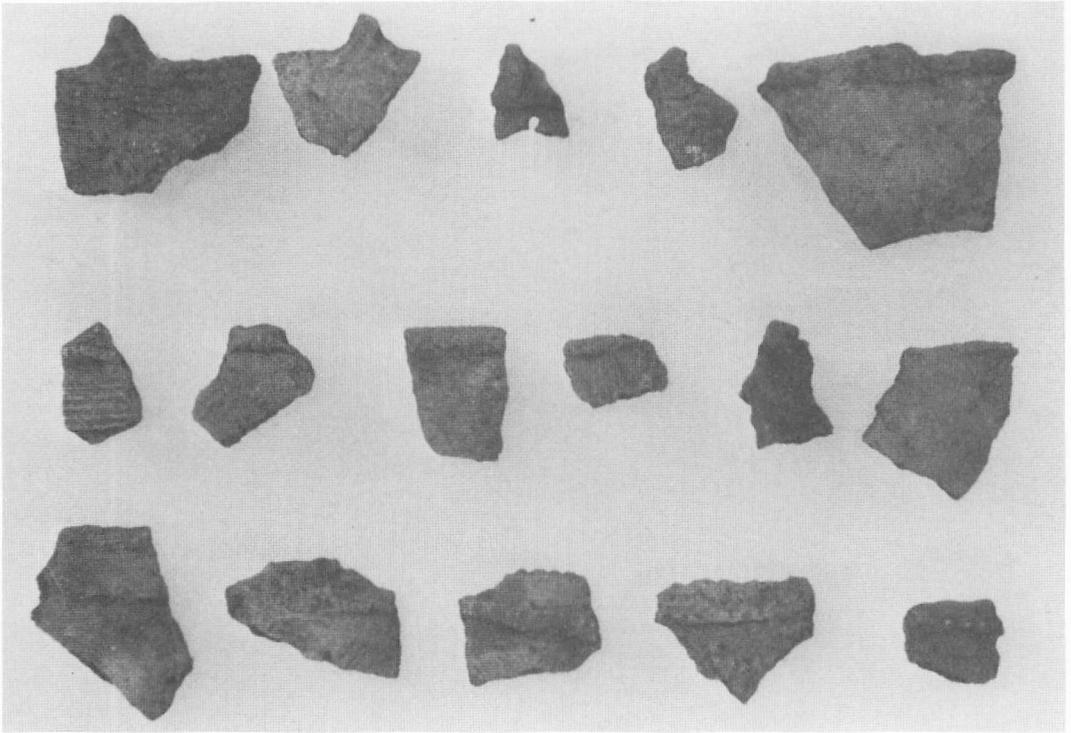
第1図 日向遺跡出土土器拓影



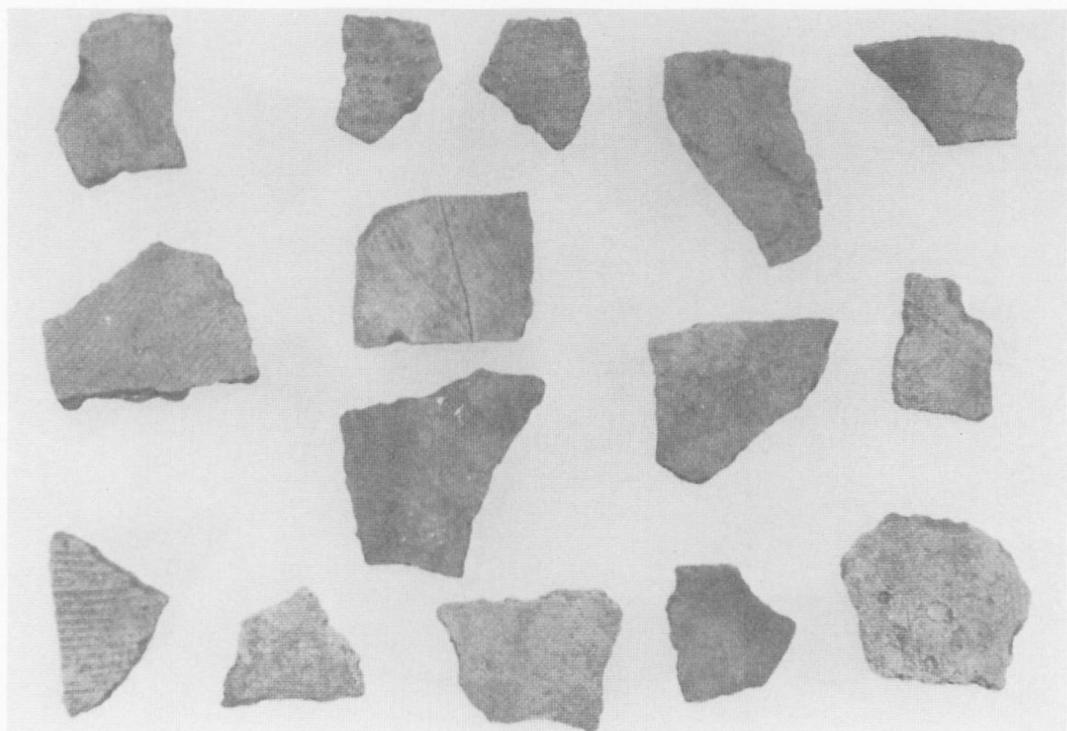
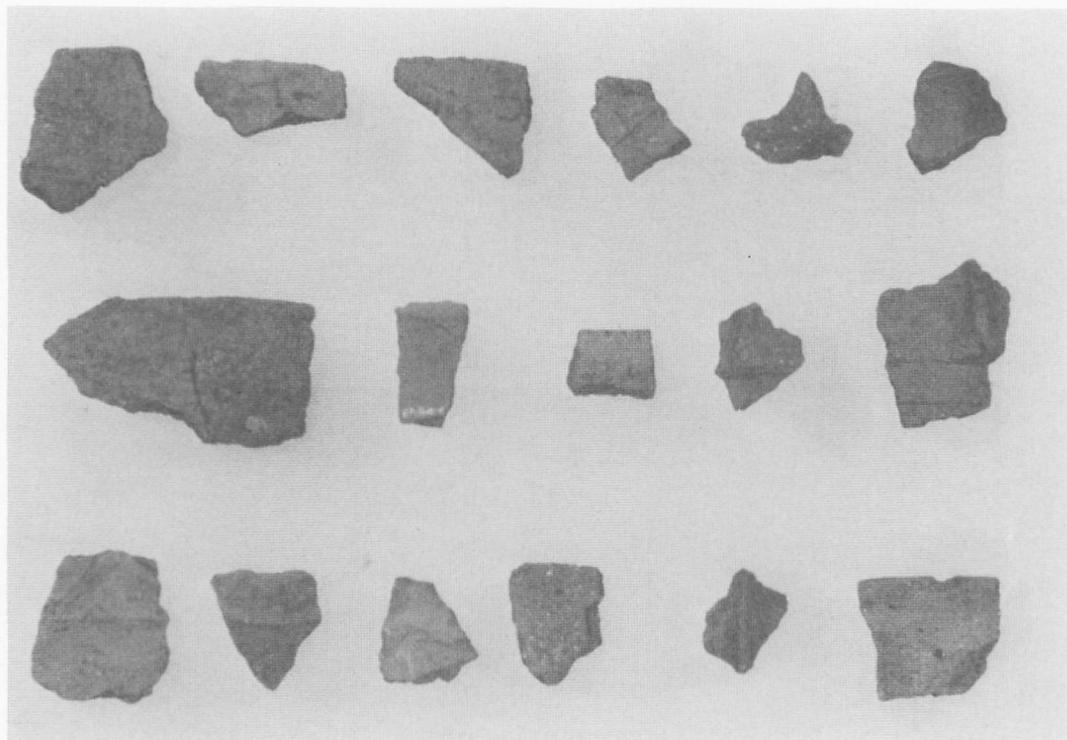
第2図 日向遺跡出土土器拓影



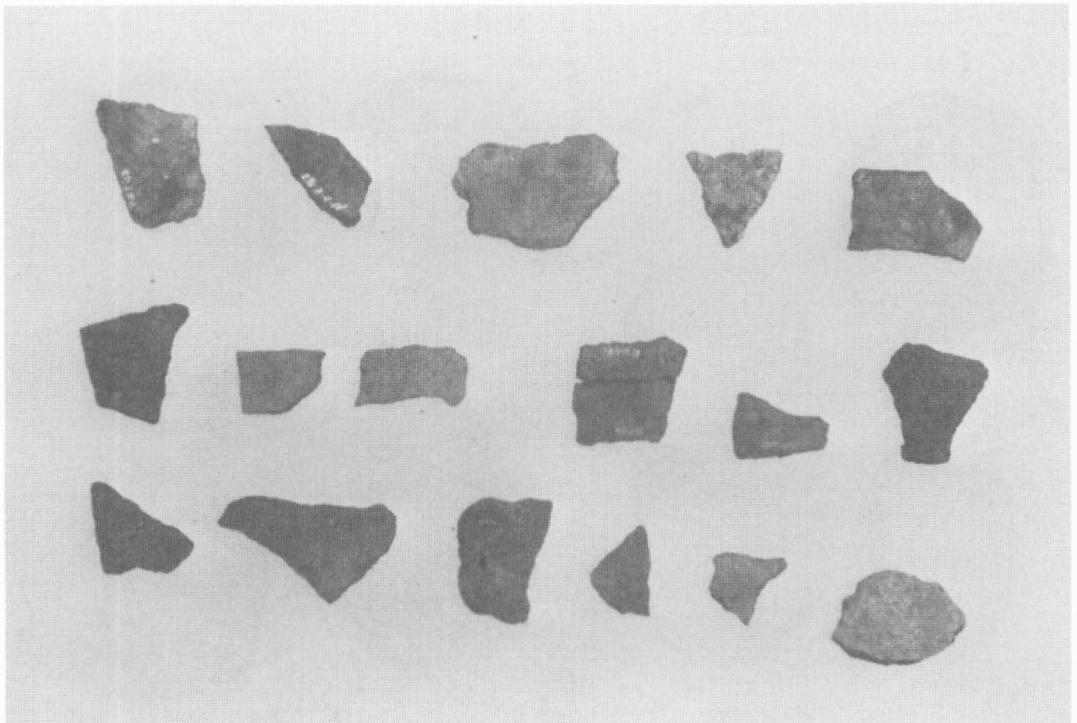
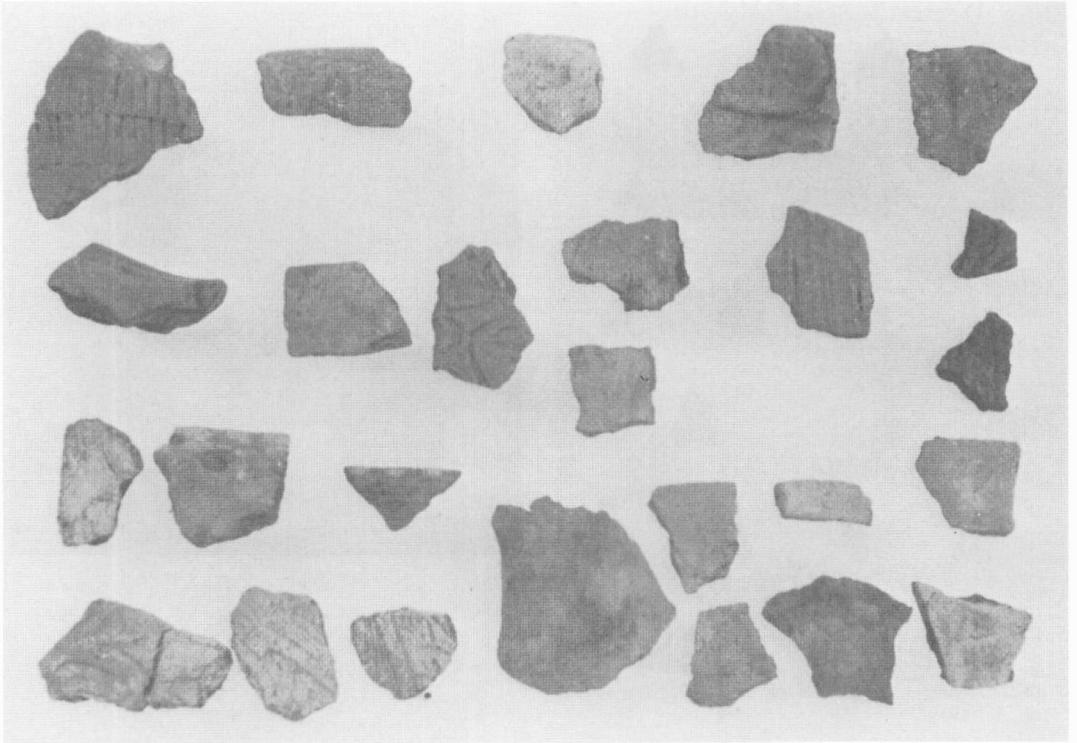
第4図 日向遺跡出土土器・石器図



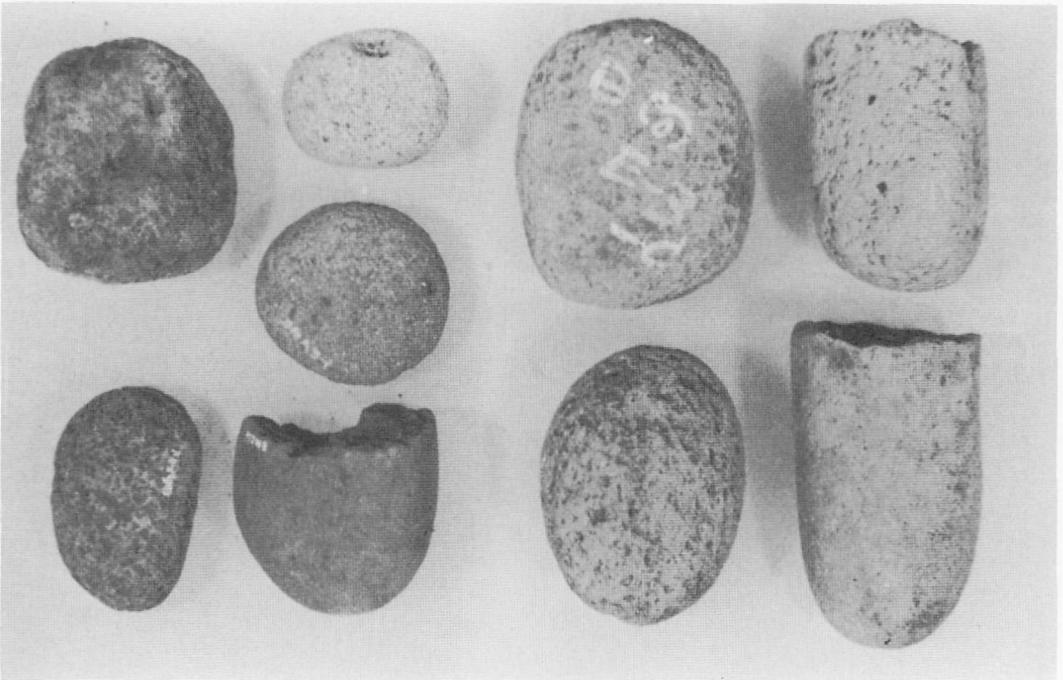
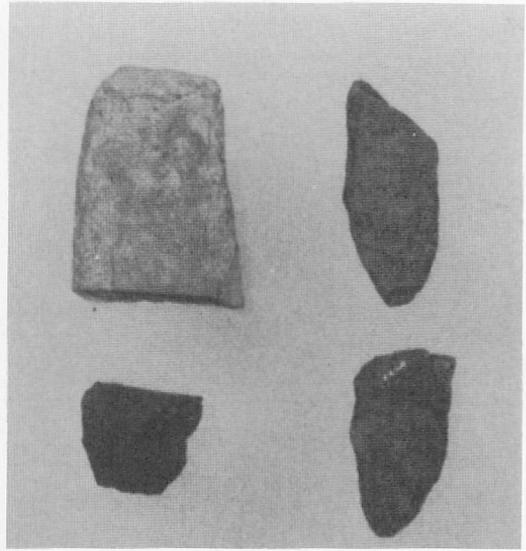
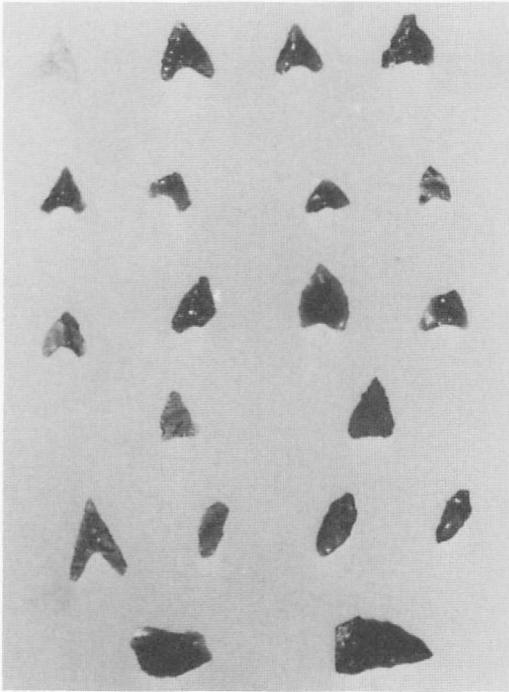
図版1 日向遺跡出土土器



图版 2 日向遺跡出土土器



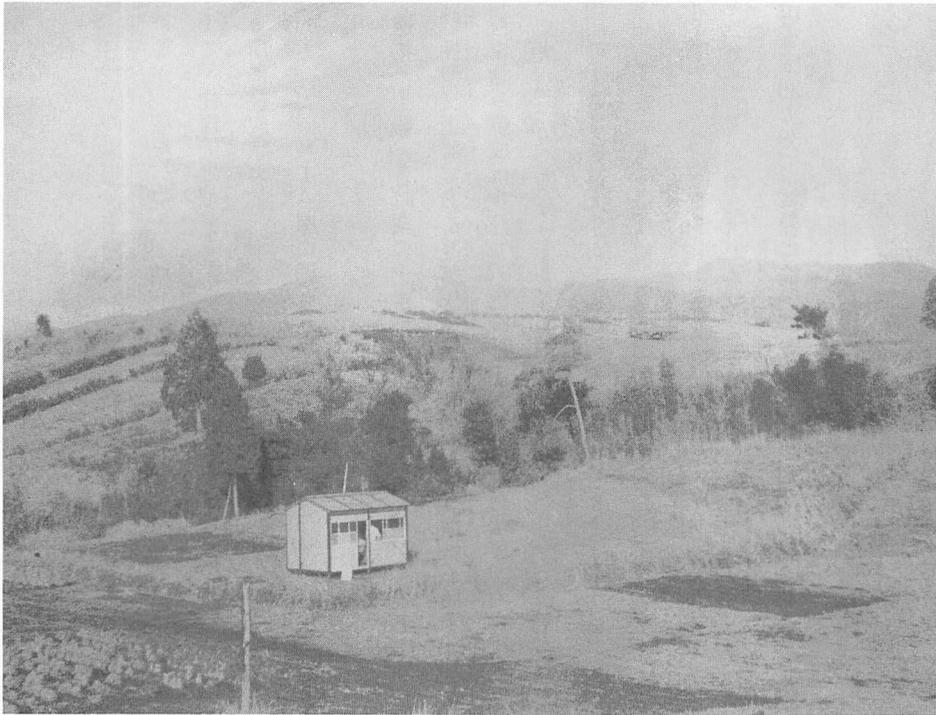
図版 3 日向遺跡出土土器



图版 4 日向遺跡出土土器

丸山II遺跡
まるやま

所在地 裾野市公文名字丸山六八五番地ほか



丸山II遺跡近影

位置と立地 丸山II遺跡は、日向・丸山I遺跡と同じ丘陵上の、海拔一九〇mの頂部に位置し、東西約一〇〇m、南北六〇mの盛り上った地形をなし、隣接する遺跡のなかでは、規模が最も大きく、北側は急斜面で、南西側に斜面がゆるやかに広がるが、遺物は頂部より北側と東側の斜面に散布していた。(日向遺跡参照)

発見と調査 本遺跡も、日向・丸山遺跡と共に、昭和二九年(一九五四)頃、鈴木恒治によって踏査され、ついで昭和三〇年(一九五五)から三四年(一九五九)にかけて小野真一が表面採集をおこない、縄文時代早期土器片を発見している。昭和四〇年代の前半から、県立沼津東高等学校郷土研究部は、本遺跡をはじめ、周辺遺跡の踏査をし、昭和四五年(一九七〇)、同部会報に「屯屋敷周辺遺跡調査報告」として発表し、昭和四七年(一九七二)、持田信幸は本遺跡から旧石器を採集したという。昭和四八年(一九七三)、本遺跡は、日向・丸山II遺跡と共に、裾野市立東中学校建設により破壊消滅することになったため、裾野市教育委員会によって発掘調査が実施された。調査は、丘陵頂部を中心に東西五〇m、南北八〇mの調査区を設置し、このうち一〇m区画二三カ所、五m区画九二カ所、二m区画二五カ所が発掘調査された。

層序と遺構 予備調査の段階で、遺物包含層の黒色土層が厚く、土器片が豊富に出土することが確認され、土層の層序は地点によってこととなるが、模式的にいえば次のようであるとす。I層 表土 厚さ二〇cm。II層 黒色土層 厚さ二〇cm。III層 黒褐色土層 厚さ三〇cm。IV層 褐色土層 厚さ二〇cm。V層 黄褐色土層(ローム層)。以下、本遺跡からは、集石遺構、焼土、住居址がそれぞれ一カ所ずつ

検出された。集石遺構は、D7区の黒色土層中から発見されたが、土器を伴っていないため、いずれの時期に属するか明らかでない。焼土は、B12区の黒褐色土層中から検出された。付近から土器片が出土しているが、直接、焼土と結びつくものがなく、時期の確定ができないとする。住居址は、F7区から検出され、南北に長い不整形楕円形で、三カ所に柱穴状のピット（小穴）があり、長径四八〇cm、短径が三三〇cmあって、ローム層に掘り込まれ、床面から三片の楕円押型文土器が出土している。

遺物 土器 各時期の土器が少量ずつ出土したが、まとまった資料は、押型文土器である。第一類土器の押型文土器は、胎土に少量の滑石粒を含み焼成は良好で、色調は黒褐色又は黄褐色である。文様によって次の三種に細分できる。イ、楕円押型文土器（第1図1～29）楕円の大きさには大小があるが、六～九mmで、あまり小さいものや、極端に大きいものはない。ロ、山形押型文土器（第2図1～18）山形の幅は一〇～一五mmで、極端な大小はない。山形が変形して、綾杉状波状になっているものもある。ハ、山形・楕円混合押型文土器（第1図30～39）口縁に楕円、その下部に山形押型文を施したものである。以上、三種の押型文土器は、すべて施文原体を横位に回転したものである。器形の復原は第4図のようになる。第二類土器 条痕文土器（第2図19、20）少量の繊維を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。第三類土器 半截竹管文土器（第2図24～36）色調は黄褐色で焼成は良好、器面に半截竹管による平行線を施し、その上に細かい粘土紐をはり連続結節文を施す。又所々に小さな円板を一～二カ所

はり付けている。第四類土器 爪形文土器（第2図37～43）地文に縄文を施し、細い粘土紐を貼り付け、その上に連続爪形文を施す。焼成色調などは第三類と同じ。第五類土器 隆起帯文土器（第3図5・9・17）厚手の焼成良好な土器で、色調は黒褐色又は赤褐色で、太い隆起帯と細い隆起帯がある。第六類土器 沈線文土器 第五類よりやや薄手で、色調・焼成は類似している。太い沈線で、直線、曲線、列点などを施している。第七類土器 縄文土器（第2図44、第3図18～20）縄文のみが施された土器であるが、破片なのでどれかの類の部分かもしれない。第八類土器 条痕文土器（第3図16）薄手の焼成良好な土器で、色調は赤褐色、第二類土器の条痕と異なる。

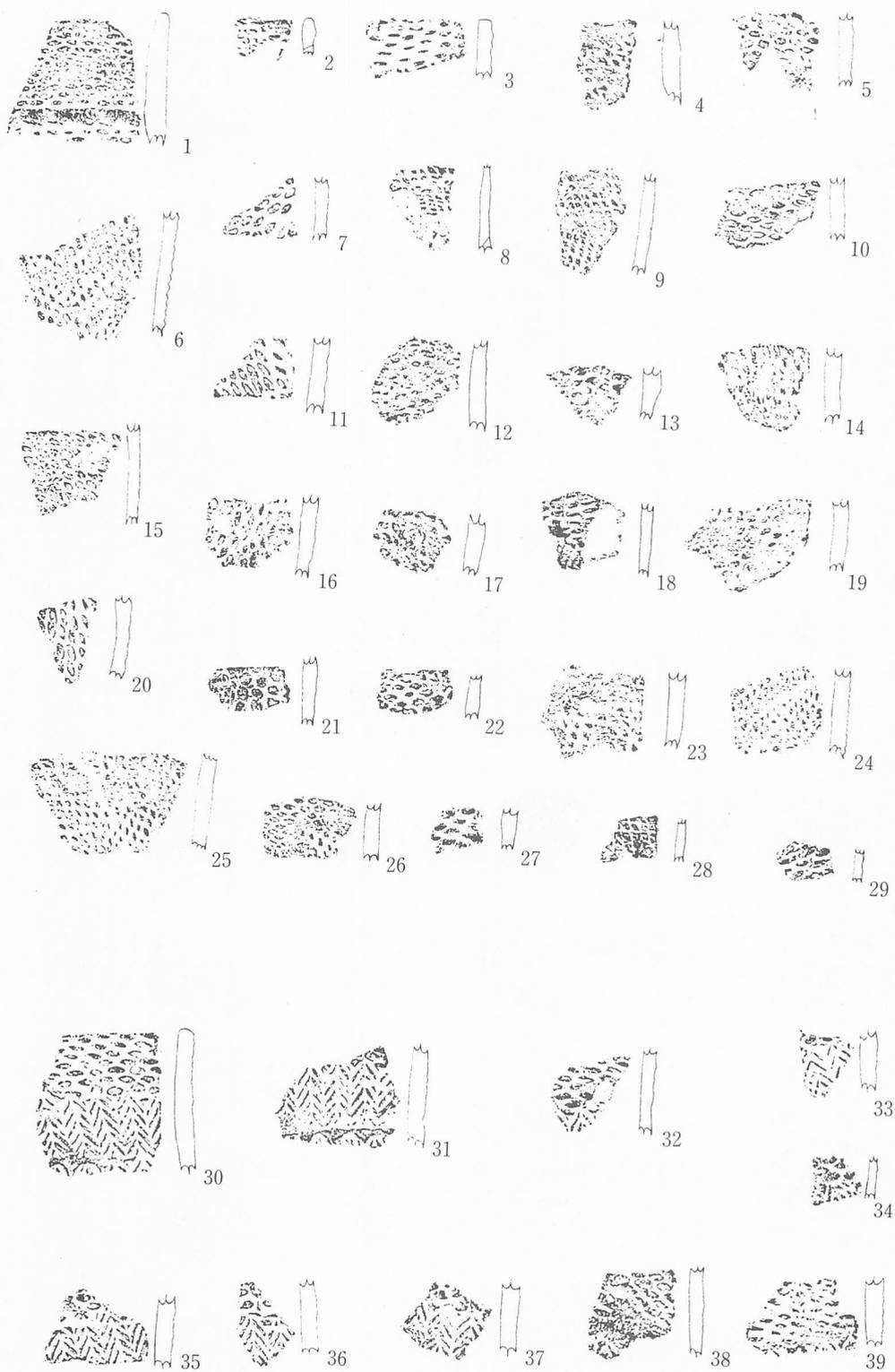
石器 石鏃（第5図） 黒曜石製の石鏃四点が出土した。それぞれ形が違うが、どの石鏃が、どの時期に属するか確認できない。打製石斧（第5図） 安山岩製の打製石斧七点が出土した。このうち一点は刃が横に付いていて、石斧というよりは打製の石包丁とした方が適當かもしれない。また磨製石斧の残欠一点が出土した。刃部は使用による欠損が目立つ。その他に石鏃・磨石・石皿・石棒が出土した。

遺跡の特徴 本遺跡を代表する土器は、押型文土器群で、そのほかに条痕文土器、縄文時代中期の土器が出土する重複した遺跡であるが、縄文時代早期前半の遺跡として注目される。

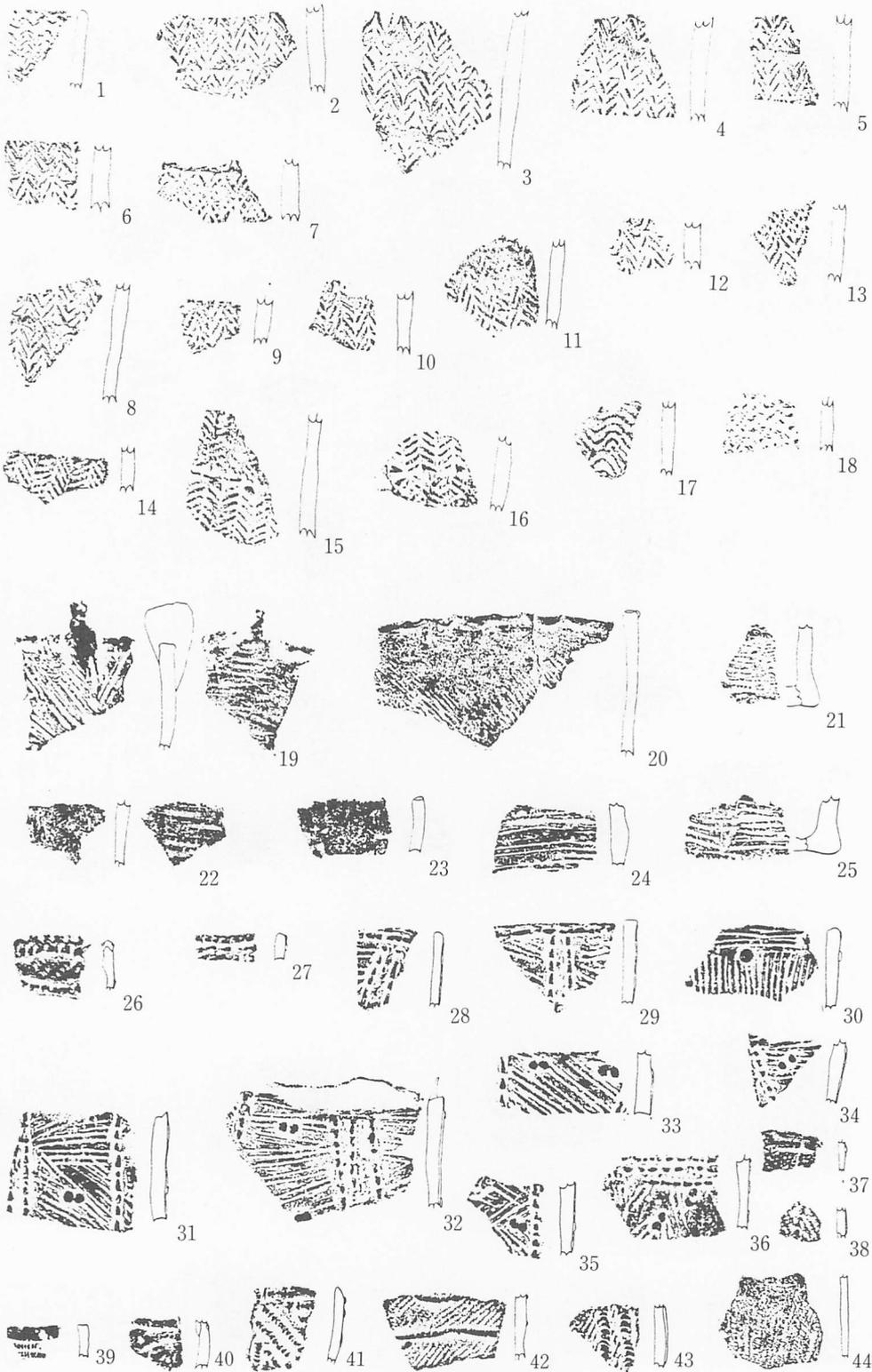
現状 裾野市立東中学校敷地となり消滅した。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

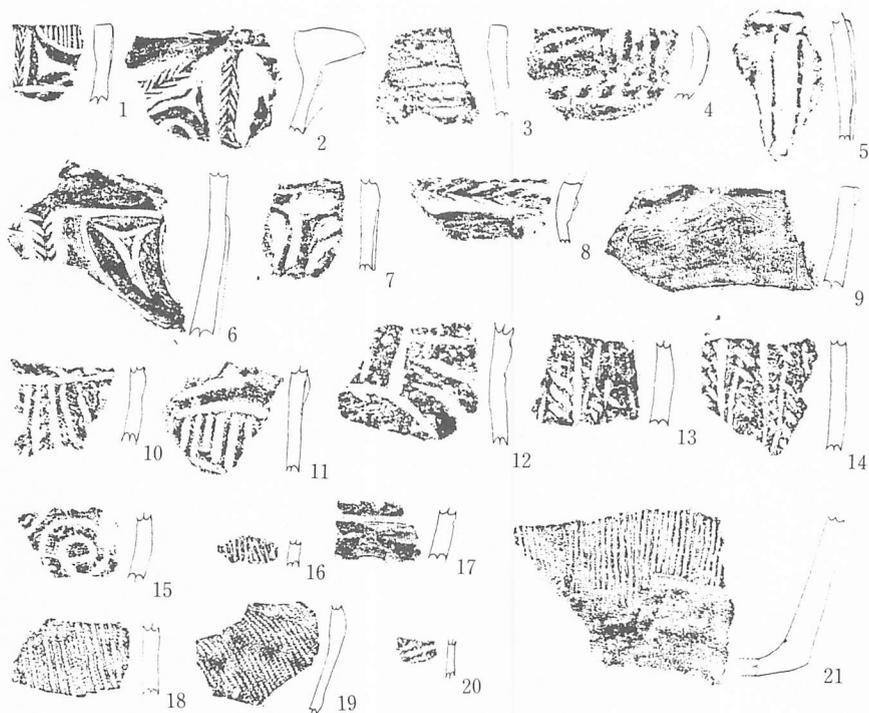
文献 笹津海祥ほか「裾野市公文名目向・丸山I・丸山II遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九七五



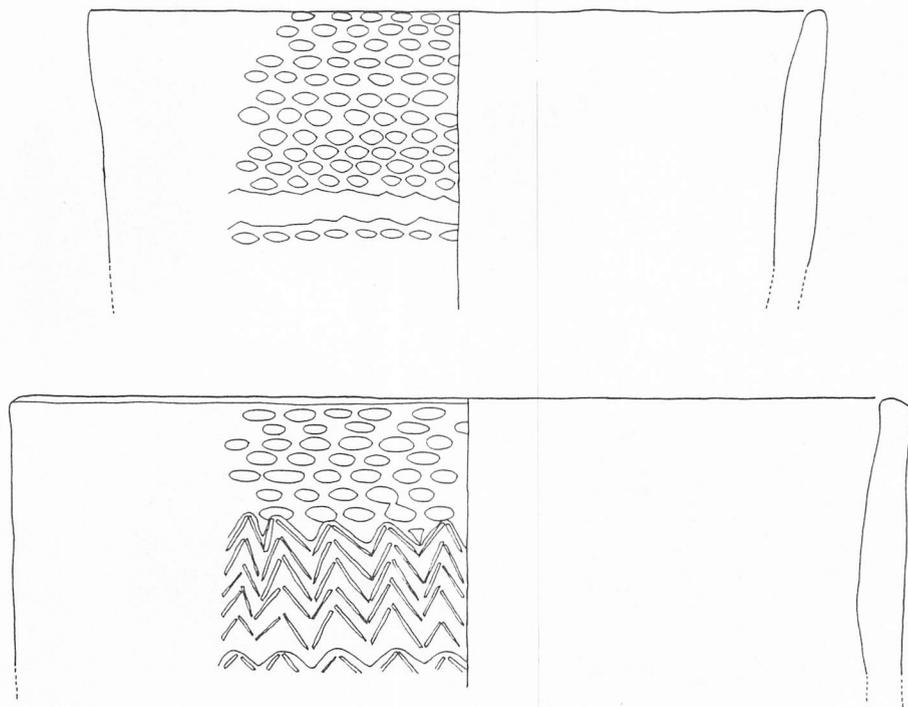
第1図 丸山II遺跡出土土器拓影



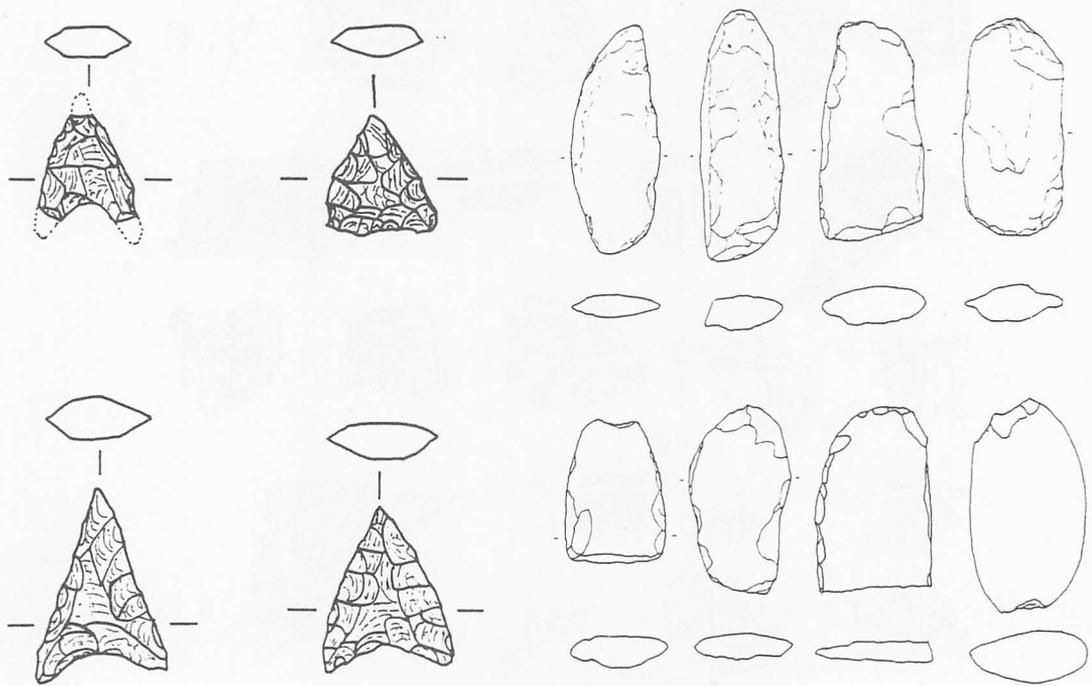
第2図 丸山Ⅱ遺跡出土土器拓影



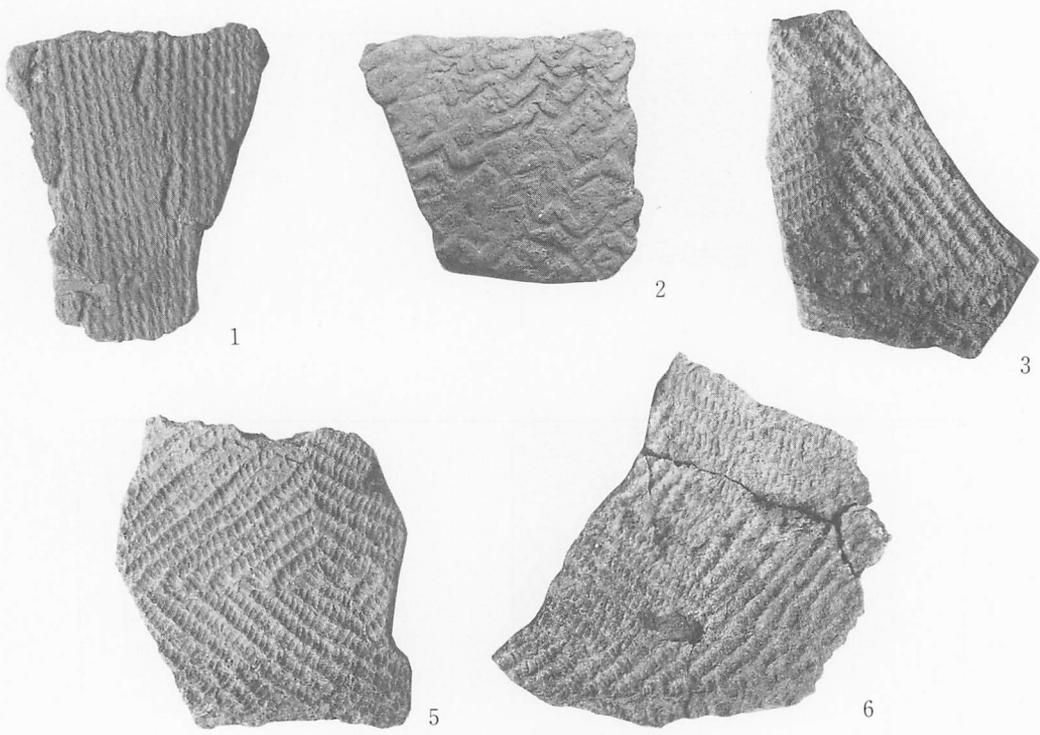
第3図 丸山II遺跡出土土器拓影



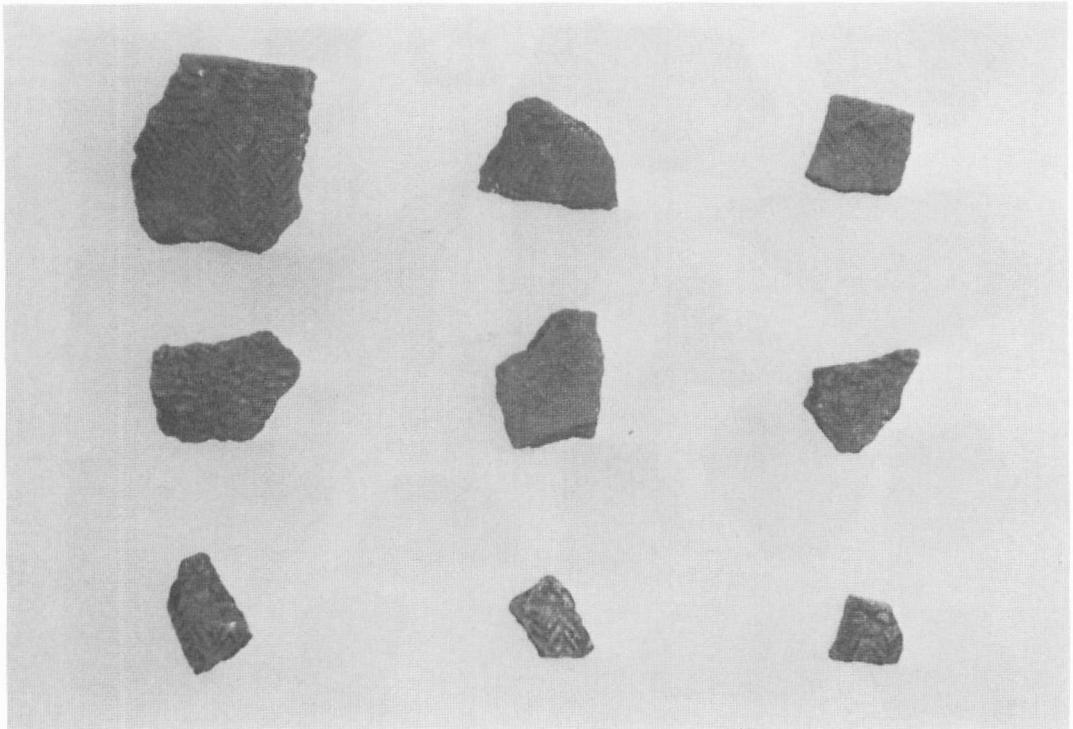
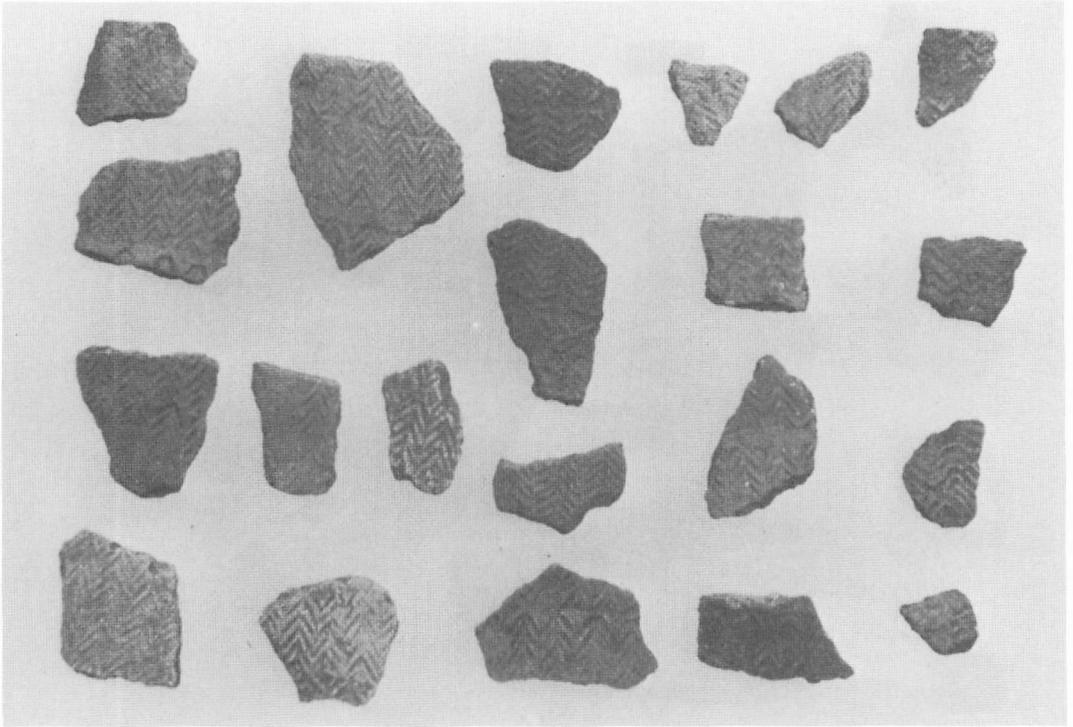
第4図 丸山II遺跡出土土器復原図



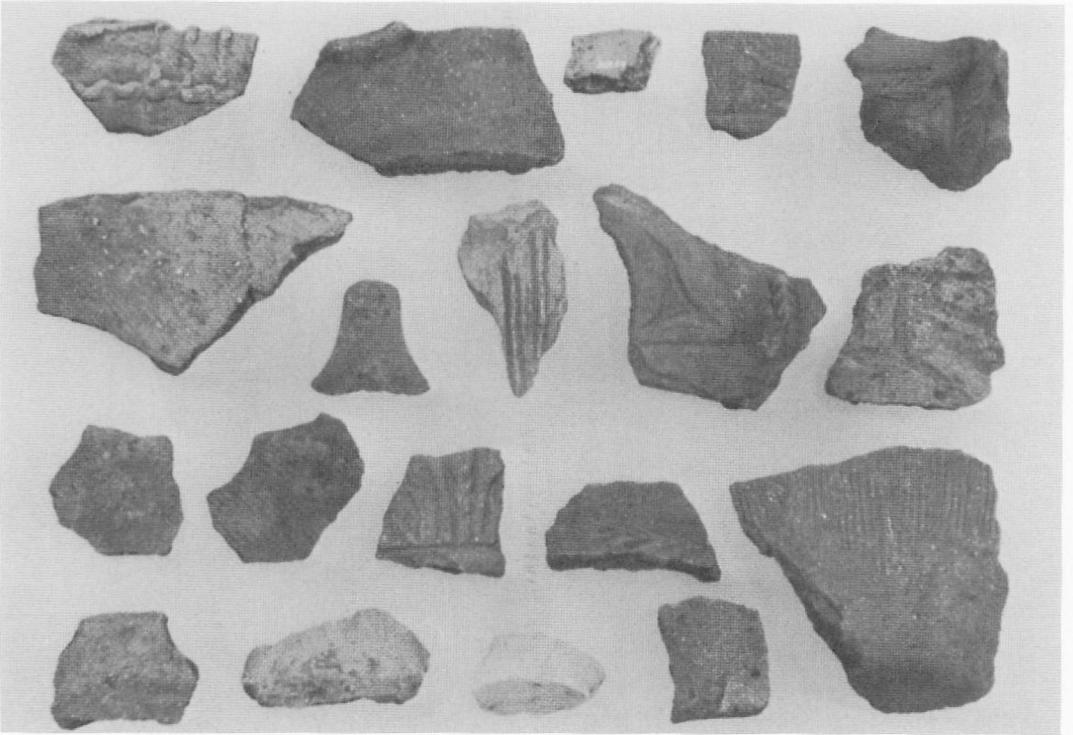
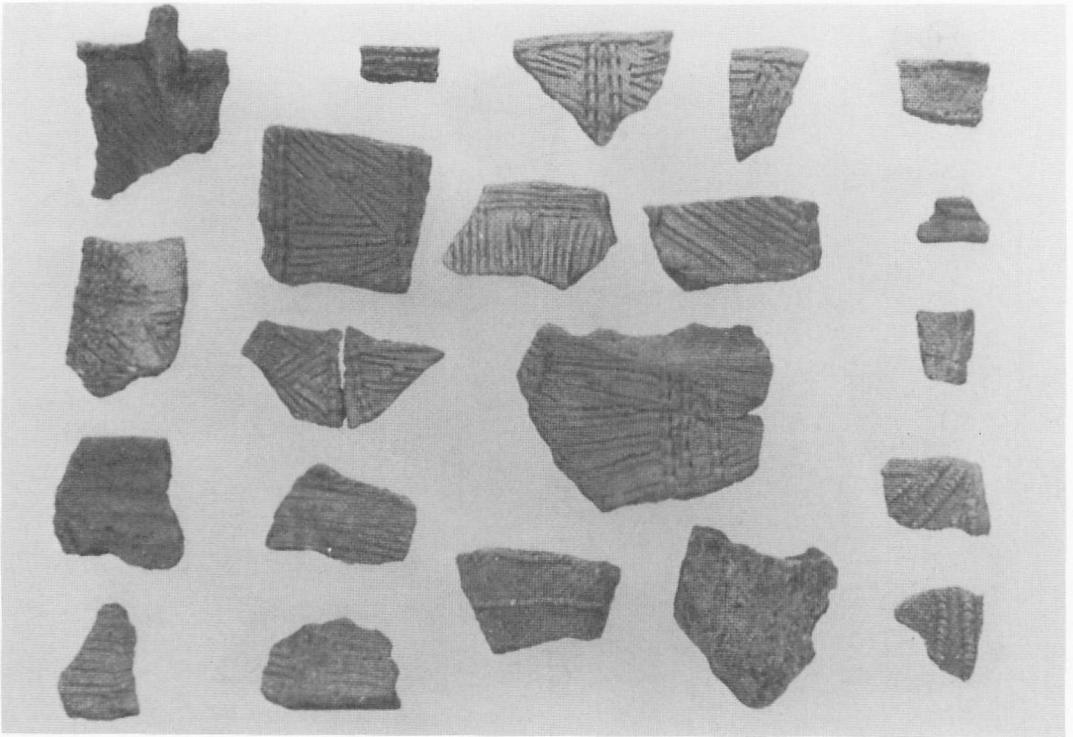
第 5 图 丸山II遺跡出土石器図



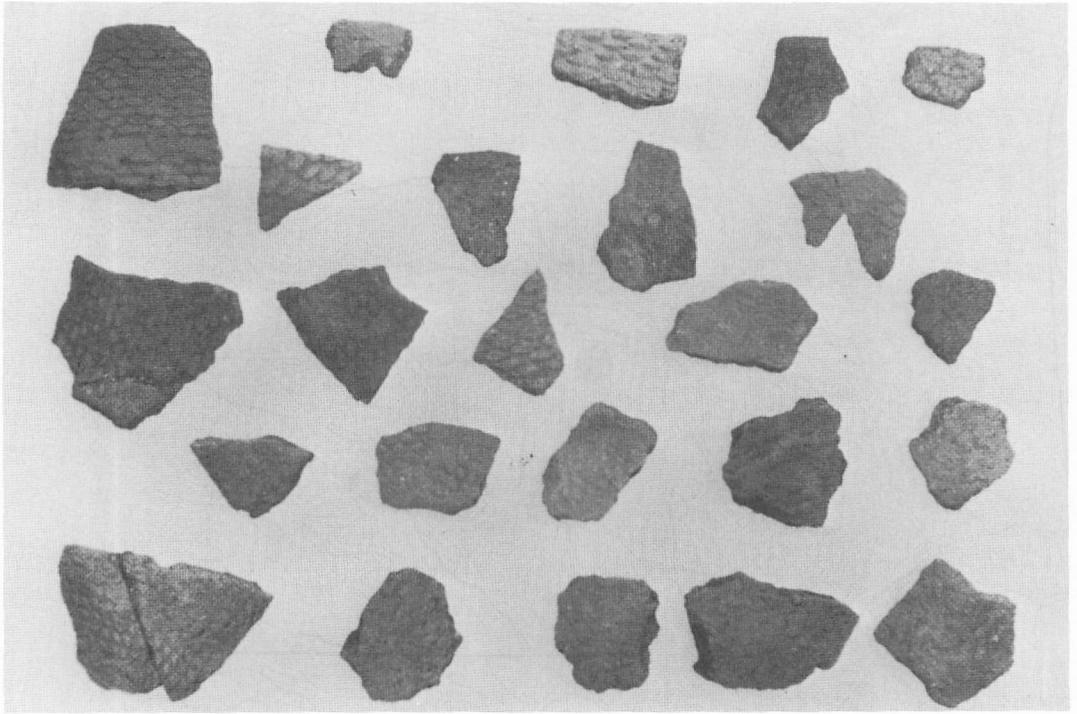
图版 1 丸山II遺跡表面採集土器



図版2 丸山II遺跡出土山形押型文土器



图版 3 丸山 II 遺跡出土土器



図版4 丸山II遺跡出土土器

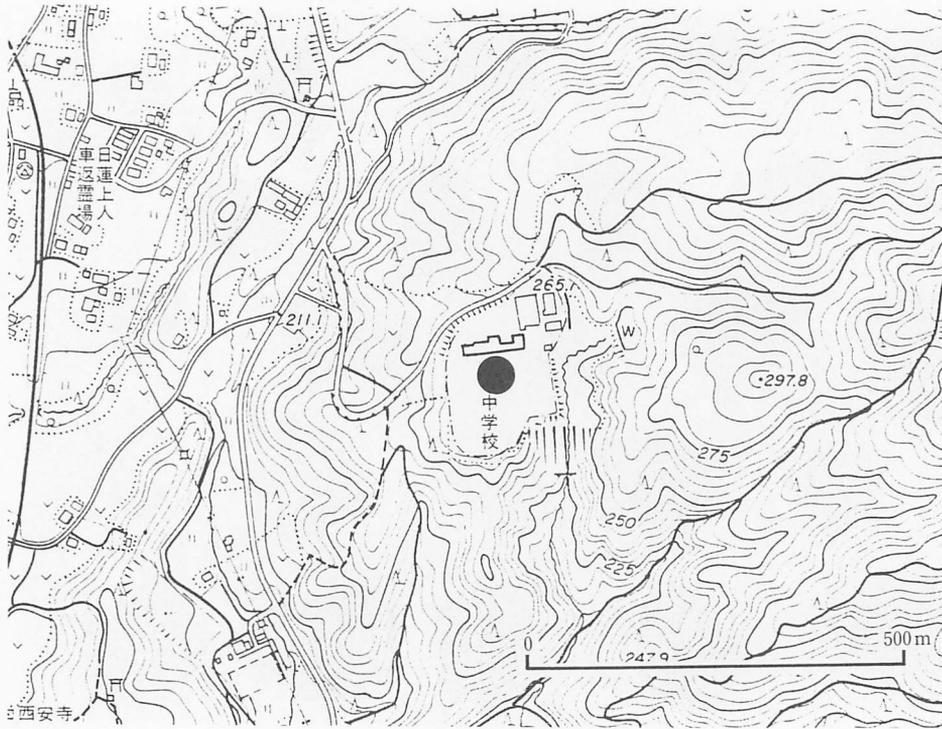
(用語解説)

諸磯式土器 縄文時代前期後半の土器型式。神奈川県三浦市三崎町諸磯貝塚を標識遺跡とする。諸磯a式、b式、c式に細分される。器形は朝顔形、キャリパー形、壺形、浅鉢形や有孔鏝付土器の祖型と考えられる特殊浅鉢などがあり、文様は竹管に沈線文、爪形文、円形刺突文、粘土紐による浮線文などが施文されている。胎土には繊維は含まれない。

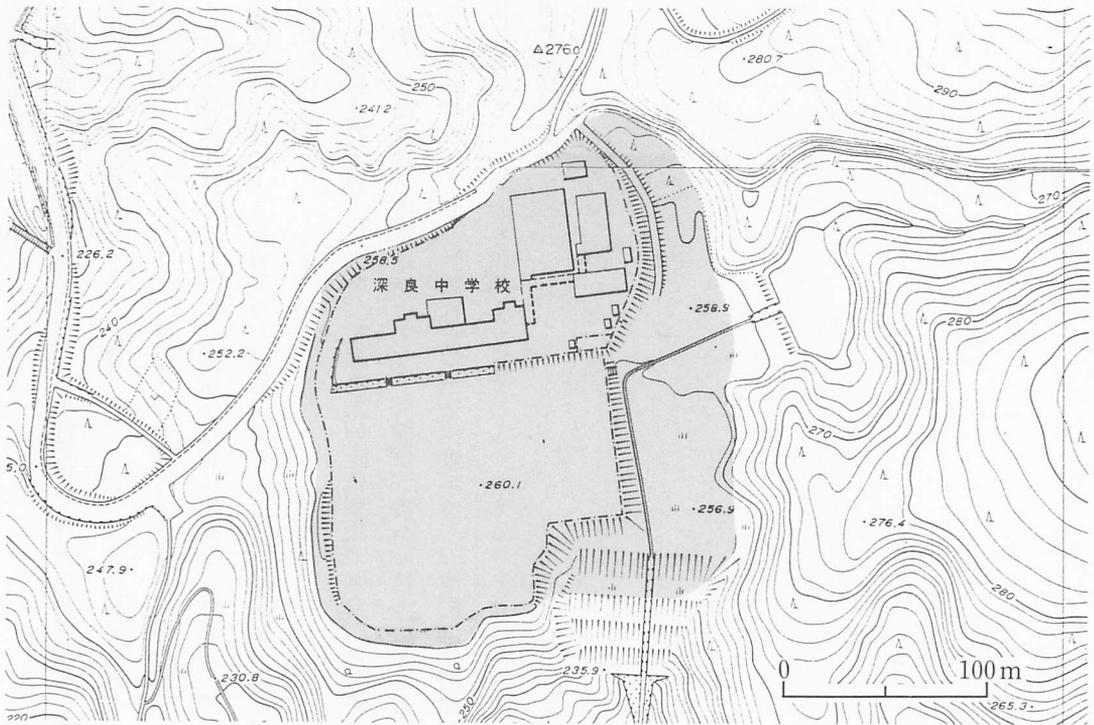
十三菩提式土器 縄文時代前期終末の土器型式。神奈川県川崎市野川十三菩提遺跡を標識遺跡とする。文様は、細かい粘土紐を格子や渦巻状に貼り付けたたり、半截竹管の平行沈線が多く、地文には縄文が施されている。三角形の印刻文も特徴の1つである。分布は南関東から伊豆諸島方面。

城ヶ尾遺跡
じょうがお

所在地 裾野市深良字城ヶ尾三八〇五番地ほか



位置図



遺跡範囲図



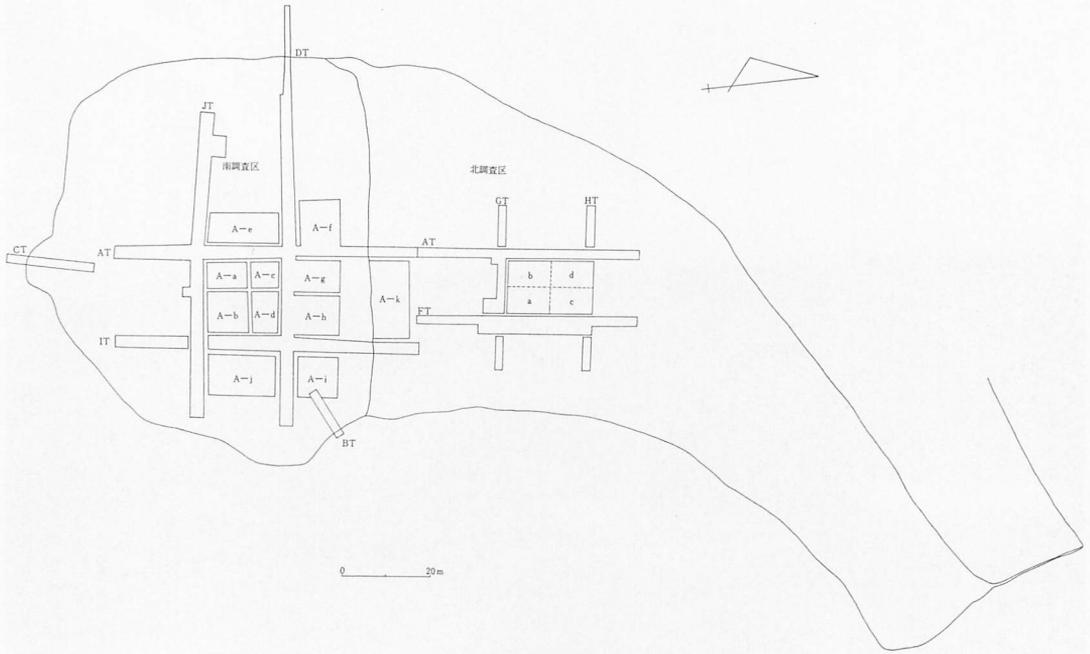
城ヶ尾遺跡遠望

位置と立地 本遺跡は、箱根西側外輪山である湖尻峠、三国山、山伏峠の傾斜の緩やかな山麓末端の、標高二六九・六mの箱根西麓丘陵上に存在する。三国山周辺を水源地とする泉川が、遺跡の丘陵北側から西側の裾部にかけて南流している。

発見と調査 本遺跡は昭和五二年（一九七七）、裾野市立深良中学校の建設予定敷地内の予備調査を実施したところ、城址遺構の存在と縄文時代早期の遺構の存在が確認されたので、この地区を城ヶ尾遺跡とし、同遺構、遺物を明らかにするため七月から翌五三年（一九七八）三月まで断続的に発掘調査が行われた。

調査は、裾野市教育委員会遺跡発掘調査事業として、国と静岡県補助金を得て行い、日本考古学協会員笹津海祥を調査主任に依頼し、これに裾野市文化財保護審議委員芹沢充寛、城址遺構の調査指導に根津美術館美術部長奥田直栄、補助員に井上輝夫が加わり、裾野市立深良中学校PTA、同校生徒、県立裾野高等学校、裾野市青少年団体連合会、裾野市深良一和会の人々が参加した。発掘調査区を南調査区と北調査区とに分けた。北調査区は、台地の中央の南北方向に二m×五〇mの調査区を東側と西側に設定し、さらに其の中央部に一三m×二〇mの調査区、さらにそれに接して東西方向の調査区二m×一〇mの四本を設定し、ほぼ全面発掘を行った。この結果、縄文時代早期中葉から後半を主体とする遺物・遺構が検出された。また早期の遺物の包含層（第五層黒褐色土）から上部に部分的ではあるが、縄文時代中期の遺物が包含されていたが、この時期に伴う遺構は検出し得なかった。

南調査区は台地の南端が一段高くなった部分であり、一応城址遺構



発掘調査図

と想定し、台地全体に三m幅の調査区を「井」字形に設定し、さらに建物遺構の存在が考えられる比較的平坦部に一〇m×一〇mの調査区を設定し調査を進めた。「井」字形調査区の斜面部からは、若干の土器片、須恵器片が出土し、陶器片が少量台地中央平坦部より出土している。また遺構は土坑七カ所、石囲い炉一カ所が検出された。また調査区の北側に検出されていた土塁および空堀がやはり東西方向に延びていることが明らかになった。翌年二月一二日よりふたたび調査を開始し、城址遺構についての調査は、予備調査の際に設定したBトレンチ、Cトレンチ、Dトレンチをさらに斜面を延長する形で調査したが、遺物・遺構は検出し得ず全体が地山のままであった。土塁下部およびその周辺の調査では、土坑四カ所を検出した。空堀の調査はAトレンチとIトレンチで検出した堀を結ぶ線上にA-kトレンチを設定し、掘り上げたが、空堀内から少量の遺物が出土したのみであった。

縄文時代早期の遺構は、Aトレンチの東西に二m×一〇mの調査区を設定し調査した。遺構としては両調査区より焼土が一カ所ずつ検出され、また遺物は少量であった。

層位と遺構 第I層 表土(耕作土) 二〇～二五cm 耕作により全面に攪乱される。下面に一部黒褐色土がみられ、中世の生活面と推定されるが、大半は攪乱されているため、層としては不明瞭である。

第II層 淡褐色土(茶色土) 二〇～二五cm 黒色土にスコリアがみられ、本遺跡の古墳時代遺物の出土が見られる。

第III層 白色軽石土 三～一〇cm 富士山からの噴出物で砂沢スコリア層と呼ばれる。BC二七〇〇年頃と推定され、この地方での鍵層

である。

第IV層 褐色土（茶褐色土）三〇～四五cm この層は細分できるが色別により一区分にしておく。下部は縄文時代中期以降の遺物包含層と推定される。

第V層 黒褐色土 二五～三五cm 栗色を呈する層である。縄文早期から中期に至る遺物が包含される。

第VI層 淡黒褐色土 三～五cm 黒褐色土が淡く、漸移的な変化を示す層である。

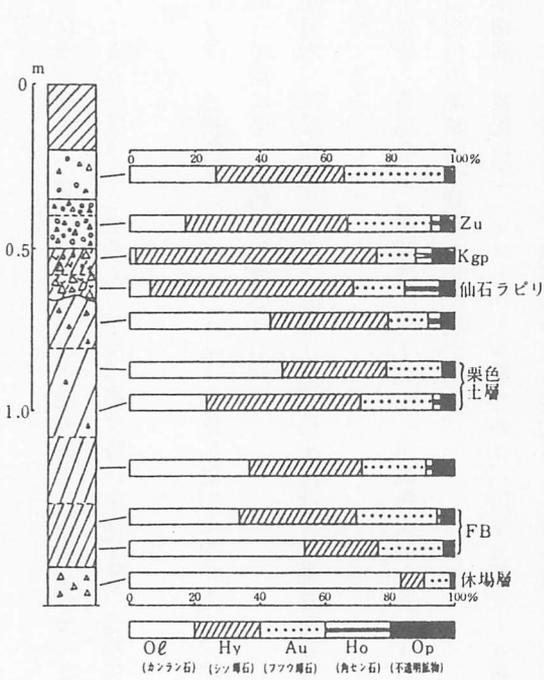
第VII層 茶褐色土（漸移層）三～六cm 黒褐色土層からローム層への黄褐色の漸移的な変化を示す層である。

第VIII層 黄褐色土 ソフトローム層であり、以下上部ローム層は、スコリアの互層である。旧石器時代の遺物はこの層に含まれる。

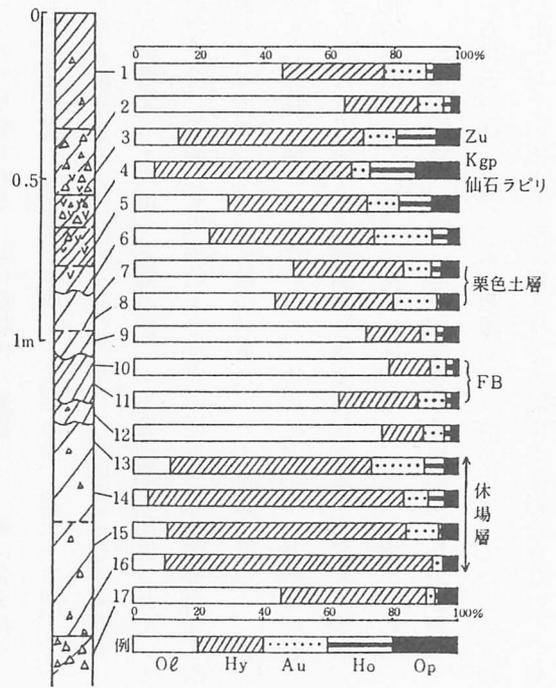
北調査区遺構 住居址一カ所、土坑四カ所、焼土一カ所、ピット群一・八m南北二・八mで五个の柱穴が不整形に配置されている。柱穴の覆土は、五个とも黒褐色土で柱穴の径は一五cm前後で深さ四〇cm前後のものであった。住居址の状態については掘り込みや、床の踏み固められた跡は検出されなかった。住居址内からの遺物は磨石一個が出土しただけだが、その南側から縄文時代早期の土器片、焼石、磨石、炭化物が出土している。一号土坑は、F―二区より検出された。長径三・〇八m、短径一・三二mで、深さは最深部で七八cmを測る。土坑内から磨石一個、石斧一個、黒曜石核一個が出土しているが、覆土内から出土している点から直接土坑との関係が見当たらない。二号土坑

は、一号土坑の西側に隣接して検出した。長径六八cm、短径三五cm、

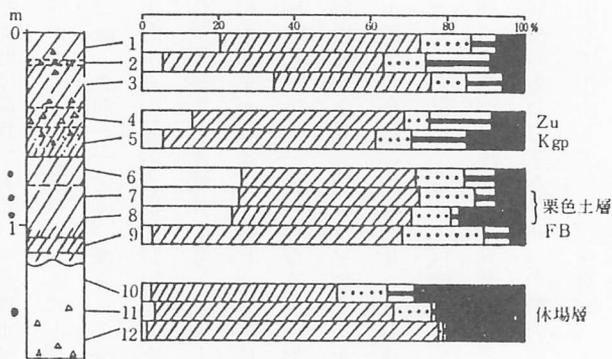
深さ三二cmを検出部で測る小規模なものである。土坑内より縄文時代早期前半の土器片二点が出土している。三号土坑は、A―d区より検出された。長径七七cm、短径六五cm、深さ二二・四cmと小型のものである。断面形は皿状をなしている。遺物は出土しなかった。四号土坑は、A―c区より検出された。長径五〇cm、短径四二cm、深さ二二cmと小型であり、断面形は皿状である。一号焼土はF―五区の東側の壁にかかって検出されたため、全貌は明らかにし得なかった。検出部において南北一四二cm、東西一一〇cm、深さ二二cmあり、断面形はレンズ状である。焼土内から少量の土器片が出土したが時期は不明である。周辺から縄文時代早期後半の土器片が多く出土していることから、焼土もその時期の所産と思われる。一号ピット群は、G―二区中央部から検出された。柱穴状ピット三個からなる半円形の配列であり、三個とも直径二〇cm前後で深さも三〇cmほどのしっかりしたピットである。このピット群の上層から多量の黒曜石片を含む遺物が、小片ではあるが出土した。二号ピット群は、G―二区南側拡張区に検出された。一号ピット群と同様に三個が半円形に配列され、三個とも直径二〇cmほど、深さ二七cm前後のものである。ピット群の南側から磨石、石斧を含む自然石が集中して出土している。三号ピット群は、F―五区から検出し、そのピット群の中に一号焼土が存在する。ピット群は、九個からなるもので等間隔に配列されている。ピット群と焼土との関係は不明であるが、この部分に遺物が集中している点や、その配置から関係があるものと思われる。また、出土した土器片も縄文時代早期後半



城ヶ尾遺跡土層分析

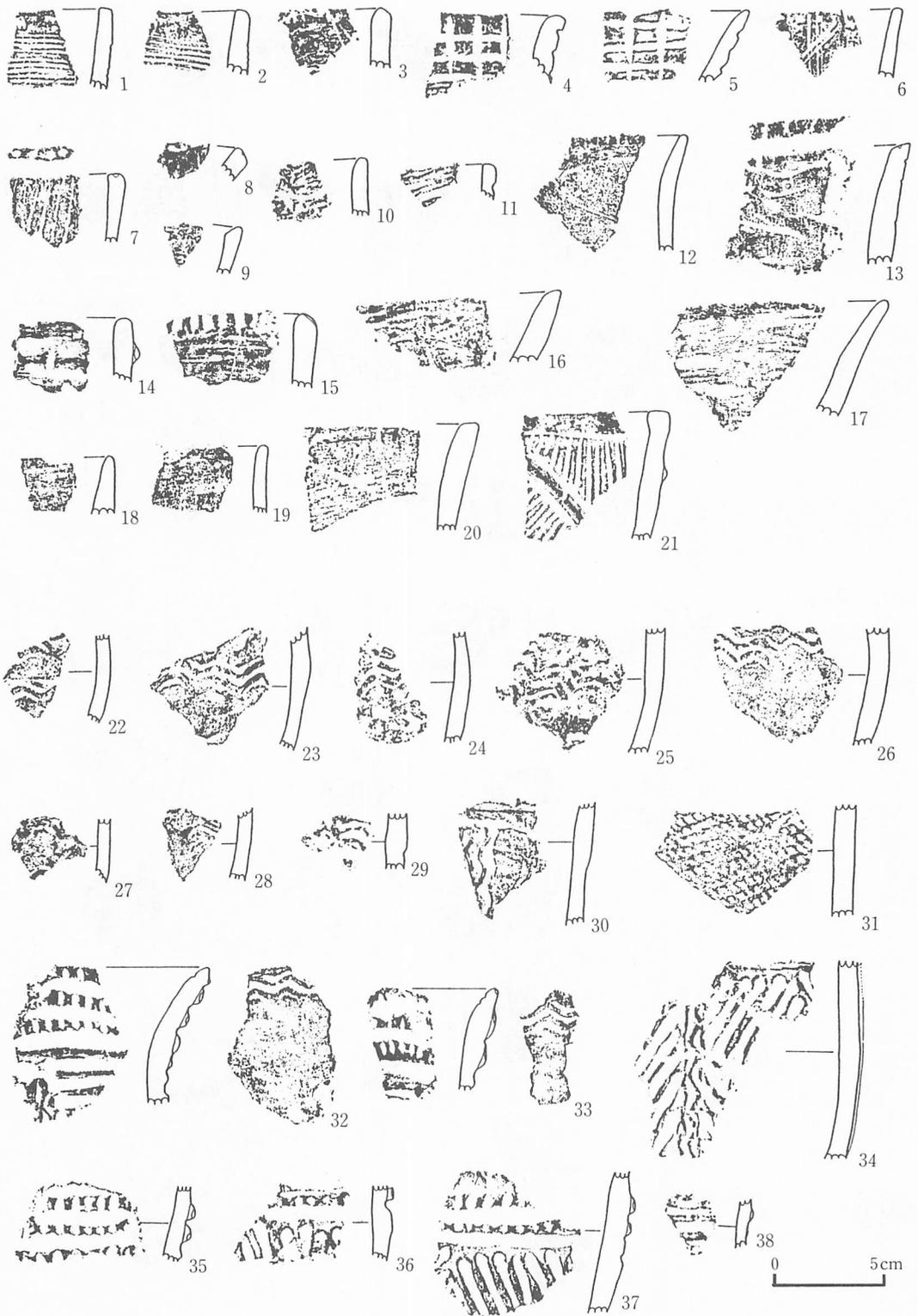


裾野市富沢内野山遺跡土層分析

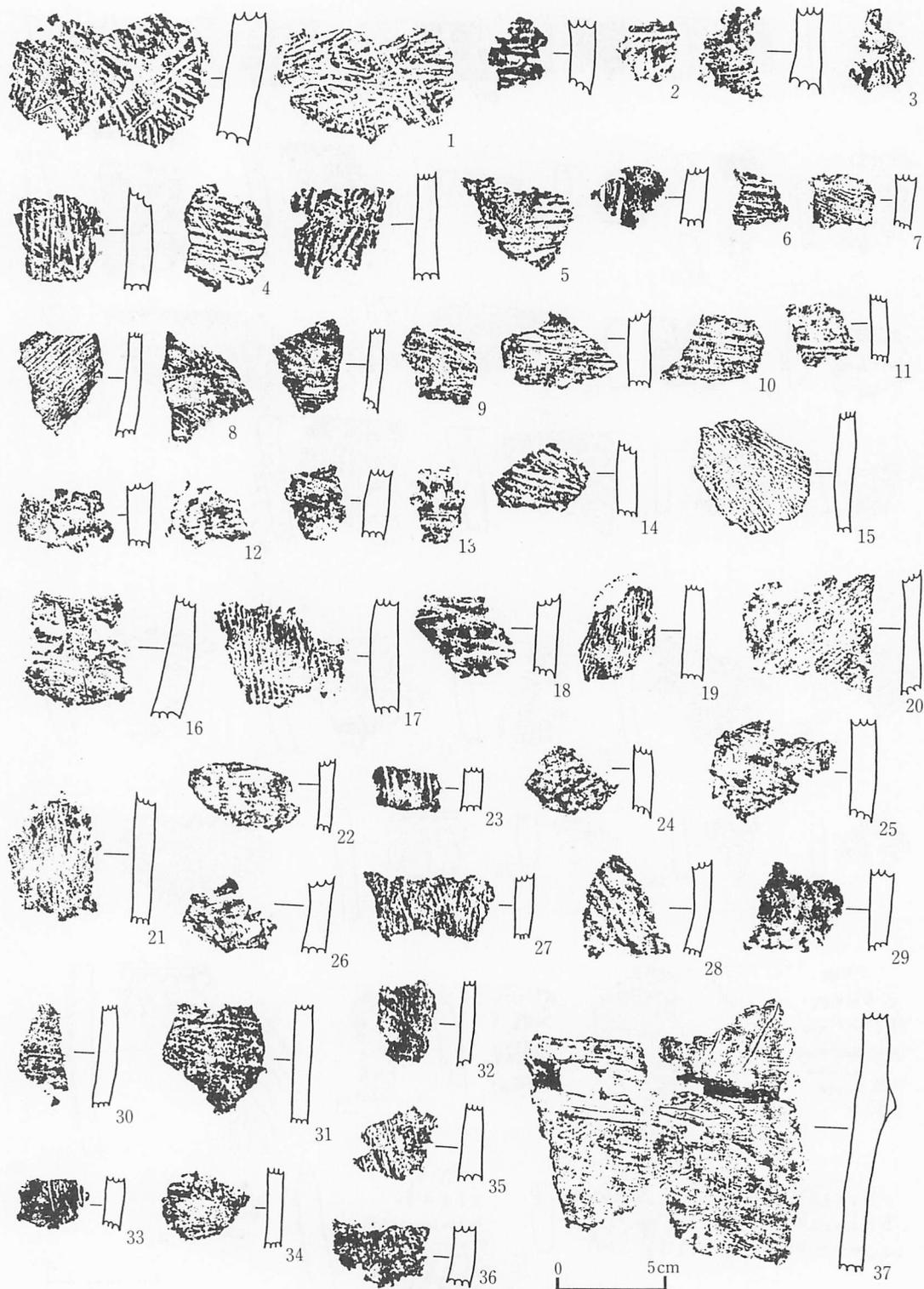


長泉町西願寺遺跡土層分析

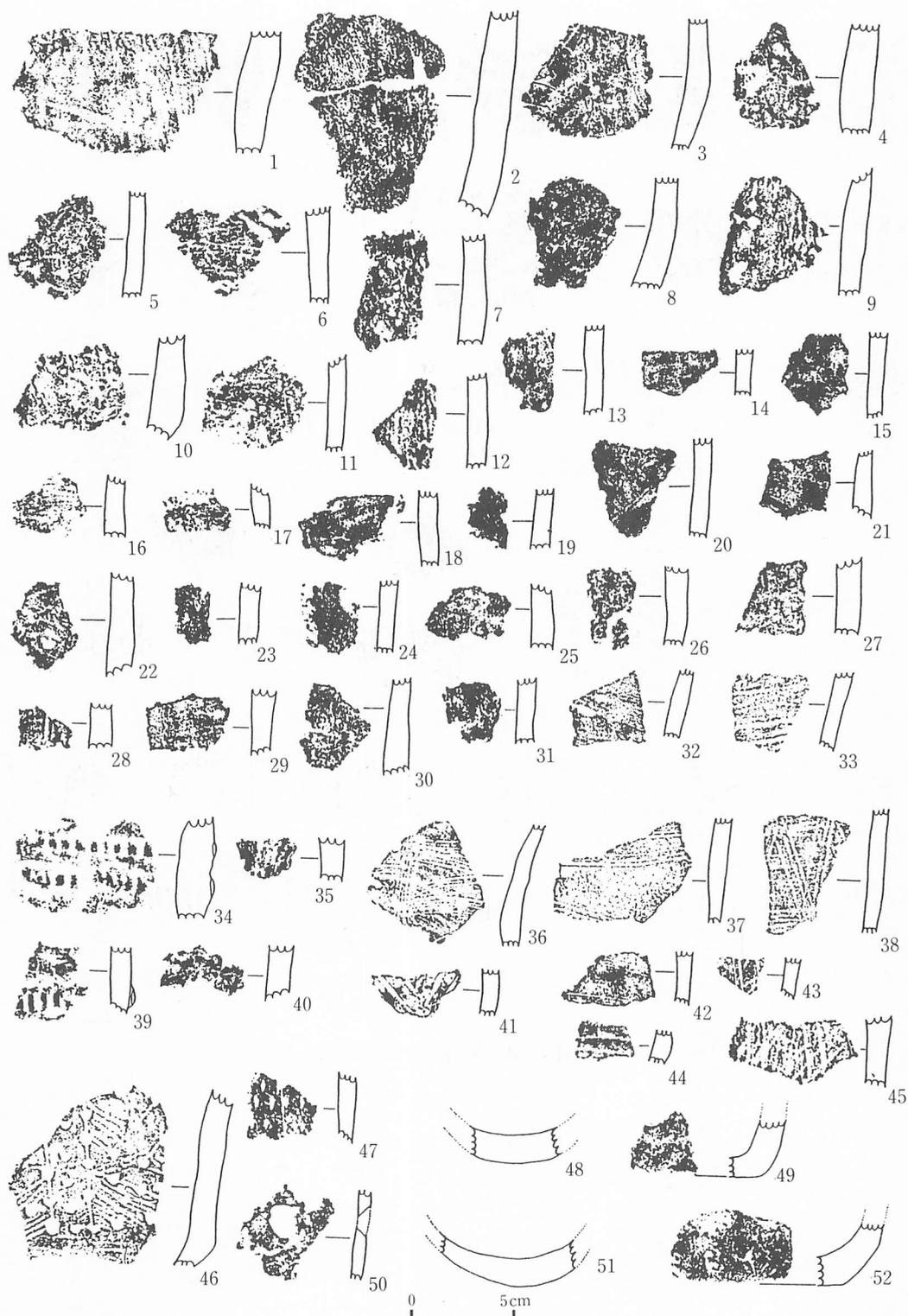
城ヶ尾遺跡土層分析図表



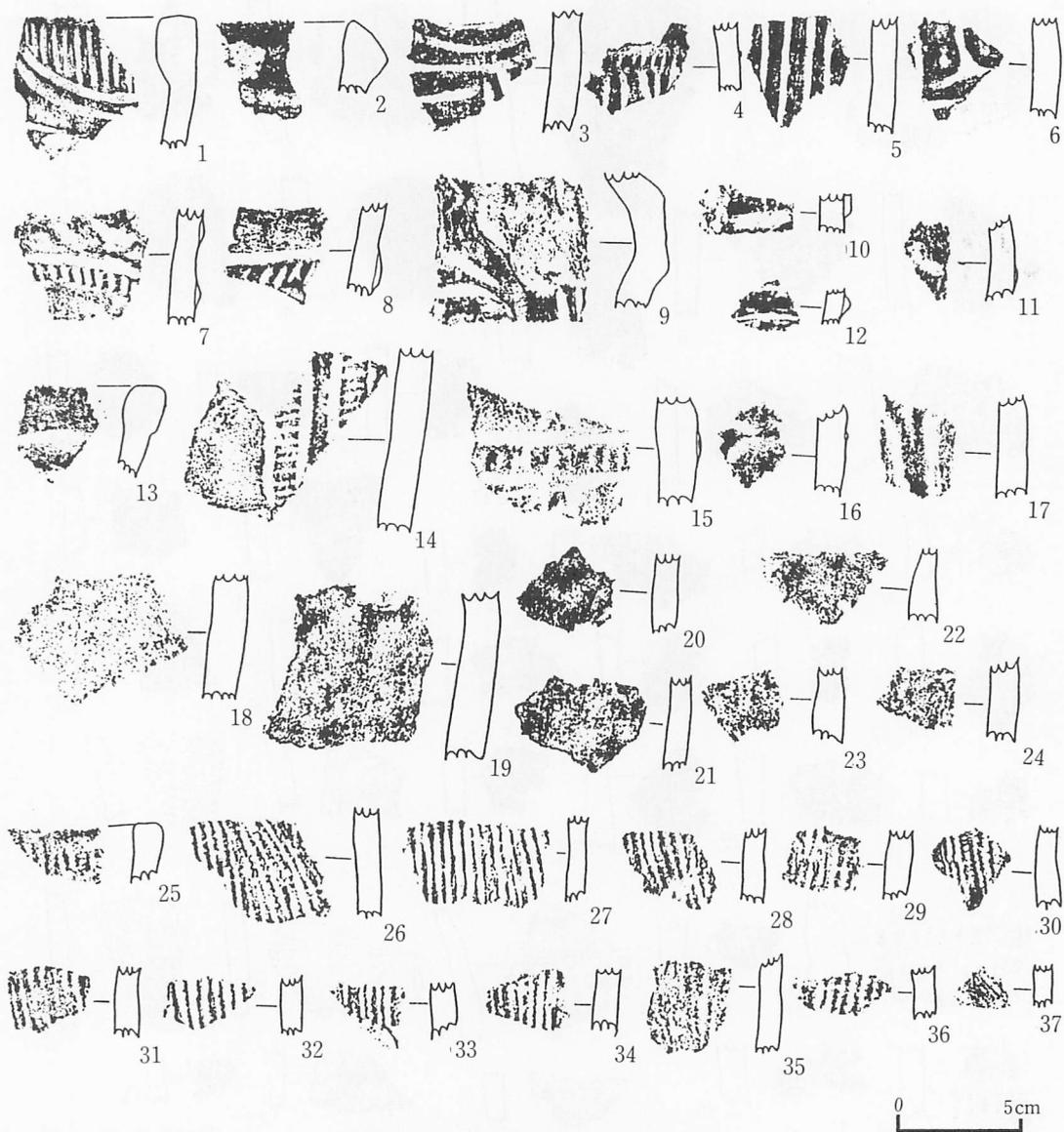
第1図 城ヶ尾遺跡出土土器拓影



第2図 城ヶ尾遺跡出土土器拓影



第3図 城ヶ尾遺跡出土土器拓影



第4図 城ヶ尾遺跡出土土器拓影

のもので、おそらく両者ともその時期の所産であろう。四号ピット群は調査区域の中央部 A—abcd、F—三、四区に集中して検出されたグループであり、総数は五四個からなり、その位置から四つのグループに分けられる。このピット群の上層より遺物が、非常に多く出土したが、その出土状況とピット群との関係において見てみると、ピットの集中していない部分に遺物が分布していると言える。

南調査区遺構 焼土 一号焼土は、A—g区より検出された。大きさは東西五一cm、南北六二cm、深さ二〇cmを測り、断面形は皿状をなす。周辺から細い炭化物、黒曜石の不定形石器一点が出土している。二号焼土は、A—h区から検出された。大きさは東西六三cm、南北八五cm、深さ二一cmを測り、断面形は皿状をなす。周辺より磨石二個、頁岩質不定形石器一個、黒曜石質不定形石器一個、土器片二点が出土している。

遺物 土器は出土数が二八九点と以外に少ない。主に無文土器が多く、つぎに条痕文土器が多い。出土数のうち口縁部破片は二八片出土している。第一類土器—押型文土器(第1図22~31) 山形押型文九片と格子目押型文一片が出土している。山形押型文土器は、八片が横位に施文され、一片のみ縦位に施文されている。格子目押型文は比較的にきちんとした文様帯をなし、焼成も山形押型文より良好である。第二類土器—降起線文土器(第1図14・15・32~38、第2図37、第3図34・39) 口縁部にいく条かの横位の隆帯をはりつけ、隆帯にヘラ状工具によってキザミを施した土器と、胴部に横位に一条の隆帯を施しているが地文として条痕文を施しているものと、口縁部または口縁部下

半部に隆帯をはりつけ、ヘラ状工具によってキザミを施しているものと、半截竹管による押し引きによりキザミを施しているものとに分けられる。第三類土器—沈線文土器 半截竹管による平行沈線文土器(第1図1・2・6、第3図36~38・42~45)と、ヘラ状工具による沈線文土器(第1図4・5・7・11・21、第3図)と列点文土器(絡状体庄痕文土器)(第3図47)に分けられる。第四類土器—条痕文土器(第1図16、第2図1~36) 遺跡の主体をなす土器群である。口縁はほとんどが平縁である。貝殻腹縁によって縦位、横位、斜めの格子状を施文しているが、表面に施したもの、表裏面に施したものがある。中には、条痕を明瞭に残したものとかすかに残したものがある。表面のみのものは、表裏とも施したものに比べて比較的薄手で焼成も良いものが目立つ。両者とも色調は茶褐色あるいは黄褐色で繊維を含むものと含まないものがある。第五類土器—無文土器(第1図3・8・9・10・17~20、第3図1~33) 口縁部が広がるもの、刻み目をもつもの他は、平縁である。器面が荒れているものと、そうでないものが見られる。土器底(第3図48・49・51・52)は平底と平底があるが、平底の方が焼成、胎土とも良好で、先ほどの無文土器と類似している。色調は黄褐色である。

そのほか、縄文時代中期の土器片(第4図)が出土した。

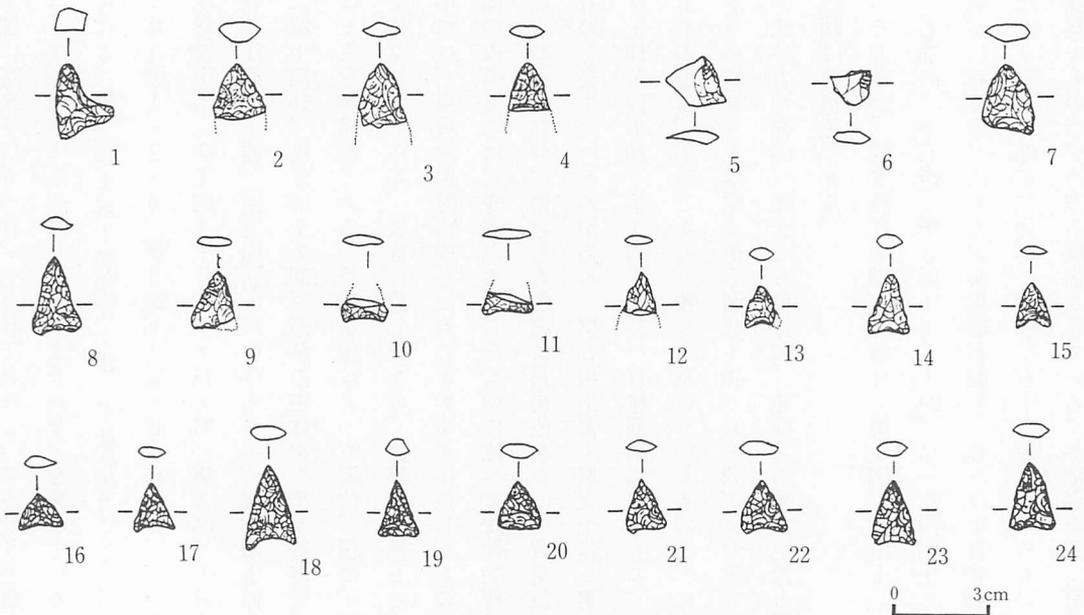
石器のうち石鏃(第5図1・7~24)は一八点出土したうち、未成品が二点ある。ほとんどが黒曜石製で一点だけが頁岩製である。形はほとんどが二等辺三角形で基部に若干の抉りがあるものもある。表面採集でそのほかに三点採集されている。不定形石器(第5図5・6、

第6図25・26・28〜31・33)は九点出土している。そのうち二点が黒曜石製で、剥片の一部に加工を施している小石器と比較的大形のものがある。ポイント形石器(第5図2〜4)は三点出土している。すべて黒曜石製で基部が欠損しているが、その大きさ、加工方法によってこの類に入れた。石匙(第6図27)は一点出土している。縦型のもので細部にまで剝離を施している。石質はメノウである。打製石斧(第6図32・34〜40)は八点出土している。薄くはがされた石の端部にのみ刃をつけているものがほとんどであり、自然面を多く残す。磨石(第7・8図、第9図66〜73)は三二点出土している。ほとんどが安山岩質のものであり、凹石、たなきし敲石と兼用しているものもいくつかある。石皿(第9図74)は一点出土している。あまり大形ではなく平坦部があまり磨りへっておらず、長期にわたって使用したものではないようである。

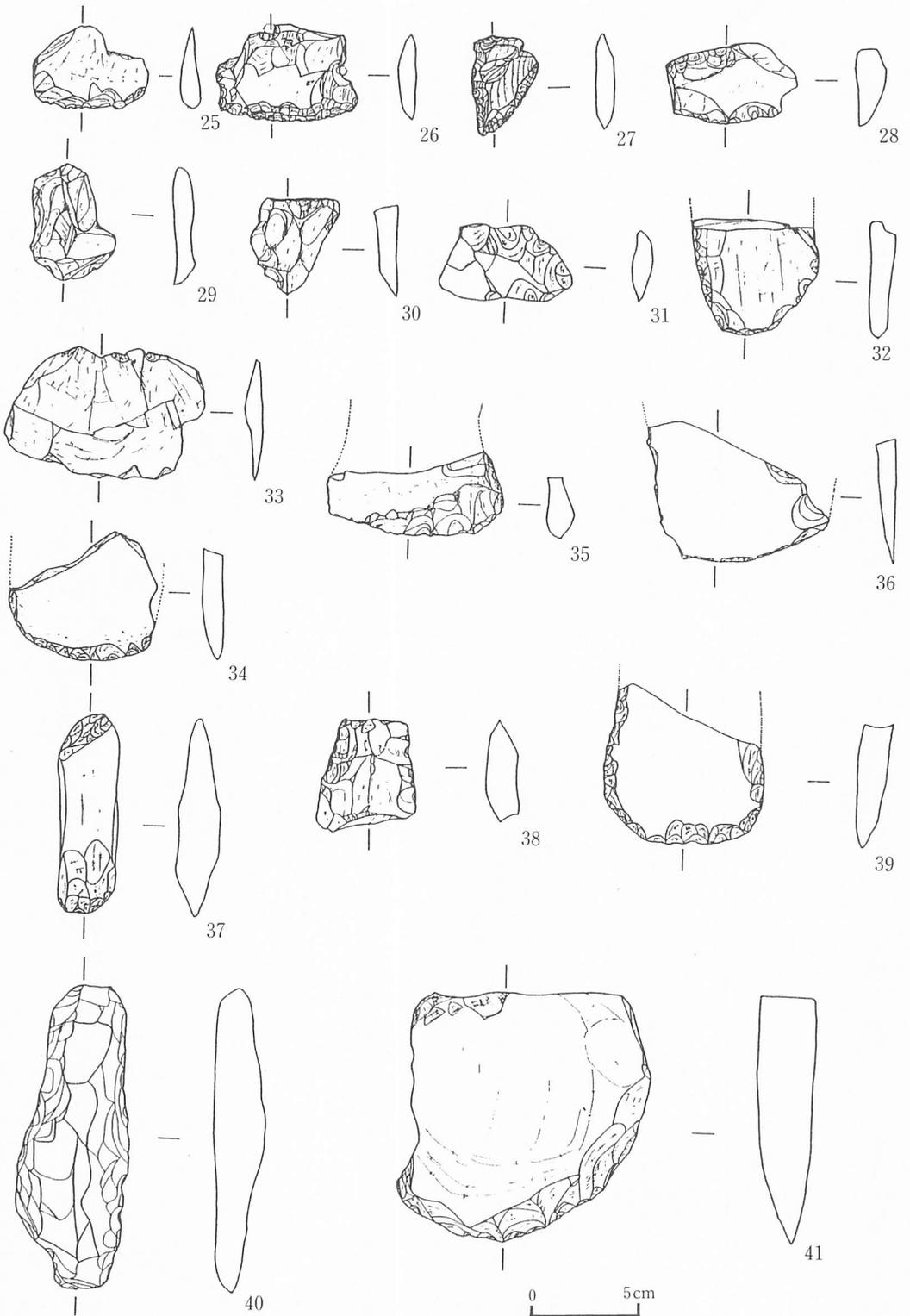
遺跡の特徴 この遺跡は、第四類条痕文土器と第五類無文土器が主体である。しかし、遺跡の一部(G—二区)からだけ押型文土器が出土している点は注目すべきところである。主な遺構として、一号住居址といくつかのピット群と一号土坑があげられ、これらが主に縄文時代早期前半の所産と考えた場合、この遺跡において早期の中でも、押型文土器の時期と条痕文土器の時期二つが存在したことが考えられる。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

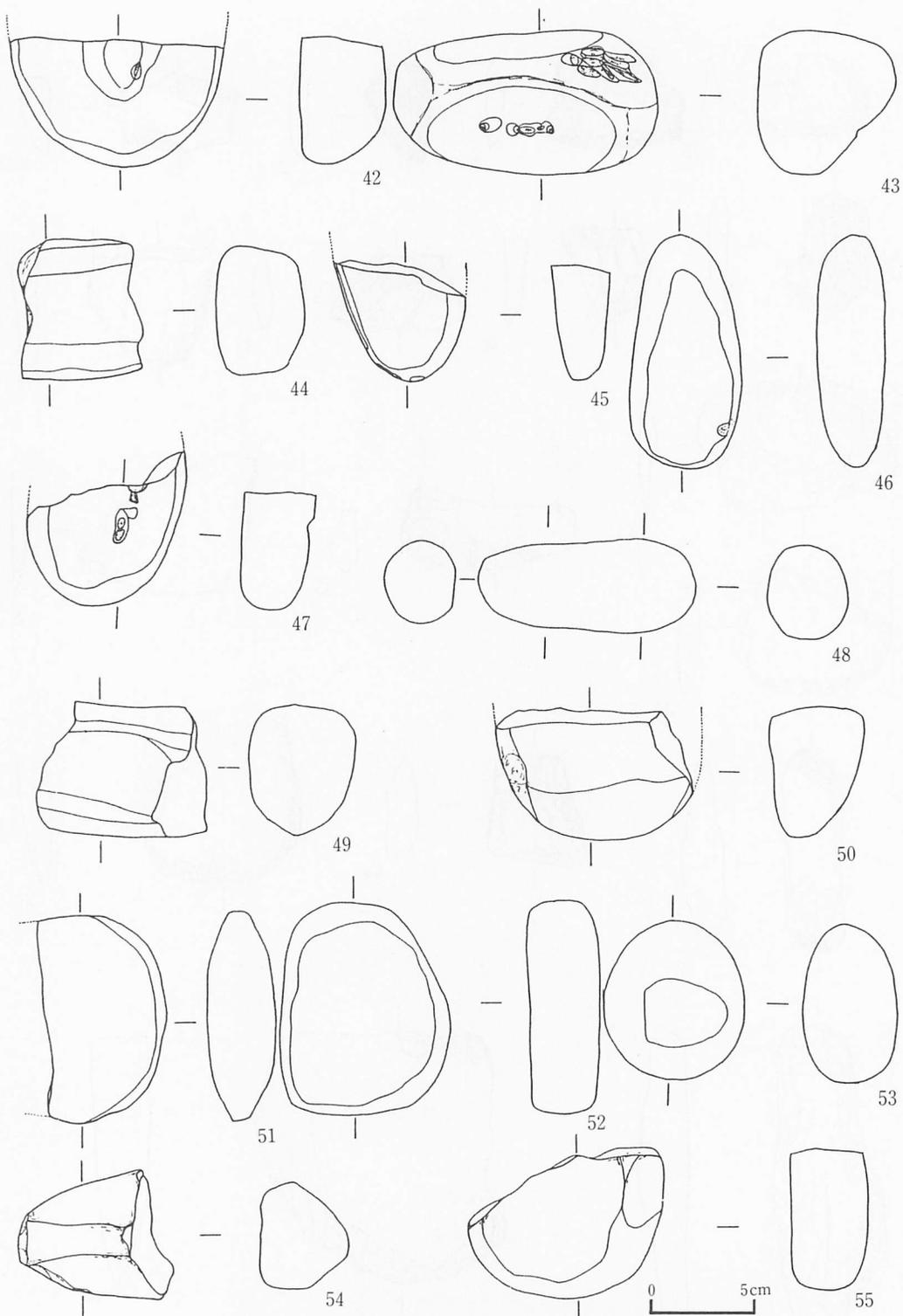
文献 笹津海祥ほか「裾野市深良城ケ尾遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九七七



第5図 城ヶ尾遺跡出土石器実測図



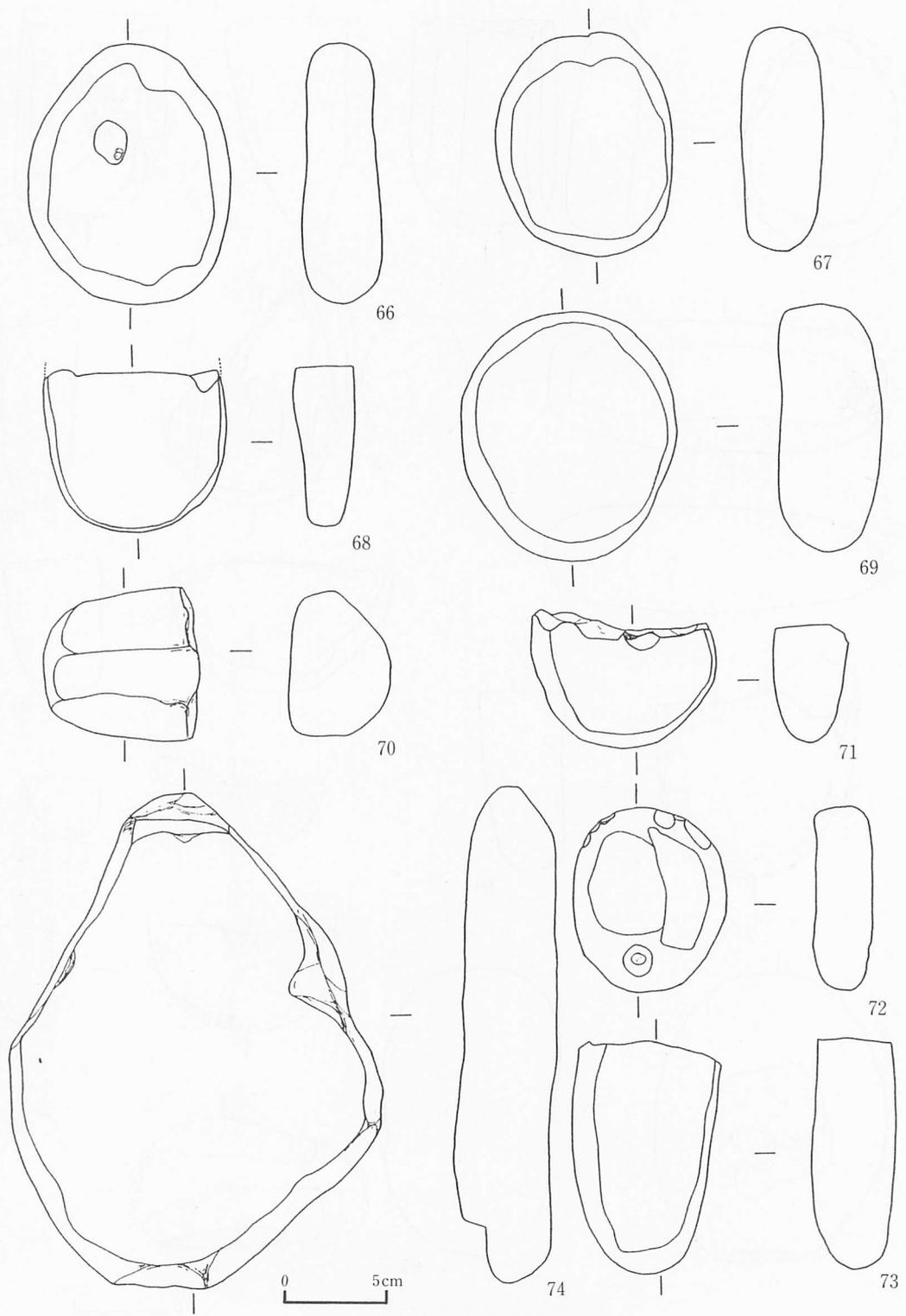
第6図 城ヶ尾遺跡出土石器実測図



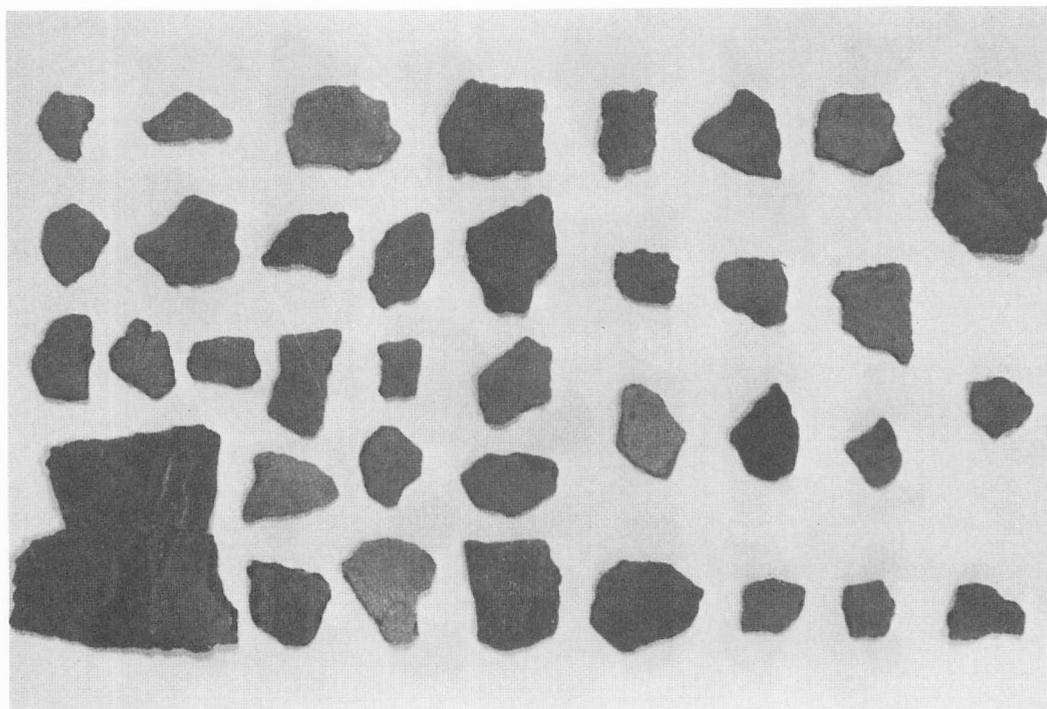
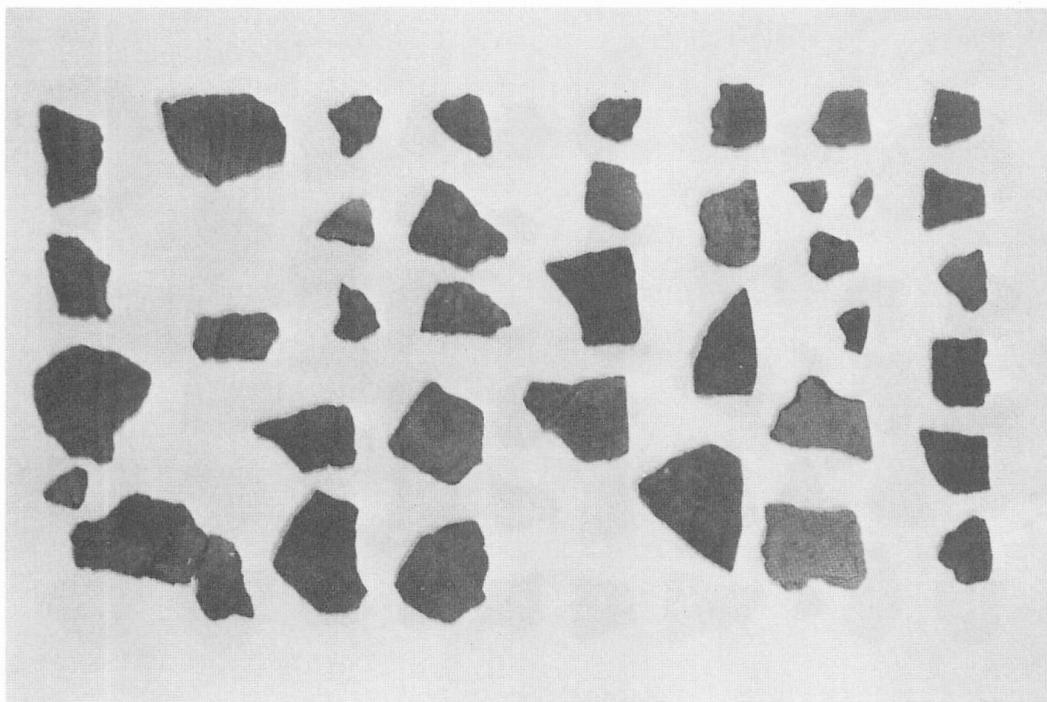
第7図 城ヶ尾遺跡出土石器実測図



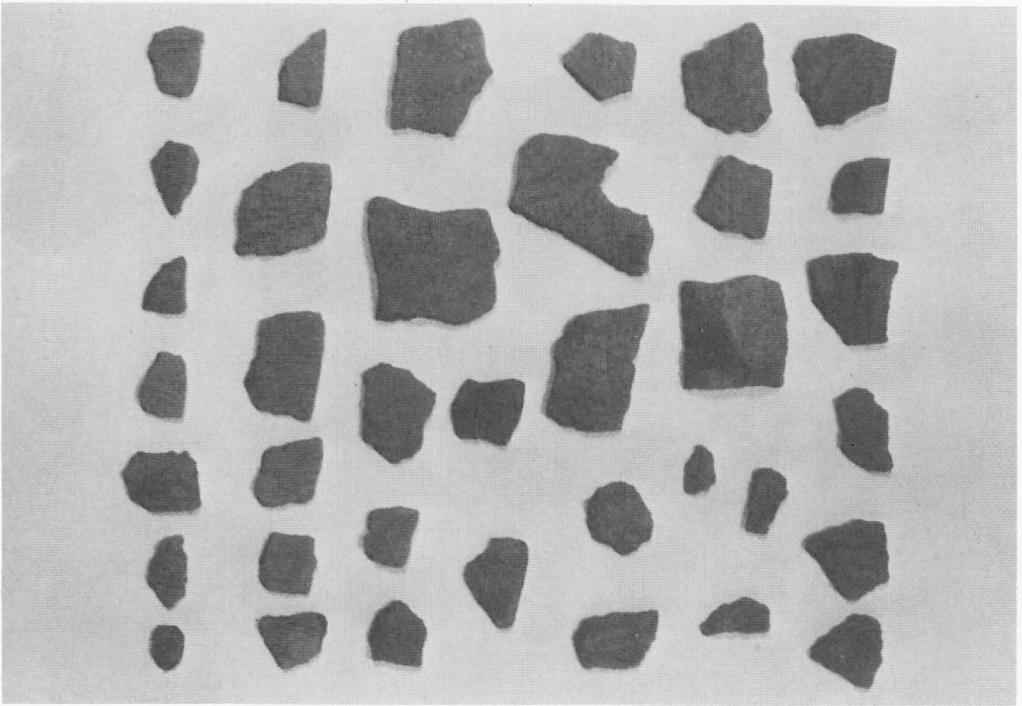
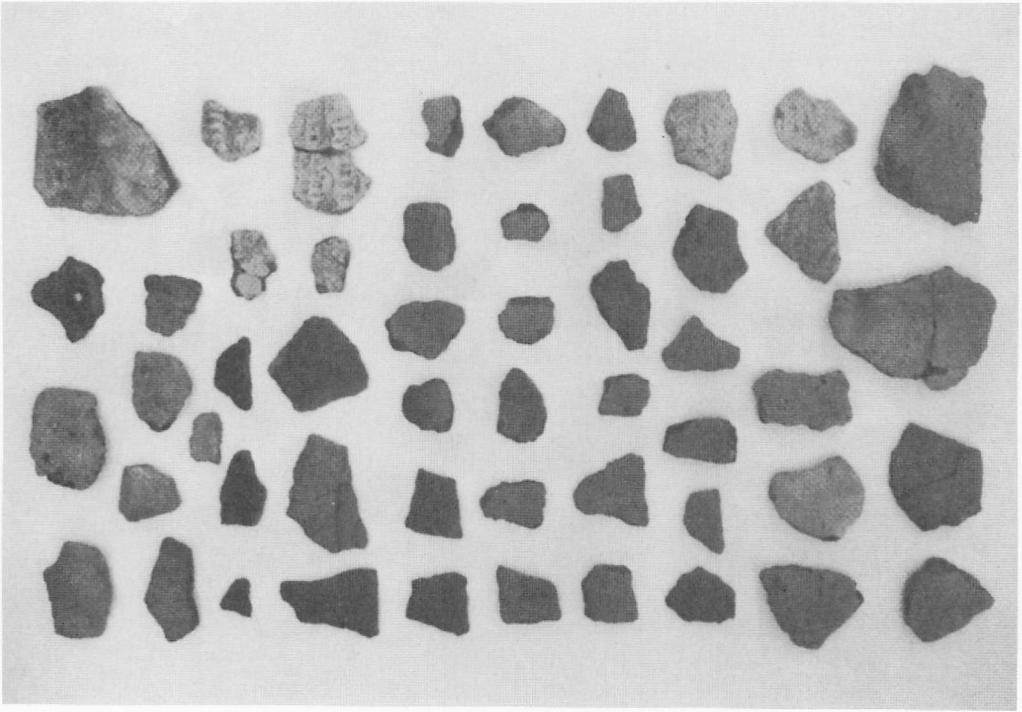
第 8 図 城ヶ尾遺跡出土石器実測図



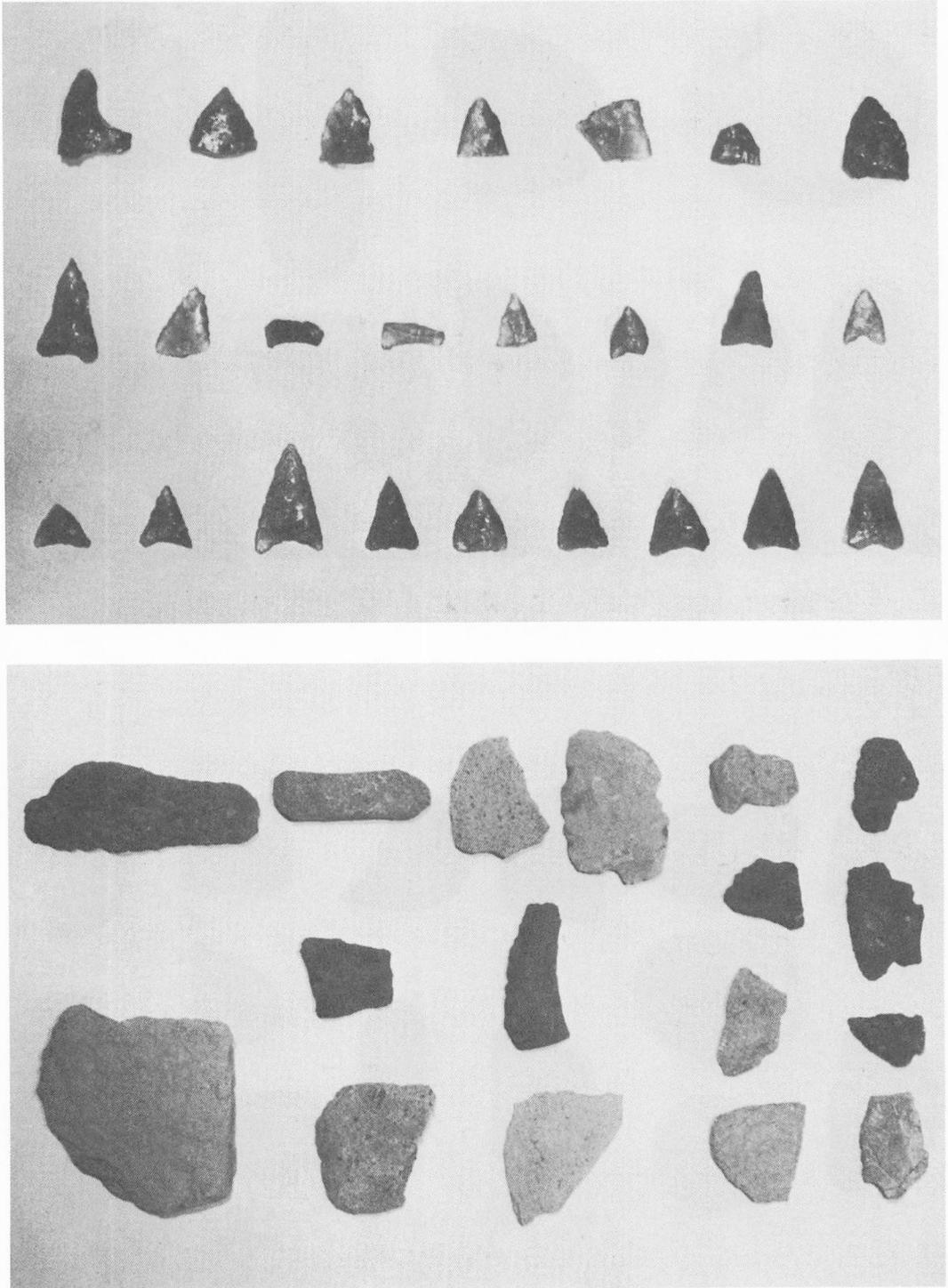
第9図 城ヶ尾遺跡出土石器実測図



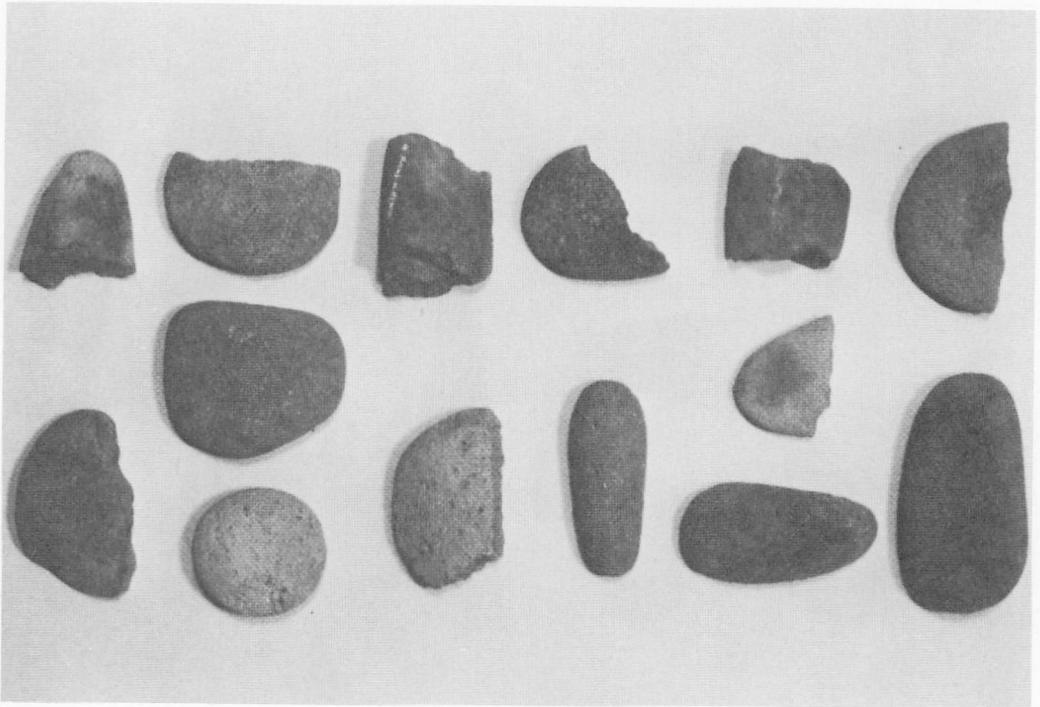
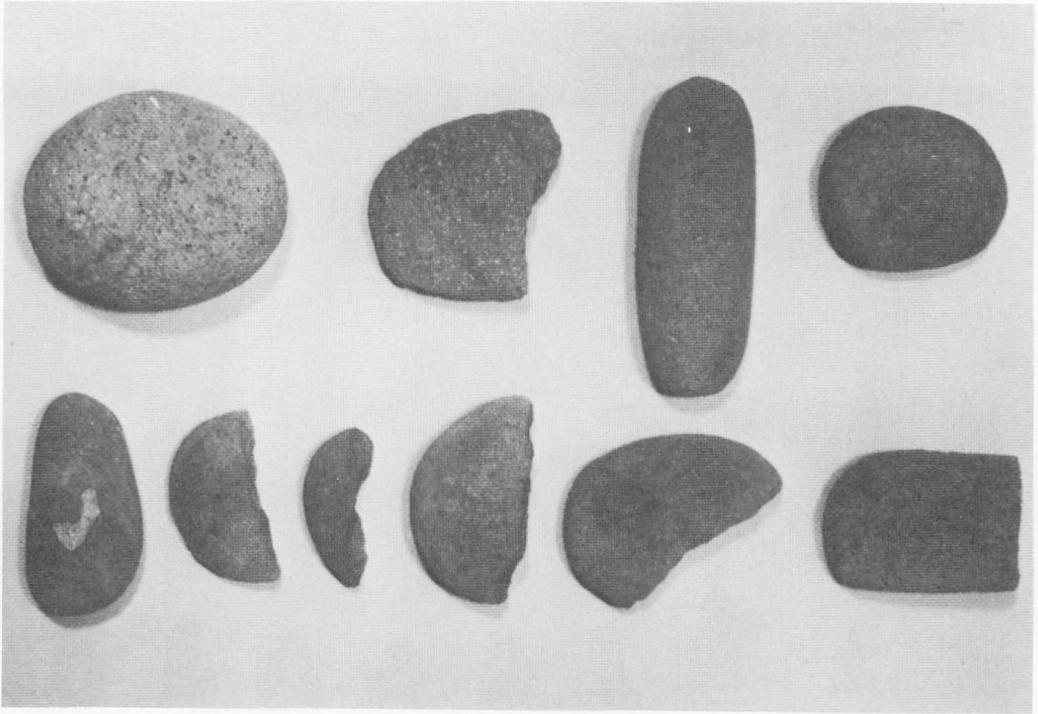
図版1 城ヶ尾遺跡出土土器



图版2 城ヶ尾遺跡出土土器



図版 3 城ヶ尾遺跡出土石器

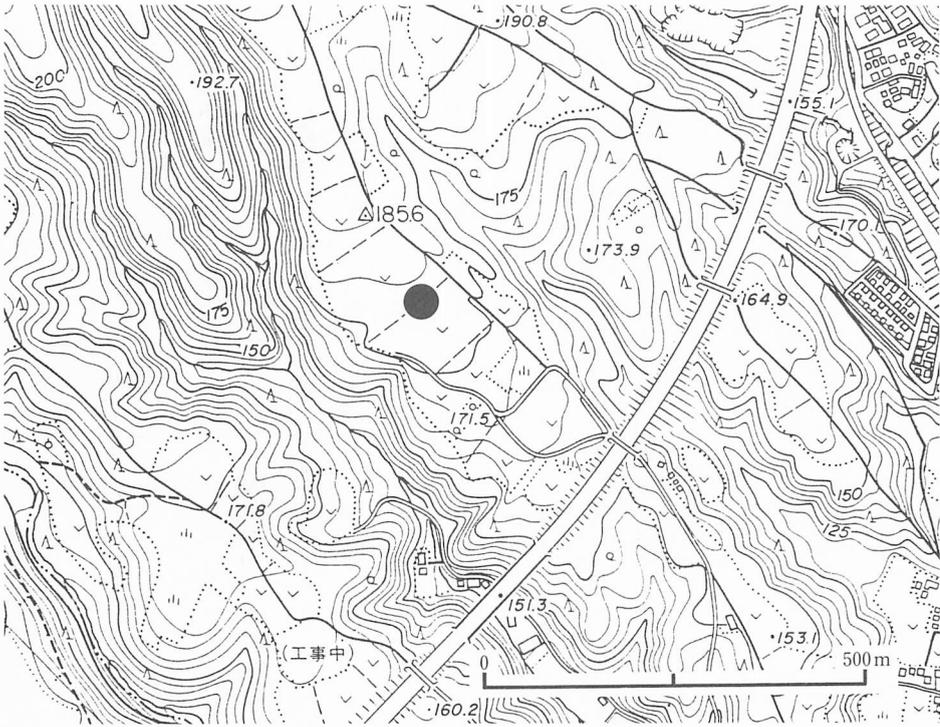


图版 4 城ヶ尾遺跡出土石器

11

富沢内野山Ⅰ遺跡
とみざわうちのかさん

所在地 裾野市富沢字内野山五九二番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 愛鷹山から富沢集落へ向かって延びた尾根平坦部の、

海拔一八五mのところに位置する。尾根の平坦面は海拔一九〇m付近から東南へ、幅約一〇〇〜一八〇m、長さ約1kmほど続き、本遺跡はほぼその中央部に立地する。

発見と調査 昭和四〇年（一九六五）頃、県立沼津商業高等学校郷土研究部が踏査し、橇円押型文土器等を採集している。昭和四二年（一九六七）、裾野郷土研究会の芹沢充寛、佐藤隆、県立裾野高等学校郷土研究部は現地を踏査し、昭和五一年（一九七六）、瀬川裕市郎は「考古学ジャーナル」九七六、二号」で、本遺跡の出土土器を紹介している。昭和五一年（一九七六）、本遺跡で削土工事が始まり、土器が出土したとの報告を受けた裾野市教育委員会では、笹津海洋を主任とする緊急発掘調査団を組み、芹沢充寛、天野忍、井上輝夫、小林晴美、中村孝一、裾野高等学校郷土研究部、富沢子供会、持田信幸、歌崎久作、持田陸太郎らに参加して、発掘調査が実施された。調査は、削土工事の残り部分に調査区を設定し、同年七月から八月にかけて発掘調査を実施した。

層序と遺構 遺構は、住居址二カ所、土坑五カ所、焼土四カ所が検出された。一号住居址は、上部が削平され、柱穴と壁面の一部が確認されただけで、掘方、構造は不明であった。本住居址からは、石皿、磨石、剝片石器、土器片が出土した。二号住居址は、基盤のローム層（黄褐色粘質火山灰層）を約一〇cm掘込んだ方形堅穴住居址で、床面より約一〇〜一五cmの土層中から石鏃、磨石、土器片が出土した。土坑は、発掘区南西部に集中して検出された。

遺物 土器は、文様、胎土から三群に分類される。

第一群土器（第1図1・2）は、押型文土器で格子目文である。

第二群土器は、文様から八種類に分類できる。第一類土器（第1図3〜17）は、隆起線文によって文様が構成されるもの、第二類土器（第2図1〜27、第3図2〜27）は、沈線文で文様が構成されるもの、第三類土器（第4図22〜30）は、刺突文で文様が構成されるもの、第四類土器（第5図1〜27）は、絡条体圧痕文で文様が構成されるもので、絡条体だけのもの、沈線と併用されるもの、隆起帯のつくもの、沈線と隆起帯の併用されるものなどに分けられる。第五類土器（第6図1〜3）は、貝殻腹縁文によって文様が構成されるもの、第六類土器（第6図4〜6）は、条痕文の土器である。そのほかに、縄文施文の第七類土器と、無文の第八類土器がある。

第三群土器は、三角連続押引文の土器を本群とした。

以上、第一群土器は、縄文時代早期前半、第二群土器は、同じく早期後半のもので、第三群土器は、同じく中期中葉のものと思われる。

第8図、第9図は、内野山I遺跡から表面採集された土器である。

第8図1・2は、山形押型文土器で、胎土に砂粒を含み、よく焼き締まる。3〜24は、絡条体圧痕文の土器で、微隆起線文、沈線文が併用される。胎土に若干の繊維を含む。25・26は貝殻腹縁文の土器、28・29は沈線文の土器で、胎土に若干の繊維を含む。発掘出土資料の第一〜二群土器に属する。第9図1〜6は、胎土に若干の繊維を含み、無文である。出土資料の第二群土器に属するものと思われる。8は、三叉文があり、縄文時代中期中葉のもので、同資料の第三群土器に属するものであると思われる。9〜15は、半截竹管による縦引の沈線文に、

粘土紐を貼付して文様を構成するもの、縄文を地文とし沈線を施すもので、中期後半に属するものと思われる。16・18は、胎土に細砂と白色石粒を含み、硬く焼き締まる。16は口縁のくびれ部に、8の字状の突起がつけられ、18は口縁部に沈線がつけられる。17・19は、不連続な沈線文が文様となっている。薄手で硬く焼き締まる。16～19は、縄文時代後期に属する土器と思われる。石器は、石斧一点、石皿二点、磨石二八点、石鏃八点が出土している。そのほか排土中から石斧二点、^(注)チャート製刃器三点、石皿三点、磨石六七点、石鏃八点、搔器三点が採集されている。

遺跡の特徴 本遺跡は、第二群土器を主体とする、縄文時代早期後半の代表的遺跡としてよいが、なお同中期から後期にわたる重複した遺跡であって、特に後期遺跡は裾野市内でも数が少なく、注目されるところである。

現状 遺跡の削平工事は、農地改良事業の一環として実施されたものであるが、遺物包含層は除去され消滅した。現状は改良後、畑地となっている。

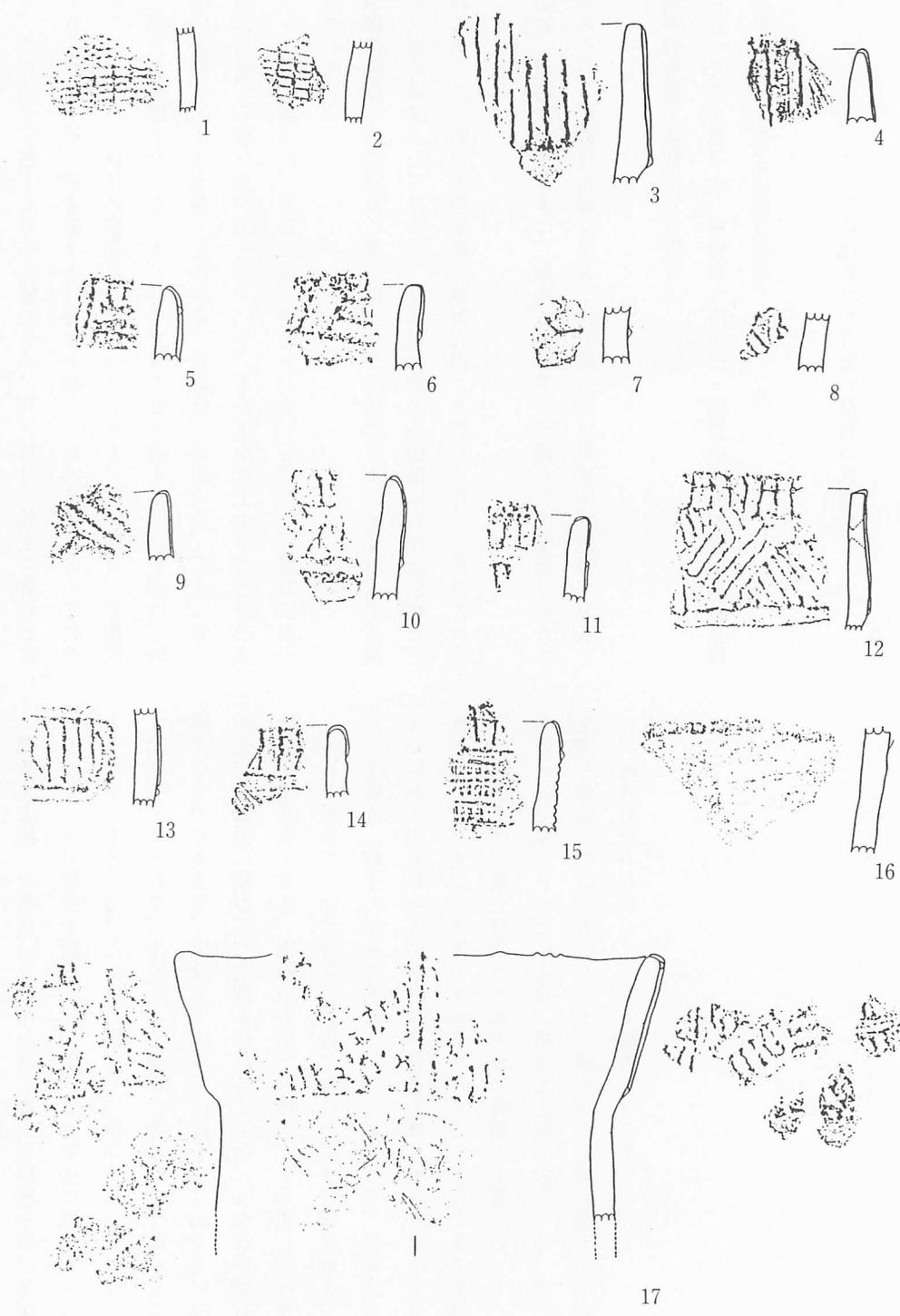
資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 芹沢充寛ほか「裾野市大畑中畑・裾野市富沢内野山遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九八六

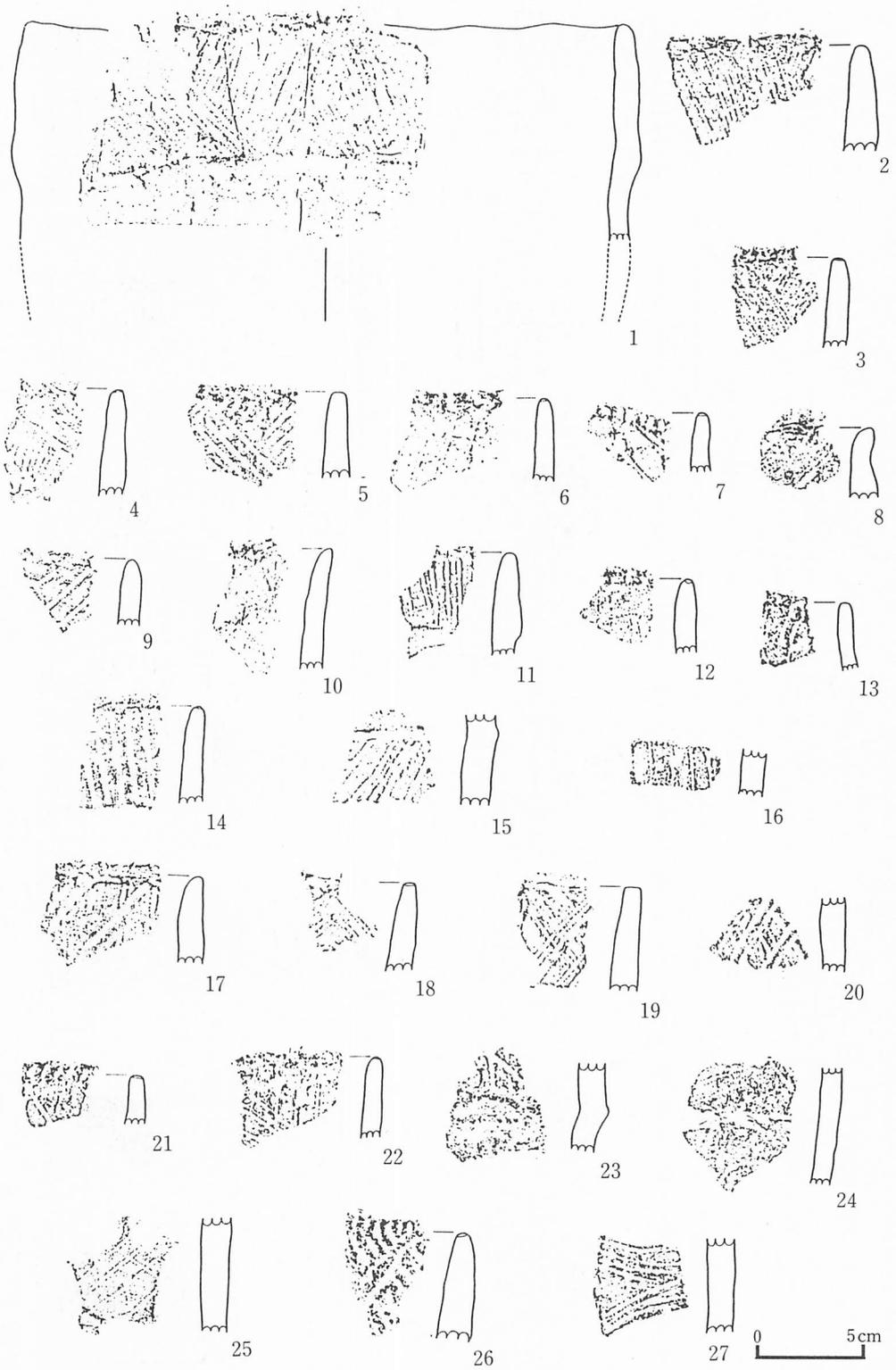
(注) チャート 火打石に使われた。堅い珪質の堆積岩。

(用語解説)

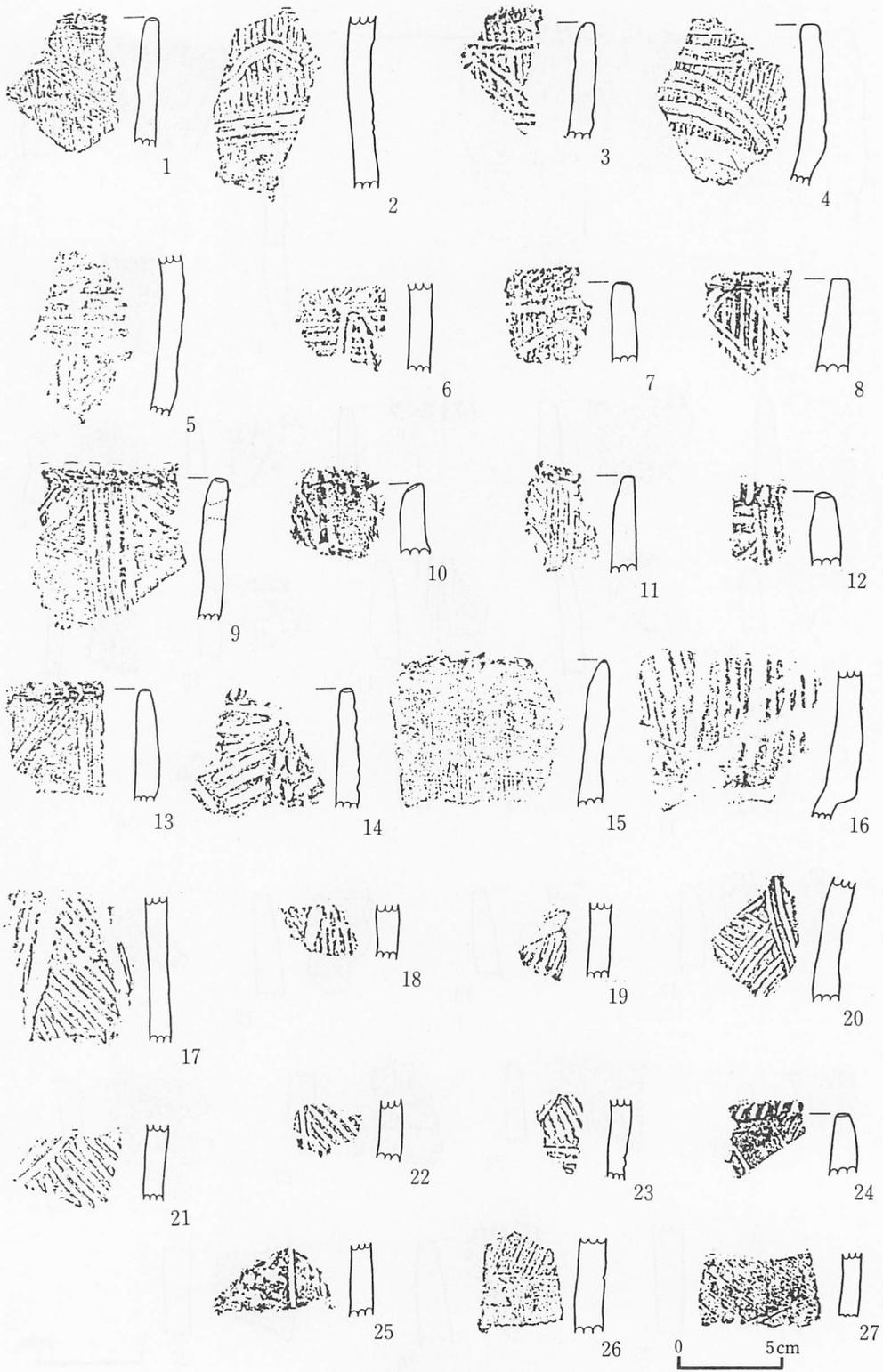
撚糸文土器 一般にいう撚糸とは、丈夫な繊維を撚って細い紐にしたものをいう。和紙を細長く切って、これを指で撚った「こより」のようなものを考えていただければよい。撚糸文というのは、撚紐を二本撚合わせたものを、生乾きの土器面に押しつけて転がしてできた文様をいうのであるが、実験してみると、径一～二mmぐらいの撚糸を、指先で土器面に転がして文様をつけることは、なかなか難しく熟練した技術を必要とする。裾野市内出土の撚糸文を再現してみると、撚糸(太めの凧糸でよい)を丸い鉛筆ぐらいの太さの棒に巻きつけて、それを土器面(粘土の平らな面でよい)に転がして、撚糸文としたのではないかと思われるものが多い。撚糸を棒に巻きつけるとき、密に巻きつけたり、あいだをとって巻きつけると、変化のある撚糸文ができる。撚糸文は、縄文時代のそれぞれの時期の土器にあって、文様の一手段として施文されているが、撚糸文土器というのは、撚糸文だけで文様を構成しているものをいう。縄文時代早期の前半を代表する土器で、南関東を中心にして、この地方まで分布している。



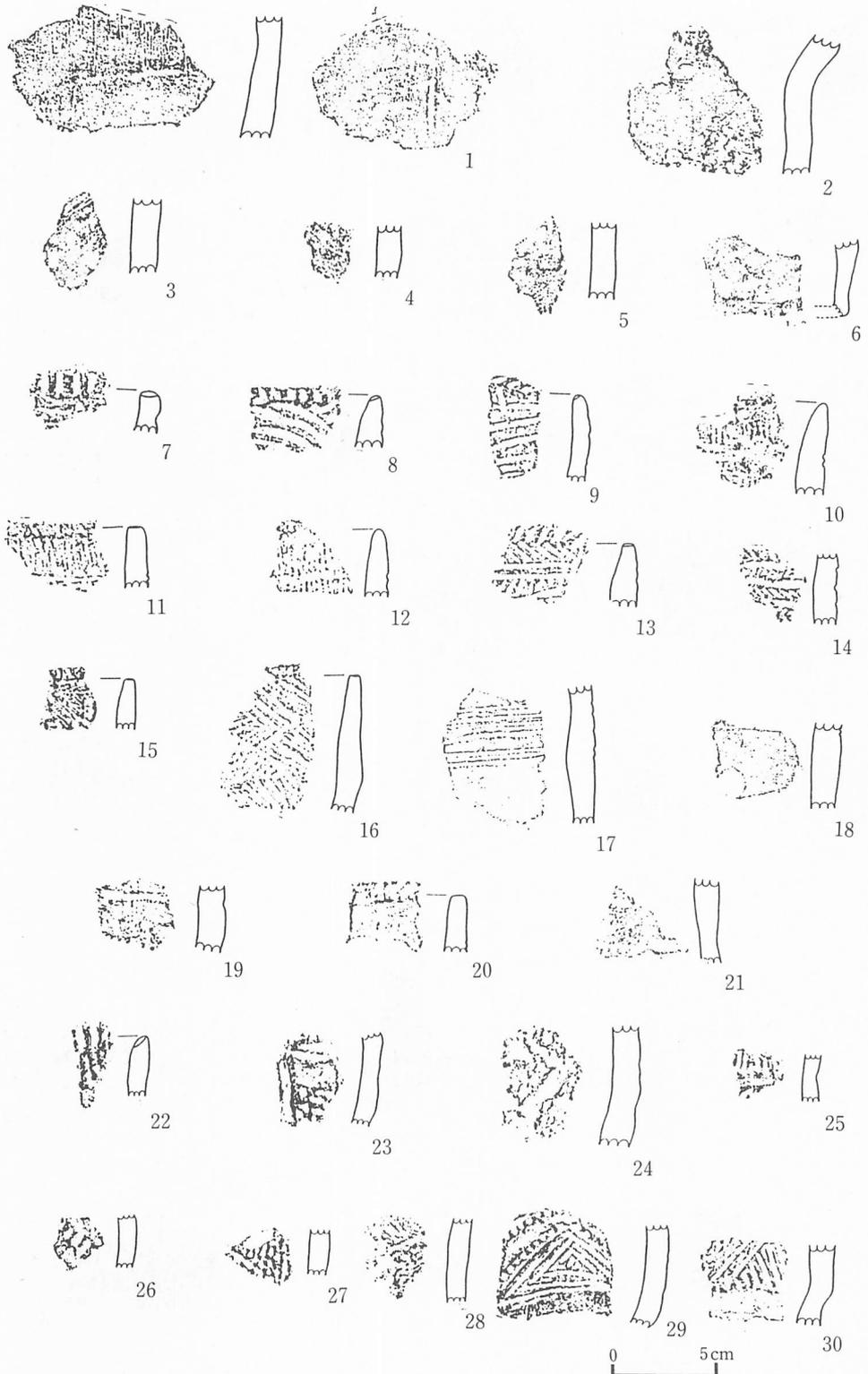
第1圖 内野山I遺跡出土土器拓影



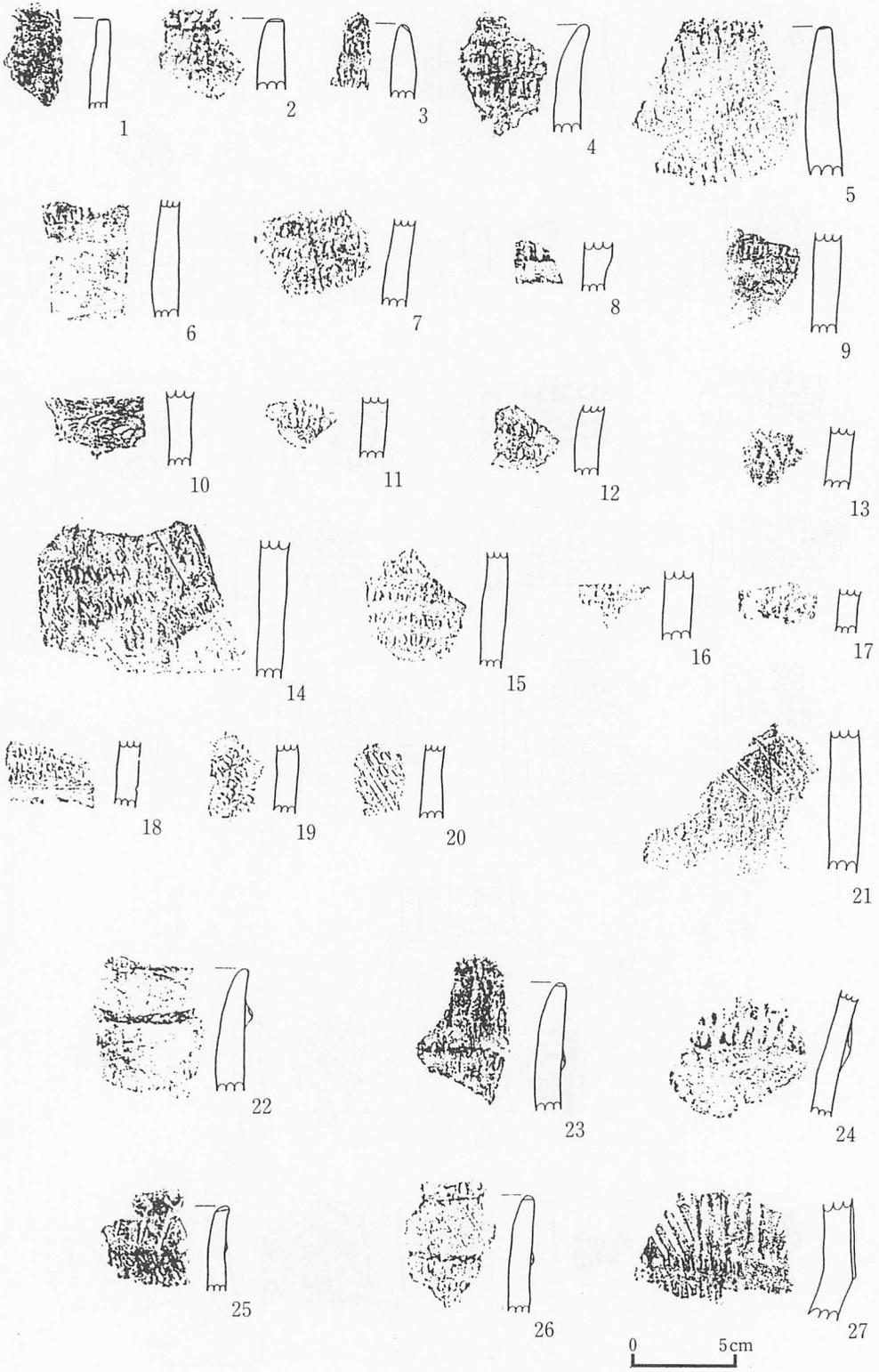
第2図 内野山I遺跡出土土器拓影



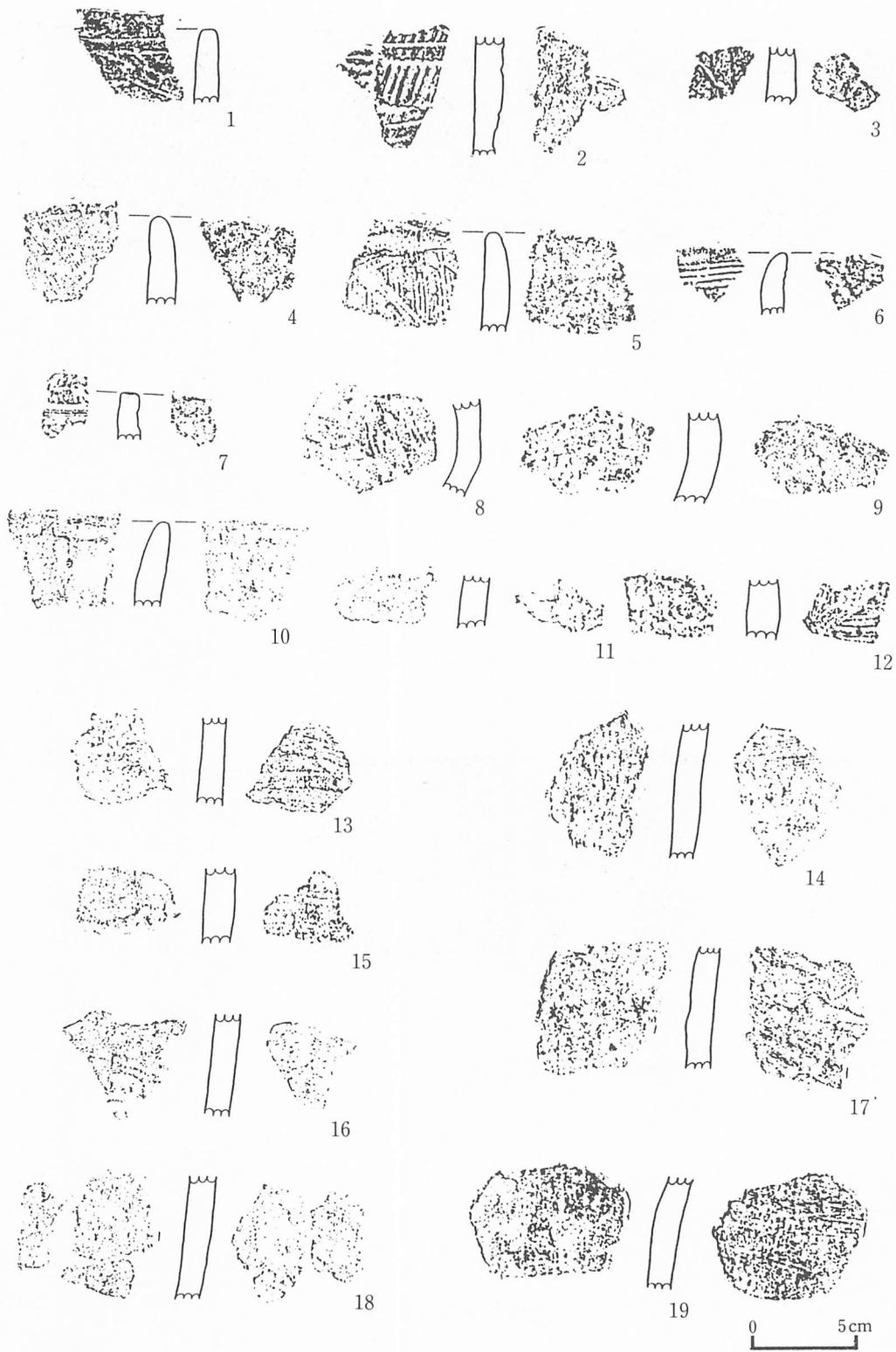
第3图 内野山I遺跡出土土器拓影



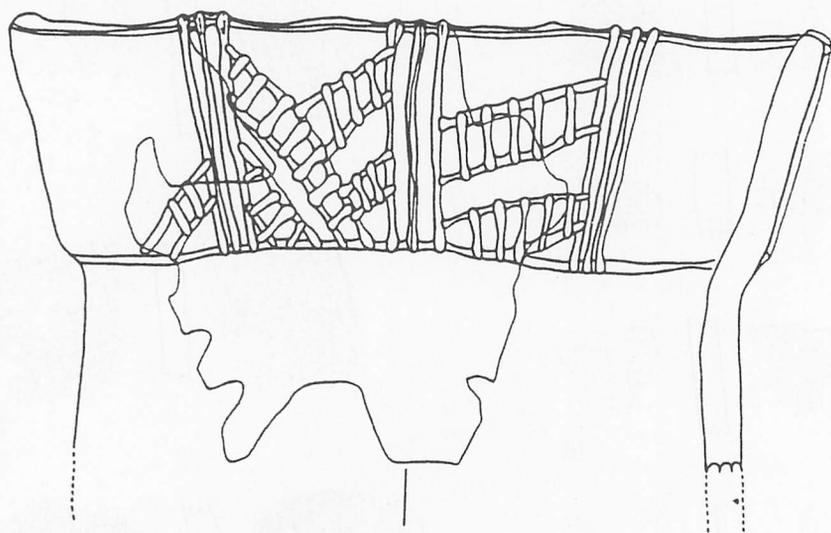
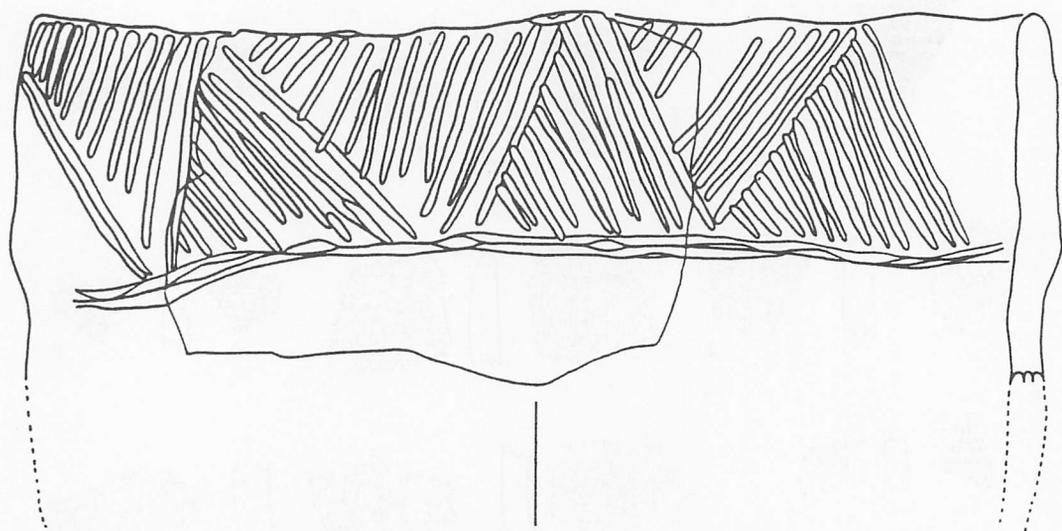
第4図 内野山 I 遺跡出土土器拓影



第5図 内野山 I 遺跡出土土器拓影

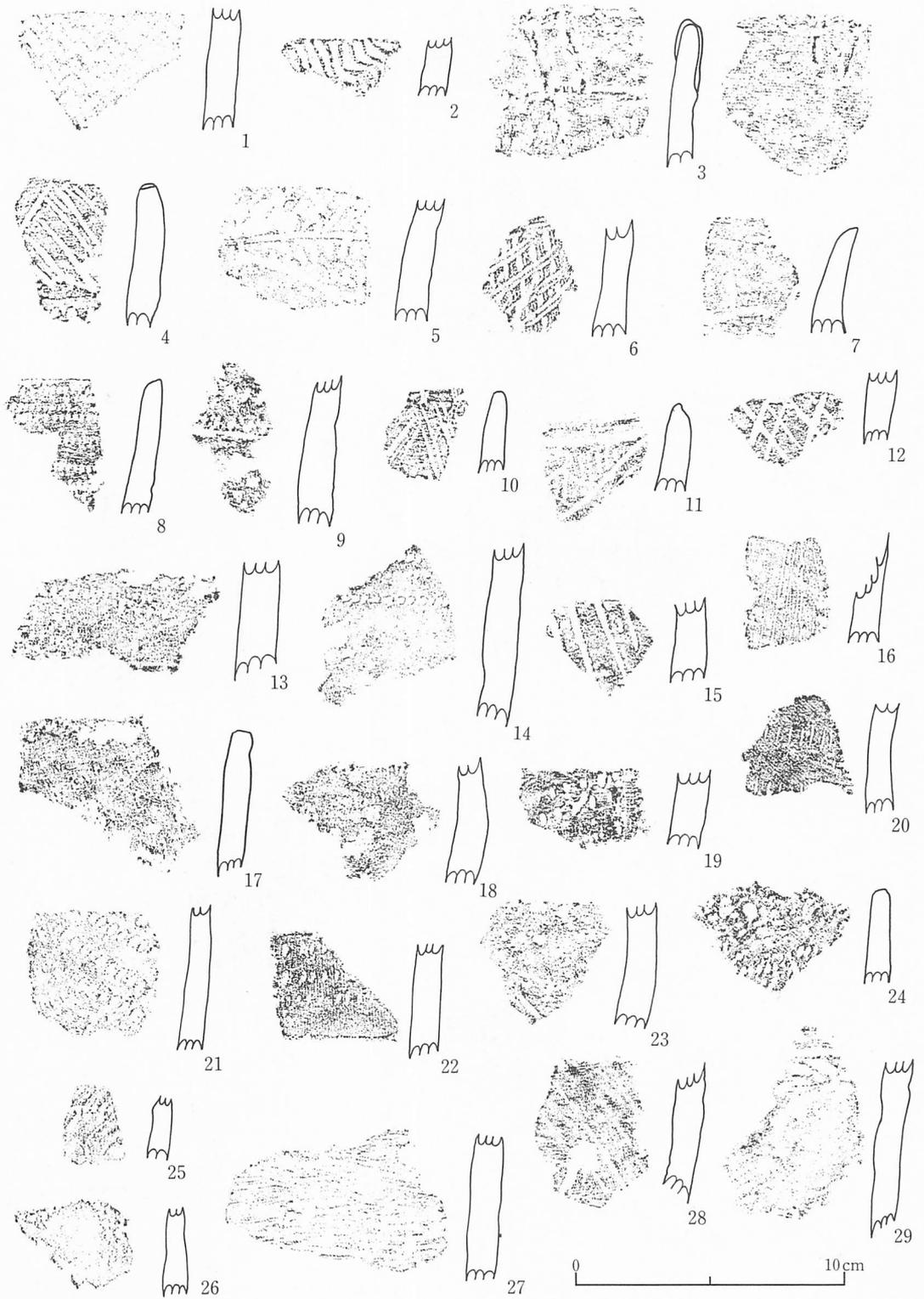


第6図 内野山 I 遺跡出土土器拓影

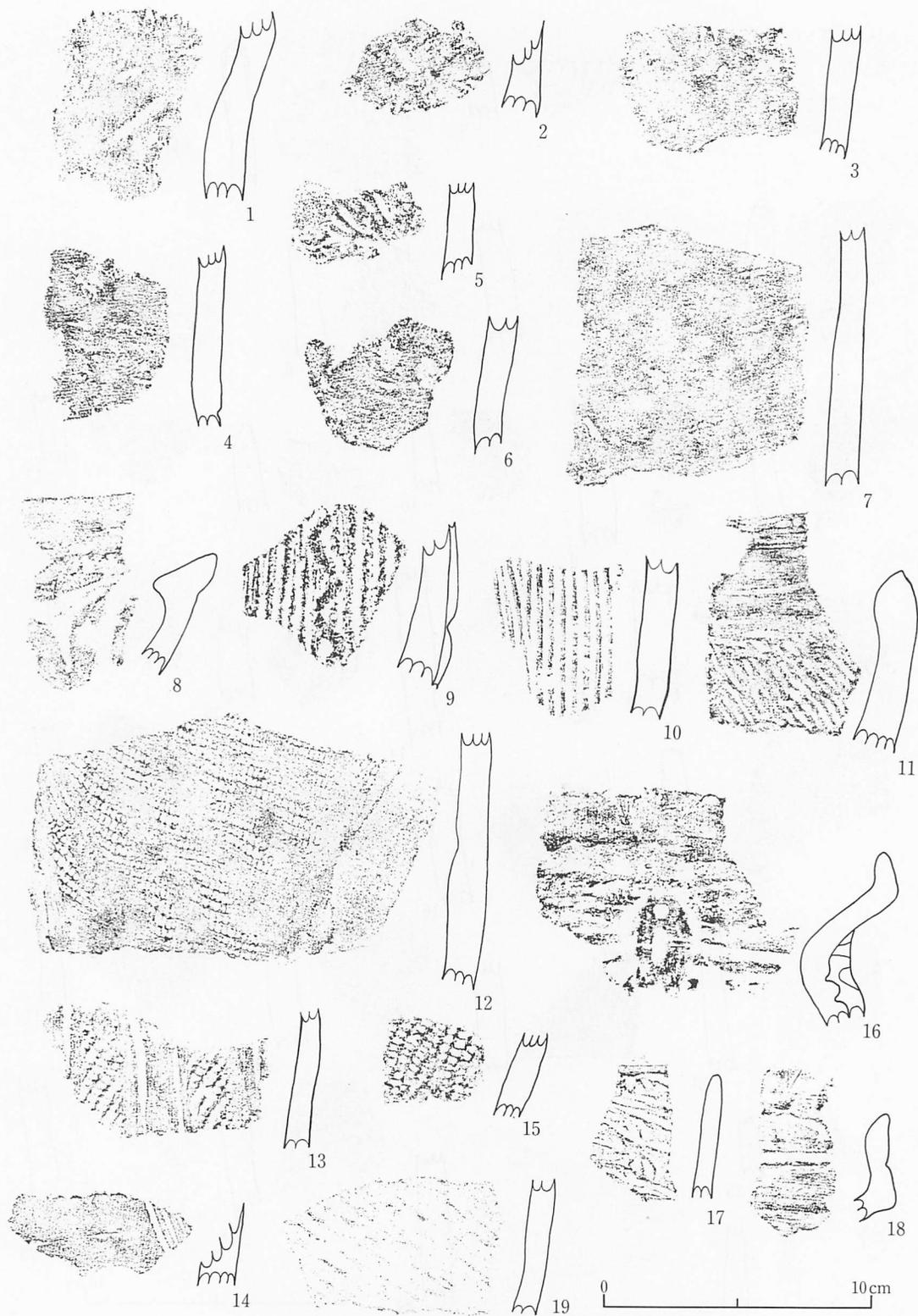


0 5cm

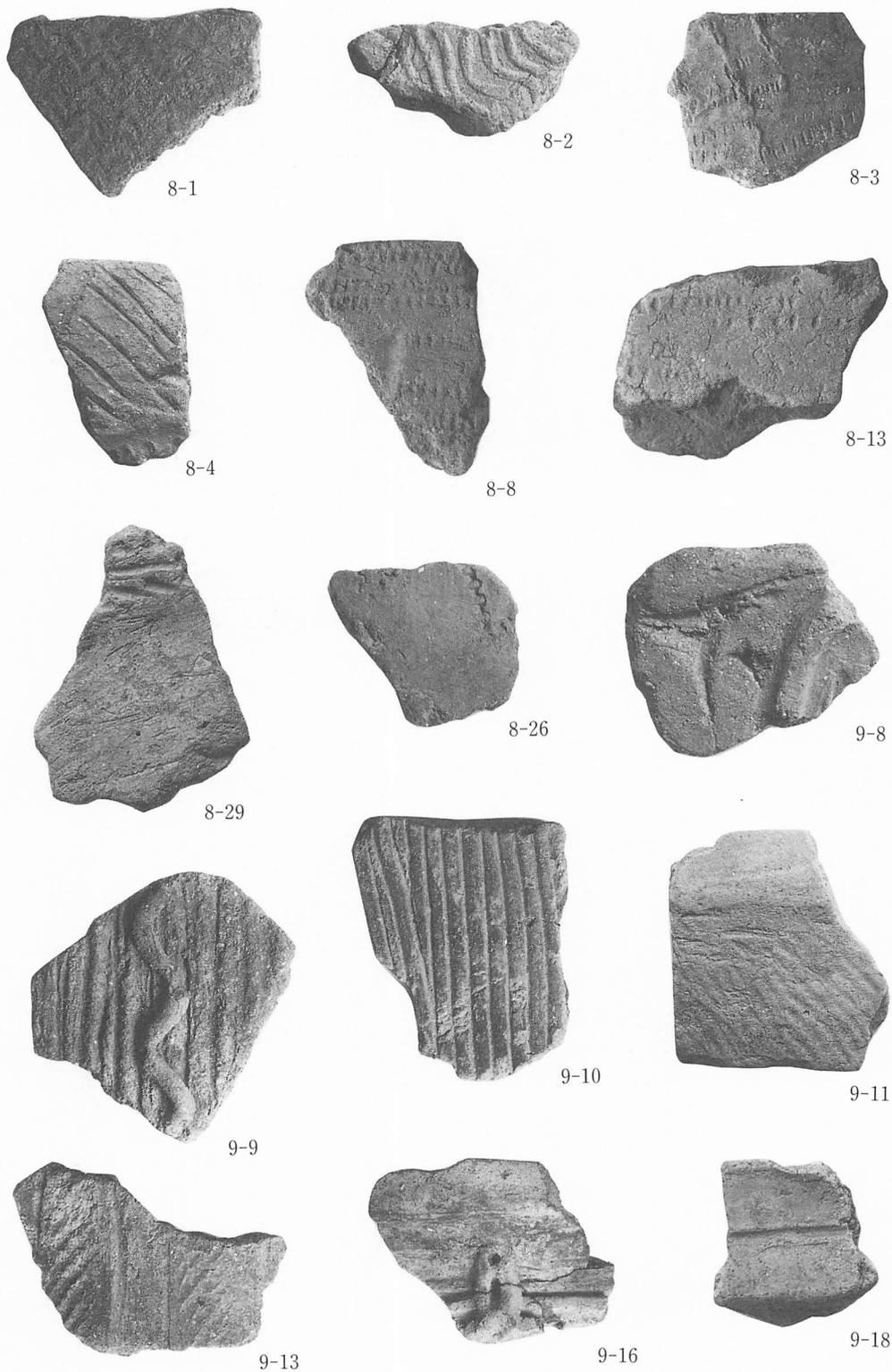
第7図 内野山 I 遺跡出土土器復原実測図



第8図 内野山I遺跡表面採集の土器拓影



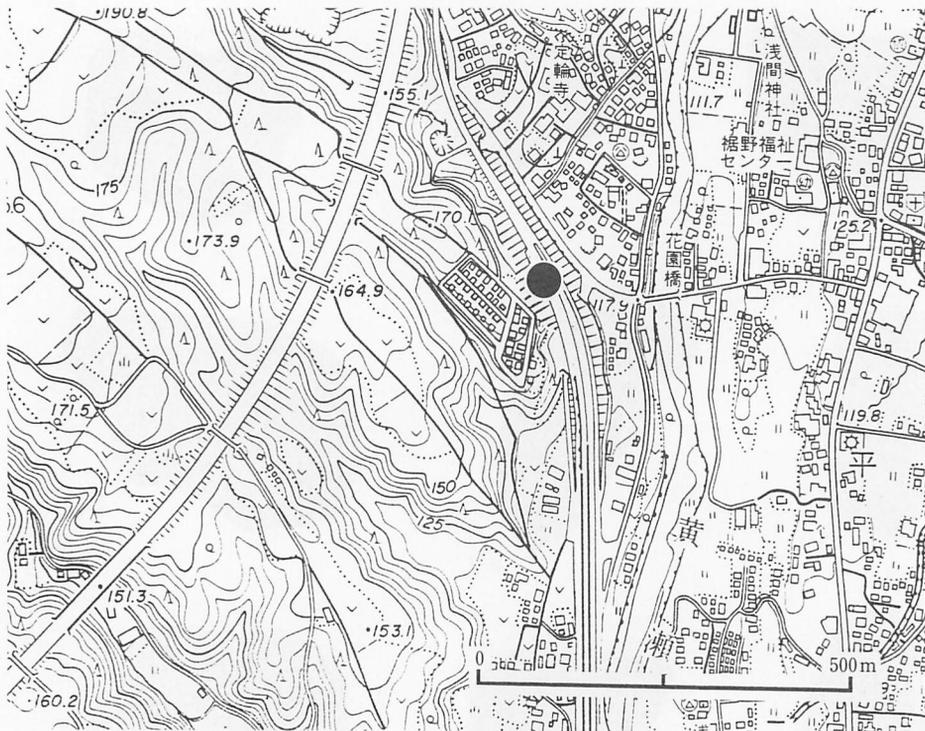
第9図 内野山 I 遺跡表面採集の土器拓影



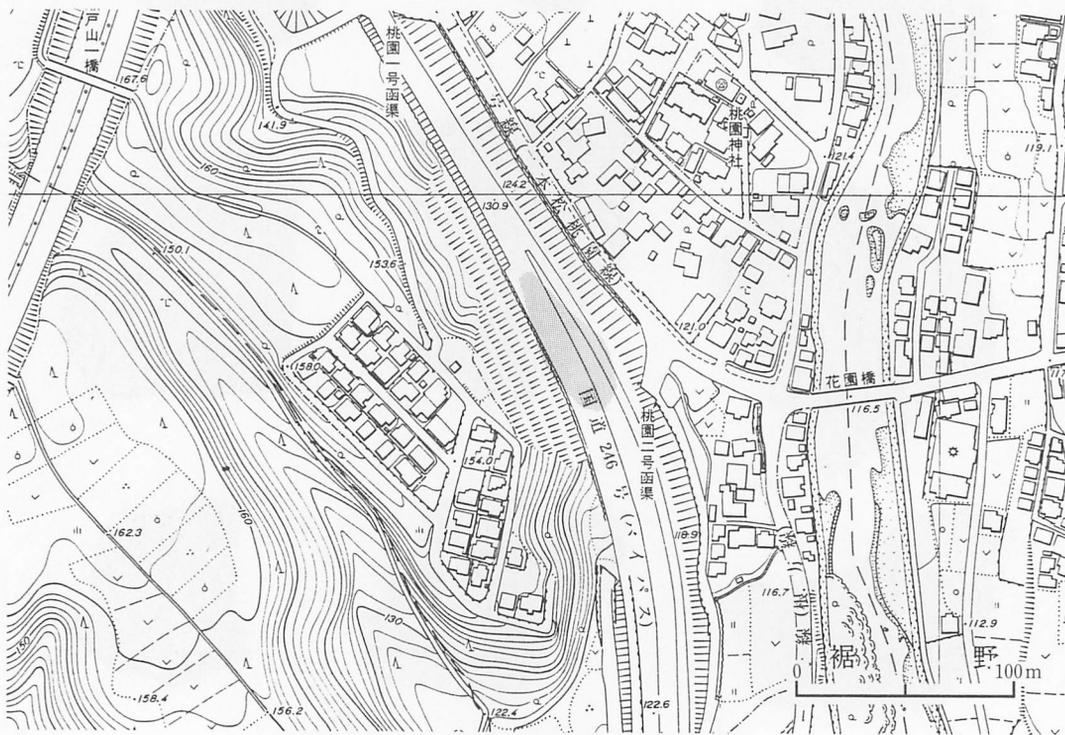
図版1 内野山I遺跡表面採集土器

桃園入ノ洞遺跡
ももぞのいりのほら

所在地 裾野市桃園字入ノ洞



位置図



遺跡範囲図

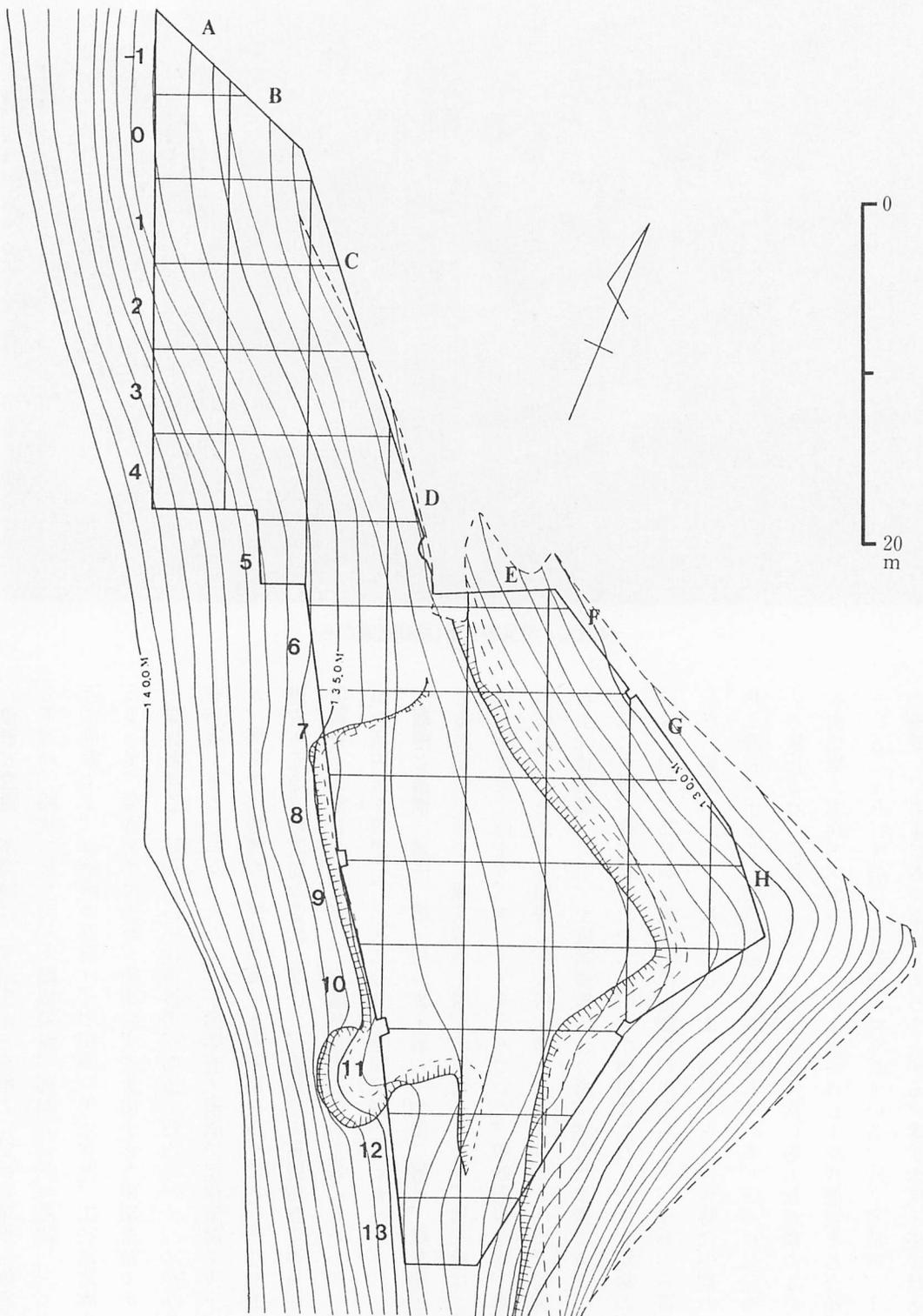


桃園入ノ洞遺跡全景(尾畑遺跡から)

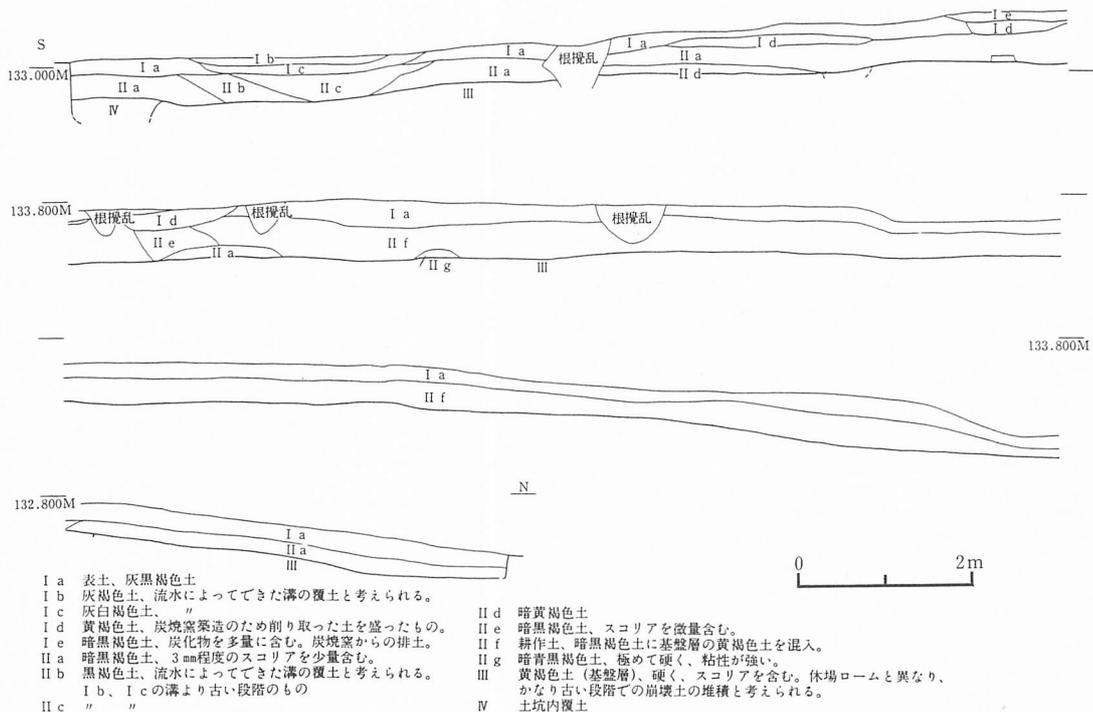
位置と立地 本遺跡は、愛鷹山から東南方に延びた尾根末端部分から下方の、棚状に張り出した緩傾斜面、桃園入ノ洞の海拔一三二m付近に位置する。本遺跡の西南は、昭和四二年(一九六七)、住宅地造成工事によって、顔面把手付土器、硬玉製大珠を出土した尾畑遺跡である。

発見と調査 昭和五〇年代の後半、国道二四六号バイパスが本地区を通過することになったため、予備調査の段階で尾畑遺跡の東下において、縄文時代遺跡の可能性が高いとの判断から、同六〇年(一九九五)、建設省中部地方建設局の委託を受けて、静岡県と裾野市教育委員会が発掘調査を実施した。調査は、遺跡想定該当区の全域にわたって、五五mの調査区を設定し、二次に分けて全面発掘が行われた。

層序と遺構 層序 第一層の表土層の下部第二層は、暗黄褐色ないし暗黒褐色土層で、縄文時代土器片を包含しており、第三層は、黄褐色土層で硬く締まり、スコリアを含んでいた。第四層以下は、層序が不整合で、上部から崩壊した堆積土層であると判断された。遺構 集石土坑状遺構一カ所、土坑状遺構四一カ所、竪穴状遺構二カ所、溝状遺構二カ所、柱穴状のもの二〇〇余が検出された。土坑状遺構のうち17号、23号、25号から縄文時代土器片が出土したが、ほかから流れ込んだ可能性があるとされている。また28号からは、同時代中期の土器片と磨石が出土し、時期判断の資料にされている。さらに41号から焼土が検出され、炉址であろうとしている。次に竪穴状遺構の1号址から炭化物(木炭)が出土し、これを資料にして年代測定をした結果、一三三〇±八〇年前という数値が得られている。同2号址は、1号址に隣接し、関連がある遺構であろうとする。溝状遺構と竪穴状遺構に



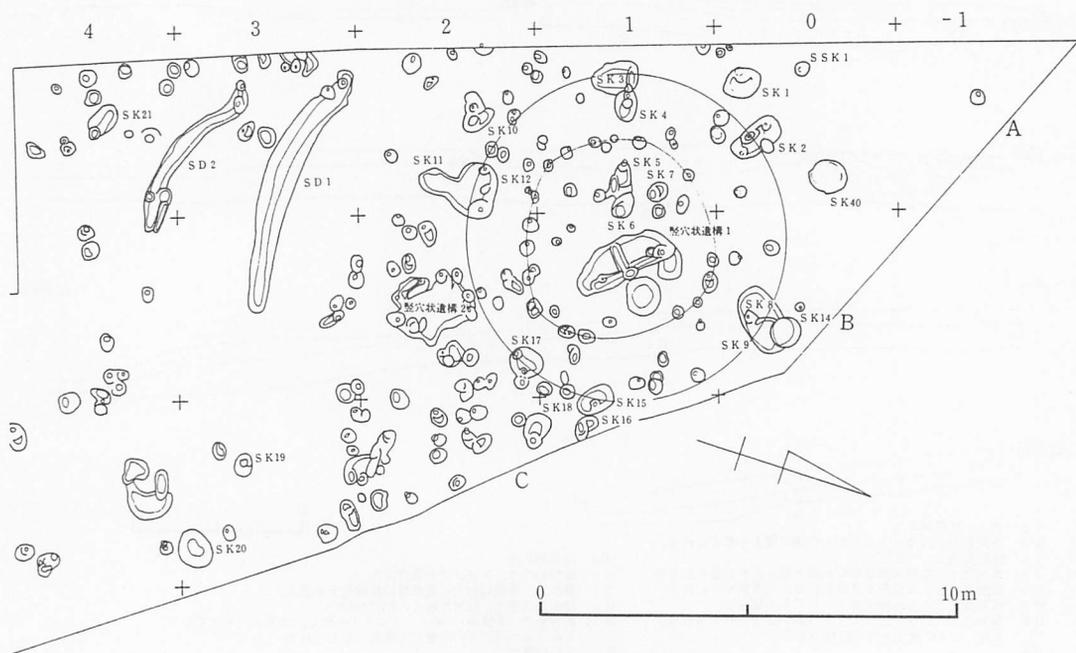
桃園入ノ洞遺跡地形図及びグリッド配置図



桃園入ノ洞遺跡土層断面実測図

関連する柱穴以外のものは、伴出遺物がないたため、時期、性格は明らかでない。

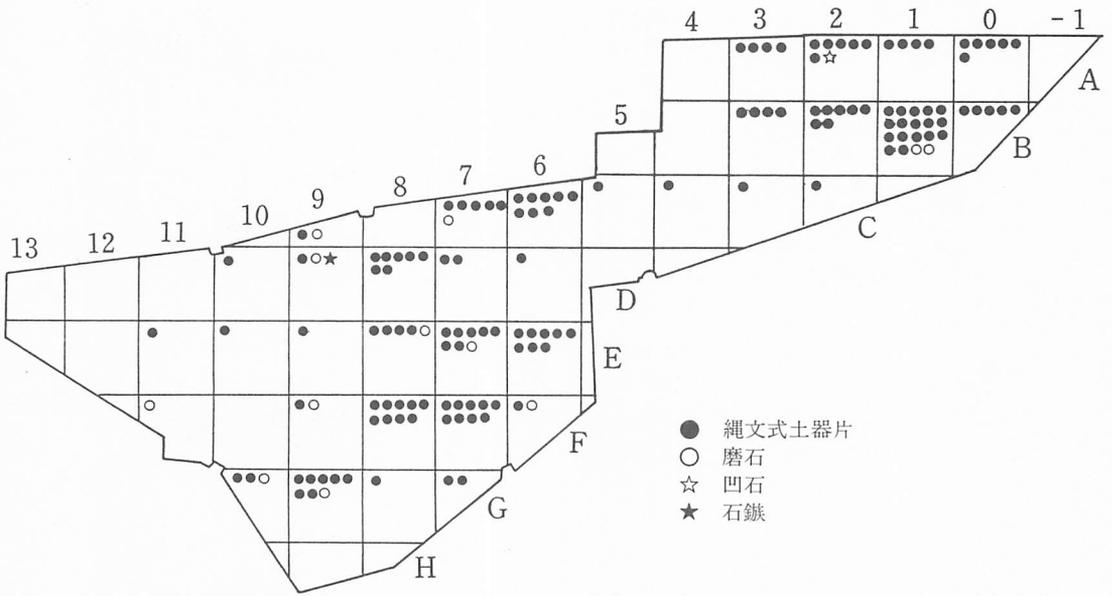
遺物 縄文土器片一四九点、磨石一二点、凹石、石鏃各一点のほか、無文素焼土器片、近世近代陶磁器片、鉄砲玉等が出土している。このうち縄文土器は、胎土、文様から四群に分けられている。第一群土器(第1図1~3) 撚糸文と山形押型文が施されるもので、撚糸土器は胎土に石英、長石、黒雲母、白色石粒を含み、硬く焼き締まる。押型土器は胎土に黒雲母と、若干の繊維を含み、焼きは良好である。第二群土器(第1図4) 薄手で、連続爪形文が施される。胎土に石英、長石、砂粒を含み、暗灰色で硬く焼き締まる。第三群土器(第1図5~13、第2図37) 隆起線文帯で文様区画を構成し、三叉文、沈線等で埋めるもの、隆起線文帯に半截した竹管で連続した刻目を施すもの、同じくヘラ状器具で刻目を施すもの、蛇頭状の突起のもの(第1図11・12)等、文様変化に富む。第四群土器(第1図14~26、第2図27~36、38~57) 14~17は、口縁部が内側に反り返るもの、18~21は、口縁部を折り返すもの、22は、口縁部に粘土を貼りつけたもの、24は、低い隆帯をめぐらすものなどで、無文の口縁部である。27~29は、半截した竹管による横位の条線に、刻目を施したもの、30~35は、粘土紐をはり付けたもの、36・38~48は、縦の沈線文を地文とした上に、隆起線文帯をつけたもの、そのほか隆起線文帯で文様構成をしたもの、縄文施文のもの等がある。以上、第一群土器は、縄文時代早期前半に属するもの、第二群土器は、同中期の初め頃、第三群土器は、同中期中葉、第四群土器は、同中期後半に属するものと思われる。



桃園入ノ洞遺跡北区遺構全体図



桃園入ノ洞遺跡北区全景（北から）



桃園入ノ洞遺跡グリッド別遺物出土状況

石器類は、第3図に示した通りで、1~12は磨石で、円形で扁平なもの、長楕円形で断面が丸いものと四角なもの、不定形なもの等があり、石質は安山岩である。

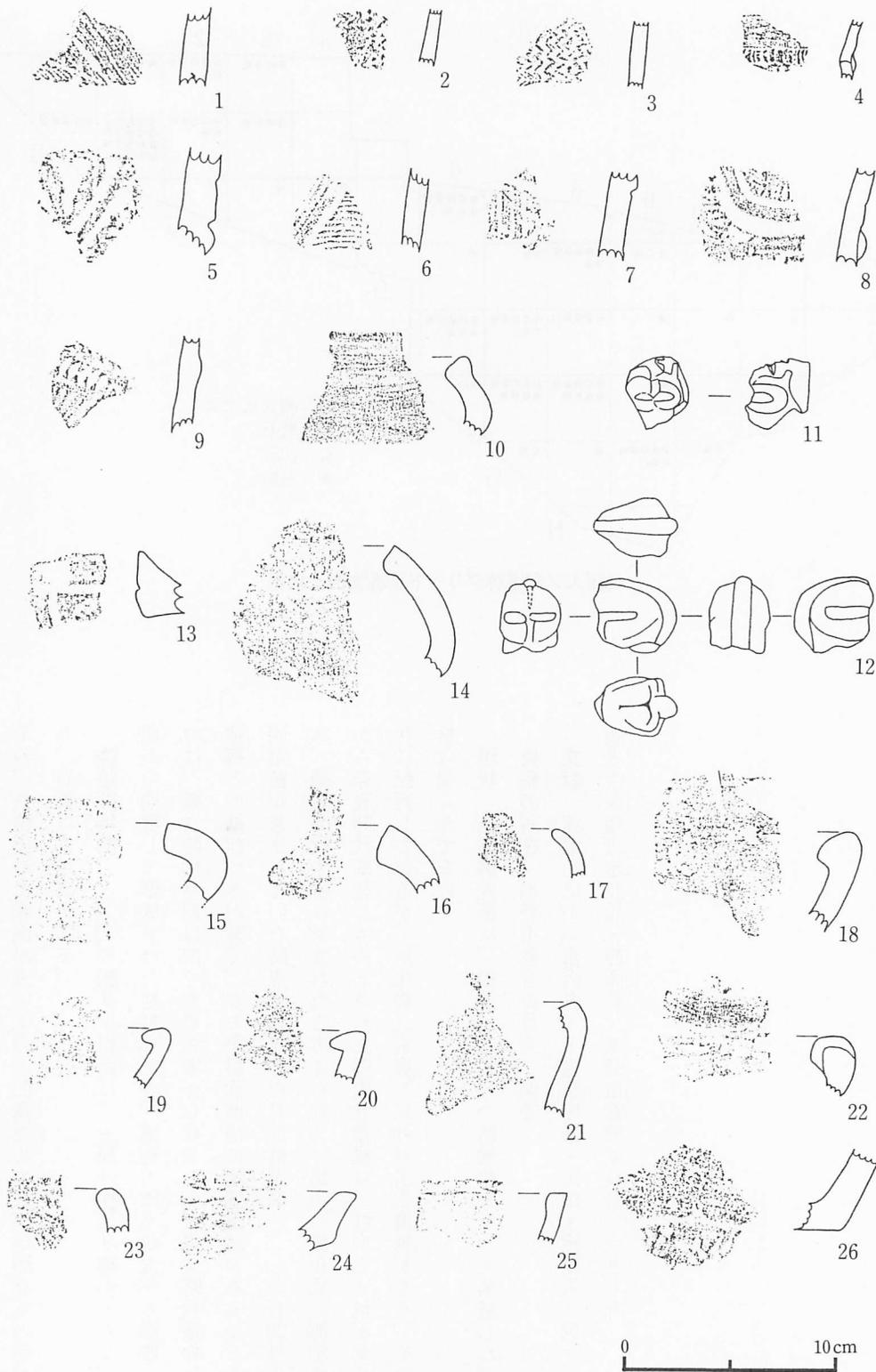
遺跡の特徴 入ノ洞の棚状平坦面は、土層の検出状態からみて、上部から崩壊して形成された地形であり、遺物の出土状況から崩壊したのは、縄文時代早期以前であると考えられている。縄文時代遺物は、遺構との結びつきが薄く、この平坦面西南に尾畑遺跡のあることから、同遺跡が営まれていた時点で転落した可能性が高い。しかし28号土坑は、縄文時代中頃に営まれたと考えられる。出土の炭化物の測定年代から奈良時代前後のものとしたされた堅穴状遺構は、柱穴と土坑が同心円状に配列しているが、炭化物(木炭)以外の出土遺物がなく、その性格は明らかでない。

現状 発掘調査後は、国道二四六号の路線敷となって消滅した。

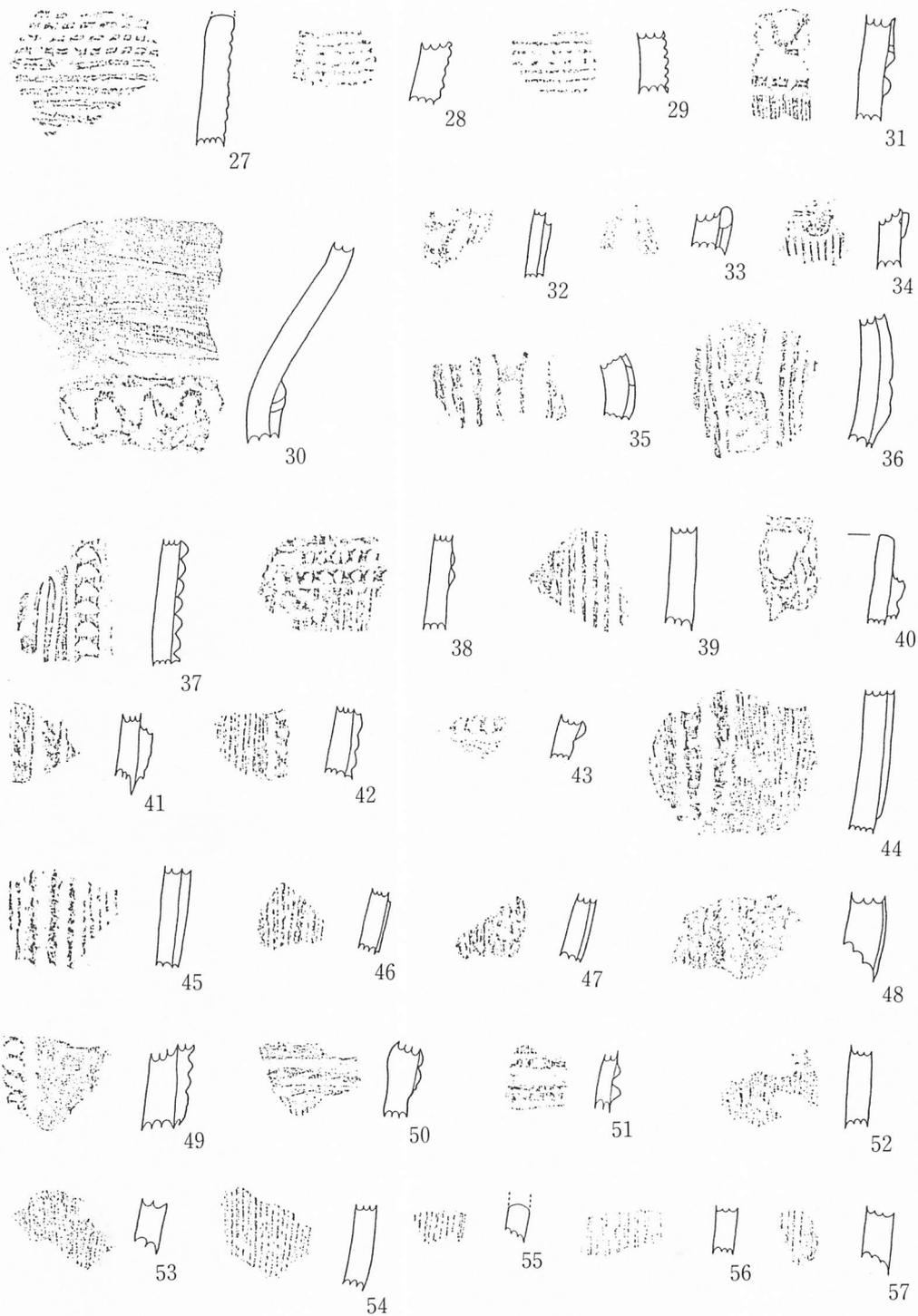
資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 渡瀬治ほか「富沢原・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞」 建

設省中部地方建設局・静岡県・裾野市教育委員会 一九八九

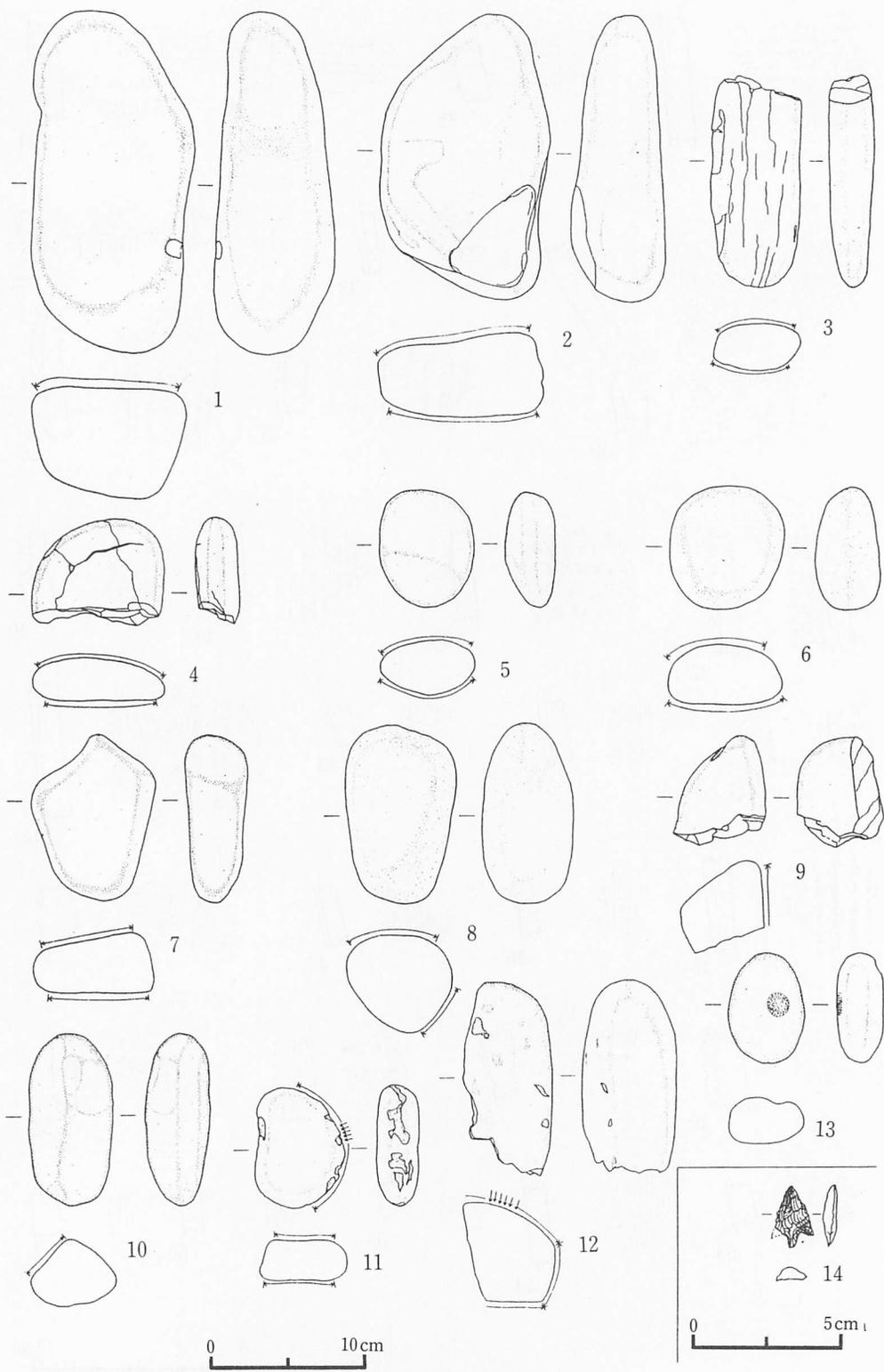


第1图 桃園入ノ洞遺跡出土土器拓影

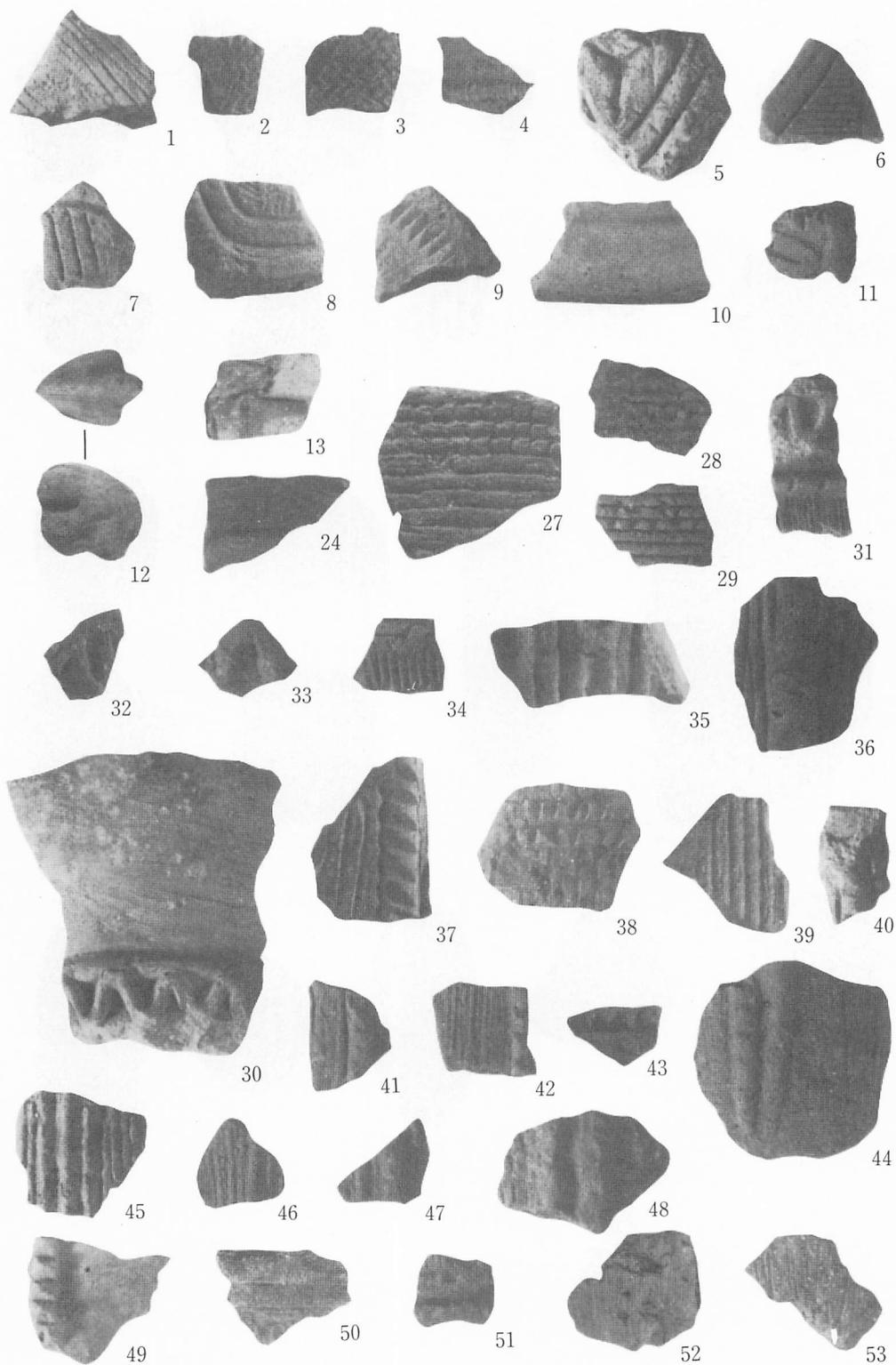


0 10cm

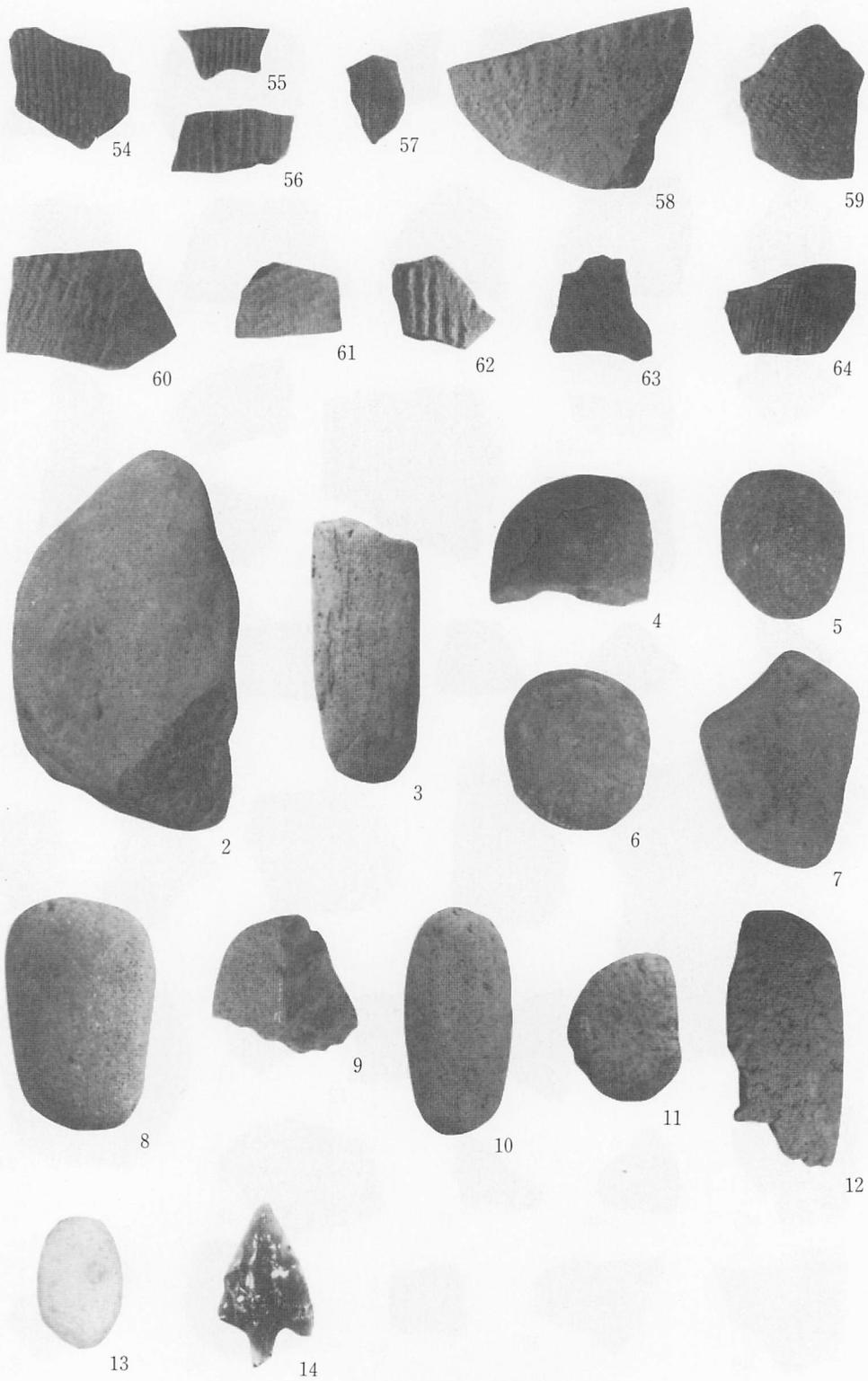
第2図 桃園入ノ洞遺跡出土土器拓影



第3図 桃園入ノ洞遺跡出土石器実測図



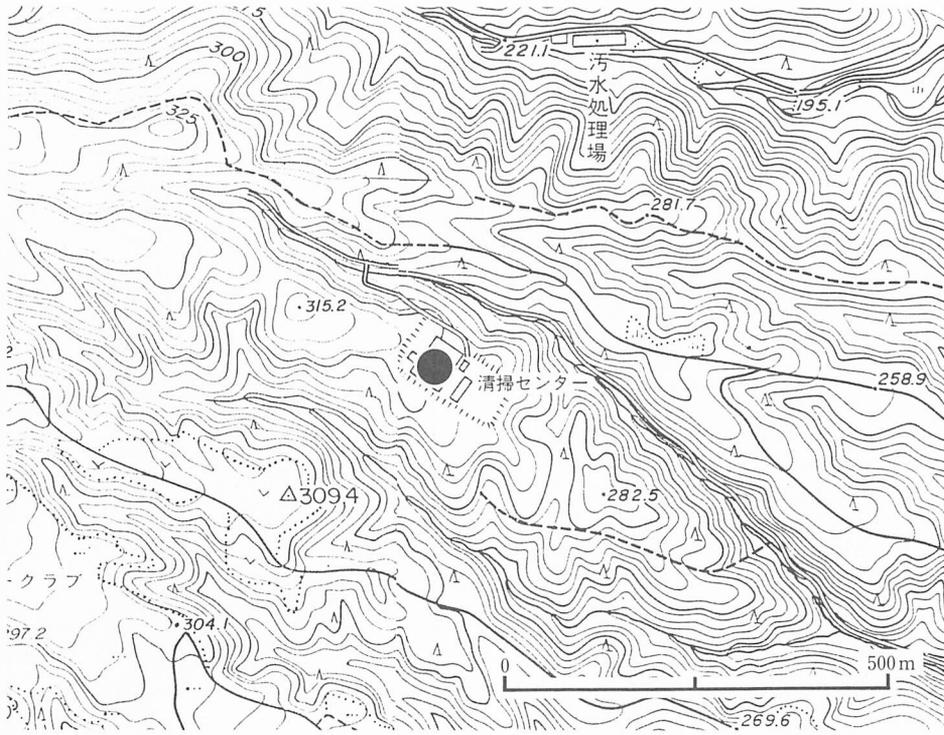
図版1 桃園入ノ洞遺跡出土土器



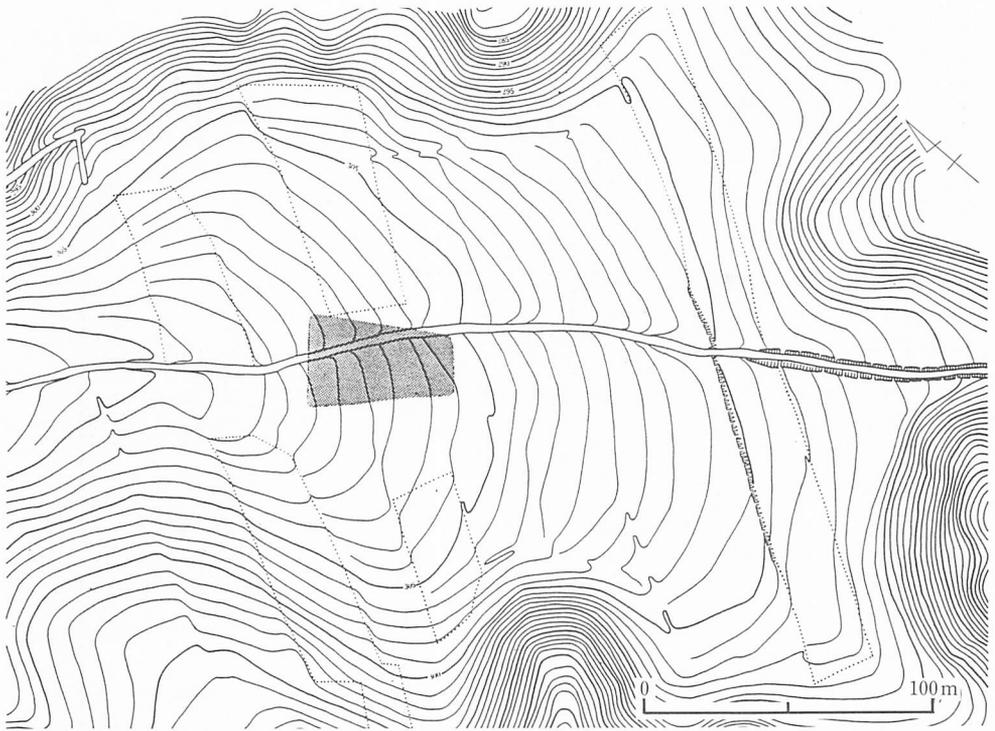
図版2 桃園入ノ洞遺跡出土土器・石器

なかはた
中畑遺跡

所在地 裾野市大畑字中畑



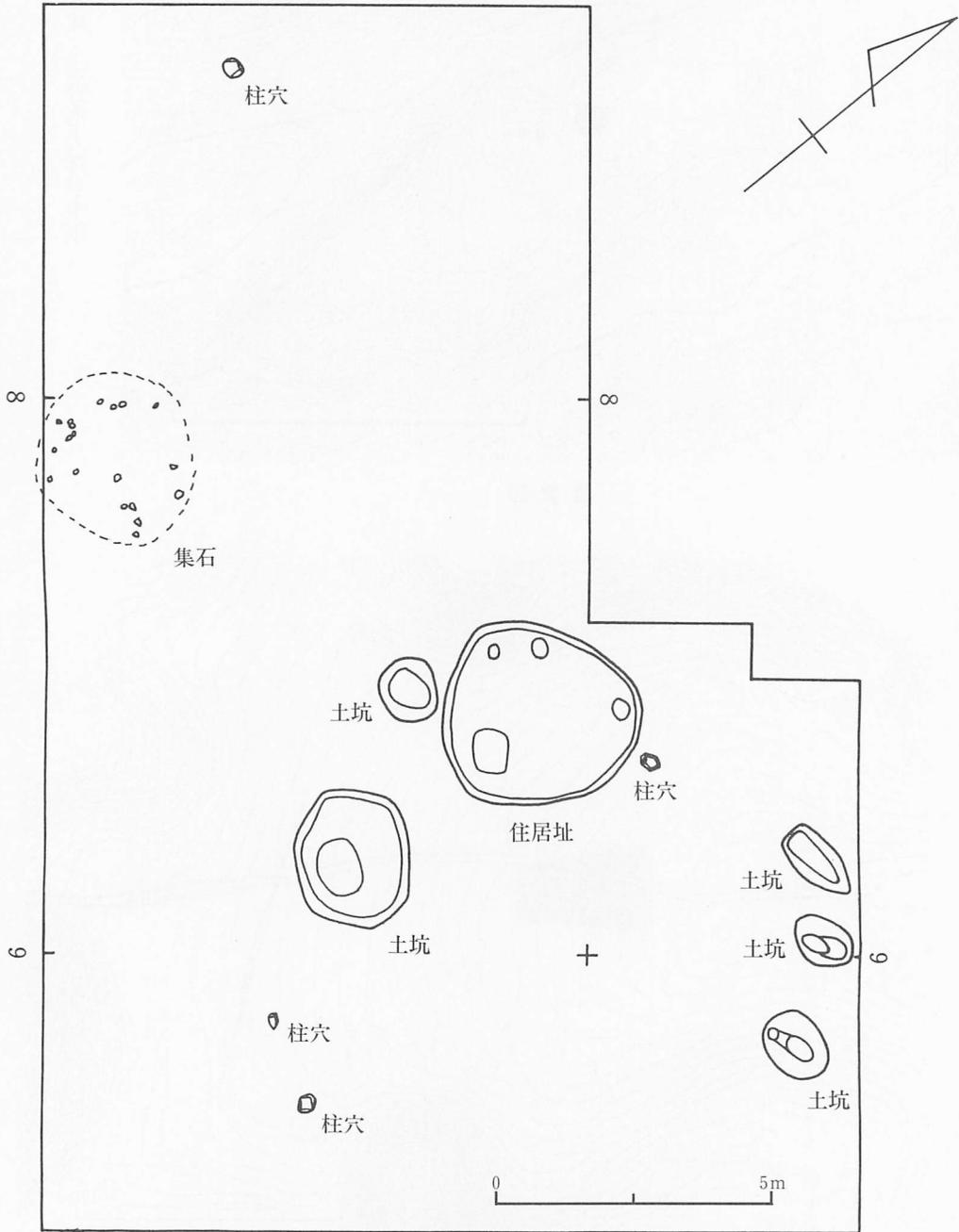
位置図



遺跡範囲図

7 T

J T



中畑遺跡発掘遺構図

位置と立地 本遺跡は、愛鷹山から東へ延びる尾根丘陵の稜部平坦面の、海拔三〇六m付近のところに位置する。この丘陵の南北には、縄文時代早期の燃糸文土器を出土した千福小杉平第二遺跡や、同早期の市場平第二遺跡、細野沢遺跡があり、また早期の条痕文土器を出土した富沢内野山I遺跡が点在する。

発見と調査 裾野市清掃センター建設が、昭和六一年(一九六〇)、実施されることになり、裾野市大畑字中畑に選定されたことが、市当局から市教育委員会に連絡があった。教育委員会は現地を踏査し、予定地の遺跡確認をするため予備調査を実施した。この予備調査で、縄文時代早期後半の土器片と石器を検出したので、本調査を行い、住居址一カ所、土坑五カ所、集石遺構一カ所を検出した。

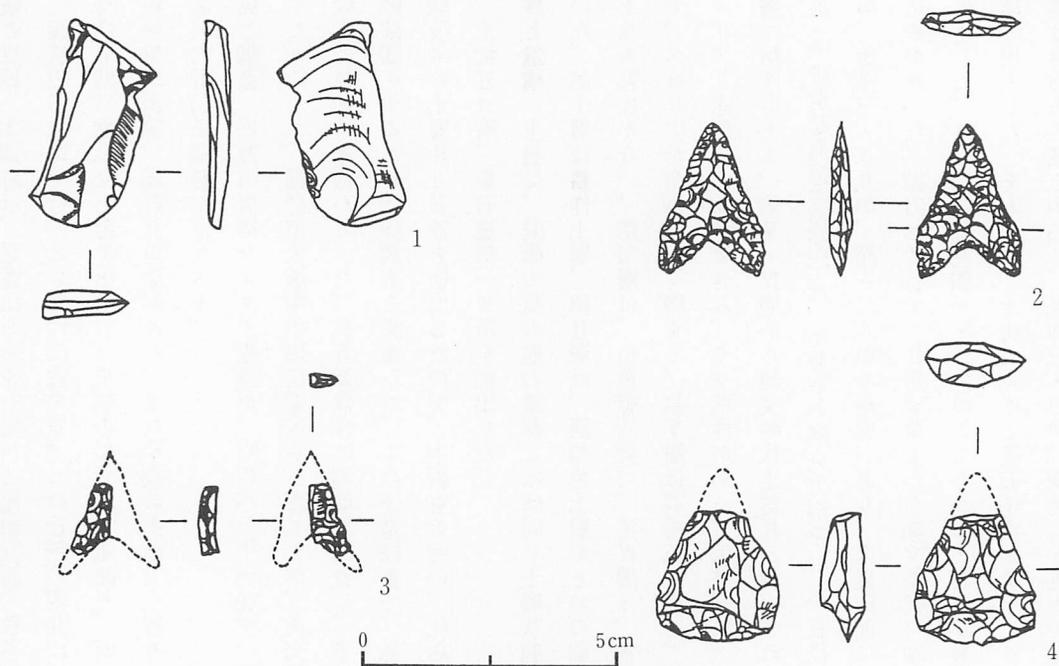
層序と遺構 土層は、愛鷹山麓の他の遺跡とほぼ同じ土層状態を示していた。第I層は耕作土層、第II層は、淡褐色土層できめの細かい砂粒を含み粘性がない。第III層は、白色軽石層で、第IV層は、茶褐色土層で、スコリアを含み、硬く締まる。第V層は茶褐色土層で、少量のスコリアと赤色のパミスを含み、やや粘性がある。第VI層は、暗褐色土層で粘性がある。第V・IV層から縄文時代土器片が検出された。

住居址(中畑遺跡発掘遺構図)は、不整形の隅丸方形をなし、長径三・六三m、短径三・二九m、深さ二六mの規模があり、南側床面に浅い掘り込みがあった。掘方は皿状で、住居址直上から縄文時代早期土器片が出土した。また住居址北側一・二mのところから、石皿が裏返した状態で出土した。その他に、土坑五カ所と集石遺構があったが、集石遺構は自然石五個を中心に、東西三・三m、南北二・五mの範囲に、

礫、自然石一九個を配している。礫はこぶし大であった。この集石内に縄文時代早期土器片二点が検出された。

遺物 石器は、ナイフ形石器一点、石鏃二点、不定形石器一点、磨石四点、石皿五点、また予備調査で、石鏃一点、磨石三点、石皿一点が出土している。ナイフ形石器(第1図1)は、黒曜石の剥片の片側に細かい剝離を加え刃部を作り出している。石鏃(第1図2・3)は、2・3は黒曜石製で逆りを作り出し、4は頁岩製で底辺の丸い三角形をしている。不定形石器(第2図1)は、頁岩製で、一端に表裏から細かい剝離を入れて刃部を作り出している。磨石(第2図2・3、第4図2・3)は直径5cm前後の河原石で、全体に使用痕がある。石質は安山岩である。石皿(第3図1・5、第4図4)は、中央に凹面を持つものと、全体を平坦にして使用したものがある。

土器は、文様の構成によって、七類に分けられる。第一類土器は、主な文様構成が隆帯文によるもの(第5図1、第7図1・8)で、口縁部に太い隆帯を付し、刻み目を施すもの、口縁部に比較的低い隆帯があり、刺突状の刻み目が施されるもの、口唇部に狭い隆帯を施し、刻み目を施すものに分けられる。第二類土器は、主な文様構成が沈線文系のもの(第5図2、第7図10・11)で、口縁部から下の屈曲部に幅広の沈線文を施し、地文に縄文を施すものと、屈曲部に刻み目を施すものである。第三類土器は、条痕文系の土器(第8図1・16、第6図1・3・4)で、条痕文を裏表に施すもの、条痕文が表面だけあるもの、条痕文が裏面だけにあるものに分けられる。第四類土器は、爪形文状の刺突文を施すものである(第8図16)。第五類土器は、無文土



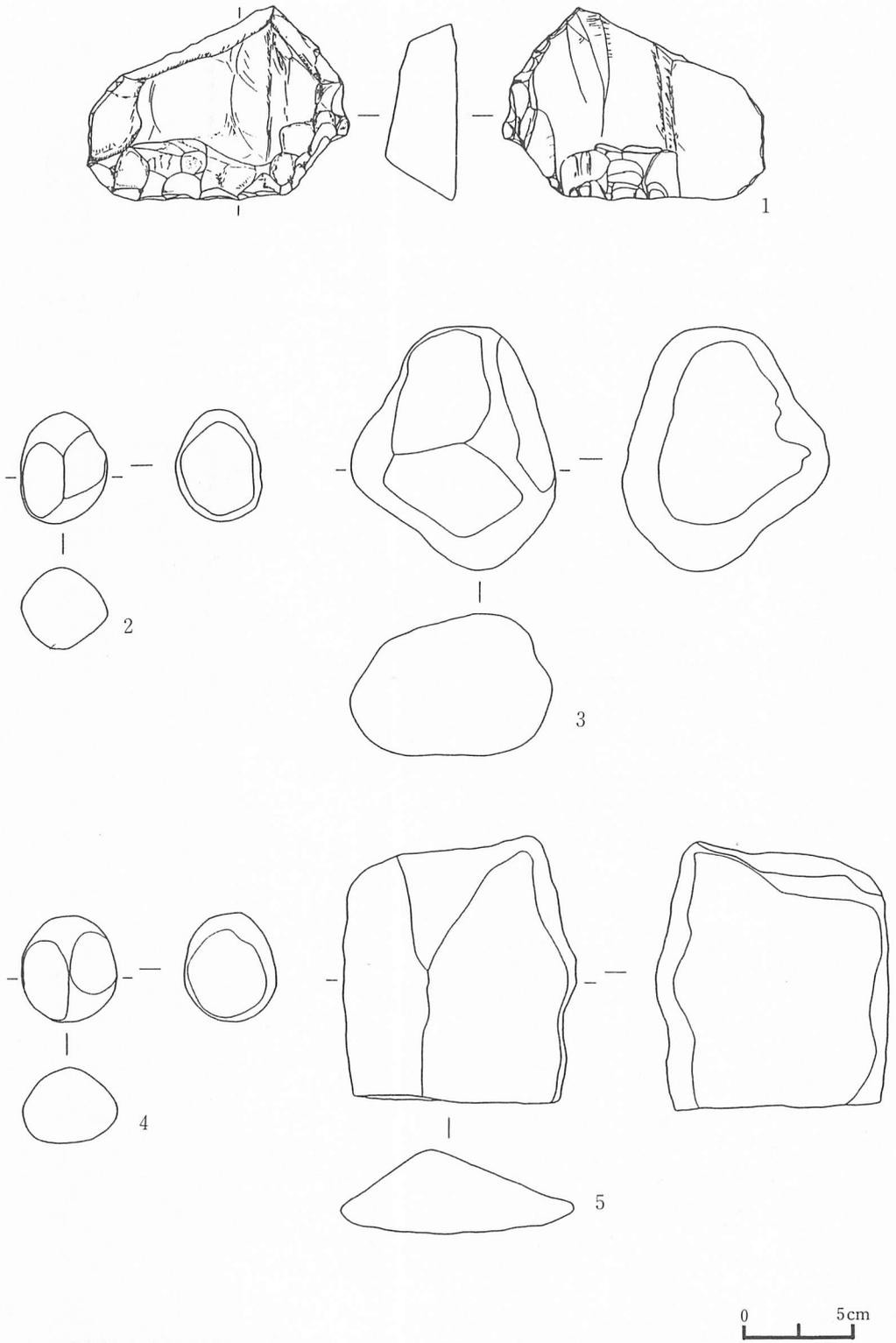
第1図 中畑遺跡出土土器実測図

器(第6図2)で、焼成が悪い。第六類土器は、薄手の土器(第9図1~8)で、細沈線文の施されるもの、条痕文が施されるもの、無文のものに分けられる。第七類土器は、無文の底部破片である(第9図9)。第9図10~19は、表面採集された土器片である。以上の土器類は、縄文時代早期末から同前期の初め頃に位置づけられると考えられる。

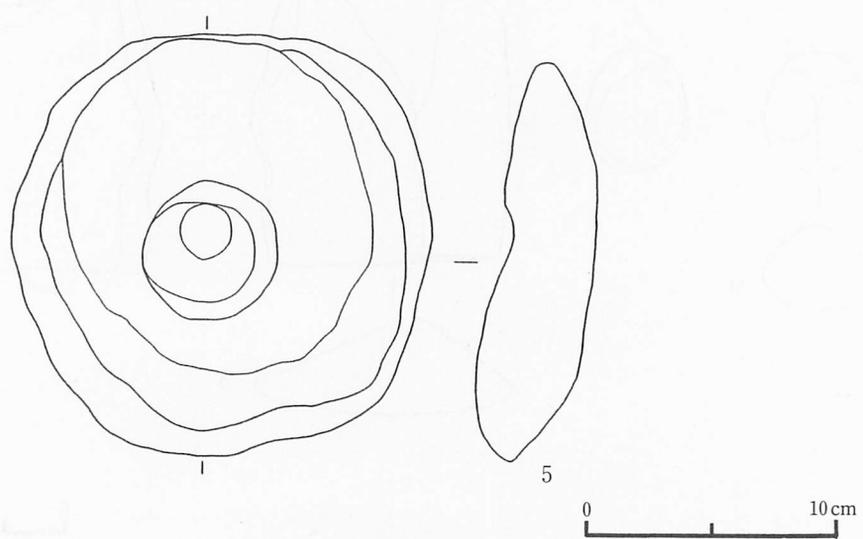
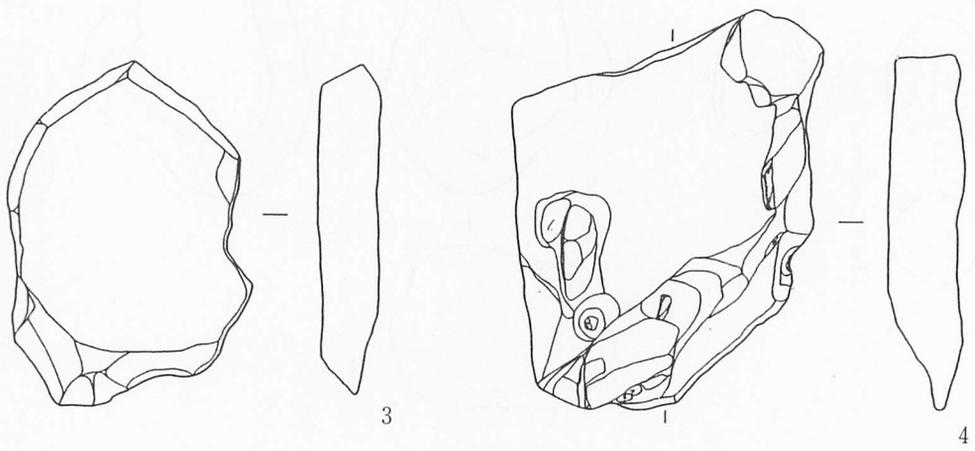
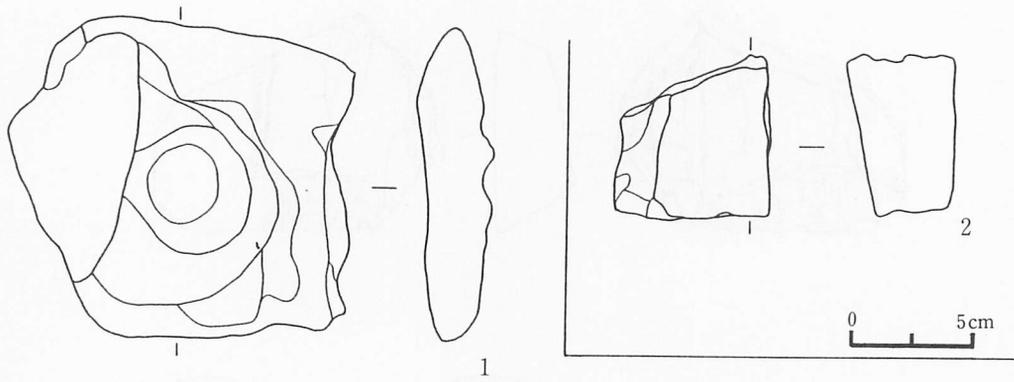
遺跡の特徴 本遺跡は、縄文時代早期末から前期初めに営まれた遺跡である。海拔三〇〇mの高所に立地されているが、北東部の裾部からの比高はわずかに一五〇m前後しかない。また遺跡の規模は小さい。現状 市の清掃センター敷地部分は消滅したが、他は山林となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

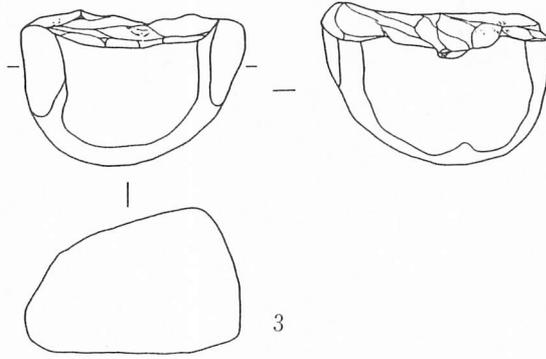
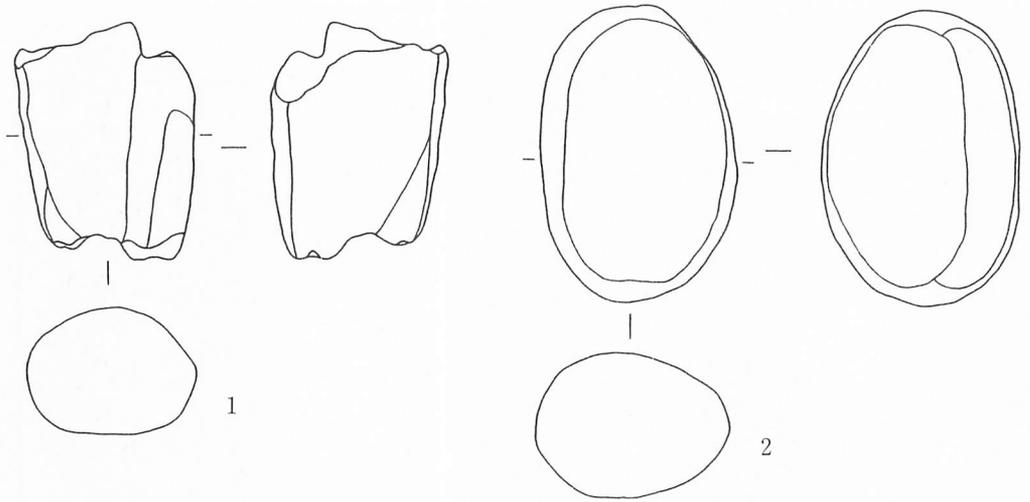
文献 井上輝夫「裾野市大畑中畑遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会 一九八六



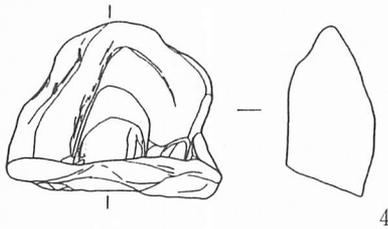
第2図 中畑遺跡出土石器実測図



第3图 中畑遺跡出土石器実測図

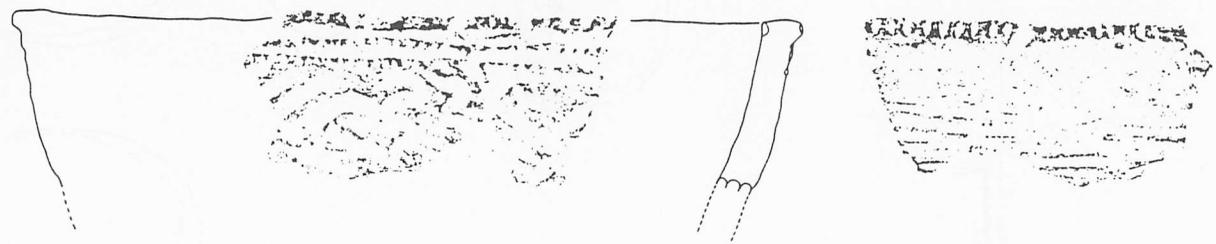
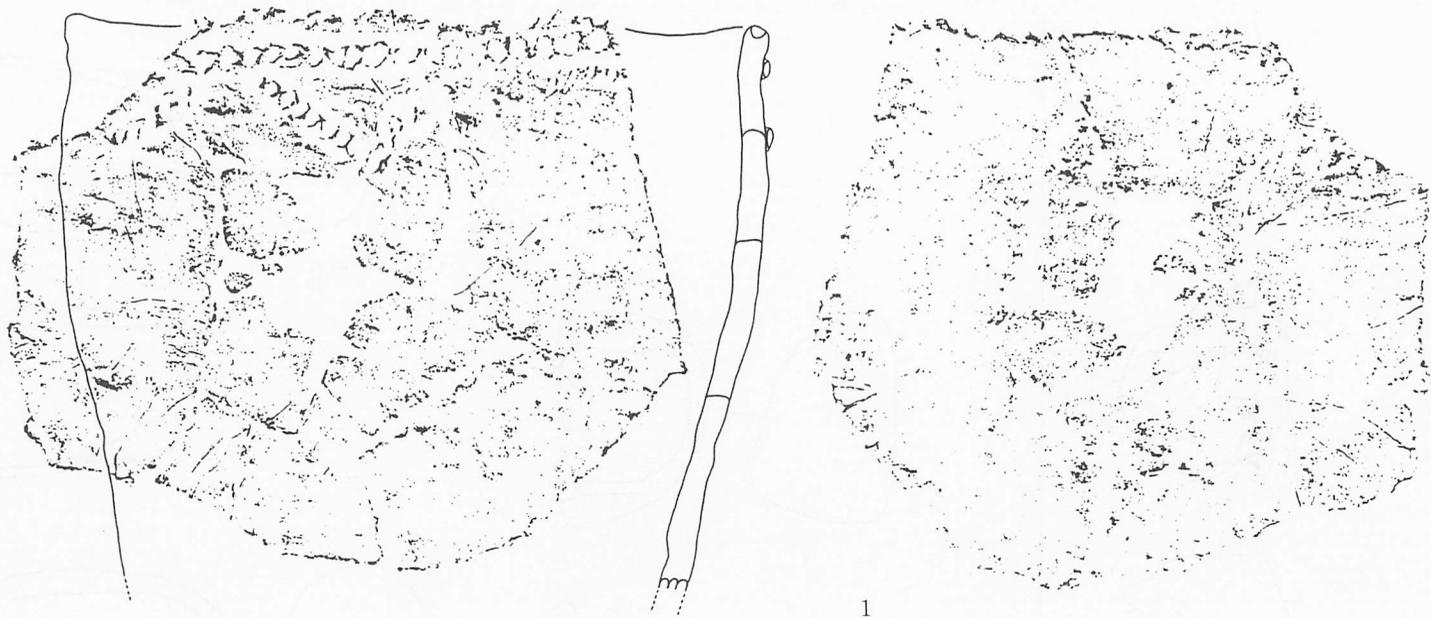


0 5cm

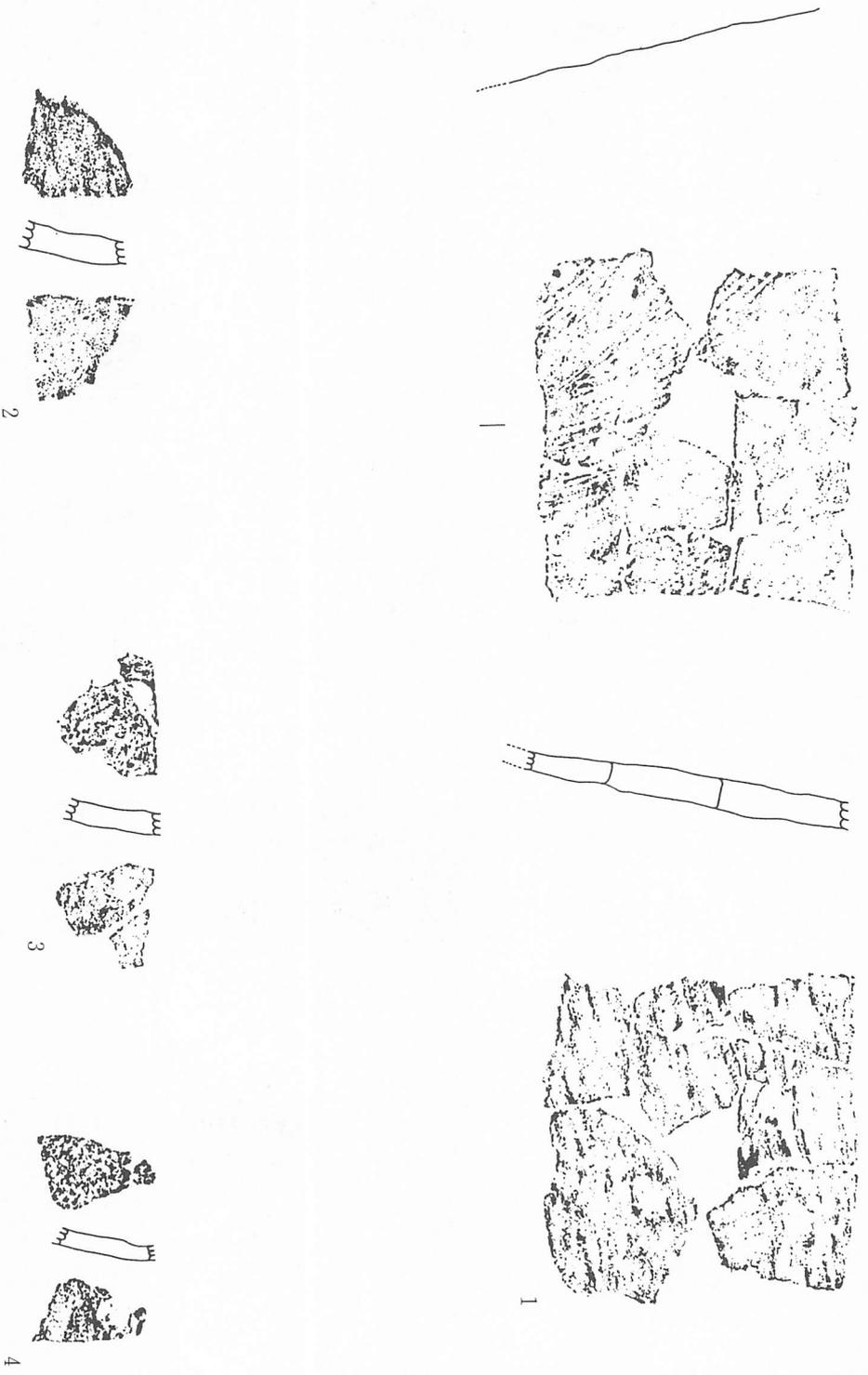


0 10cm

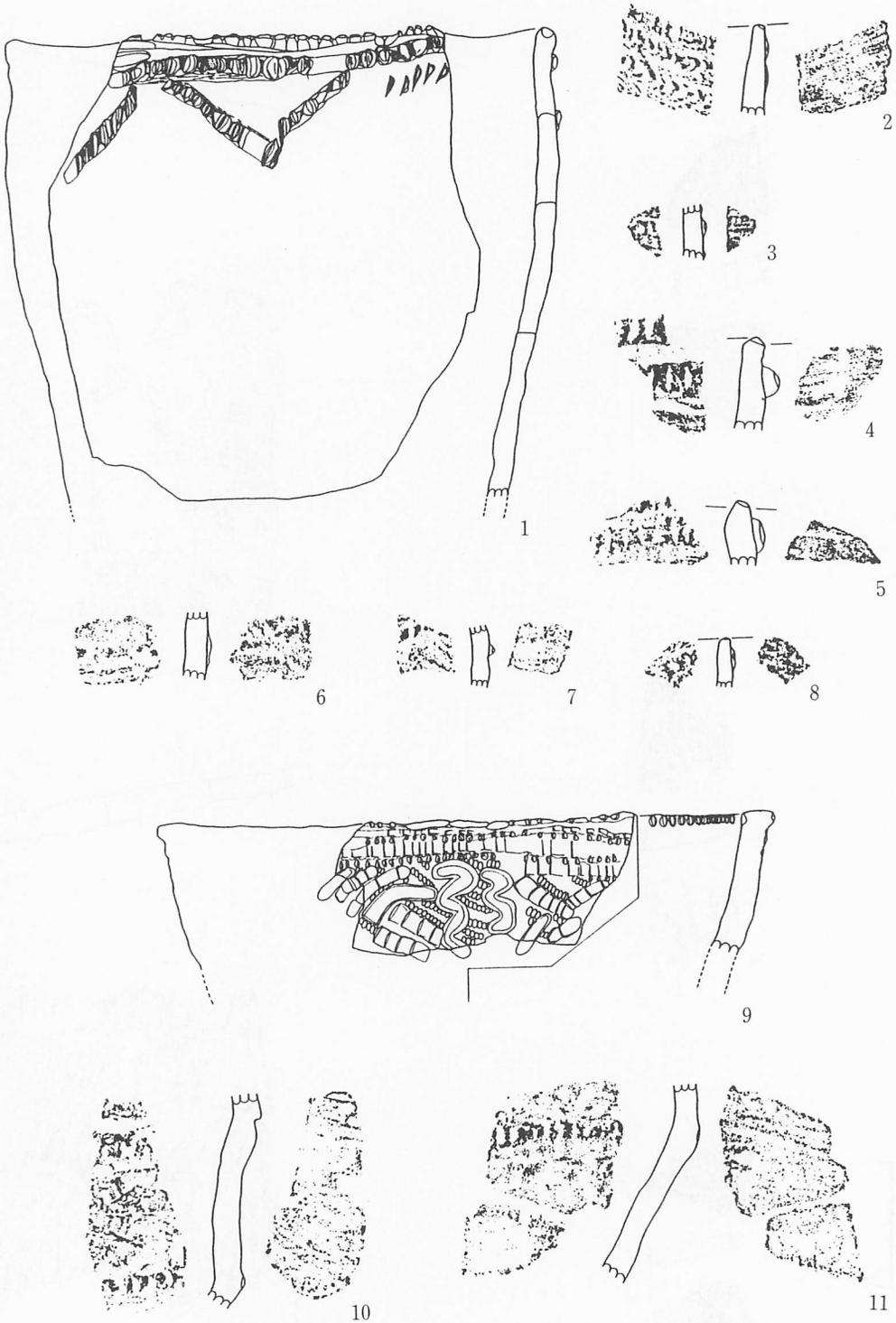
第4図 中畑遺跡出土石器実測図



第 5 图 中畑遗迹出土土器拓影

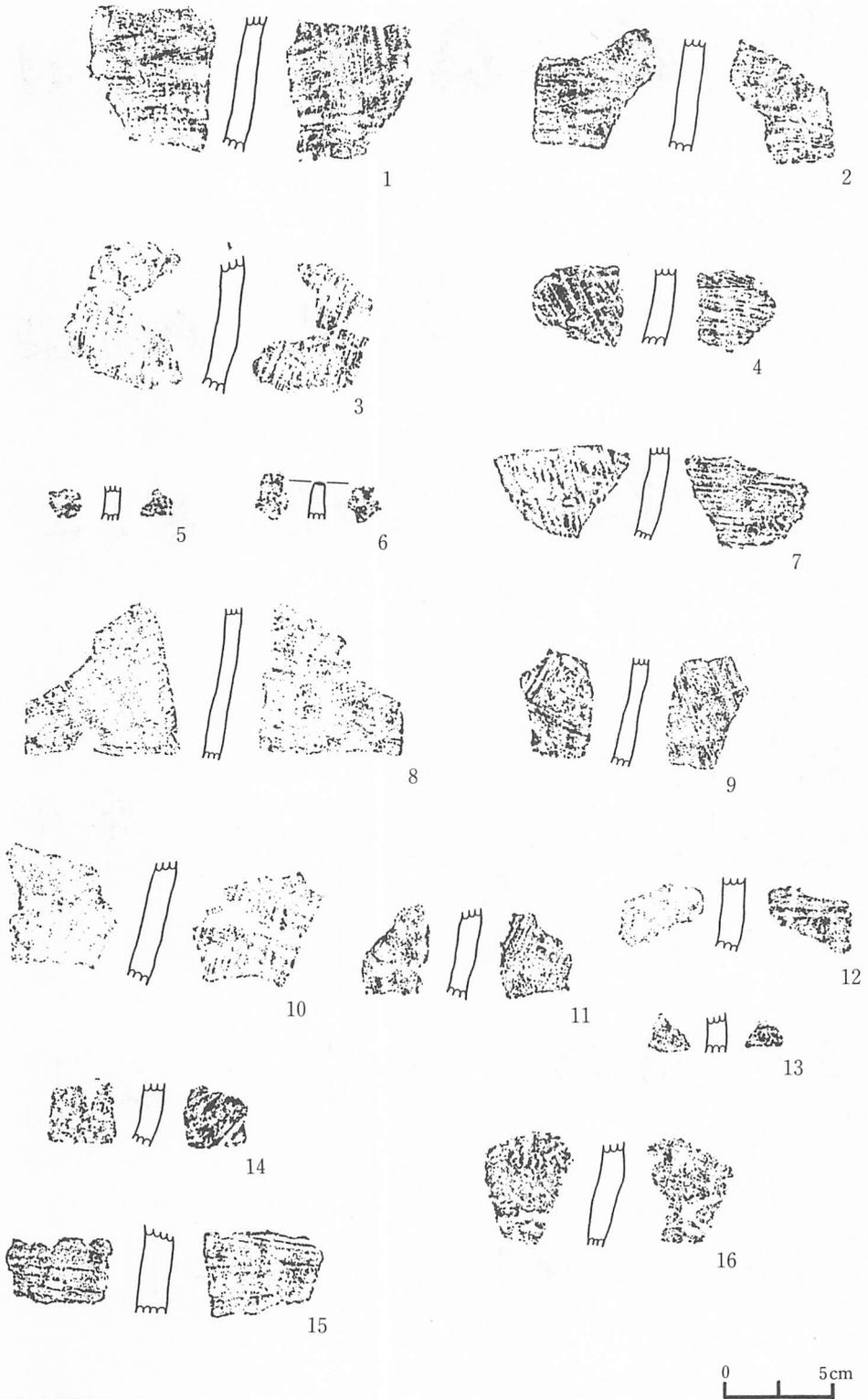


第6図 中畑遺跡出土土器拓影

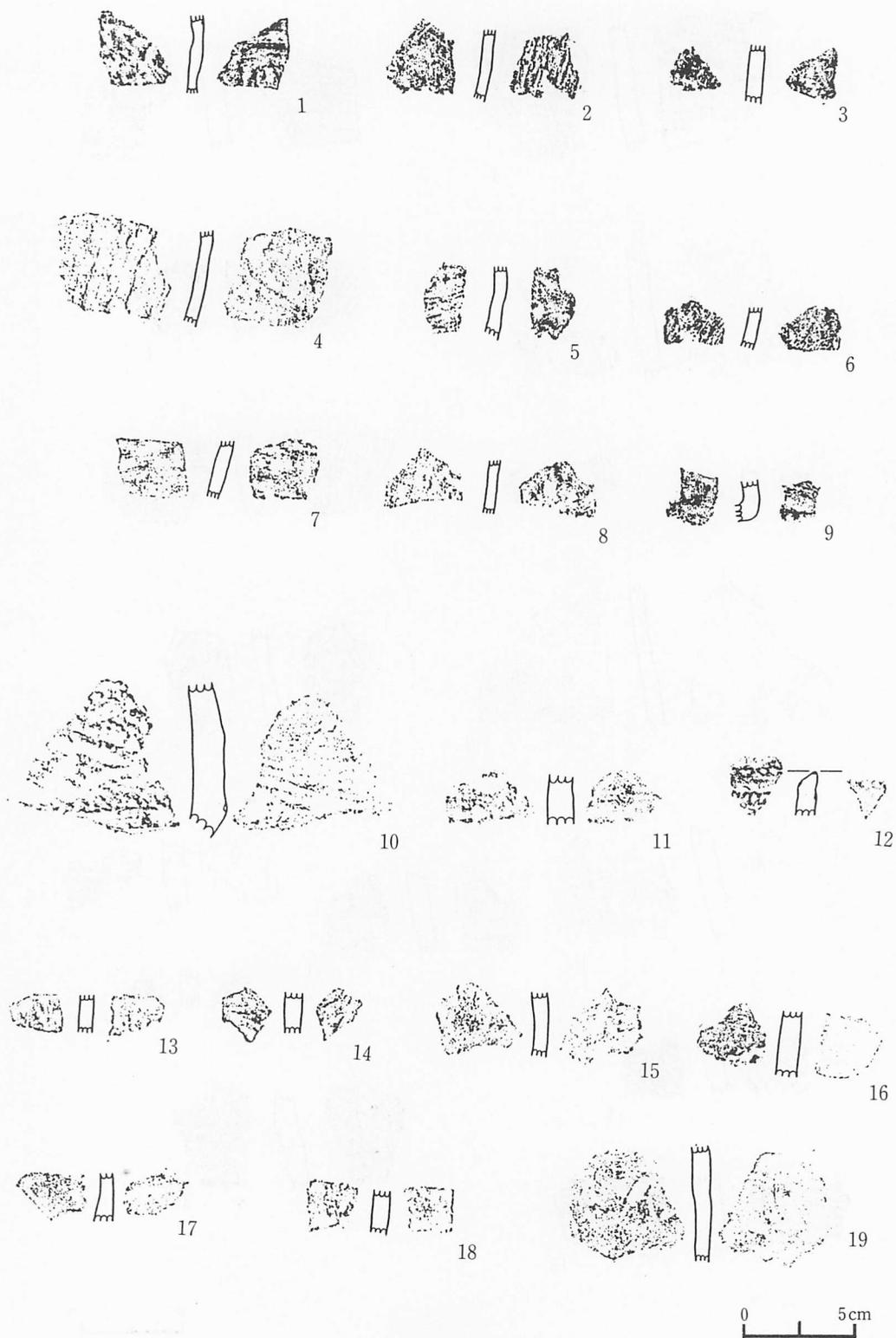


0 5cm

第7图 中畑遺跡出土土器拓影



第8図 中畑遺跡出土土器拓影



第9图 中畑遺跡出土土器拓影



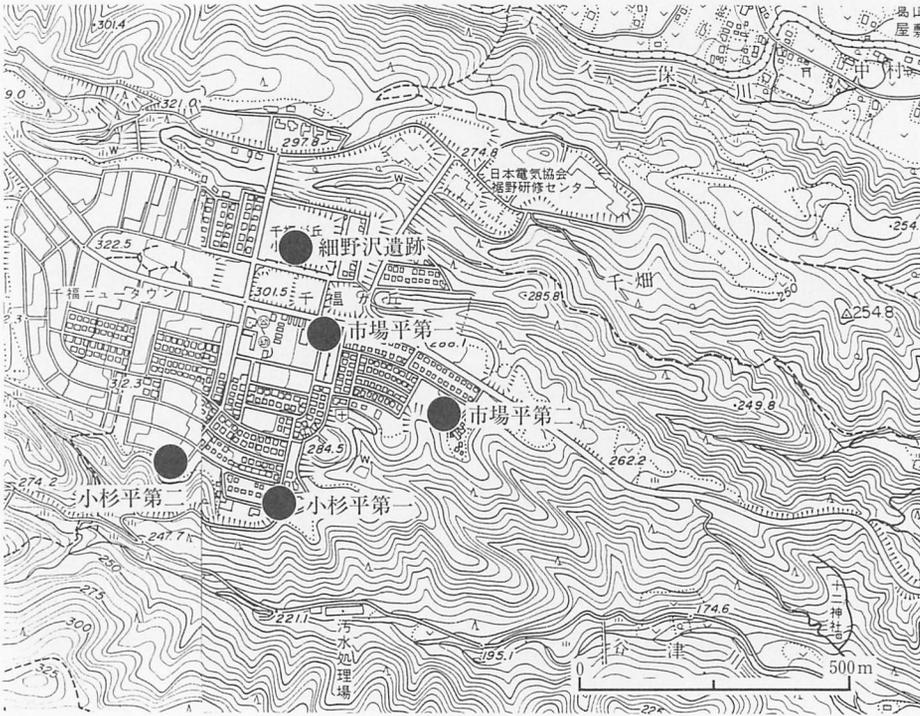
図版1 中畑遺跡 1号住居址



図版2 中畑遺跡出土土器

千福市場平第一遺跡
せんぶくいちばだい

所在地 裾野市千福字市場平



位置図



遺跡範囲図



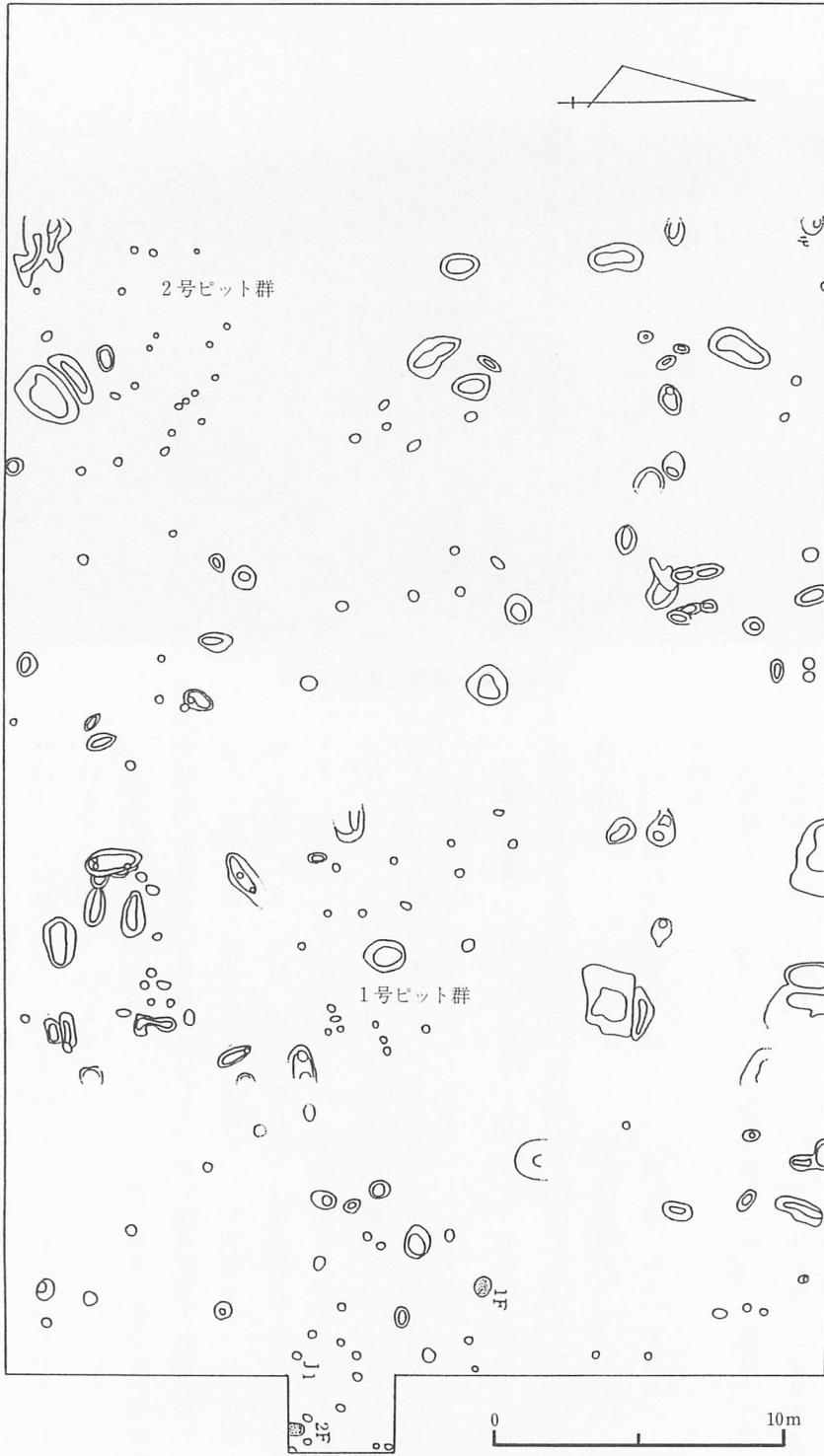
市場平第一遺跡近景(発掘前)

位置と立地 千福市場平第一遺跡は、市場平第二遺跡、小杉平第一遺跡、同第二遺跡、細野沢遺跡と隣接し、愛鷹連峰の一つ、標高一四五七mの位牌岳から南東に延びる丘陵上に存在する。この丘陵は、標高約三〇〇m付近のところで東西に延び、緩斜面の舌状台地を形成している。

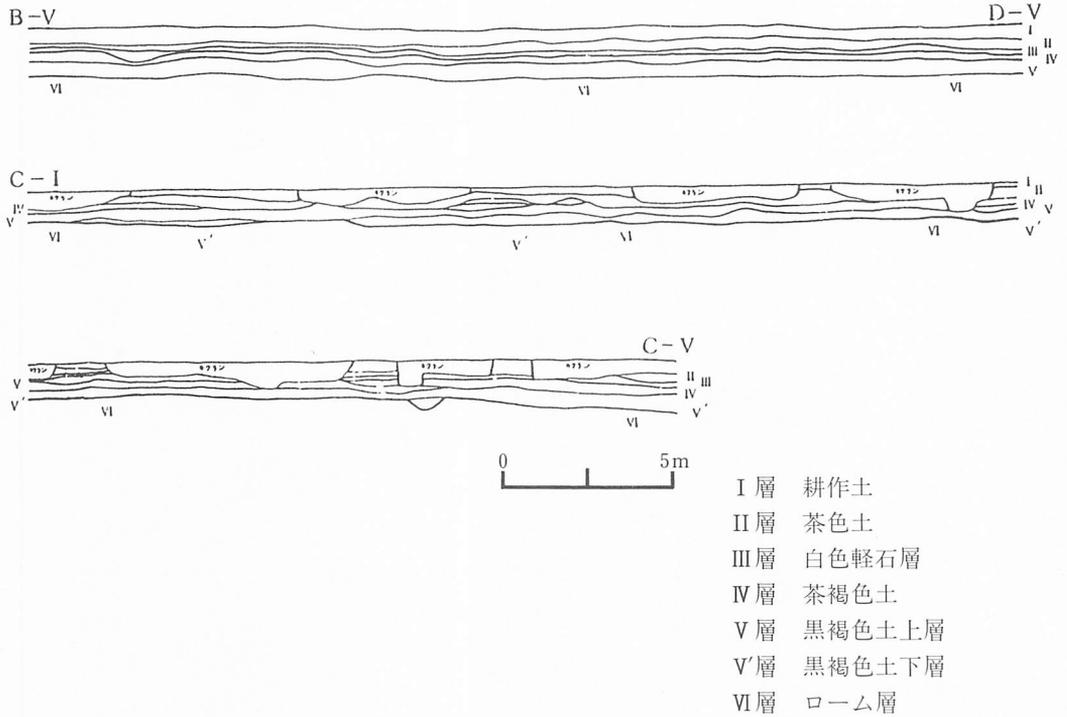
発見と調査 昭和四九年(一九七四)一月二六日、東京急行電鉄株式会社から裾野市教育委員会に対して、第一期高原都市計画の着工に先立ち、対象地内の埋蔵文化財の保護について要請があった。昭和五〇年(一九七五)一月一三日、市教育委員会では現地調査を行い、台地のボーリング跡から土器片が発見され、遺跡の存在が確認された。昭和五〇年三月二二日から二五日まで笹津海洋を担当者として予備調査が実施され、本調査は、昭和五一年(一九七六)二月一日から同年三月一五日まで行われた。

層序と遺構 市場平第一遺跡の土層は次のとおりである。I層が耕作土。II層が茶色土で細かい砂粒を含み粘性がない。III層が白色軽石層で富士山よりの火山灰層である。IV層は茶褐色土で、粘性はあまりない。V層は黒褐色土で、縄文時代の包含層である。VI層がローム層である。

本遺跡からは、次のとおりの遺構が検出された。住居址一カ所、焼土二カ所、土坑六七カ所、ピット群二カ所。住居址は、遺跡の東側B―Vグリッド拡張部から検出され、今回の調査では、この一カ所だけであった。焼土は、住居址の北側、約四mほどの位置に一カ所、住居址のすぐ東側からもう一カ所検出された。一号住居址(第1図)は、



市場平第一遺跡全体遺構図



市場平第一遺跡土層断面図

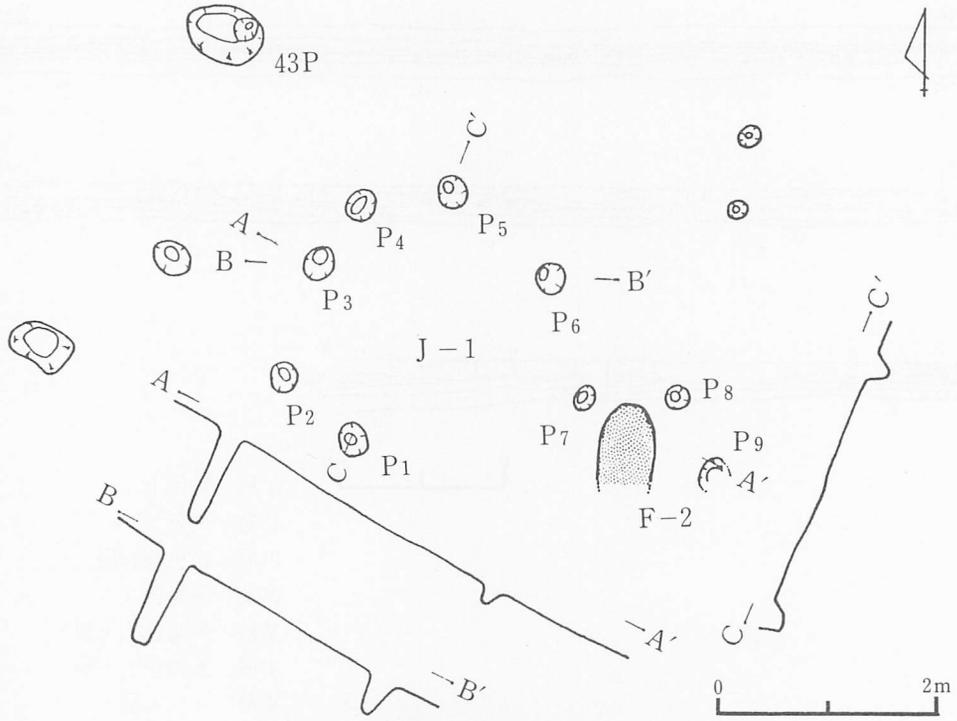
平面形はわずかにゆがんではいないが、ほぼ円形で、規模は長径二九八 cm、短径二七〇 cm であり、壁は確認されなかった。住居址内には火を使用した痕跡は見られないが、住居址のすぐ東側に焼土 1 F が確認された。また北側約四 m のところに焼土 1 F が確認されている。焼土は、楕円形で長径六二 cm、短径五四 cm のものと、隅丸方形で長径五〇 cm、短径四八 cm で、掘り込みは最深部で二三 cm を測る。

遺物 土器は、遺跡内より二九九点が出土し、その特徴から六群に分類した。

第一群土器は縄文時代早期の土器（第 6 図 27・28・33）でいわゆる貝殻状痕文を内外面にもつ土器の一種であり、条痕が特に内面に縦位・斜位に明瞭に残され、比較的薄手で胎土に繊維を含んでいる。

第二群土器は隆帯文土器（第 2・3 図）で、土器の主たる文様を粘土帯により器面に横位・縦位・斜位方向に施し、施文方法により二類に分けることができる。第一類（第 2 図 1）は地文に縄文をもたず、〇・三 cm 幅の粘土ひもを器面に施し、これにキザミを施しているもの、第二類（第 2 図 2～5・7～10・12～26）は地文に縄文を施し、さらに粘土帯を貼りつけたものである。

第三群土器は沈線文土器（第 3 図 1～16、第 4 図 6・11・17～37、第 5 図 1～9・13・14、第 6 図 6～16・21・24～26・29）で、土器文様の主たる構成が沈線文による類であり、その施文具の文様構成によって三類に分けることができる。第一類は縄文の地文に半截竹管の押し文を使用しているもの。第二類は荒い縄文の地文に半截竹管、あるいはヘラ状施文具による沈線による平行沈線をもつもの。第三類は半



第1図 市場平第一遺跡1号住居址遺構図



市場平第一遺跡1号住居址

截竹管による押引文をもつものに分けられる。

第四群土器は縄文のみの土器群（第5図10、12・15、43、第6図1、5）で、その中で単節の縄文が横位・斜位に回転しているもの、無節の縄文が横位・斜位に回転しているもの、異なる縄文原体による羽状縄文のもの、不規則な斜行縄文を施すもの、異なる二つの原体を半回転ほど横位に施しているもの、縄文の地文のみのものに分けられる。

第五群は無文土器群（第7図1・2・5・9、36・38、40・42、45）で、1・2・5・9、14は、口縁部破片で、1・2は有孔土器、5・9、11は口唇部外側に折り返しをもち、12、14は平縁である。その他、土器に明瞭な整形痕が見られるもの、器面を研磨しているものもある。

第六群土器は縄文時代前期末から中期中葉の土器（第6図30、32、34、36）で、この一群は三角形の掘り込み文を中心に半截竹管による平行沈線を五条から六条の縦位・斜位に施文しているもので、34は口縁部破片で、口唇部に隆帯文を施しこれに二条の押引文、さらに三角形の掘り込み文を中心に押引平行沈線を囲むように施している。30、32、35、36も同一個体と思われる。41、46は縄文中期中葉の土器で、41はへら状施文具による区画、46は縄文の地文に蛇行する浮線文が見られる。

石器が、遺跡内より不定形石器八点、石鏃二点、石斧一点、磨石一点、石皿一点が出土している（第9・10図）。不定形石器（第9図1、6・8・9）は緑泥片岩を使用し、原石から打ち欠いた石の一部に細かい剝離を施し石器とし、ほとんどが長径5cm程度のものである。

石鏃（第9図10・11）は黒曜石製の石鏃で、長径2・2cm、短径2cmで、基部に浅い挟りがあるものと、長径1・9cm、短径1・5cmを測る二等辺三角形をなし、基部に浅い挟りがあるもの二点である。石斧（第9図7）は安山岩製で、偏平に岩石を打ち欠き、この両側に剝離を入れている。磨石（第10図1、13）は、安山岩質の磨石が一、二個出土し、ほぼ全体が一〇cm前後である。4と5は凹石としても使用している。石皿（第10図14）は安山岩質で、極めて小形であり中央部を石皿として使用している。

遺跡の特徴 千福市場平第一遺跡で発見された土器は、先述のとおり時期、文様構成等により、六群に分類される。第一群土器は縄文早期の土器。第二群土器は隆帯文土器。第三群土器は沈線文土器。第四群土器は縄文のみの土器。第五群土器は無文土器。第六群土器は縄文中期の土器で、ここでは土器群の时期的位置づけができる。

現状 遺跡は高原都市開発が進められ、住宅が建てられ当時の現況はない。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

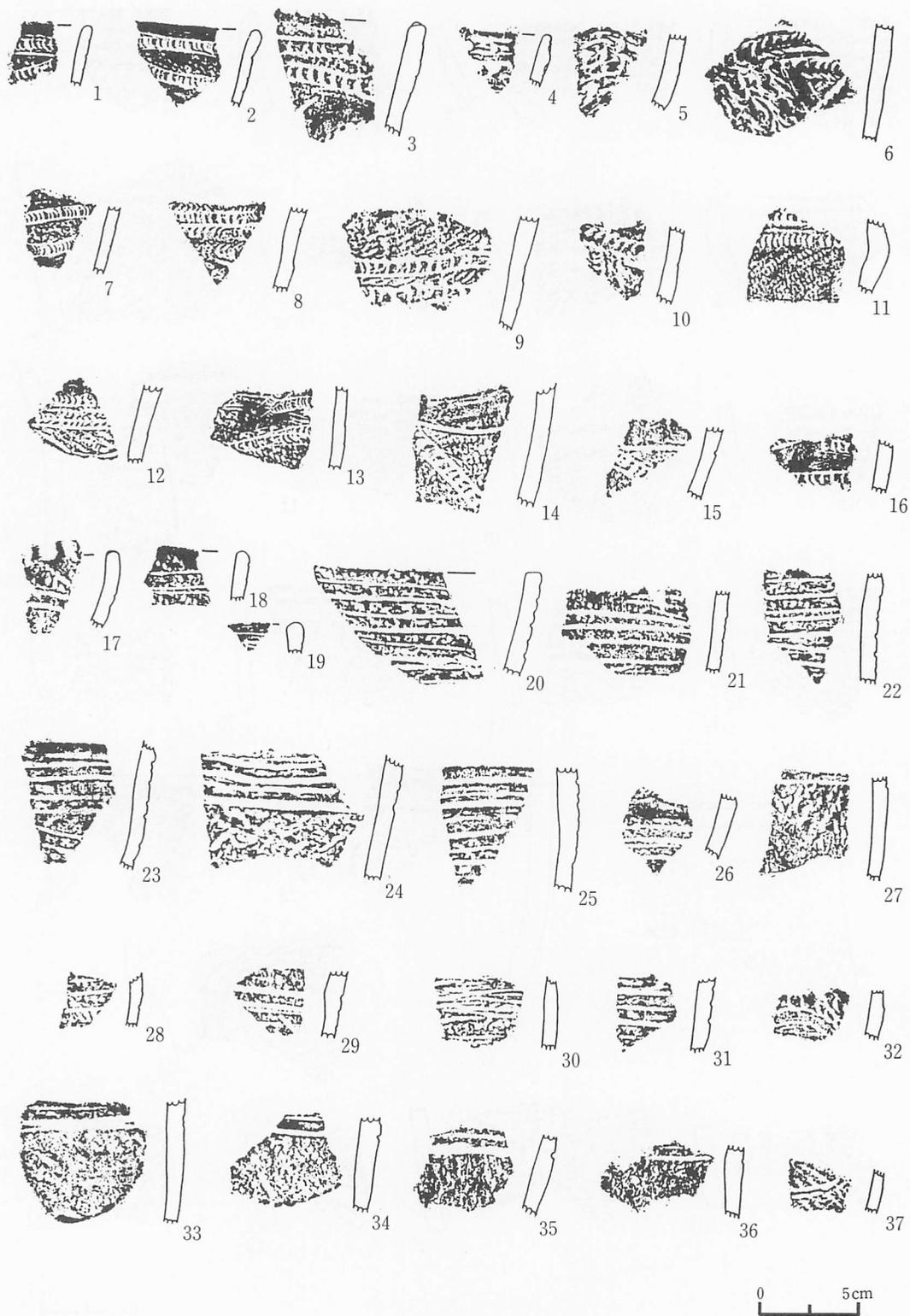
文献 笹津海洋・芹沢充寛ほか「裾野市千福市場平第一・第二・小杉平第一・第二・細野沢遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会 一九八二



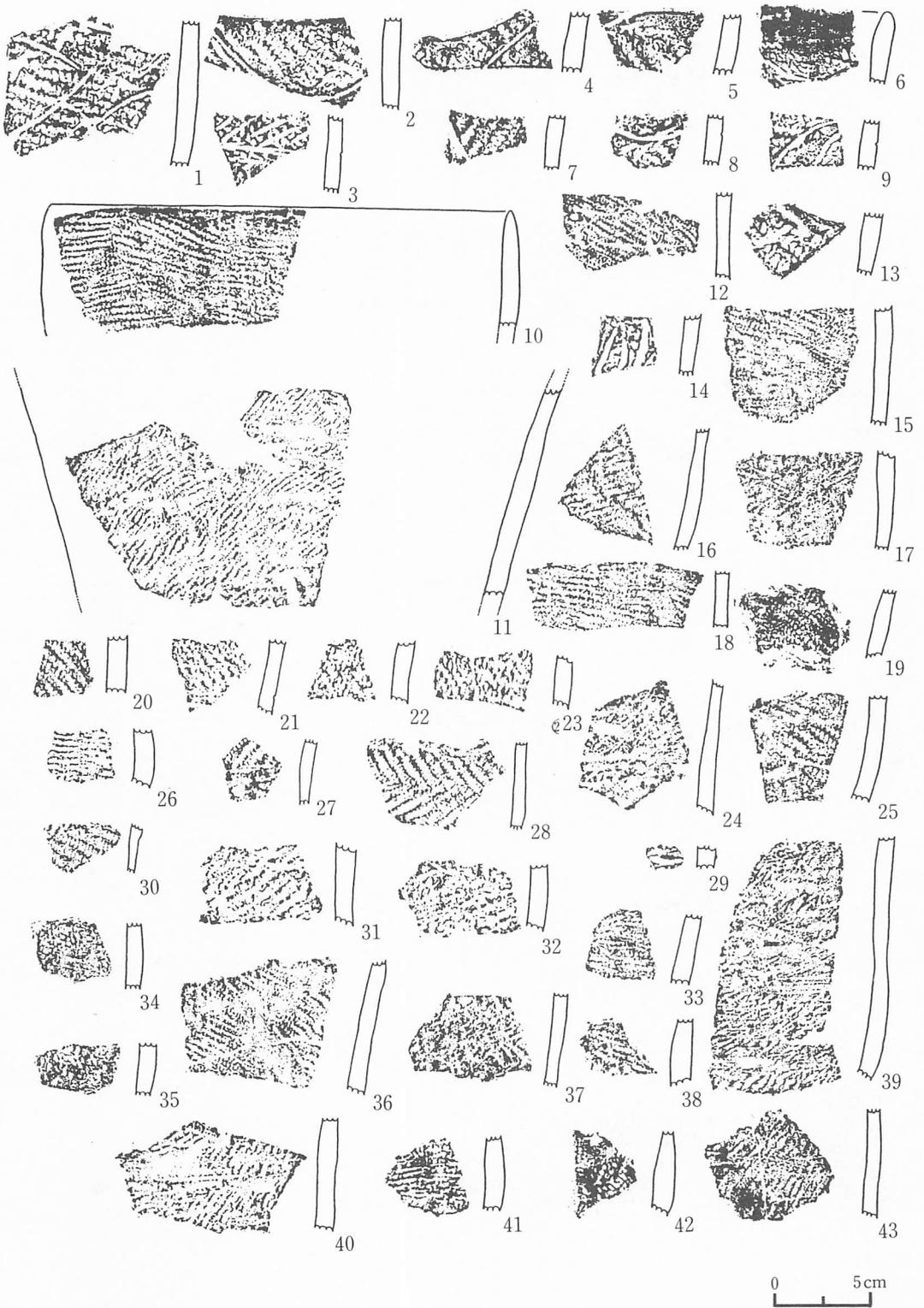
第2図 市場平第一遺跡出土土器拓影



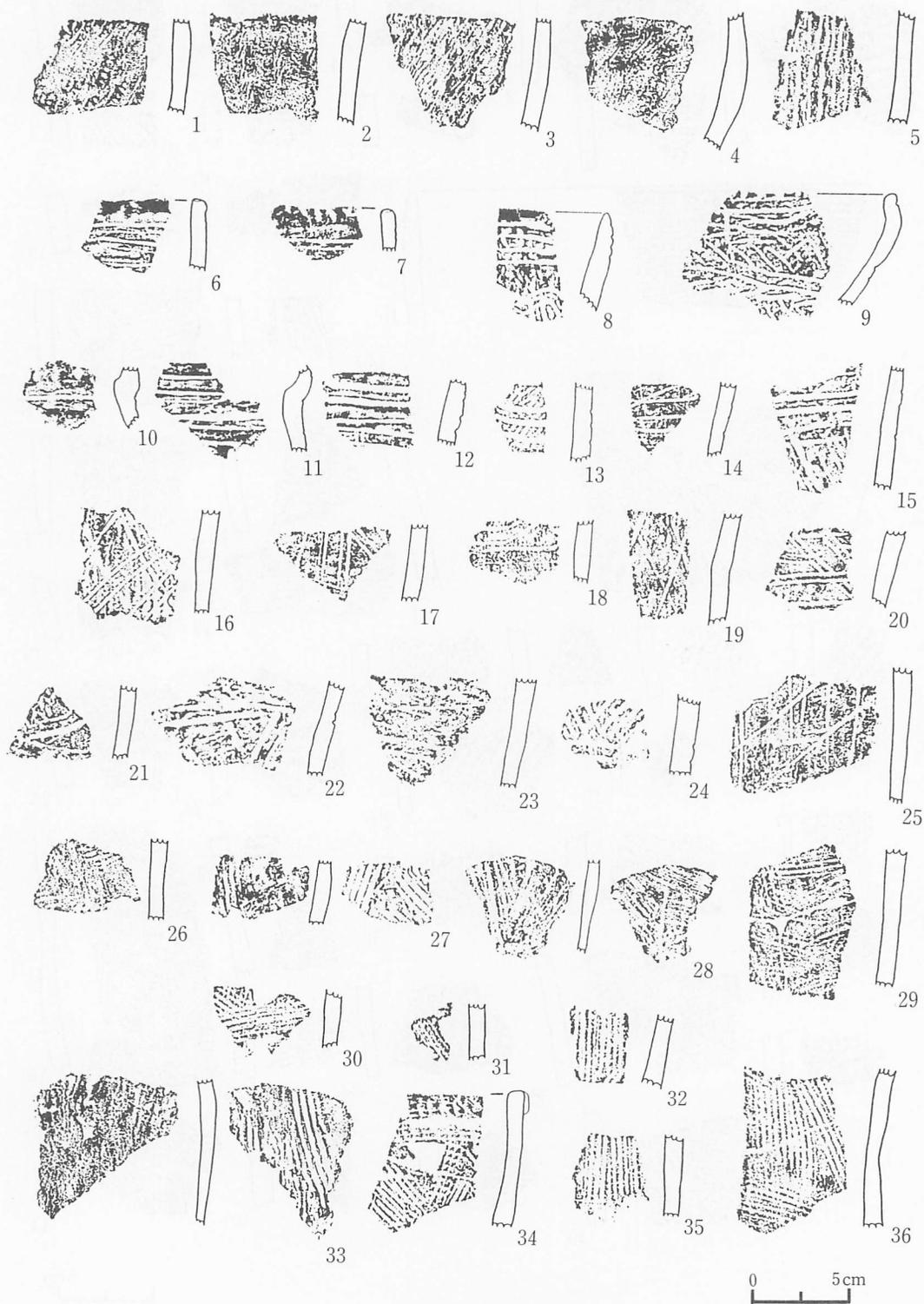
第3図 市場平第一遺跡出土土器拓影



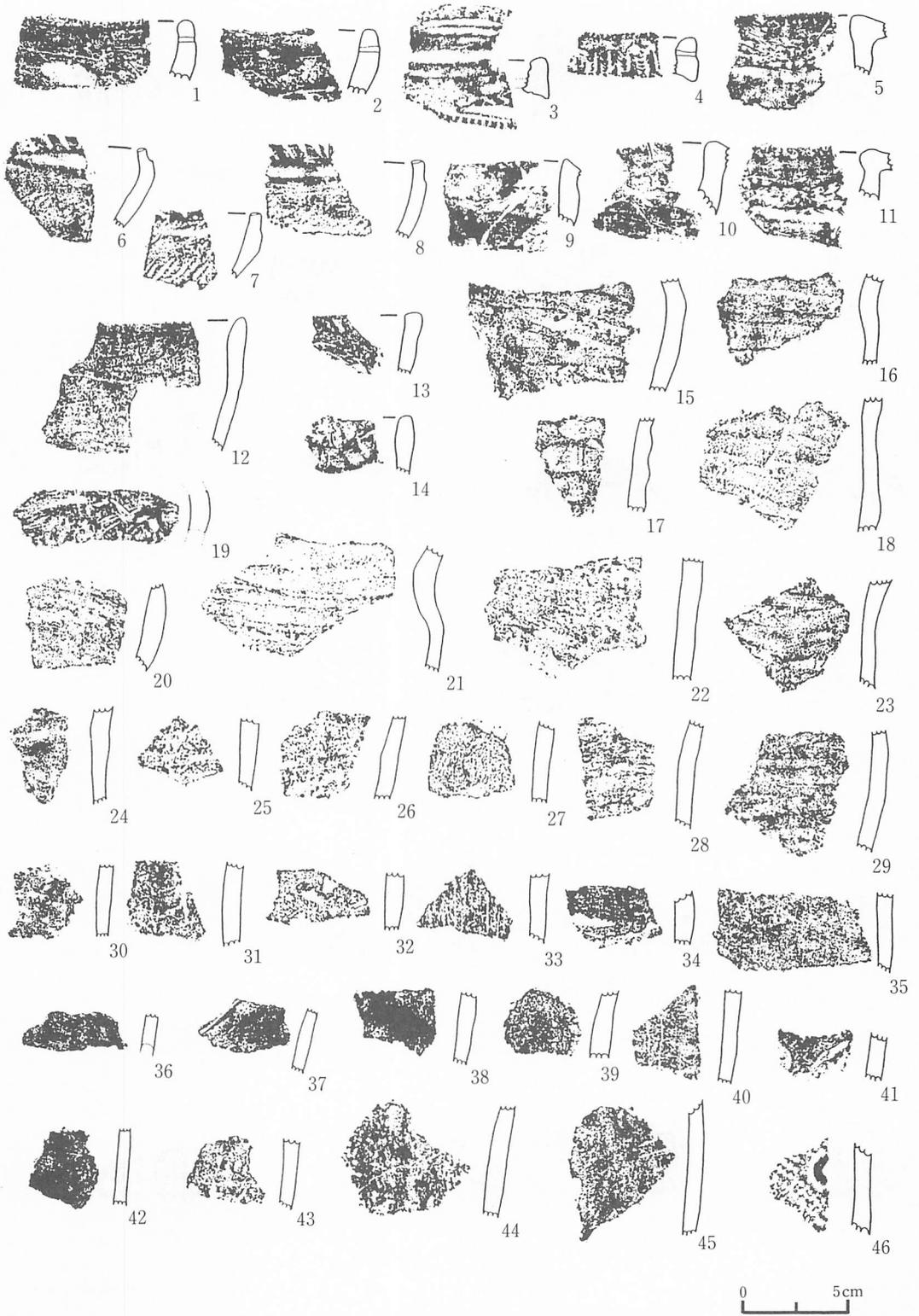
第4图 市場平第一遺跡出土土器拓影



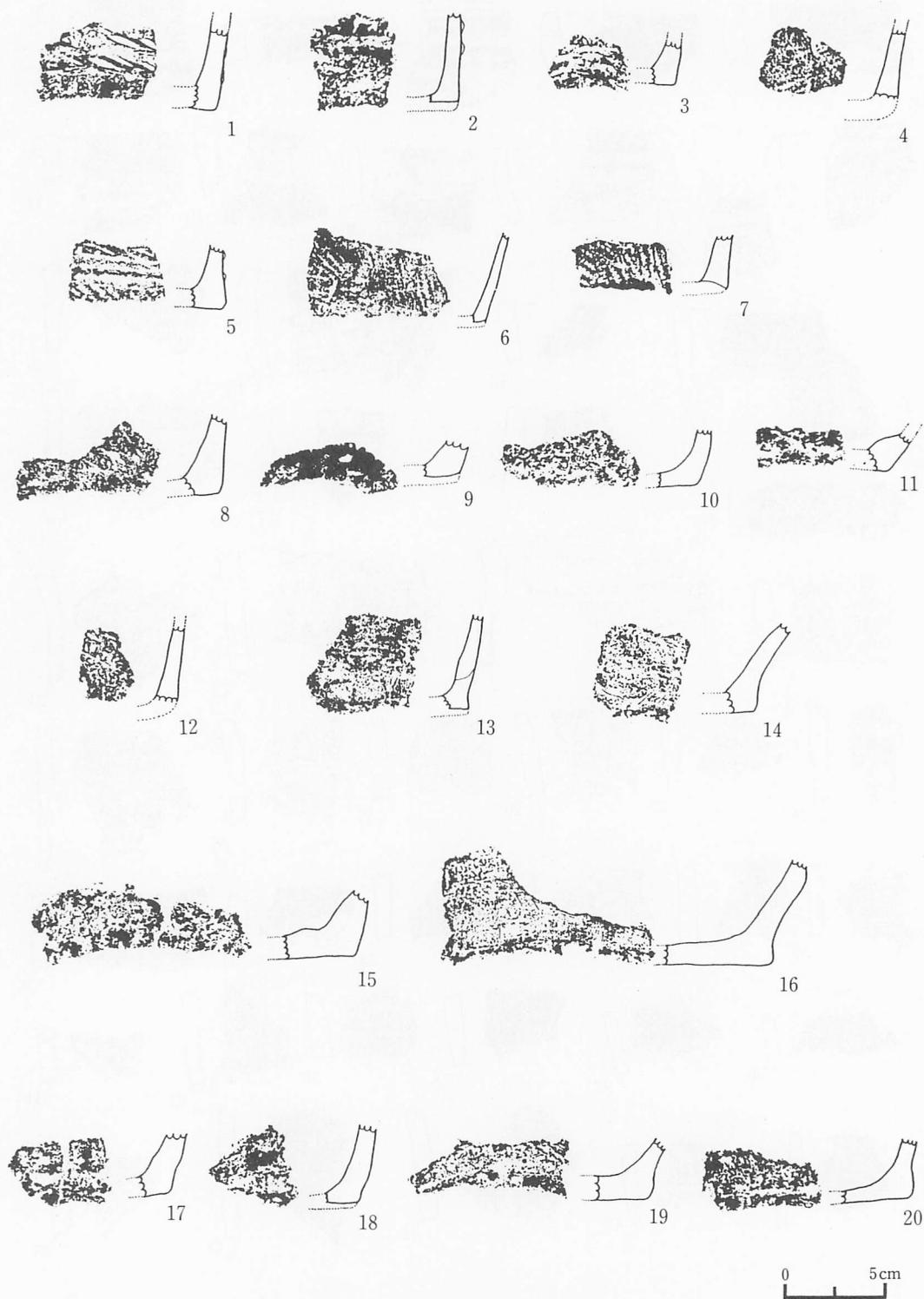
第5図 市場平第一遺跡出土土器拓影



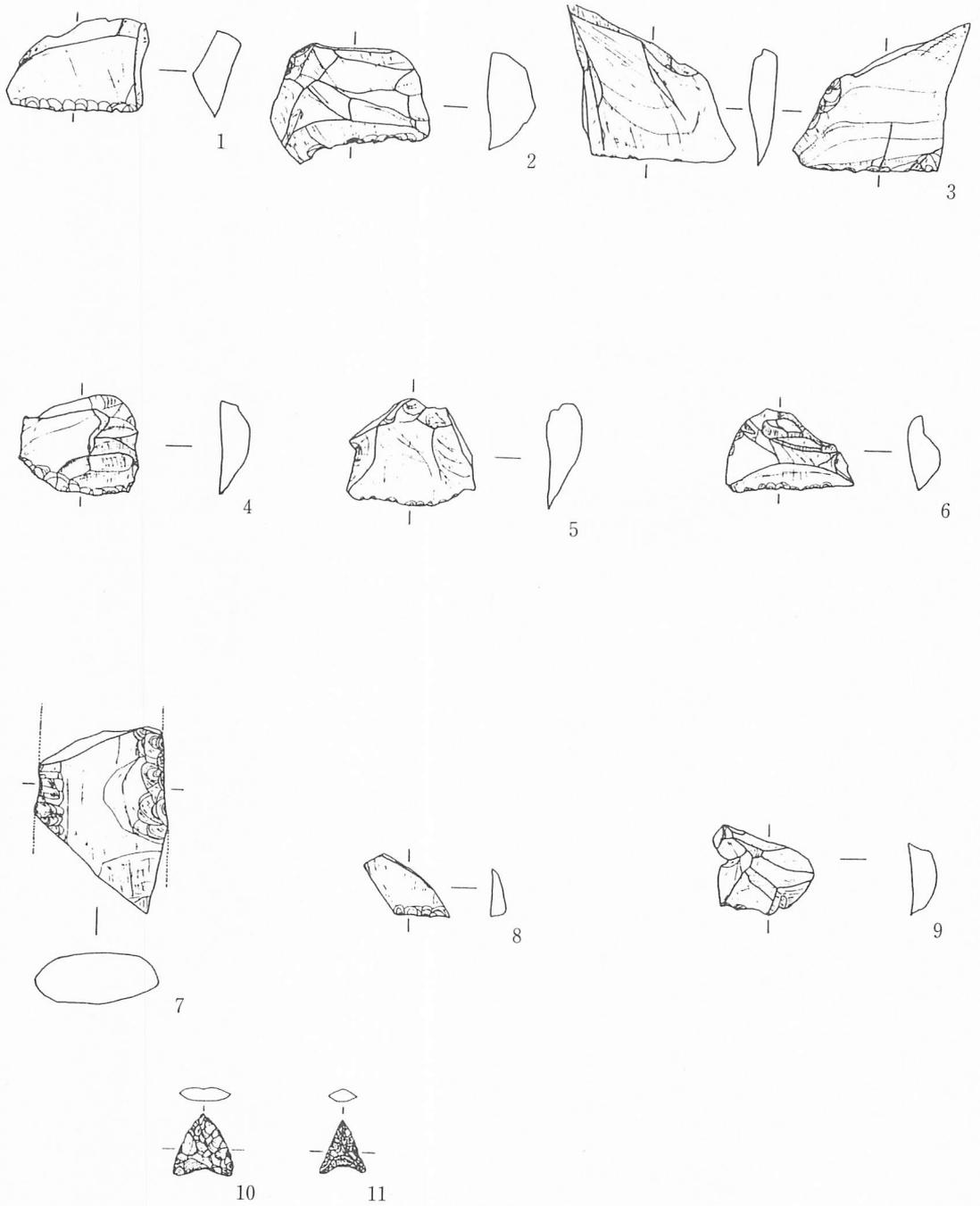
第6図 市場平第一遺跡出土土器拓影



第7図 市場平第一遺跡出土土器拓影



第8図 市場平第一遺跡出土土器拓影



第9図 市場平第一遺跡出土石器実測図



第 10 図 市場平第一遺跡出土石器実測図

15 千福市場平第二遺跡

せんぶくいちばだいら

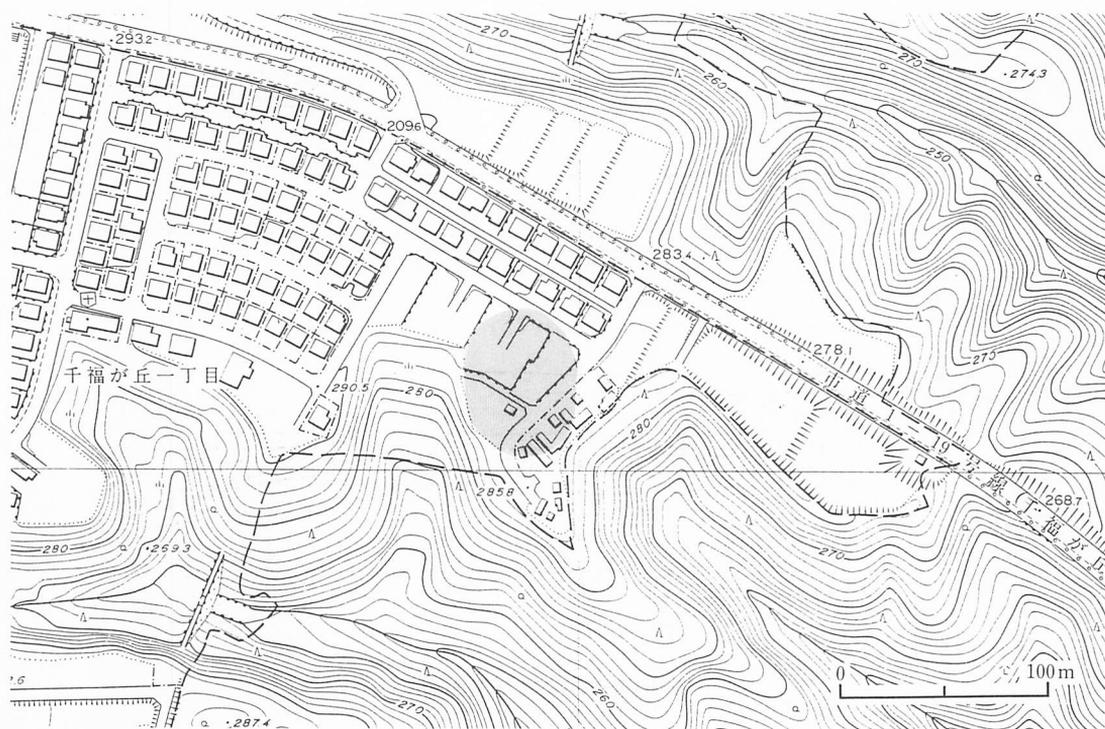
所在地 裾野市千福字市場平

位置と立地 千福市場平第二遺跡は第一遺跡の南側、標高約二八〇mほどの台地の末端部に位置している。

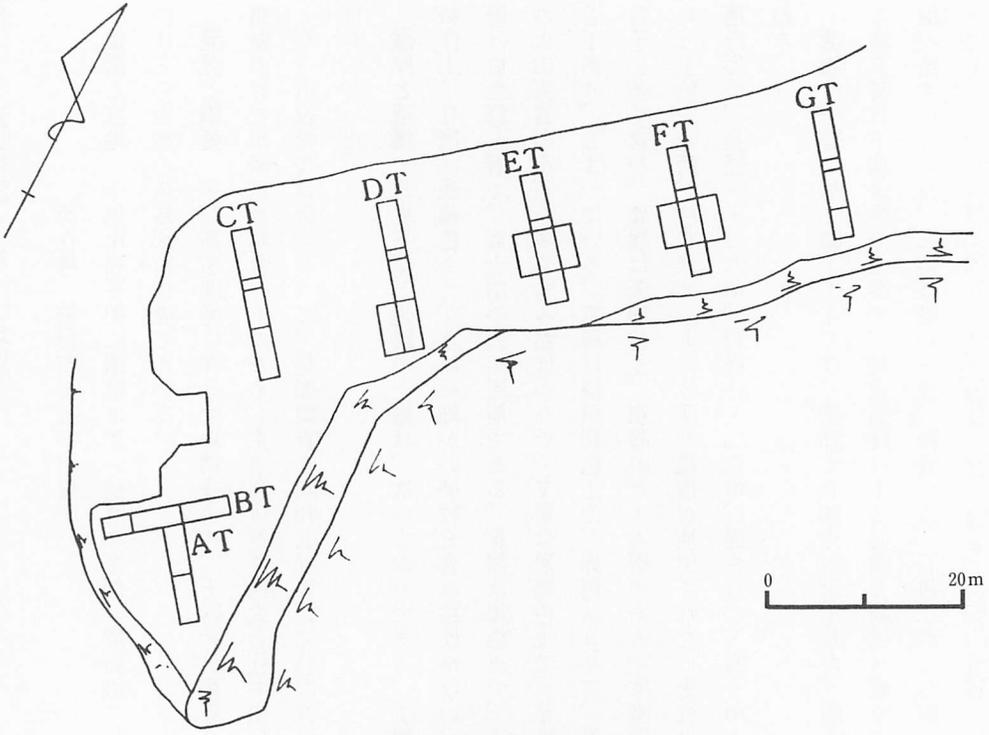
発見と調査 高原都市開発に伴う現地調査中に、土器片が発見され、遺跡の存在が確認された。そのため、東京急行電鉄株式会社の依頼により、市教育委員会によって、発掘調査を昭和五五年（一九八〇）五月七日から行った。

層序と遺構 市場平第二遺跡の土層は、次のとおりである。I層が耕作土。II層は淡褐色土で、きめの細かい砂粒を含み粘性がない。III層は白色軽石層で、富士山の火山灰層である。IV層は褐色土で、大粒の火山灰質の小石を多く含み粘性がない。V層は黒褐色土で、粘性が若干あり、しまっている。VI層は淡黒褐色土で、赤色スコリア、黒色粒子を多く含む。VII層は淡褐色土。VIII層がローム層である。本遺跡からは土坑一カ所、柱穴状ピット二カ所の遺構が検出された。土坑は長楕円形で、長径一・二六m、短径一・二六m、深さは〇・四一mをはかる。

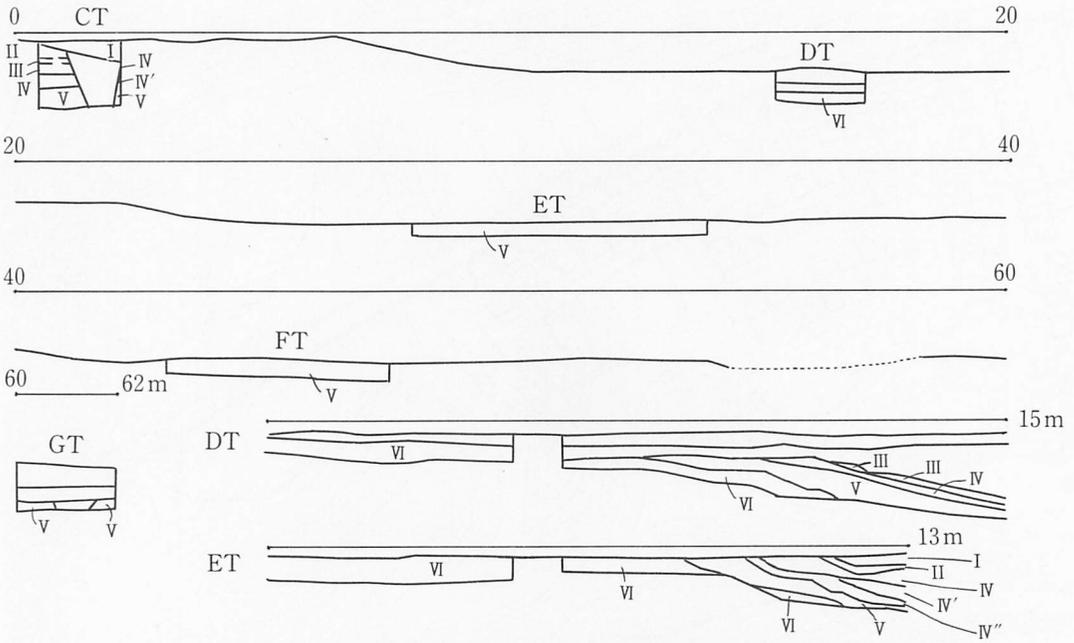
遺物 土器（第2図1〜4）は、遺跡より四点が出土した。四点とも縄文時代早期後半の土器で、貝殻腹縁による明瞭な斜位・縦位の条痕が施されていた。石器は磨石一点、礫器一点、石皿二点、石鏃一点が出土している（第2図5〜9）。磨石（第2図5）は安山岩質で、長径九・一cm、短径九cmで、よく磨り減っている。礫器（第2図6）は、



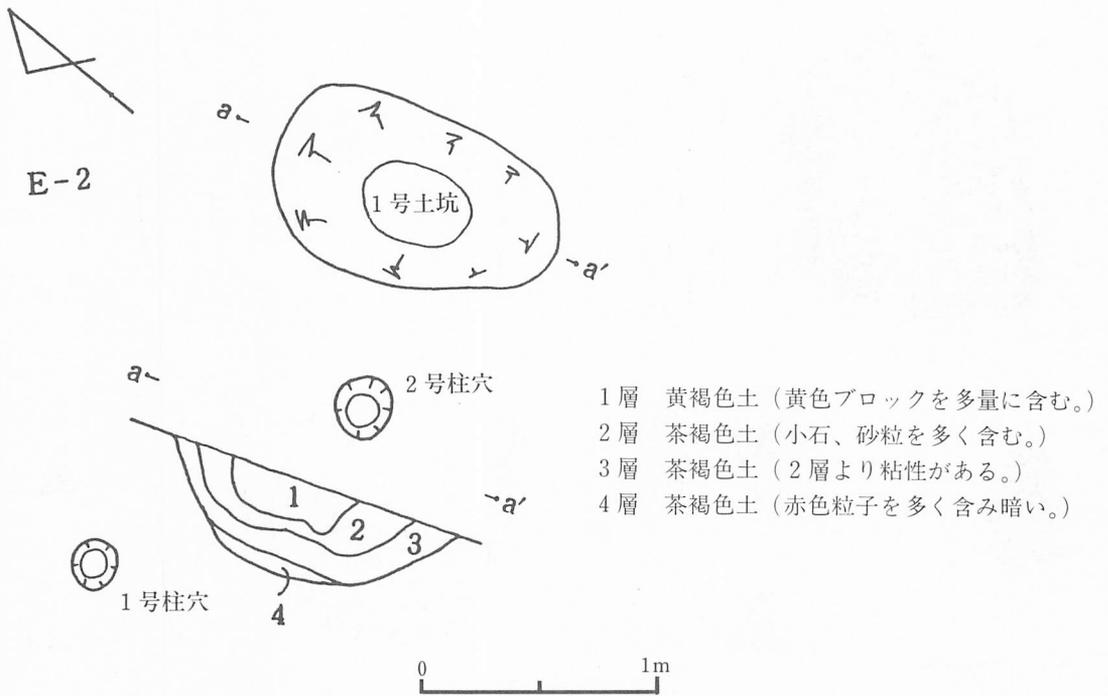
遺跡範囲図



市場平第二遺跡発掘平面図



市場平第二遺跡土層断面図



第1図 市場平第二遺跡1号土坑、1・2号柱穴遺構図

安山岩質の石の一端に加工を施した石器で「握斧」として使用されたように思われる。石皿(第2図8・9)は、長径三三・八cm、短径二八・一cmのもの、長径四〇・四cm、短径二〇・二cmの二点であり、石質は安山岩である。石鏃(第2図7)は頁岩質で、長径二cm、短径一・一cmと石鏃としては比較的大形のものである。

遺跡の特徴 千福市場平第二遺跡は、縄文時代早期後半の土器が出土していることから、台地の末端部の遺跡の存在を確かむことができる。

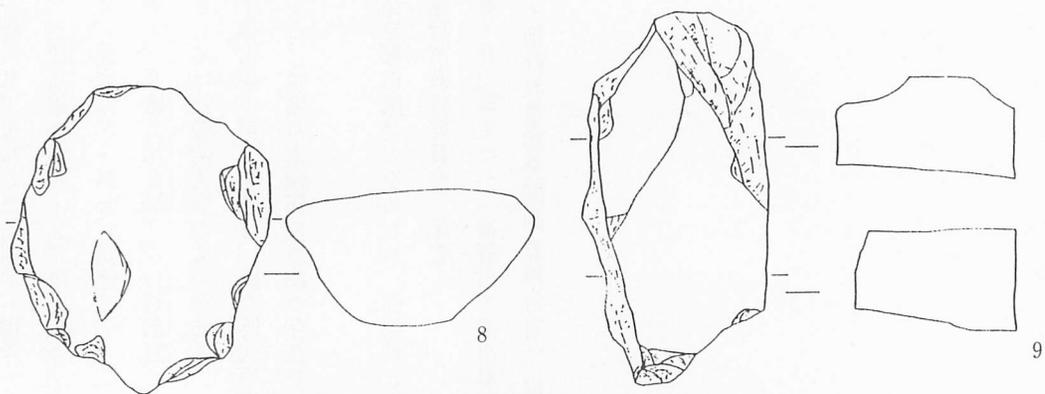
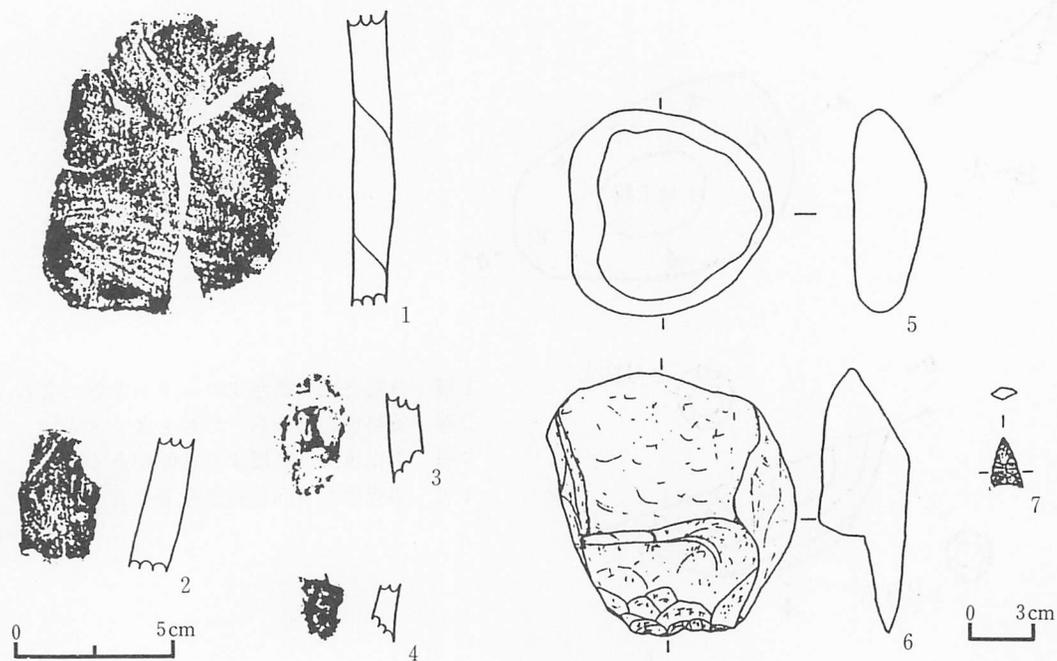
現状 遺跡は高原都市開発が進められ、住宅地となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 芹沢充寛・井上輝夫ほか「裾野市千福市場平第一・第二・小

杉平第一・第二・細野沢遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会

一九八二



第2図 市場平第二遺跡出土土器拓影・石器実測図

16 千福小杉平第一遺跡

所在地 裾野市千福字小杉平

位置と立地 千福小杉平第一遺跡は、千福市場平第一遺跡の北西側の東方へ延びる舌状台地に位置し、標高は約二八〇mである。

発見と調査 千福市場平第二遺跡と同時に、現地調査中に土器片を発見し、遺跡の存在が明確となった。これを受けて市教育委員会が、昭和五五年（一九八〇）五月から発掘調査を行った。

層序と遺構 千福小杉平第一遺跡の土層は、千福市場平第一遺跡とほぼ同様であり、I層が耕作土。II層が淡褐色土。III層が白色軽石層。IV層が褐色土。V層が黒褐色土で、縄文時代遺物の包含層。VI層が淡黒褐色土。VII層が淡褐色土。VIII層がローム層である。遺構はA調査区から集石一カ所、土坑二カ所が検出され、集石は石皿一点を含み、東西二・一m、南北一・三mの範囲内に礫一七個を集めている。B調査区からは、土坑八カ所、柱穴状ピット二カ所が検出されている。

遺物 遺物はA調査区より土器（第5図）の二点が出土した。全面に細かい条痕と思われる文様が施され、ヘラ状施工具により器面を削っている土器片と、全面にわたって彫りの深い縦位の条痕を施している土器二点が出土し、縄文時代早期の土器と見られる。石器は、A調査区から、石皿（第5図）が出土し、安山岩質の石を偏平に磨りへらしている。B調査区から、不定形石器（第5図）が出土し、偏平な黒曜石を原石より打ち欠き、さらに細かい剝離を施し刃部をつくりだしている。長径八・一cm、短径は打ち抜き部分で四・四cmを測る。



遺跡範囲図



小杉第一遺跡 A 地区近景(発掘前)



小杉平第一遺跡 B 地区出土石器

遺跡の特徴 遺跡は南西に延びる台地の末端部に位置し、同地形の遺構のあり方が明確となった。

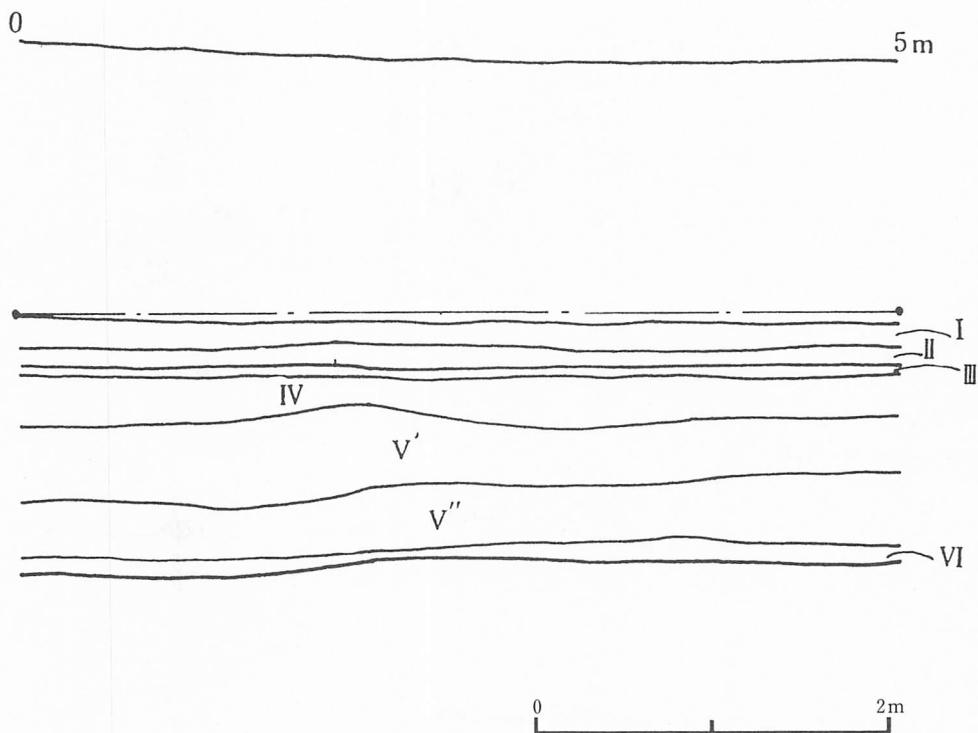
現状 遺跡は高原都市開発が進められ、住宅地となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

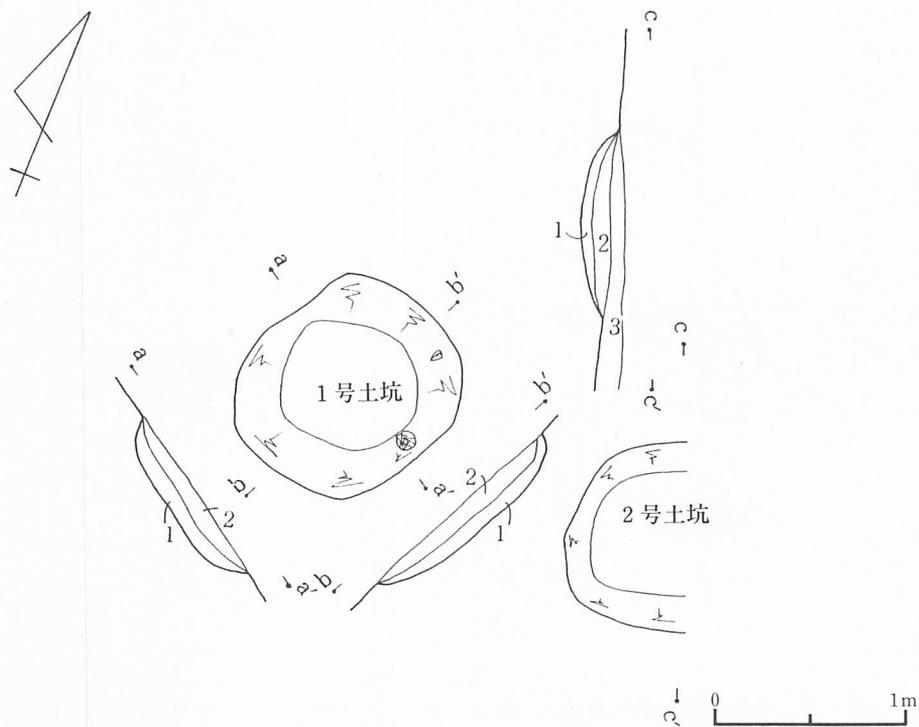
文献 芹沢充寛・井上輝夫ほか「裾野市千福市場平第一・第二・小

杉平第一・第二・細野沢遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会

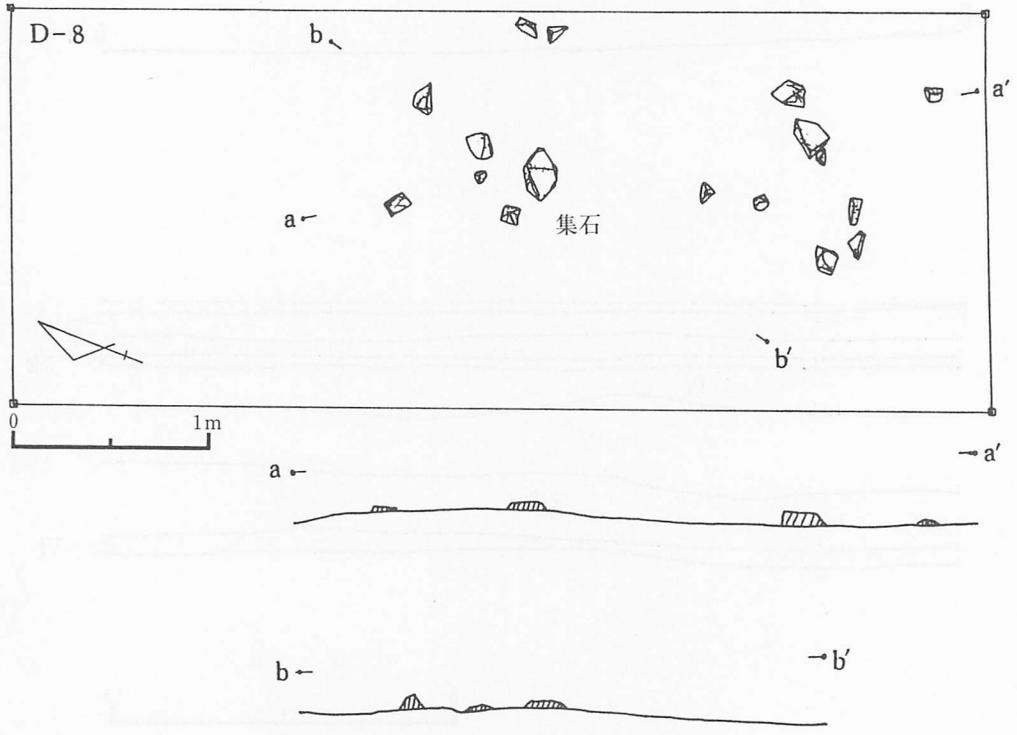
一九八二



第1図 小杉平第一遺跡土層断面図

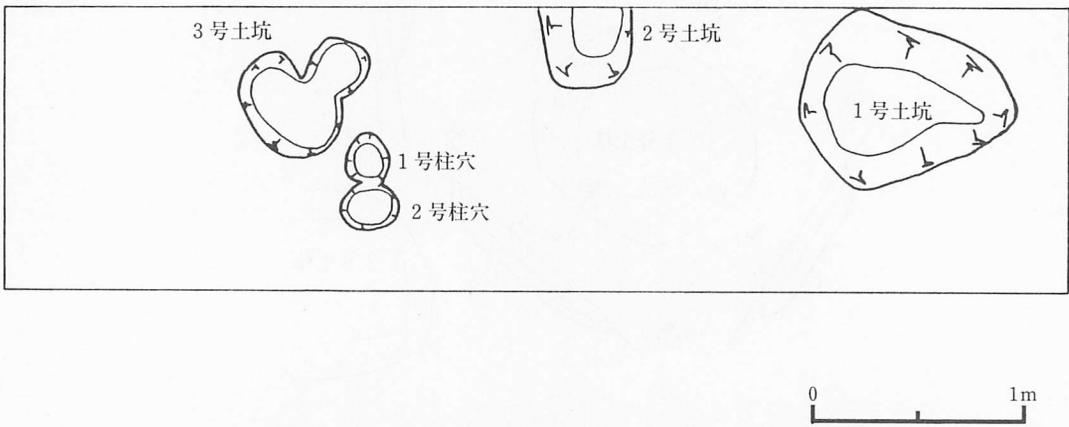


第2図 小杉平第一遺跡A地区1・2号土坑図



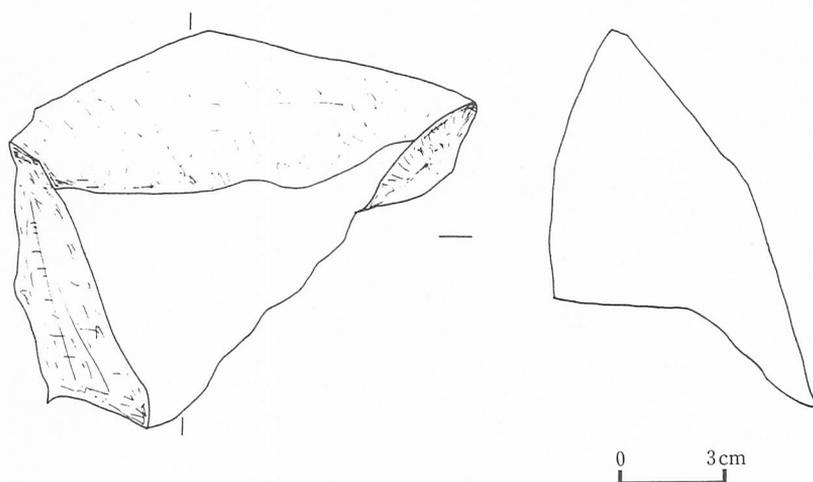
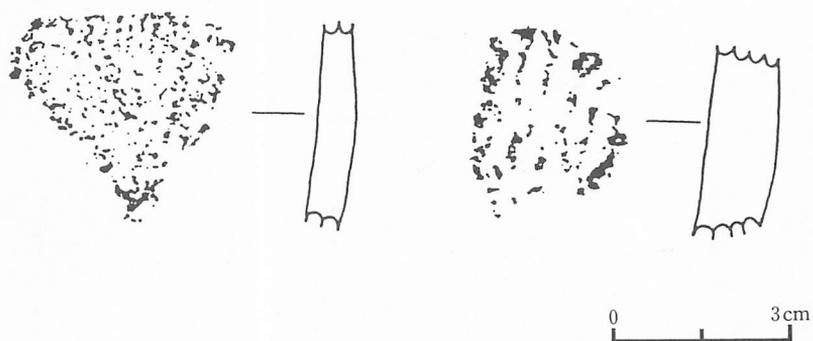
第3図 小杉平第一遺跡 A 地区集石遺構図

A-7

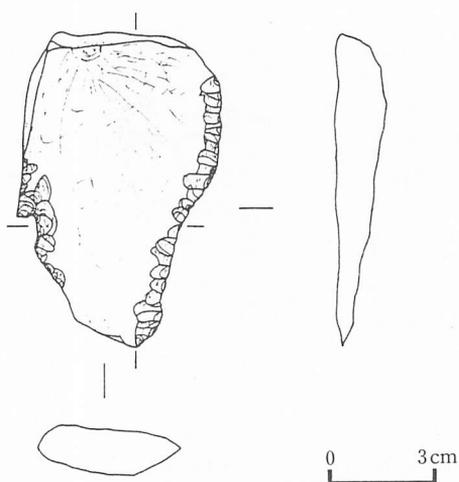


第4図 小杉平第一遺跡 B 地区 A トレンチ内 1~3号土坑、1~2号柱穴平面図

(A地区出土)



(B地区出土)



第5図 小杉平第一遺跡出土土器拓影・石器実測図

17 千福小杉平第二遺跡

せんぶくこすぎたいら

所在地 裾野市千福字小杉平

位置と立地 千福小杉平第二遺跡は、小杉平第一遺跡の北側、中央の台地から南へ浅い広がりをもつ小台地であり、台地の一つの張り出し部とも言える部分に位置し、標高は約三一〇mである。

発見と調査 千福市場平第二、小杉平第一遺跡と同時に現地調査の際、土器片が発見され、遺跡の存在が明確となった。この事から東京急行電鉄株式会社より調査の依頼を裾野市教育委員会が受け、発掘調査を昭和五五年（一九〇）五月から行った。

層序と遺構 千福小杉平第二遺跡の土層は、小杉平第一遺跡とほぼ同様の土層を示し、I層が耕作土。II層が淡褐色土。III層が白色軽石層。IV層が褐色土。V層が黒褐色土で、縄文時代の遺物包含層。VI層が淡黒褐色土。VII層が淡褐色土。VIII層がローム層である。遺構は土坑五カ所、生活址遺構一カ所が検出されている。生活址遺構（第2図）は、長径三・五三m、短径二・六三m、深さは〇・三一mを測り、不整形な形を呈している。柱穴状ピットが八個検出されているが、床面は平坦ではなく大小のくぼみがある。遺構内の覆土より縄文時代早期前半の土器片、磨石が出土している。

遺物 遺跡より土器（第3図）が二八点出土しているが、その特徴から三類に分類した。

第一類土器（第3図1〜25）は撚糸文を地文とし、その施文方法、原体の相違により二種に分けることができる。第一種は撚りの細い縄





小杉平第二遺跡近景

を五条から七条巻きつけた原体による撚糸文を、縦位あるいは斜走させているもの、第二種は比較的太い縄を棒状のものに巻きつけ、一度の回転が半回転程度の非常に短い撚糸文を残すものに分けられる。

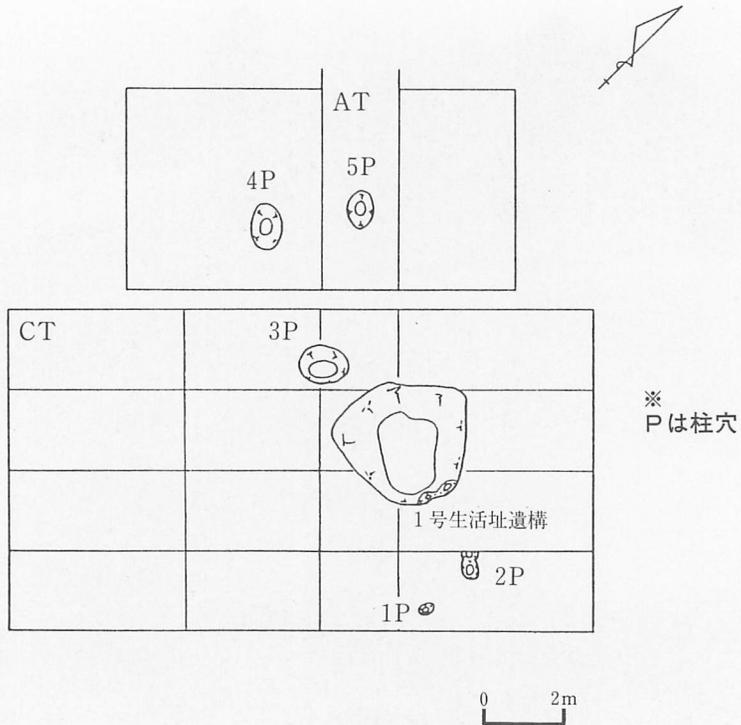
第二类土器(第3図26・27)は主たる文様構成をヘラ状施文具による沈線を横位・斜位に施しているもの。

第三類土器(第3図28)は無文土器である。

石器が総数にして二七点出土している(第4図6図)。不定形石器(第4図1と4)は、1・2が扁平な安山岩質で石の一端を大きく打ち欠き、さらにその先端部に細かい剝離を施し、石器としている。1は長径六・〇cm、短径二・五cmを測る。2は長径一三・八cm、短径四・一cmである。3は安山岩質で、長径五・六cm、短径四・五cmである。4は緑泥片岩質で、スクレーパー型の形をとり、長径七・七cm、短径六・二cmである。皿状石器(第4図5)は、緑泥片岩質の石を大きく打ち欠き石質を良く利用した石器で、長径一二・六cm、短径一一・三cmを測る。磨石(第4・5図6と24)が一九点出土している。棒状、円形、楕円形、方形と形がさまざまで、凹石として兼用しているものもある。石皿(第6図)が三点出土している。石質は三点とも安山岩質である。25は長径二一・五cm、短径二〇・五cmで、二辺が打ち欠けている。26は長径二五・六cm、短径二二・一cmである。27は長径二九・一cm、短径二四・四cmである。

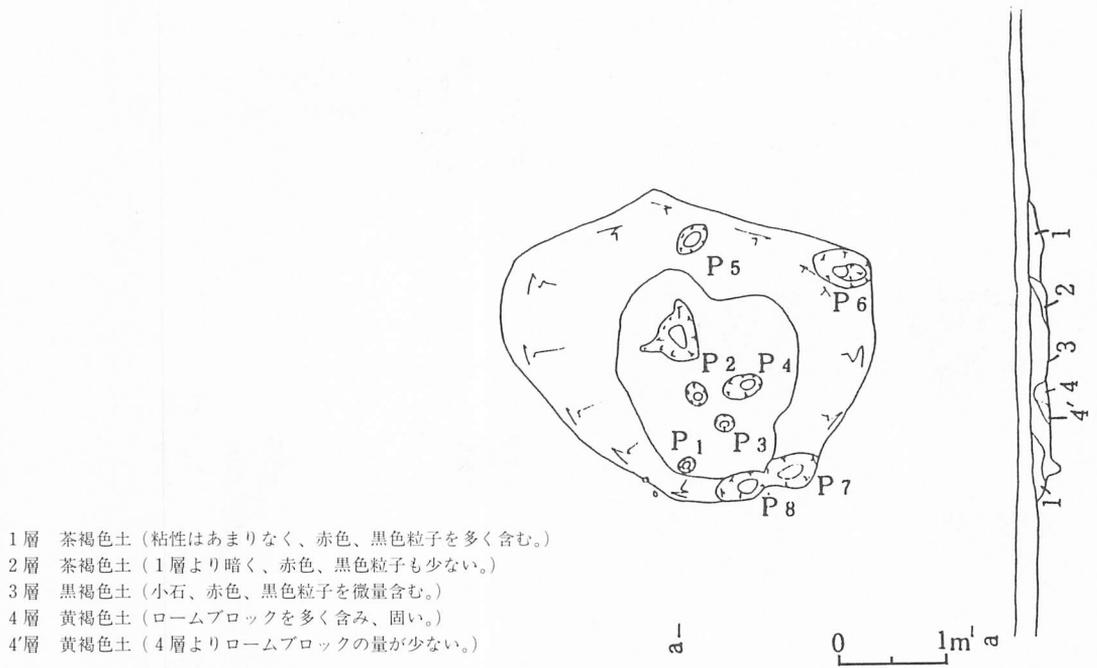
遺跡の特徴 愛鷹山麓に、縄文時代早期前半の撚糸文土器文化を持つ遺跡があることがわかり、同時代の生活文化の一端が明確となった。

現状 遺跡は高原都市開発が進められ、住宅地となっている。

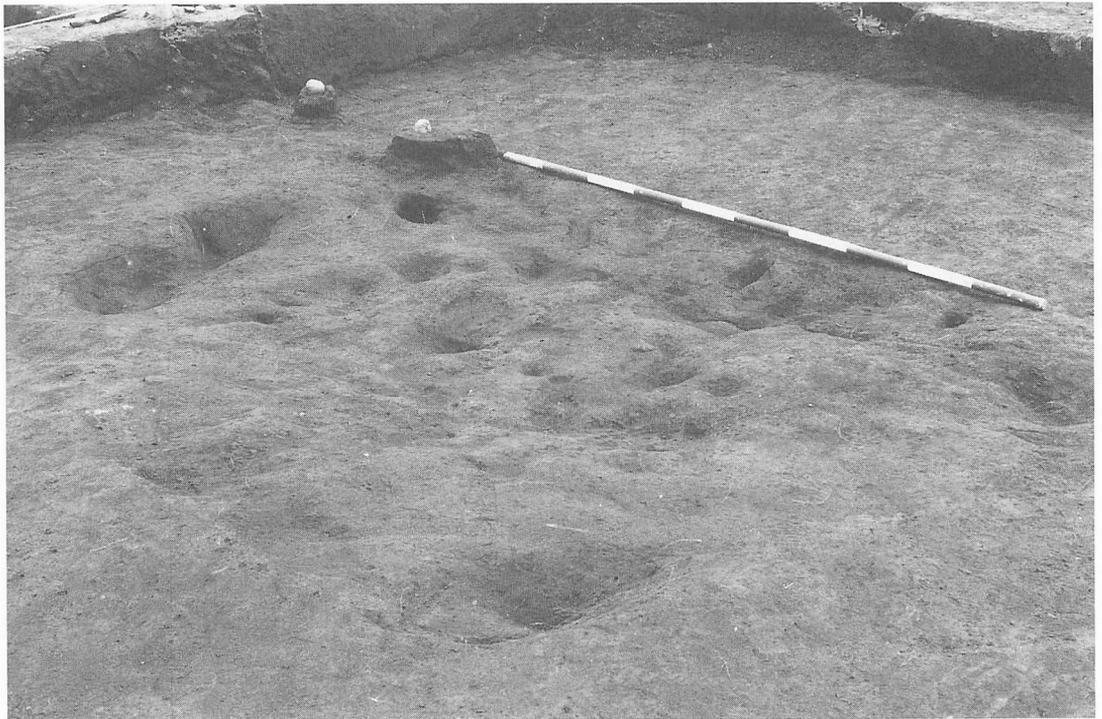


第1図 小杉平第二遺跡遺構全体図

資料の所在 裾野市教育委員会 保管
 文献 芹沢充寛・井上輝夫ほか「裾野市千福市場平第一・第二・小杉平第一・第二・細野沢遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会
 一九八二



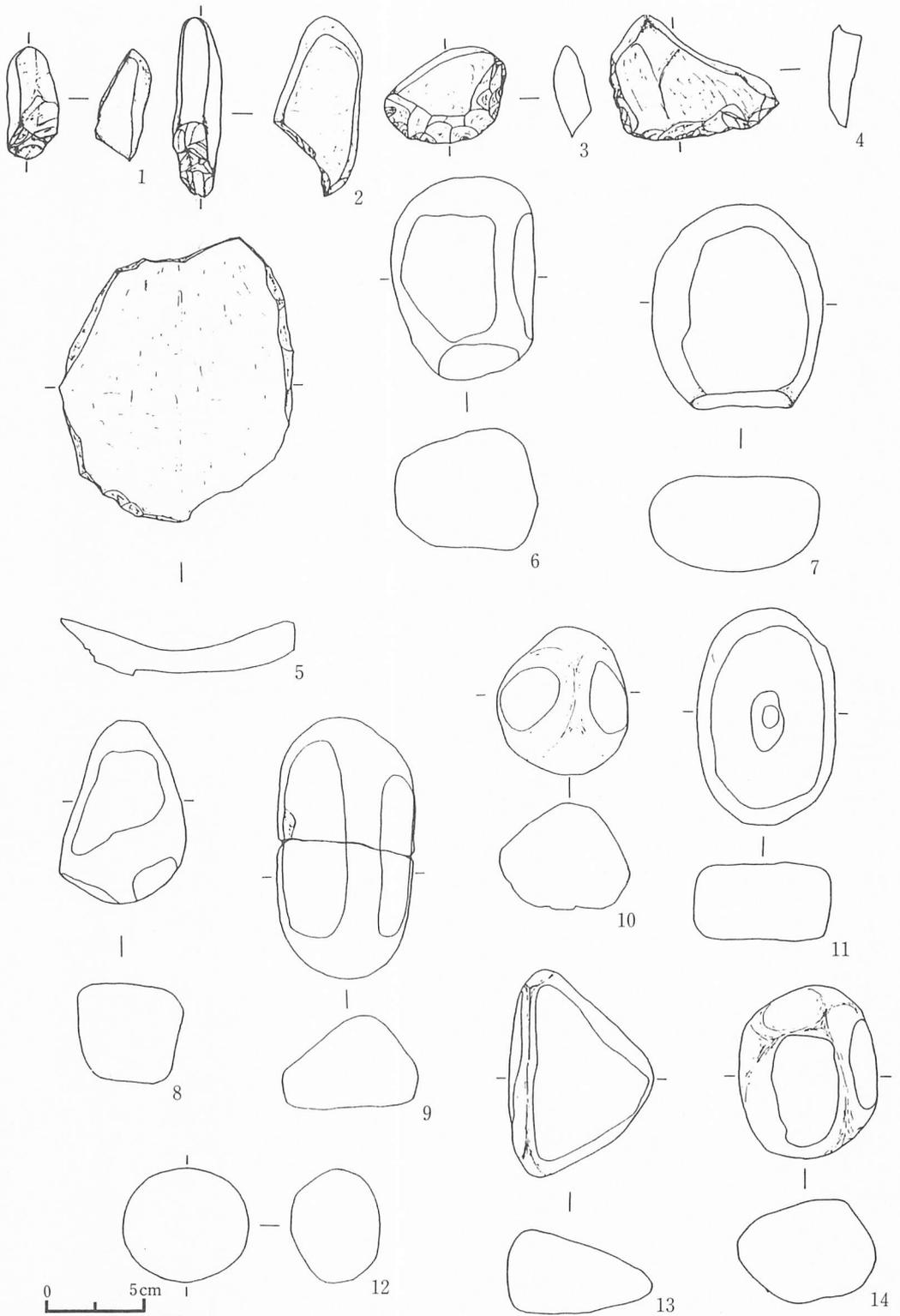
第2図 小杉平第二遺跡1号生活址遺構図



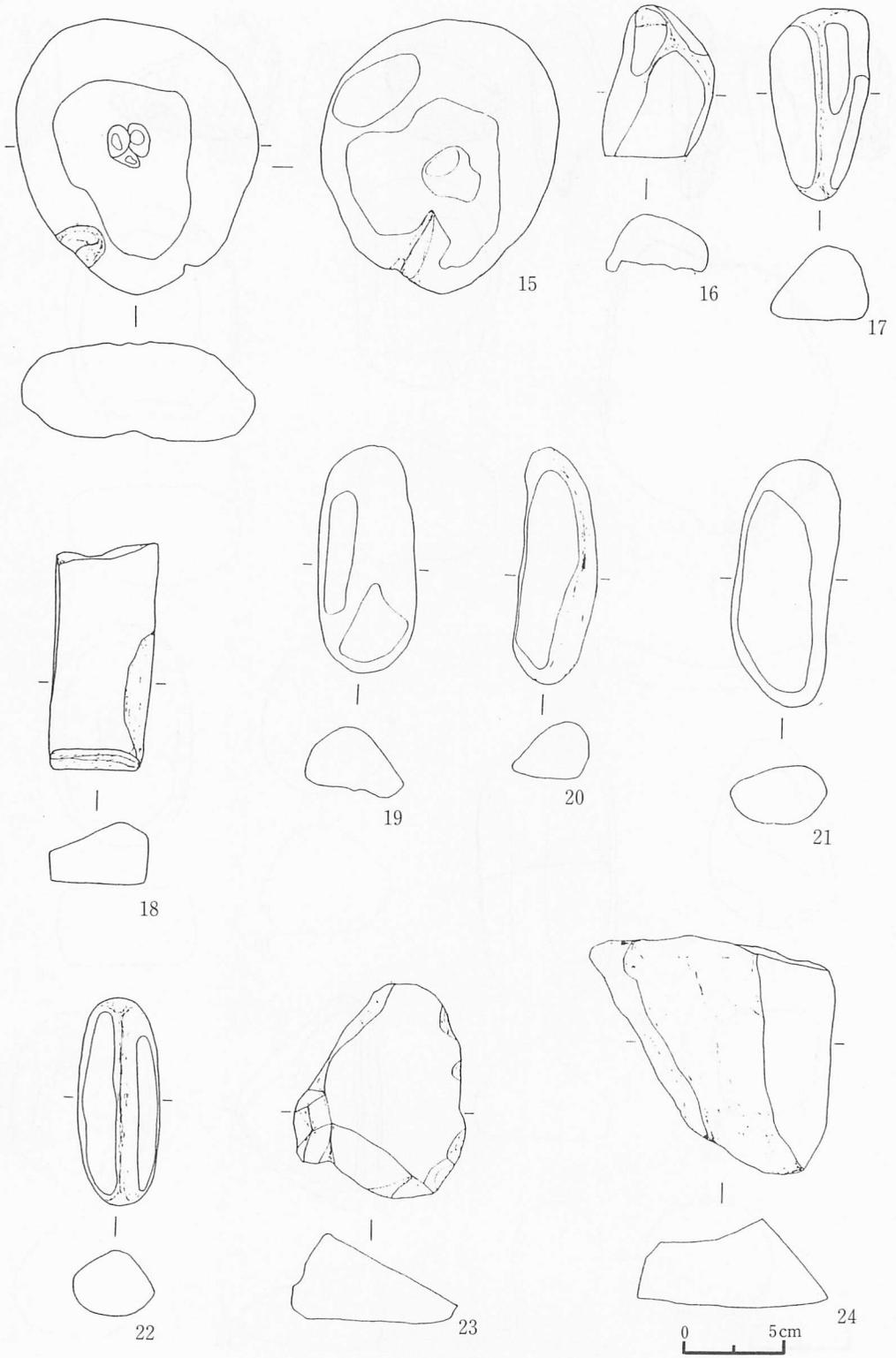
小杉平第二遺跡1号生活址



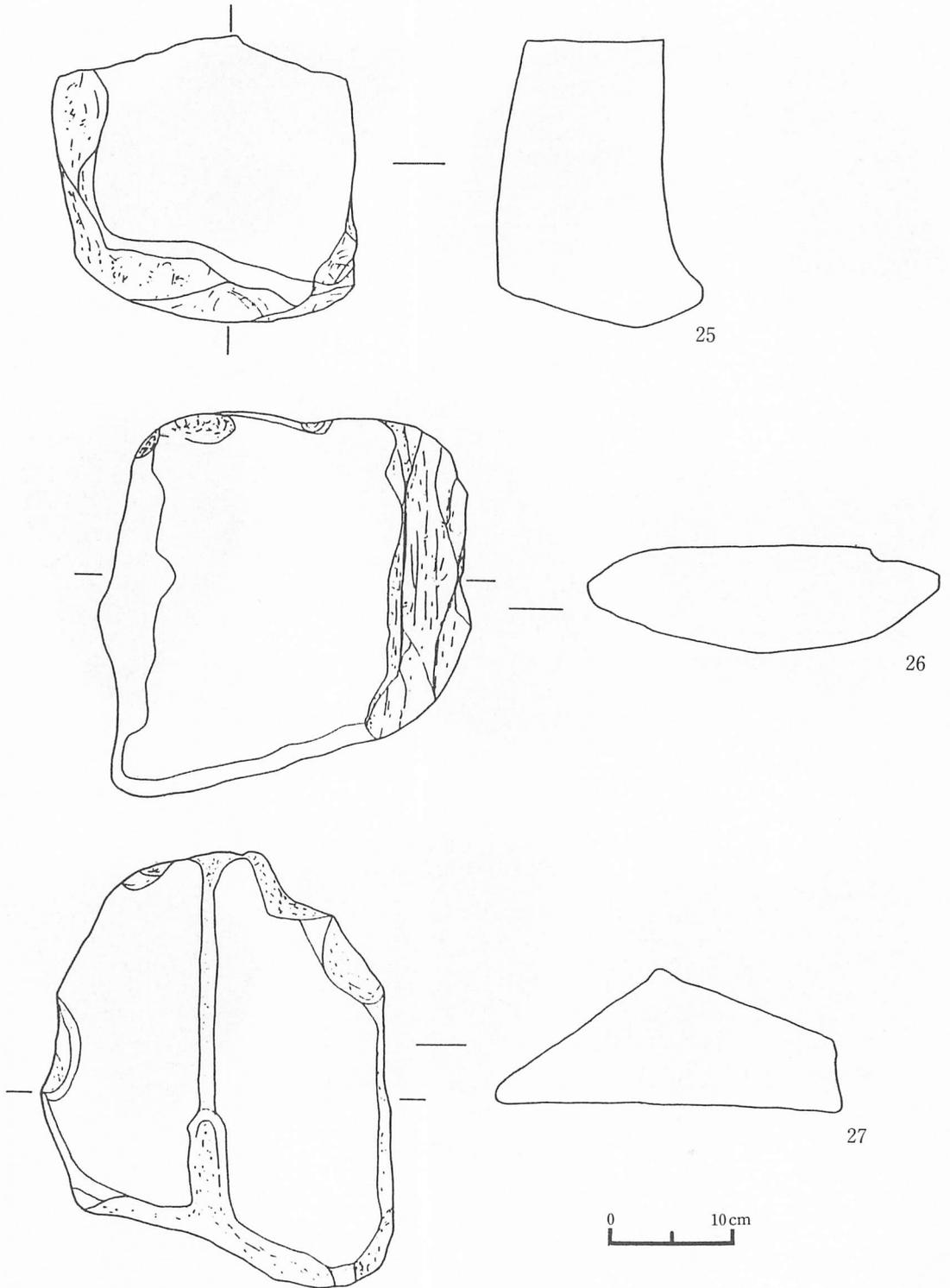
第3图 小杉平第二遺跡出土土器拓影



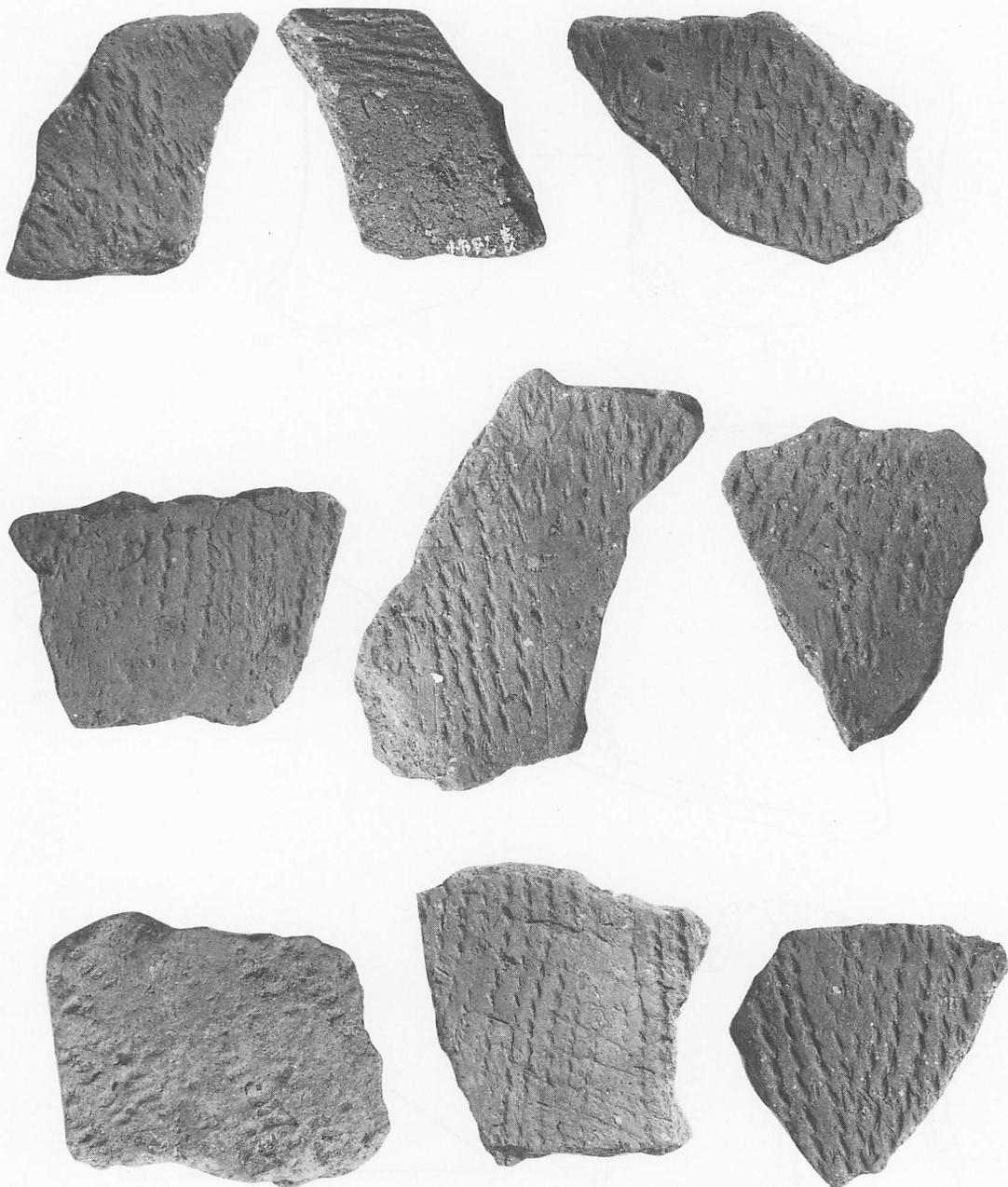
第4図 小杉平第二遺跡出土石器実測図



第5图 小杉平第二遺跡出土石器実測図



第6図 小杉平第二遺跡出土石器実測図



小杉平第二遺跡出土土器

18 細野沢遺跡 ほそのざわ

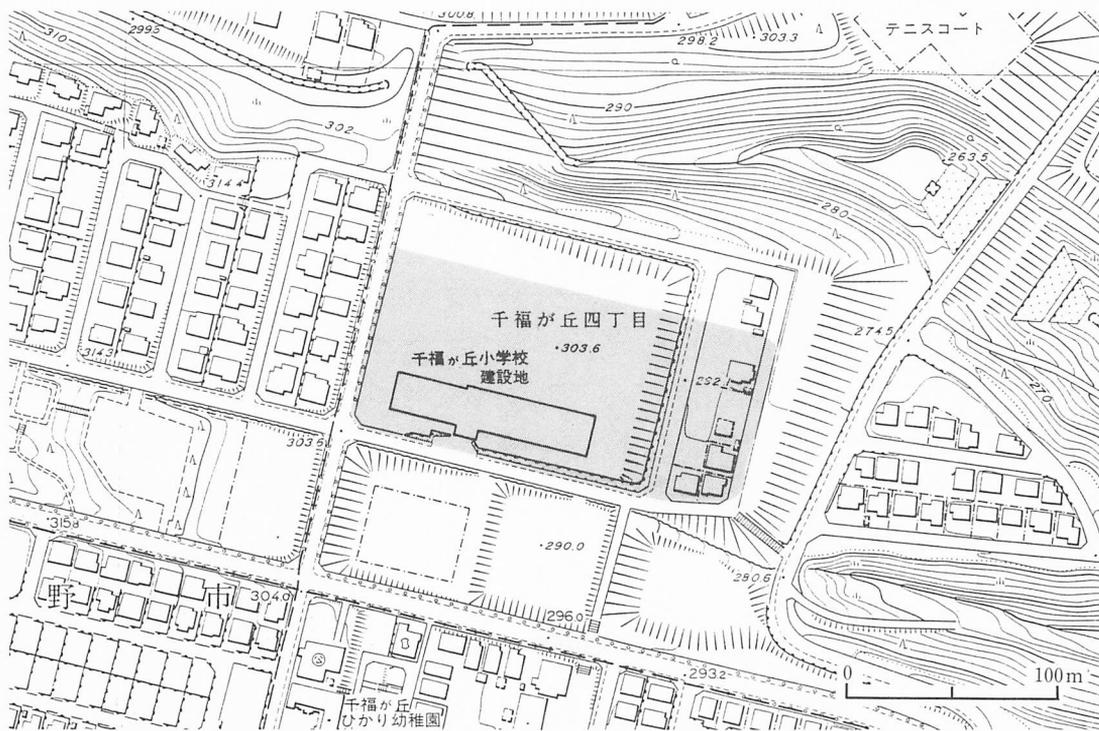
所在地 裾野市千福字細野沢

位置と立地 細野沢遺跡は、千福市場平第一遺跡の東側に隣接する東西約五〇m、南北約三〇〇mのやせ尾根に立地し、標高は約二九五mであり、南北に谷が入り込んでいる。

発見と調査 千福高原都市開発に伴う現地調査が行われ、地形的に遺跡の存在する可能性がある台地を予備調査したところ、調査区から土器片が出土し、遺跡の存在が明確となった。このため東京急行電鉄株式会社の依頼により、裾野市教育委員会が昭和五六年（一九八）五月二三日から九月一日まで発掘調査を実施した。

層序と遺構 層序 本遺跡の層序は次のとおりである。I層は耕作土で黒色を呈する。II層は明るい脱色性茶褐色で、縮まりが良く粘性がなく砂質のザラザラした層である。III層は明るい茶褐色土で、砂沢スコリア層に相当する。IV層は茶褐色土で、縮まりは非常に良く粘性は高い。V層は茶褐色土で、よく縮まり粘性が低い。VI層は黒褐色土で、いわゆる黒色土層に相当する。VII層は赤褐色土で、かなり赤味を帯びた、縮まりがなく粘性がある土層である。VIII層は赤褐色土で、VII層よりも明るい。IX層は明黄褐色土で、いわゆる休場層である。X層は黄褐色土で、第一スコリア層に相当する。XI層は明黄褐色土で、縮まりは極めてよく粘性も高い。

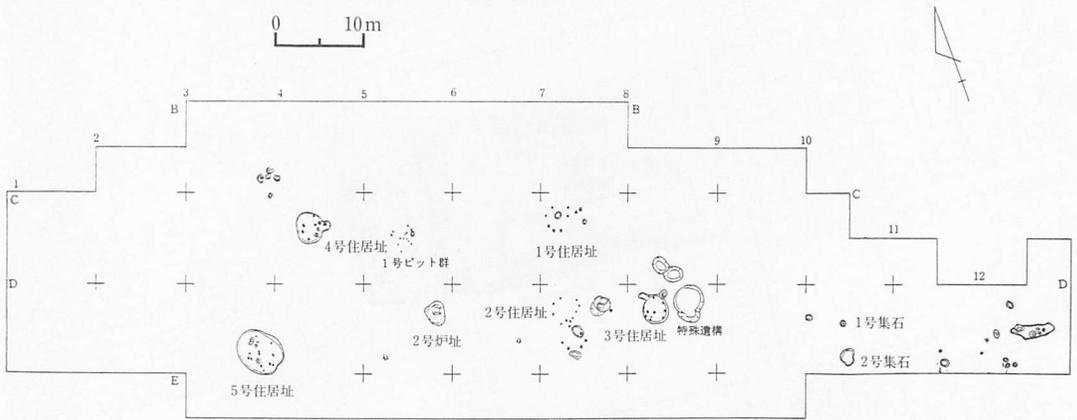
遺構 本遺跡から次の遺構が検出された。住居址五カ所、集石九カ所、炉址四カ所、土坑一八カ所、ピット群一カ所、特殊遺構一カ所が



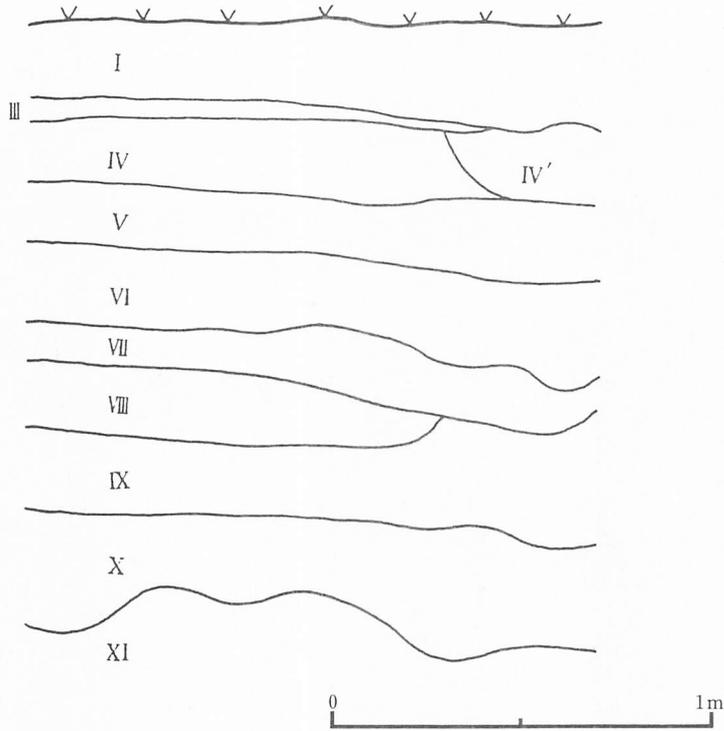
遺跡範囲図



細野沢遺跡全景



細野沢遺跡遺構全体図



細野沢遺跡土層断面図

検出されている。

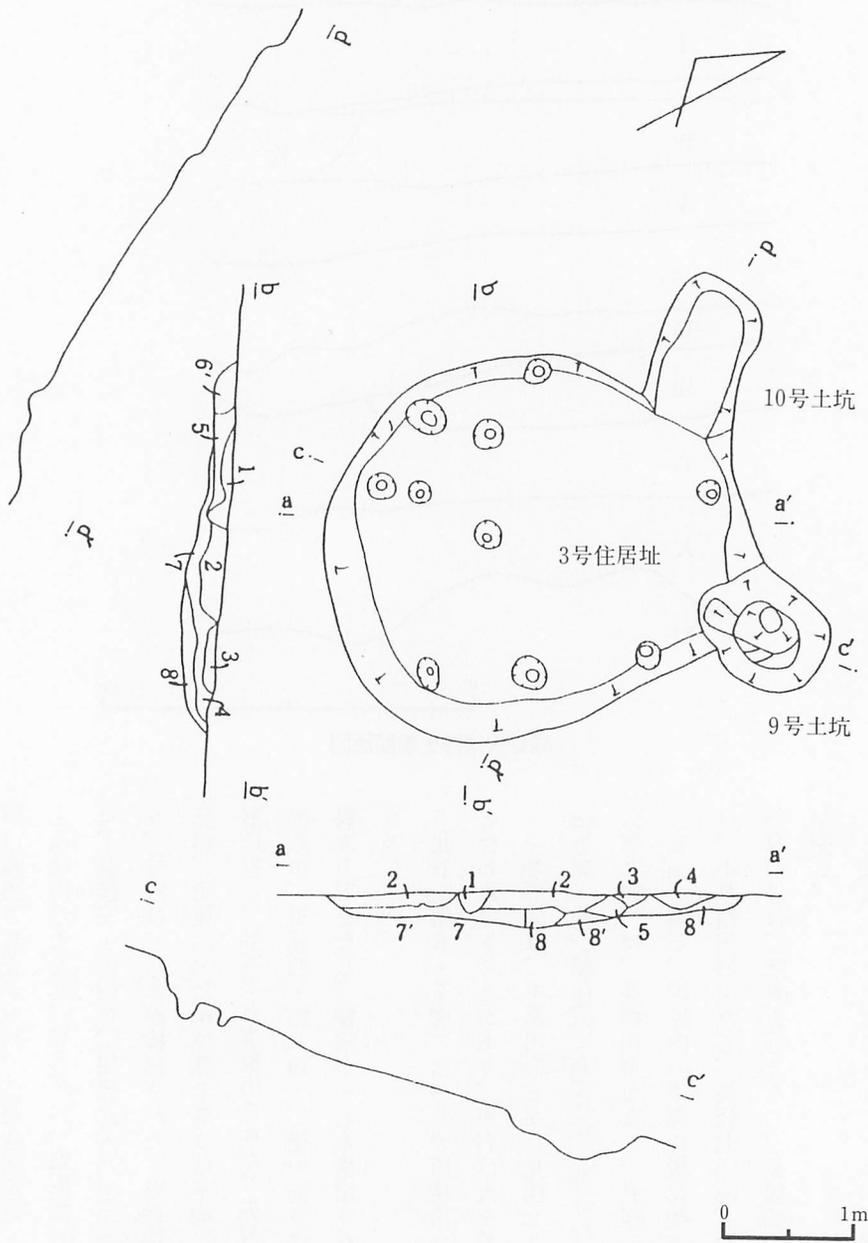
一号住居址は、長径約3m、短径約2・5mを測る楕円形をなし、炉は検出されなかった。二号住居址は、南北3・5m、東西3・4mとほぼ円形をなし、柱穴を一一個配置している。三号住居址(第1図)は、長径三・三四m、短径二・八七mを測る。壁の高さは二八cmであり、柱穴は一〇本が検出された。四号住居址(第2図)は長径三・四三m、短径二・八mで壁の高さは平均二〇cmを測る。平面形は隅丸方形に近く、柱穴が八本検出された。五号住居址(第3図)は、長径五・五八m、短径四・四八mで、壁の高さは平均四〇cmを測る。平面形は隅丸方形をなし、柱穴が一七本検出されているが、二時期に使われたものらしい。

集石(第6・7図)は一八カ所検出されているが、土坑を伴うものと伴わないものがあり、集石は火を受けたものがある。

一号炉址は、不整円形をなし長径七八cm、短径六〇cm、深さ約二五cmを測った。炉址内下部によく焼けた焼土が残っていた。二号炉址(第8図)は、長楕円形をなし、長径一七〇cm、短径一〇〇cm、深さ三五cmを測る。炉址内の下部に炭化物が多く含まれていた。三号炉址は、不整楕円形をなし、長径七〇cm、短径四三cm、深さ一一cmを測る。四号炉址は、隅丸方形をなし、長径四〇cm、短径三五cm、深さ二〇cmを測る。

土坑は一八カ所検出されているが、規模・形は様々である。

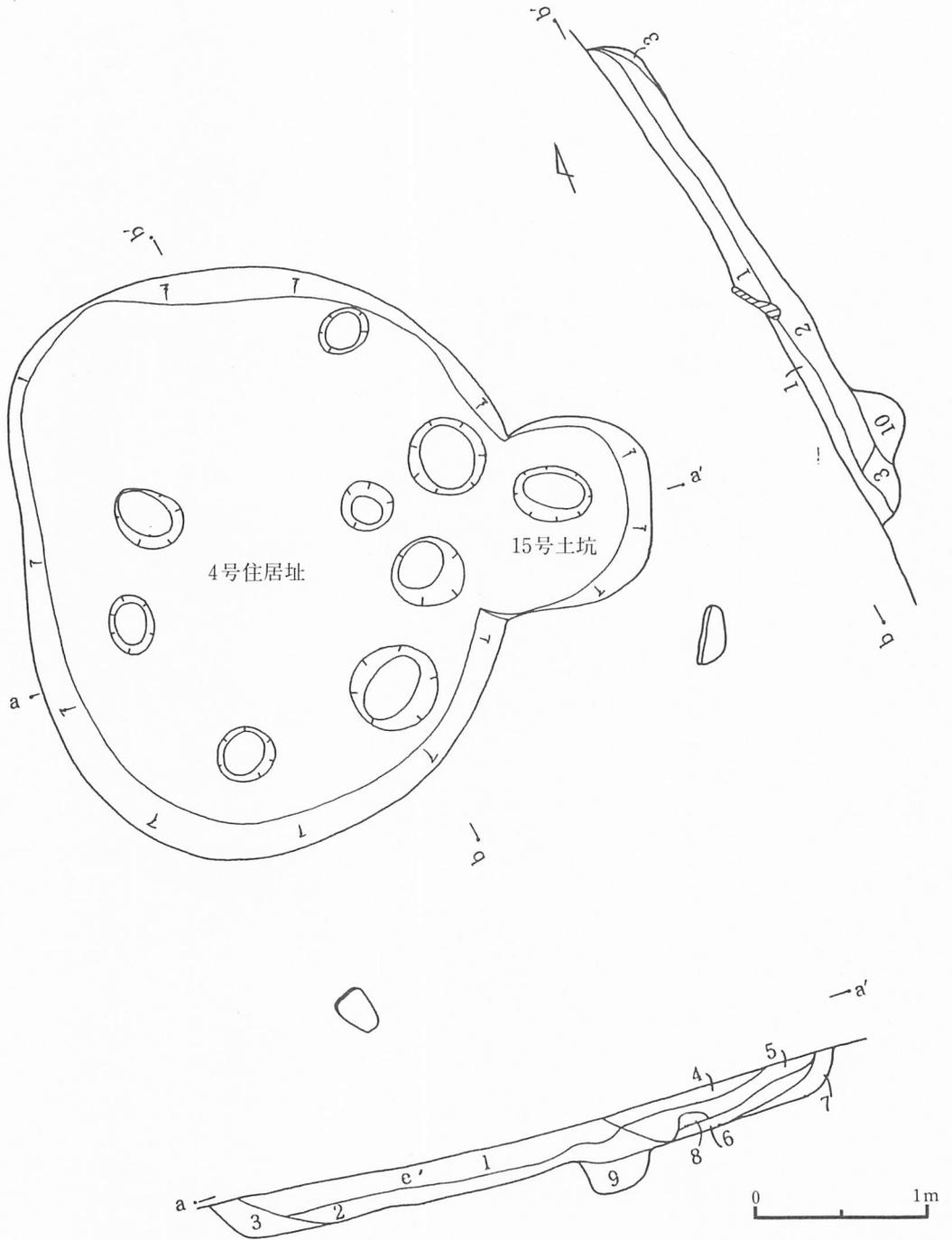
特殊遺構(第9図)は、二基の竪穴の切り合いとして検出され、竪穴内から柱穴、炉址等の施設が検出されなかったため、特殊遺構とし



3号住居址

- 1層 灰褐色土（スコリアを含む。）
- 2層 灰褐色土（明るい。）
- 3層 灰褐色土（粘性がない。）
- 4層 赤褐色土（スコリアを含む。）
- 5層 灰褐色土（スコリアを多く含む。）
- 6層 灰褐色土（スコリアを含まない。）
- 7層 茶褐色土（スコリア、炭化物を含む。）
- 8層 茶褐色土（明るい。）

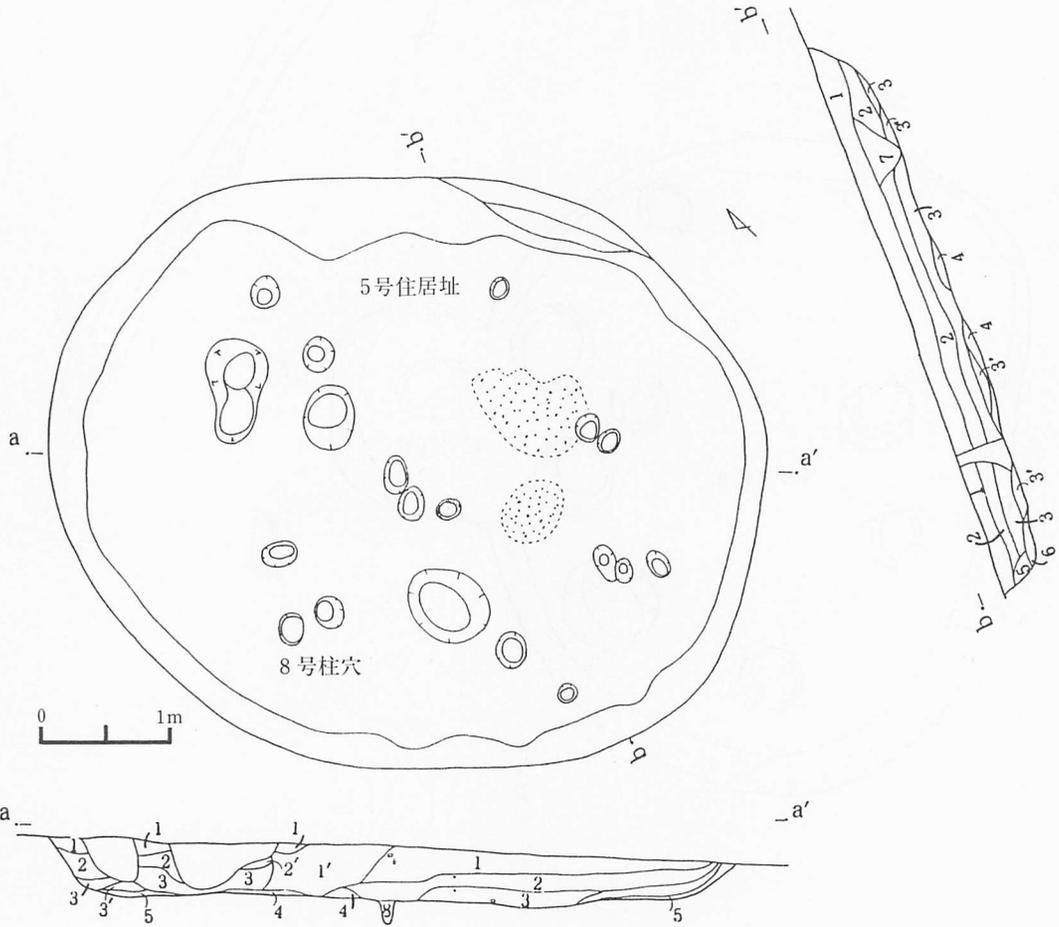
第1図 細野沢遺跡3号住居址遺構図



4号住居址

- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1層 灰褐色土 (白色、赤色パミスを含む。) | 5層 灰褐色土 (4層より暗い。) |
| 2層 茶褐色土 (パミスを含む。) | 6層 黒褐色土 (パミスを含む。) |
| 3層 茶褐色土 (2層より暗い。) | 7層 黒褐色土 (6層より柔らかい。) |
| 4層 灰褐色土 (白色パミスを多く含む。) | |

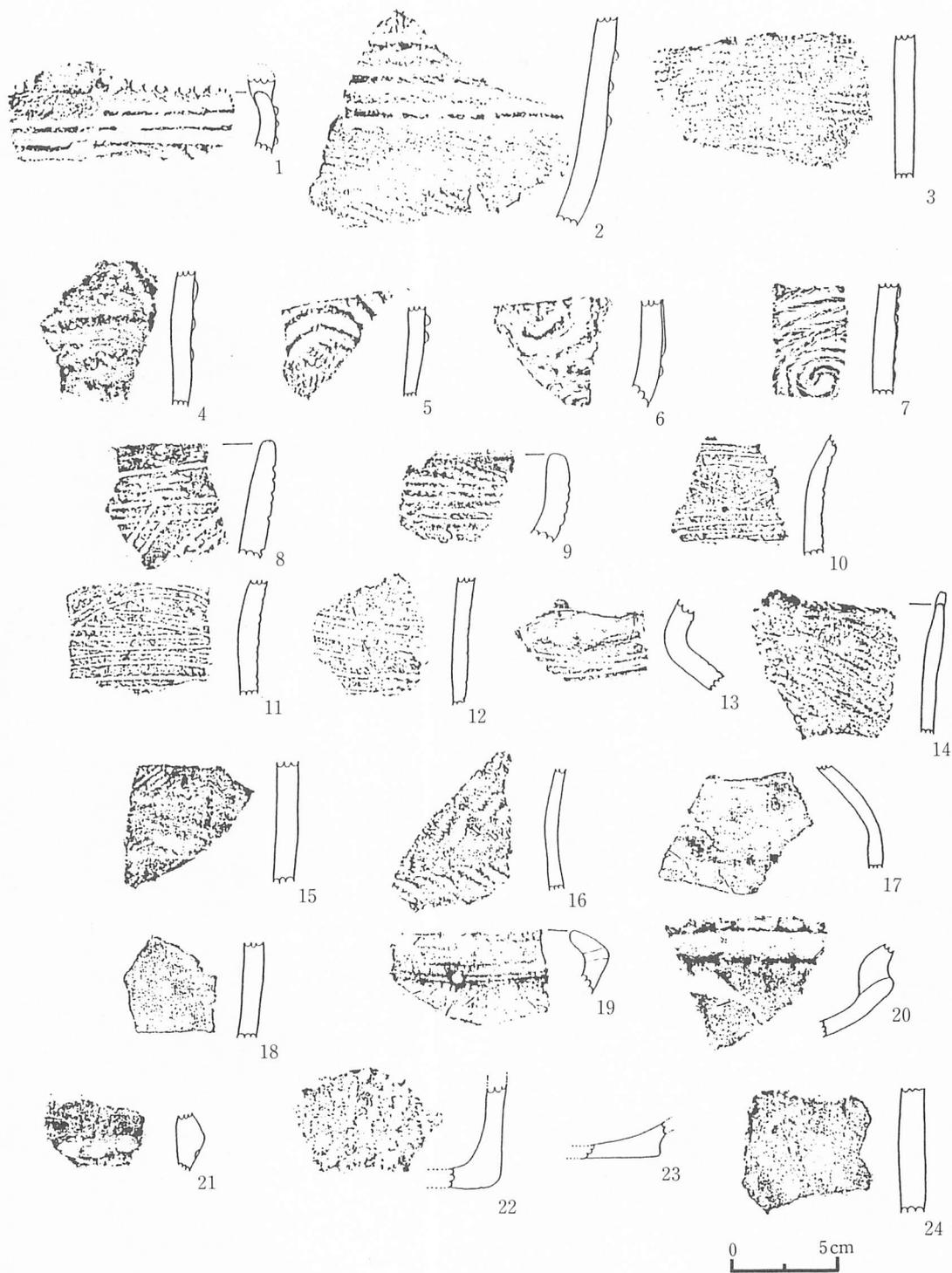
第2図 細野沢遺跡4号住居址遺構図



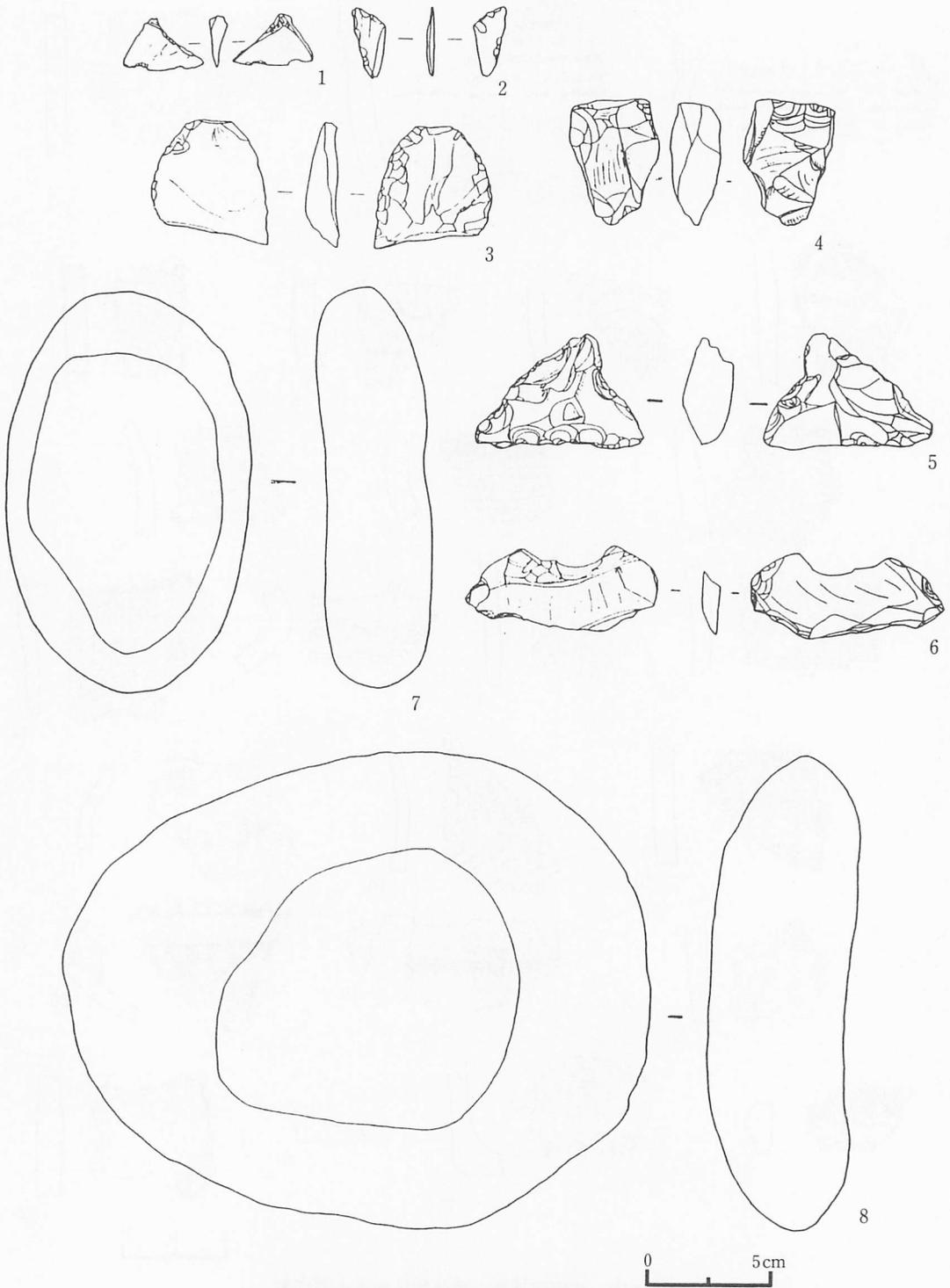
5号住居址

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1層 灰褐色土 (赤色パミス、炭化物を含む。) | 5層 黄褐色土 (黄色ブロックを含む。) |
| 2層 茶褐色土 (赤色スコリアを多く含む。) | 6層 黄褐色土 (炭化物を含む。) |
| 3層 茶褐色土 (2層より明るい。) | 7層 茶褐色土 (ブロック状の土層。) |
| 3'層 茶褐色土 (黄色スコリアを含む。) | 8層 茶褐色土 (8号柱穴の覆土である。) |
| 4層 黒褐色土 (炭化物を多く含む。) | |

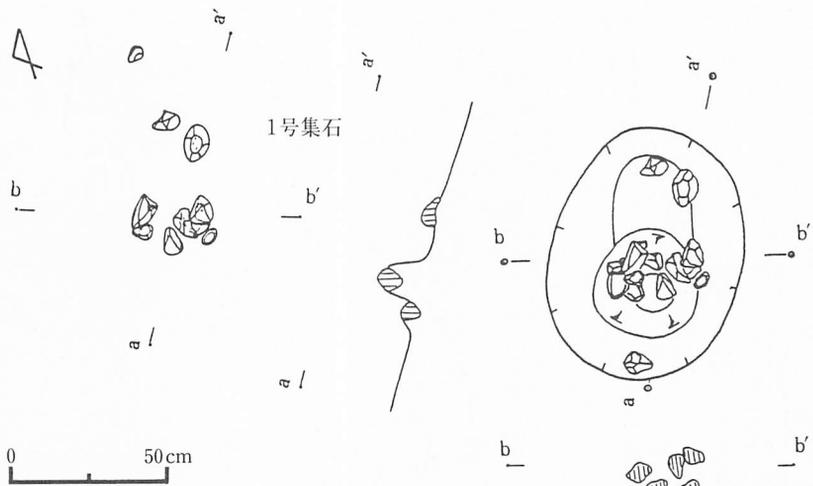
第3図 細野沢遺跡5号住居址遺構図



第4図 細野沢遺跡5号住居址出土土器拓影



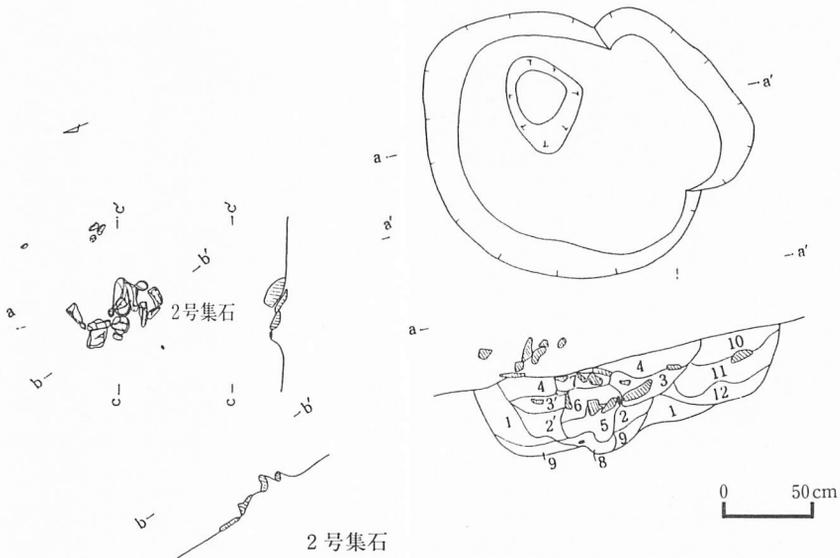
第5図 細野沢遺跡5号住居址出土石器実測図



1号集石

- 1層 暗茶褐色土（少量の赤色微粒子を含む。）
- 2層 明茶褐色土
- 3層 茶褐色土
- 4層 茶褐色土（径2～3mmの黒灰色粒子を含む。）
- 5層 明茶褐色土（粘土質のブロック、スコリアを含む。）
- 6層 暗茶褐色土（黒灰色、赤色粒子を含む。）

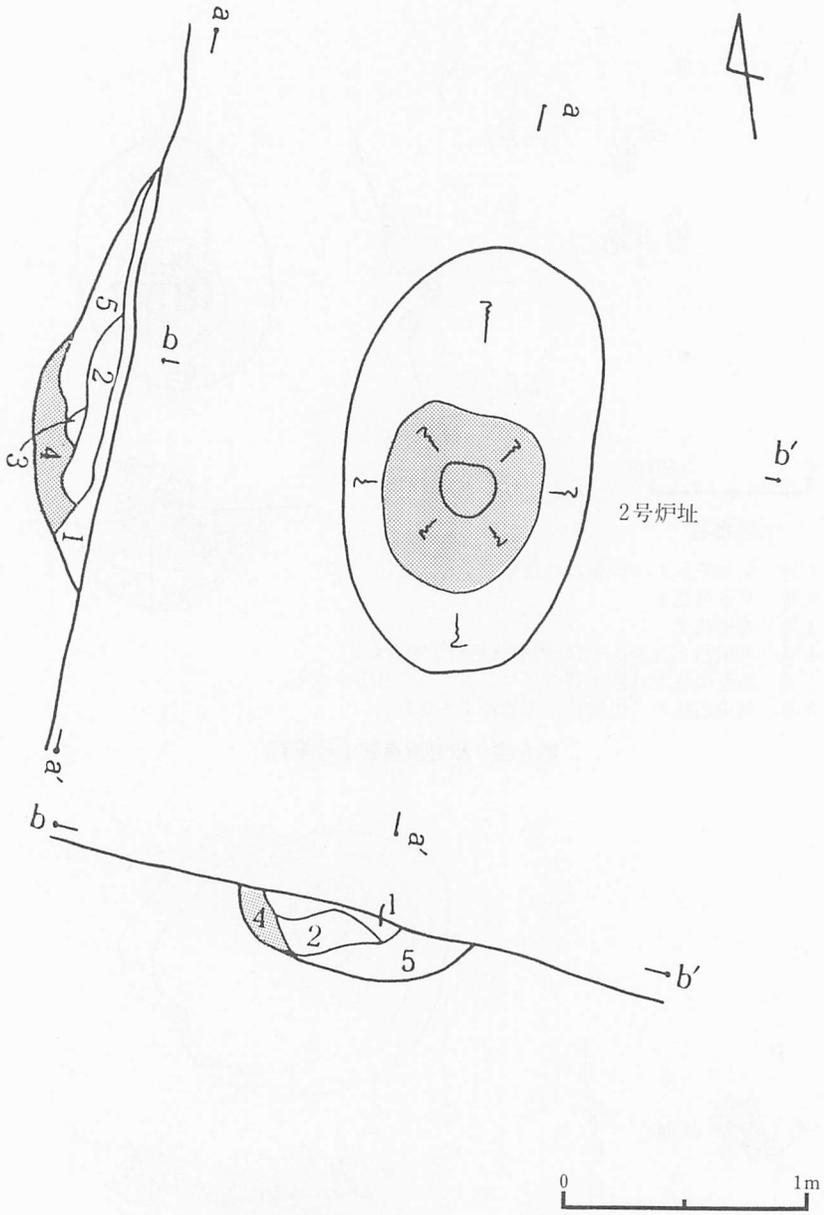
第6図 細野沢遺跡1号集石



2号集石

- 1層 明褐色土（炭化粒子を含む。）
- 2層 暗茶褐色土
- 3層 暗褐色土
- 4層 茶褐色土（炭化微粒子を含む。）
- 5層 茶褐色土
- 6層 黒褐色土（茶褐色ブロックを混する。）
- 7層 黒色土
- 8層 暗褐色土（黒色ブロックを混する。）
- 9層 暗褐色土（黒みを帯びる。）
- 10層 褐色土（炭化粒子を含む。）
- 11層 暗褐色土
- 12層 茶褐色土

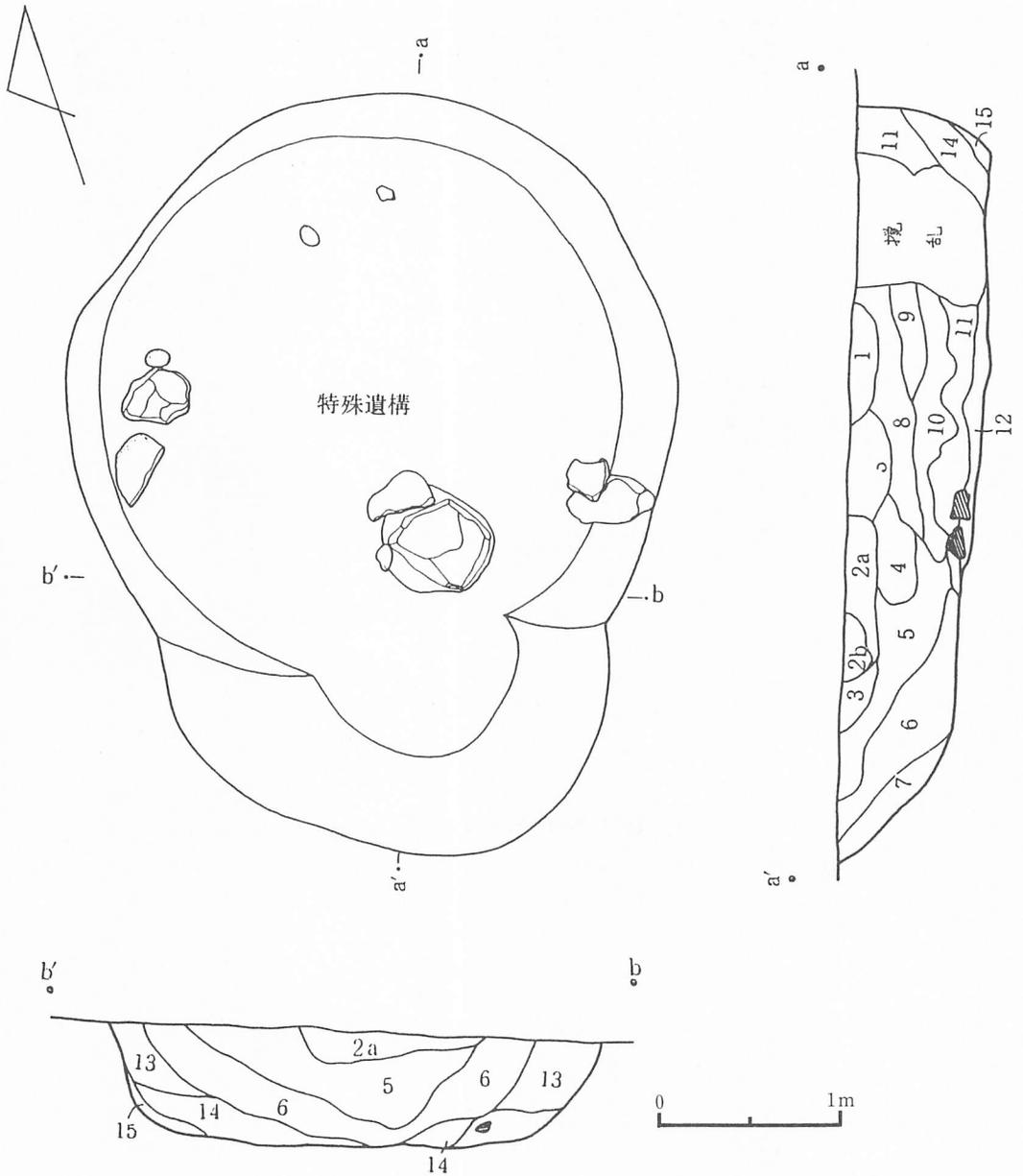
第7図 細野沢遺跡2号集石



2号炉址

- 1層 茶褐色土（焼土粒、炭化物を少量含む。）
- 2層 焼土
- 3層 焼土（炭化物を多く含む。）
- 4層 茶褐色土（炭化物と焼土を少量含む。）
- 5層 黒褐色土

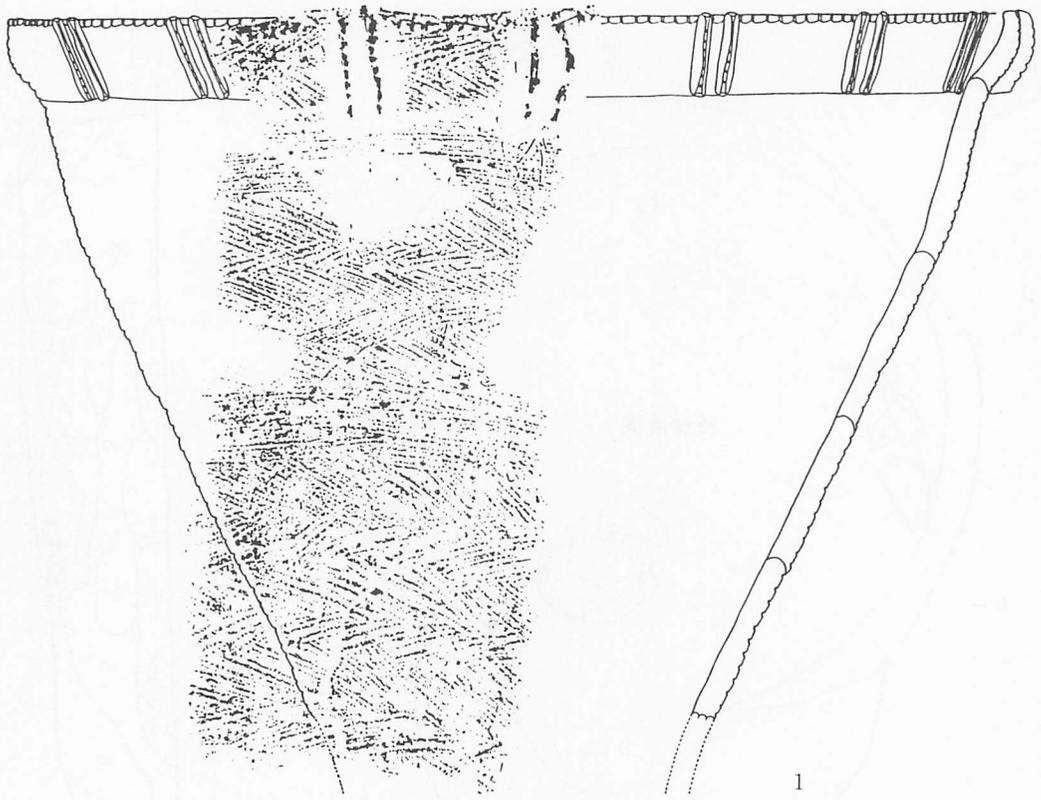
第8図 細野沢遺跡2号炉址遺構図



特殊遺構

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1層 黄褐色土 (砂質、白色微粒子を含む。) | 9層 暗褐色土 (炭化物を少量含む。) |
| 2層 黒褐色土 (炭化物を含む。) | 10層 黒褐色土 (炭化物を多量含む。) |
| 3層 茶褐色土 (黒色スコリアを多く含む。) | 11層 明褐色土 (大粒の炭化物を含む。) |
| 4層 黄茶褐色土 | 12層 黒褐色土 (炭化物を少量含む。) |
| 5層 茶褐色土 | 13層 茶褐色土 (炭化物を微量含む。) |
| 6層 暗茶褐色土 (ハードローム質。) | 14層 暗褐色土 |
| 7層 茶褐色土 (砂質、赤色スコリアを含む。) | 15層 赤褐色土 |
| 8層 茶褐色土 (白色微粒子を含む。) | 16層 暗褐色土 (赤色スコリアを含む。) |

第9図 細野沢遺跡特殊遺構図



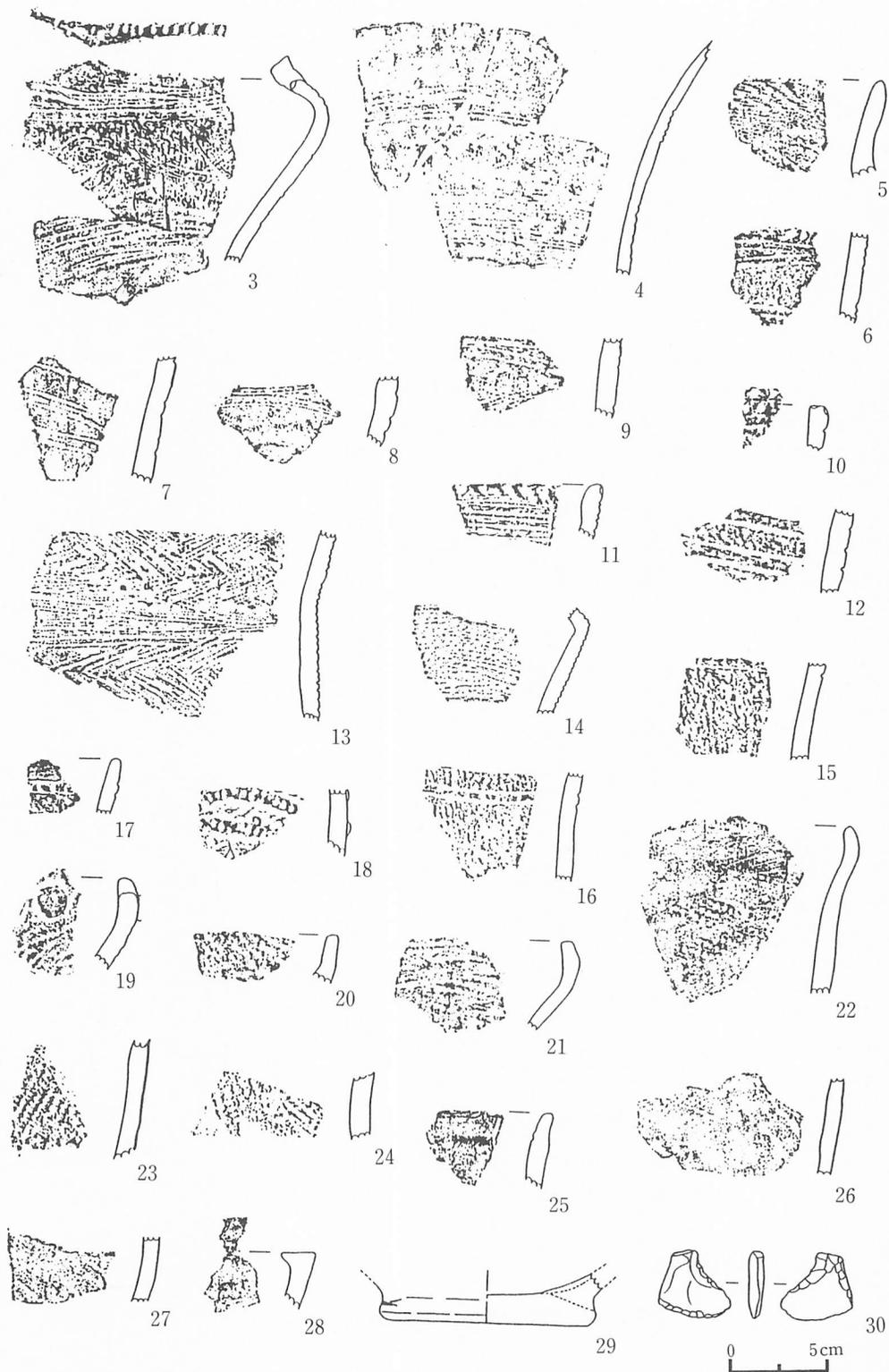
1



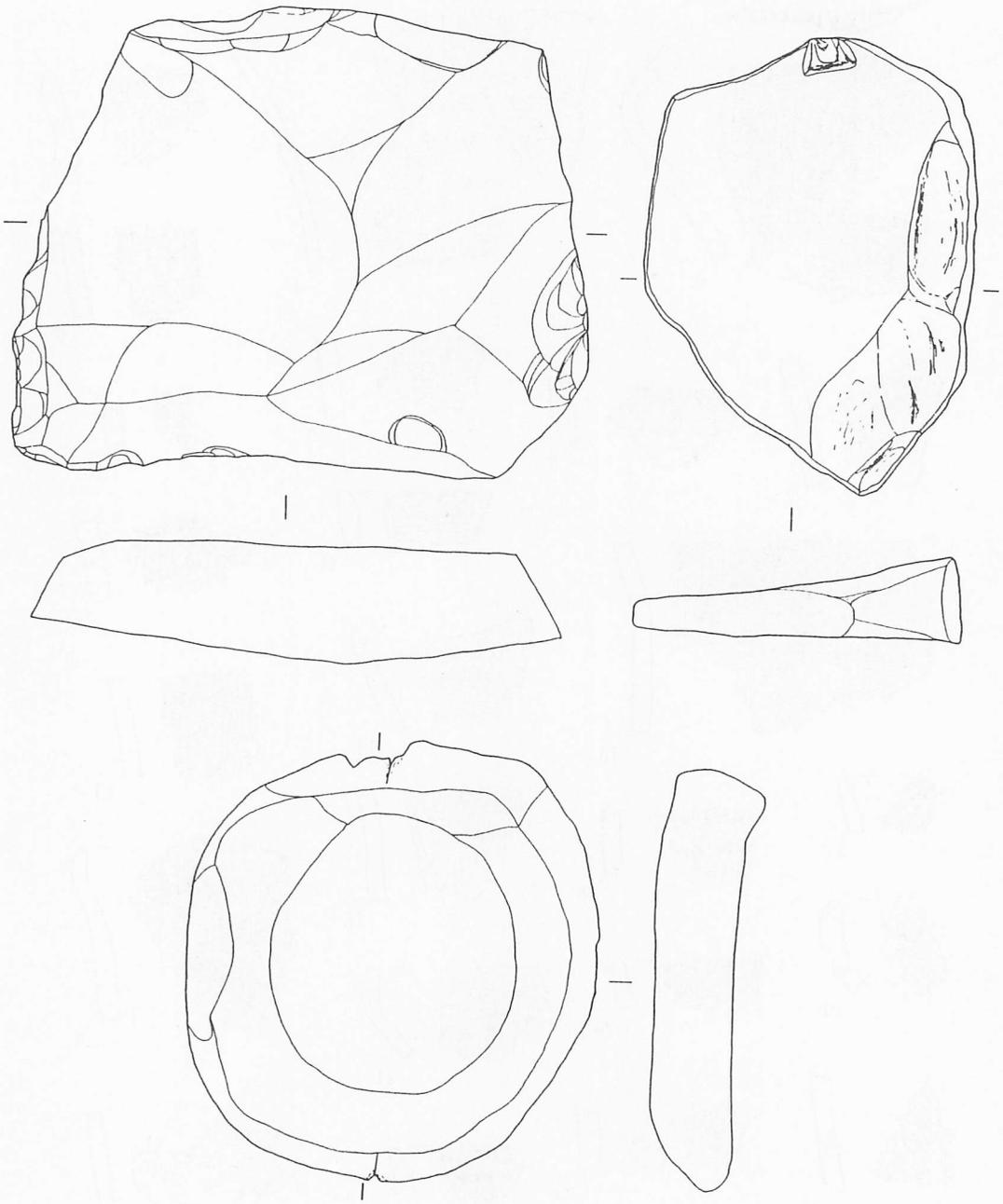
2

0 5cm

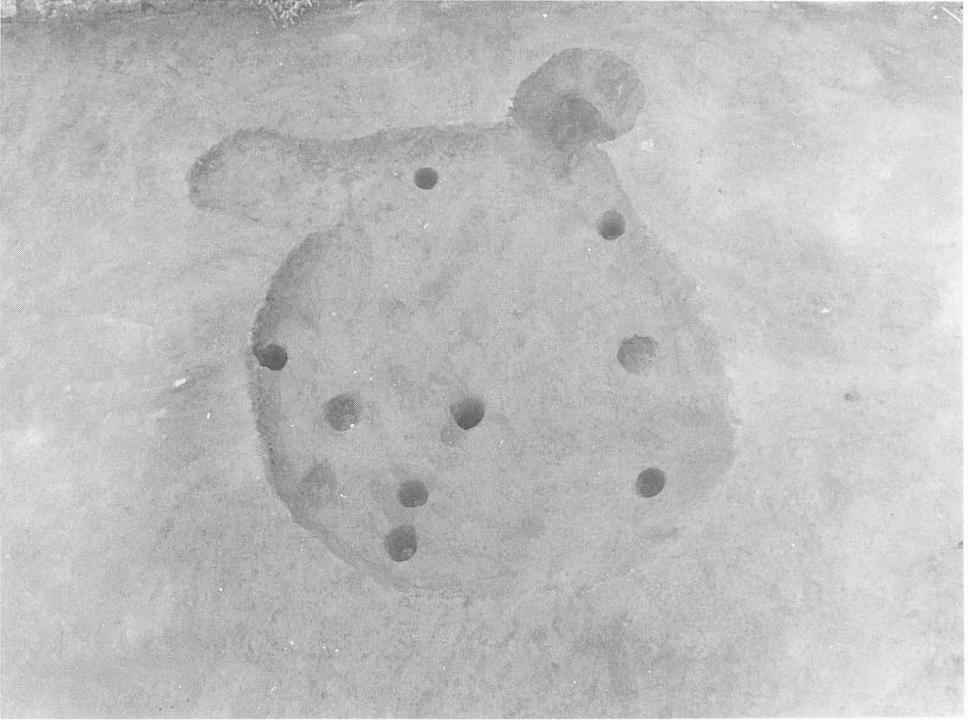
第 10 図 細野沢遺跡特殊遺構出土土器拓影



第 11 図 細野沢遺跡特殊遺構出土土器拓影・石器実測図



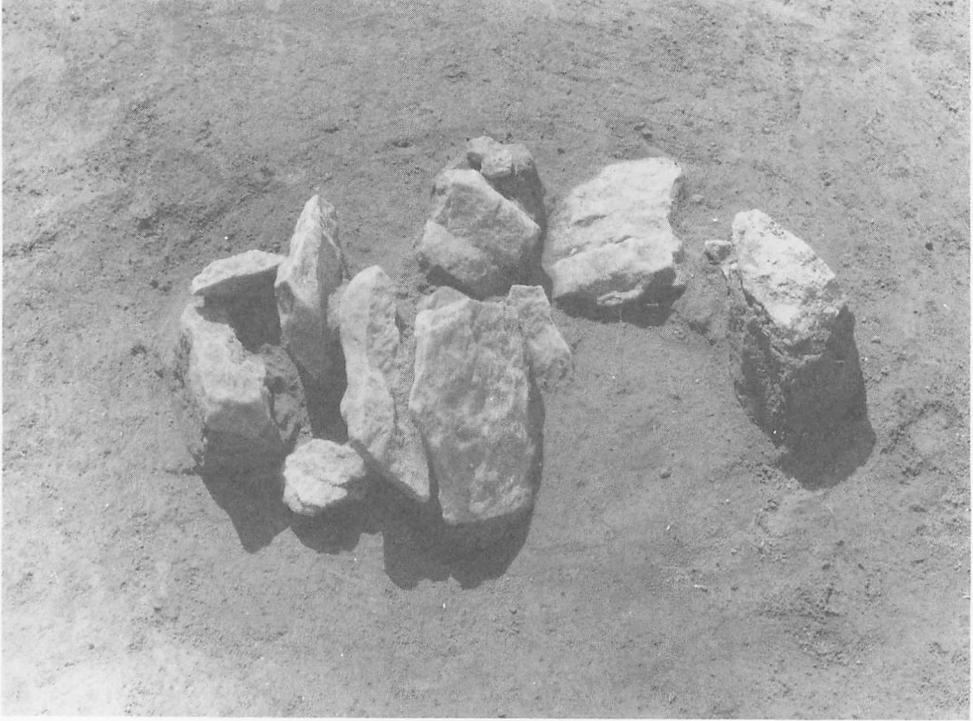
第 12 図 細野沢遺跡特殊遺構出土石器実測図



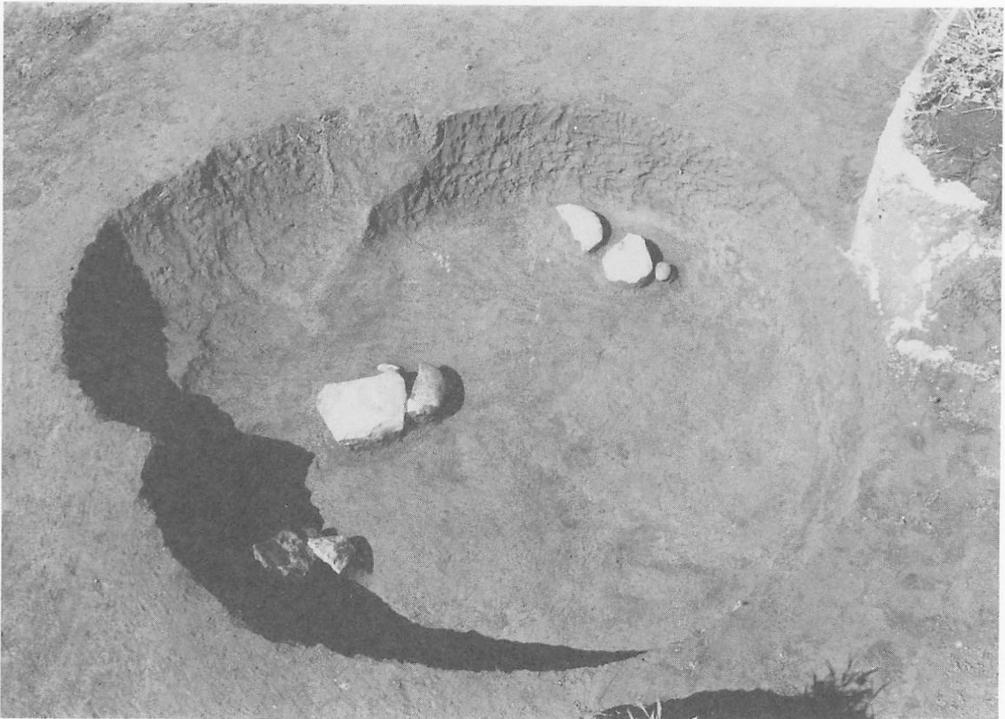
図版1 細野沢遺跡 3号住居址



図版2 細野沢遺跡 4号住居址



図版3 細野沢遺跡2号集石



図版4 細野沢遺跡特殊遺構

た。堅穴のうち、南側に位置するものは、不整楕円形をなし、長径三・六m、短径一・九m、深さ六五cmを測る。他の北側に位置する堅穴は、円形で径約三・三m、深さ約八〇cmを測る。覆土内から縄文時代前期後半の土器や磨石、石皿が出土している。

遺物 土器 本遺跡から縄文時代早期中葉から縄文時代中期前葉にかけての土器片が総数で三七四三点出土している。特にその特徴から四群に分類した。

I 群 (第13図17図) は、縄文時代早期に属するものを一括した。またその特徴から一二類に分類した。1類 (第13図1) は、いわゆる絡条体圧痕文の認められる土器である。2類 (第13図2~4) は、先端の鋭いヘラ状施工具による細沈線を主文様とするもの。3類 (第13図5~15) は丸棒状施工具による幅二mm程の短沈線を用いて文様を構成するものを一括した。4類 (第13図16~18) は、櫛歯状施工具による平行沈線を斜位及び縦位に交差させて文様を施したものである。5類 (第13図19~25) は、表面が無文で裏面に条痕をもつもので、条痕はアナダラ属の貝殻によると思われる。6類 (第14図26~38) は表裏に条痕が認められるものを一括した。7類 (第14図39~47、第15図48~50) は、いわゆるアナダラ属の貝殻腹縁を使用しているものを一括した。8類 (第15図51~53、第16図66~77) は、表裏に擦痕をもつものを一括した。擦痕は、幅一cm程のハケ状の繊維束によるものと思われる。9類 (第15図54~55) は、隆帯を有するものを一括した。10類 (第15図56~63) は、無文の土器を一括した。11類 (第16図78、第17図80~90) は、条痕文を地文とし、文様は胴部上半に列点文が施され

る。12類 (第15図54) は、白灰色をなし、無文の平底である。

II 群 (第18図38図) は、縄文時代前期後半の土器を一括した。またその中の特徴から七類に分類した。1類 (第18図1、第19図) は、半截竹管状施工具による刺突爪形文を主体文様としている。2類 (第18図3、第20図25図、第33図7~11) は、半截竹管状施工具による平行沈線を主たる文様として構成している。3類 (第18図2、第21図7・11、第26図32図) は、主たる文様構成を浮線文によって構成する。4類 (第33図1~6・12~24、第34図) は、縄文のみが施文される類である。5類 (第35・36図) は、無文土器の類である。6類 (第37図) は、口縁部下にソーメン状あるいは隆帯を張りつけ、これに半截竹管による押引文を施している類である。7類 (第38図) は、縄文時代前期末の土器で、土器全体に細かい半截竹管の施工具によって押引文が見られる類である。

III 群 (第39・40図) は、関西系土器と考えられる一群で、その特徴から五類に分けた。1類 (第39図33・42、第40図74~79) は、幅の狭い半截竹管施工具による刺突爪形文を主体文様とする類である。2類 (第39図19・20・22・27・29) は、半截竹管による平行沈線文を主として文様構成する類である。3類 (第39図1~18、第40図43~51・53) は、主たる文様構成を浮線文によって構成する類である。4類 (第39図24~26・28・30~32、第40図52・54~73・82) は、縄文のみが施される類である。5類 (第39図21・23) は、無文土器である。

IV 群 (第41図) は、縄文時代中期中葉に含まれるものを一括し、その文様の特徴から四類に分けた。1類 (第41図1・2) は、いわゆる

撚糸文が施されている類である。2類(第41図3~15)は、主として刻目をもつ隆帯によって文様を構成するものを一括した。3類(第41図16~24)は、楕円区画による隆帯文が施されるものを一括した。4類(第41図25・26)は、地文に縄文が施されているものである。

石器(第42~46図)は、有舌尖頭器、石鏃、石錐、石匙、不定形石器、石斧、磨石、石皿が出土している。有舌尖頭器は、頁岩製で長径四・八cm、短径一・七cmを測る。石鏃は一七点出土し、黒曜石のものが一四点、頁岩のものが三点出土しており、そのうち黒曜石の二点は、極めて精巧に作られている。石錐は四点出土しており、一点が黒曜石で三点が頁岩である。石匙は三五点出土しており、うち縦型が九点、横型が二六点であり、黒曜石が一点、頁岩が五点、緑泥片岩が二九点である。打製石斧も四点出土している。うち大形のものが二点で安山岩質であり、小形のものが二点で玄武岩質である。磨製石斧は一点出土し、石質は緑色凝灰岩で、長径が一五cm、短径が四・八cmである。磨石はほとんどが安山岩であり、大形のもの二〇〇点以上、小形のもの二〇数点を数える。石皿は十数点出土しているが、使用痕の顕著なもの数は数点にとどまる。その他、特殊遺物(第47図)は、遺跡より一点、全体がすりこぎ棒状の製品が出土している。全長一二・九cm、最大幅三・一cmを測る。

遺跡の特徴 細野沢遺跡より住居址五カ所、集石九カ所、炉址四カ所、土坑一八カ所、ピット群一カ所、特殊遺構一カ所が検出された。

住居址においては、壁をほとんどもない住居址や、竪穴状のもの、炉を住居址内にもたないものが検出され、また炉址においても大形の

ものやそうでないもの、各種の集石、土坑、特殊遺構など一つの台地上における生活遺構が検出された。遺物においても縄文時代前期後半の土器を中心に数多く出土している。このことによって、愛鷹山麓における縄文時代前期後半の集落の形が明確となった。

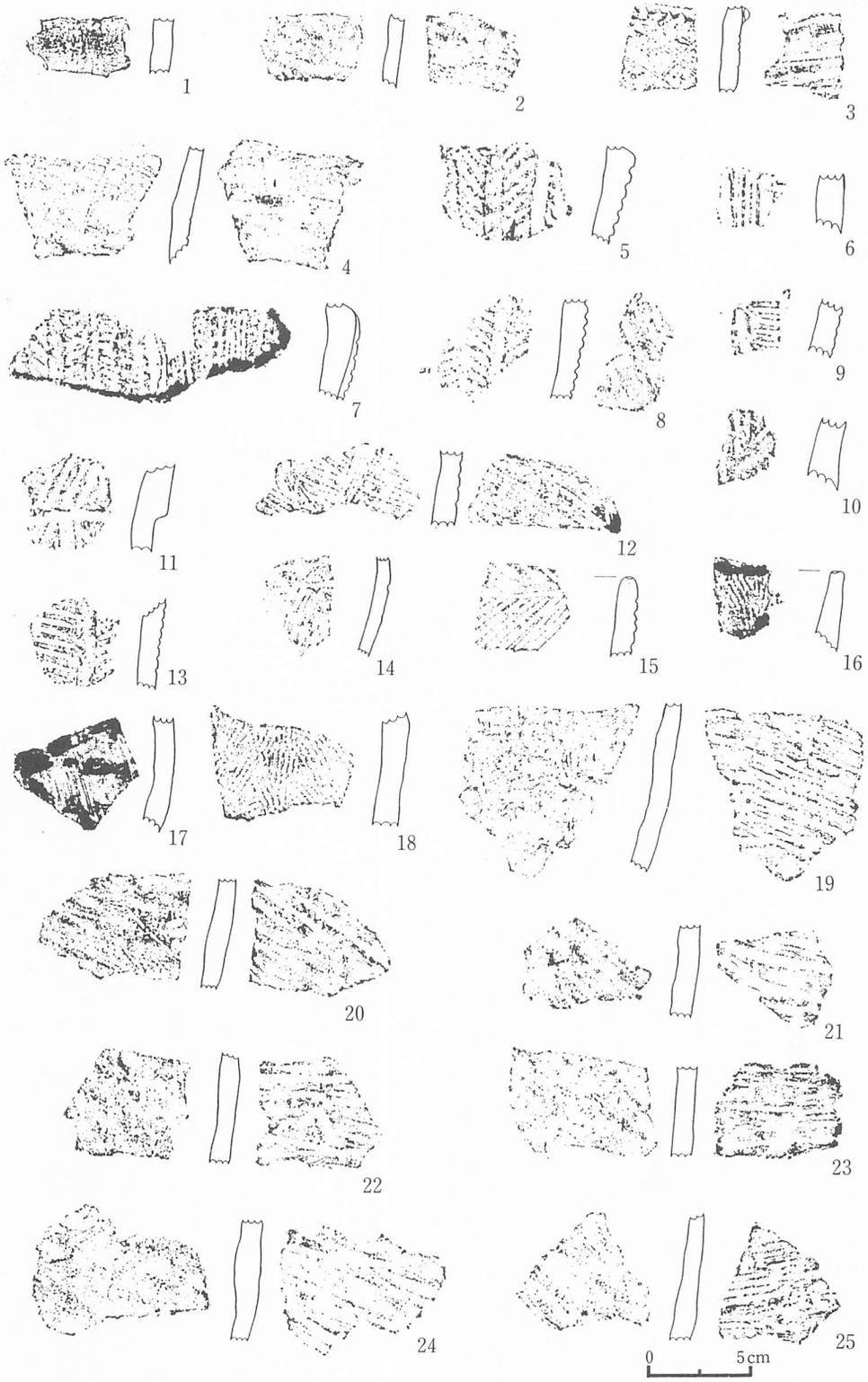
現状 遺跡は高原都市開発が進められ、小学校敷地・住宅地となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

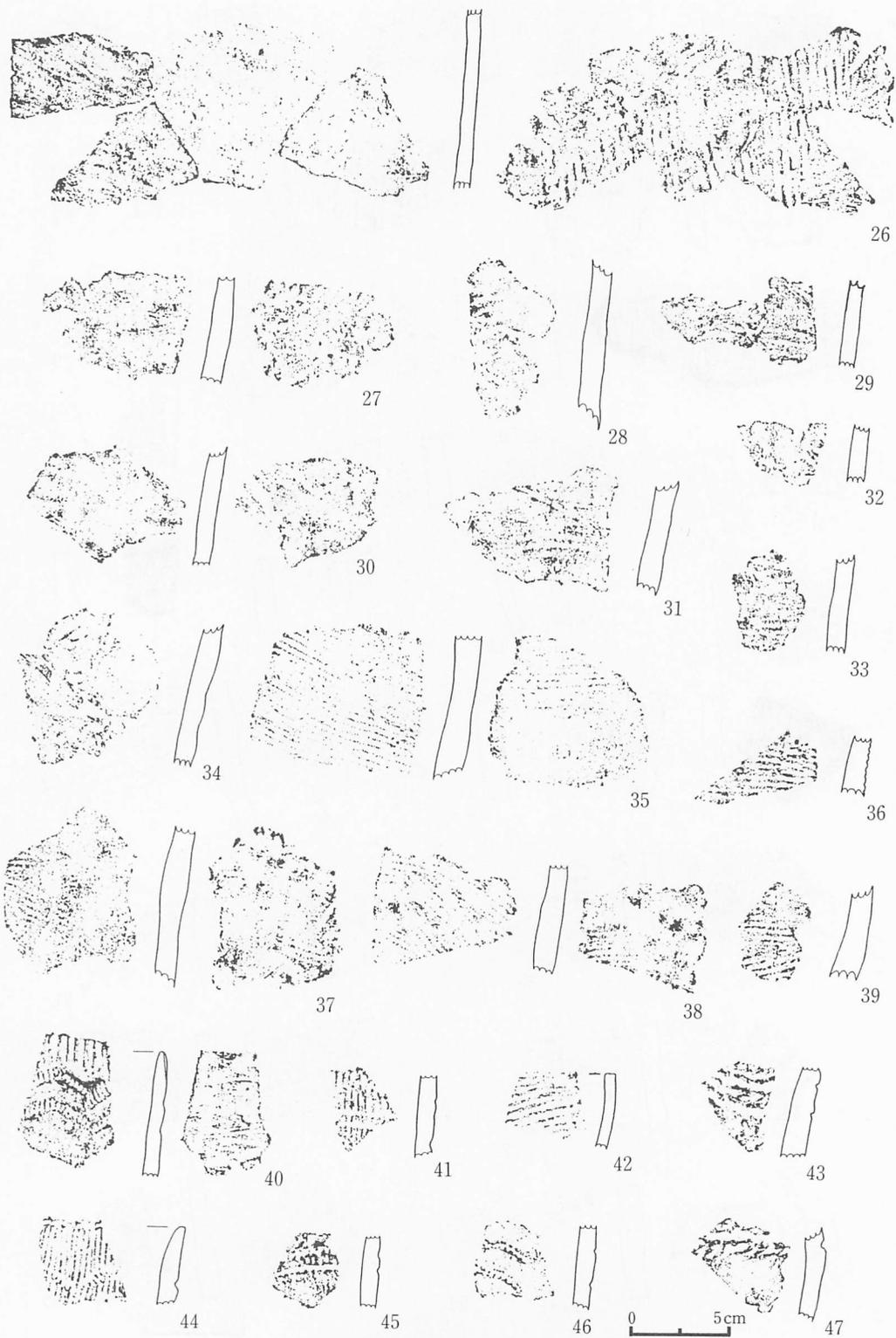
文献 井上輝夫・宮井英一ほか「裾野市千福市場平第一・第二・小杉平第一・第二・細野沢遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九八二

(用語解説)

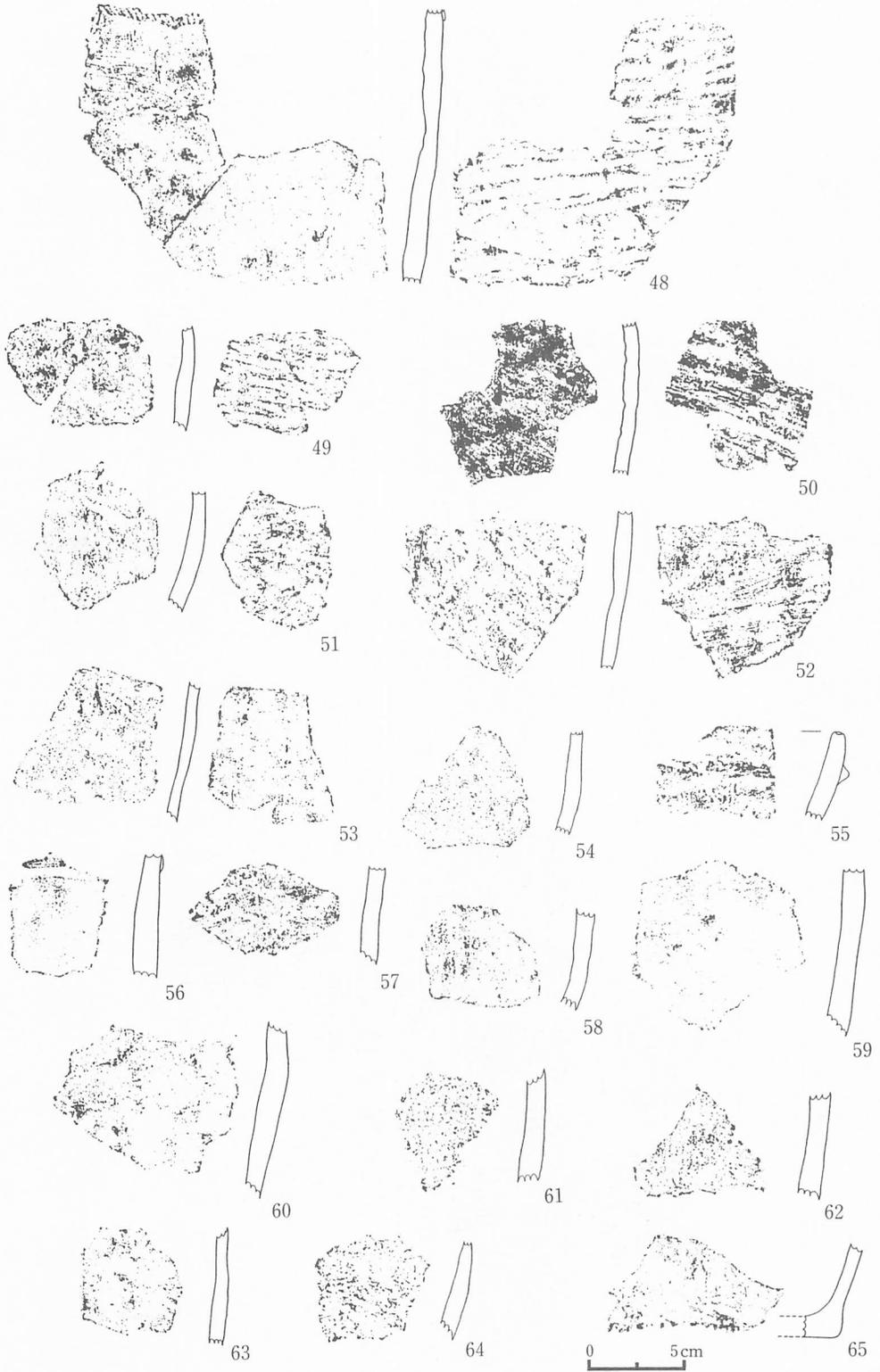
野島式土器 縄文時代早期の土器型式。神奈川県横浜市野島貝塚を標識遺跡とする。器形は波状口縁や平縁で、底部は尖底や丸底である。胴部中位に段がある例もある。文様は口縁部から胴部上位に文様帯をもつ例が多く、特に口唇直下は、流線や沈線を横走りまたは弧線状に垂れ下げて、独自の文様帯をつくる。口縁部文様帯は、流線や沈線文で区画する例が目立ち、胴部は無文や条痕文が目立つ。



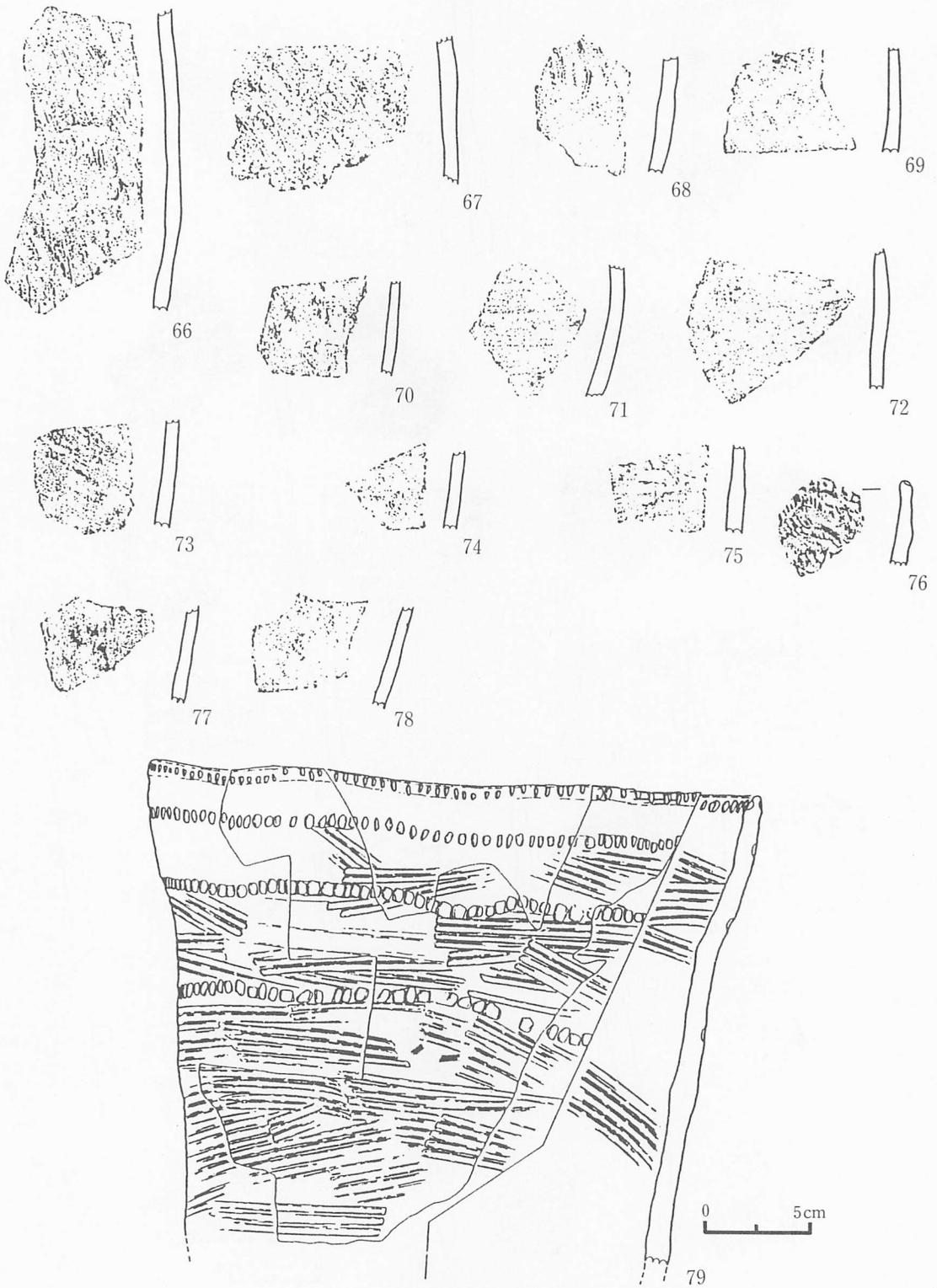
第13図 細野沢遺跡出土I群土器拓影



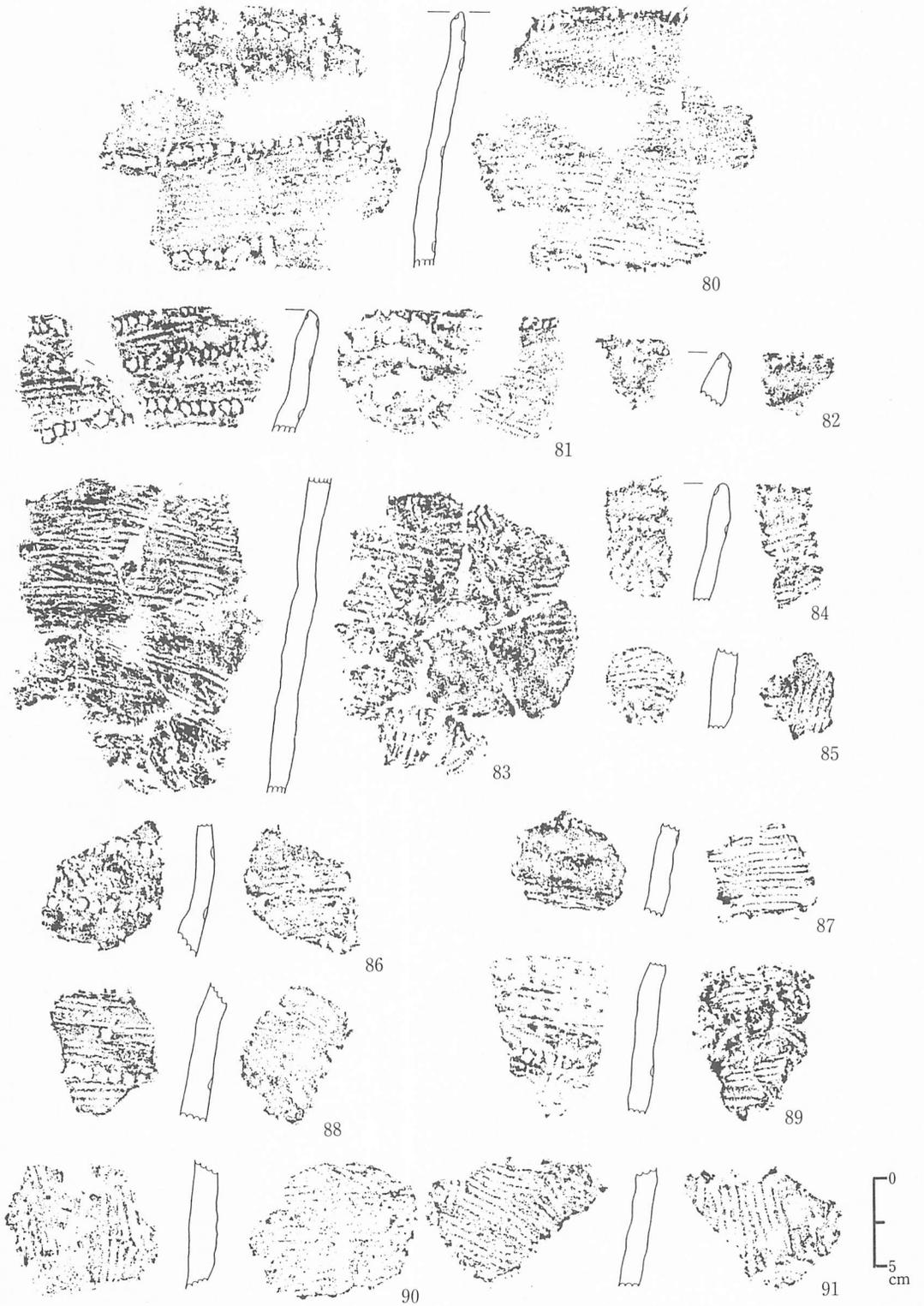
第 14 図 細野沢遺跡出土 I 群土器拓影



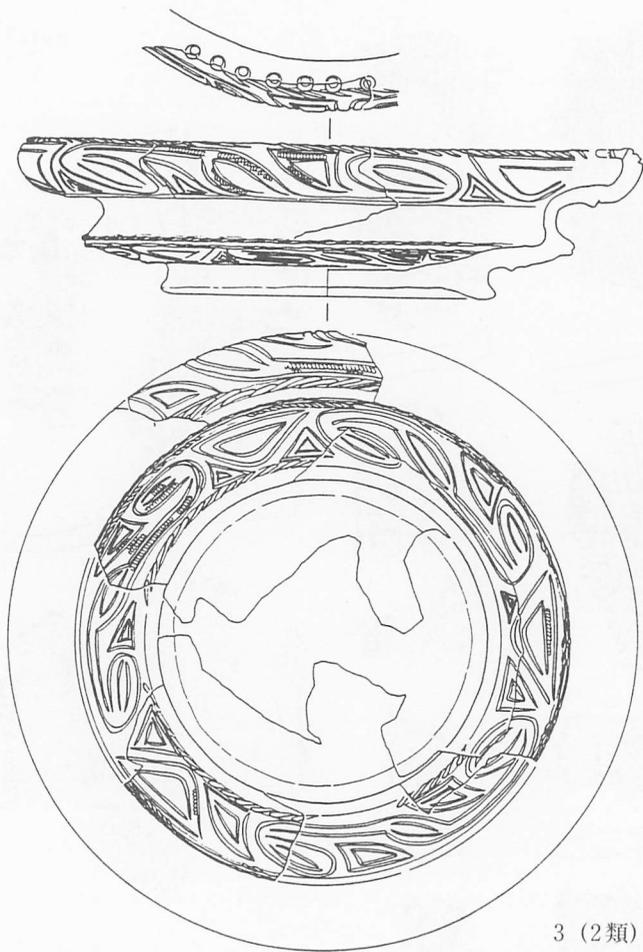
第15図 細野沢遺跡出土I群土器拓影



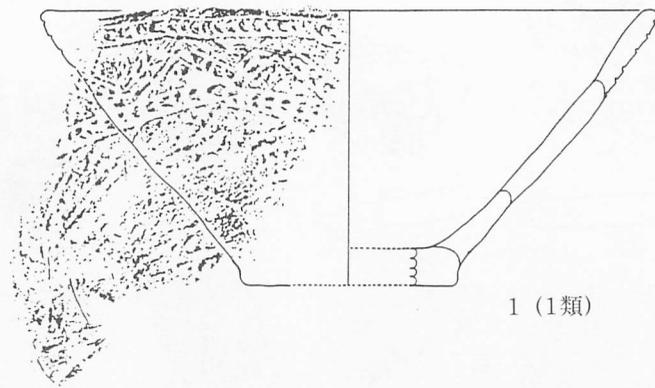
第 16 図 細野沢遺跡出土 I 群土器拓影



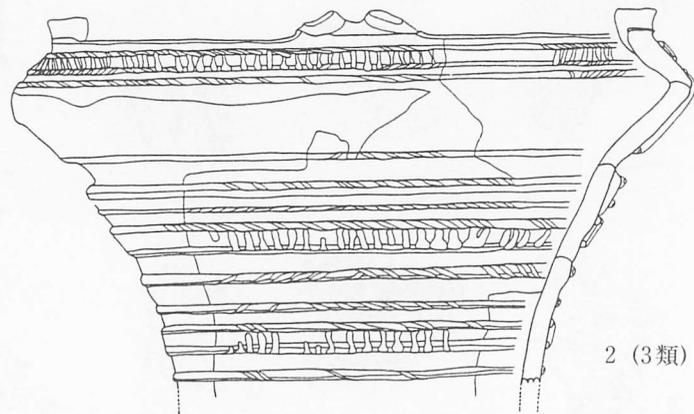
第17図 細野沢遺跡出土I群土器拓影



0 5cm



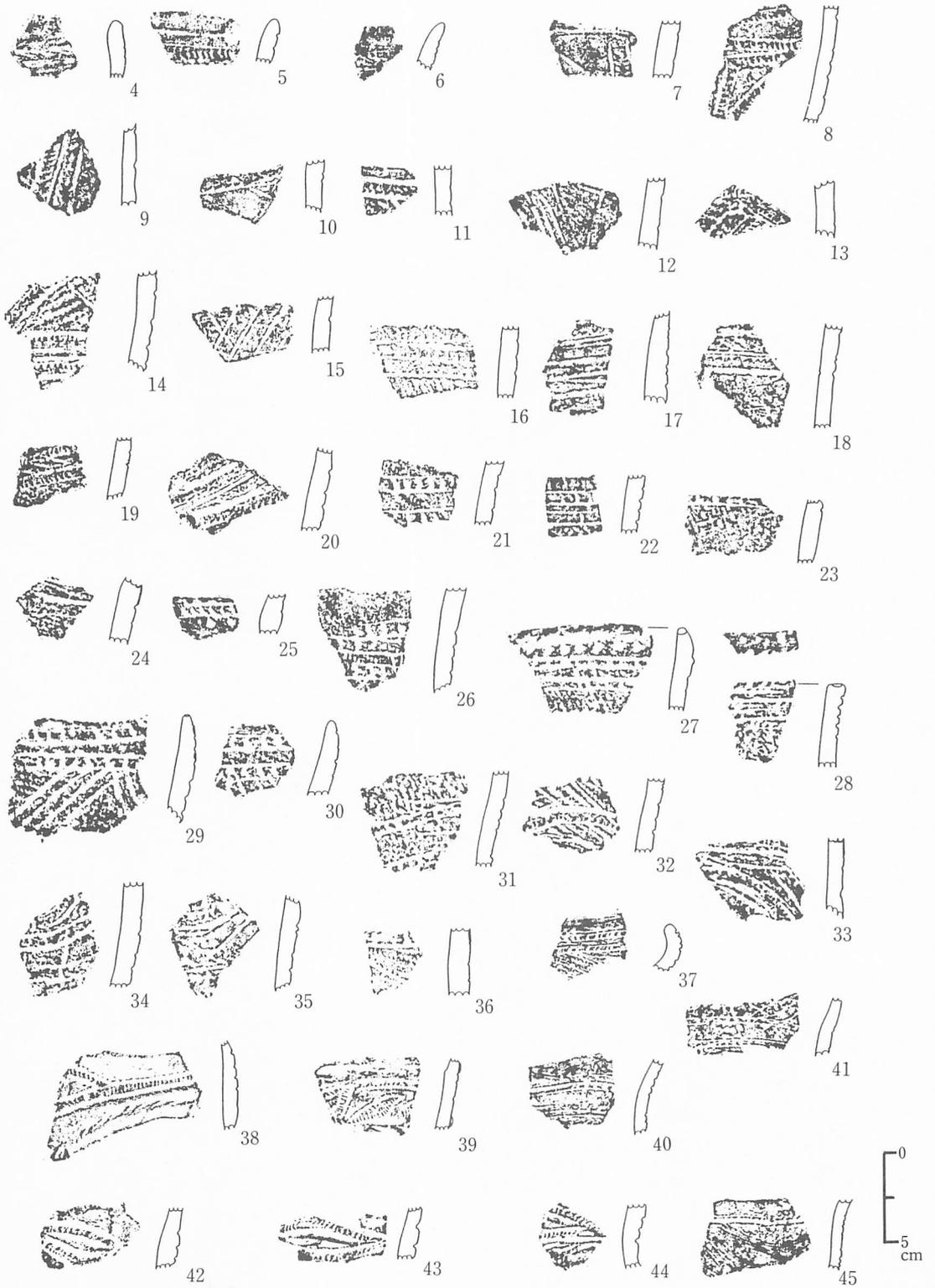
1 (1類)



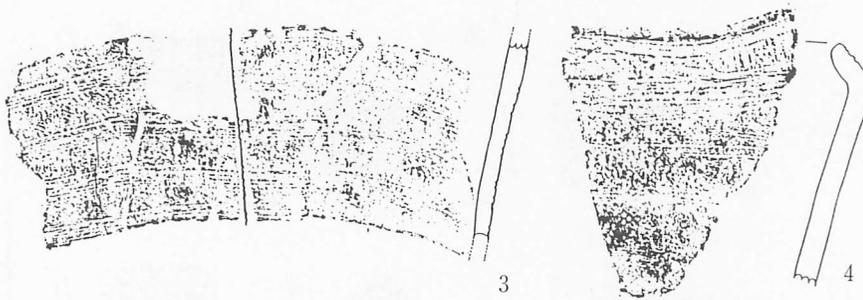
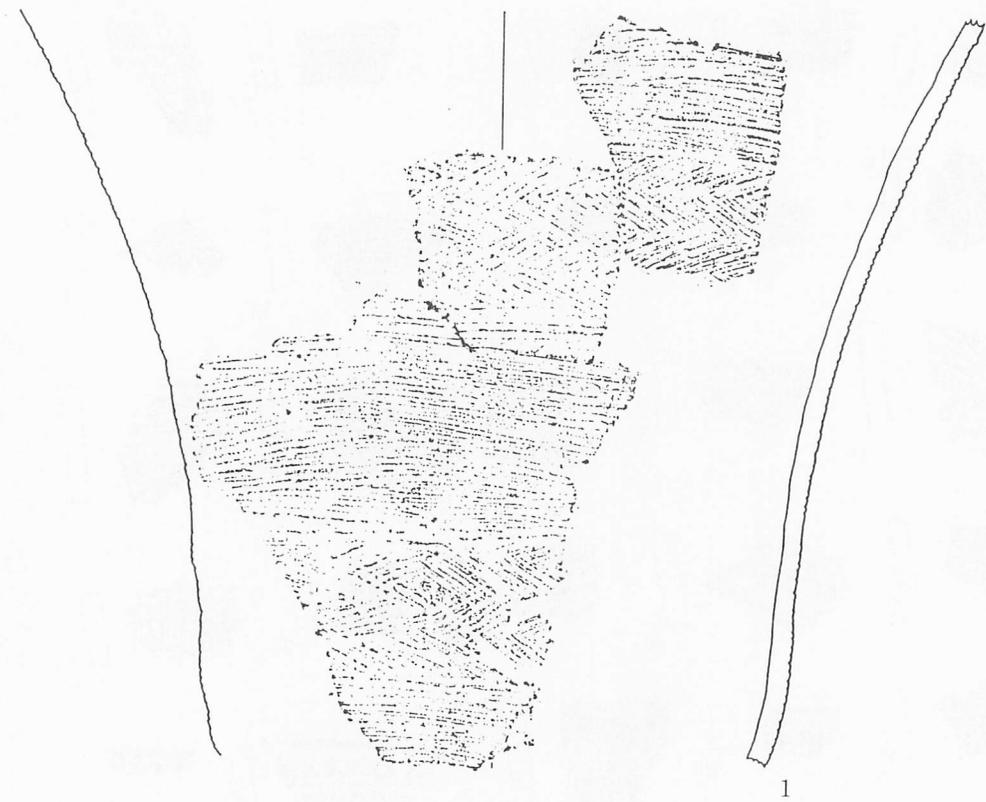
2 (3類)

0 5cm

第 18 図 細野沢遺跡出土 II 群土器実測図

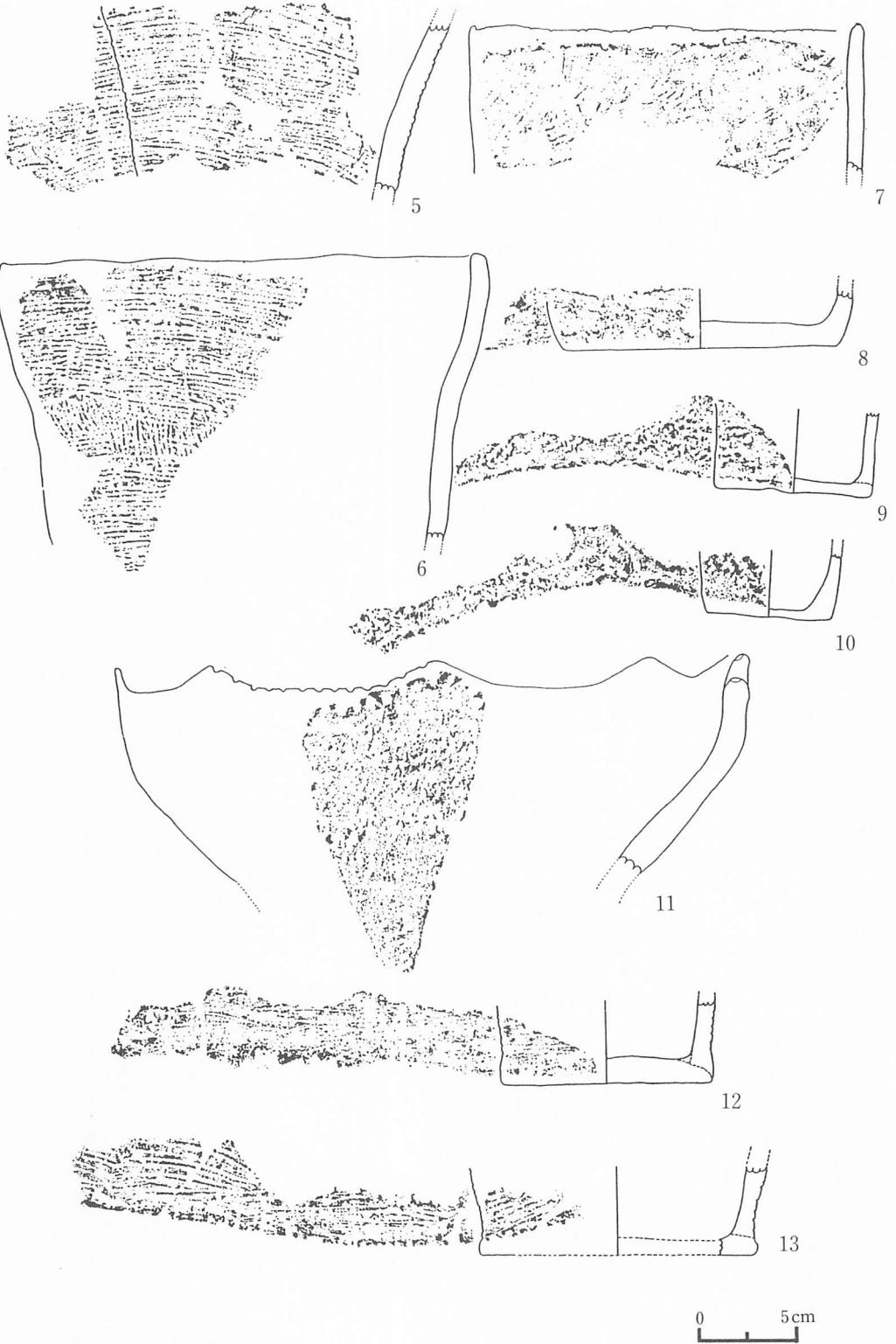


第 19 図 細野沢遺跡出土 II 群 I 類土器拓影

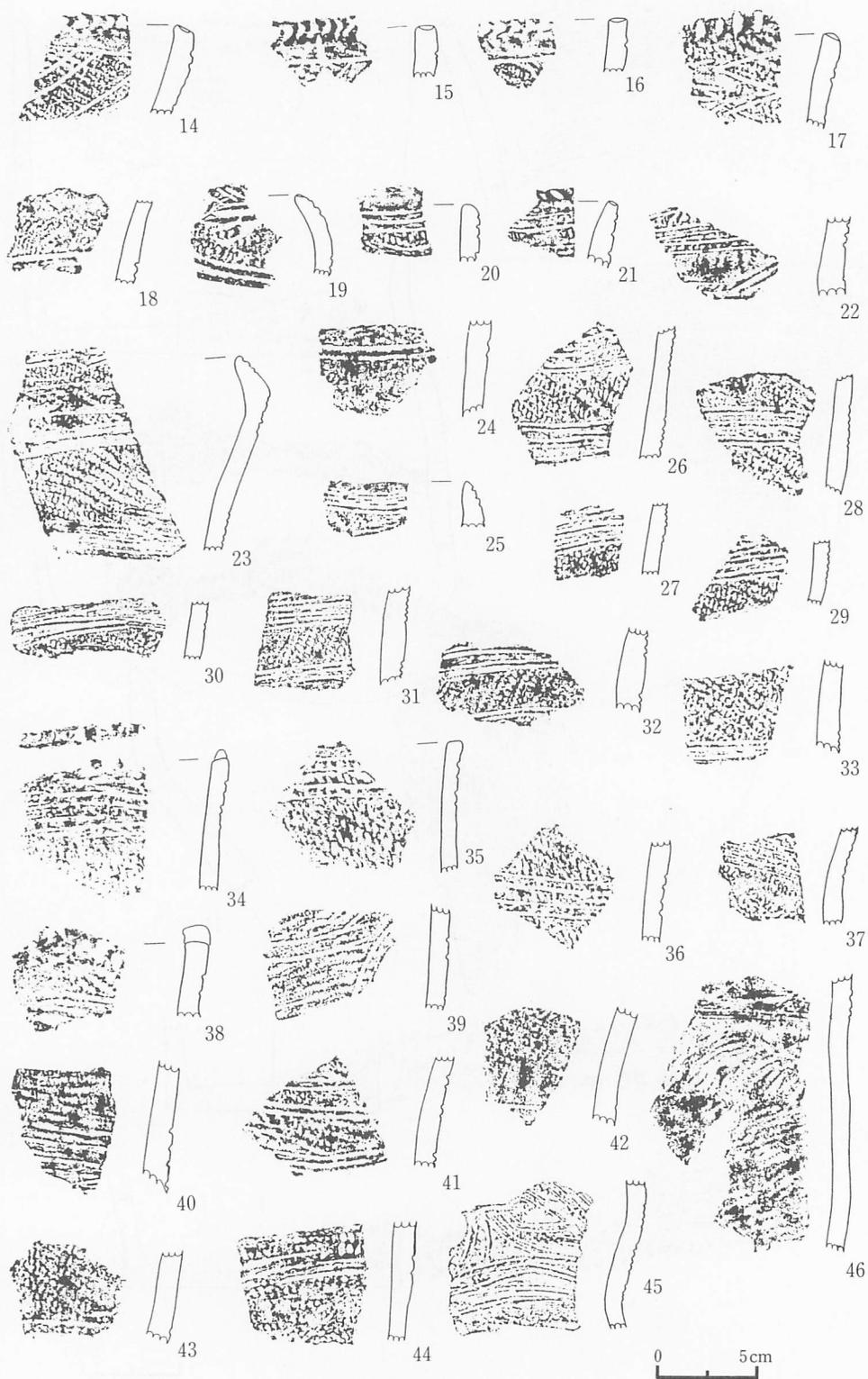


0 5 cm

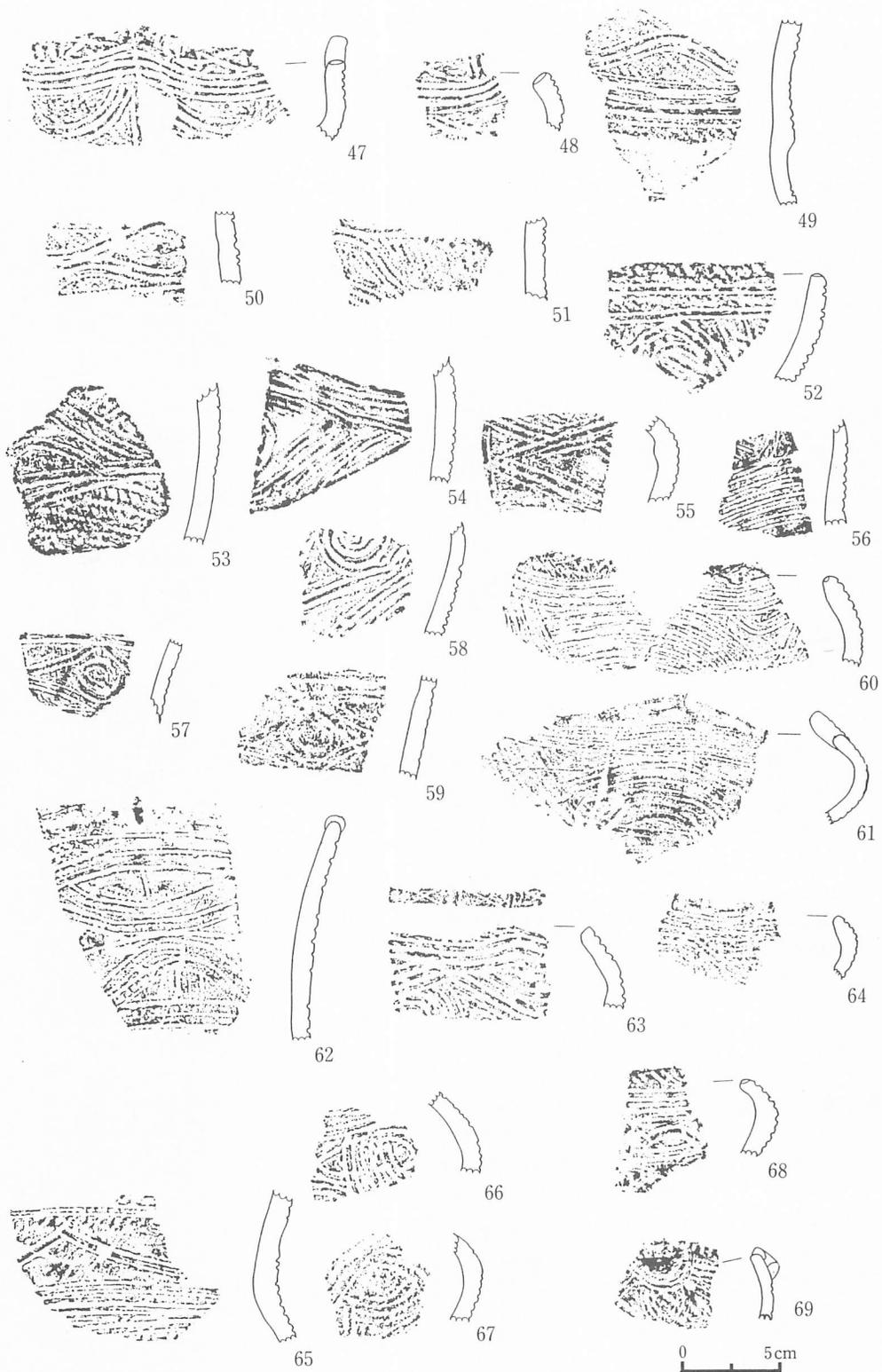
第 20 図 細野沢遺跡出土土 II 群 2 類土器拓影



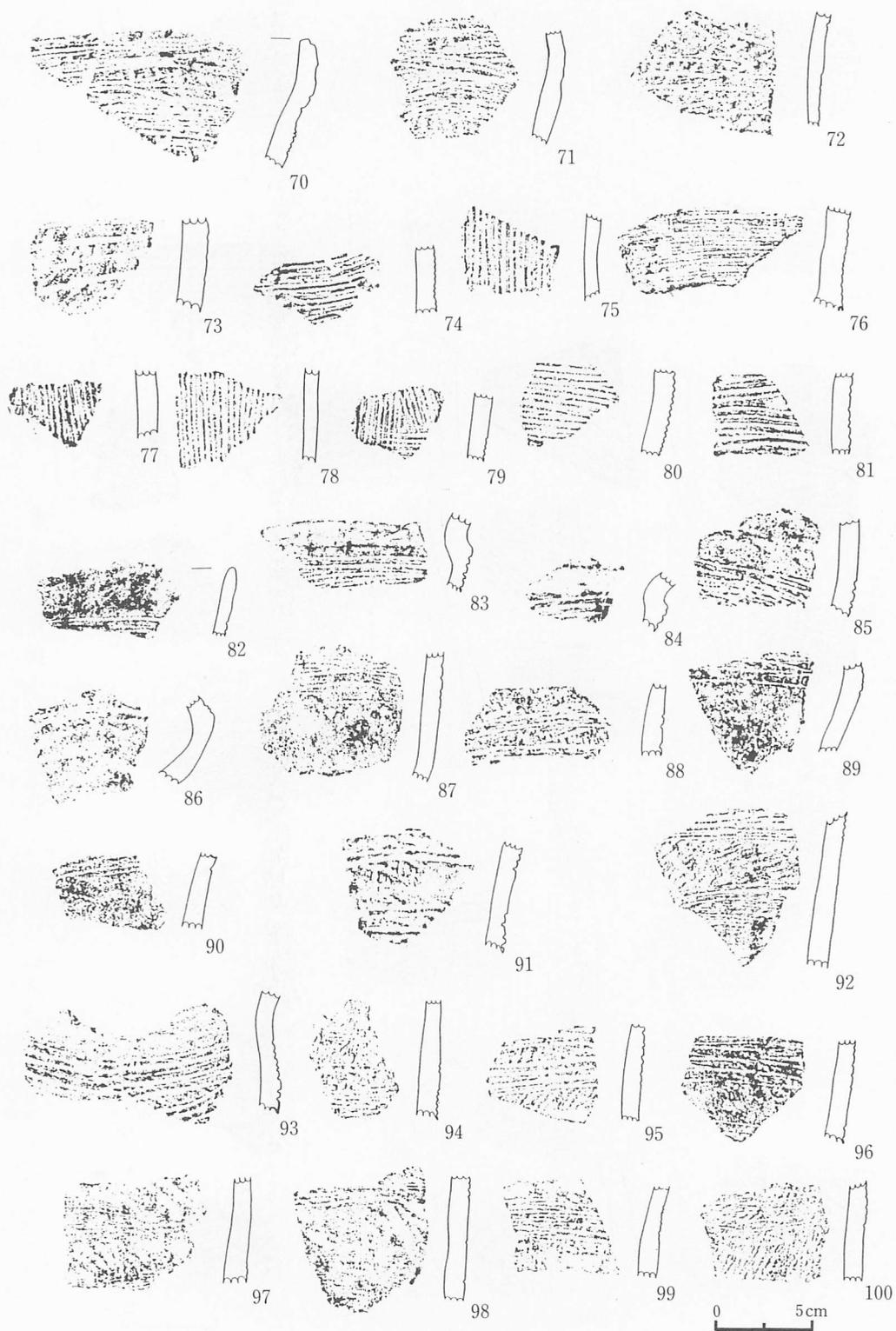
第 21 図 細野沢遺跡出土 II 群 2 類土器拓影



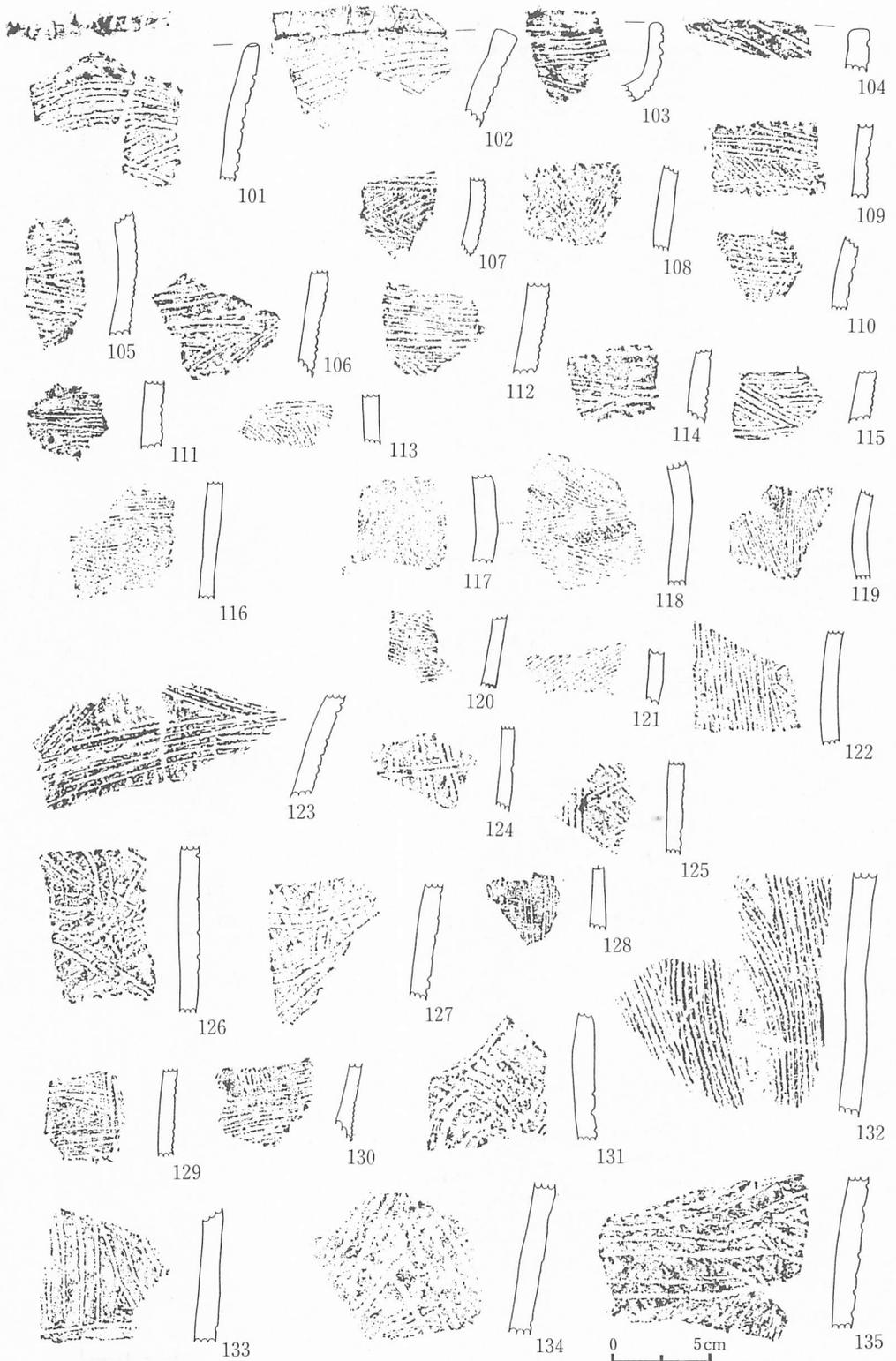
第 22 図 細野沢遺跡出土 II 群 2 類土器拓影



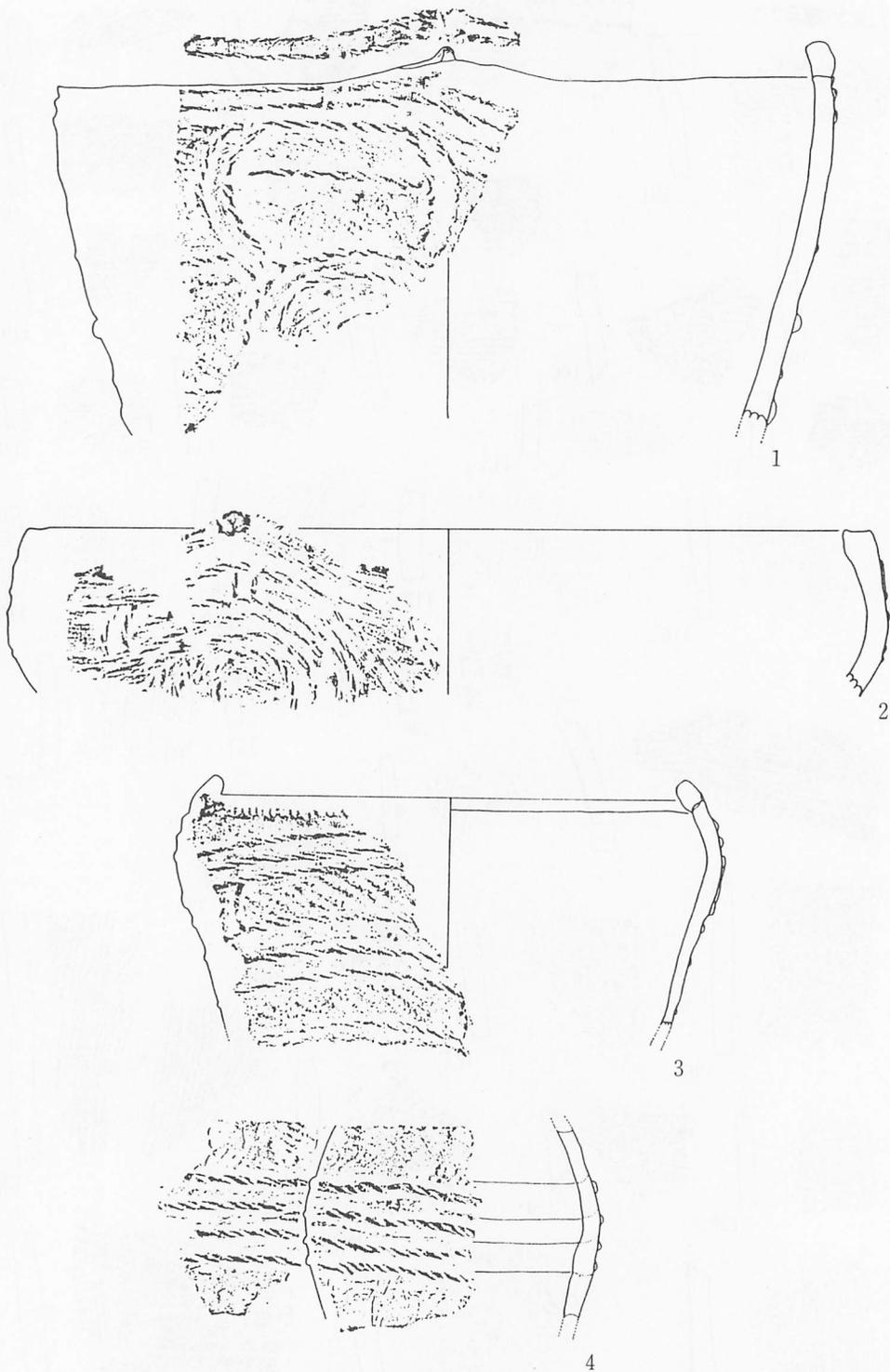
第 23 図 細野沢遺跡出土 II 群 2 類土器拓影



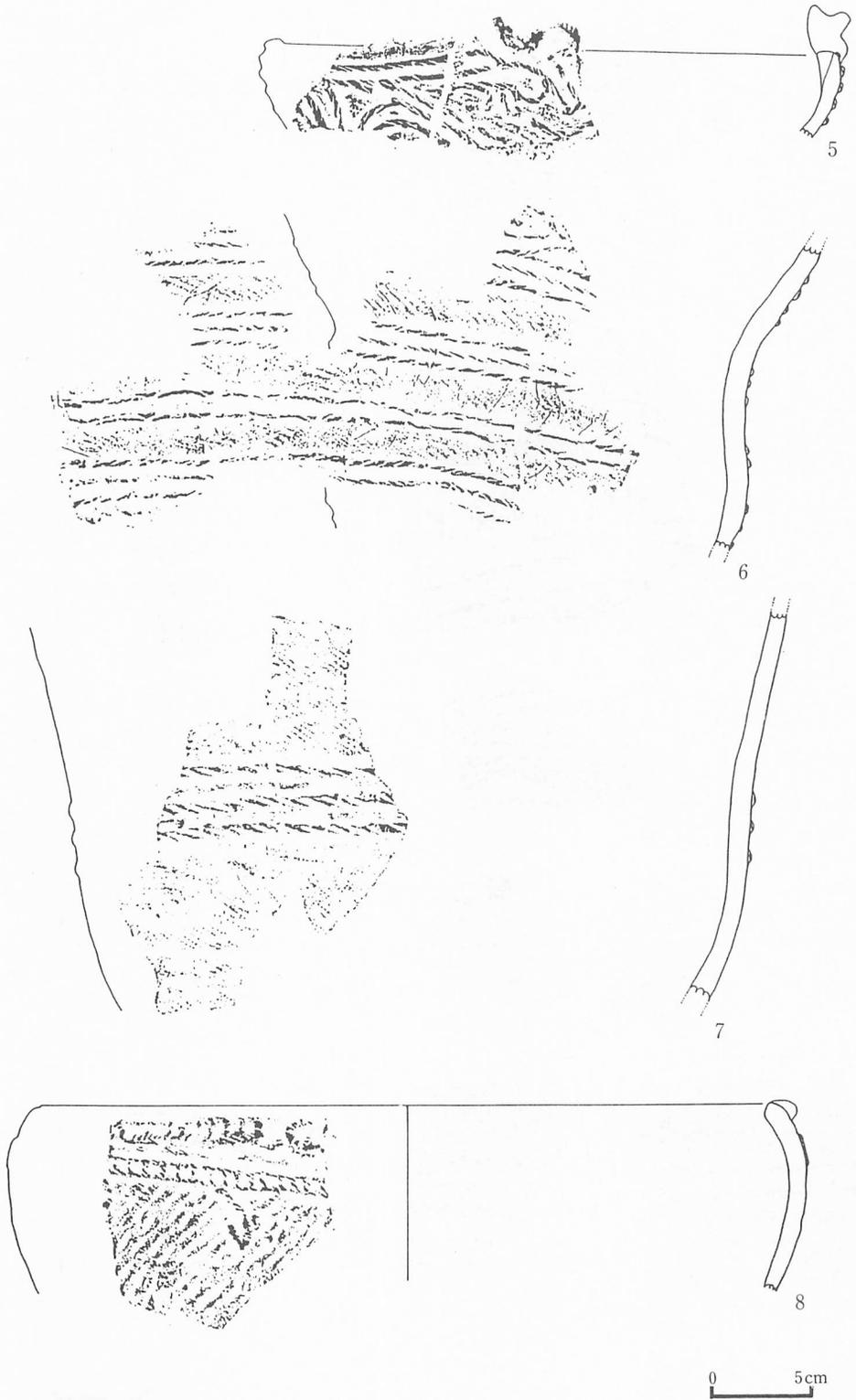
第 24 図 細野沢遺跡出土 II 群 2 類土器拓影



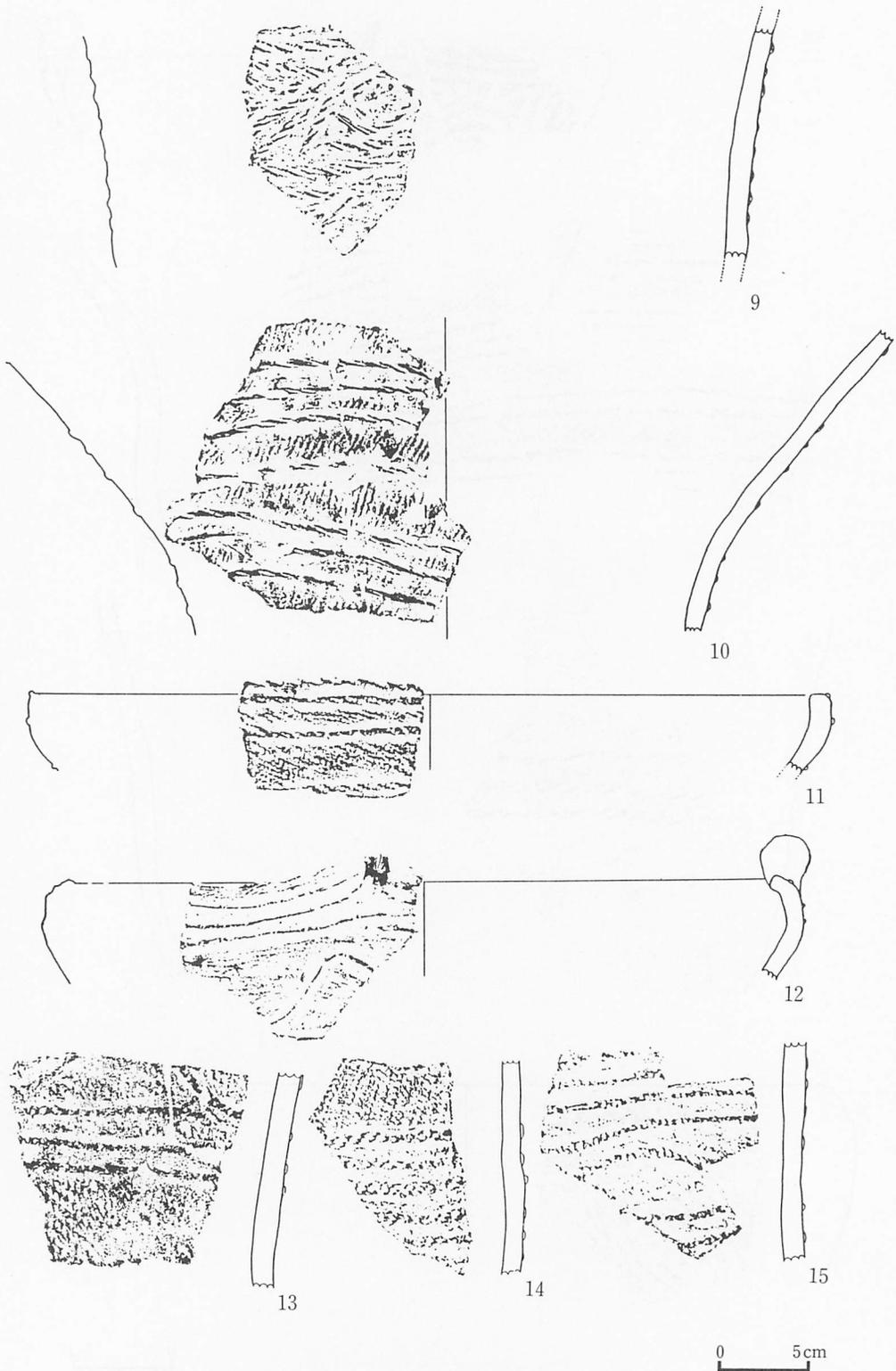
第 25 図 細野沢遺跡出土 II 群 2 類土器拓影



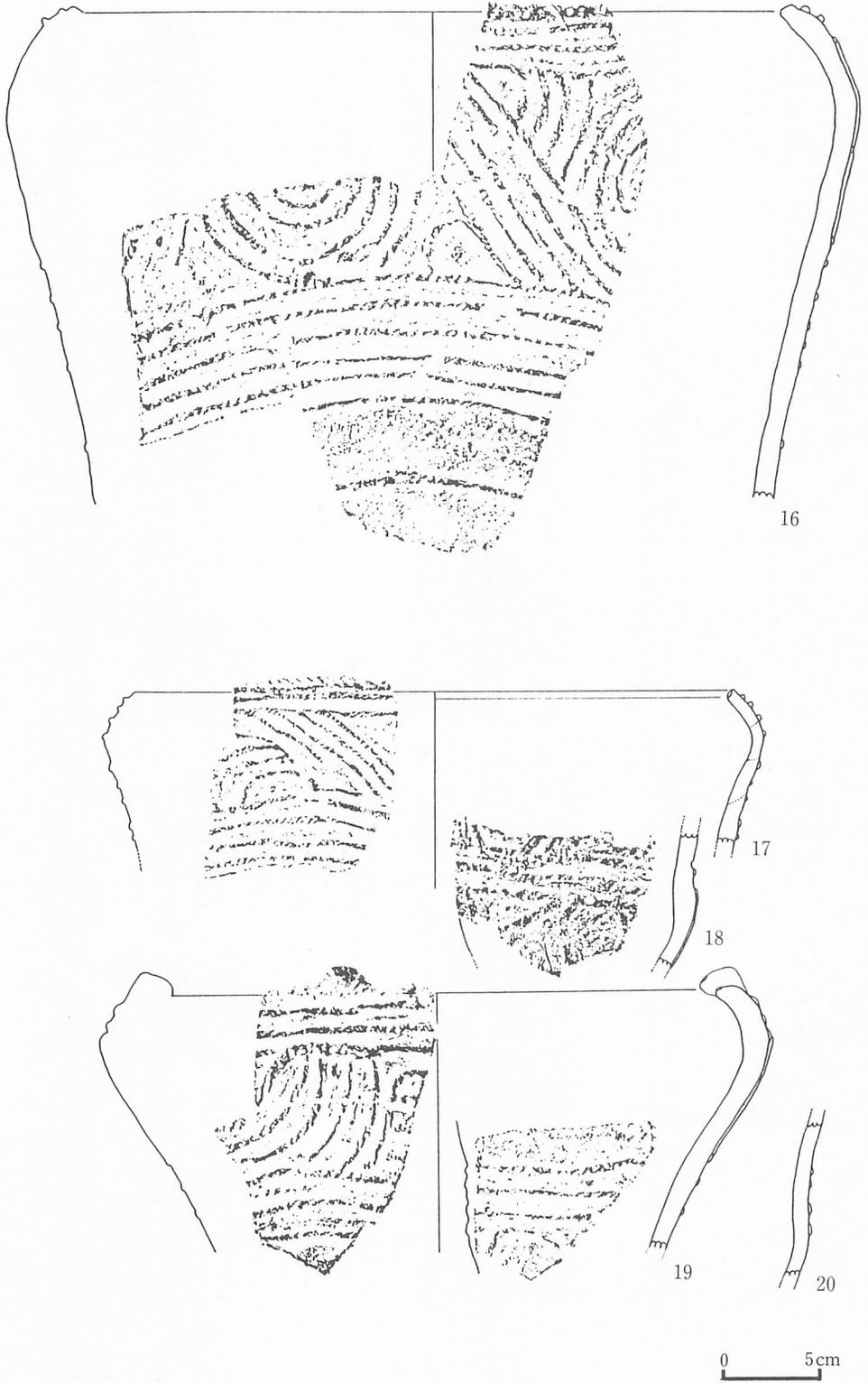
第 26 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



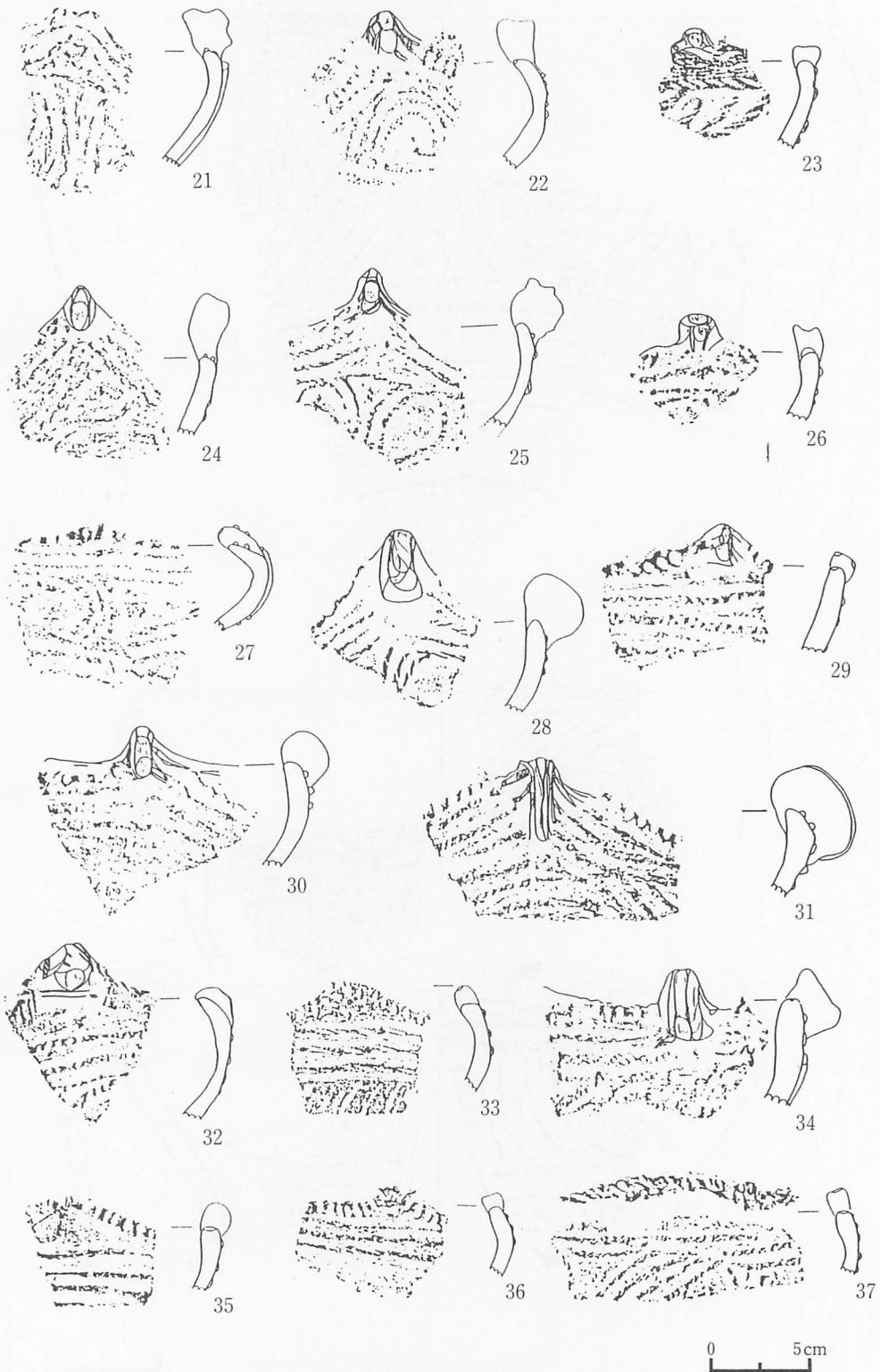
第 27 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



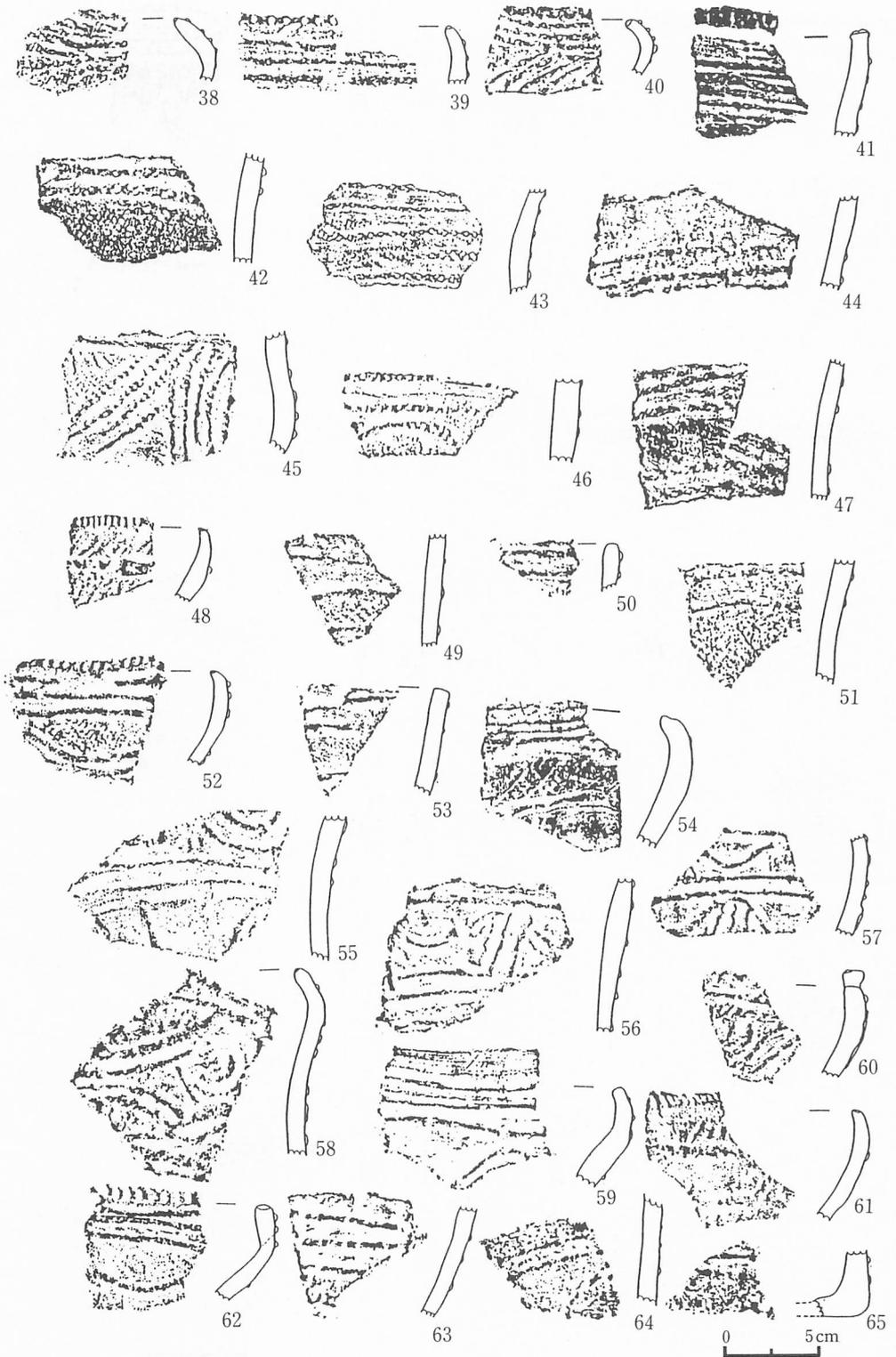
第 28 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



第 29 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



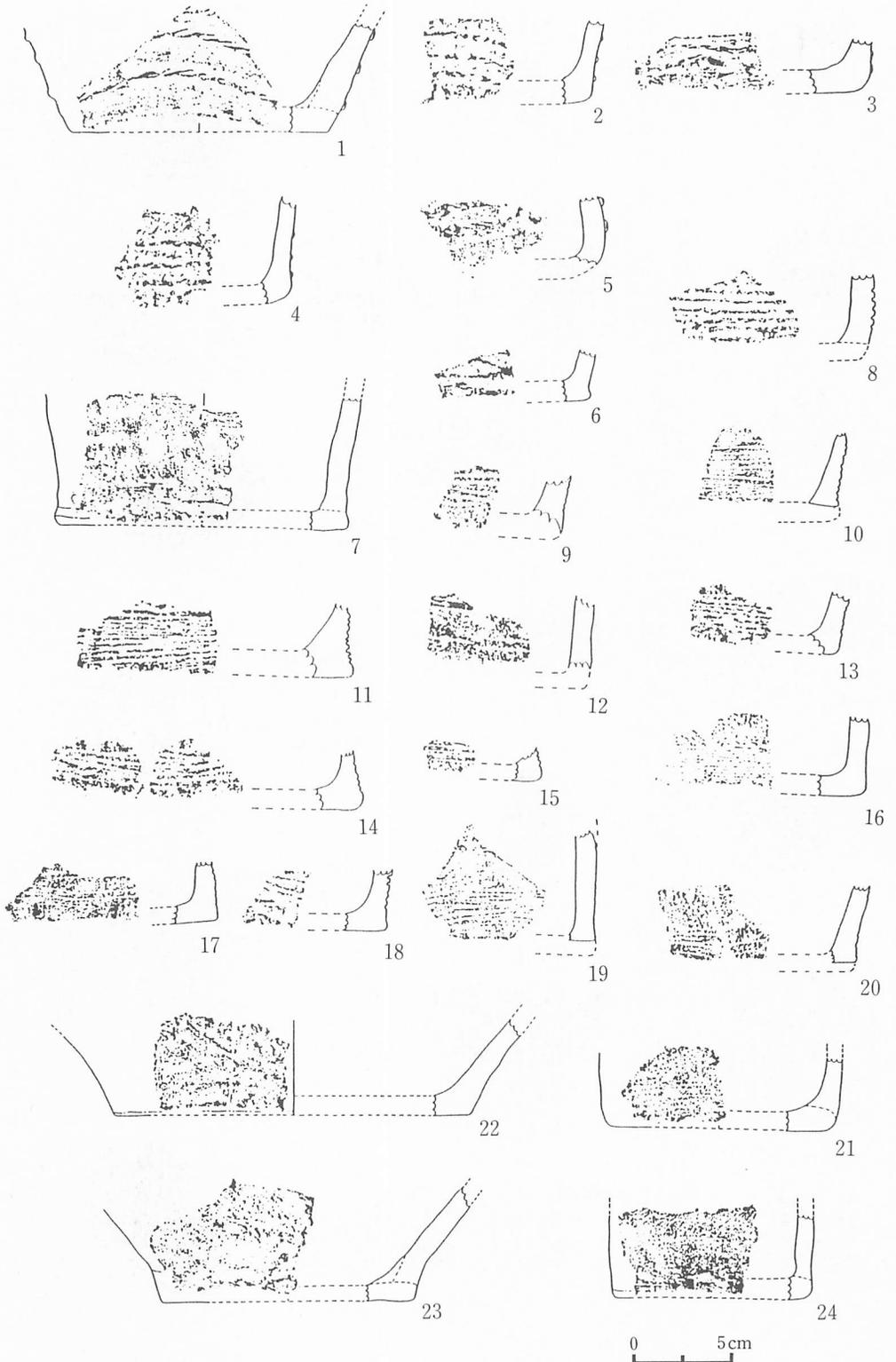
第 30 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



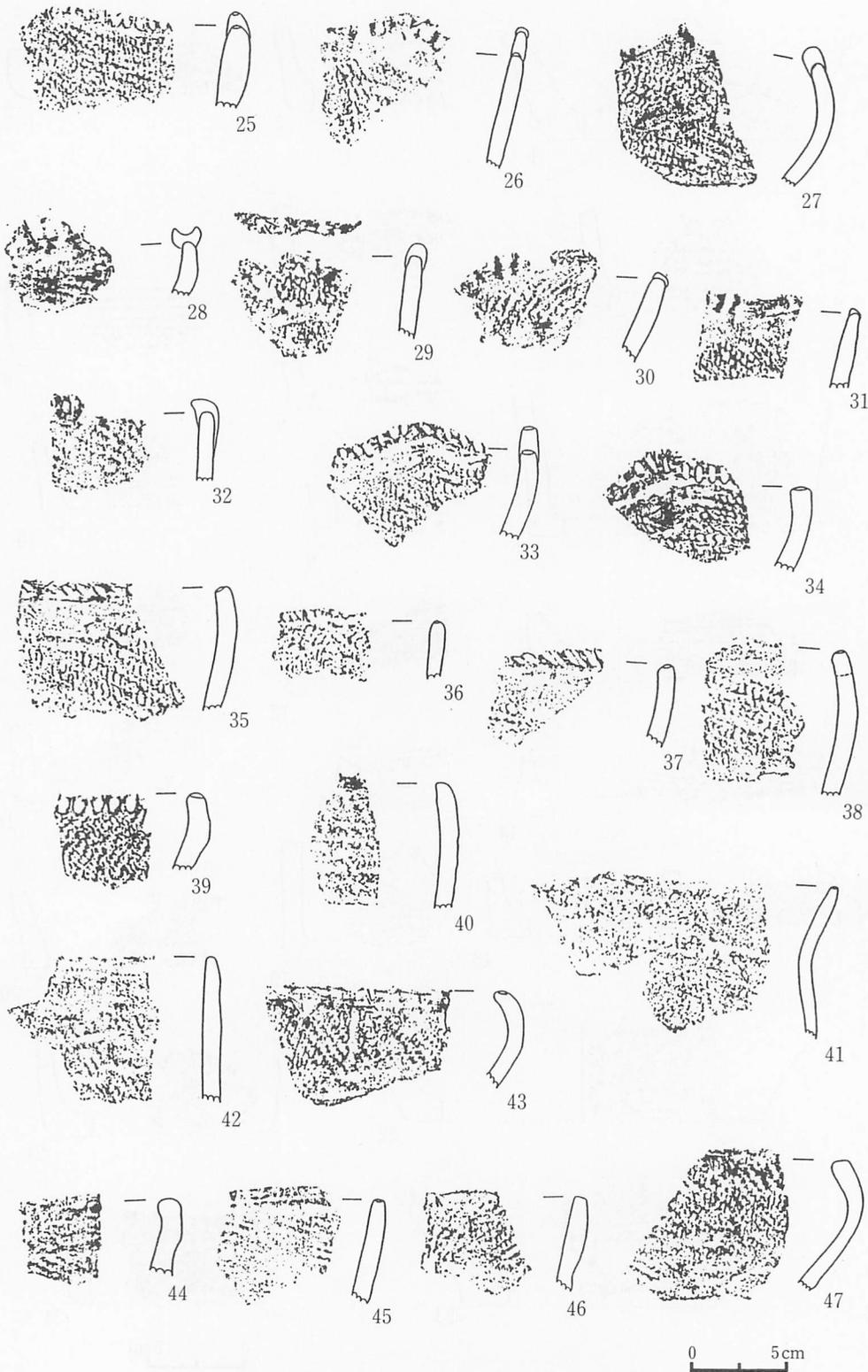
第 31 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



第 32 図 細野沢遺跡出土 II 群 3 類土器拓影



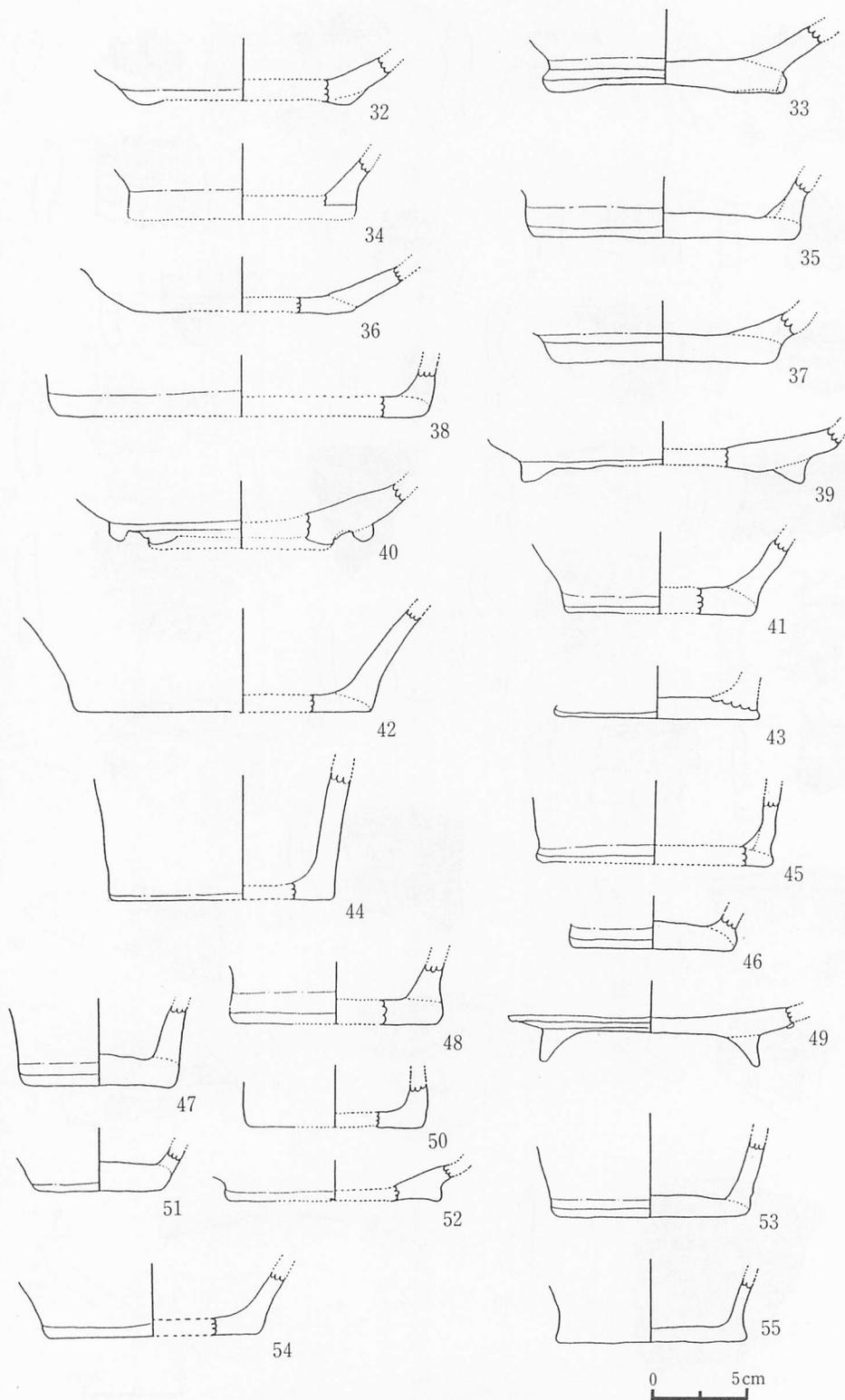
第 33 図 細野沢遺跡出土 II 群 2 類・4 類土器拓影



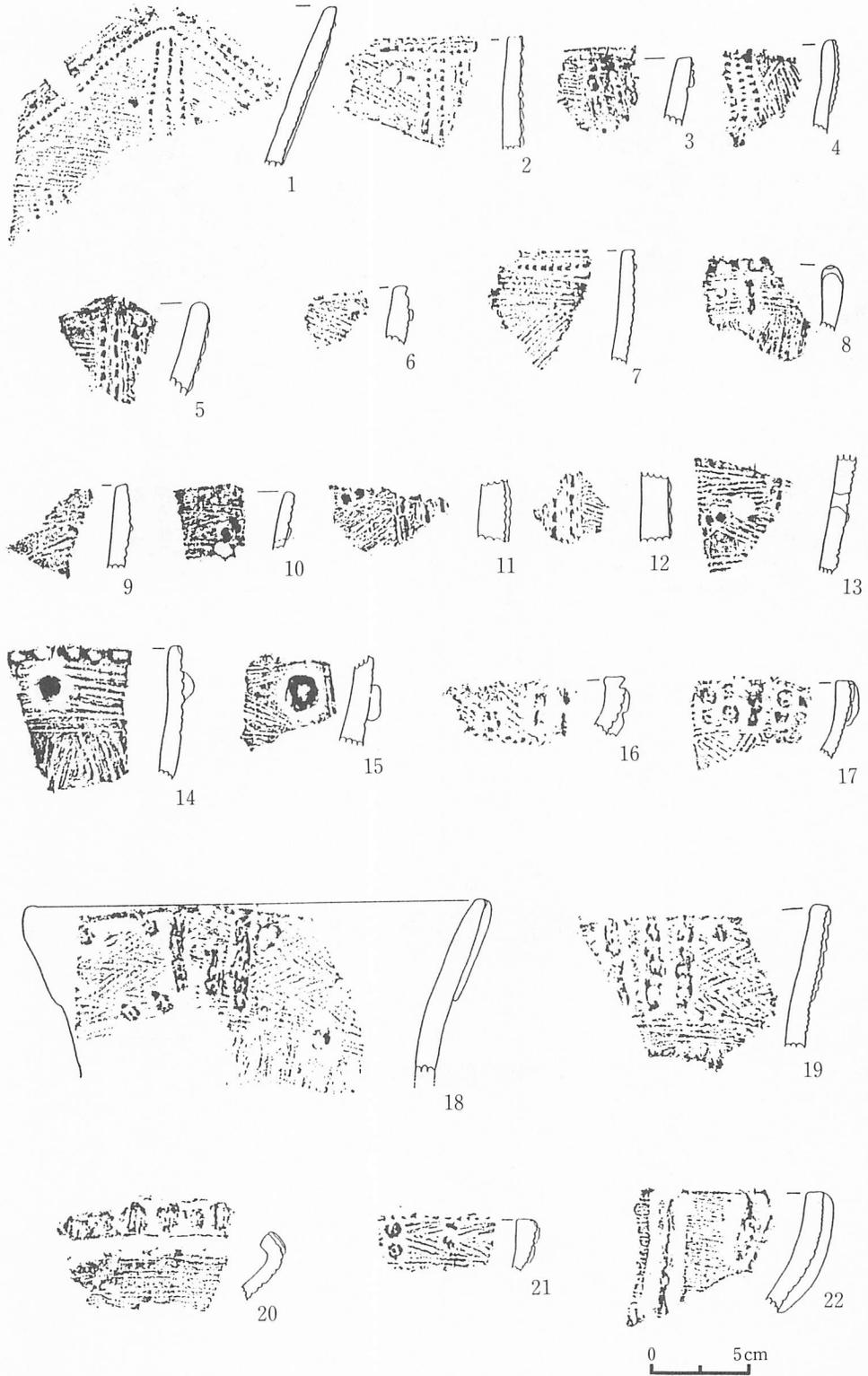
第 34 図 細野沢遺跡出土 II 群 4 類土器拓影



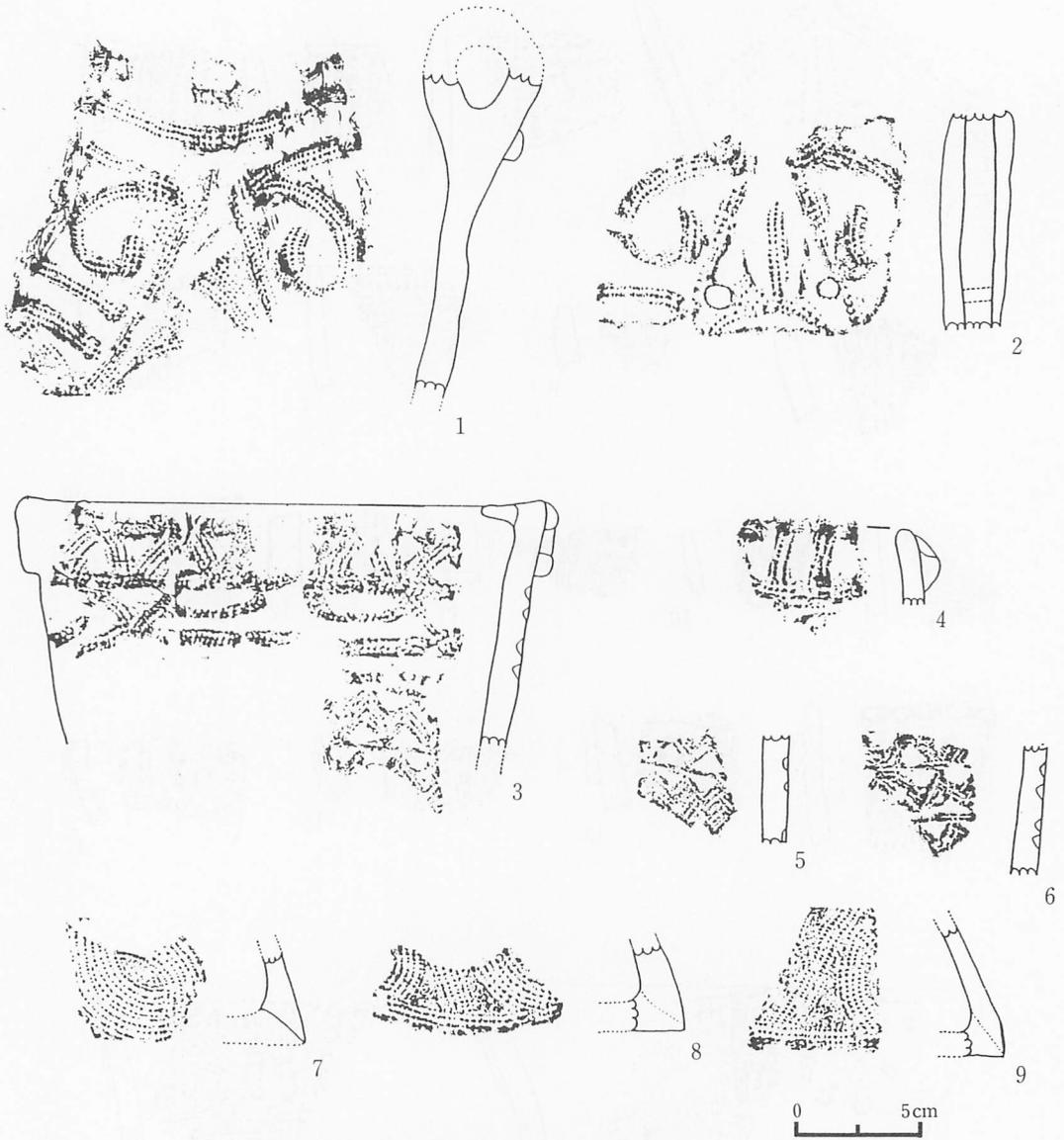
第 35 図 細野沢遺跡出土 II 群 5 類土器拓影



第 36 图 細野沢遺跡出土 II 群 5 類土器実測図



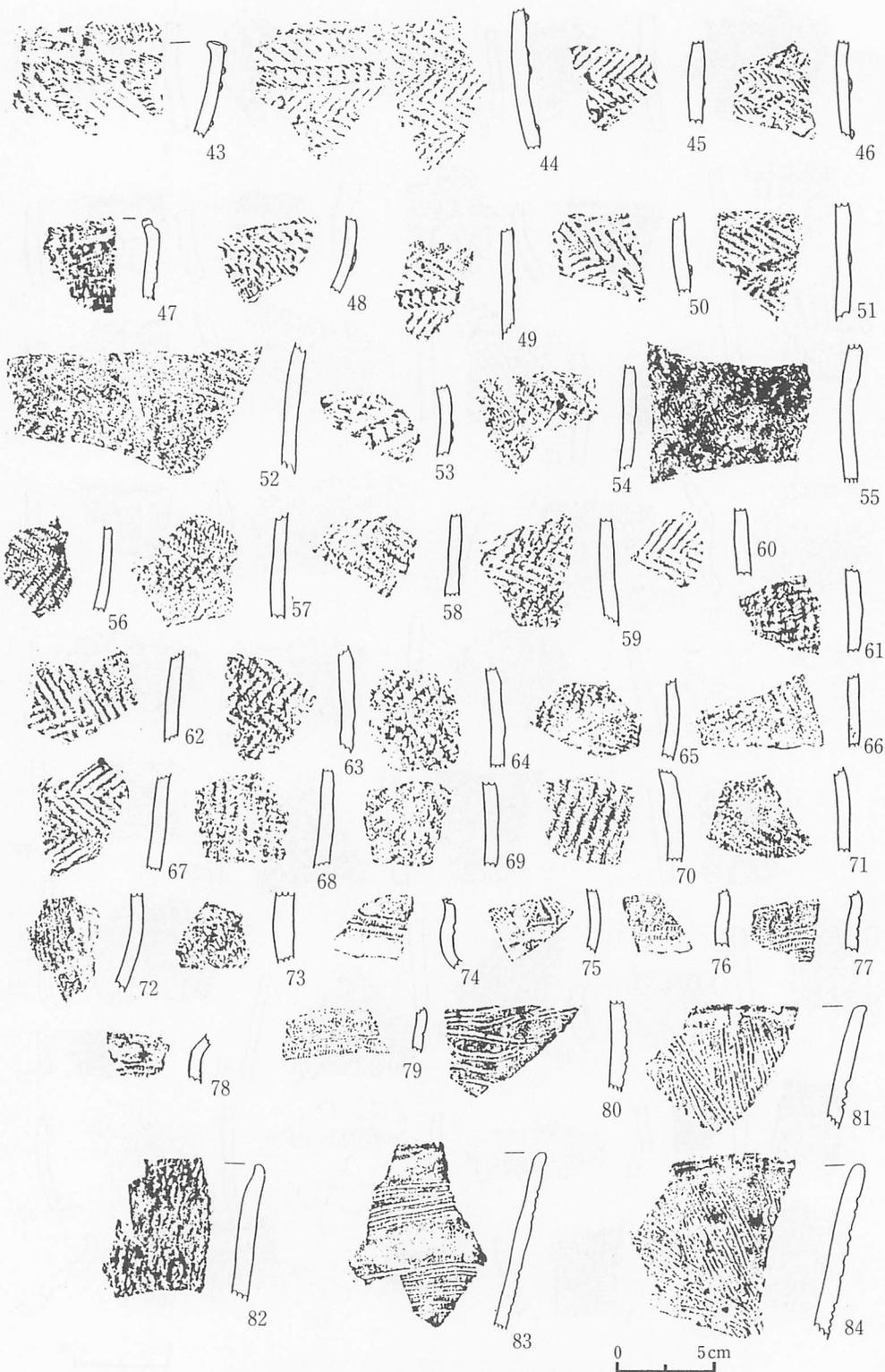
第 37 図 細野沢遺跡出土 II 群 6 類土器拓影



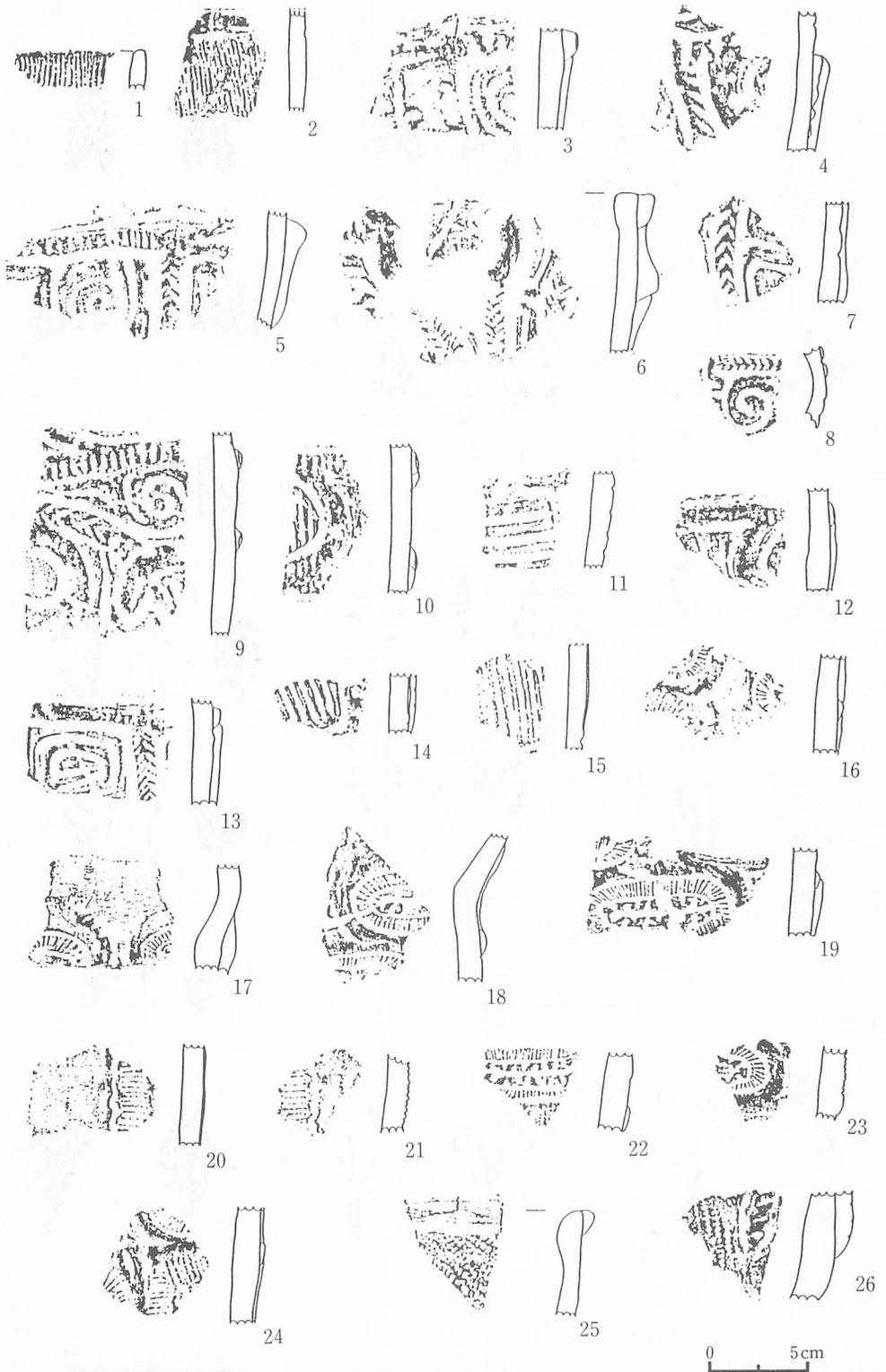
第 38 図 細野沢遺跡出土 II 群 7 類土器拓影



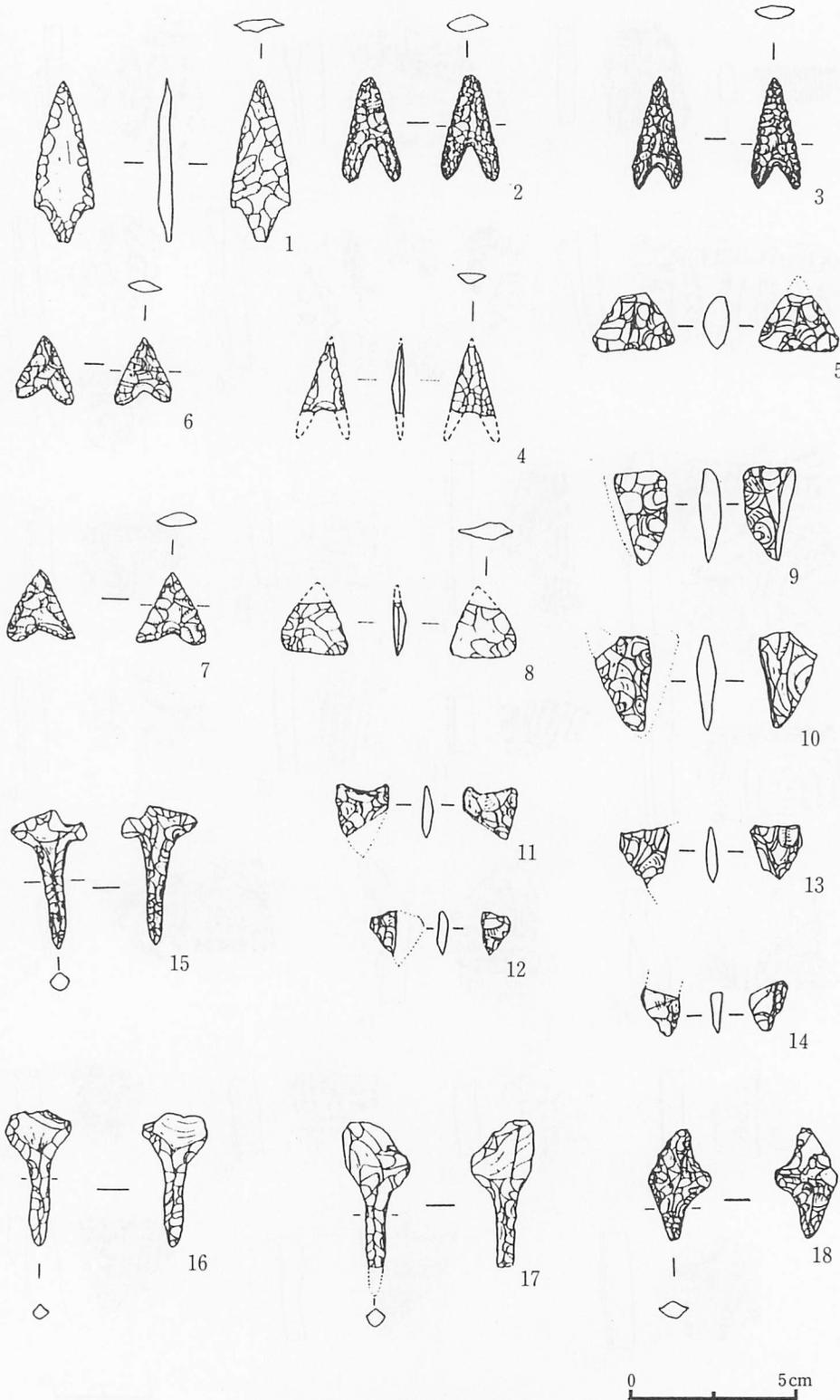
第 39 図 細野沢遺跡出土 III 群土器拓影



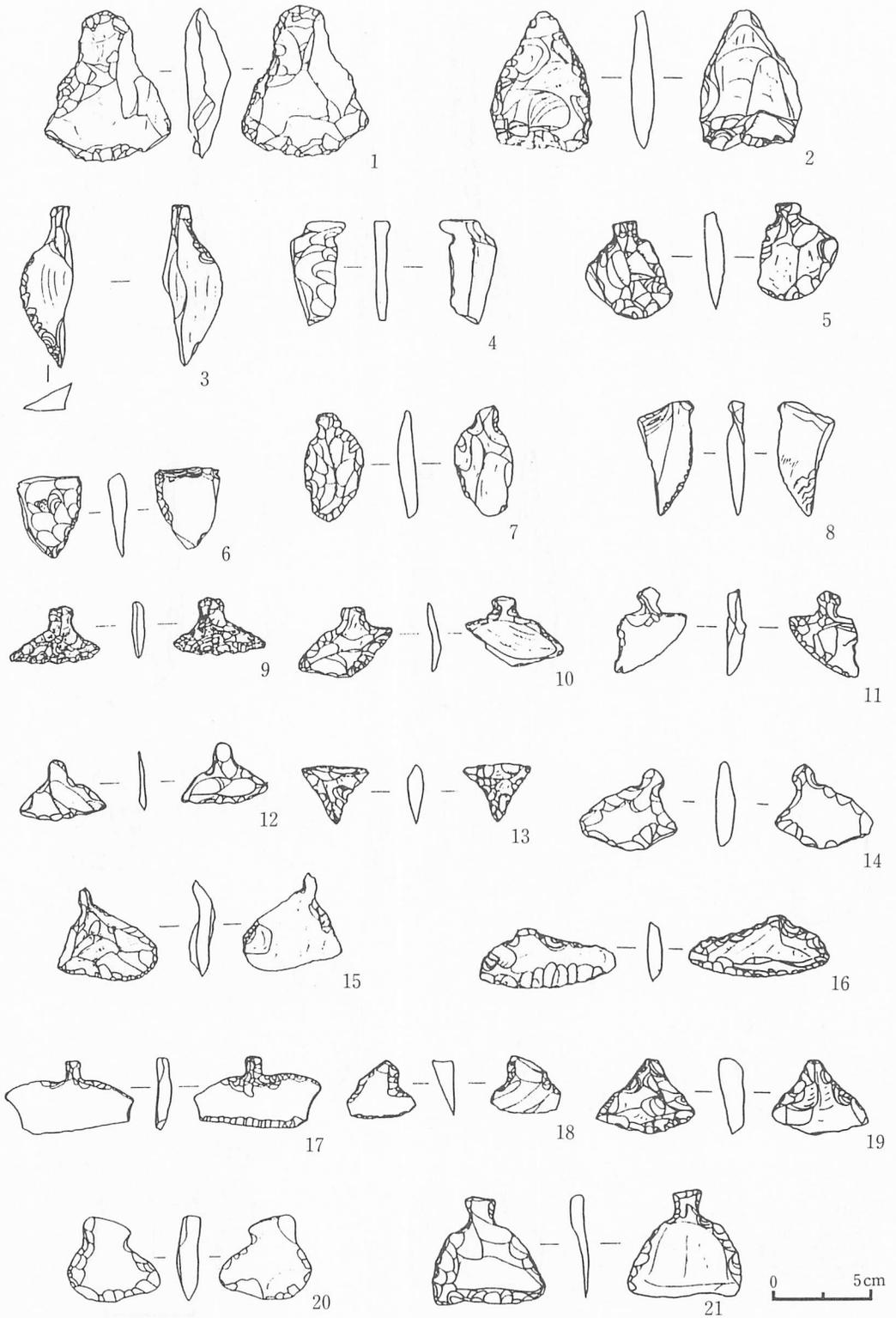
第 40 図 細野沢遺跡出土 III 群土器拓影



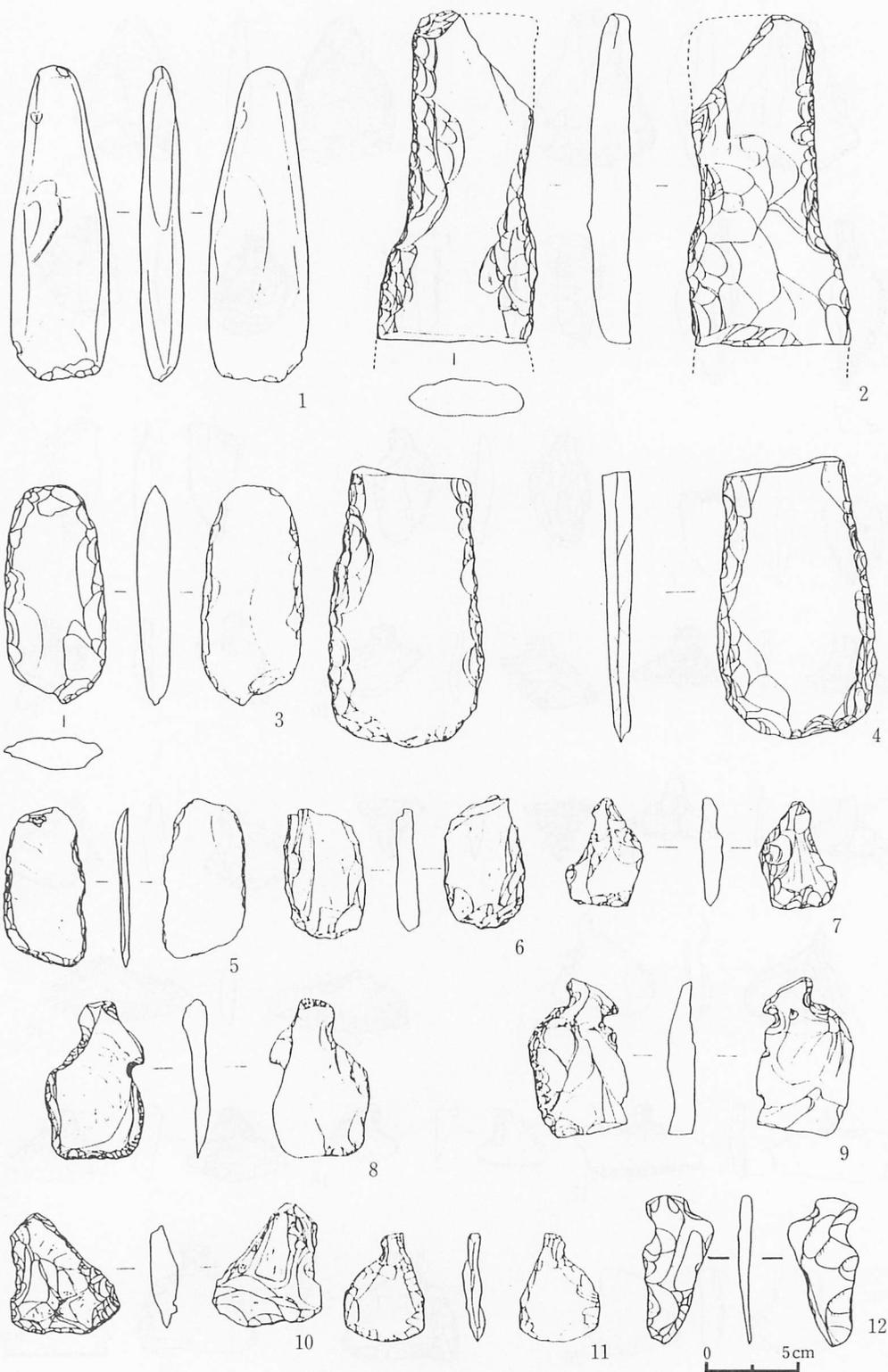
第 41 図 細野沢遺跡出土 IV 群土器拓影



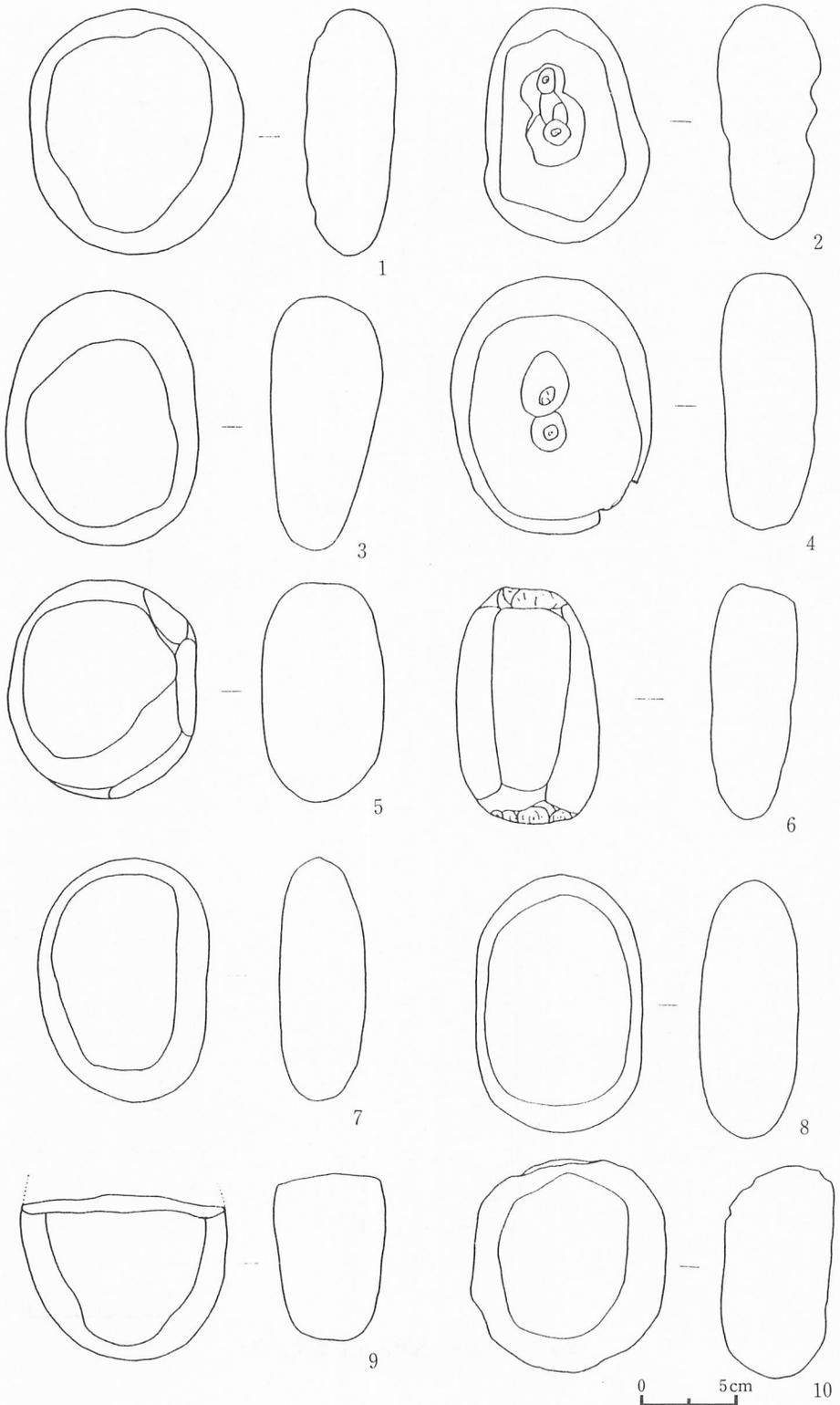
第 42 図 細野沢遺跡出土石器実測図



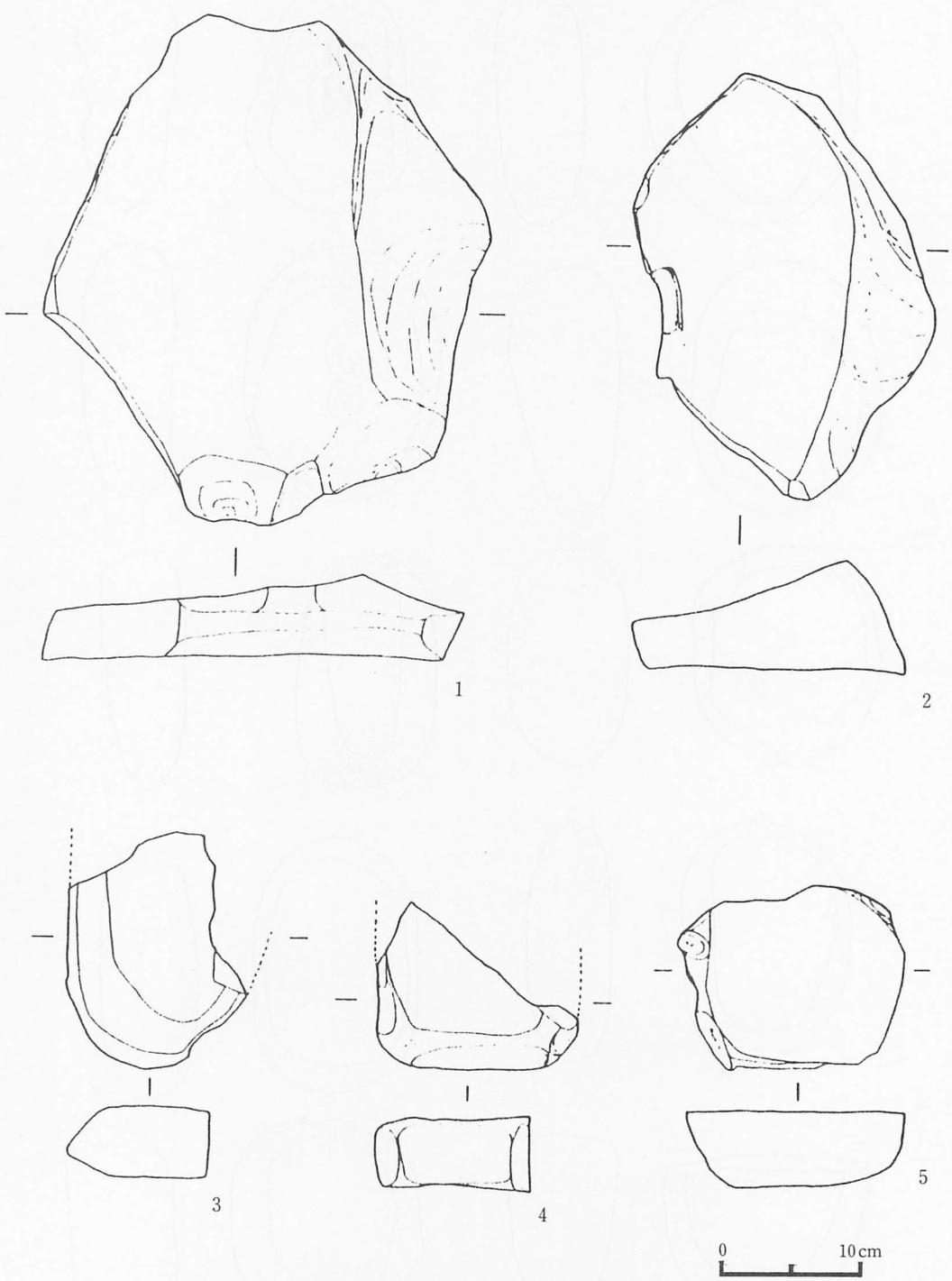
第43図 細野沢遺跡出土石器実測図



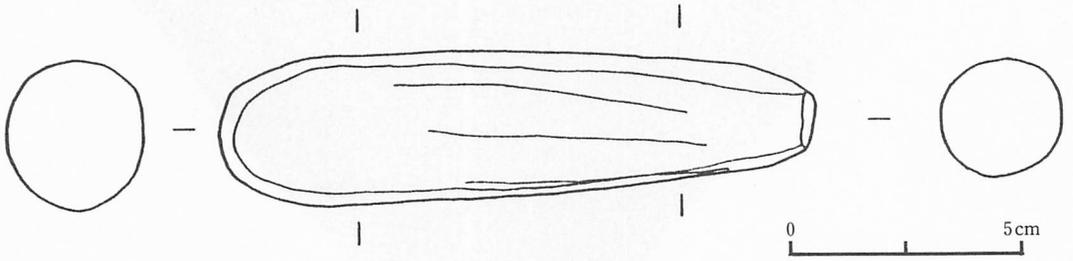
第 44 图 細野沢遺跡出土石器実測図



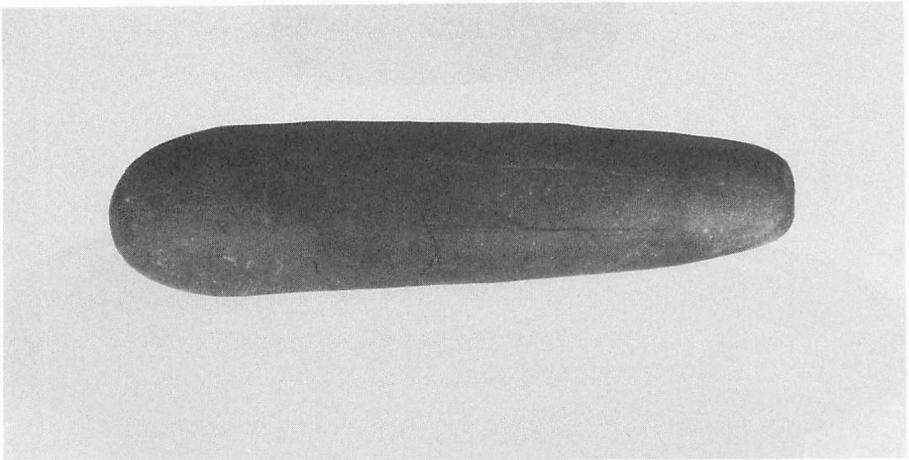
第 45 図 細野沢遺跡出土石器実測図



第 46 図 細野沢遺跡出土石器実測図



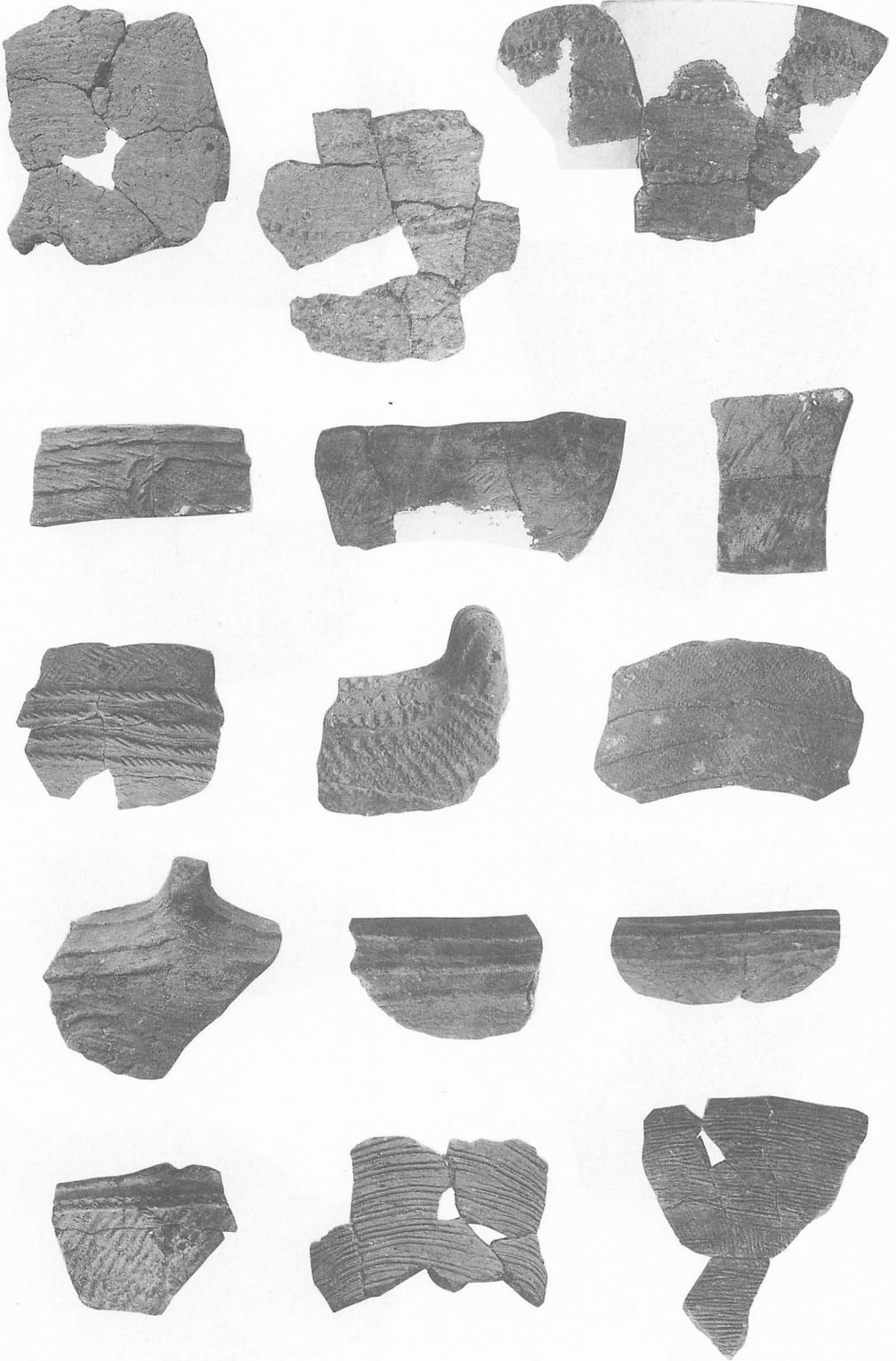
第 47 図 細野沢遺跡出土特殊遺物実測図



細野沢遺跡出土特殊遺物



图版 5 細野沢遺跡出土土器



図版6 細野沢遺跡出土土器



図版 7 細野沢遺跡出土土器



上川遺跡遠望

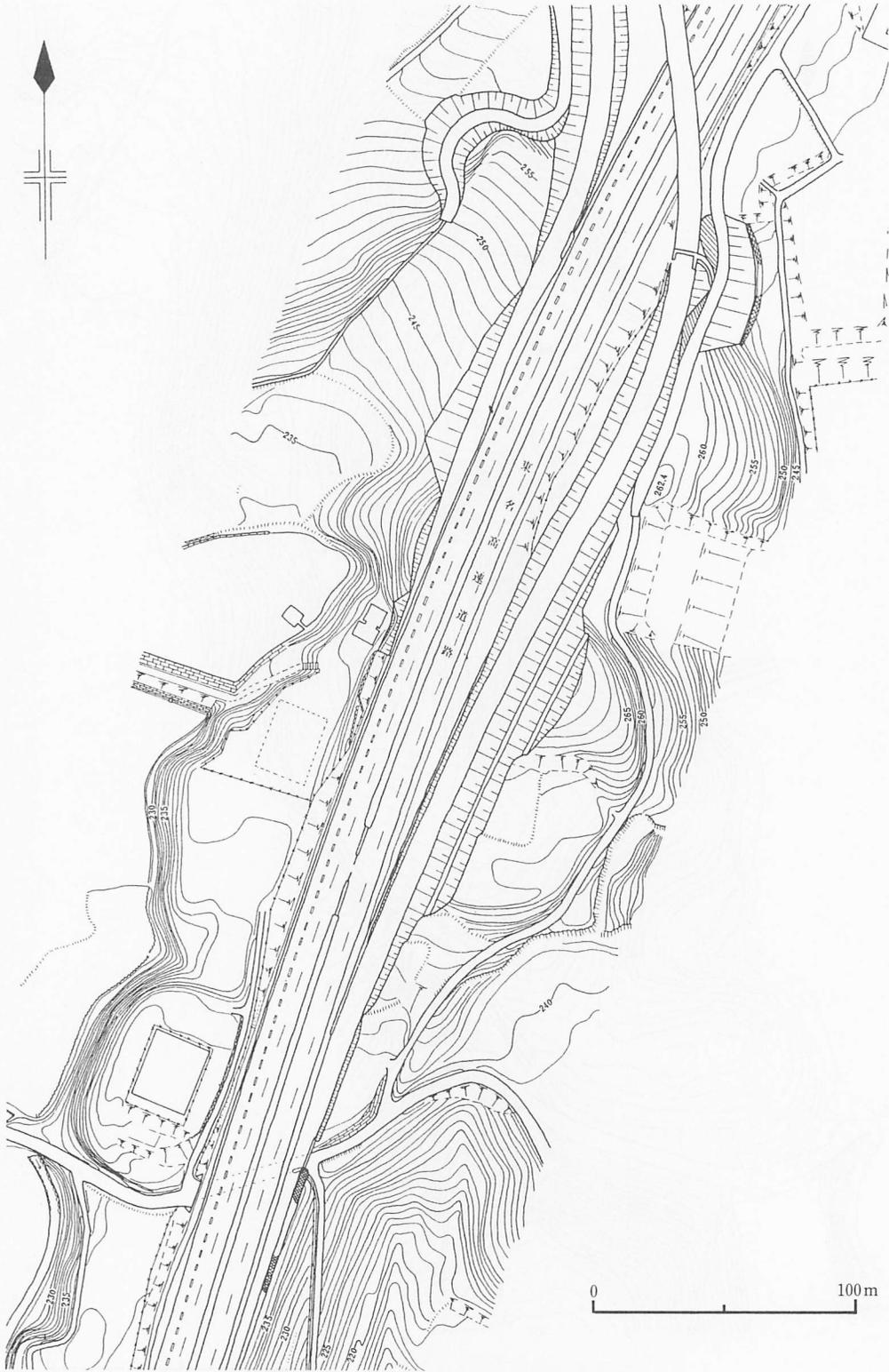
位置と立地 本遺跡は、富士山東南麓の背状丘陵、金沢上川の海拔二六九・二mの頂部の平坦面を中心に立地する。丘陵の両側及び南端部は急斜面となって谷面へ落ち込み、丘陵直下の脚部には湧水がある。

発見と調査 本遺跡の発見は、昭和三十一年（一九五六）、本丘陵南部を横断する道路工事の際、出土した土器を芹沢松市が拾得したことによる。また須山中学校在職中の菅沼教諭も縄文土器を取得し、その土器片は付近在住の人々が持ち去り四散したという。昭和四〇年（一九六五）、上川遺跡の海拔二六九・二mの丘陵頂部と、鞍部を隔て一〇〇m北の海拔二五五・七mの丘陵頂部西側斜面一帯が東名高速道路の路線予定地となったため、小野真一、白石竹雄らが事前踏査を行い、遺跡範囲は丘陵南端の道路を越えて、南側の平坦部まで及んでいることが確認された。この踏査結果に基づき、昭和四二年（一九六七）から一五日間の予定で発掘調査が実施された。昭和五九年（一九八四）、この位置に東名裾野インターチェンジ建設が決定したため、前回発掘調査を実施した東側部分に該当するところを発掘調査することになったものであるが、調査範囲は計画道路全域、経費は日本道路公団、調査及び調査員・作業員等は静岡県と裾野市教育委員会が手配することに決定した。調査は昭和六〇年（一九八五）五月から一二月まで現地調査、六一年一月から出土品の整理作業と日程も決まり、計画通り実施した。調査にあたっては日本考古学協会会員の中野国雄を顧問に裾野市教育委員会の調査員袴田稔によって実施した。

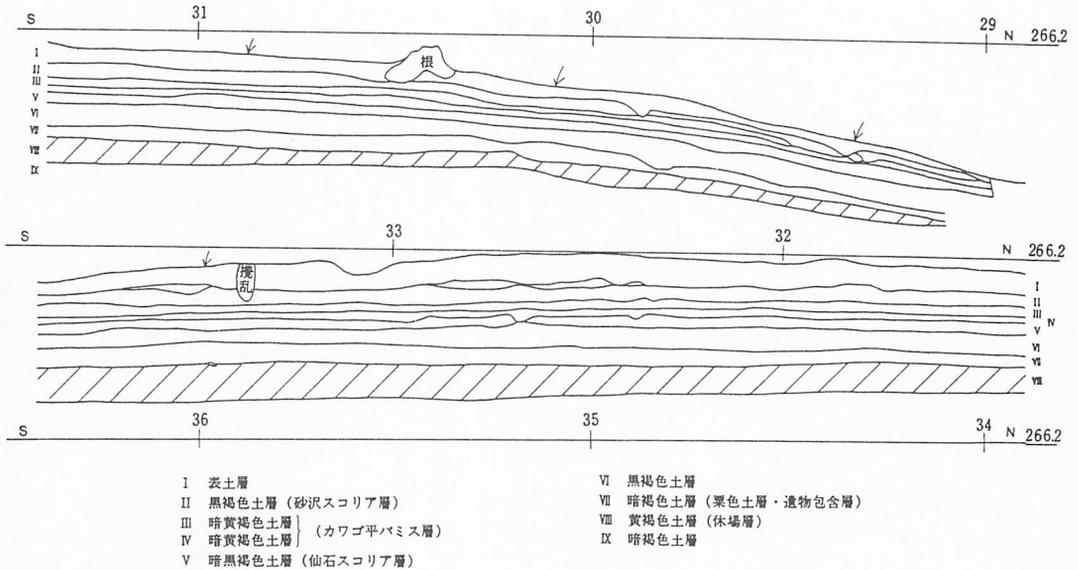
本調査区は、東名高速道路東側、標高二四〇～二七〇mの幅約三〇m、長さ二九〇m、面積約三五〇〇㎡、遺跡は南北に長く、高低差も



東名高速道路建設前の上川遺跡周辺図



東名裾野インターチェンジ建設後の上川遺跡周辺図



上川遺跡南北土層実測図

あり、今後も調査を行う可能性もあるため、北緯一八度一分東向き
の五m調査区を設定し、長辺を北側から一・二・三・・・、短辺を西
側からA・B・C・・・と呼称することにし、昭和六〇年五月一日か
ら六月三〇日までに四×四mの試掘区を一〇mおきに設定し一次調査
したところ、C→E一〇→一四区(北区)、C・D一三〇→三八、
E・F一二七→三七区(中央区)、B一四八、C→E一四二→四八区
(南区) から遺構・遺物が確認されたため、調査範囲を約一五〇〇m²
に限定し、七月一日から二次調査にはいり、一二月二五日に調査を終
了した。

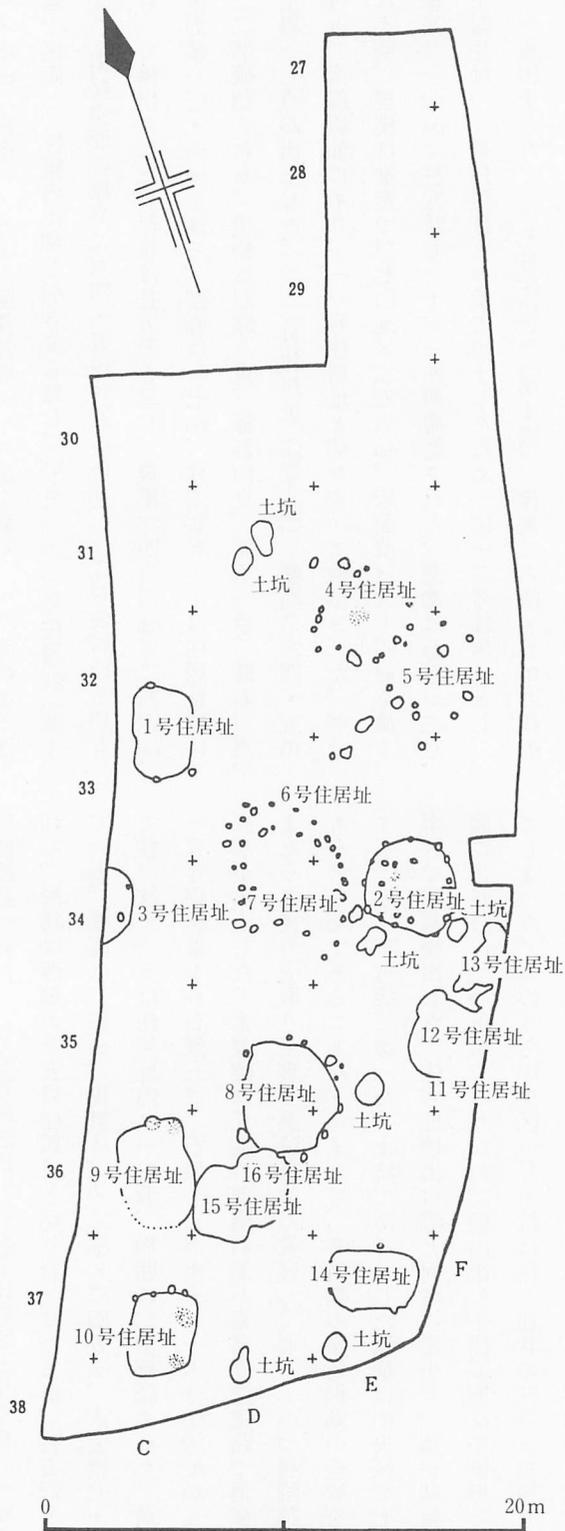
層序と遺構 層序 上川遺跡は愛鷹山麓中腹の尾根上に位置してお
り土層の堆積状態は、層厚にわずかな差異は認められるが、基本的
には次のとおりである。第I層 表土層、乾燥するとパサパサとなりし
まりがない。第II層 黒褐色土層、砂沢スコリア層で、発泡の悪い円
磨したスコリア層である。第III・IV層 暗黄褐色土層、カワゴ平パミ
ス層で、III層は粒子が荒く、ザラザラしている。第V層 暗黒褐色の
仙石スコリア層で、比較的角ばった大粒の発泡の悪いスコリア層であ
る。第VI層 黒色の強い土層で、上層には小粒のスコリア粒を若干含
む。縄文時代中期の土器片が若干出土する。第VII層 暗褐色土層で上
層よりも褐色が強くなる。縄文時代の鍵層であり、栗色土層として共
通呼称されている。縄文時代早期末から中期初頭にかけての遺物が出
土する。第VIII層 黄褐色土層、沼津市休場遺跡において旧石器包含層
であることが確認されたことから休場層と呼ばれている。遺構検出層
でもある。第IX層 暗褐色土層、赤褐色・黄褐色スコリアを多く含む。

遺構 本遺跡で検出した遺構は竪穴状住居址一六基・土坑状遺構七基・立て石遺構一基・集石遺構一基を検出した。竪穴状住居址 一号住居址 標高二六四・五m付近にあり、平坦面がやや北西に傾斜を始めるようとする所である。形状は隅丸の長方形を呈し、規模は三五二cm×二五二cm、床面積は約八・八㎡を測る。掘方は東側はゆるやかに、西側は急に掘り下げており、深さは七二cmである。柱穴状ピットは住居址内に八個、周囲に三個確認された。遺物は石鏃が四点、磨石が三点、土器は覆土中から撚糸文土器二点、絡条体庄痕文土器三点、無文土器七点が出土している。二号住居址 標高二六四・五m付近にあり、ほぼ平坦面に造られている。形状は不整形円形を呈し、規模は四〇八cm×三八六cm、床面積は一五・七㎡を測る。壁高は七〜一二cmを測り、中央西側で焼土が一個確認され、柱穴状ピットは二三個確認された。遺物はナイフ形石器一点、磨石三点、石皿二点、土器一二点が出土している。三号住居址 標高二六四・五m付近あたりにあるが、西側は調査不可能なため形状・規模など確認されなかった。壁高は一四〇cm程である。柱穴状ピットは東側に二個確認され、大きさは一四cm×一六cmと二五cm×二九cm、深さは一六cmと三〇cmである。出土遺物は無文土器一点である。四号住居址 標高二六四・六m付近で、南東にある五号住居址の柱穴状ピットと重複して検出された。形状は円形を呈し、規模は三七二cm×三三二cm、床面積は一二・三㎡を測る。住居址のほぼ中央に焼土が一個検出され、柱穴状ピットも一〇個確認された。遺物は出土しなかった。五号住居址 標高二六四・五m付近にあり、四号住居址と重複して検出された。形状は楕円形を呈し、

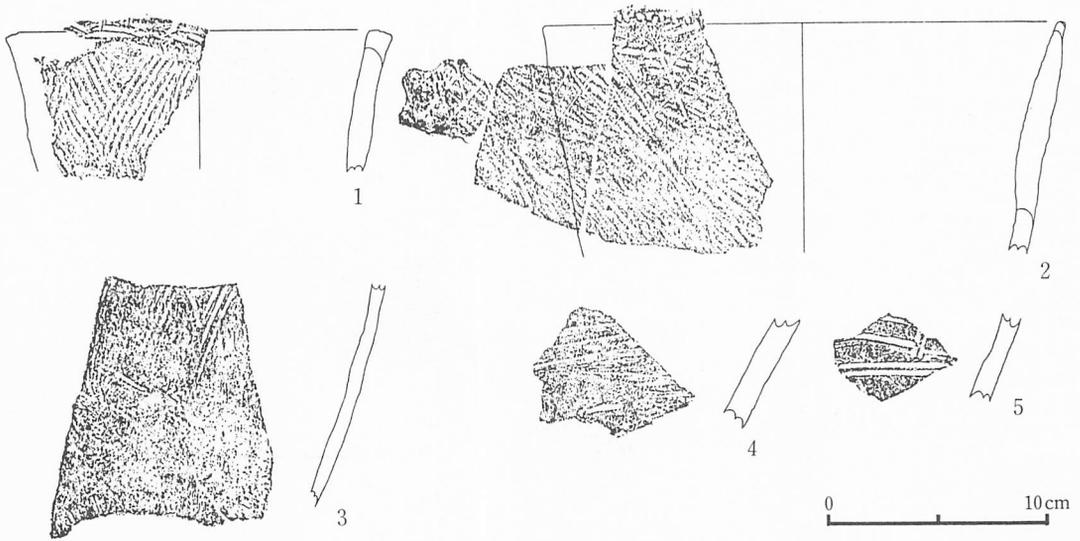
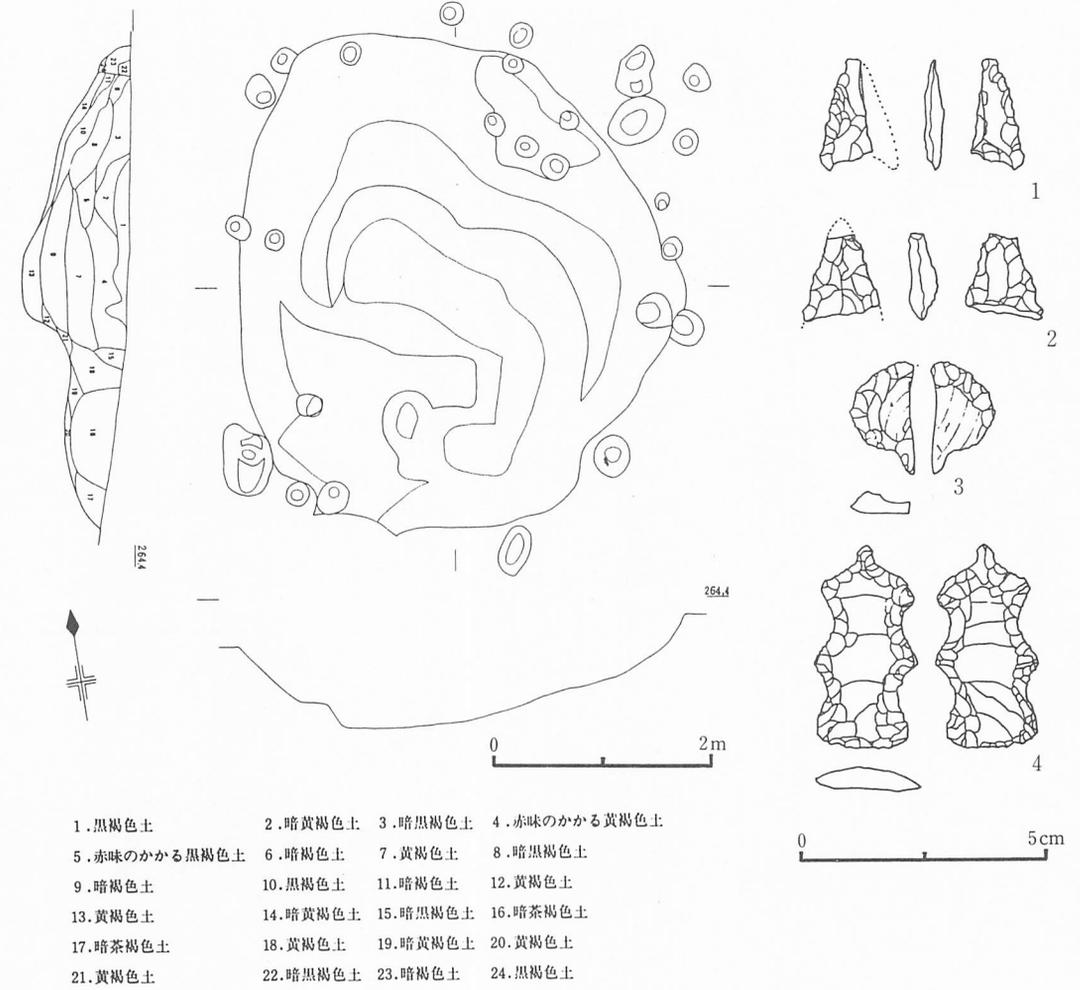
規模は四〇〇cm×三二八cm、床面積は約一三・一㎡を測り、柱穴状ピット一一個が確認された。遺物は磨石一点が出土した。六号住居址 標高二六四・三m付近にあり、七号住居址と柱穴状ピットと重複して検出した。形状は楕円形を呈し、規模は五四四cm×四二四cm、床面積は二三㎡を測る。柱穴状ピットは一八個確認された。七号住居址 標高二六四・四mにあり、六号住居址と柱穴状ピットと重複して検出した。形状は楕円形を呈し、規模は五六八cm×四二〇cm、床面積は二三・八㎡と本遺跡中最大のものである。六・七号住居址から出土した遺物は石鏃一点、ナイフ形石器一点、土器五点である。八号住居址 (第1図) 標高二六四m付近にあり、南側にある一六号住居址の壁を一部同じくして検出された。形状は楕円形を呈し、規模は四四〇cm×四〇六cm、床面積は一七・八㎡を測る。壁面は東西壁が急角度で落ち込んでおり、壁高は七一cmにも及ぶ。柱穴状ピットは住居址内に一一個、周囲に二〇個の計三一一個が確認された。出土遺物は石鏃二点、搔器一点、用途不明石器一点、磨石一四点、土器四五点が出土している。第2図6は貝殻口縁文を施文する土器で、復原口径二二・六cm、口縁から胴部まで貝殻条痕を施文したのち「ハ」の字形に貝殻腹縁文を三段施している。「打越式」と呼ばれている土器である。第2図8の復原口径は二二・三cmで、器面には貝殻口縁による波状沈線が施されている。九号住居址 標高二六三・五m付近にあり、南緩斜面に作られており単独で検出された。南壁面では検出できなかったが形状は楕円形を呈し、規模は四二六cm×三〇八cm、床面積は一三・一㎡を測る。柱穴状ピットは九個確認された。出土遺物は石鏃三点、磨石七点、土

器は二〇点出土した。一〇号住居址 標高二六三m付近にあり、南緩斜面に作られている。形状は長方形を呈し、規模は三三四cm×二七四cm、床面積九・一m²を測る。柱穴状ピットは住居址内では確認されず、周囲に一〇個確認された。遺物は搔器一点、細石刃一点、磨石三点、土器八点出土している。第3図の復原口径は二四・一cm、器高二八・四cm、底径六・五cm、胴部器厚一・六cmを測る。ヘラ等による沈線で区画し、区画内に押し引き文を施している。一一号住居址(第4図) 南緩斜面の標高二六四・五m付近にあり、一二号住居址と切り合って検出された。形状は長方形を呈し、規模は四六〇cm×二八六cm、床面積一三・一m²を測る。壁高は一七cm、柱穴状ピットは住居址内に二二個確認された。遺物は石鏃八点、搔器四点、管玉一点、磨石三点、土器一七点が出土した。一二号住居址(第4図) 標高二六四・五m付近の南緩斜面にあり、一一号住居址と切り合って検出された。形状は不明、規模は推定で三七〇cm×二五六cm、床面積は九・四m²を測る。壁高は一〇cmで柱穴状ピットが一四個確認された。遺物は石鏃が三点、土器片は一一号住居址との境で出土したため一応一二号住居址とし、一一点出土した。一三号住居址(第4図) 標高二六四・五mの南緩斜面にあり、一二号住居址の北側に隣接して検出されたが、一部しか確認できなかった。形状・規模等は不明で柱穴状ピット一個と焼土二個を検出した。遺物は珧状耳飾一点、土器六点が出土した。一四号住居址 標高二六三・五mの南緩斜面に検出された。形状は南側がややせばまった長方形を呈し、規模は三六六cm×二三四cm、床面積は八・五m²を測る。柱穴状ピットは住居址内に六個、外に一一個の計一

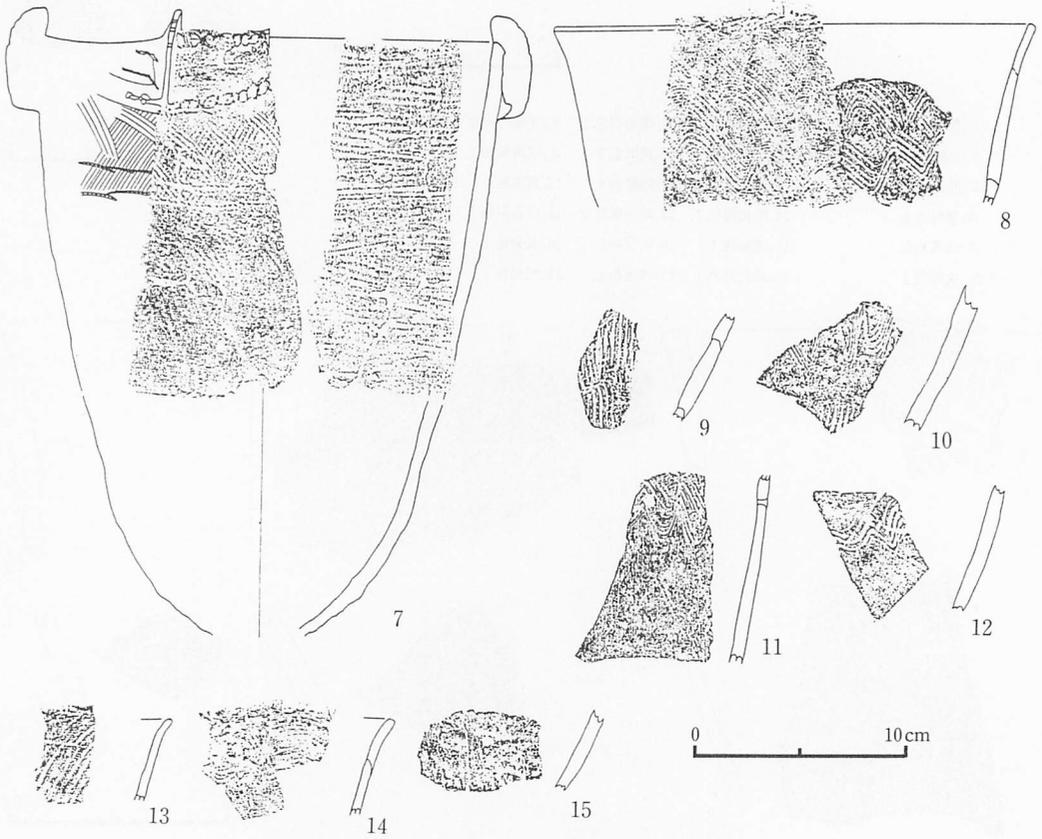
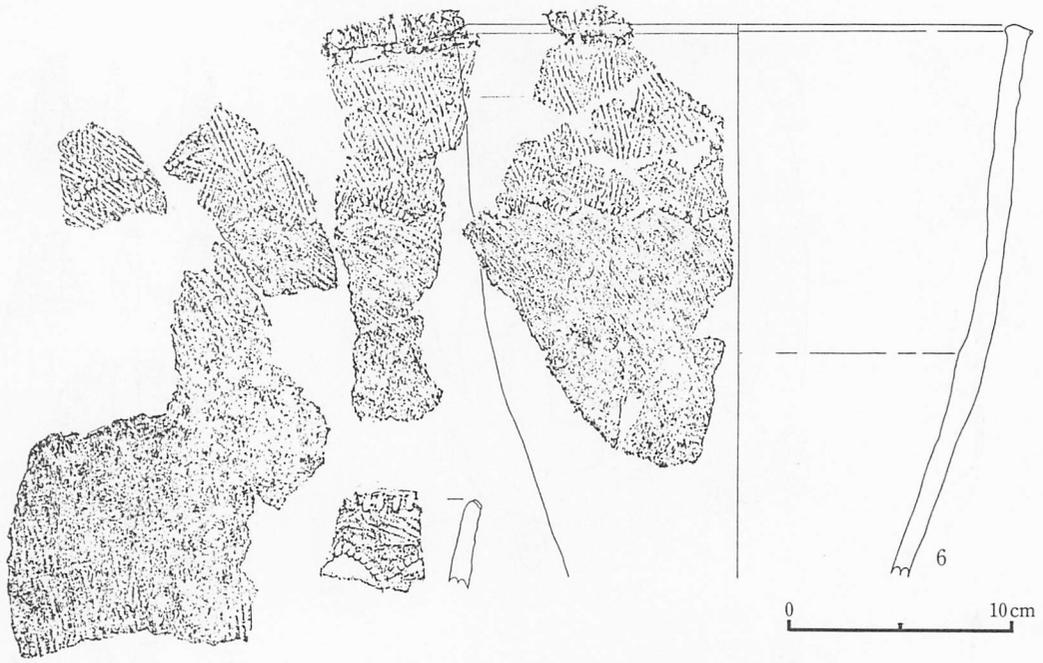
七個検出された。遺物はナイフ形石器一点と土器八点が出土している。一五号住居址 標高二六三・五m付近の南緩斜面に一六号住居址と切り合って検出された。形状は東側を一六号住居址と切り合っているが、長方形を呈している。壁高は一四cm、規模は二八八cm×二四六cm、床面積は五・三m²で、柱穴状ピットが住居址内で四個、周囲に三個確認された。一六号住居址 一五号住居址と切り合って検出された。形状は西側が一五号住居址と切り合っているが、長方形を呈している。壁高は二三cm、規模は三一二cm×二四五cm、床面積七・六m²で柱穴状ピットは住居址内に一二個、周囲に二個確認された。遺物は一五号住居址から石鏃三点、石皿一点が出土、一六号住居址から石鏃五点が出土した。本遺跡は丘陵の西側斜面が東名高速道路で消滅し、またその後の土取り工事遺跡全体が変容しており、かつ発掘調査区もその一部であることなどによって、各時期の集落形態の全容を把握することは不可能であった。土坑であるとした遺構は中央区で七基、南区で四基検出した。住居址検出の際と同時に覆土の一部が基盤層の面にまだらにくい込んでいたため、検出後の平面形態は不整形となっていた。このうち中央区一号土坑は浅い皿状の凹みと重複しており、三号土坑は柱穴状ピットの集合体のようであり、四号土坑は底が二段で柱穴状ピットが二個あり、五号土坑は同じくピットが二個あり、六号土坑もピットとつながっていた。ほぼ円形で掘り方断面が皿状、碗状のものは二・七号土坑であった。南区では二・三・四号土坑は平面円形、断面皿状で形態上の共通性を示し、一号土坑は断面楕円状で底部は西側にかたよっていた。以上、すべて出土遺物はなく、時期、



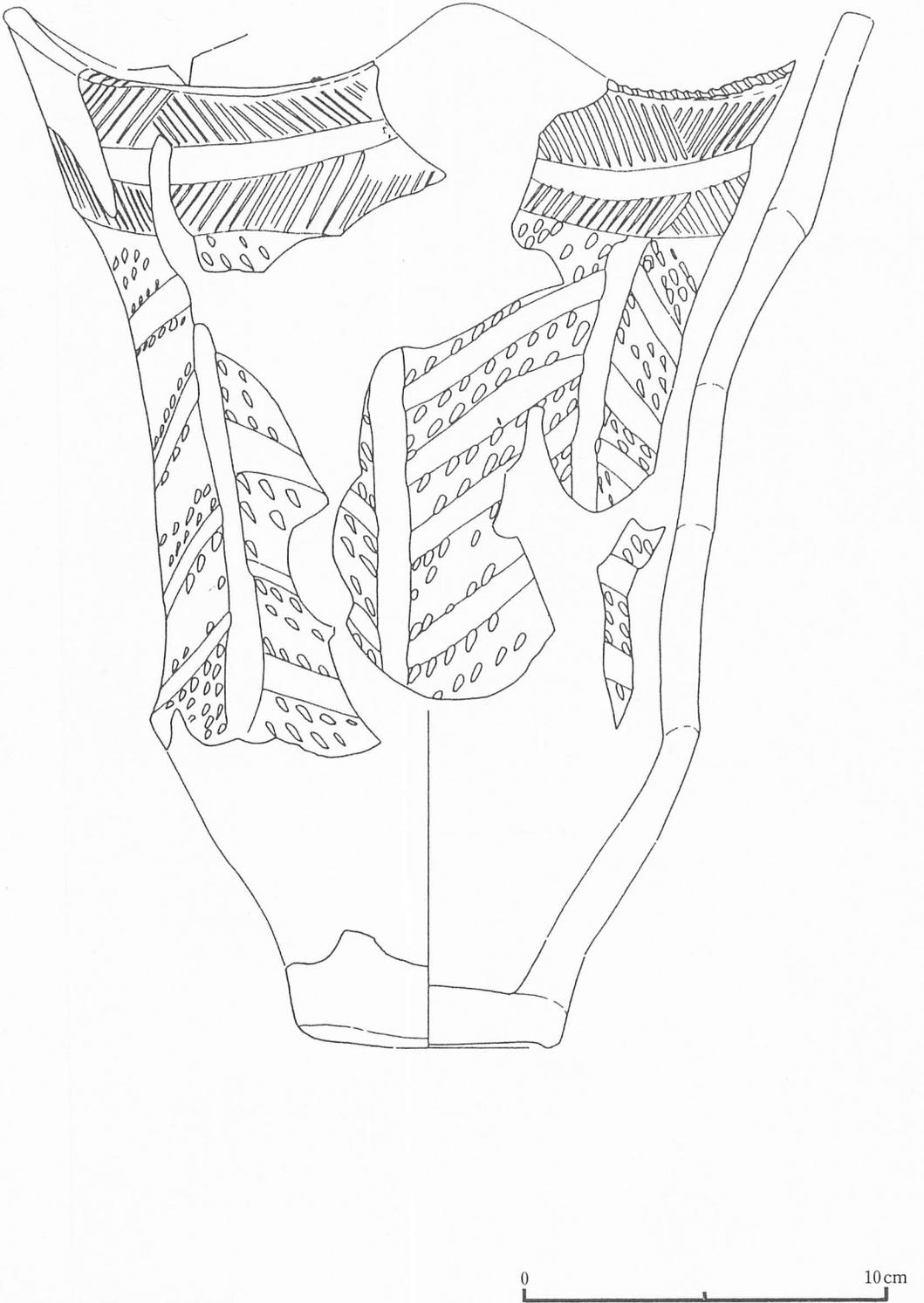
上川遺跡遺構図



第1図 上川遺跡8号住居址と出土石器実測図・土器拓影



第 2 图 上川遺跡 8 号住居址出土土器拓影



第3図 上川遺跡10号住居址出土土器実測図



第4図 上川遺跡11・12・13号住居址と装身具実測図・土器拓影

性格とも不明である。立て石皿は中央区の遺跡分布北西端限界に位置して、小ピットに石皿の使用面の凹み部分を南に向け、下半部を地面に埋め込んで垂直に立てたものである。このような例は当地域で初めてのものであり、特殊な遺構としてよからう。性格は明らかでないが、信仰、宗教的な色彩をもつものであろう。この近くに石皿に磨石を乗せたものが検出されている。中央区の六号住居址と七号住居址の南に接して、石皿が三個体ほどほぼ東西に連続して基盤土層面に近いところから検出された。ほとんど同一のレベルにあり、同時点でのセットと考えられる。

遺物 本遺跡で出土した土器は、縄文時代早期末～中期初頭のもので、約三万余点である。以下分類の可能な一六〇七片をⅠ～Ⅲ群に分類し、さらに各群ごとに種別に細分した。第Ⅰ群は縄文時代早期末から前期初頭に位置づけられるもので、文様等により一三に分類され、さらに文様との組合わせや文様区画などの諸要素から種別できる。一類は隆起線を有するもの(第5図)で、胎土には、白石粒・石英・砂・繊維を含む。二類は細沈線を有するもの(第6図)で、胎土には、白石粒・細砂・石英・雲母・繊維を含む。三類は太い沈線を有するもの(第7図)で、胎土には、白石粒・砂・石英・雲母・繊維を含む。四類は絡条体圧痕文を有するもの(第8・9図)で、「野島式」と呼ばれている土器である。胎土には白石粒・石英・砂・繊維・雲母を含む。五類は貝殻腹縁文を有するもの(第10図)で、「打越式」と呼ばれている。胎土には、白石粒・砂・石英を含む。六類は貝殻条痕を有するもの(第11図)で、胎土には、石英・砂・白石粒・繊維・雲母を含む。

七類は隆起線を円・弧状等に配して文様を構成するもの(第12図)で、「神之木台式」と呼ばれている土器である。胎土には、石英・砂・白石粒・繊維・雲母を含む。八類は波状沈線・押引き・隆帯等によって文様を構成するもの(第13図)で、「下吉井式」と呼ばれている土器である。胎土には白石粒・砂・石英・繊維を含む。九類は沈線を波状に配したものの(第14図)で、「天神山式」と呼ばれている土器である。胎土には白石粒・砂・石英・繊維を含む。一〇類は擦痕を有するもので、胎土には白石粒・砂・石英・繊維・雲母を含む。一一類は口縁または口縁部に隆帯を貼るもの(第15図)で、胎土には白石粒・雲母が多く、繊維・砂・石英がわずかに含まれている。一二類は縄文が施されているもの(第16図1～16)で、胎土には白石粒・砂・石英・雲母を含む。一三類は捺糸文土器(第16図17～27)で、胎土には白石粒・砂・石英・繊維を含む。

第Ⅱ群 縄文時代前期に位置づけられる土器群を本群とした。一類の土器(第18～20図)は器厚が薄く、三～五mm程で隆起線・沈線等で文様を構成しているもので、「木島式土器」、器厚が薄いところから「おせんべ土器」とも呼ばれている。胎土には、白石粒・砂・石英・雲母を含む。二類は(第21・22図)斜縄文・ループ文・コンパス文・貼付文・結節部分の回転痕を有した「関山式」と呼ばれている土器で、胎土には、白石粒・砂・石英・雲母を含む。三類は(第23～25図)土器の全面に縄文を施文し、その上に粘土紐を貼るもの、沈線、ボタン状貼付文を有するもの、結節浮線文を施すもの、貼付文結節浮線文を有するものがあり、「諸磯式」と呼ばれている土器である。胎土には、

白石粒・石英・砂・雲母を含む。四類の(第26・27図)は、土器の表面に縦・横に施して文様を構成するもので、「十三菩提式」と呼ばれている土器で、胎土には、白石粒・石英・砂・雲母を含む。

第三群 一類(第28図)は縄文時代中期初頭の西日本系土器を本類とするもので、口唇部両側に粘土紐を貼付するもの・縄文を有した「船元式」と呼ばれている土器である。胎土には、白石粒・砂・石英を含む。二類(第29〜32図)は東日本系土器を本類とするもので、集合沈線・縄文・三角印刻文・結節縄文・結束縄文・木目状撚糸文・斜縄文・爪形文を有し、「五領ヶ台式」と呼ばれている土器である。胎土には、白石粒・砂・石英・雲母を含む。

上川遺跡から出土した石器類は、表面採集も含め約三〇〇〇点である。石器ごとの数量は次のとおりである。ナイフ形石器九点、細石刃七点、石槍二点、石鏃一一七一点、石斧三一点、石匙三六六一点、石錘二一点、磨石一九五四点、凹石一四七一点、石錐二五五一点、玦状耳飾り二一点、管玉三点、楔形石器一点、叩石九点、礫器一四四一点、蜂の巣石二点、石核一七七一点である。これらの石器の大部分はⅣ層〜Ⅶ層(遺物包含層)から出土し、土器片の出土レベルとほぼ同一である。また一〇〇〇点におよぶ剥片・チップが出土し、その総重量は約二八kg、内訳は、黒曜石約一七kg 約六〇%、頁岩約六kg 約二二%、安山岩約三・六kg 約一三%、チャート約一・五kg 約五%、水晶 約六二g 約〇・二%である。これらの石材の製品の割合は、黒曜石七・五%、頁岩一三・二%、安山岩一%、チャート七%、水晶五・三%である。又石器出土点数の五三%が磨石、三二%が石鏃で、二種で八〇%を占

め、他はそれぞれ数%以下を占めるにすぎない状態である。極めて特徴的な石器の組成を示す出土状態である。石槍(第33・34図)は一八点出土し、木葉形を呈するもの、柳葉形を呈するもの、石鏃形を呈するものに大別できる。石鏃(第35図)は表面採集も含め一一七一点出土し、六八五点は無茎石鏃である。基部の形態によって平基式石鏃と、凹基式石鏃の二類に分けられる。石材は黒曜石・頁岩・チャート・水晶である。石斧(第36・37図)は三一点出土した。これらは打製と磨製の二種に分けられる。打製石斧は二三点認められ、形状はほぼ短冊形で、刃部は円刃のものが圧倒する。磨製石斧は三点は認められた。

石匙(第38図)は縦型六点・横型三〇点が出土した。石材は黒曜石・チャートである。石錘(第39図)は二一点出土し、すべてが円礫の長軸上の上下端に剝離や敲打によって抉りを大きく入れた礫石錘である。石材は砂岩・安山岩である。磨石は表面採集も含め一九五四点出土したが、欠損資料が多く完形品は二三四点にすぎない。これらは使用面の状態から曲面的磨面をもつものと、平面的磨面をもつものとに分けられる。凹石は表面採集も含め七五五点出土した。磨石併用例が圧倒するが、磨石併用例を除くとわずか六六一点であり、磨石痕をもたない。これらの凹凸は表・裏面に磨面を有するものが多く、側辺部に敲打痕を併用するものは五点で長軸辺に敲打痕を多くみる。形状は単に凹石のものには不整形・楕円形を呈し、表面は凹凸である。磨石併用のものは楕円形・長円形状を呈している。石材は安山岩質である。石皿は一四七点出土し、内四点が住居址からである。これらは使用面が「U」状を呈するものと、「一」状を呈するものとにわけられる。石材は安山

岩・多孔質安山岩である。蜂の巣石(第41図)は石皿の破片を転用し、表面に磨面が残っており凹みは肩部に残る。裏面にはほぼ全面に二五mm×二〇mm×三五mm×三三mmの凹みが認められる。石材は多孔質安山岩である。石錐(第40図)は二五点出土で、つまみ部分をもつものと、細身状のものに分類される。石材は黒曜石・頁岩・チャート・安山岩である。玦状耳飾り及び管玉は(第43図)一六点出土し、内二点は住居址内から出土した。1・2は半欠品であるが、表裏面ともに斜方向に整形痕が認められ、周辺部は、研磨により縁取りが行われ、断面は平坦状を呈す。13の上部には両面から孔をあけている。石材は、滑石・翡翠である。叩石(第42図1~6)は比較的器厚をもった円柱状にちかい自然礫を素材として、長軸端部を叩打される。楔形石器(第42図7)は縦断面が略二等辺三角形を呈したチャート質の石器である。礫器(第45図)は一四点出土し、両面に丁寧に調整加工するものと、片面は自然面を残し、片面は丁寧に加工するものとに分けられる。石材は頁岩・安山岩・チャートである。

遺跡の特徴 本遺跡は表層に現世の火山灰が厚く堆積しており、遺跡の放棄埋没以降、人為的な攪乱はほとんどなく遺物の包含状況は極めて良好であった。遺物包含層は大きく上下二層に分けられる。上層が黒褐色土層、下層は褐色から漸次、黄褐色のスコリアを含んだ土層に移行する堆積層で、検出された土器片でみた場合では、上層では中期前半の土器がブロック状となって同一レベルに存在し、これらに早期後半及び前期の土器片が混在していた。下層では前期の土器片に、早期後半の土器片が上下に混在し、また中期の大型破片も検出された

が、基盤層(無遺物層)近くでは早期後半の土器片が比較的多く検出された。以上のような遺物の包含状況からみると、初め基盤直上に早期後半の生活面が形成され、その後断続的ではあるが前期から中期後半までの生活面が重なり、そのつど、前代の遺構、遺物を破壊したため、各時期の土器片、その他の遺物が上下に大きく拡散されたものと考えられる。しかし大まかには遺物包含層の上層は中期前半、下層は早期後半とすることはできるが、各時期別の層位的区分はできなかった。また、石器類は礫まで含めると、数量はおおむね土器片と相半する。それを形態及び使用目的から分類すると、約一五種になる。これらの石器が出土土器の各時期とどう結びつくかは明らかでないが、発掘調査の過程において、各時期の土器と混在してそのつど検出したことによる。量的にみると石鏃が圧倒的に多く、欠損したもので含めると約一〇〇〇点近くある。石質は黒曜石がほとんどで、頁岩、チャート、水晶製が若干ある。また数の上で石鏃の次に磨石が多い。磨石は石皿のあて石とすると、石皿の出土数七一個に対して、あて石三〜四個とすれば、ほぼ磨石出土数にあてはまる。さらに磨石に似た径一〇cm前後から五cmの丸石が総計四六七五個ほど出土しており、出土区は中央区のほぼ中央に集中していた。この丸石の石質は、本遺跡の近くを流れる黄瀬川・佐野川の河原にある安山岩系のもので、コークスを持つた時のように、手のひらにひっかかりを強く感じる。多少の擦痕がみられるものが多いので、単なる河原石ではなく石器としてみなしてよからう。使用目的は定かでない。どんぐり類の皮むき等には、ひっかかりが強いので都合がよいが、数量が多すぎる。また石皿七一個体の

うち、平らで凹みの浅いものが一三個、凹みの深いものが五六個、他は破片で凹みの度合は明らかでない。大きさに大小があり、大は据えて使用したものとしてよいが小形で手に持つことのできるものは、別な使用目的を考えてもよいのではないだろうか。顔料を叩きつぶし練ったものとしてもよいが、その痕跡は検出できていない。そして本遺跡での打製石斧の出土量が意外と少ない。打製石斧は中期以降急激に増加するといわれているから、中期初頭の土器に属しているときみなしでもよい。静岡県駿東郡長泉町柏窪遺跡では土器に伴って、わずかな面積の発掘調査区から二四七本の打製石斧が出土しているのと比較すると、本遺跡とはまったく対照的である。また本遺跡出土のものとは不定形のものばかりである。数量の少ないこと、不定形であることが何を意味しているのか大いに疑問とするところであるが、この時期で終わっていることから、終了時点つまり集落の移動時点で持ち去ったものと考えてもよい。早期と分類したものは、縄文時代遺物包含層中から土器片及び他の石器と共伴して出土したもので、黒曜石片の一部に加工してある石刃状石器がある。大小あって、一種の利器ではないかと思われる。また、特殊な石器として、黒曜石製でひょうたん形の小型石器がある。上端の尖りは錐、左右は削り器の多目的の利器だと思われる。さらに本遺跡からは一六点の塊状耳飾り及び玉類が出土した。玉類には管状のものもある。量的には県下でも例がなく、特異な事象である。

現状 東名高速道路裾野インターチェンジ道路敷となって消滅した。

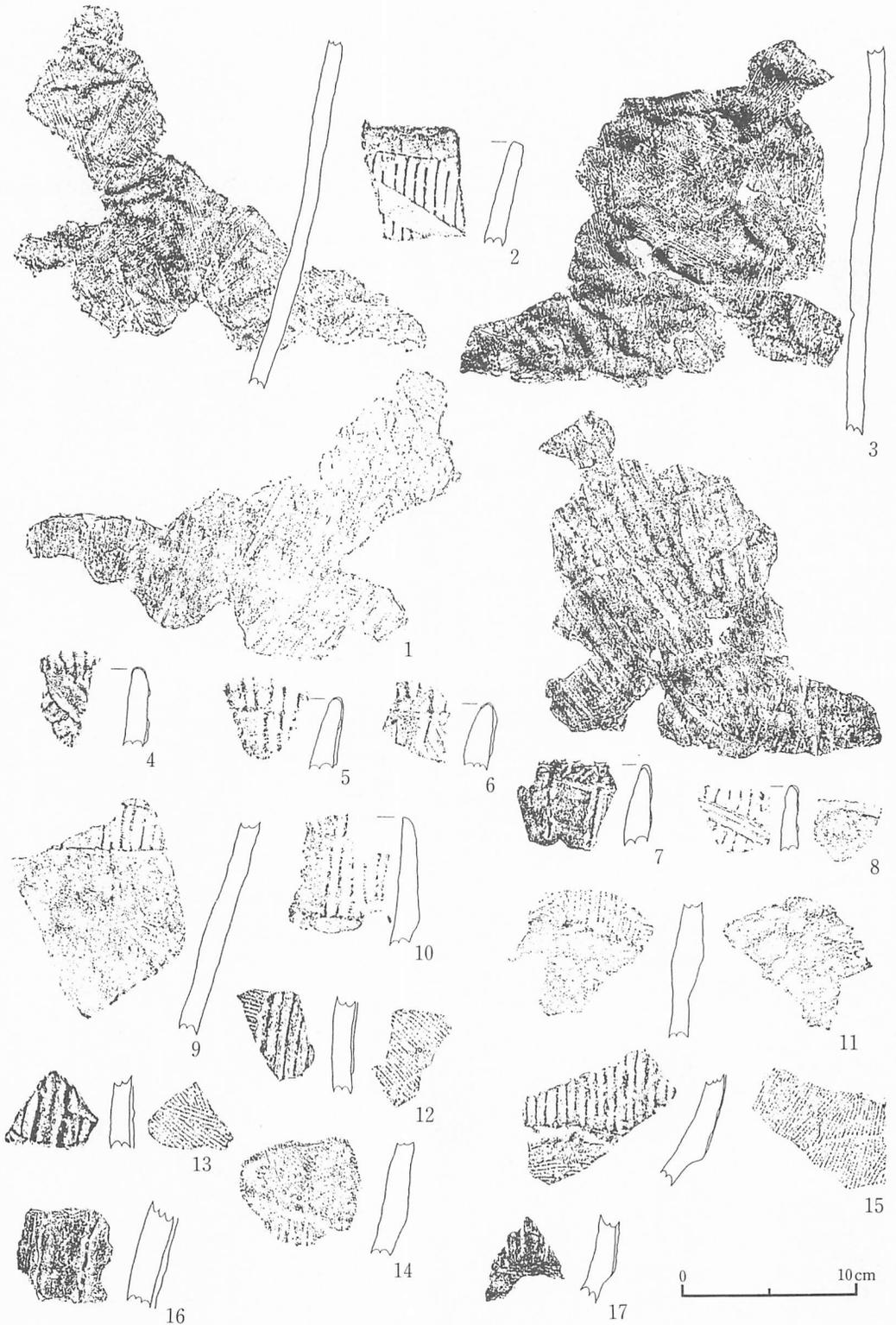
資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 笹津海祥・小野真一・佐藤民雄「駿東郡裾野町上川遺跡発掘調査概報」日本道路公団・静岡県教育委員会 一九六八、袴田 稔「上川遺跡発掘調査報告書」日本道路公団東京第一管理局・静岡県教育委員会・裾野市教育委員会 一九八七

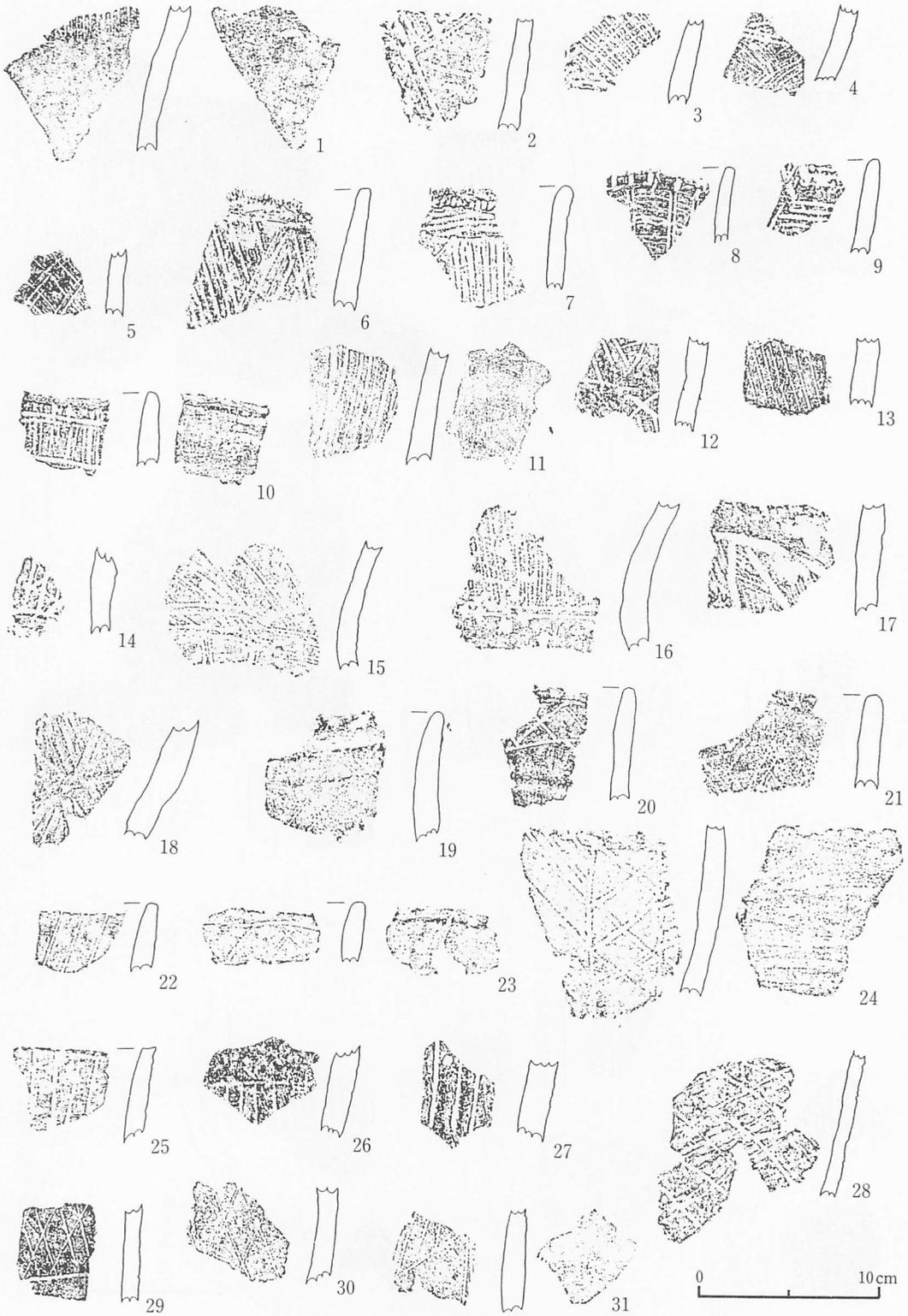
(用語解説)

打越式土器 縄文時代早期の土器型式。埼玉県富士見市打越遺跡を標識遺跡とする。器形は口径の広い大形の深鉢形で、口縁は四単位の低い波状縁で、立ち上がりは直上か少し内湾し、ゆるい尖底や丸底状の状態となる。文様は口縁に平行して二〜三段の貝殻腹縁による山形文が横走し、胴部と画したりする。

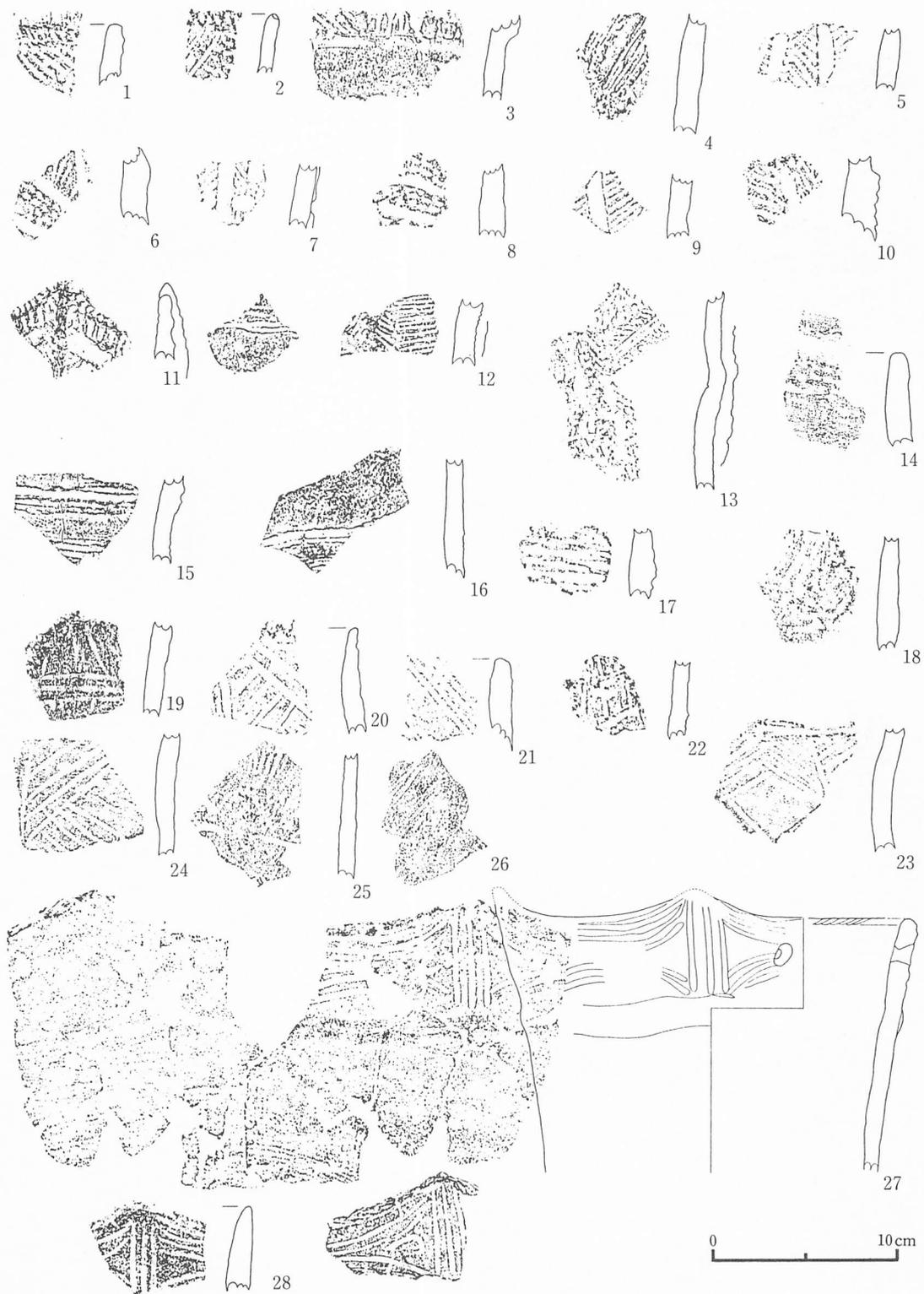
神之木台式土器 縄文時代早期の土器型式。神奈川県横浜市神之木台遺跡を標識遺跡とする。器形は口縁が直上またはやや外反し、波状口縁のものが大半で、若干の小突起をもつ平縁があり、底部は尖底である。口縁は一〜二本の刻みをもつ隆線を垂れ下げ、波頂部で垂下する流線と接する。文様は条痕文で、なかには内面にまで施すものもある。



第5図 上川遺跡出土第I群1類土器拓影



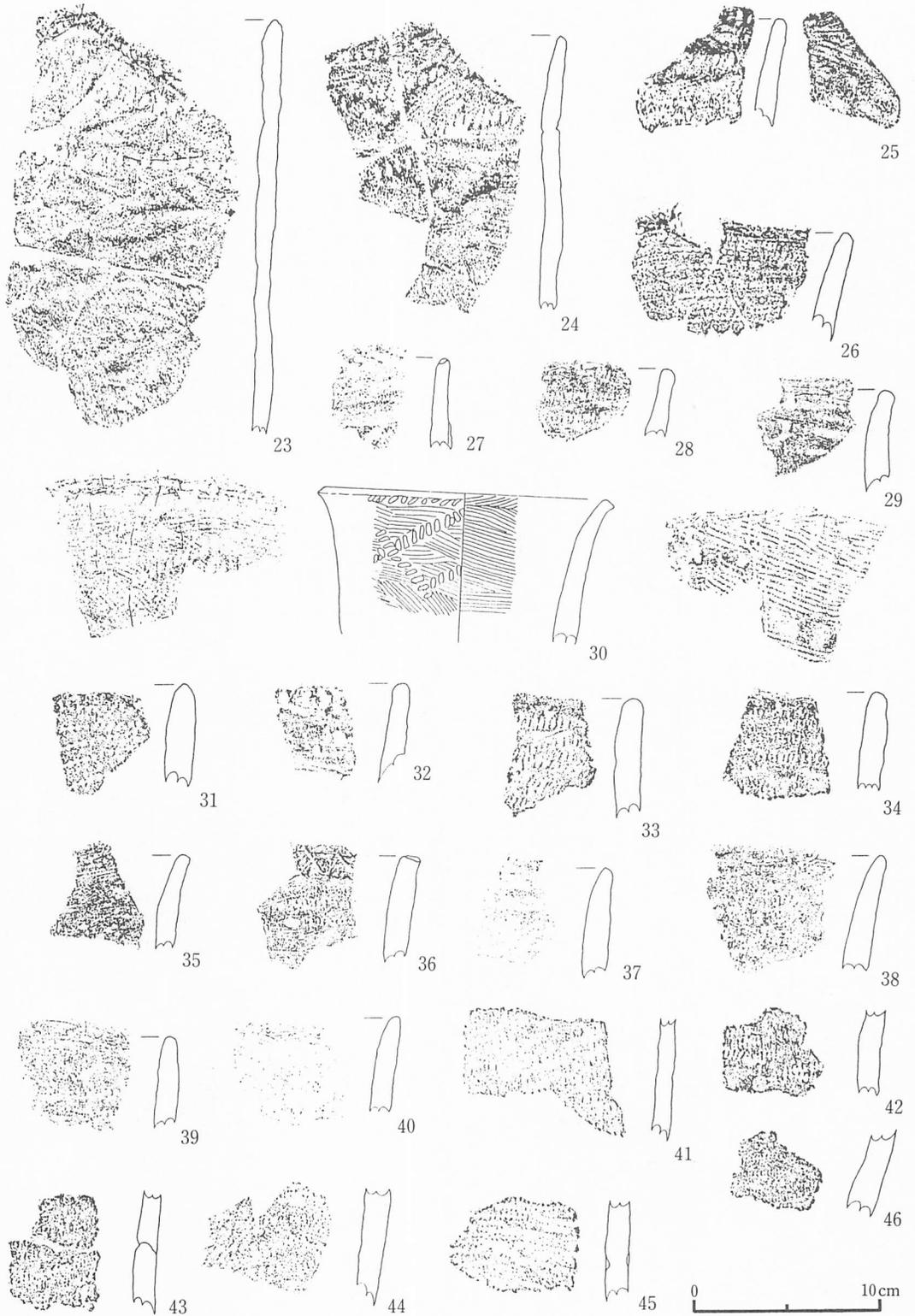
第6图 上川遗迹出土第1群2类土器拓影



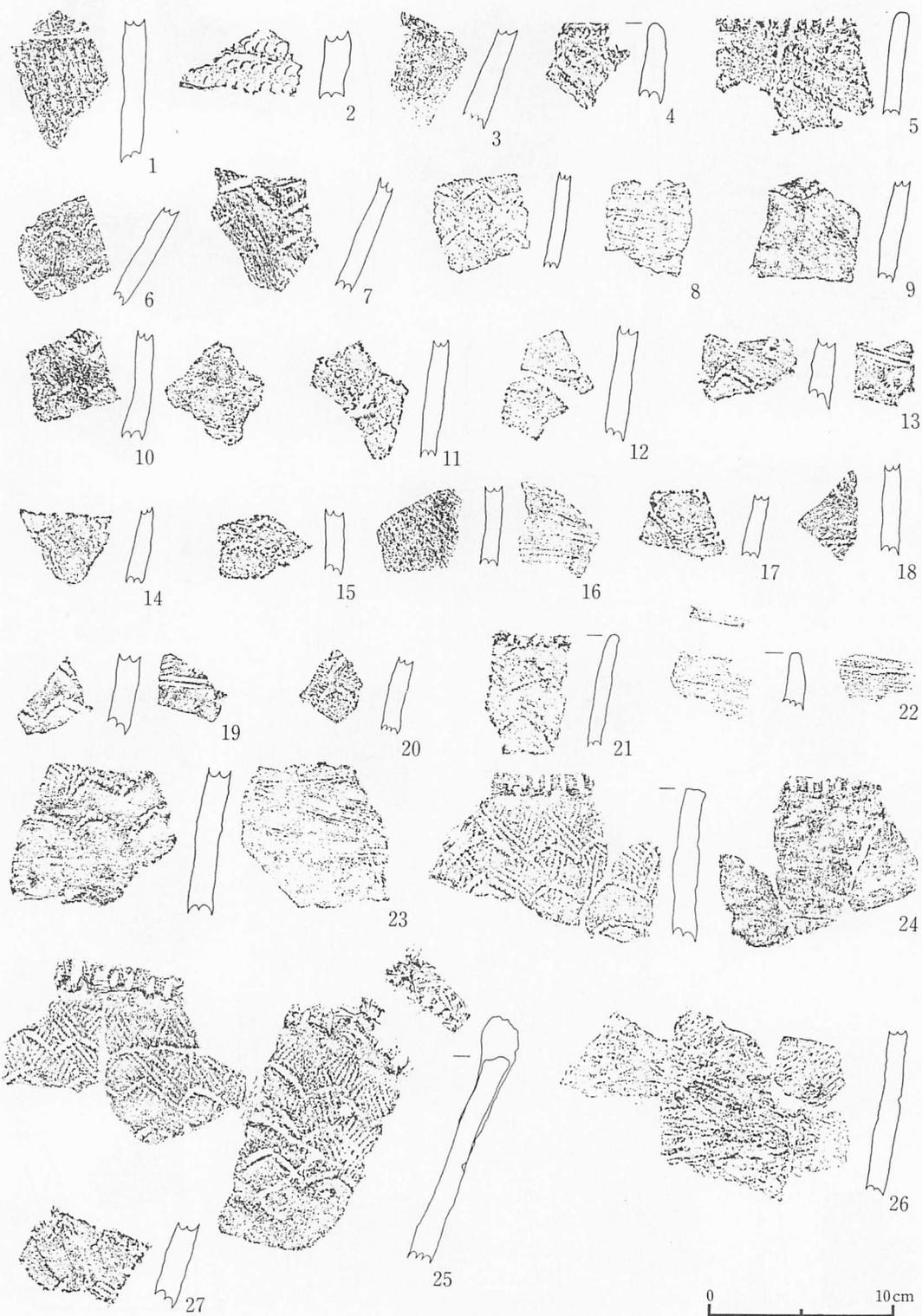
第7図 上川遺跡出土第1群3類土器拓影



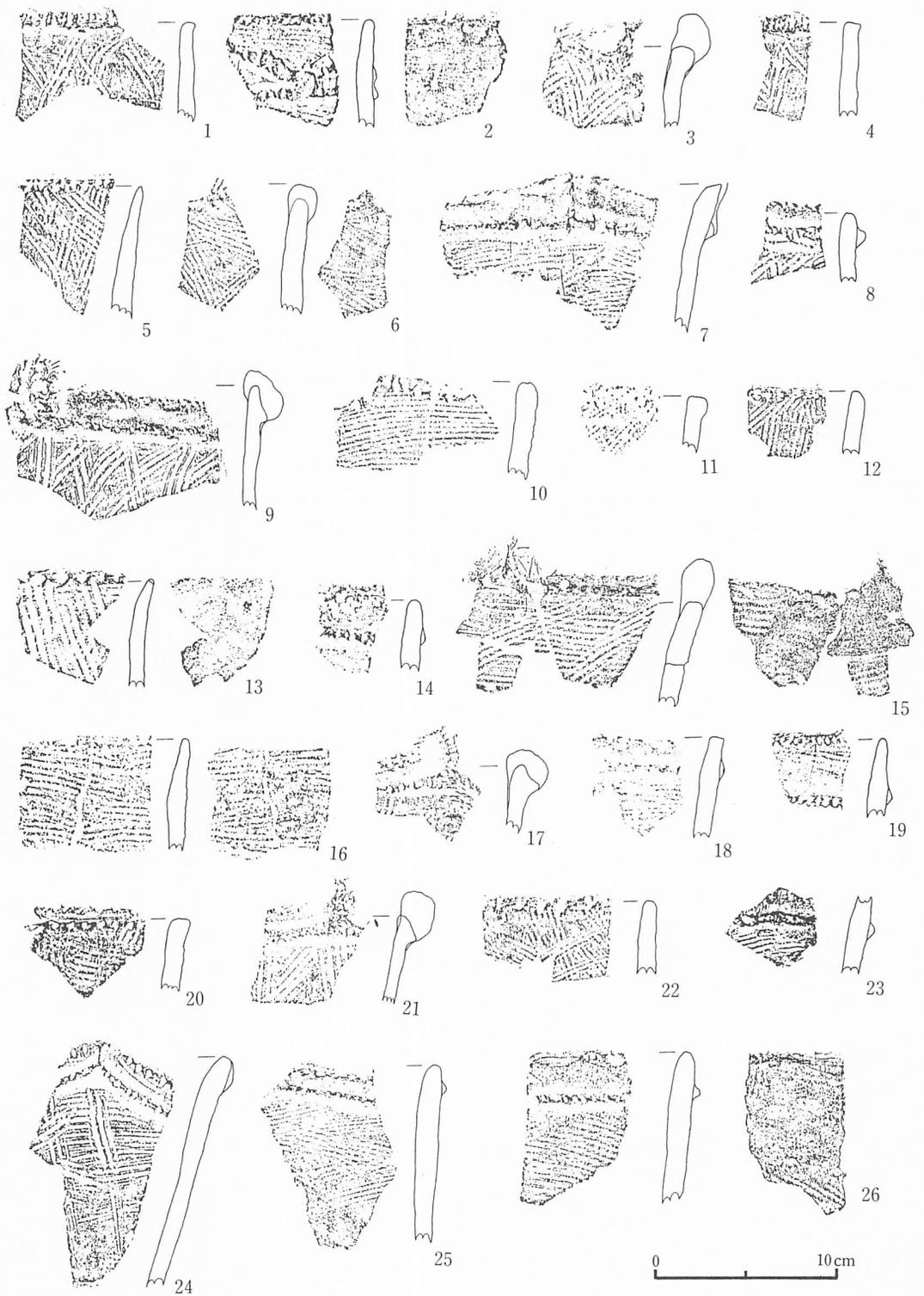
第8図 上川遺跡出土第1群4類土器拓影



第9図 上川遺跡出土第1群4類土器拓影



第 10 図 上川遺跡出土第 I 群 5 類土器拓影



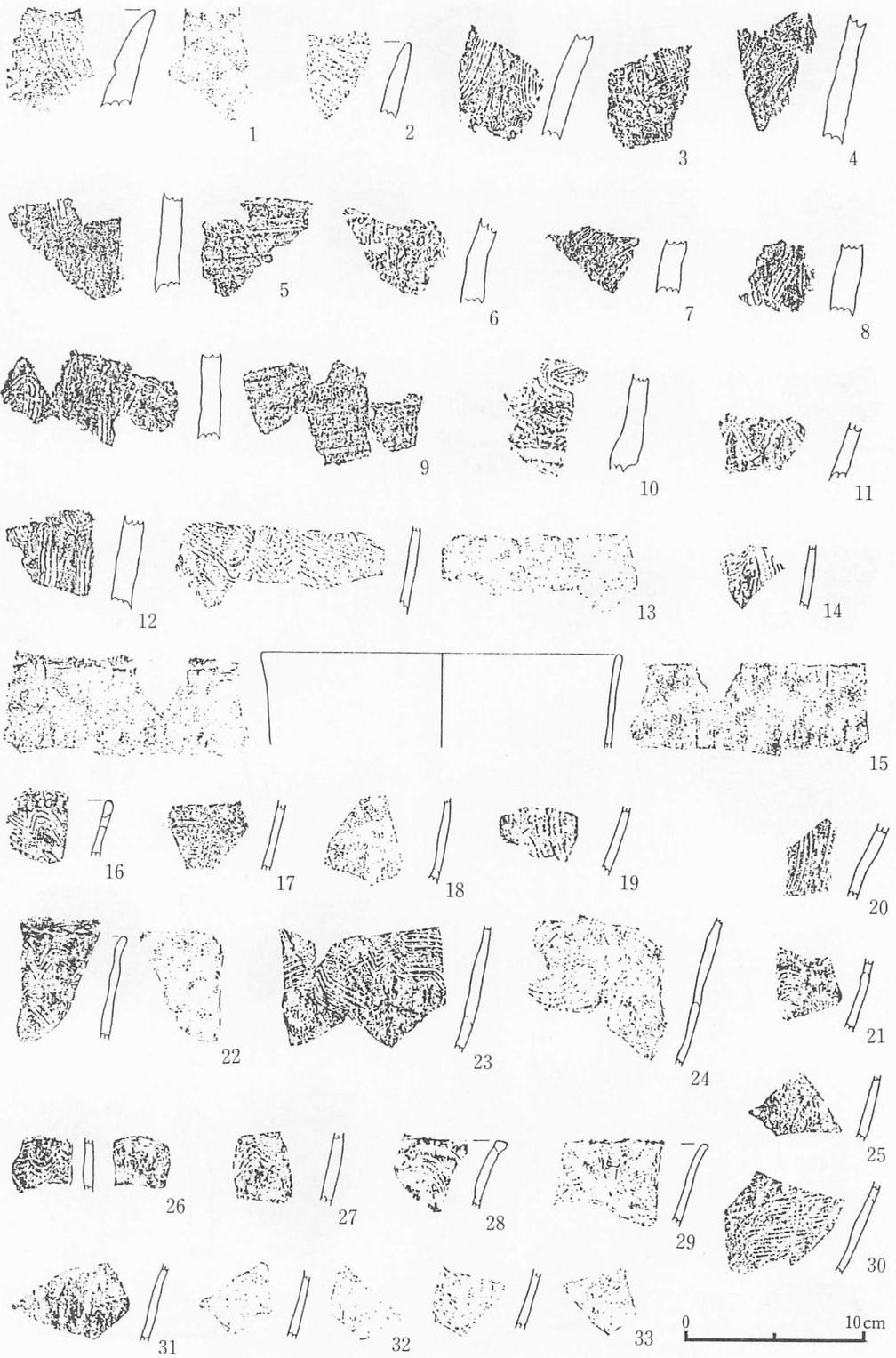
第 11 図 上川遺跡出土第 I 群 6 類土器拓影



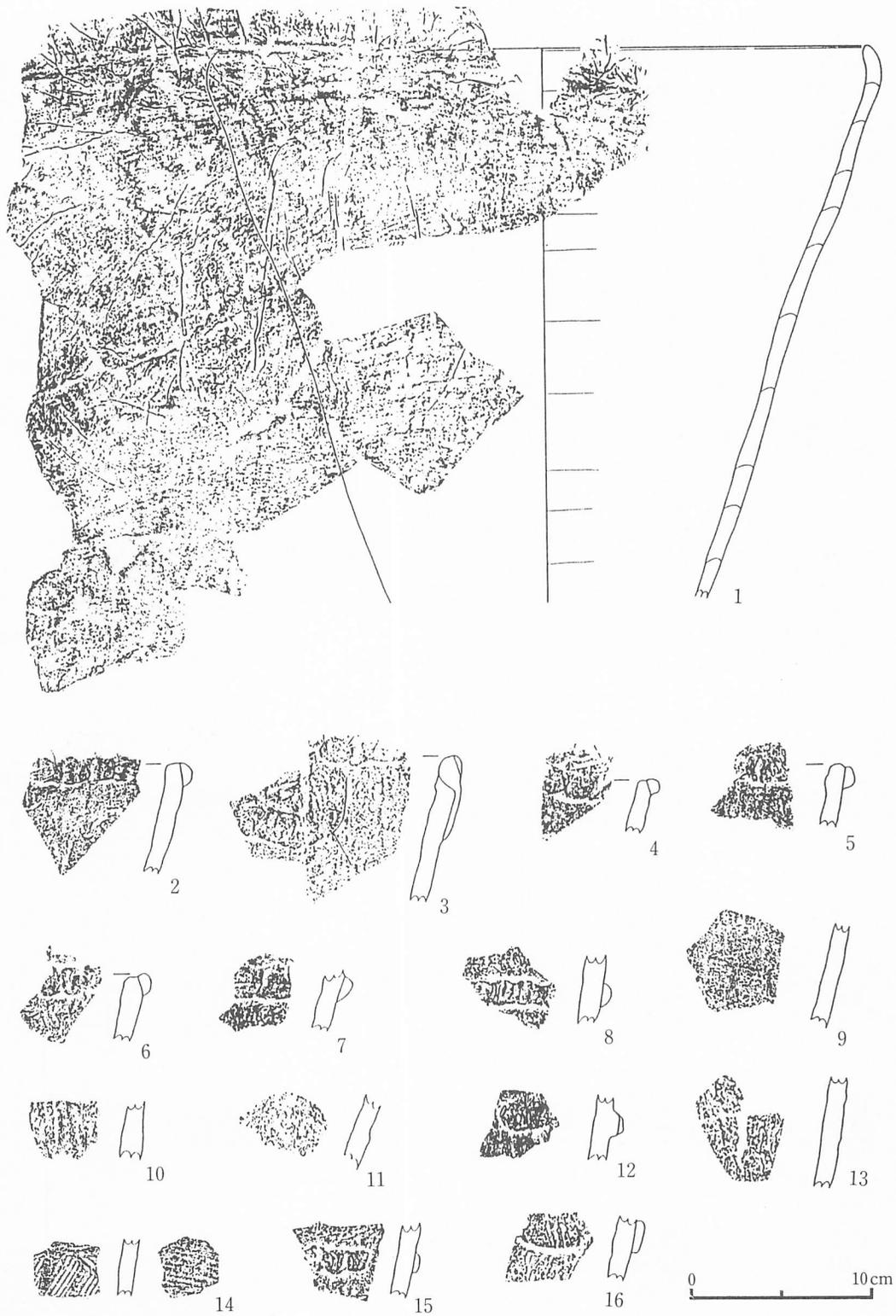
第 12 図 上川遺跡出土第 I 群 7 類土器拓影



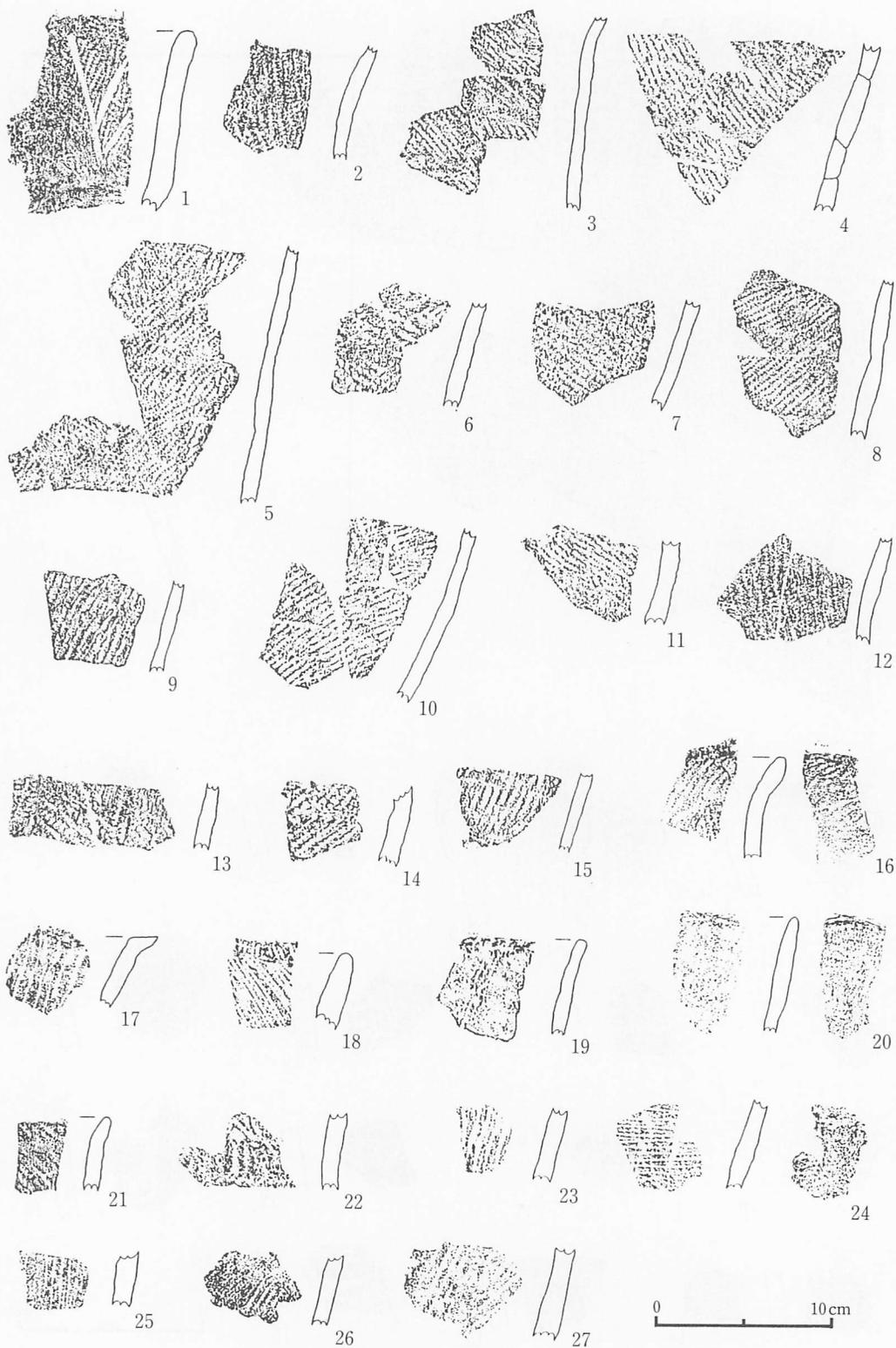
第13図 上川遺跡出土第I群8類土器拓影



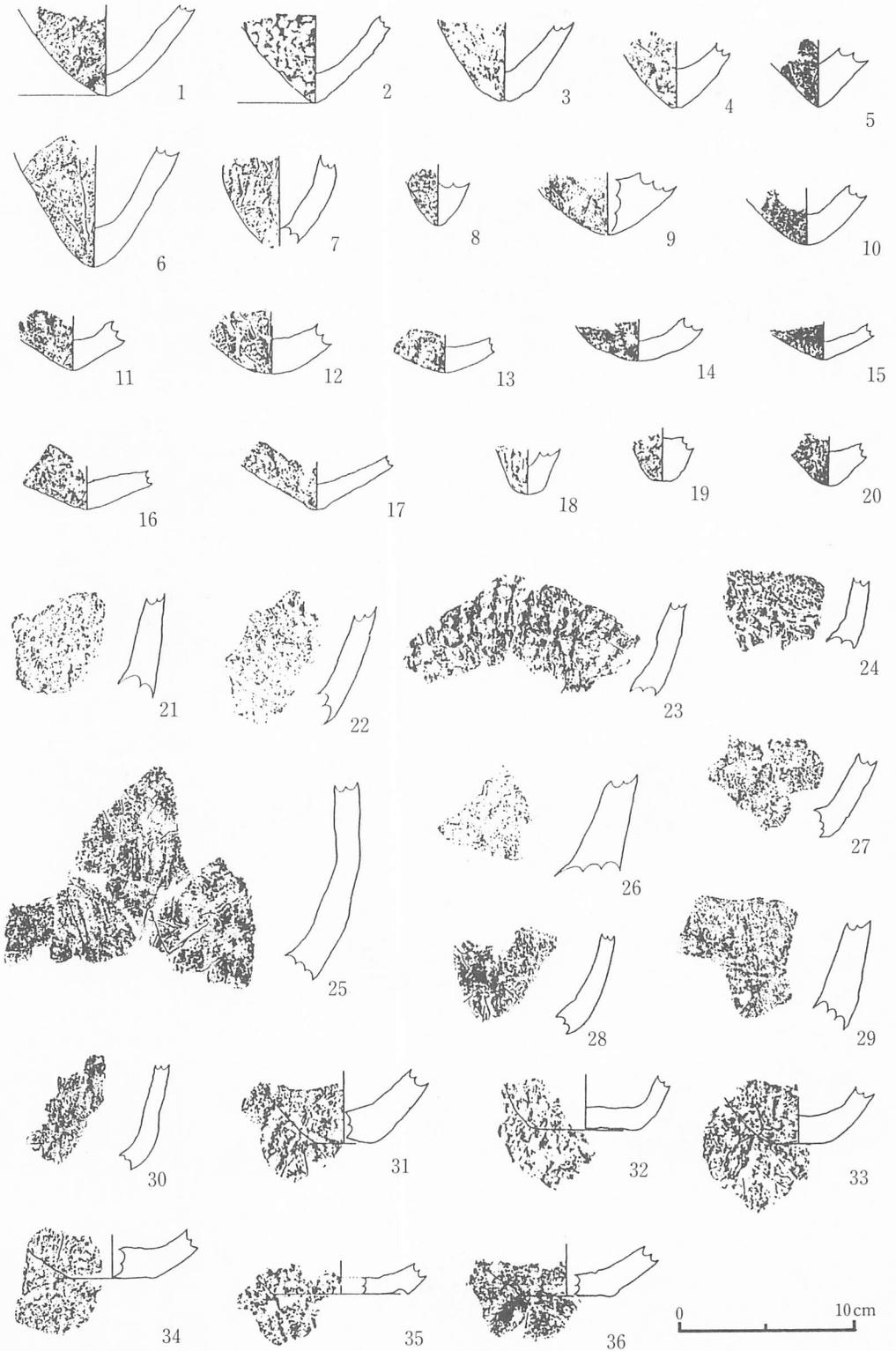
第14図 上川遺跡出土第I群9類土器拓影(13~33)



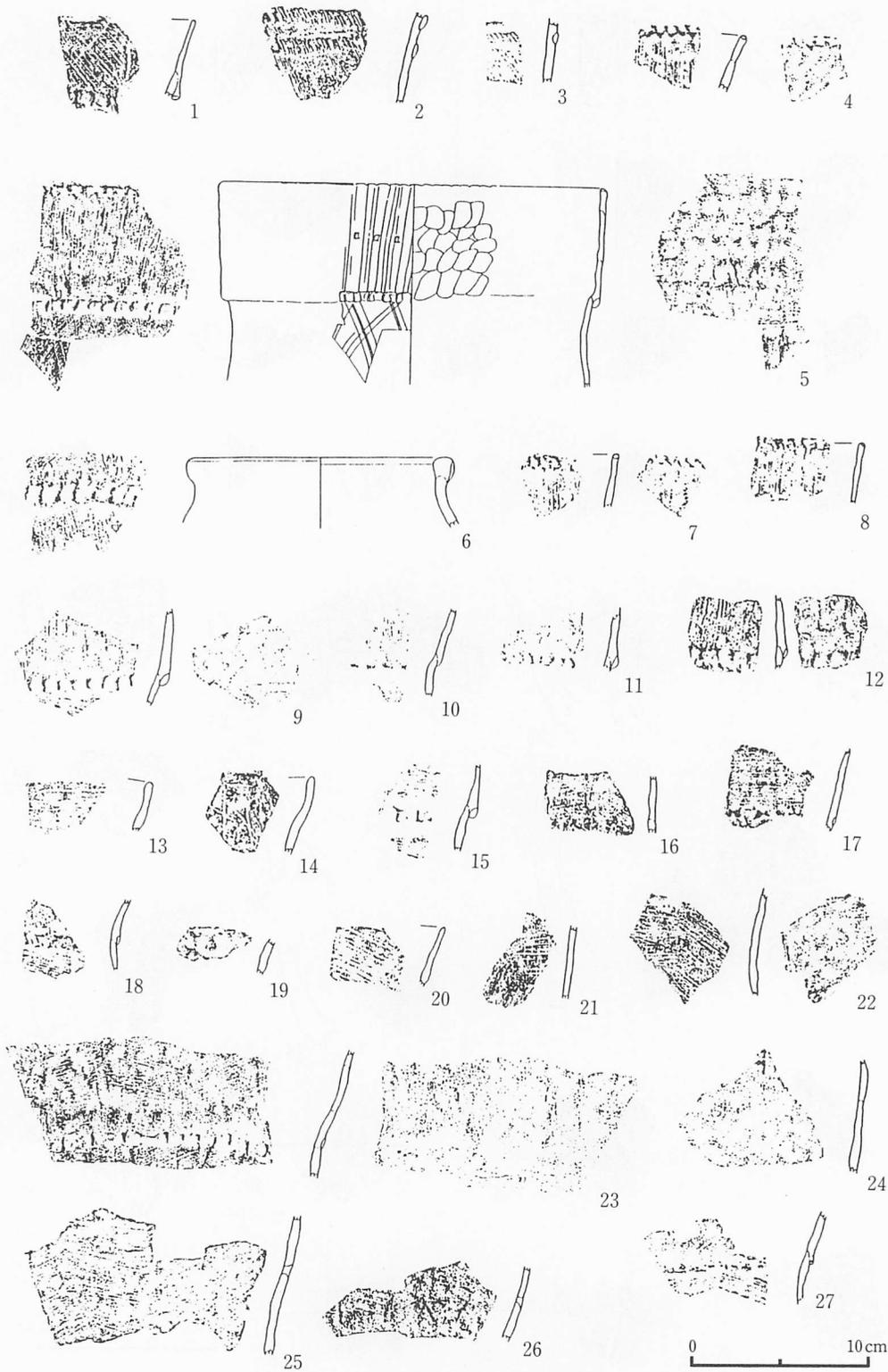
第15图 上川遺跡出土第I群11類土器拓影



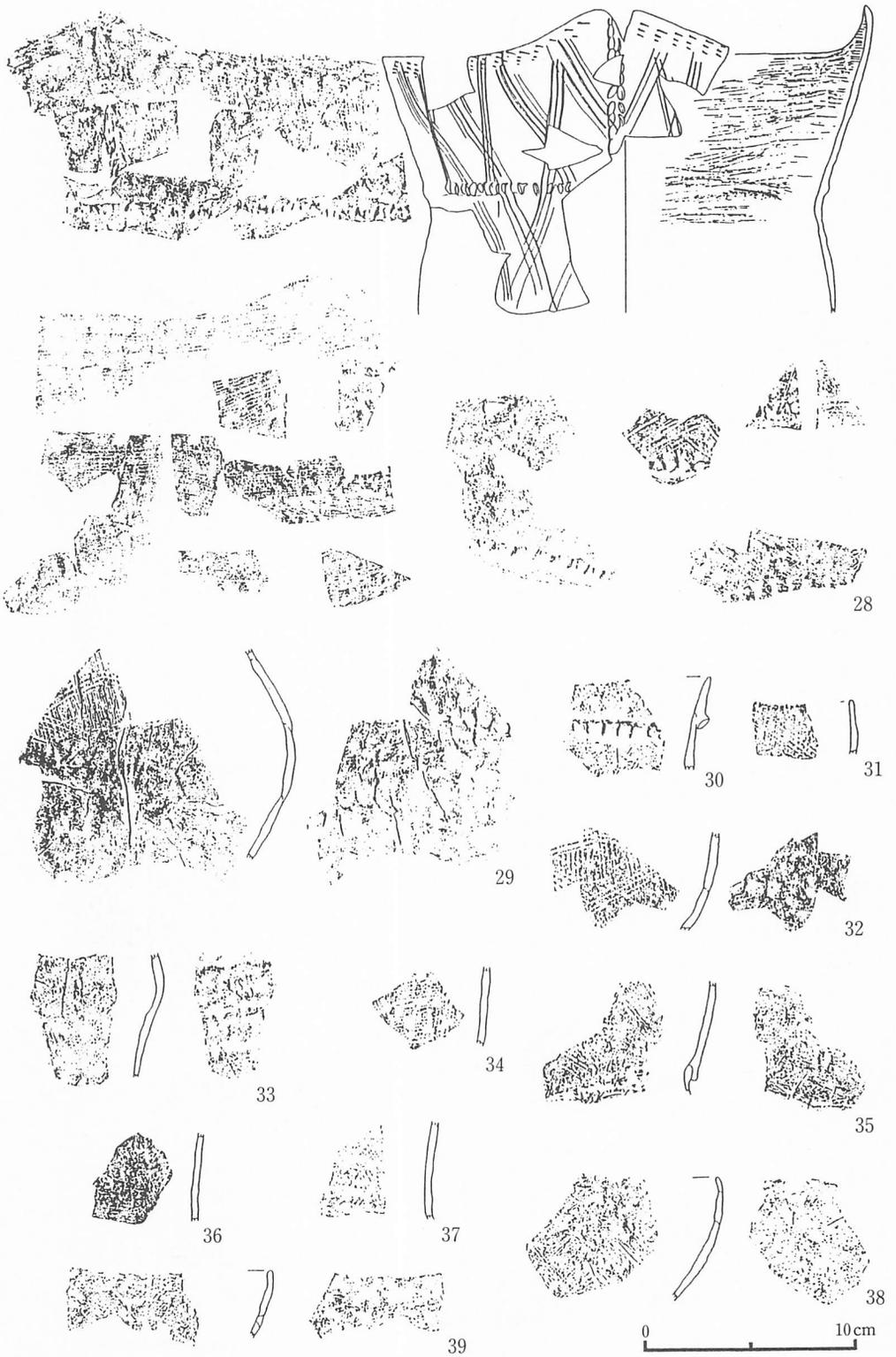
第16図 上川遺跡出土土第I群12類(1~15)・13類(16~27)土器拓影



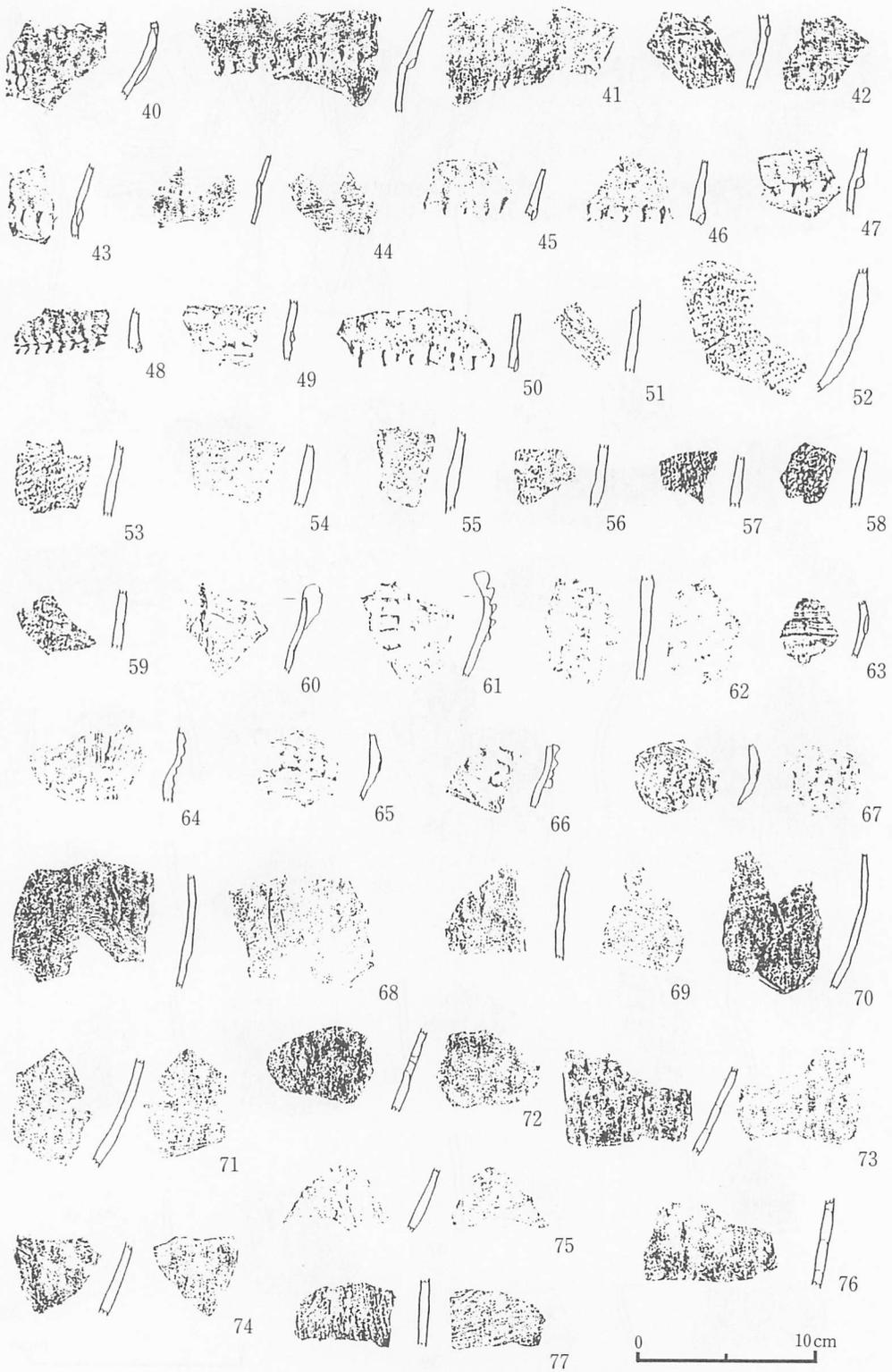
第 17 図 上川遺跡出土第 I 群土器底部拓影



第 18 图 上川遺跡出土第 II 群 1 類土器拓影



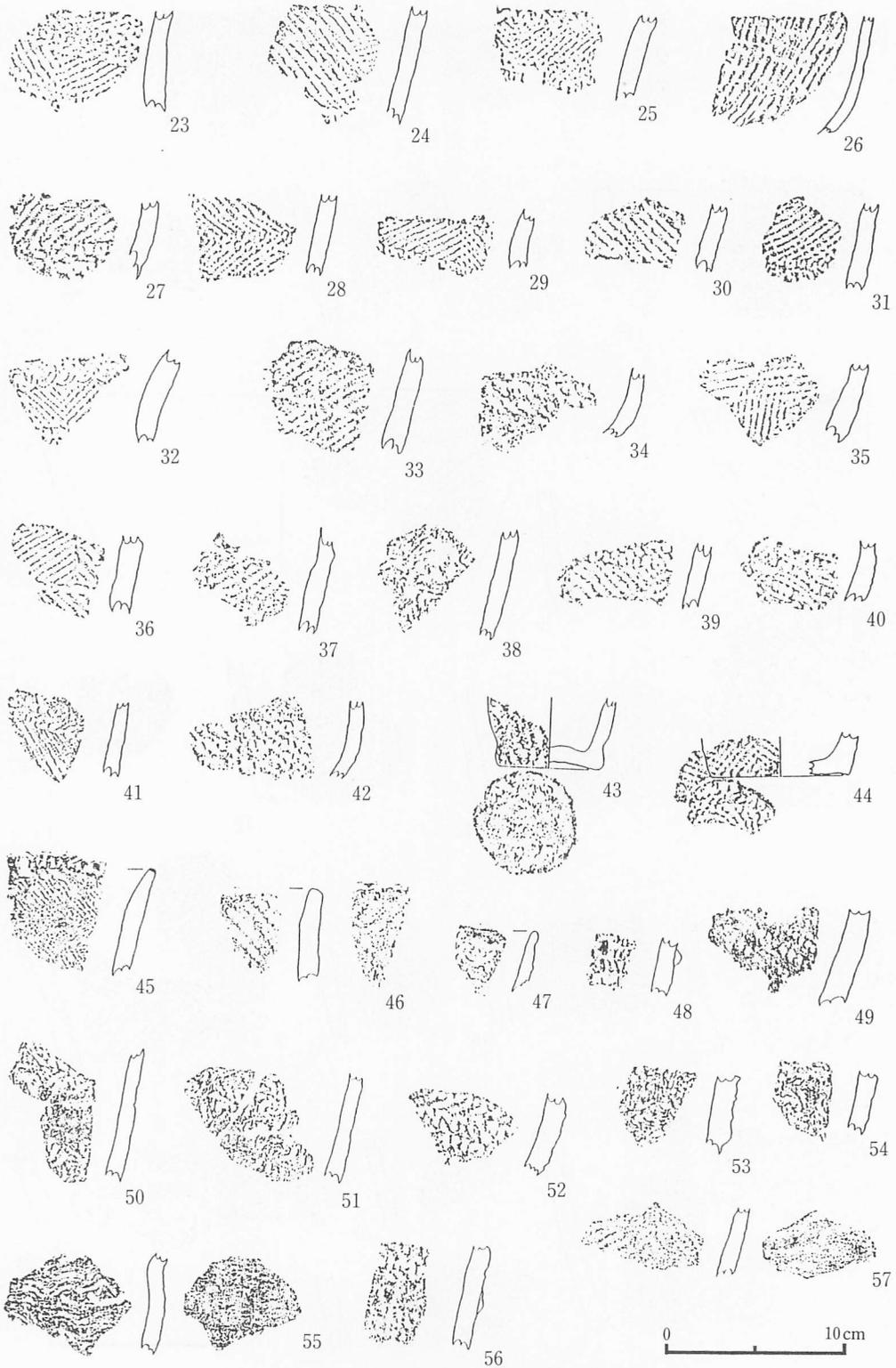
第19図 上川遺跡出土第II群1類土器拓影



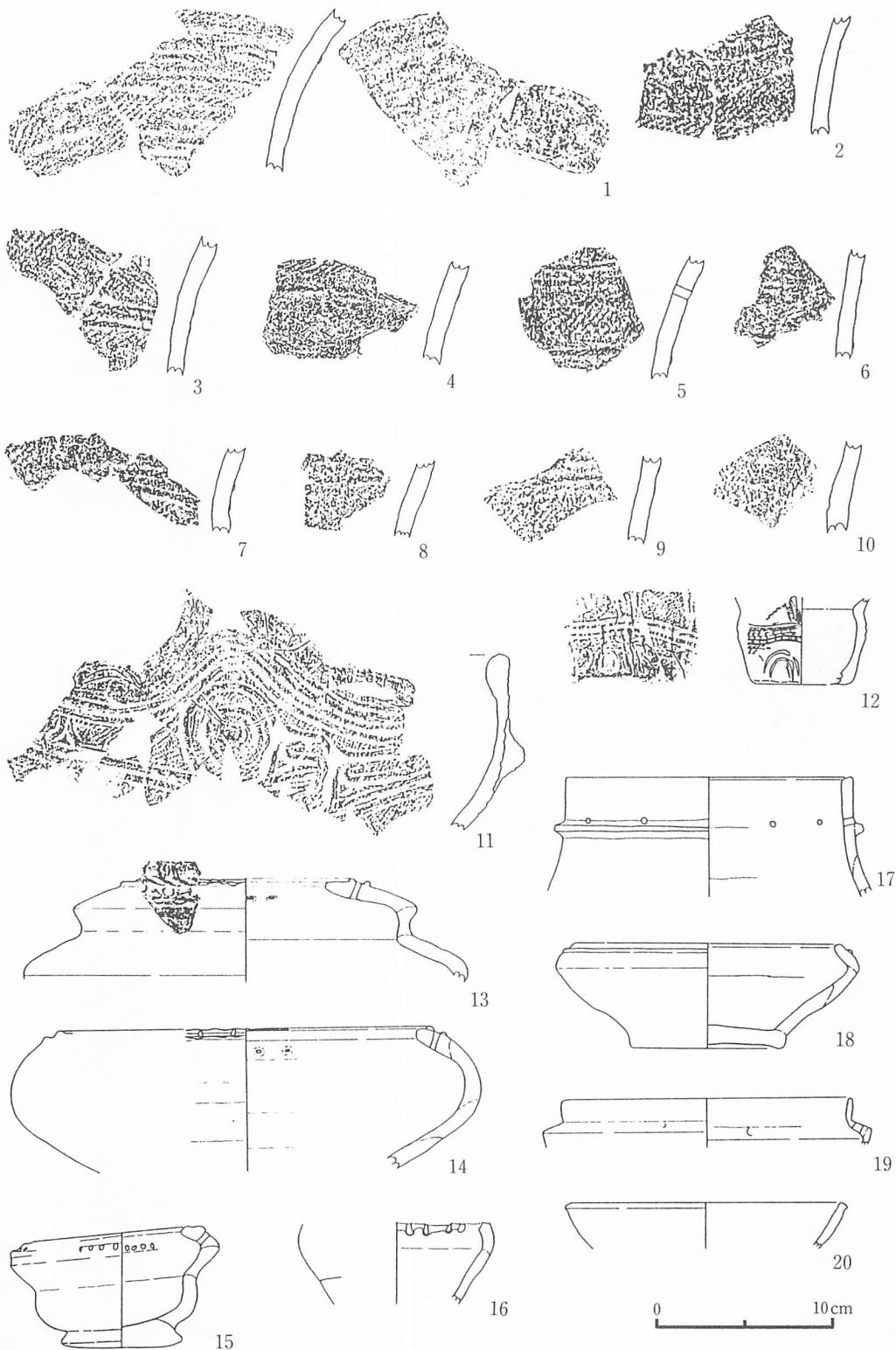
第 20 図 上川遺跡出土第 II 群 1 類土器拓影



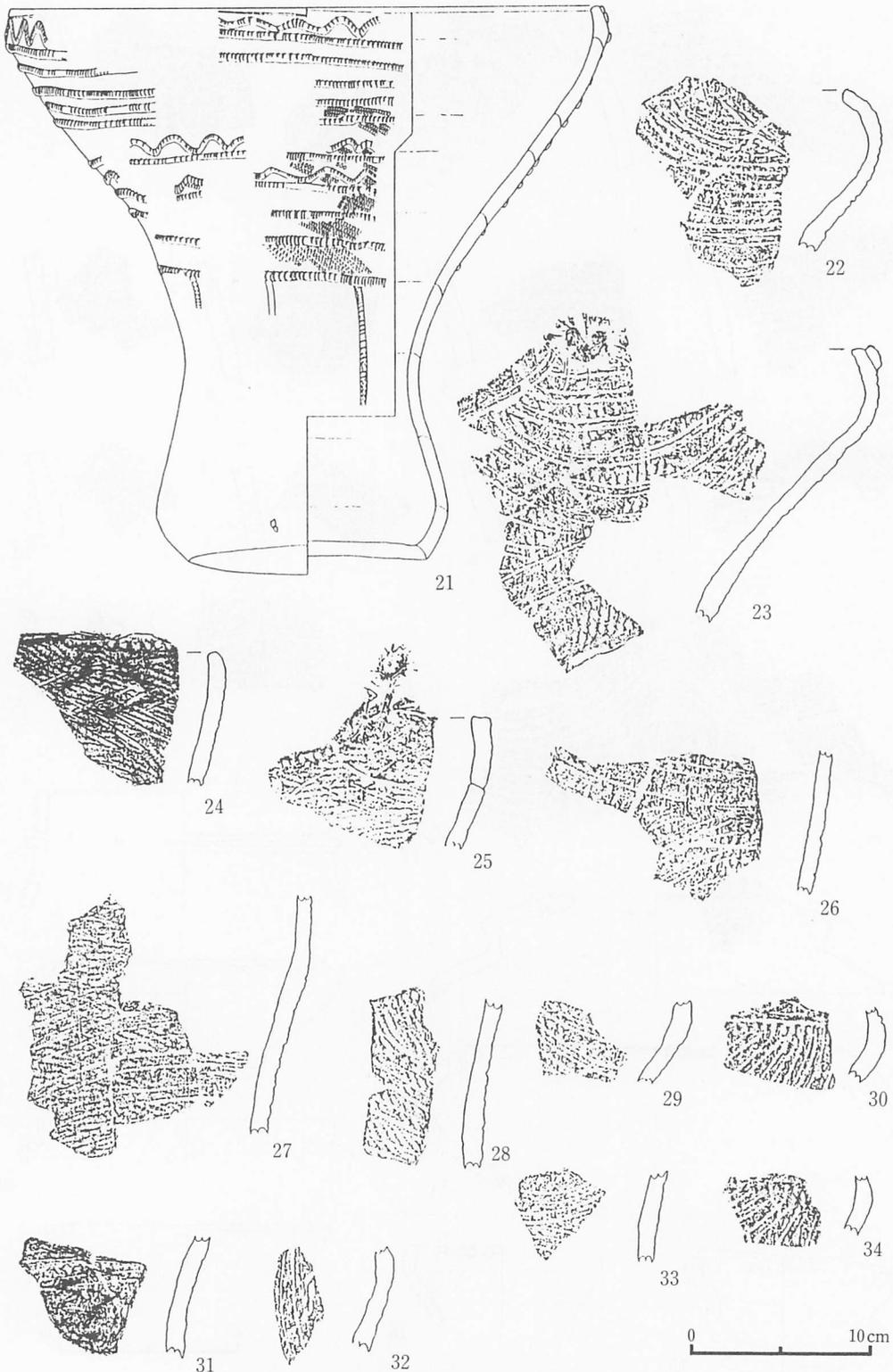
第 21 図 上川遺跡出土第 II 群 2 類土器拓影



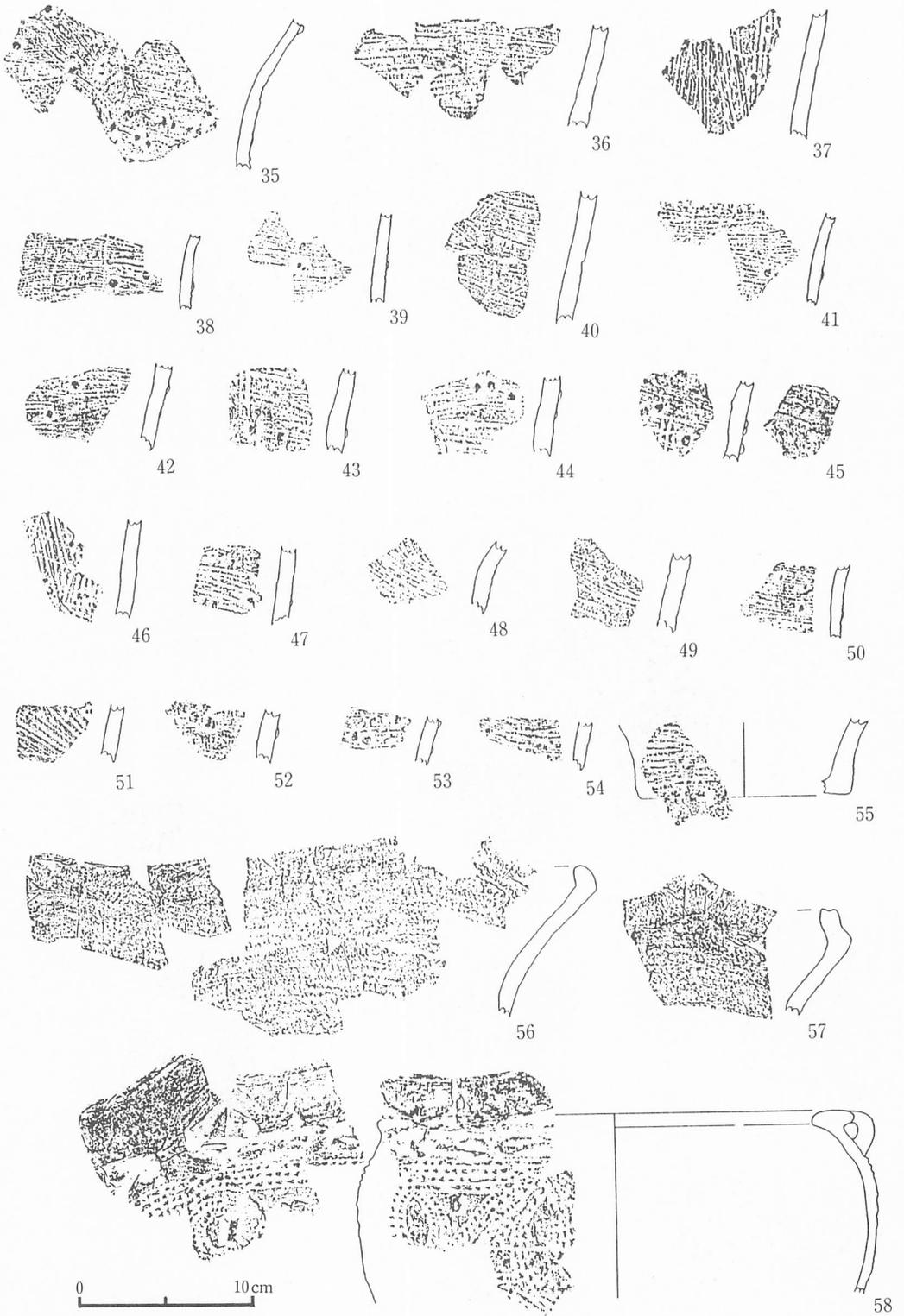
第 22 図 上川遺跡出土第 II 群 2 類土器拓影



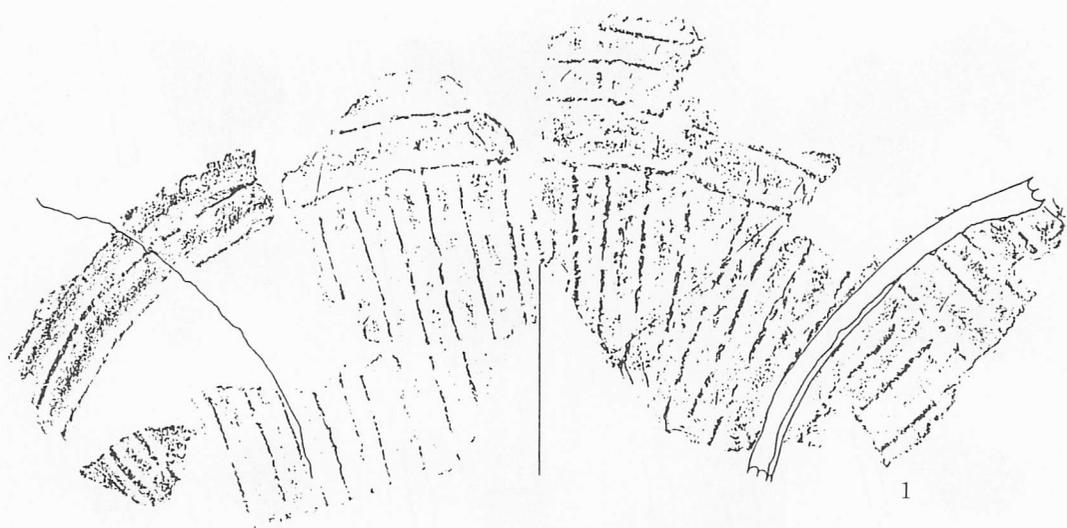
第23図 上川遺跡出土第Ⅱ群3類(11~20)土器拓影・実測図



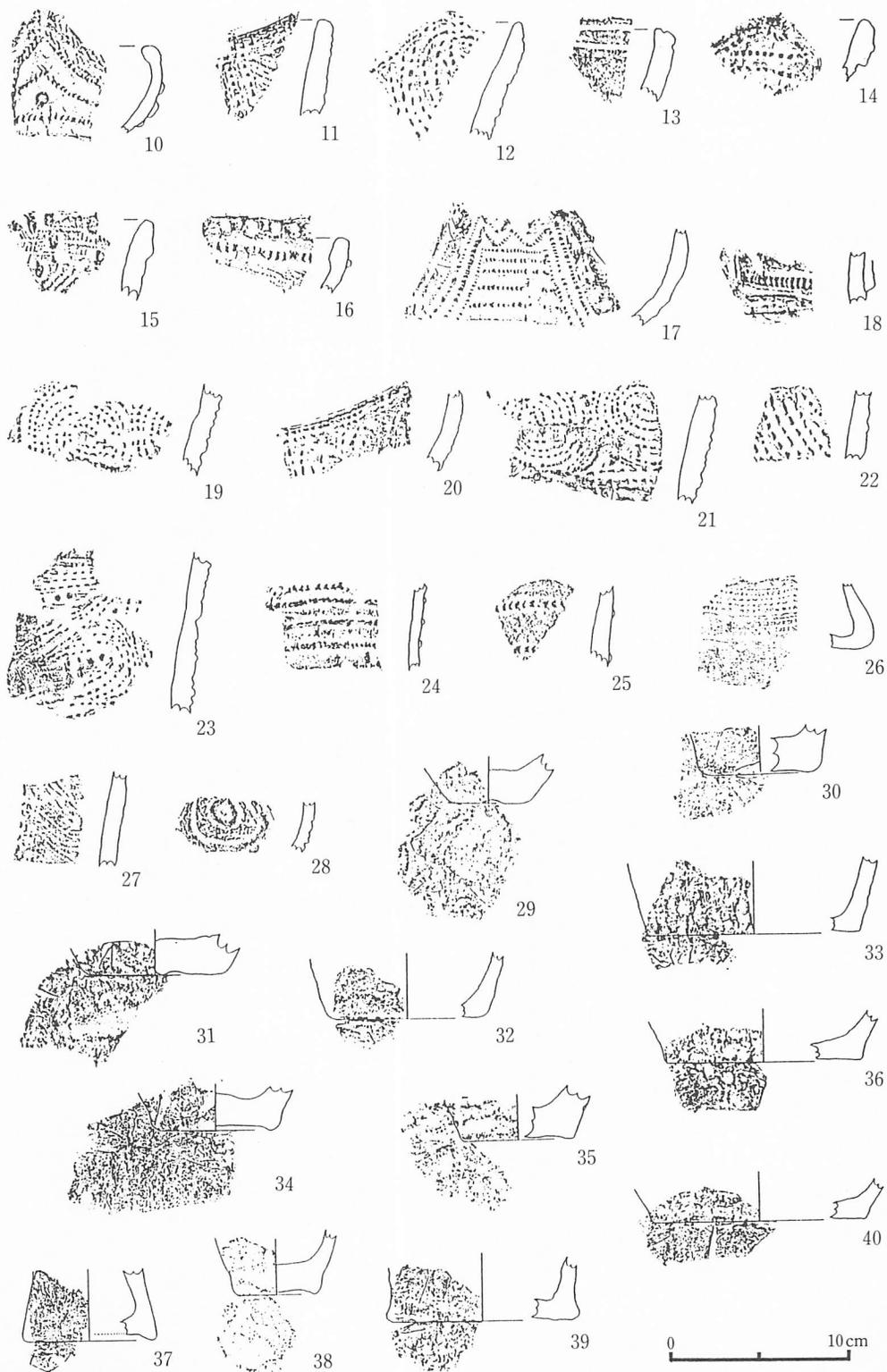
第 24 図 上川遺跡出土第 II 群 3 類土器拓影・実測図



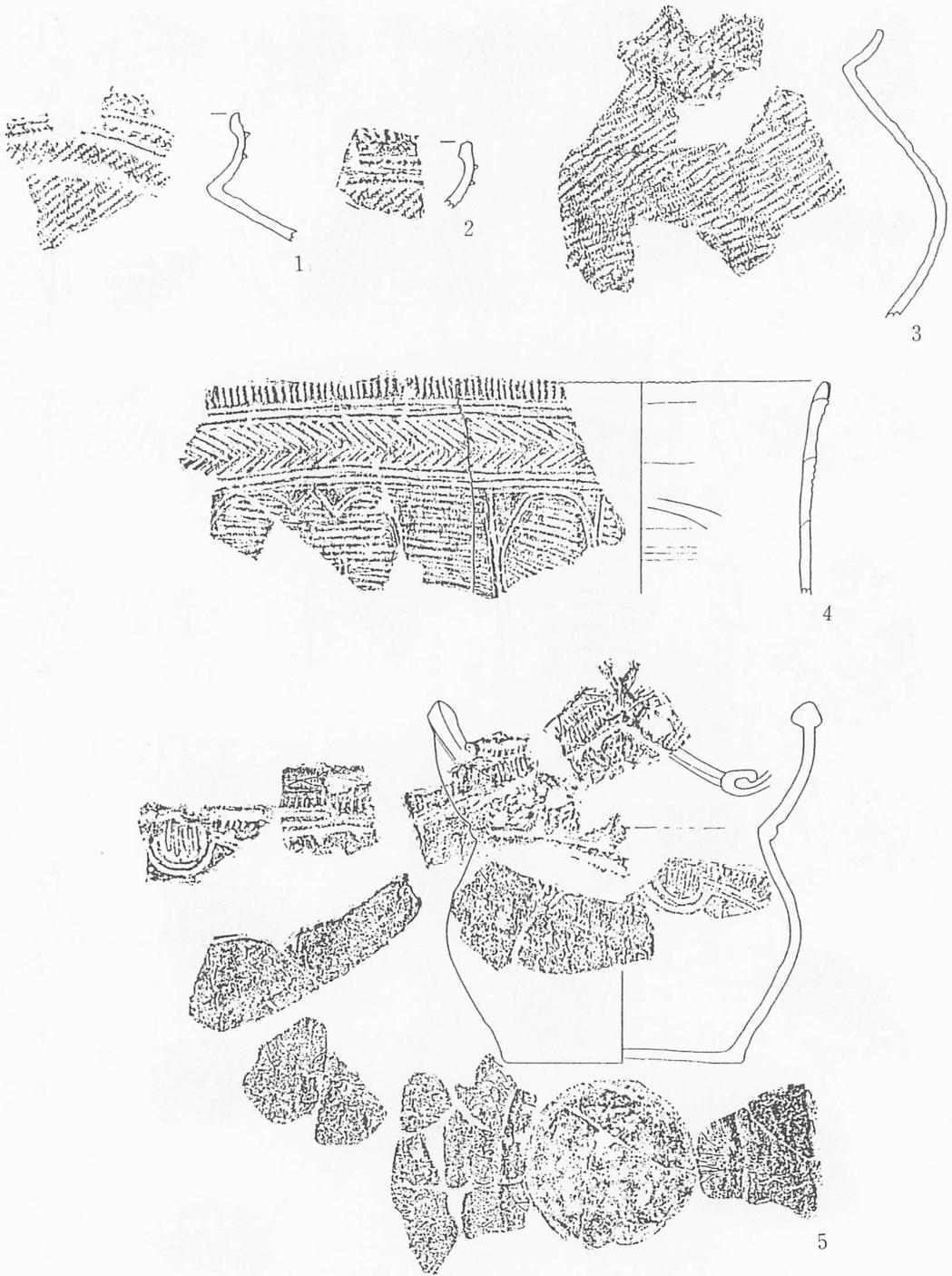
第 25 図 上川遺跡出土第 II 群 3 類土器拓影



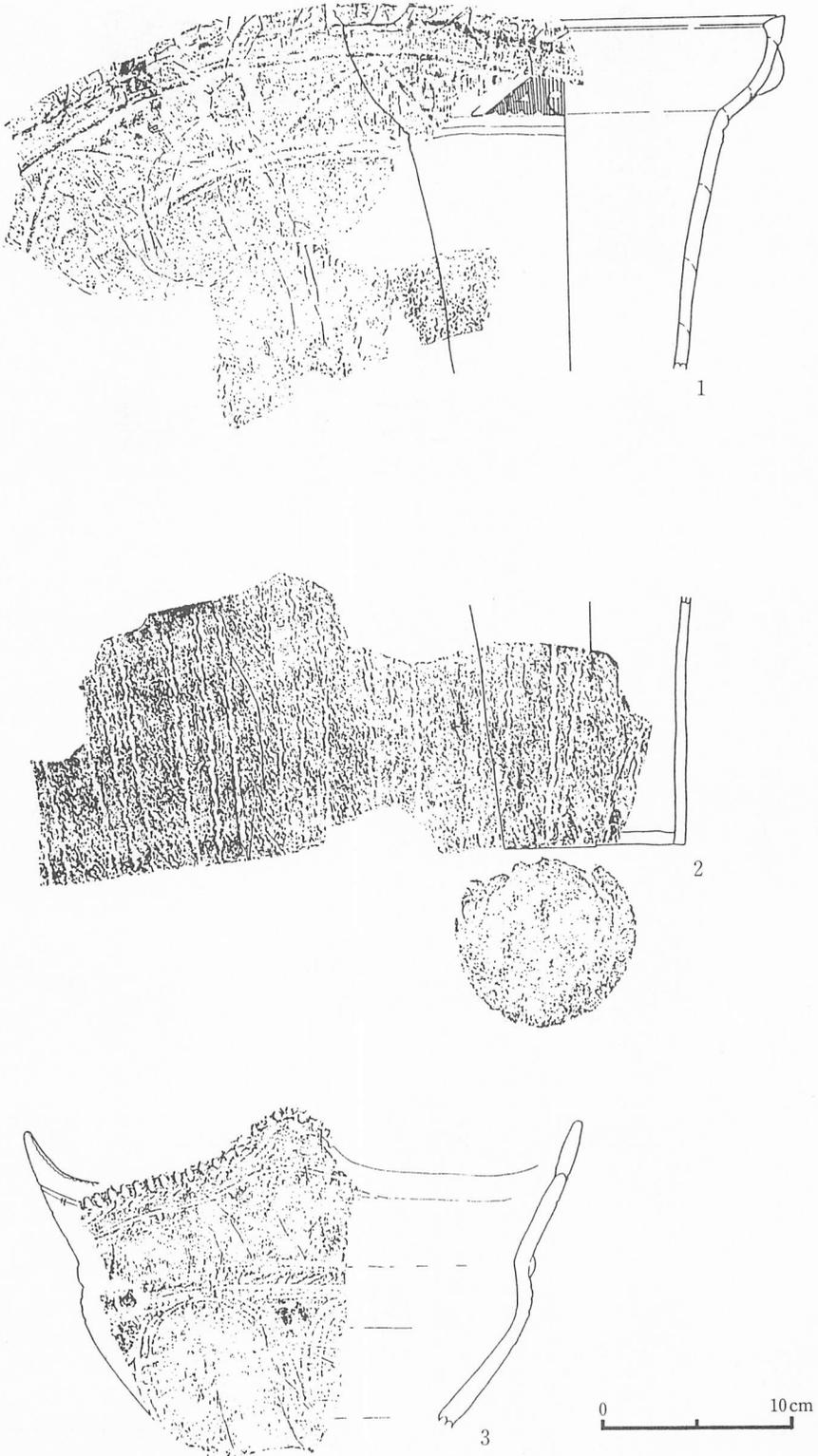
第 26 图 上川遺跡出土第Ⅱ群 4 類土器拓影



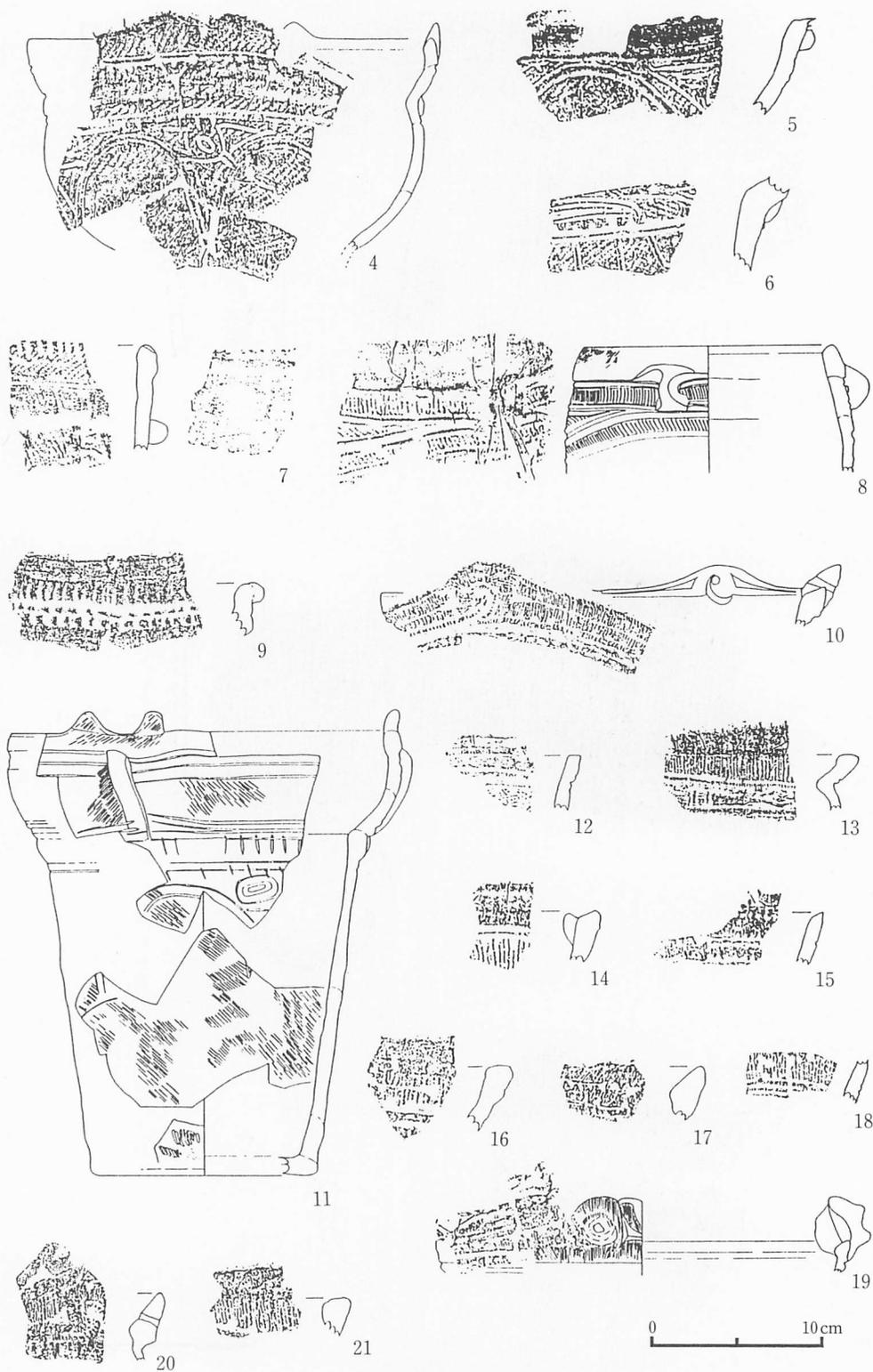
第 27 図 上川遺跡出土第 II 群 4 類土器拓影



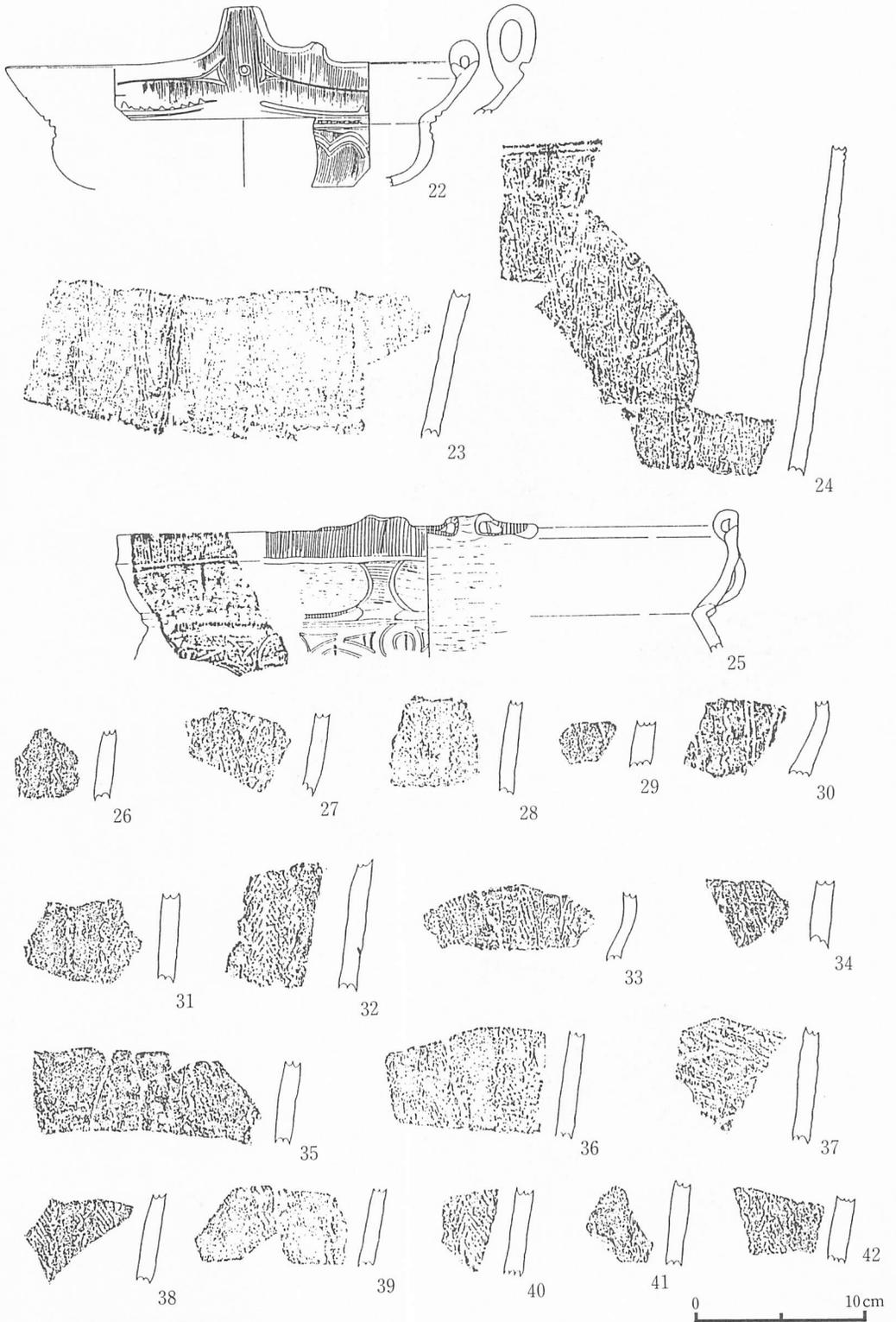
第 28 図 上川遺跡出土第Ⅲ群 1 類土器拓影 (1~3・5)



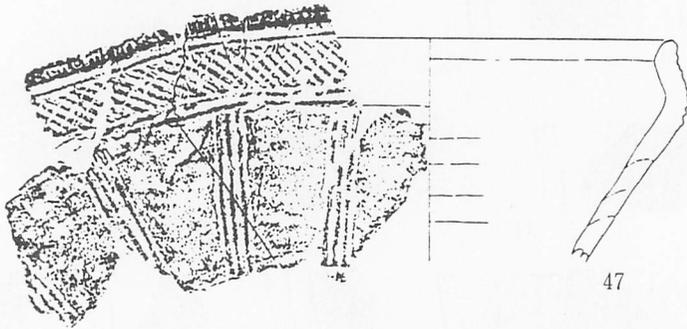
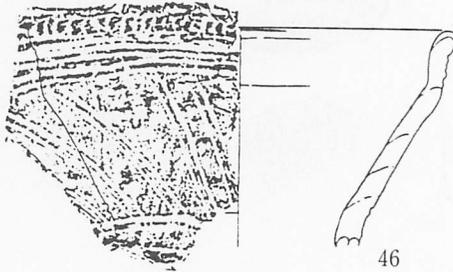
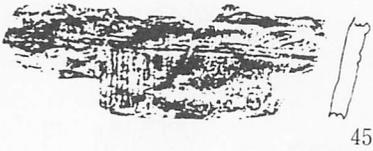
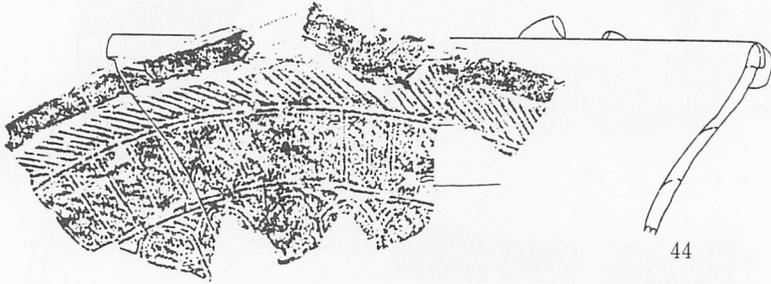
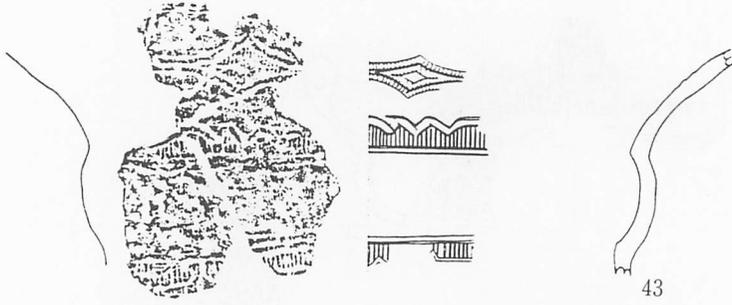
第 29 図 上川遺跡出土第Ⅲ群 2 類土器拓影



第 30 图 上川遺跡出土第Ⅲ群 2 類土器拓影・実測図

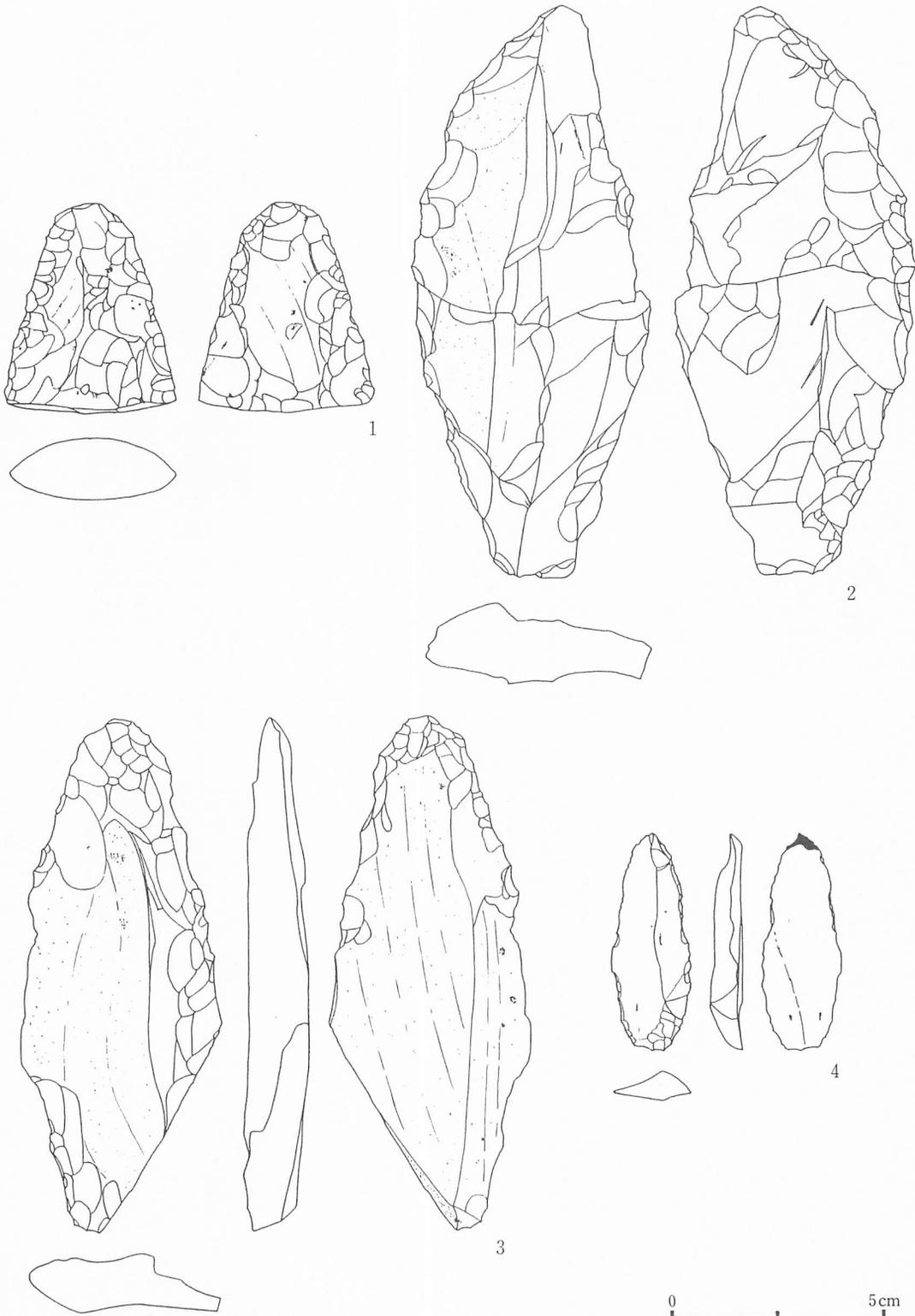


第 31 図 上川遺跡出土第Ⅲ群 2 類土器拓影・実測図

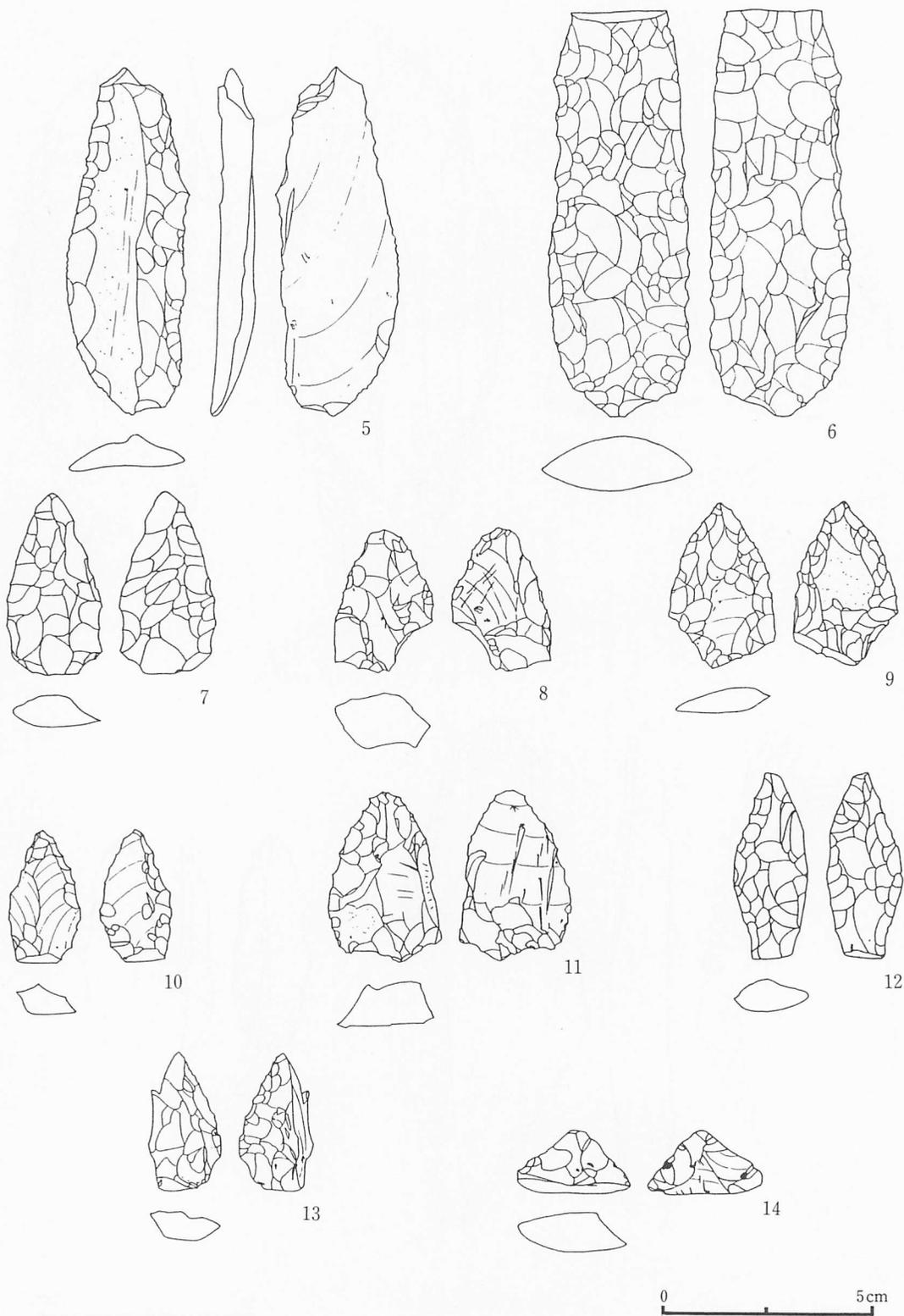


0 10cm

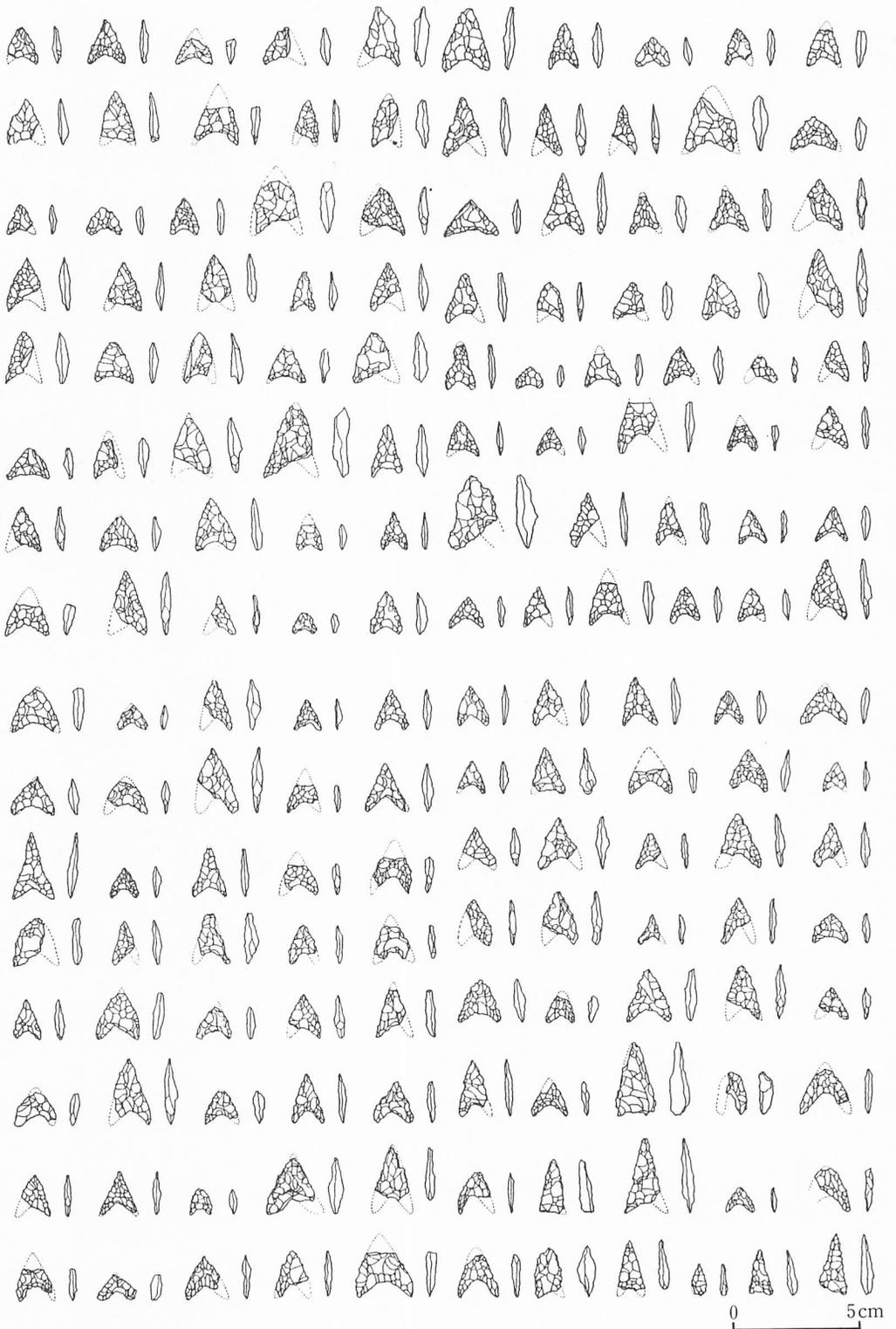
第 32 図 上川遺跡出土第Ⅲ群 2 類土器拓影



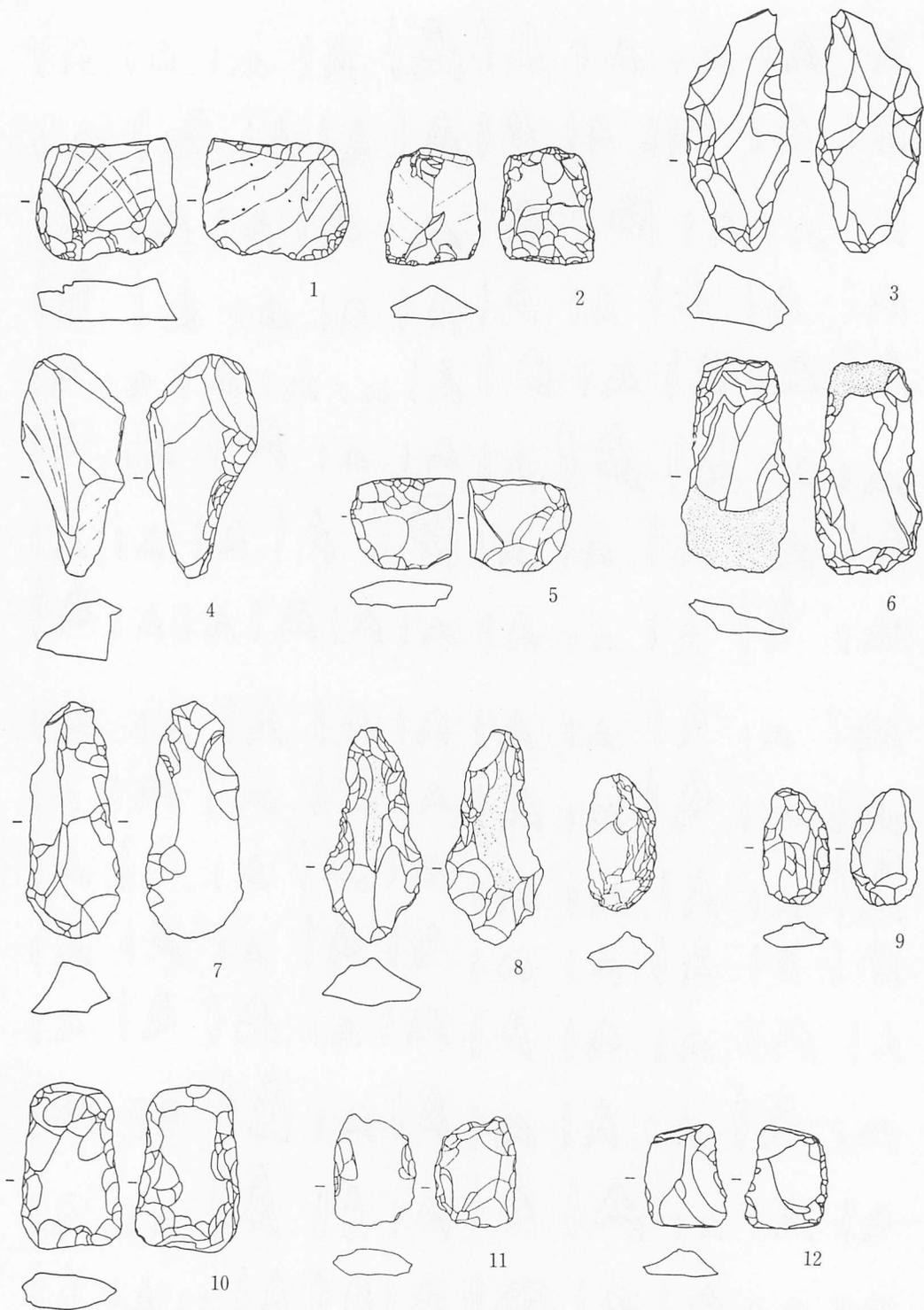
第 33 図 上川遺跡出土石槍実測図



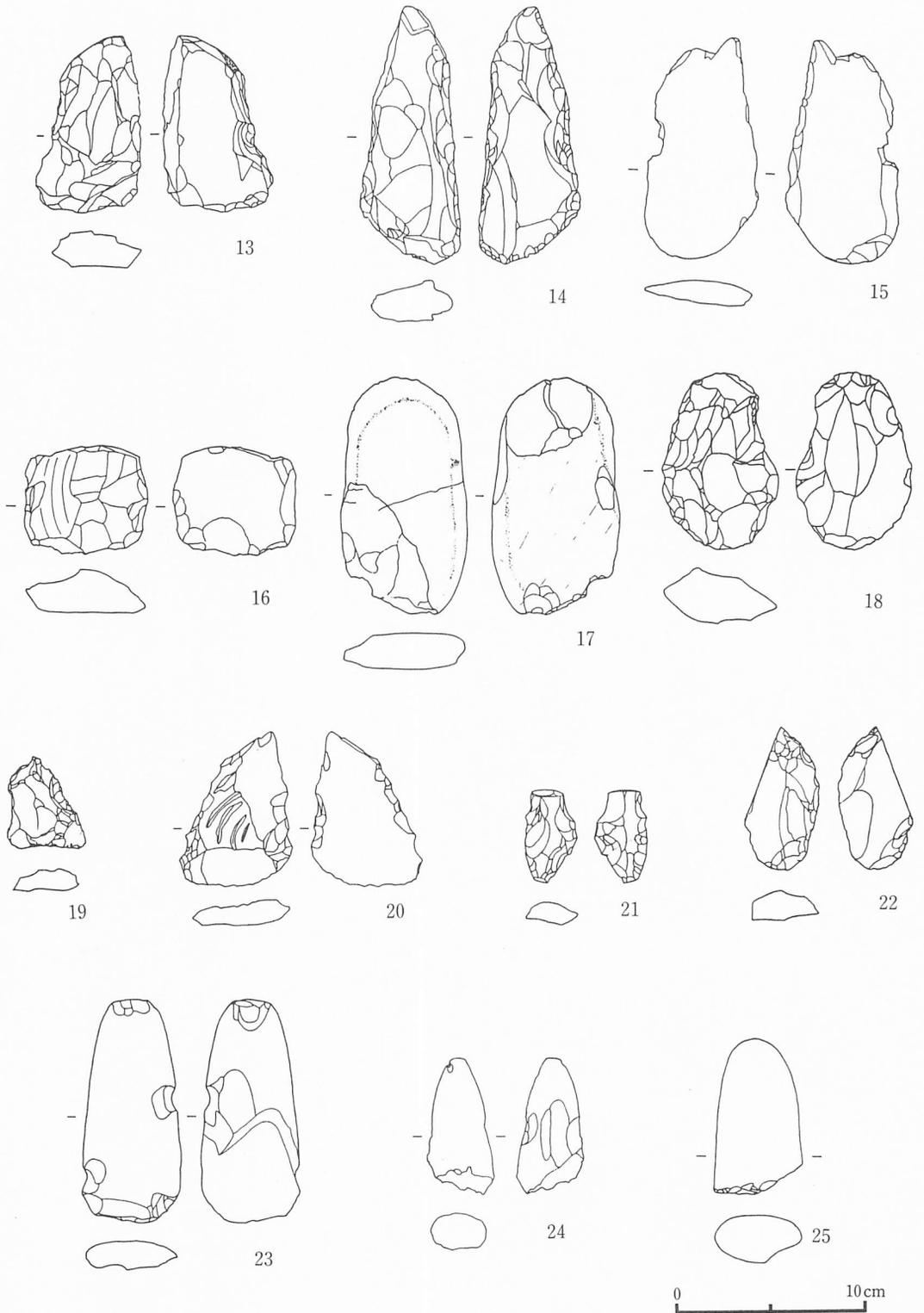
第 34 図 上川遺跡出土石槍実測図



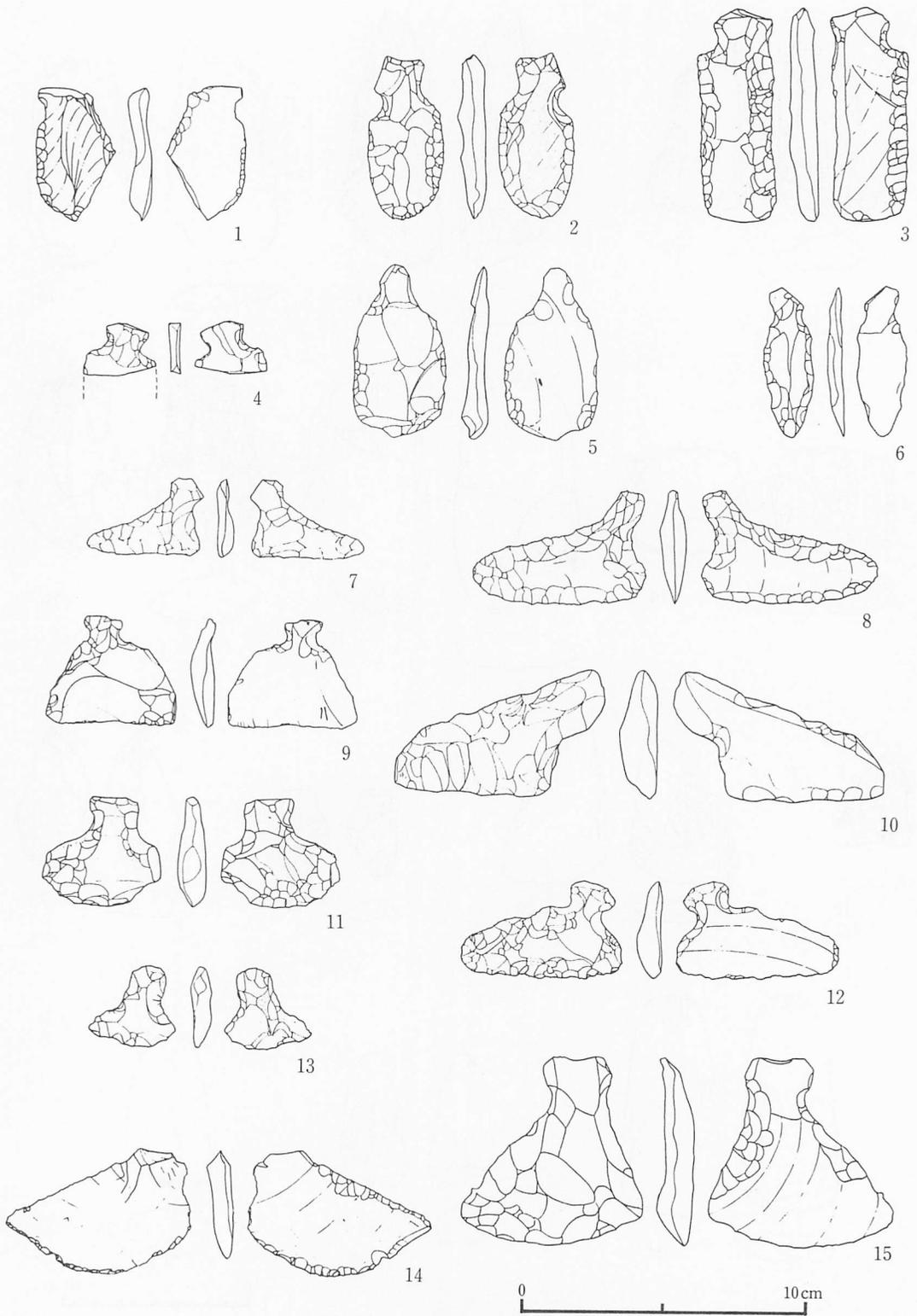
第 35 図 上川遺跡出土石鏃実測図



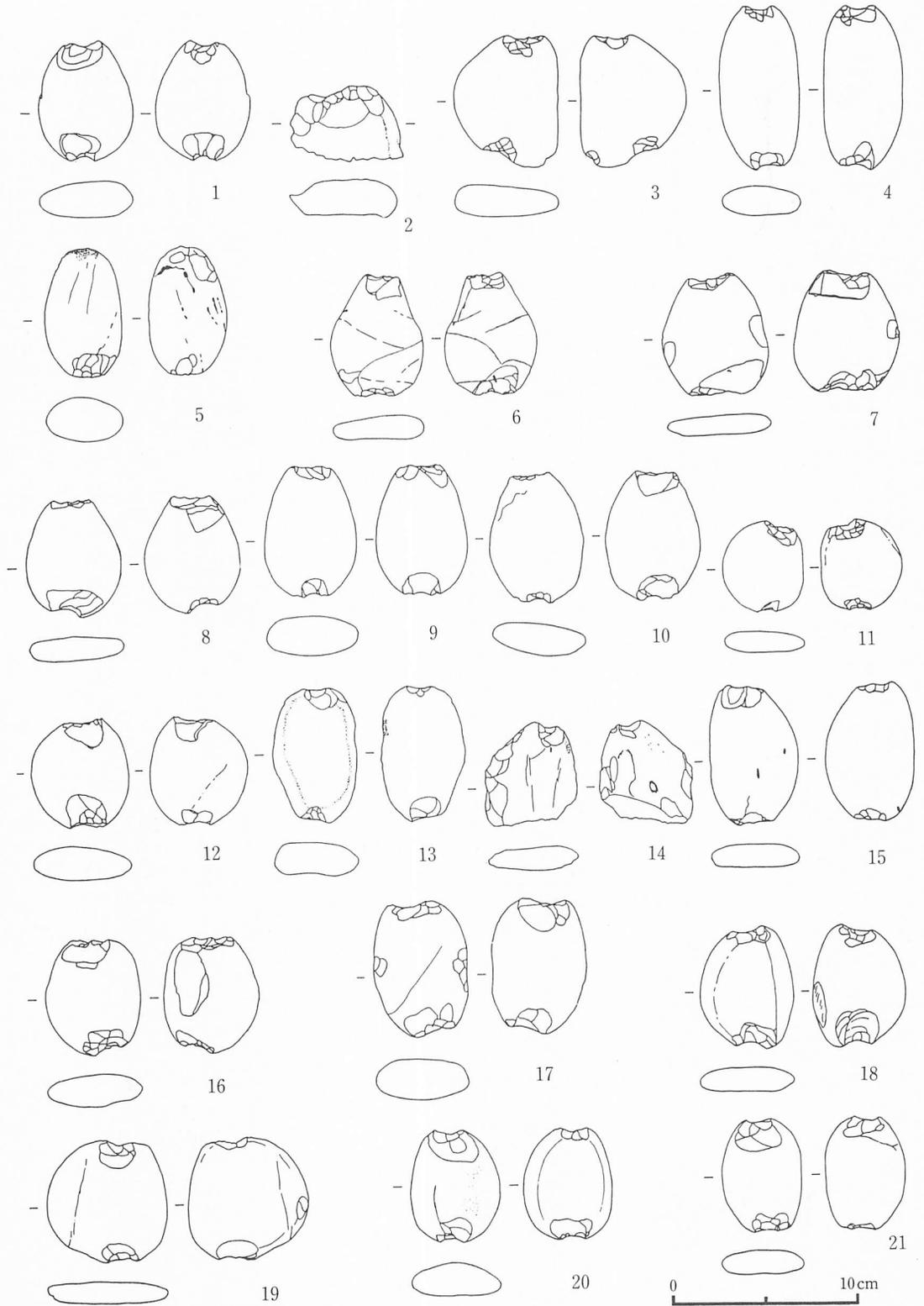
第 36 図 上川遺跡出土打製石斧実測図



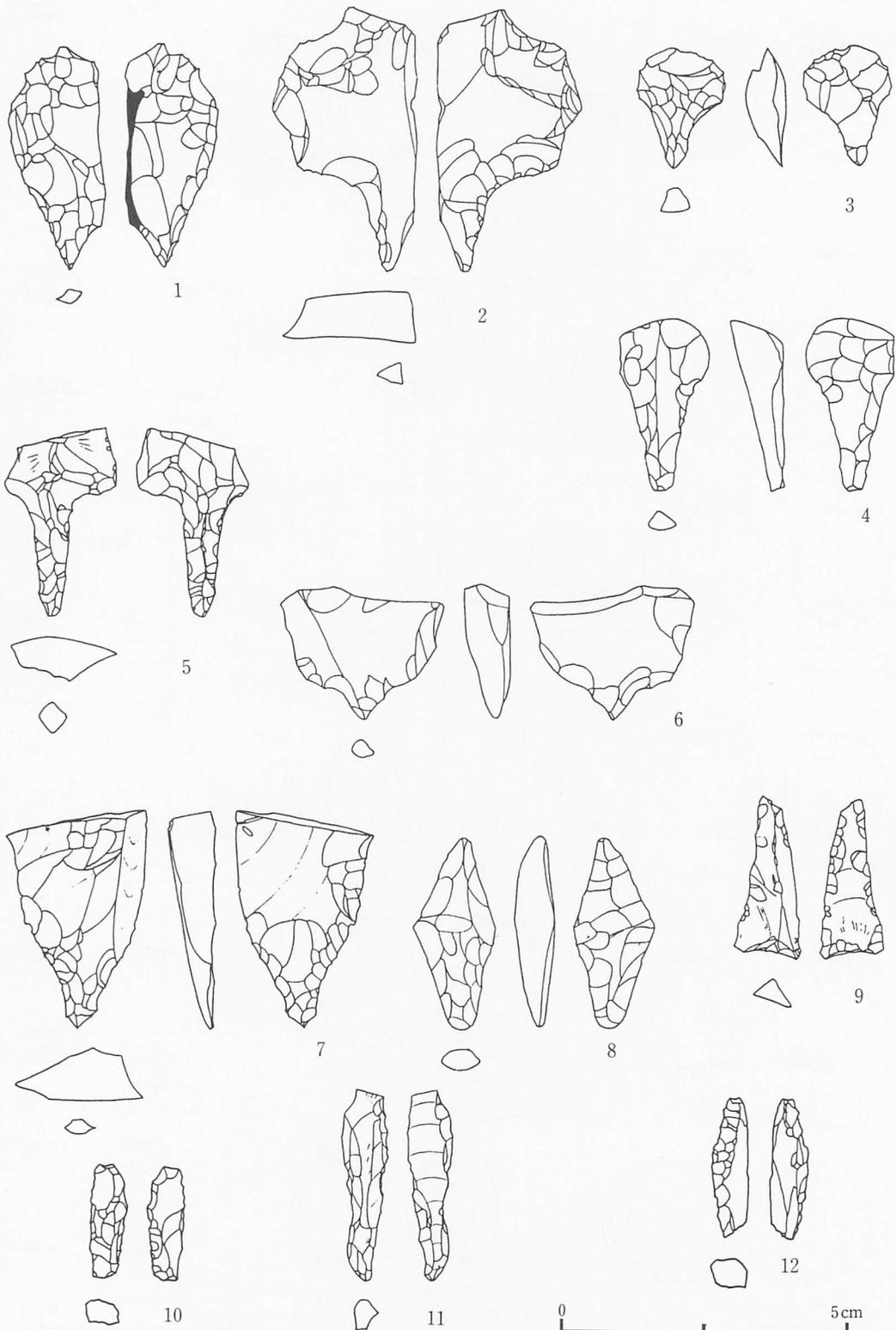
第 37 図 上川遺跡出土打製石斧 (13~22)・磨製石斧 (23~25) 実測図



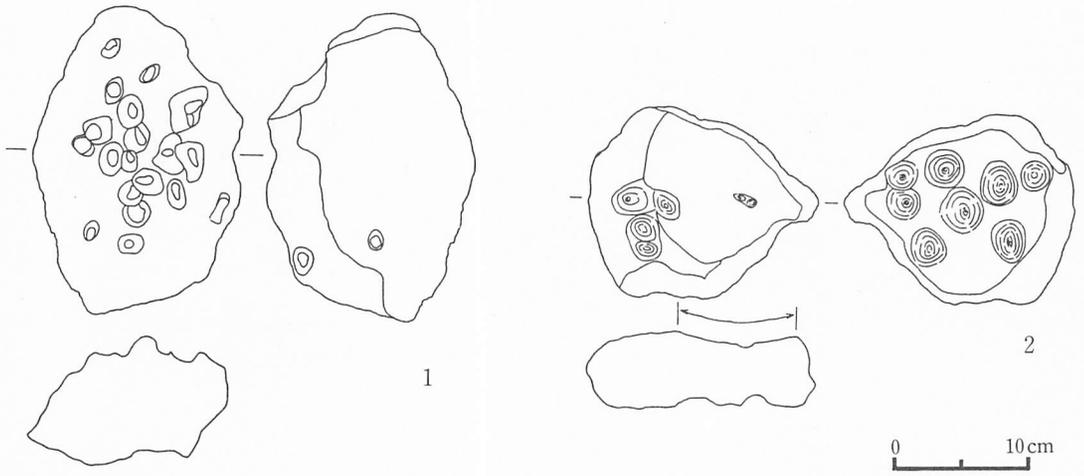
第 38 图 上川遺跡出土石匙実測図



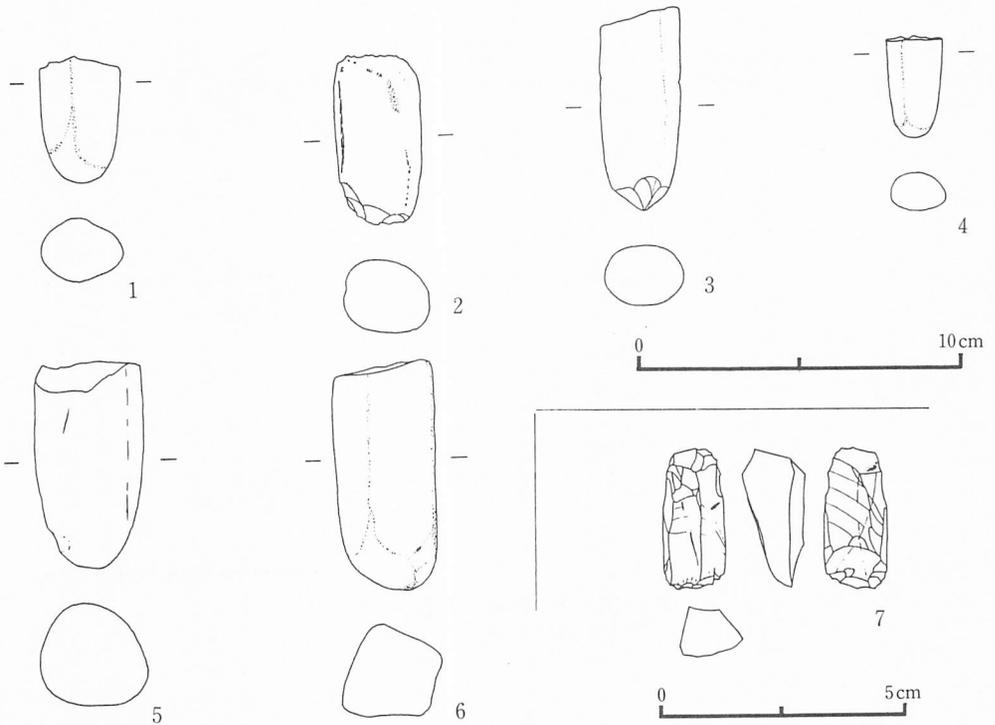
第 39 図 上川遺跡出土石錘実測図



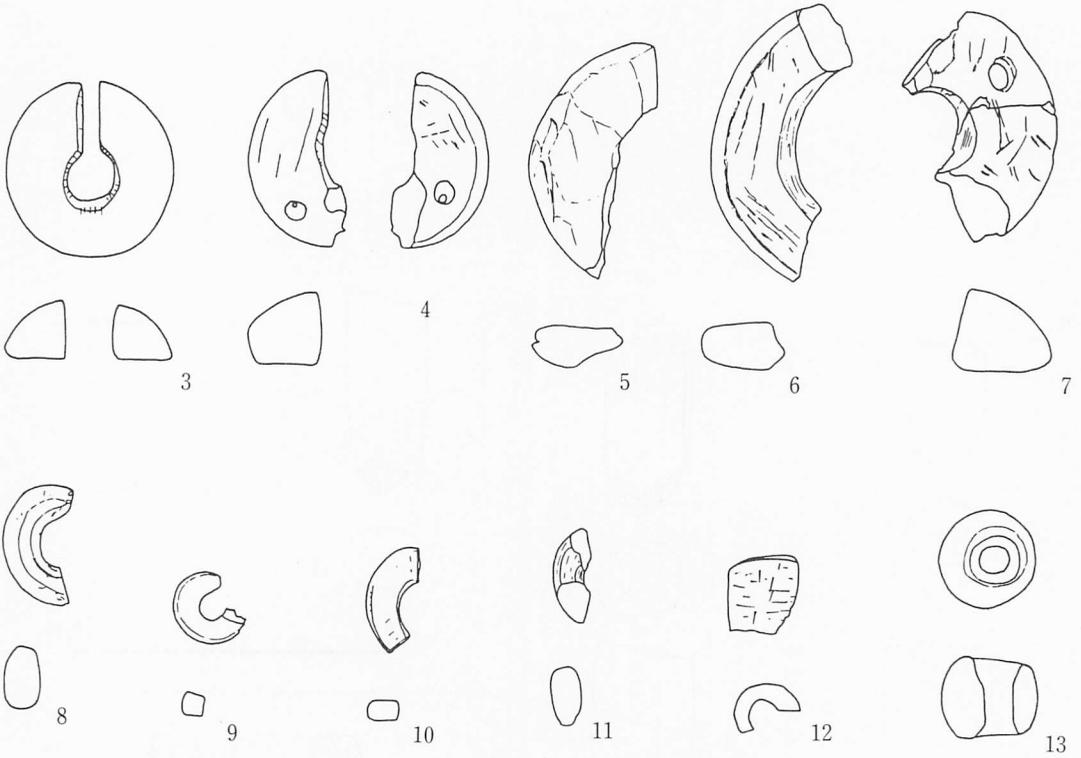
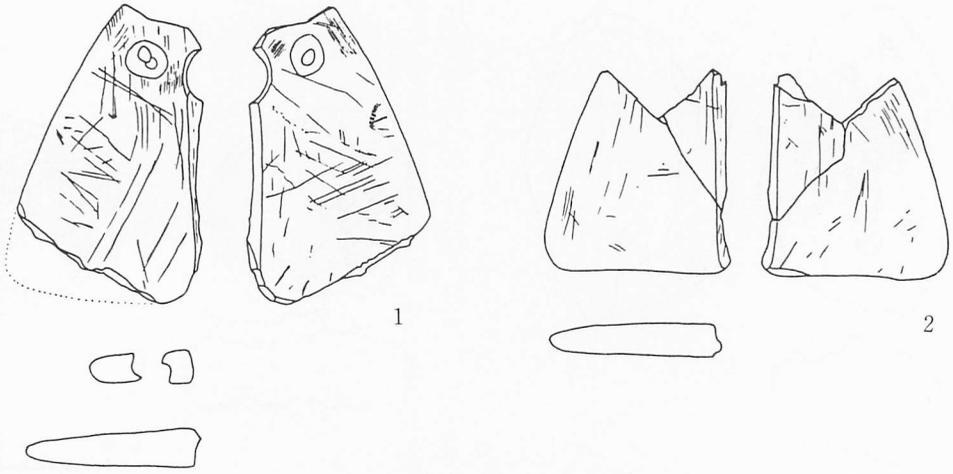
第 40 図 上川遺跡出土石錐実測図



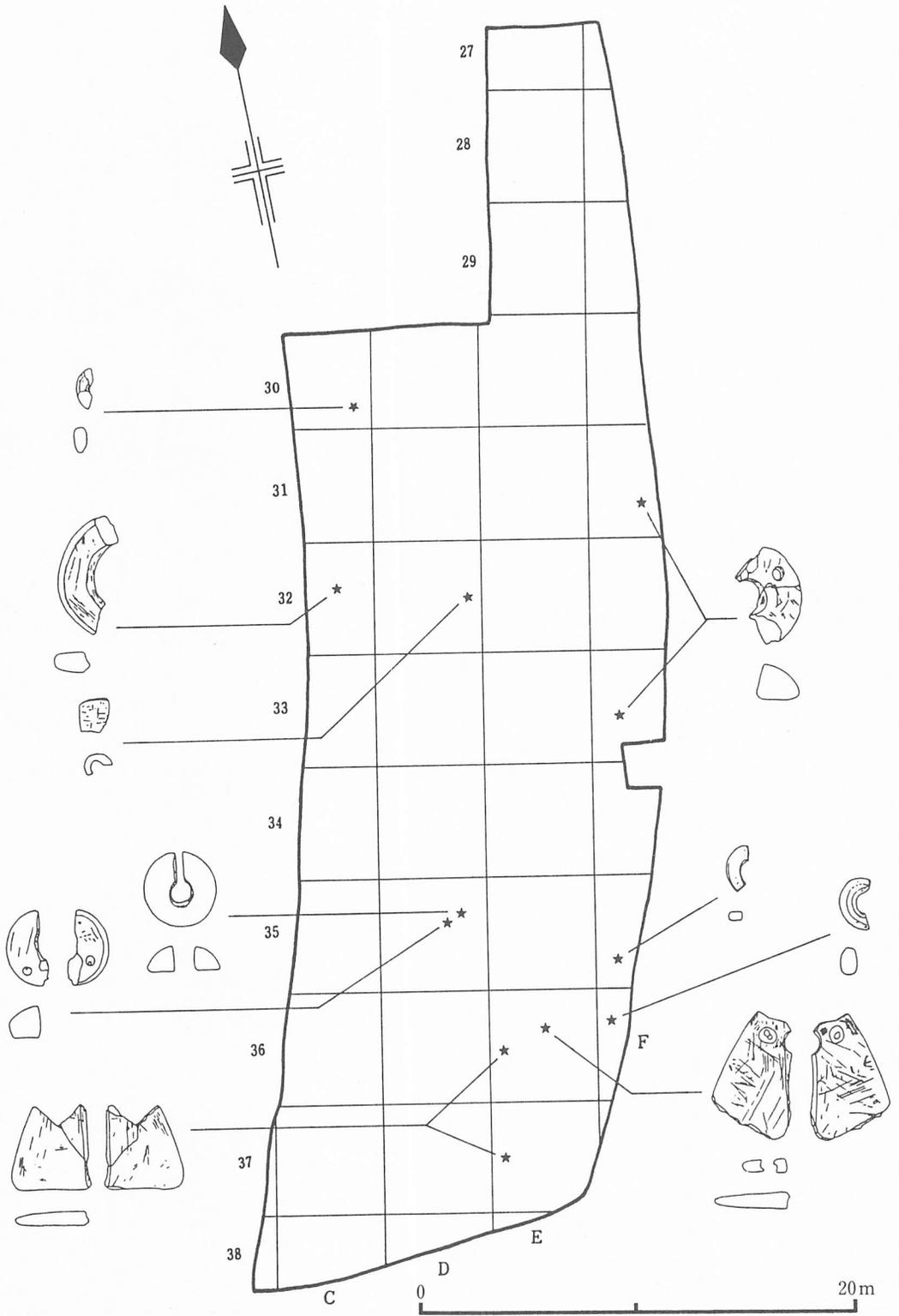
第 41 図 上川遺跡出土蜂の巣石実測図



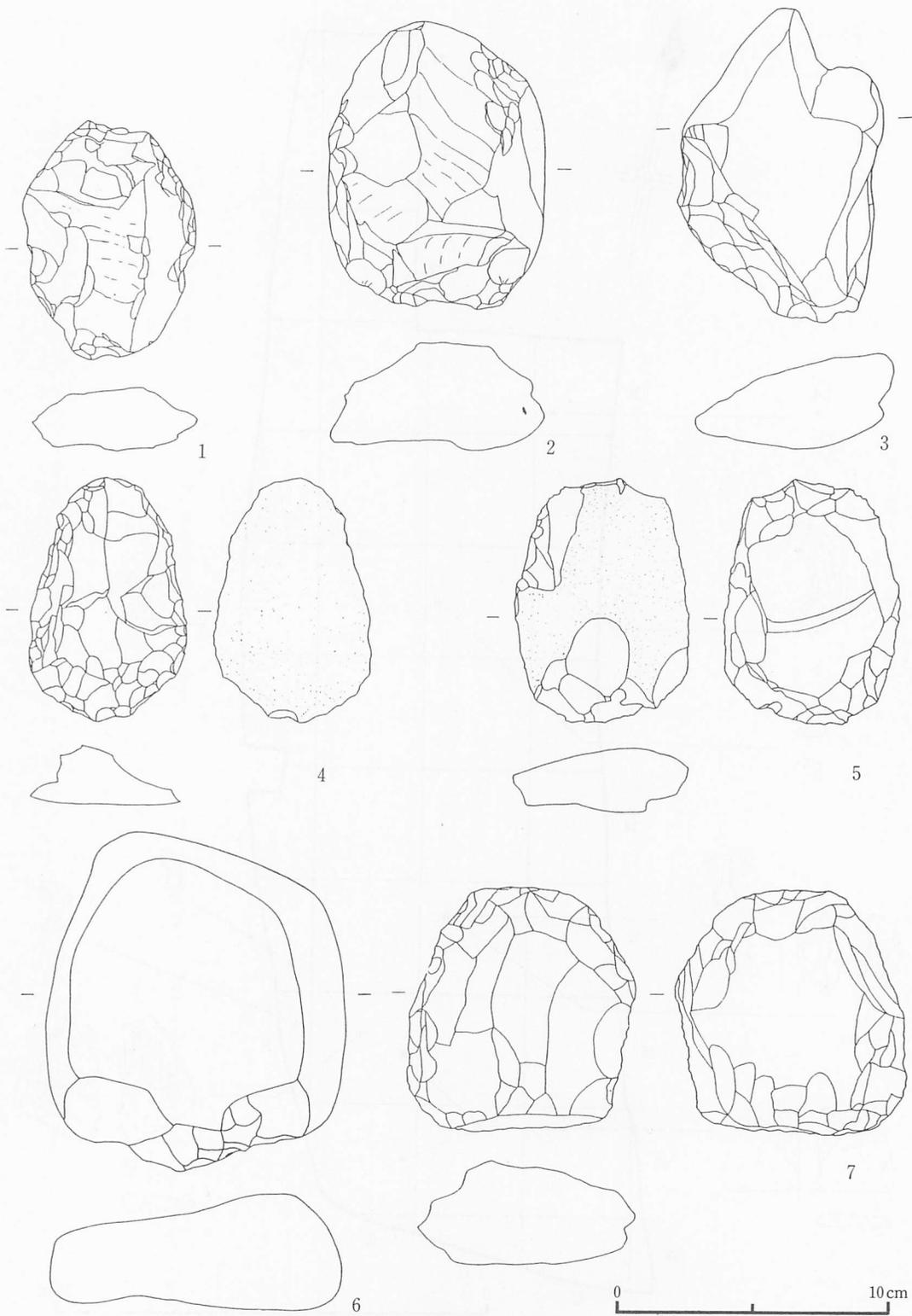
第 42 図 上川遺跡出土叩石 (1~6)・楔形石器 (7) 実測図



第 43 图 上川遺跡出土装身具実測図



第 44 図 上川遺跡中央区装身具分布図



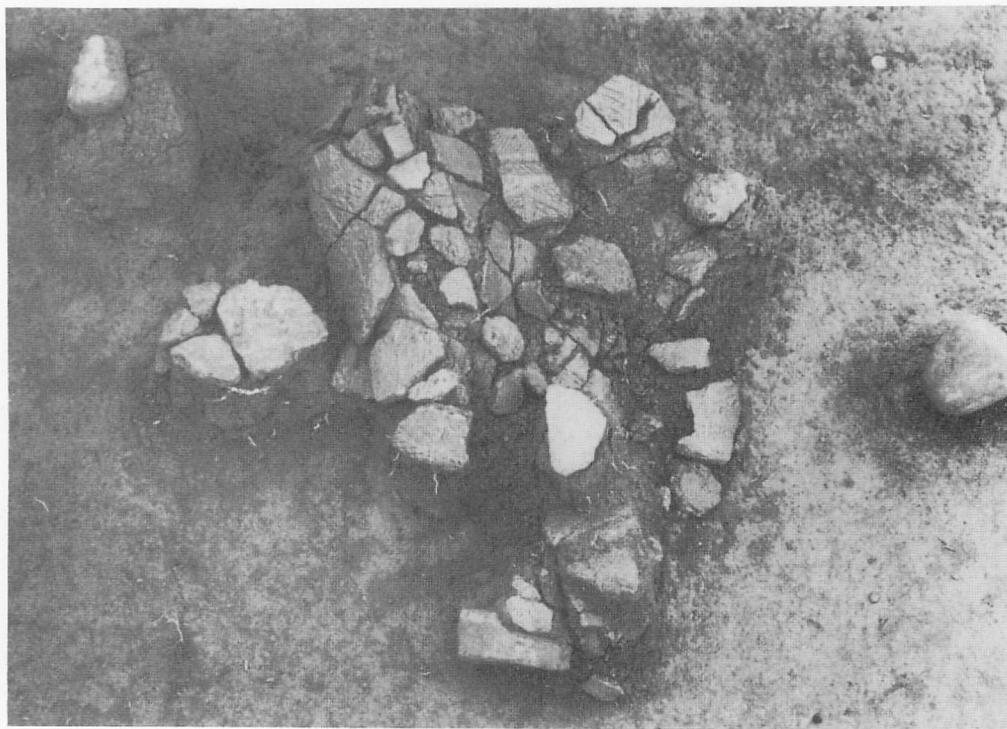
第 45 図 上川遺跡出土礫器実測図



図版1 上川遺跡8号住居址土層断面



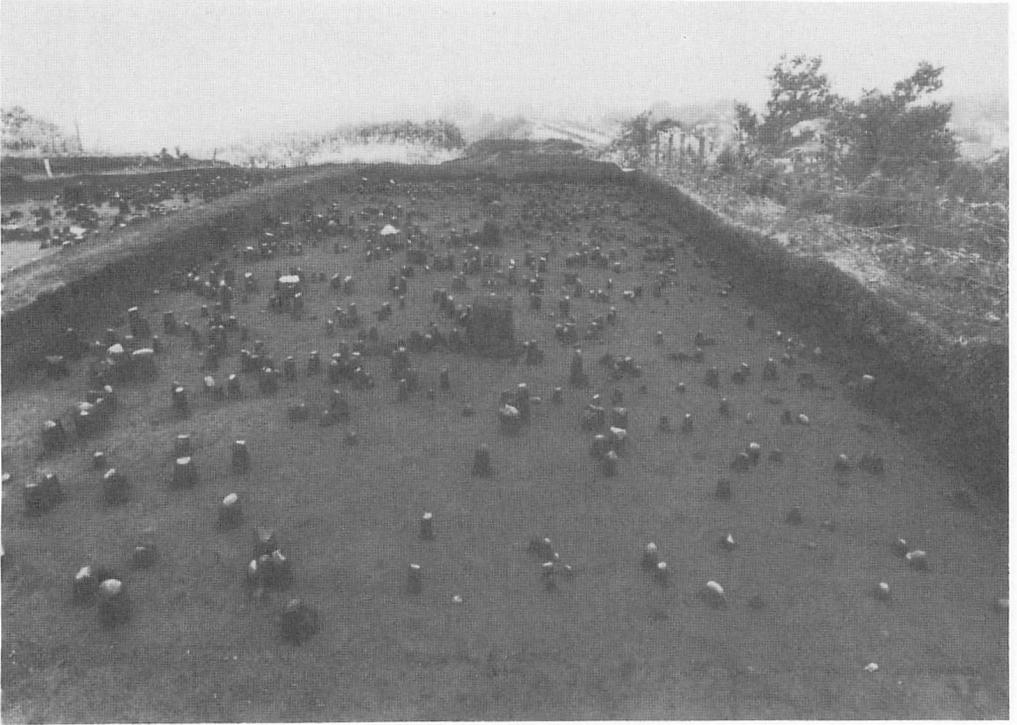
図版2 上川遺跡8号住居址遺物出土状態



図版3 上川遺跡10号住居址遺物出土状態



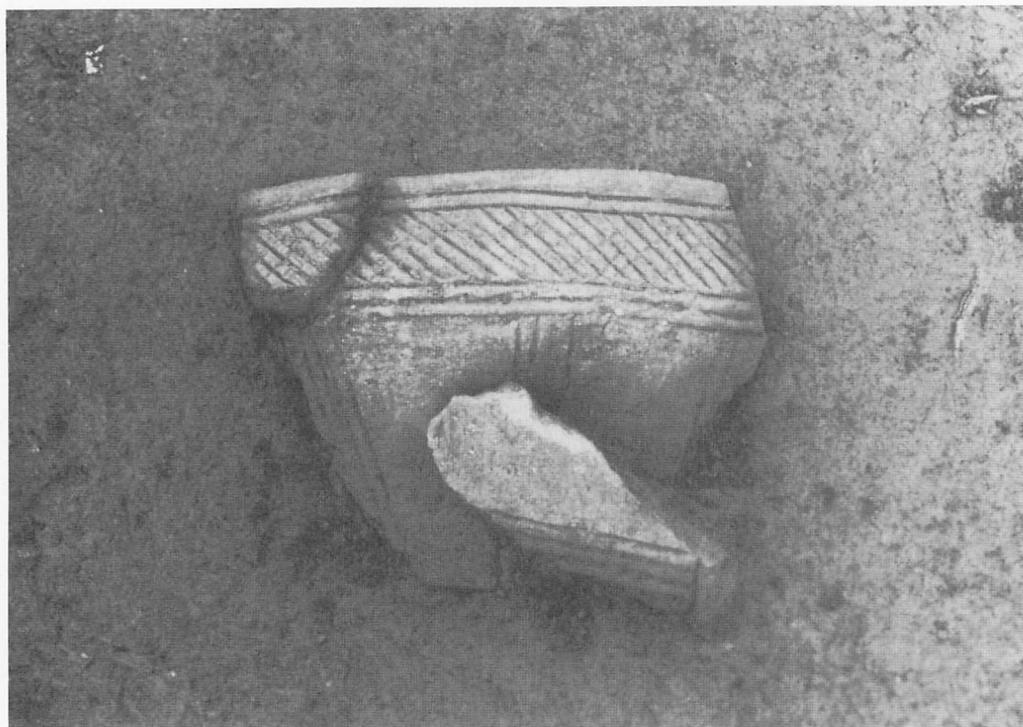
図版4 上川遺跡11・12・13号住居址遺物遺構検出状態



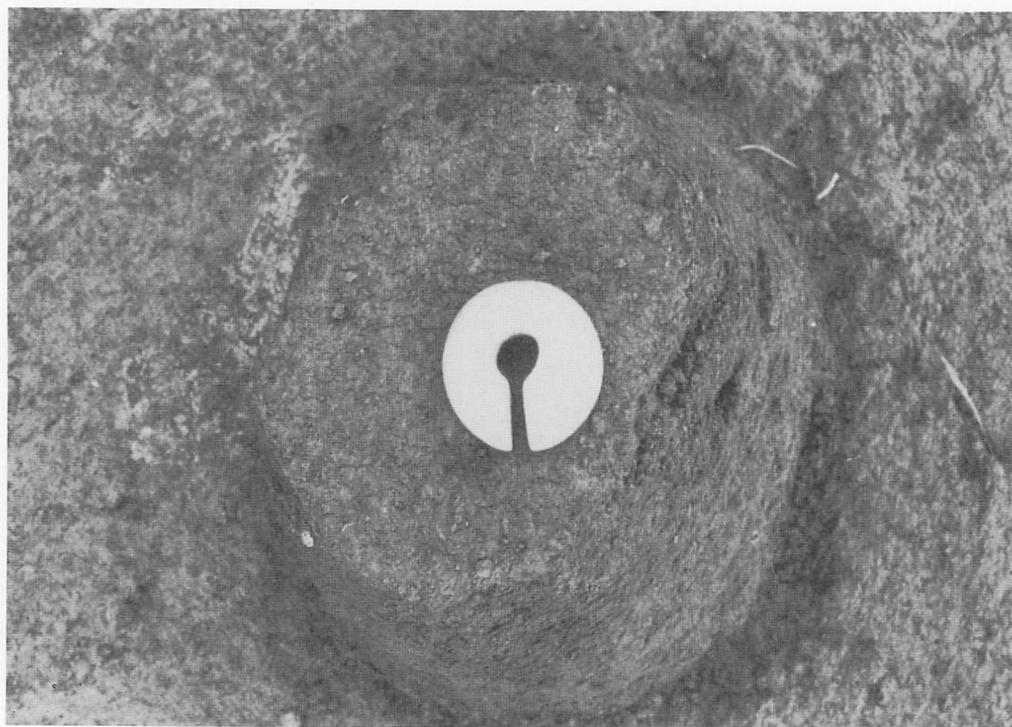
図版 5 上川遺跡遺物出土状態



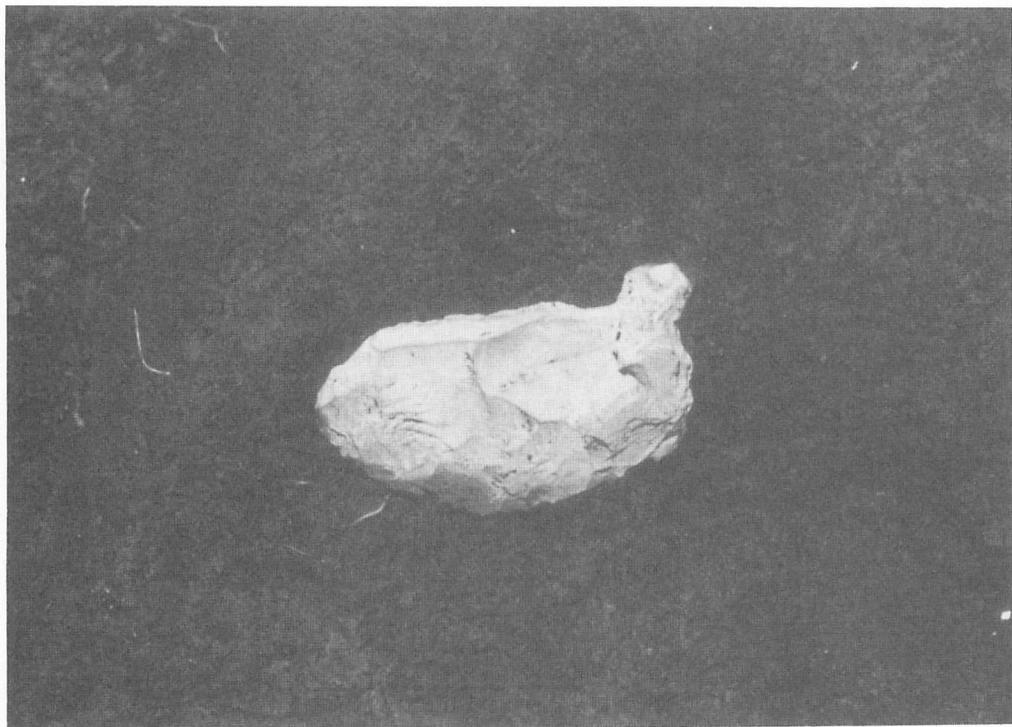
図版 6 上川遺跡遺物出土状態



図版 7 上川遺跡遺物出土状態



図版 8 上川遺跡球状石器出土状態

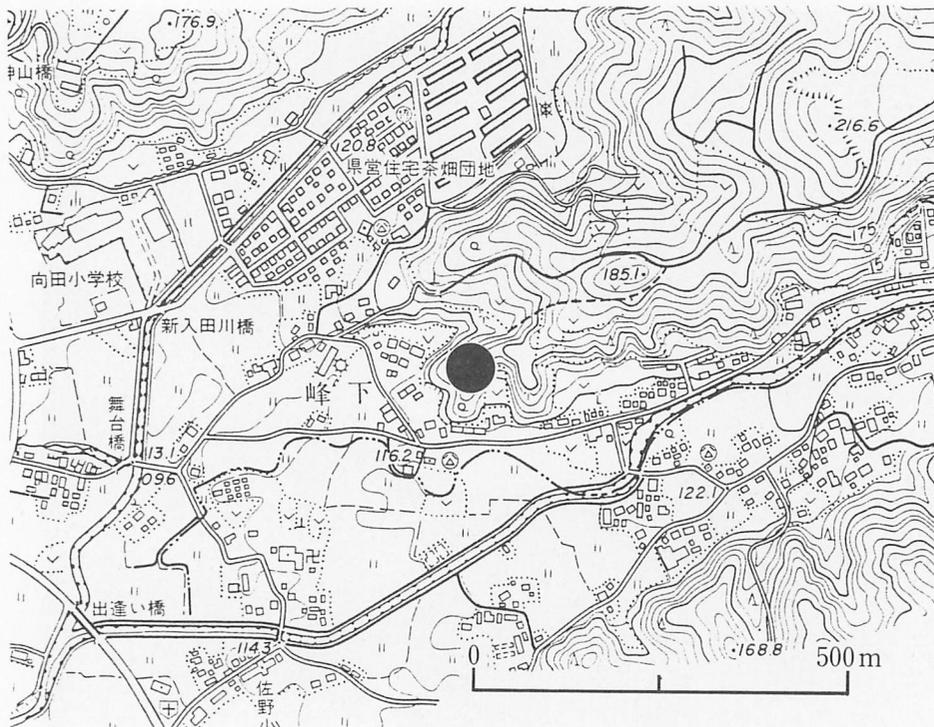


図版9 上川遺跡石匙出土状態

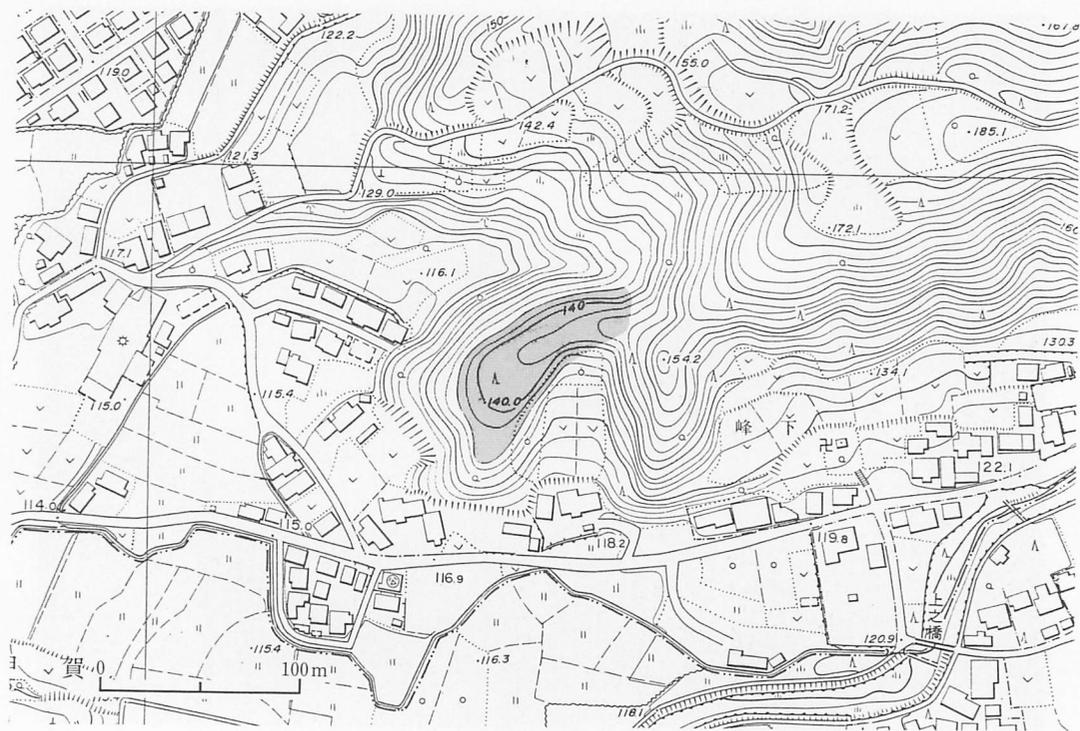


図版10 上川遺跡石皿・磨石出土状態

所在地 裾野市峰下一九二番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 箱根外輪山の三国山南から、南西に延びた尾根の末端海抜一四一mの平坦部に立地する。

発見と調査 昭和五〇年（一九七五）の「裾野市公文名日向・丸山Ⅰ・丸山Ⅱ遺跡発掘報告書」に、本遺跡の記載がある。この地域は、昭和二五年（一九五〇）頃、県立沼津商業高等学校、旧沼津女子高等学校（加藤学園）の生徒が踏査している。

遺物 前記報告書では、縄文時代中期の遺跡とあり表面採集された遺物は、数量は極めて少ないが拓図と写真に示したように、撚糸文土器片で縄文時代早期前半に属するものである。

遺跡の性格 撚糸文の土器を出土する遺跡として、注目される。

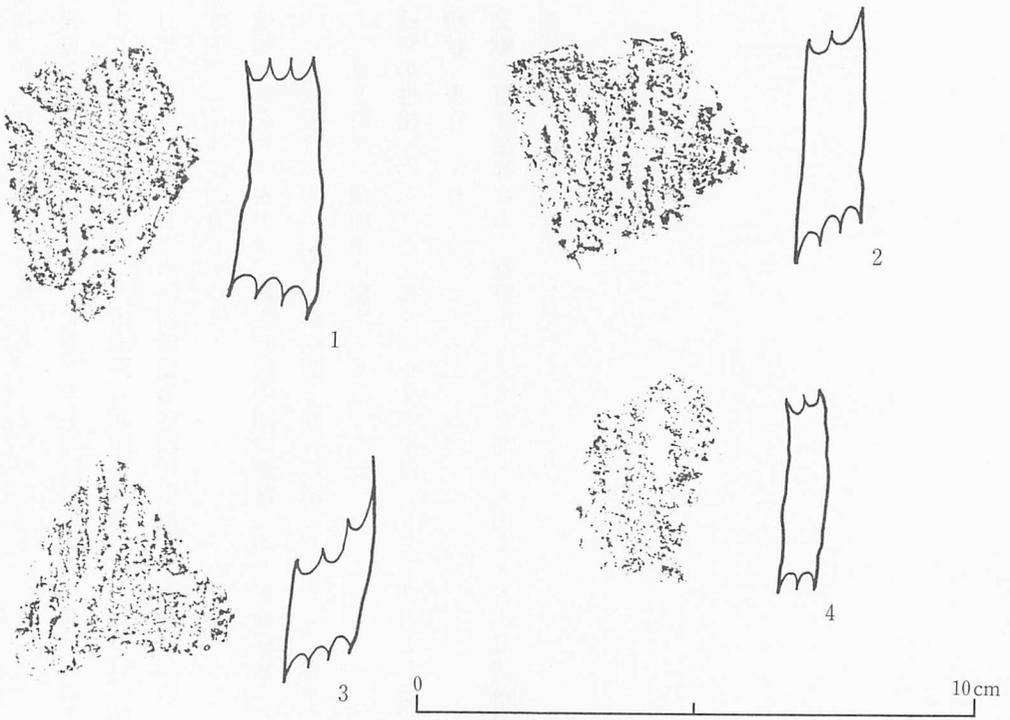
現状 現在、山林となっている。

文献 笹津海祥ほか「裾野市公文名日向・丸山Ⅰ・丸山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九七五

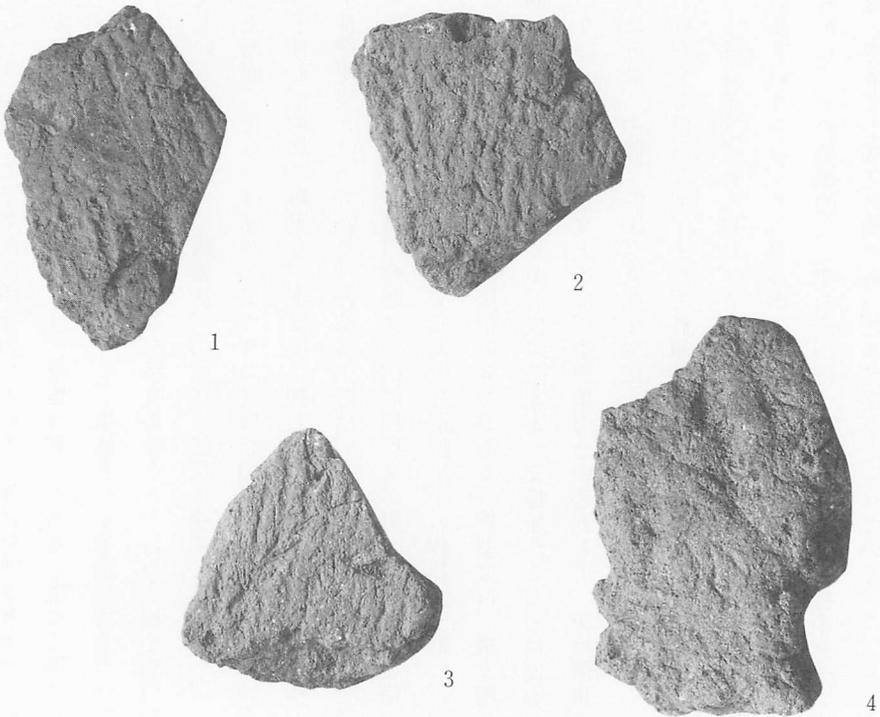
（用語解説）

押型文土器 押型文というのは、棒状の押型をつくって、土器面に押しつけ転がしてできた文様を指している。棒に撚糸を巻きつけ転がして文様をつけるといふ点では、原理は同じである。細めの棒にいくつか連続して楕円の彫刻をほどこし、生乾きの土器面に押しつけ転がすと、米粒状や穀粒状の連続した浮文ができる。この文様を楕円押型文という。同じように鋸歯状、山形状、波状に連続して彫刻し、これを土器面に押しつけ転がしてできた文様を山形押型文といい、菱形、格子目形、網状に彫刻し、土器面に押しつけ転がしてできた文様を格子目押型文といっている。押型文土器は、それぞれ単独で文様を構成するものもあるが、楕円押型文と山形押型文が組合わさって文様をつくりだしたものもある。公文名丸山Ⅱ遺跡出土の押型文土器に、破片は小さいが、文様構成が併用型のものがある。押型文は、縄文時代早期の代表的な文様であるが、後の時期まで文様手法としては使われていない。各種の押型文土器は、中部地方を中心として、東は関東から西は近畿、中国、四国、九州まで広く分布している。

押型文も撚糸文も、それぞれ単独に施文され、この両方の文様が同じ土器に施文された例は、まだ見つかっていない。このことから文様技法というのは、それ自体がその時点のひとつの文化を示すものであるから、その地域的な分布の違いは、縄文時代の早期押型文土器文化圏と撚糸文土器文化圏があったのだと考えられている。



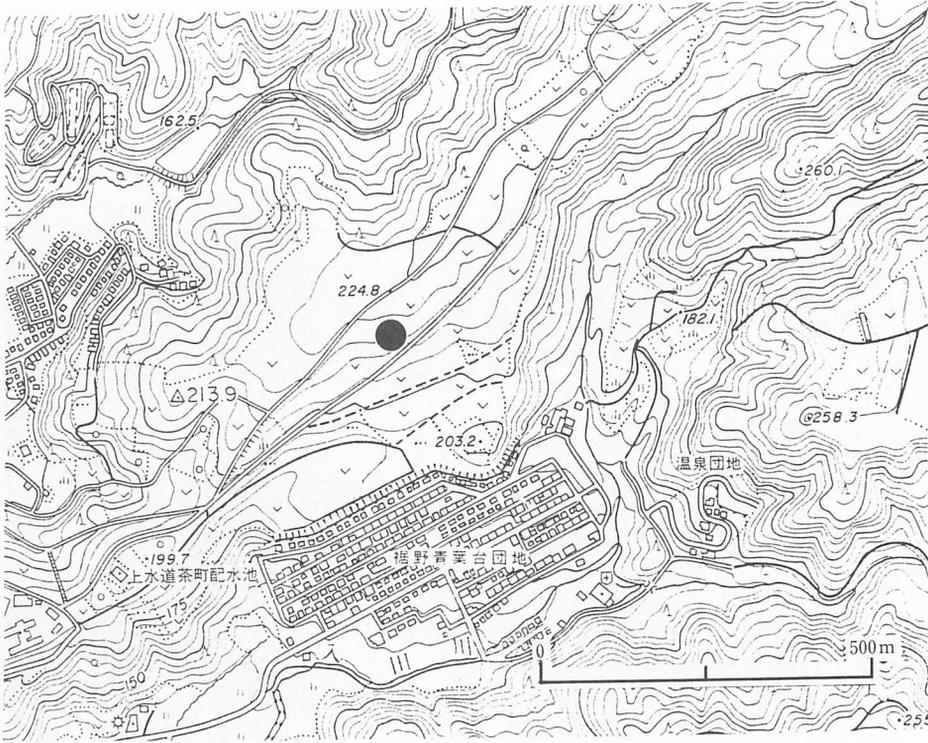
第1图 峰下遗迹出土土器拓影



图版1 峰下遗迹出土土器

21 あいしよばら
相生原遺跡

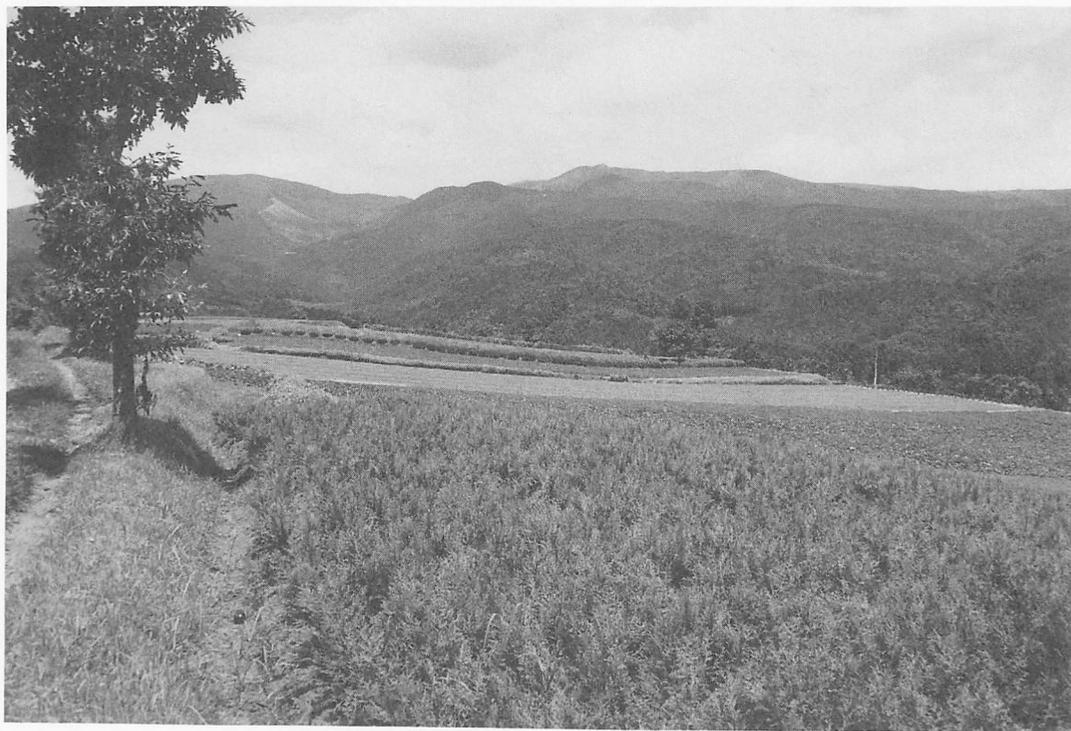
所在地 裾野市茶畑字相生原二〇三五番地ほか



位置図



遺跡範囲図



相生原遺跡遠望

位置と立地 箱根外輪山の三国山から南西に延びた尾根は、海拔二五〇m付近から稜線部が開けて広い平坦部となるが、海拔二三〇mの上方から下方へ向かって東江ノ浦山遺跡・相生原遺跡があり、ついで尾根末端へかけて丸山II・丸山I・日向・屯屋敷遺跡と連続するが、本遺跡はその一つで、平坦部の南西側に立地する。

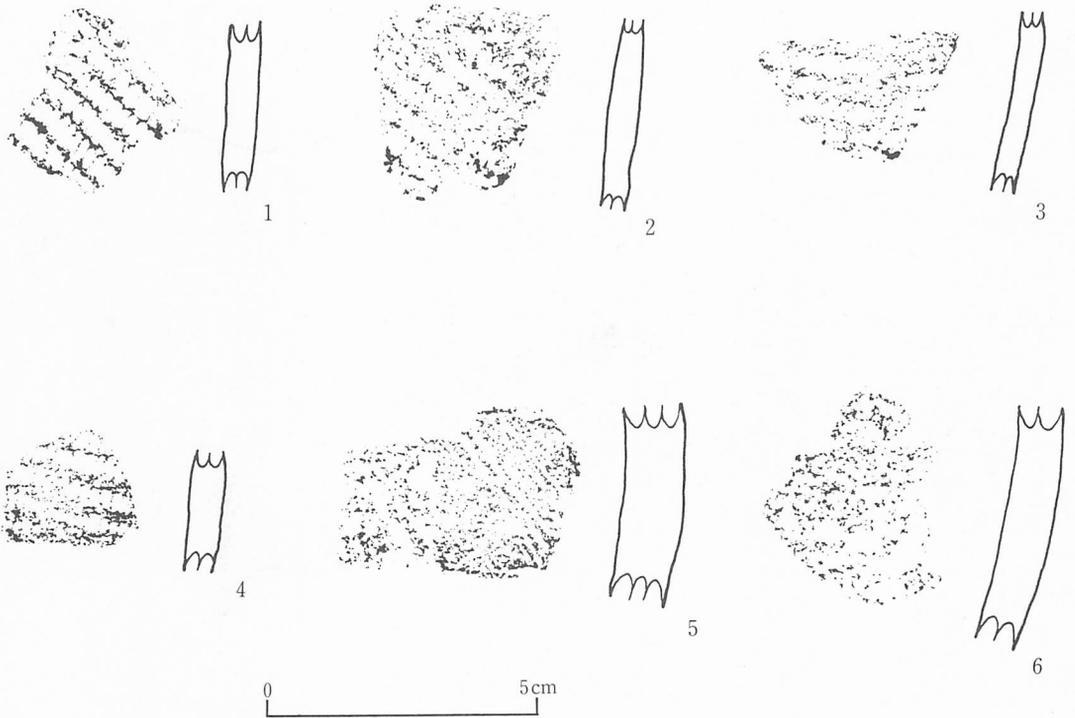
発見と調査 旧石器時代日向遺跡の項参照。これら遺跡は、昭和四〇年代の後半から鈴木恒治、笹津海祥、瀬川裕市郎、芹沢充寛、井上輝夫らによって踏査されている。

遺物 表面採集されたものである。図の1～4は、胎土に荒い砂と少量の白色石粒を含み、厚さ四～五mmの薄手で、硬く焼き締まる。斜行の縄文が施される。5・6は、胎土に粗砂粒が多量に含まれる。5は、浅い条線文が施され、6は列点状の刺突文がある。すべて縄文時代前期に属するものと思われる。

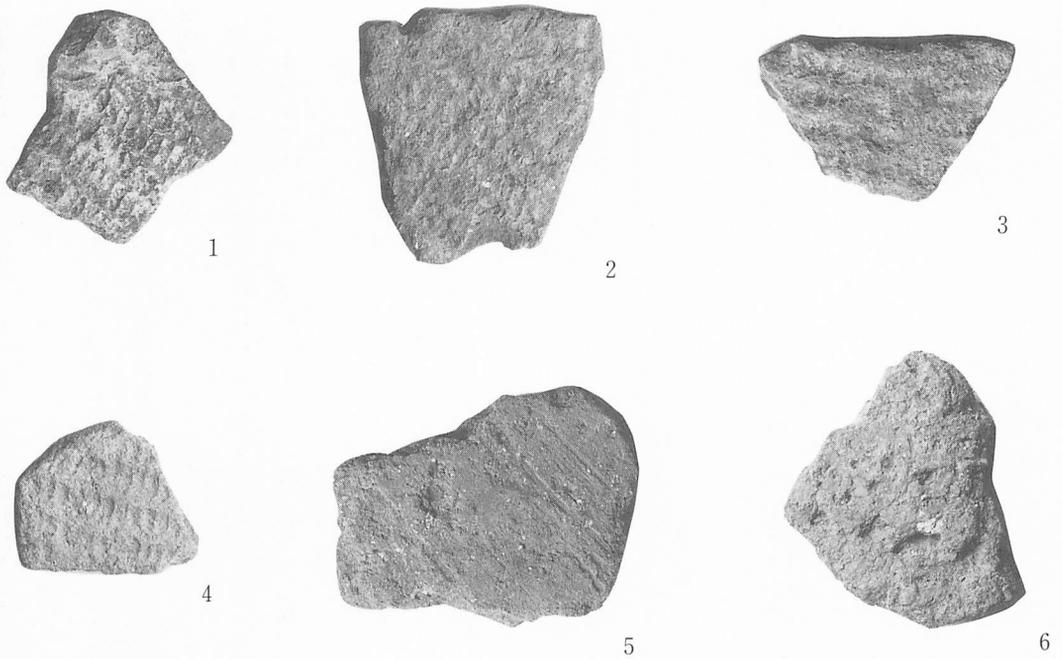
遺跡の特徴 他の遺物がないので遺跡の時期は決めかねるが、一応縄文時代前期の遺跡としてよからう。

現状 大部分は畑地である。

文献 笹津海祥ほか「裾野市日向・丸山I・丸山II遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 一九七五



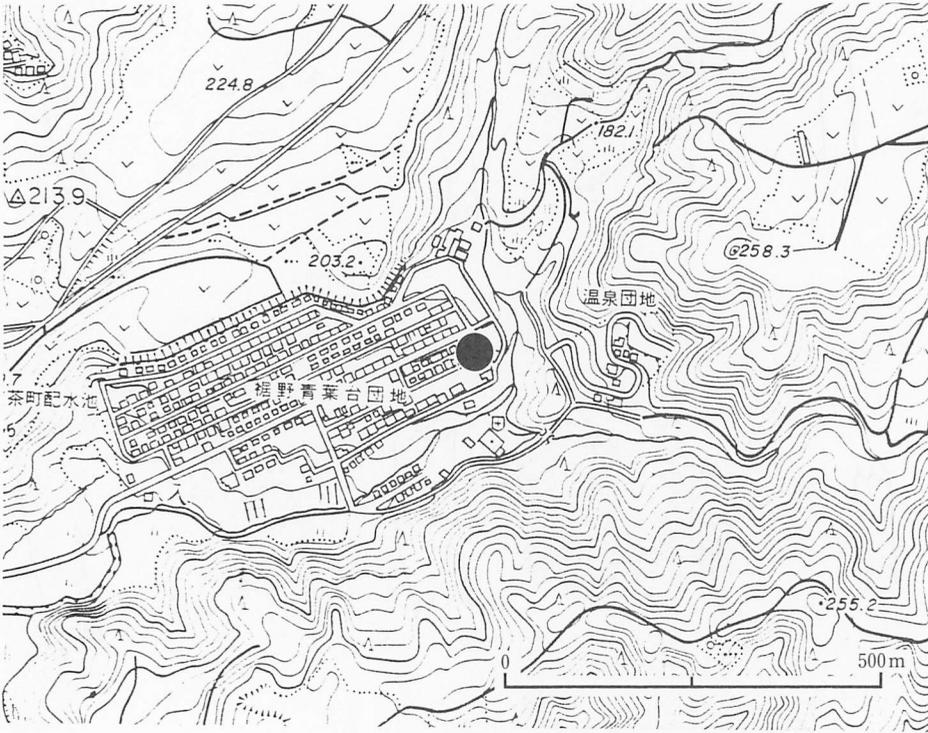
相生原遺跡表面採集土器拓影



相生原遺跡表面採集土器

ちやばたけおおいり
茶畑大入遺跡

所在地 裾野市茶畑字大入二〇一六番地ほか



位置図

位置と立地 箱根外輪山の三国山から南西に延びた尾根の末端に、東江ノ浦山・相生原遺跡が位置するが、この遺跡の立地する丘陵の南下、入田川に向かって傾斜する台地状斜面の、海拔一七〇m付近に位置していた。周辺を丘陵と沢谷に囲まれた、特異なところに立地する。

発見と調査 昭和四〇年代の後半、裾野郷土研究会の芹沢充寛が踏査し、縄文時代前期の土器を採集している。本遺跡は、道場山・日向・丸山I・丸山II遺跡の発掘調査報告書に、周辺の遺跡として報告されている。

現状 青葉台団地敷地となって完全に消滅している。

ひがしえの
うらやま
東江ノ浦山遺跡

所在地 裾野市茶畑字東江浦山



位置図

位置と立地 箱根外輪山の三国山から南西に派出する尾根稜部の平坦地、海拔二三〇mの東江浦山に位置する。この尾根は海拔二四〇m付近から末端に向かって、稜部が平坦となり、相生原・丸山Ⅱ・丸山Ⅰ・日向・屯屋敷と縄文時代の遺跡が連続し、本遺跡はその一つである。

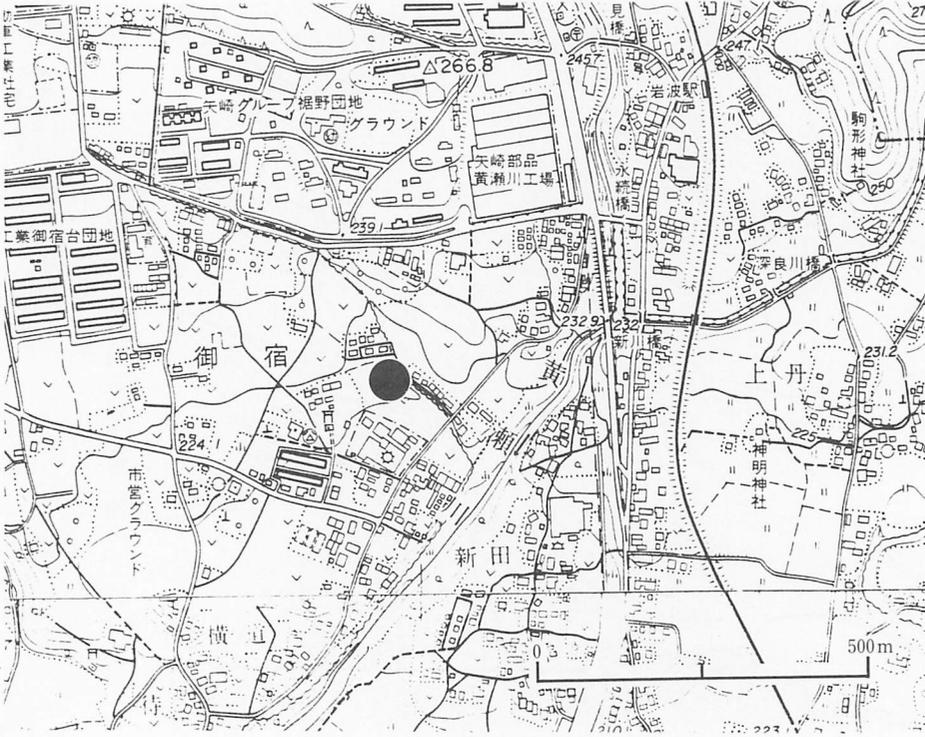
発見と調査 昭和四〇年代の後半、笹津海洋、小野真一、芹沢充寛らが踏査し、縄文時代の土器片を採集している。

現状 大部分は畑地である。

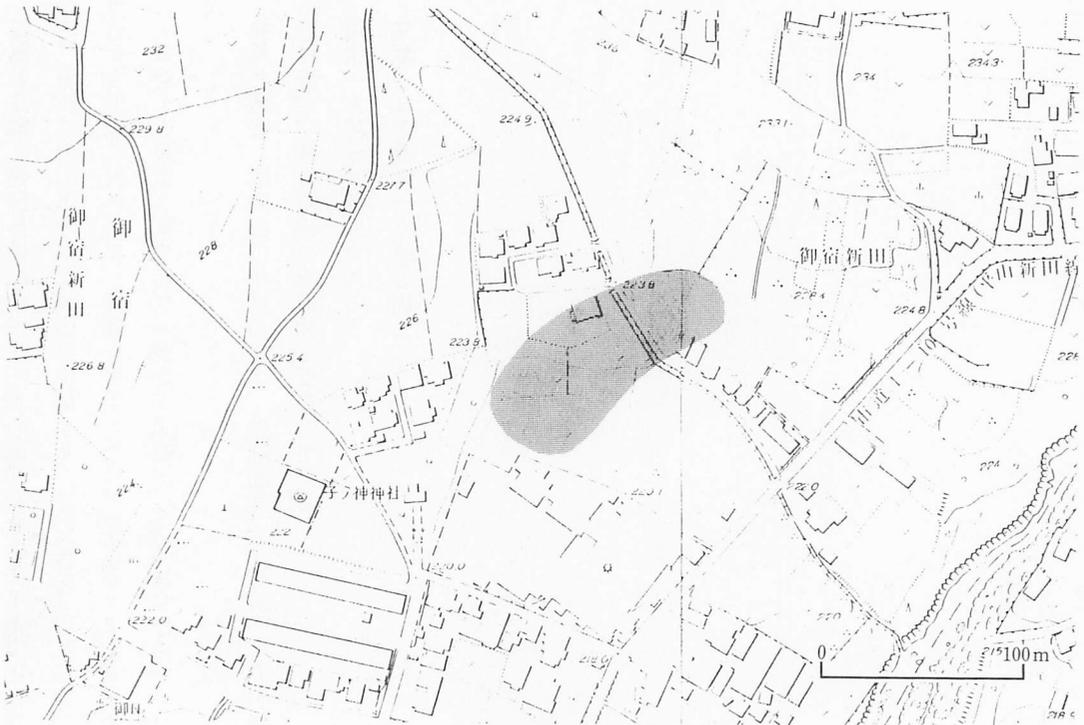
文献 日向遺跡の文献と同じ

六反田遺跡
ろくたんだ

所在地 裾野市御宿字六反田一〇一四番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 富士山東南麓の末端、海拔二二二mのゆるい傾斜地の平坦面に位置する。周辺の同じような地形をしたところに御宿新田、坂下遺跡がある。

発見と調査 昭和五〇年代の前半、芹沢充寛によって縄文時代遺跡と確認された。

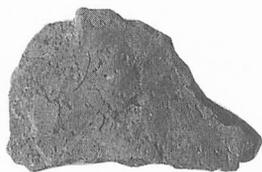
遺物 表面採集されたものである。図の1～3は、無文である。4は、胎土に白色石粒と粗砂を含む。口縁部破片で、口縁より下に突起が付くが、欠損して明らかでない。内面に不規則な沈線が施される。5は、胎土に白色石粒と砂を含む。口縁部に沈線で文様が施される。6は、5と胎土が似ている。無文である。縄文時代中期後半に属するものと思われる。

遺跡の特徴 縄文時代早期、前期の土器群を多く出土した金沢上川遺跡のように、富士山麓の馬背状の低丘陵上に立地する遺跡から下方の、山麓平坦面に立地する遺跡からは、縄文時代中期の土器を出土するものが多い。本遺跡もその一つとみてよからう。

現状 一部畑地であるが、住宅地化している。



1



2



3



4

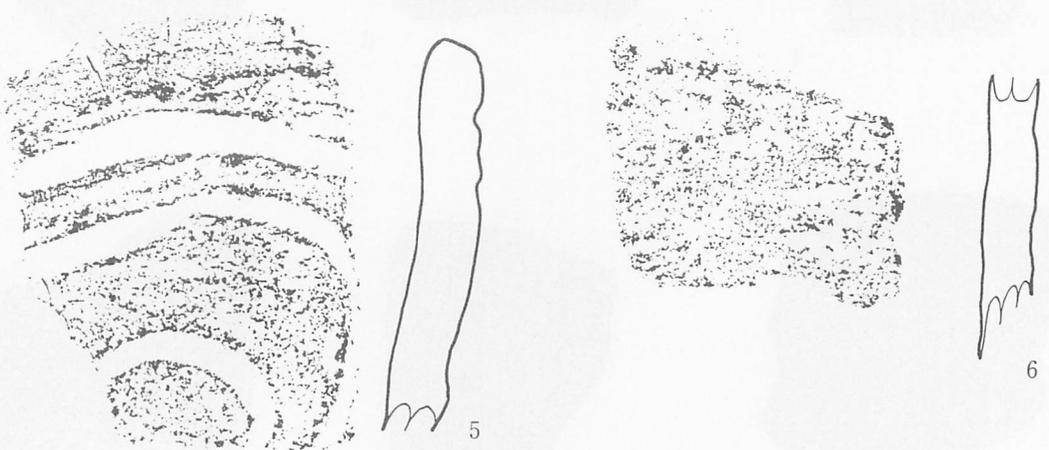
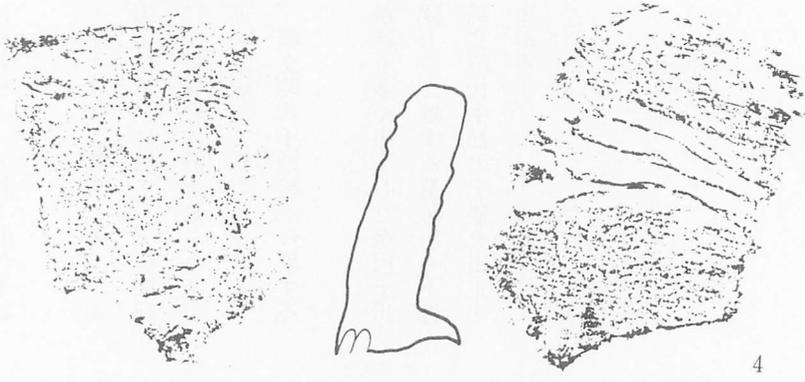


5



6

六反田遺跡表面採集土器拓影

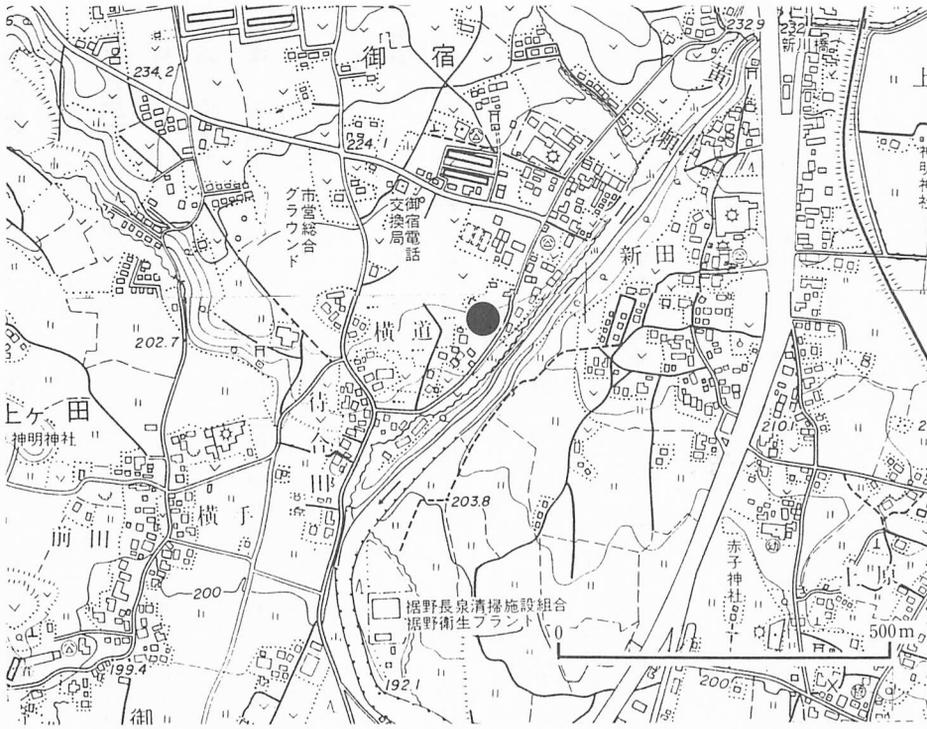


0 5 10cm

六反田遺跡表面採集土器拓影

御宿新田遺跡
みしゆくしんでん

所在地 裾野市御宿八二番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 富士山東南麓の末端、海拔二一六mの台状地形上に位

置し、東側を黄瀬川が流れている。

発見と調査 昭和四〇年（一九六五）八月、ここに在住の杉本久喜宅で、浄化槽を設置するため、地表下一・五〜一・七mほど掘り下げたところ、縄文時代土器片が出土した。

層序 表土下三〇cmに厚さ三〇cmの富士マサ層があり、その下部に厚さ九〇cm以上の黒土層があって、その下位のところから出土した。

黒土層の下は赤土層で岩盤に達していた。

遺物 第1図の1〜7までは、ほぼ同一の土器片であろうと思われる。胎土に白色石粒と砂を多量に含む。縄文の地文に沈線で文様が構成される。8〜11までは、沈線と八の字の引掻文、12・13は、縄文と低い隆起線で文様が構成される。第2図は石器で、1〜3は大形石棒、うち2・3は有頭の石棒である。石質は安山岩。4〜6は磨石で、石質は安山岩。8は、半磨製の偏平な石斧で、石質は硬質の粘板岩である。

遺跡の特徴 裾野市北部の富士山麓地域では、地表下〇・五〜1mのところまに堆積した新期火山灰層を除去すると、その下の黒褐色土層から縄文時代の遺物を発見することがある。本遺跡もその一つで、縄文時代中期後半の遺跡としてよからう。

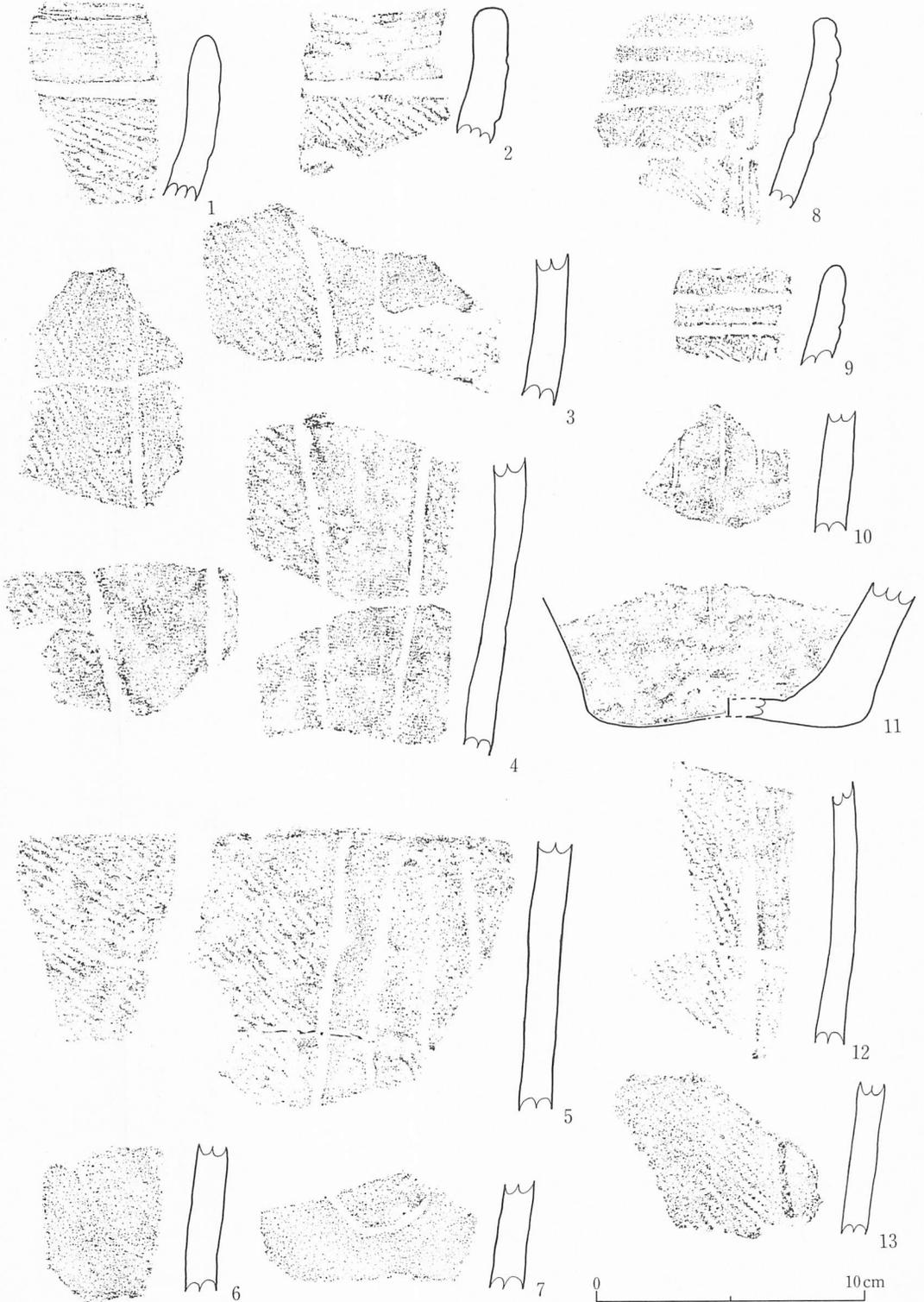
現状 大半は住宅地となっている。

文献 芹沢充寛「御宿新田遺跡」 裾野郷土研究創刊号 裾野郷土

研究会 一九六六

（用語解説）

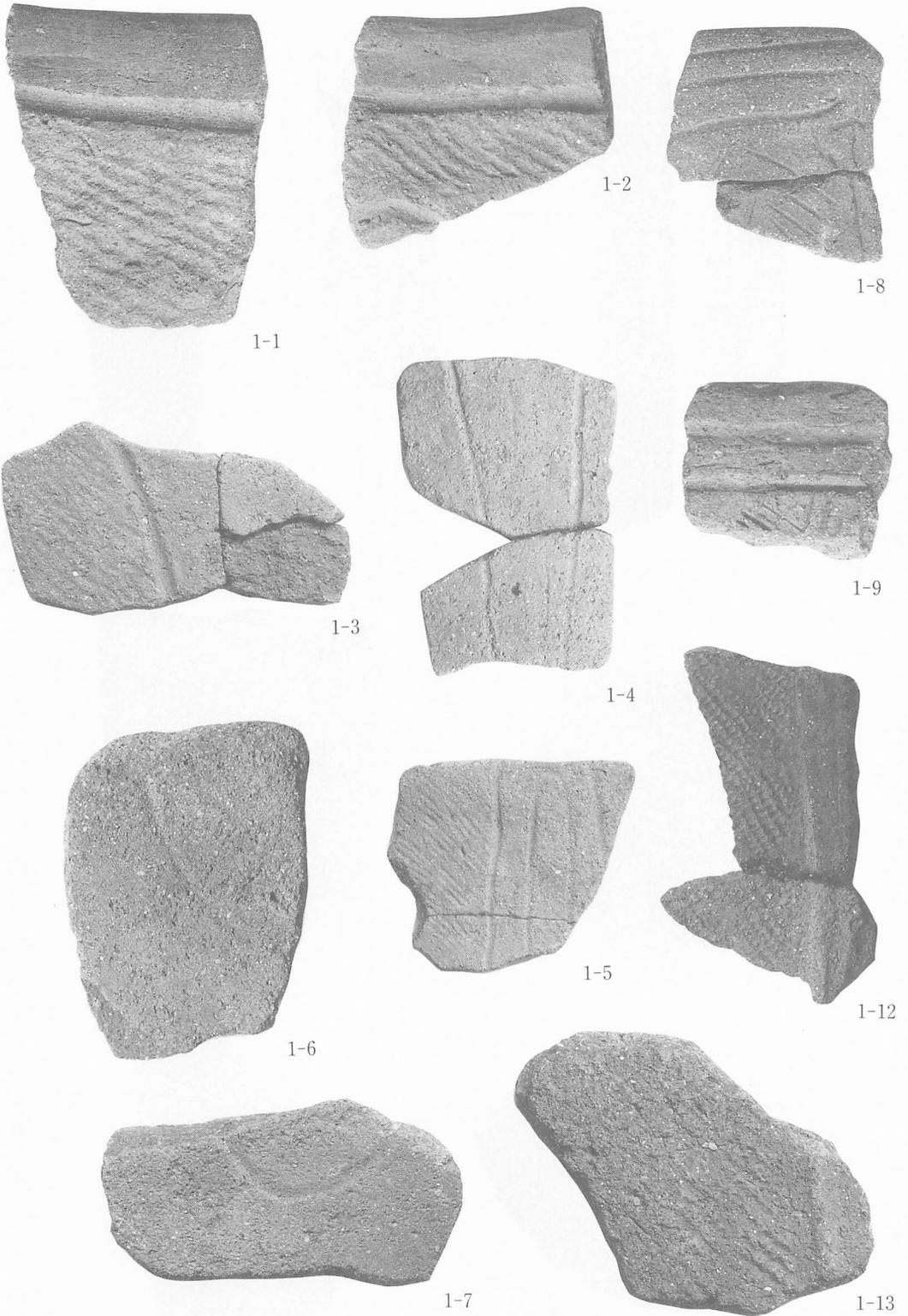
胎土 縄文時代本文中に、よく使われている胎土というのは、土器や陶器類を作るときの素材をいう。中世の陶器類は、産地が限られていて、それを作るのに適した粘土や陶土の産するところで焼かれているから、大体、胎土の性質を調べておけば、目でみて瀬戸・美濃古窯のものか、常滑古窯のものか大まかな区別はつくものである。縄文時代の土器の素材つまり胎土については、桃園入ノ洞遺跡や金沢上川遺跡出土の土器の説明にあるように、石英・長石・雲母が含まれるとあり、そのほか市内出土の土器片の断面をみても、まったく粘土だけで作られているものはほとんどなく、砂粒と長石と思われる白色石粒を含んでいて、粘土はつなぎ程度というのものもある。また縄文時代早期から前期の初めにかけては、植物の繊維を入れた痕跡のあるものや、前期の終わり頃から中期前半の土器には、金雲母が多量に含まれていて、土器の時期を判断する手掛かりともなっている。胎土の混入物は、もともと粘土に混じっていたものとする、この地域では石英や長石、雲母などは産しないから、何処かほかで作った土器を持ち込んだものであろうとしている。また胎土に含まれた砂粒から角セン石・シソ輝石・普通輝石の三鉱物の量を計測して、土器の製作地を推定する作業を行ったところ、長泉町八反田・桜畑遺跡の土器は山梨県方面、裾野市茶畑道場山遺跡の土器は、甲府盆地の中〜西部または笛吹川系、うち一片は富士川河口付近の砂粒であったとする。



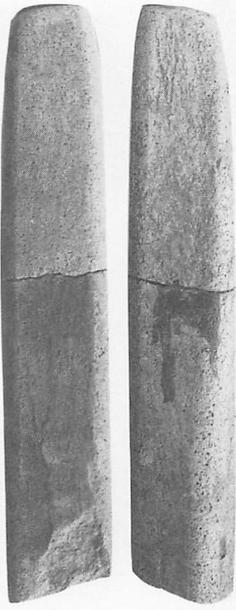
第1図 御宿新田遺跡出土土器拓影



第2図 御宿新田遺跡出土石器実測図



図版1 御宿新田遺跡出土土器



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6

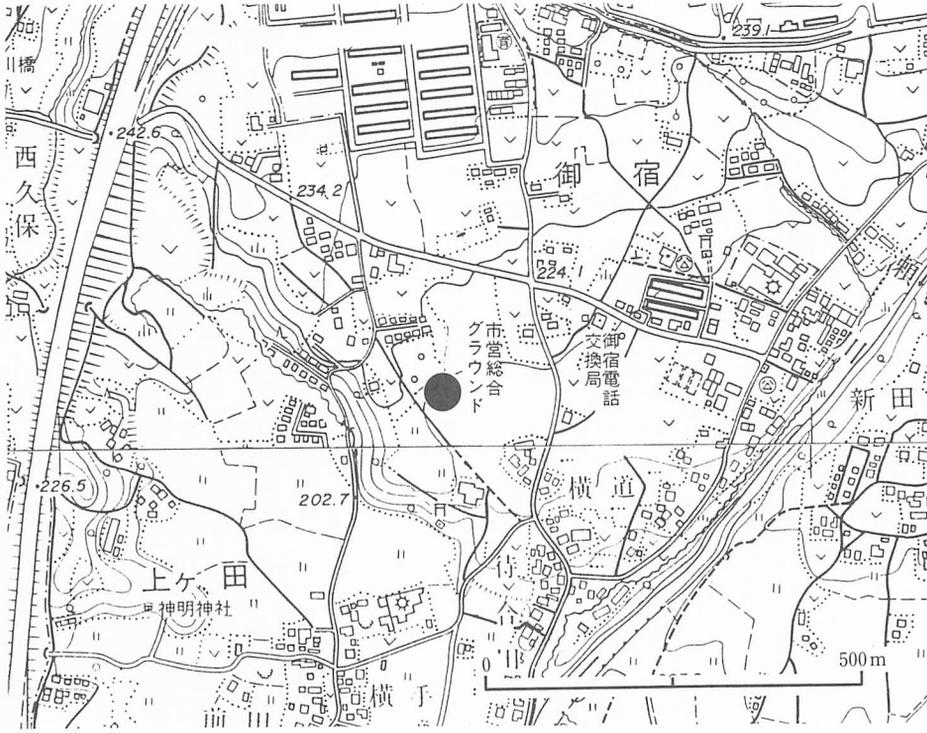


2-8

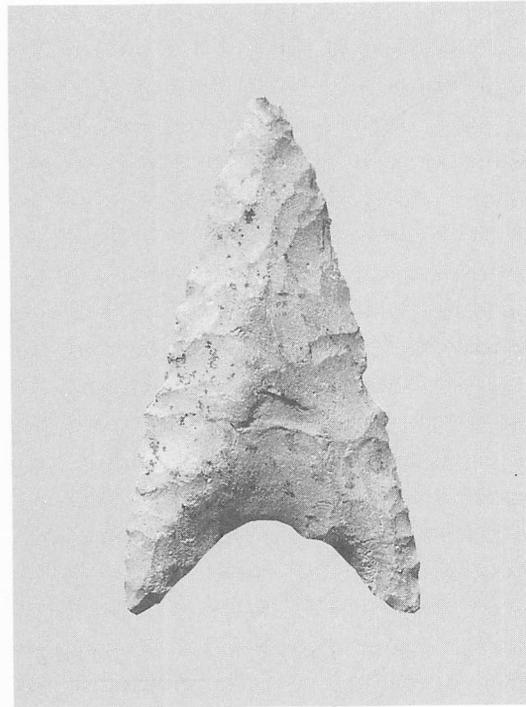
图版2 御宿新田遺跡出土石器

坂下遺跡
さかした

所在地 裾野市御宿字坂下



位置図



坂下遺跡表面採集石鏃

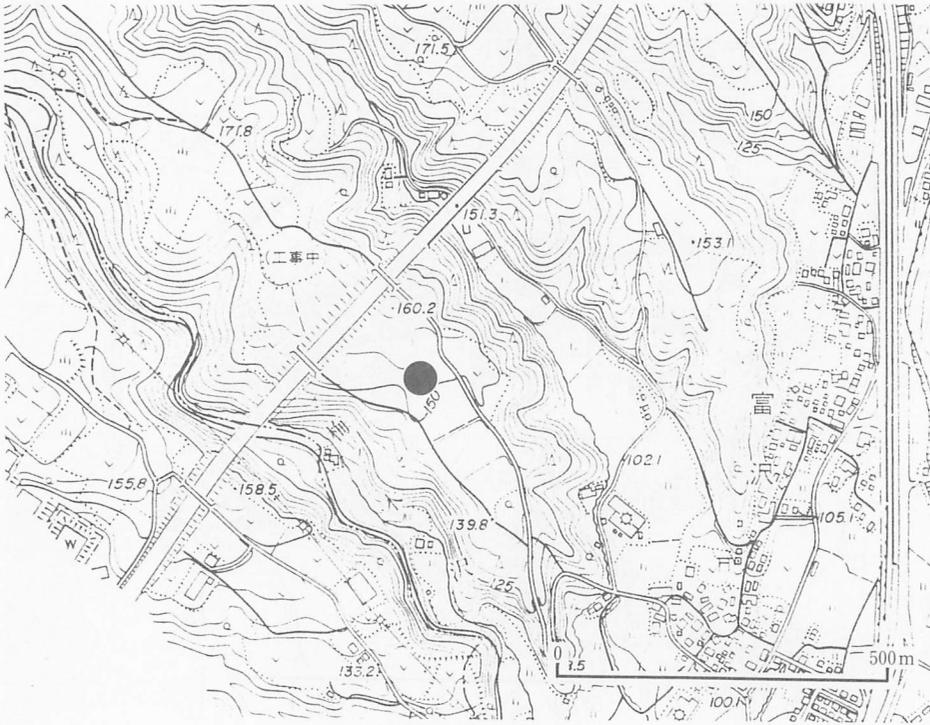
位置と立地 富士山東南麓の御宿坂下、海拔一九〇mの台地状地形のところに位置する。周辺の馬背状丘陵やその下方の台地上には、上川、六反田、御宿新田等の遺跡が分布する。

発見と調査 昭和六〇年（一九八五）、上川遺跡発掘調査中、周辺遺跡確認のため袴田稔が踏査中、市営グラウンドの表土を削平した壁面から縄文土器片を検出した。主として縄文時代中期土器片である。

現状 既に市営グラウンド敷地となり、遺跡の大半は消滅している。

平林 I 遺跡
ひらばやし

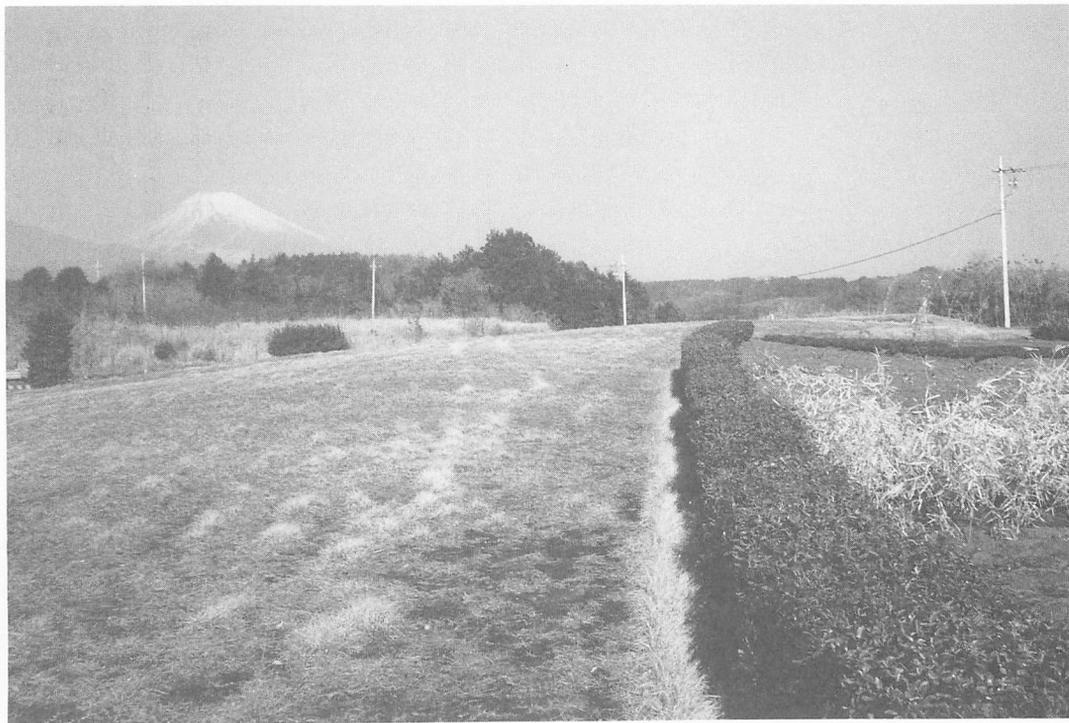
所在地 裾野市富沢字平林五七二番地



位置図



遺跡範囲図



平林 I 遺跡遠望

位置と立地 愛鷹山から南東に延びる尾根のうち、富沢集落の南方に延びた尾根は、海拔二二〇m付近から、その背稜部が平坦面をなし、この面が広がる塚松から藤内・山畑・中林・平林と連続して、縄文時代の土器片が散布している。平林 I 遺跡は、この平坦面の海拔一五五m前後のところに位置する遺跡で、上方へ向かって広がるが、東名高速道路で西北方は切断されている。この東名高速道路を越えたところ一帯が平林 II 遺跡である。

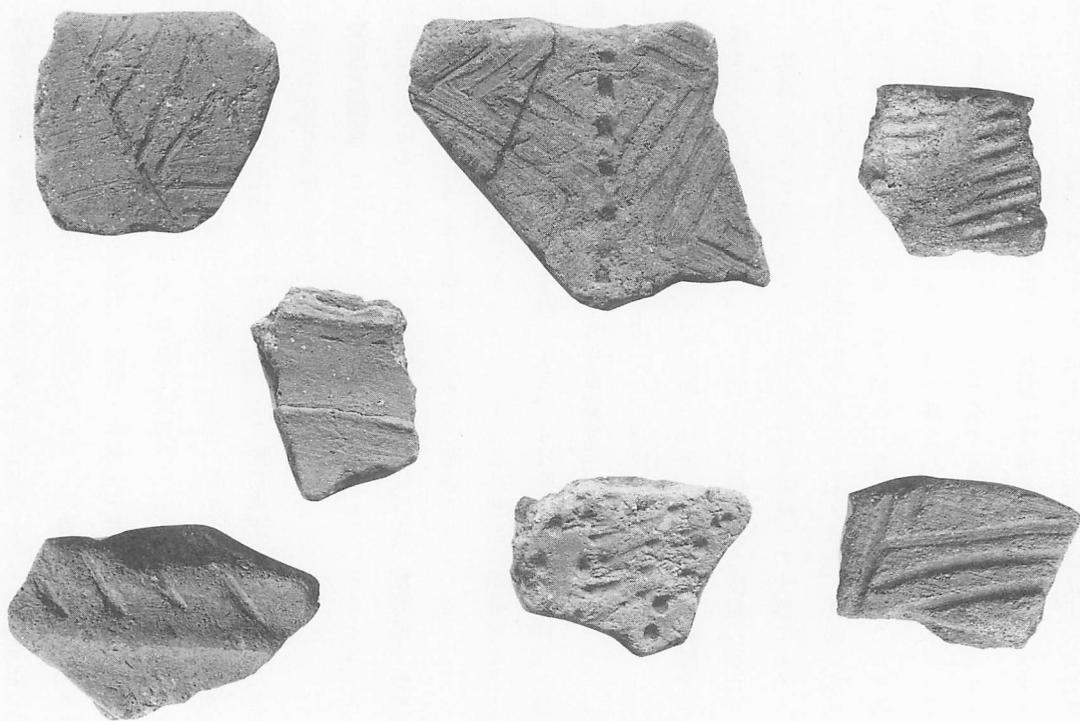
発見と調査 この辺り一帯に土器片の散布していることは、古くから地元の人に知られていたが、昭和四〇年代以後、裾野郷土研究会の芹沢充寛、佐藤隆、井上輝夫らによって踏査されている。

遺物 第1図1～3・5のうち、1・2は胎土に粗砂粒を含み、1は押型文、2は捺糸文の土器である。4は胎土に繊維と砂粒を含み、細い捺糸文が施される。縄文時代早期前半の土器と思われる。3は胎土に繊維を含むが、よく焼き締まり、細い沈線が施される。5は胎土に粗砂粒を含み、太描きの沈線が施される。6は胎土に繊維を含み、引掻き状の文様が施される。7は胎土に白色石粒と少量の雲母が含まれ、沈線が施される。3・5は縄文時代早期後半の土器であろう。第2図1～13まで、胎土に白色石粒と砂を含む。1は、半截竹管の内側で深く平行線を施し、下の三本に刻み目を入れる。2・3は口縁部に隆線で渦状文をつける。4は、平行線文に刻目文帯を入れる。5は、縦に平行沈線の地文をつくり、粘土紐で文様区画をつくる。6・9・11～13は、地文に縄文を施し、沈線で文様を構成する。7・8・10は、沈線と隆線で文様を構成する。以上、縄文時代中期後半のものと思わ

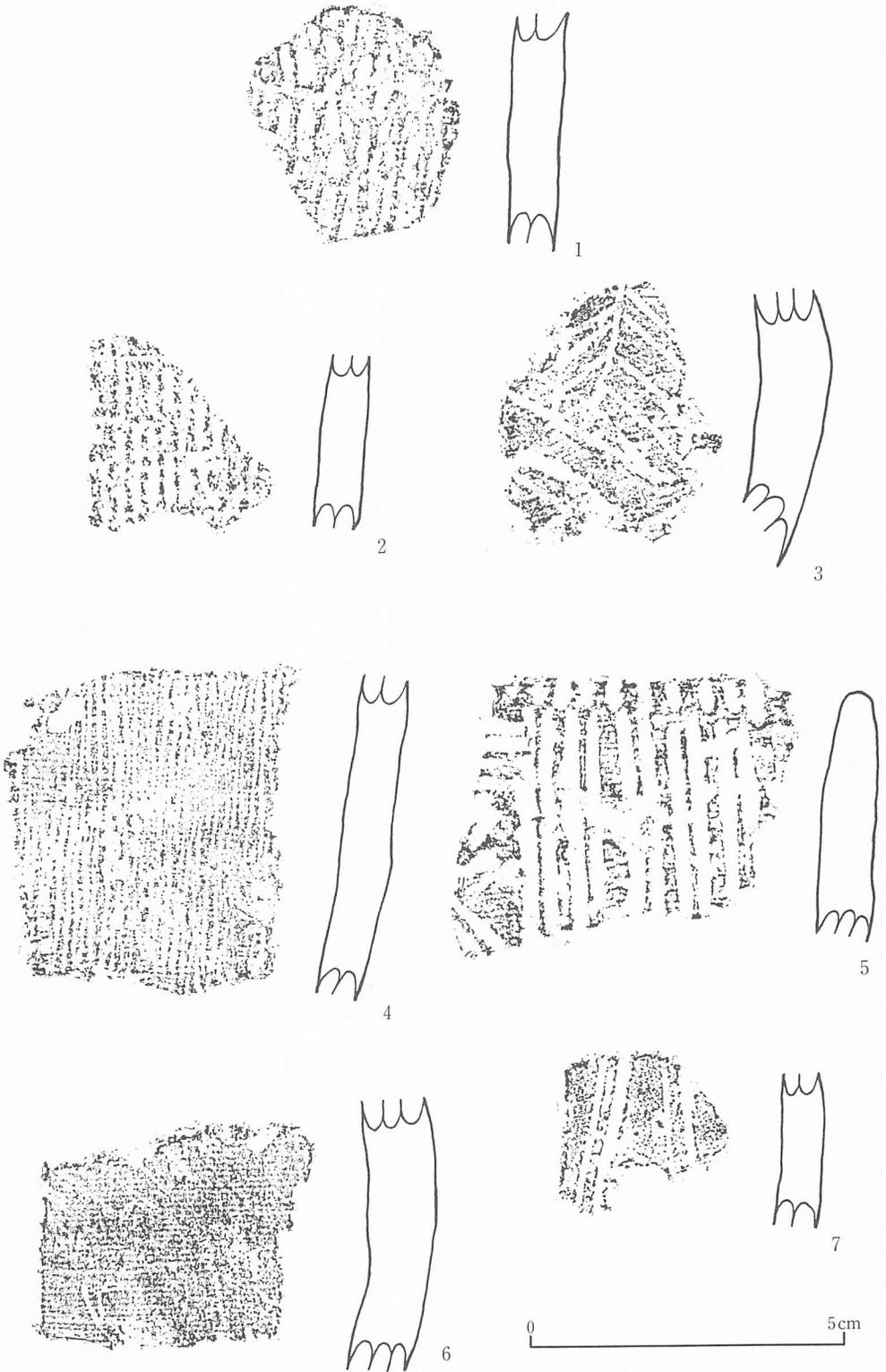
れる。

遺跡の特徴 東名高速道路より南東の平坦面全域に、土器片が散布する比較的規模の大きな遺跡である。採集された土器片からみると、縄文時代早期と中期後半の重複した遺跡といえよう。

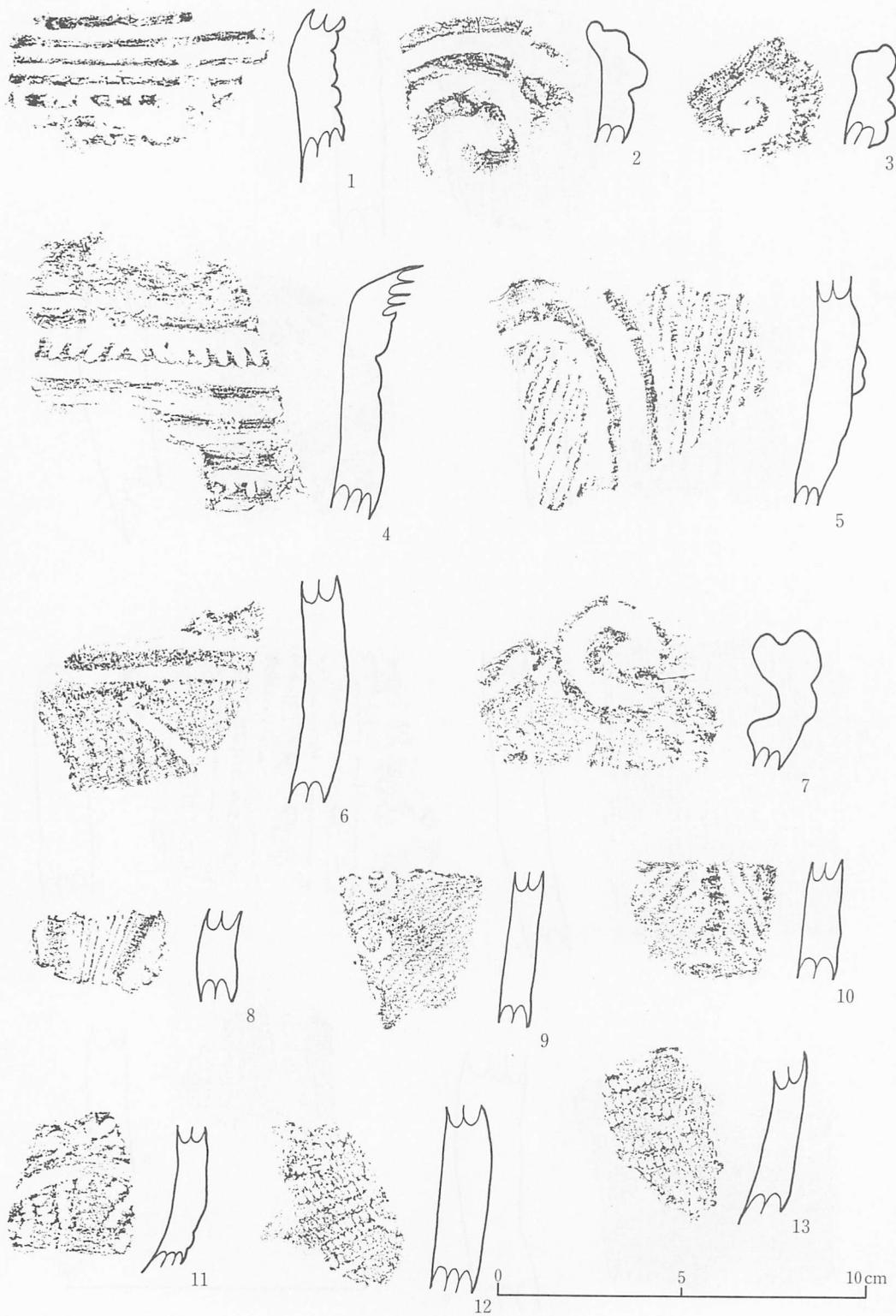
現状 大部分は畑地である。



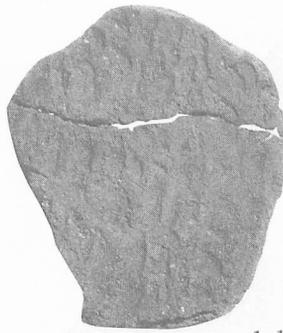
参考資料 富沢出土縄文土器



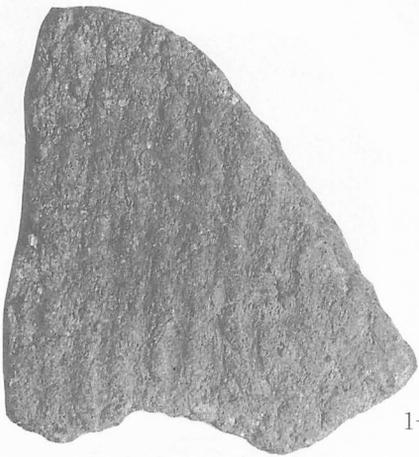
第1図 平林I遺跡採集土器拓影



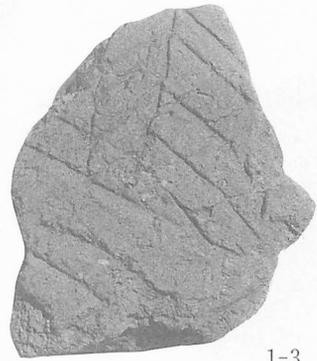
第2图 平林 I 遺跡採集土器拓影



1-1



1-2



1-3



1-4

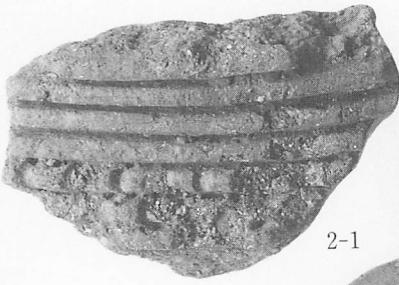


1-5



1-7

図版1 平林 I 遺跡採集土器



2-1



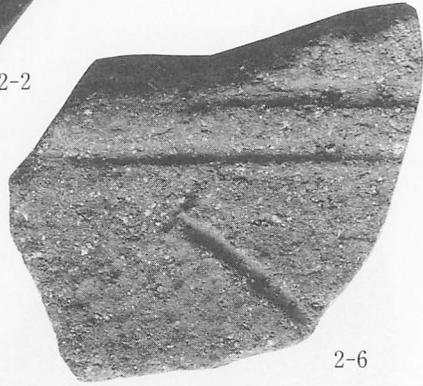
2-4



2-2



2-5



2-6



2-7



2-9



2-10



2-11

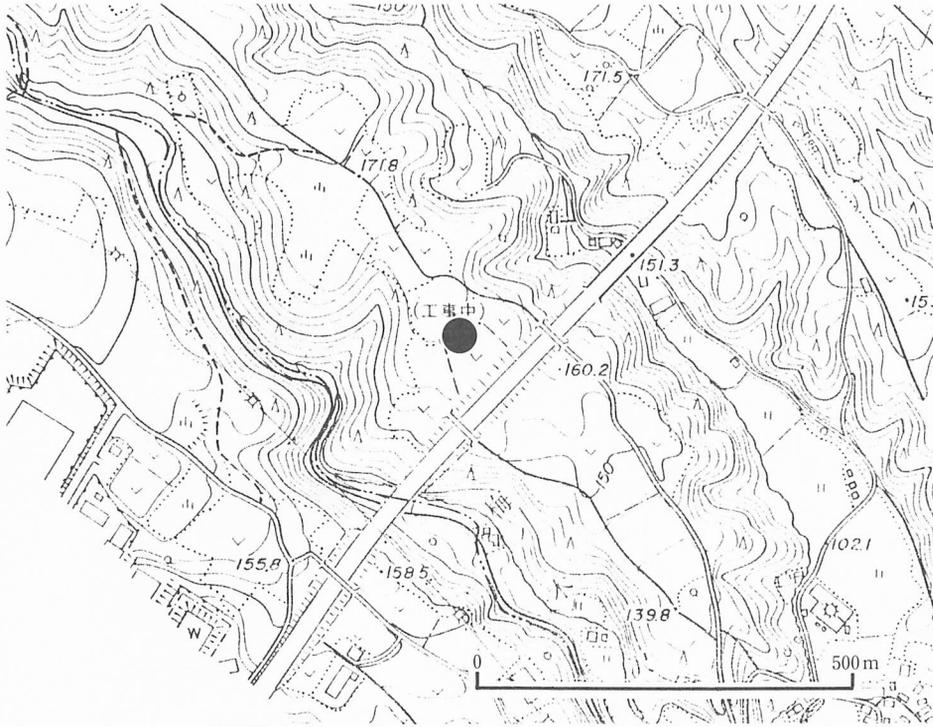


2-13

图版 2 平林 I 遺跡採集土器

28 平林 II 遺跡

所在地 裾野市富沢字中林五六六番地ほか



位置図

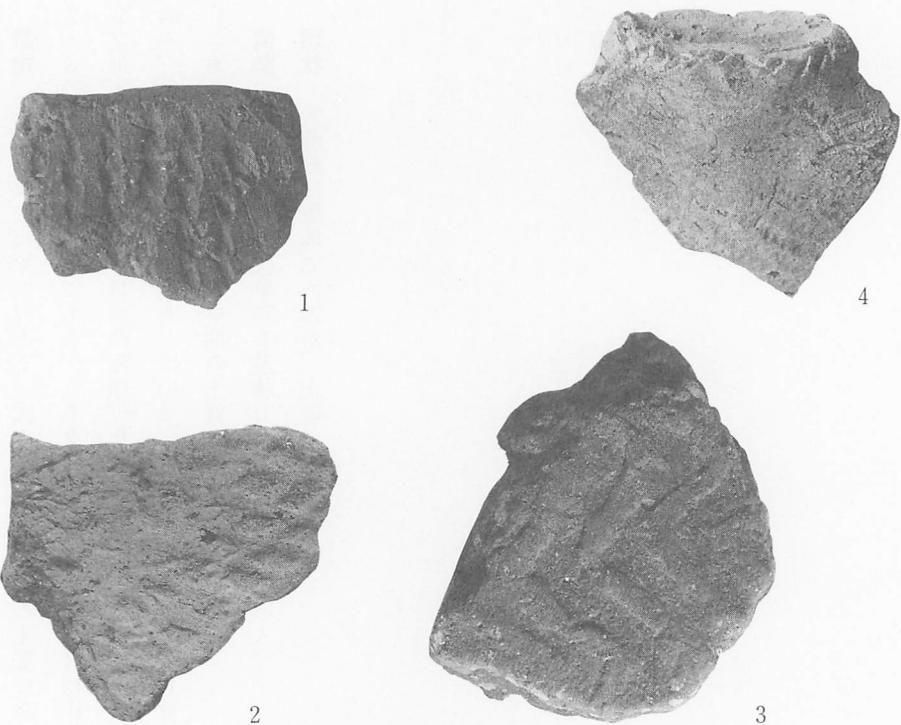
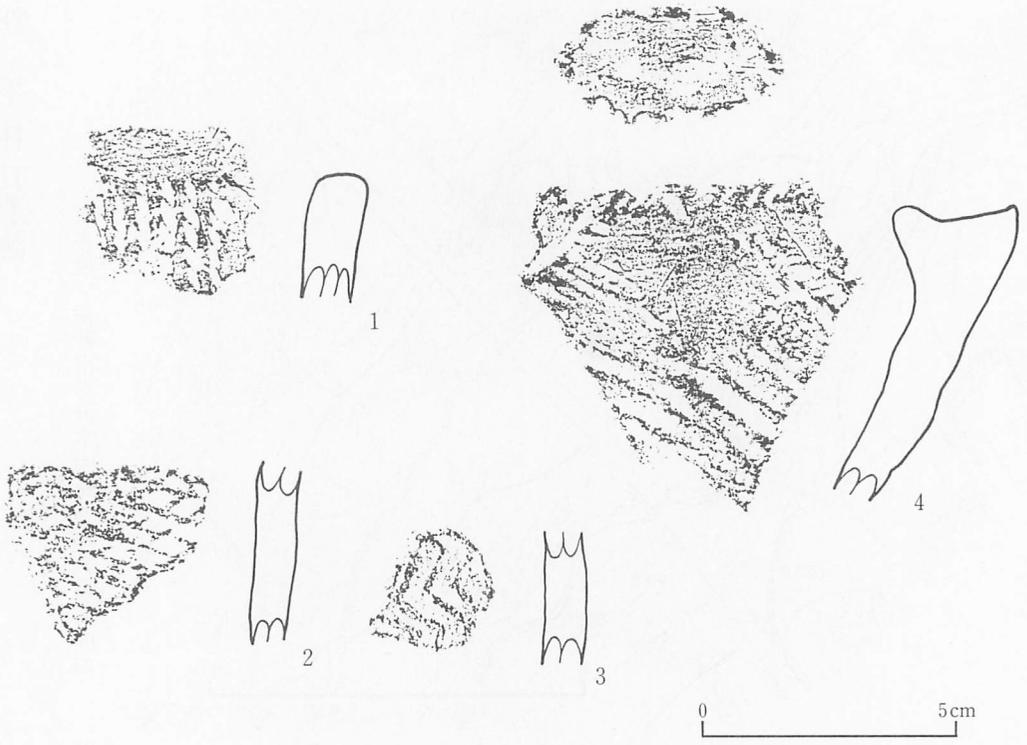
位置と立地 平林 I 遺跡の北西側に連続する遺跡である。地籍は中林であるが、従来の名称を採用した。

遺物 表面採集したものである。図の 1 は、捺糸文の土器である。

2・3 は、押型文の土器である。うち 2 は格子目押型文、3 は山形押型文土器である。4 は、口縁凸起部破片である。胎土に若干の石粒を含み、硬く焼き締まり灰色をしている。地文に縄文を施し、口縁に刻目がある。すべて縄文時代早期の土器と思われる。

遺跡の特徴 縄文時代早期の遺跡の一つとしてよからう。

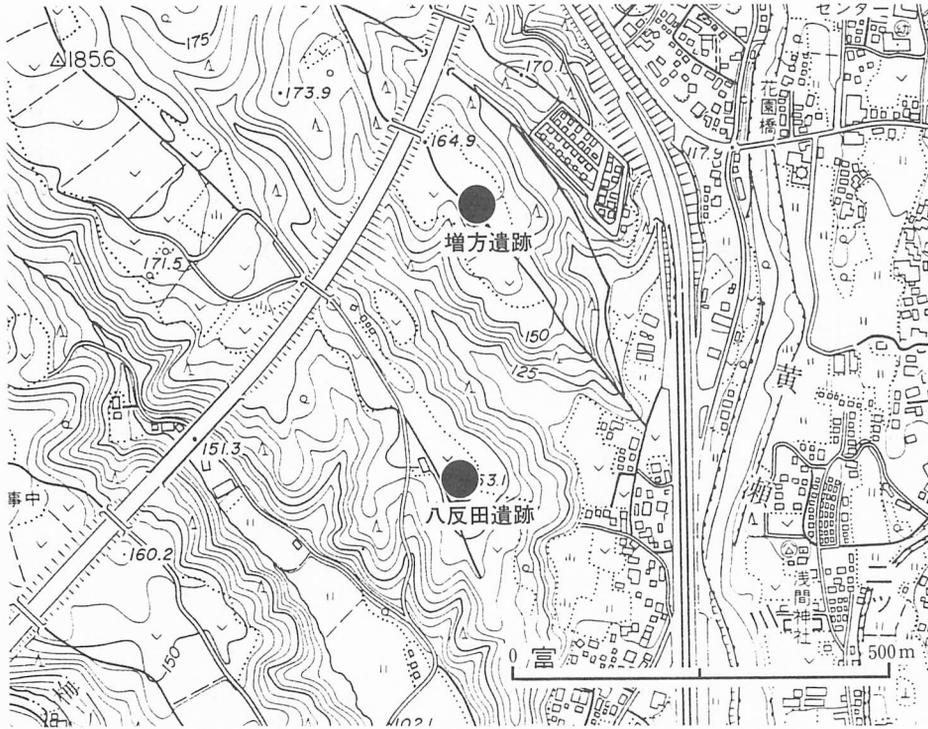
現状 大部分は畑地であるが、土取りをされている。



平林II遺跡表面採集土器拓影・写真

富沢八反田・増方遺跡
とみざわはつたんだ
ますかた

所在地 裾野市富沢字西川五四七番地ほか、同瀬戸山五一八番地



位置図

位置と立地 八反田遺跡は、内野山Ⅰ、細山遺跡の立地する愛鷹山麓の尾根の末端、海拔一五三mの字西川に位置し、増方遺跡は、内野山Ⅲ遺跡の立地する尾根の東南側に枝分かれたほぼ中央部、海拔一六一mの字瀬戸山に位置する。増方遺跡のすぐ東側の沢谷を越えた尾根末端に、尾畑遺跡がある。

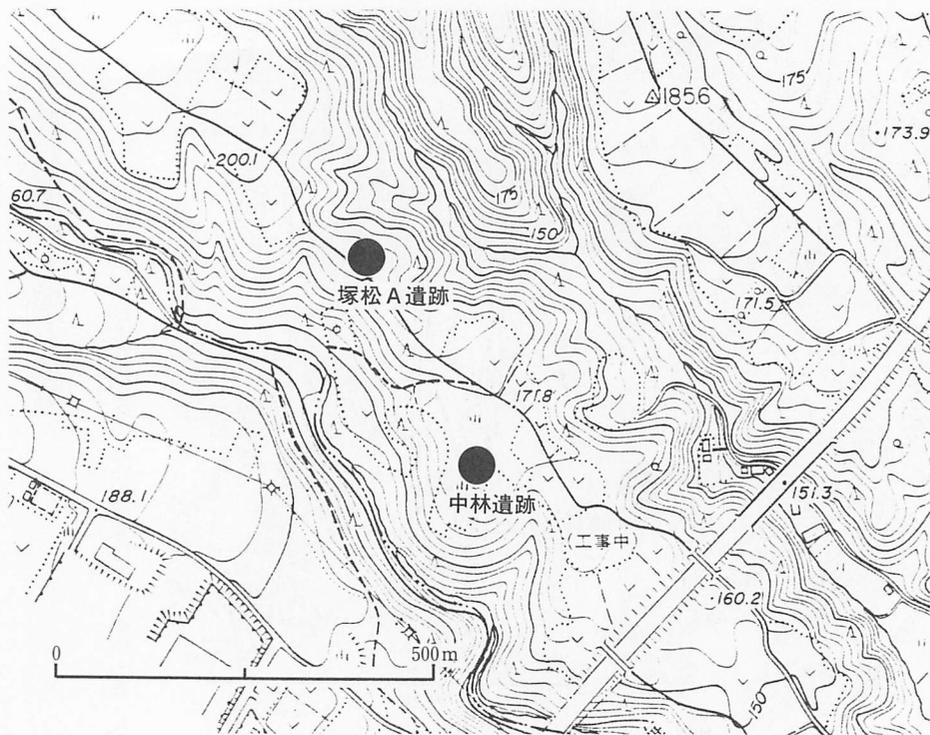
発見と調査 両遺跡は、内野山Ⅰ遺跡と共に、昭和四〇年（一九六五）頃、県立沼津商業高等学校郷土研究部が踏査し、その後、芹沢充寛らが踏査して、縄文時代の土器片を採集している。なお八反田遺跡から東南東約二五〇mの尾根末端には、縄文時代中期の土器片が散布していた。

現状 八反田遺跡の大半は、土取り工事で消滅し、増方遺跡は畑地と一部山林となっている。

文献 富沢内野山Ⅰ遺跡と同じ

とみざわなかばやしつかまつ
富沢中林・塚松A遺跡

所在地 裾野市富沢字内野山



位置図

位置と立地 愛鷹山から東南の富沢集落方面へ派出する尾根の、海拔一八〇m付近の背稜部に塚松A遺跡、それより約三〇〇mほど下った海拔一七〇m付近に中林遺跡が位置する。この尾根は、海拔二一〇m付近より平坦面をもつようになり、尾根の末端に向かって塚松B・A、中林、平林II・Iと遺跡が連続する。発表されている遺跡名は中林、塚松であるが、公図（地籍図）の上では、内野山となっている。

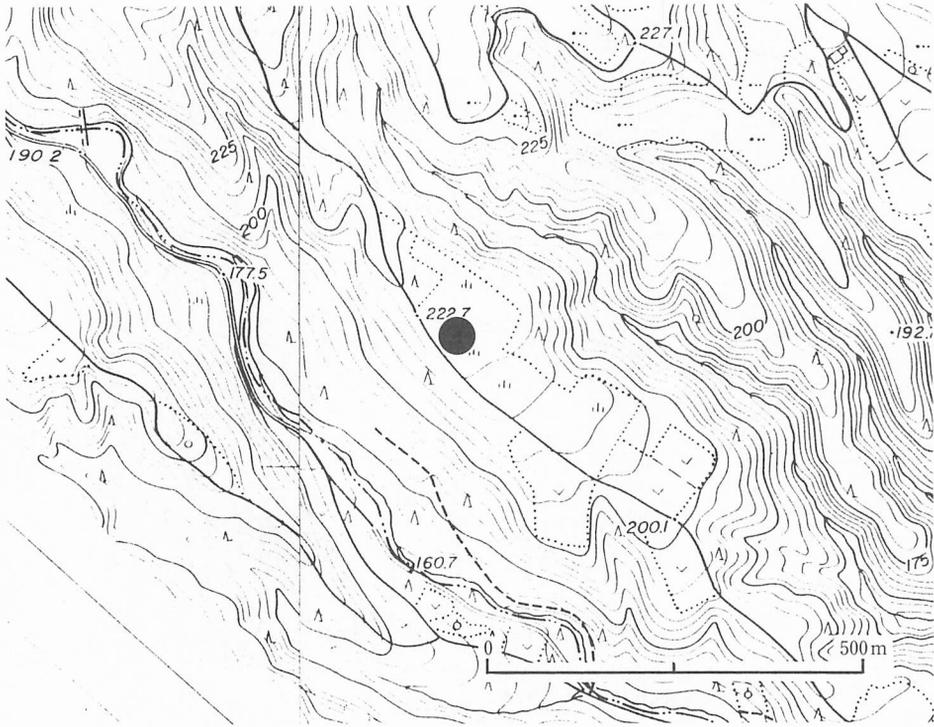
発見と調査 昭和四〇年代の後半、芹沢充寛らが踏査し、縄文時代の土器片を採集している。

現状 畑地と一部は山林となっている。

文献 富沢内野山I遺跡と同じ

富沢塚松B遺跡
とみざわつかまつ

所在地 裾野市富沢字内野山



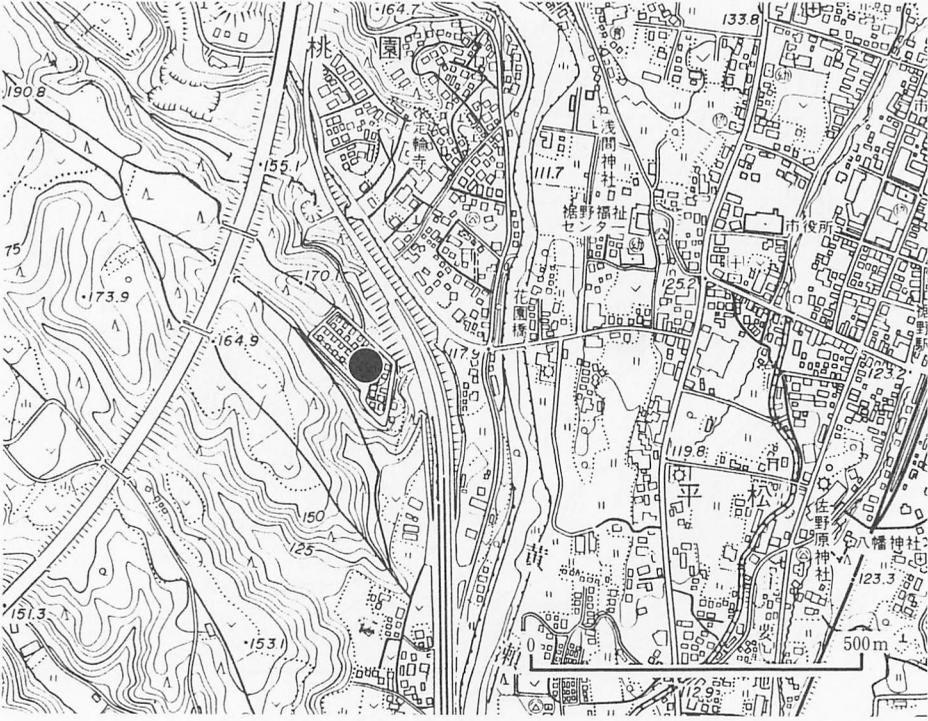
位置図

位置と立地 愛鷹山から東南の富沢集落方面へ延びる尾根の、海拔二二七m付近の平坦面に位置する。現在、この尾根の平坦面に立地する遺跡では、最も高いところにある。本遺跡とほぼ同じ高さに、北の内野山II遺跡がある。

発見と調査 昭和四〇年代の後半、中林・平林I・II遺跡と共に、芹沢充寛らが踏査し、縄文時代の土器片を採集している。中畑・内野山遺跡発掘調査報告書では、この尾根上の海拔一八〇m付近に塚松A遺跡があり、本遺跡を塚松B遺跡としている。塚松A遺跡も中林・平林I・II遺跡と共に芹沢充寛らが踏査して、縄文時代の土器片を採集している。

現状 山林と畑地であるが、畑地は現在草地となっている。
文献 中林遺跡と同じ

所在地 裾野市桃園字尾畑五二番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 愛鷹山の東南麓の末端、海拔一五〇mの舌状丘陵をしの桃園尾畑に位置する。遺跡の位置する尾畑丘陵は、主脈となる尾根の稜部が海拔二四〇m付近で平坦となって扇状に広がり、海拔一八〇〜一七〇m付近で谷によって三本に枝分かれしているが、その北端の長さ約四〇〇m、平坦面の幅約五〇mの丘陵で、遺跡の主要部分は、その先端近くにあったという。

発見と調査 地元では、昭和一〇年（一九三五）頃から土器、石器が出土することが知られていた。昭和四二年（一九六七）、裾野郷土研究会の芹沢充寛、佐藤隆、歌崎久作らは、中部開発株式会社から本遺跡一帯の宅地造成を開始するとの連絡を受け、現地を巡視中にブルドーザーで、表土を削平したところから土器片が出土したため、緊急調査を笹津海祥に依頼、同研究会、県立裾野高等学校郷土研究部が参加して、同年七月、一日間の調査を実施した。

遺構 埋没した顔面把手付土器に接続して、直線上に長楕円形の河原石、木炭片の集積したもの、円石が配列した遺構と、住居址と思われるものが一カ所検出されたとする。

遺物 第1図は、顔面把手付土器である。頸部から下に縄文を地文とし、隆線と彫刻的沈線が構成される。第2図1は、胎土に白色石粒と砂を多量に含む。太目の粘土紐を押し付けて隆起帯の区画をつくり、沈線・爪形・刻目・三叉文で、文様を構成する。深鉢形土器であるが、上部が欠損している。2は、1と胎土は同じである。三角の連続押引文で文様を構成する。把手付の土器であるが上下が欠損している。3は、口縁部の破片である。太い沈線で浮彫的に渦状文をつ

くり出し、文様を構成する。第3図1は、図上で復原したものである。上部は欠損している。胎土に白色石粒と砂粒を多量に含む、焼きはもろく、破片の接合が難しい。四条の隆線で大きく曲線状の文様を構成する。第3図2〜4は、表面採集品である。2は胎土に若干の繊維を含み、文様は撚糸文らしくみえるが不明瞭である。3・4は、2と胎土が似ているが、地文に縄文を施し、半截竹管で沈線文を施す。以上、第1〜3図1までは、縄文時代中期中葉の土器であるが、第3図2は縄文時代早期、3・4は同前期に属するものと思われる。そのほか縄文時代中期後半の土器があったとする。石器に、ヒスイ製の玉が出土している。

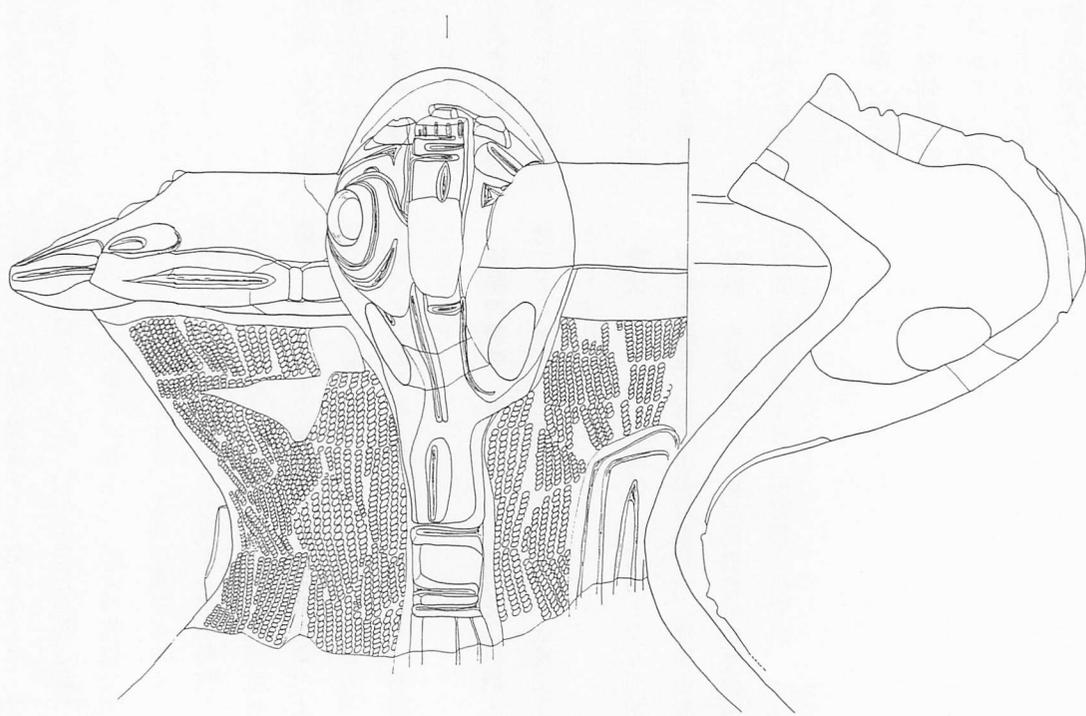
遺跡の特徴 資料は少なく縄文時代早期・前期と中期の重複した遺跡であるが、特に顔面把手付土器、大珠（玉）を出土した特異な遺跡として注目される。

現状 遺跡の主要部は、住宅地となり消滅した。

資料の所在 裾野市教育委員会、沼津市歴史民俗資料館 保管

文献 佐藤隆ほか「駿東郡裾野町桃園尾畑遺跡発掘調査報告書」

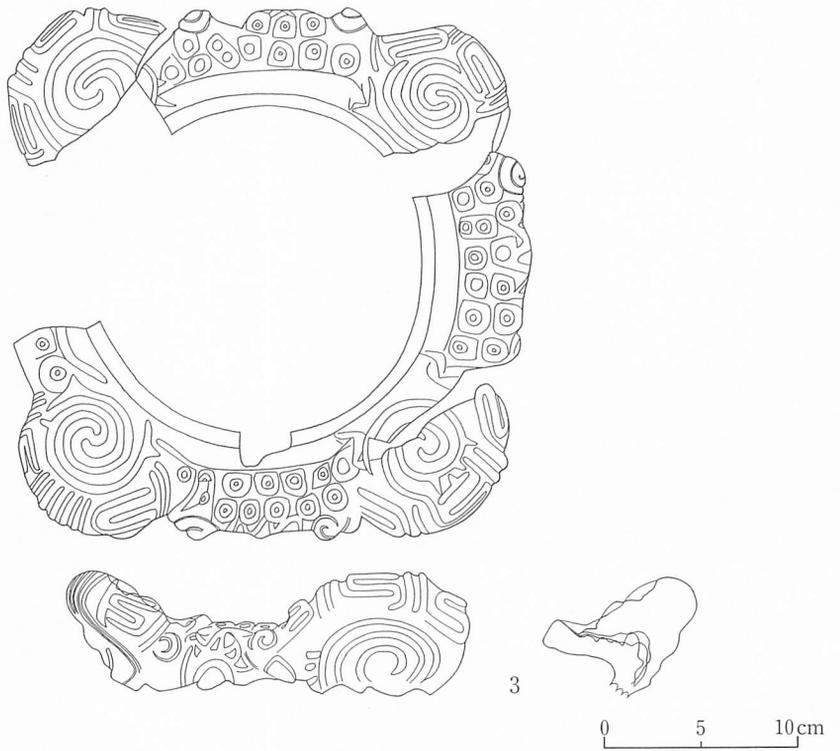
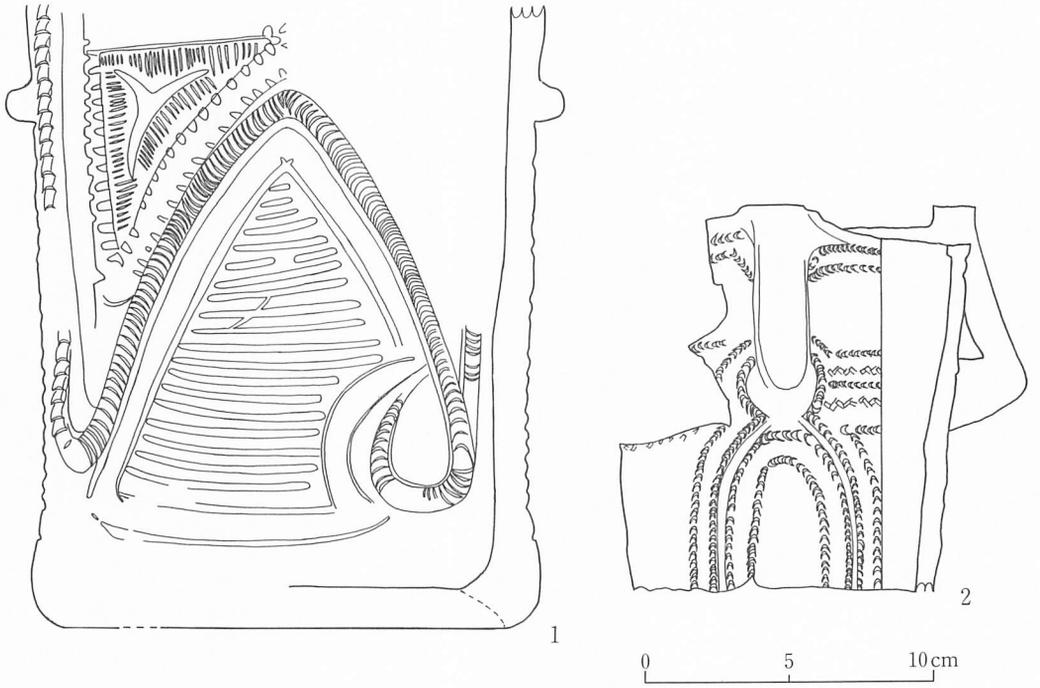
裾野郷土研究第4号 裾野郷土研究会 一九七〇



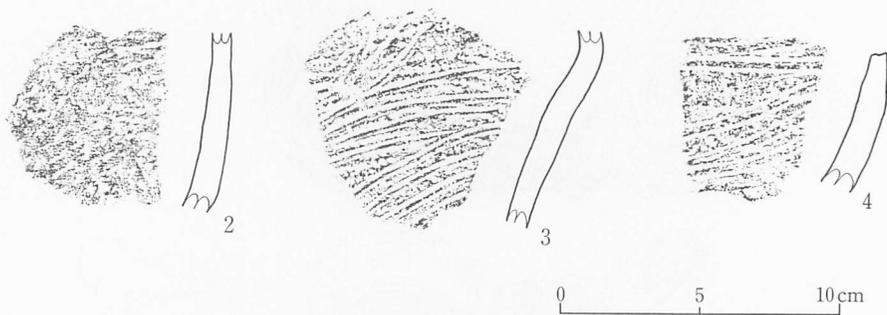
0 10cm

1

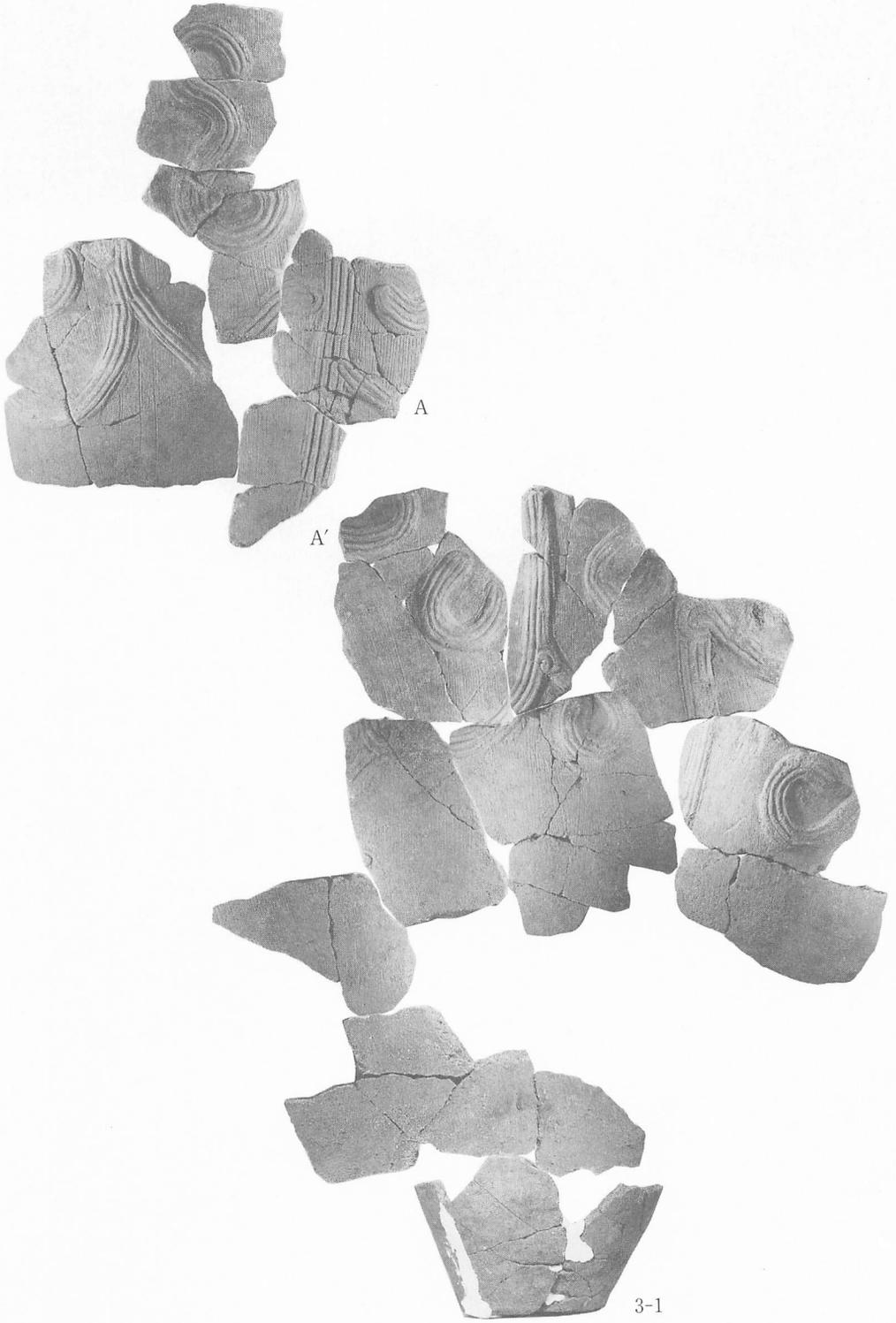
第1图 尾畑遺跡出土顔面把手付土器実測図



第2図 尾畑遺跡出土土器実測図



第3图 尾畑遺跡出土土器拓影



図版 1 尾畑遺跡出土土器

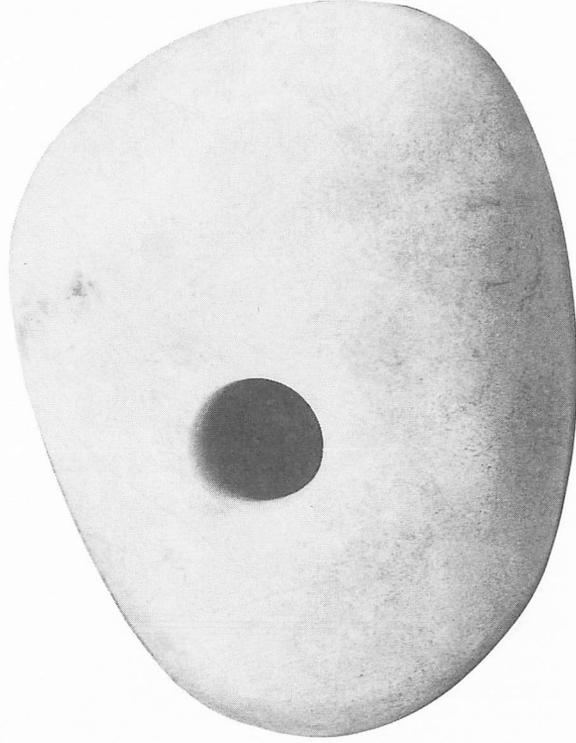


図版2 尾畑遺跡出土土器

(用語解説)

勝坂式土器 縄文時代中期前半の土器型式。神奈川県相模原市勝坂遺跡を標識遺跡とする。器形はキャリパー深鉢形、浅鉢、釣手土器、台付土器などがあり、口縁部に雄大な把手をもつもの、また把手に顔面がつくもの、体部から把手に蛇体文のつくものがある。分布は中部山岳地方を中心に関東西部に至る。

五領ヶ台式土器 縄文時代中期初頭の土器型式。神奈川県平塚市広川五領ヶ台貝塚を標識遺跡とする。器形は口縁部が外反、内湾する深鉢、浅鉢で、文様は細線文や三角印刻文を主体として胴部に縄文を施す細線文土器と、平行沈線文、弧線文、交互刺突文などがある。



球状石器



顔面把手付土器

1-1



細山遺跡遠望

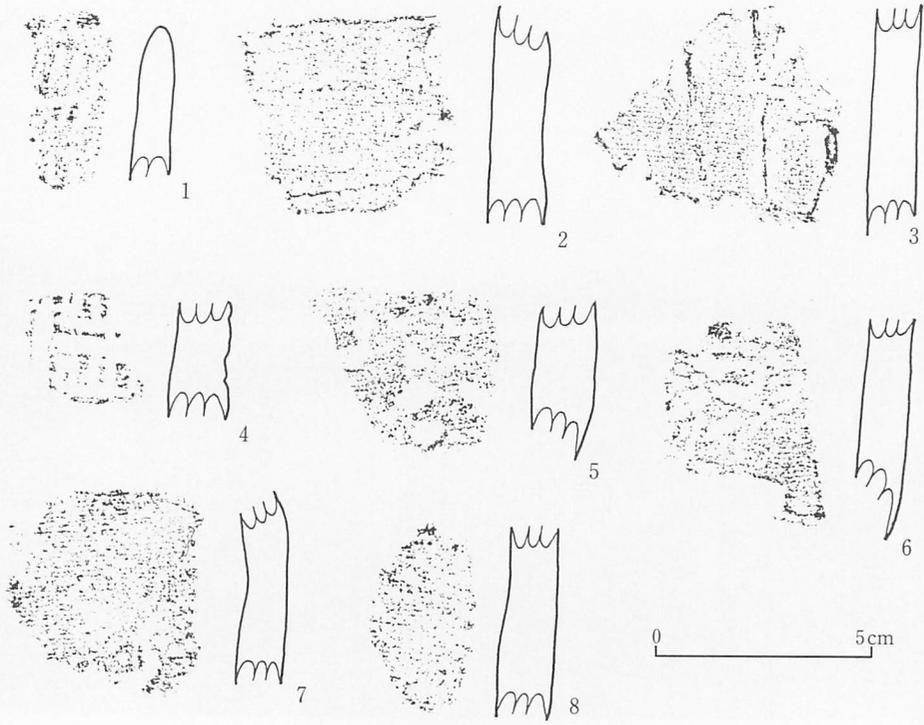
位置と立地 愛鷹山東麓の平坦部が広がった丘陵上、富沢細山の海抜一六五mのところに位置する。

発見と調査 富沢集落西側に広がる愛鷹山麓の丘陵上からは、土地の人によって古くから多量の土器片が出土することが知られていたが、細山地区もその一つである。昭和四〇年（一九六五）以降、芹沢充寛、佐藤隆、井上輝夫らによって踏査され、縄文時代遺跡として確認された。

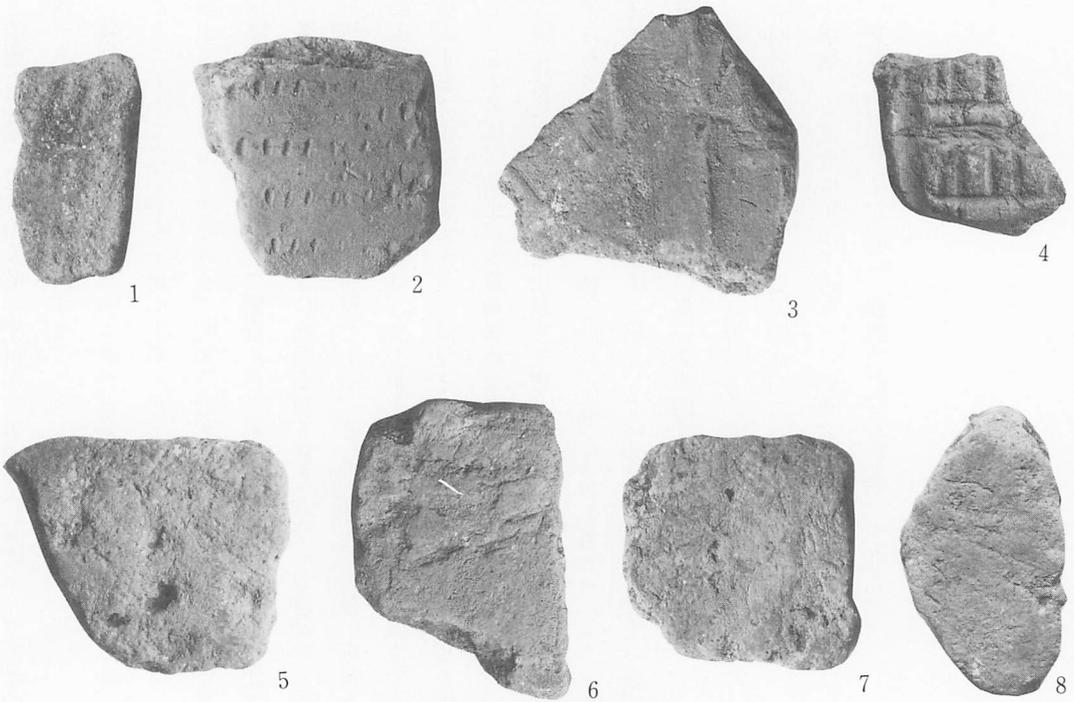
遺物 第1図1は、胎土に白色石粒と砂を含み、口縁部から縦にやや荒い縄文を施すが、不明瞭である。2は、胎土に少量の繊維を含む。絡条体圧痕文を施す。3は、2と胎土が同じで、微隆起線文で文様を構成する。4は、胎土に荒い砂粒を多量に含み、沈線で文様を構成する。5と8は、胎土に少量の繊維を含む土器片で、無文である。すべて縄文時代早期に属する土器片と思われる。第2図は、細山近辺で採集された釣手形土器で、縄文時代中期のものとされている。「裾野の文化財」では、香炉型土器と紹介している。尾畑遺跡出土の顔面把手付土器と共に、希少価値の高い美術的文化財ともいえる。

遺跡の特徴 採集された土器片から縄文時代早期の遺跡といえるが、中期の遺跡と重複している可能性がある。

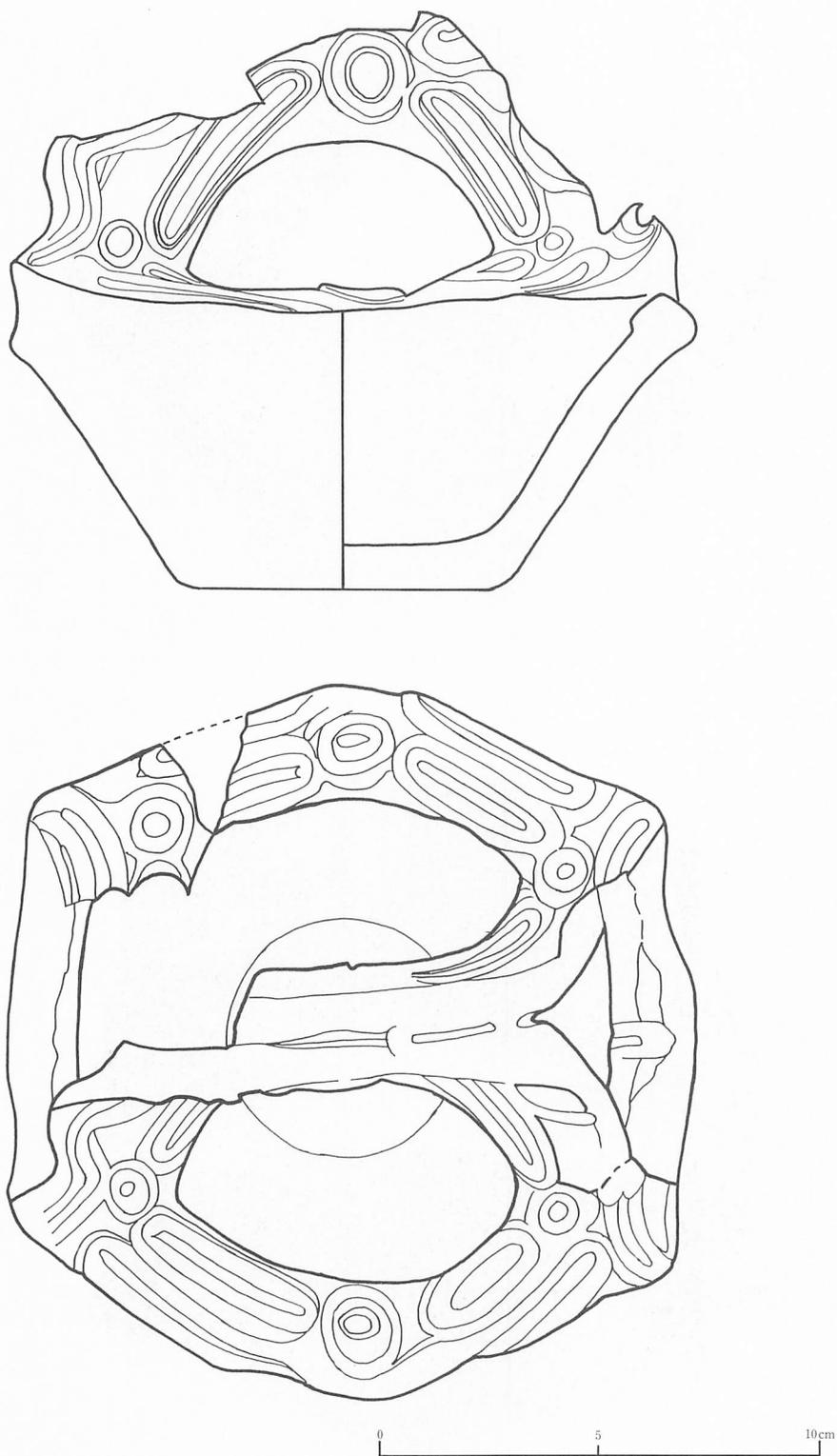
現状 大部分は畑地であり、一部東名高速道路で切断されている。
文献 「裾野の文化財」 裾野市教育委員会 一九八六



第1図 細山遺跡採集土器拓影



図版1 細山遺跡採集土器



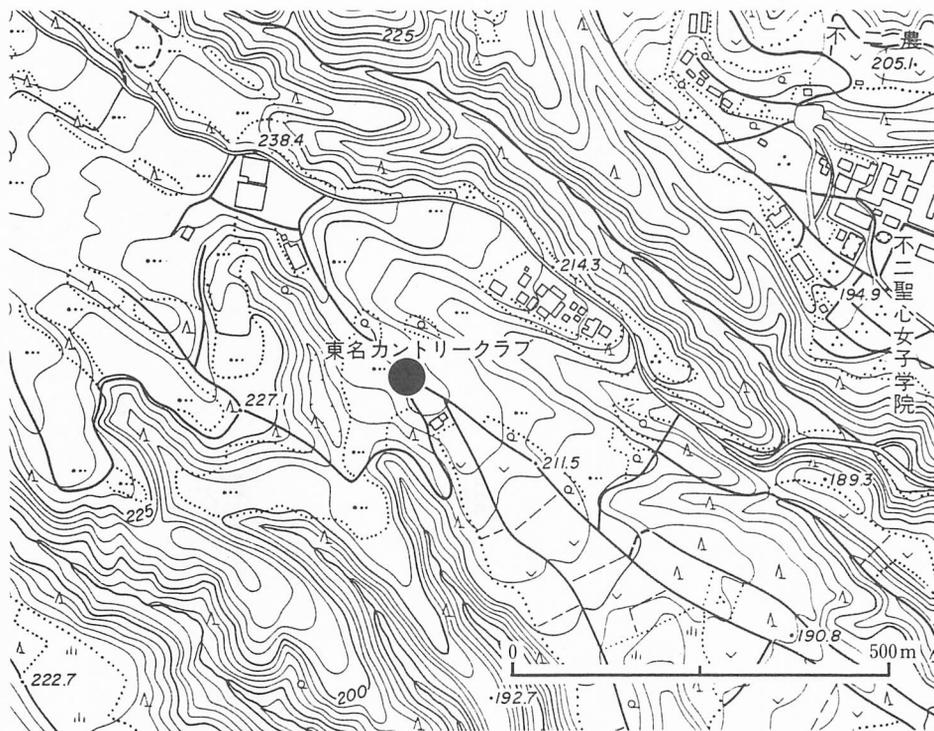
第2図 細山遺跡出土釣手形土器実測図



図版 2 細山遺跡出土釣手形土器

富沢内野山II遺跡
とみざわうちのさん

所在地 裾野市富沢字内野山



位置図

位置と立地 愛鷹山から東南の桃園、富沢地区へ延びた尾根は、海拔二三〇m付近から扇状に広がる広い平坦部となるが、この平坦部の^{かなめ}要の位置に本遺跡は位置する。

発見と調査 本遺跡は、昭和四〇年（一九六五）頃から、県立沼津商業高等学校郷土研究部が踏査し、その後、裾野郷土研究会の芹沢充寛らが踏査して、縄文時代の土器片を採集している。（内野山I遺跡 参照）

現状 畑地と一部山林となっている。

文献 富沢内野山I遺跡と同じ

とみざわうちのさん
富沢内野山Ⅲ・Ⅳ遺跡

所在地 裾野市富沢字内野山



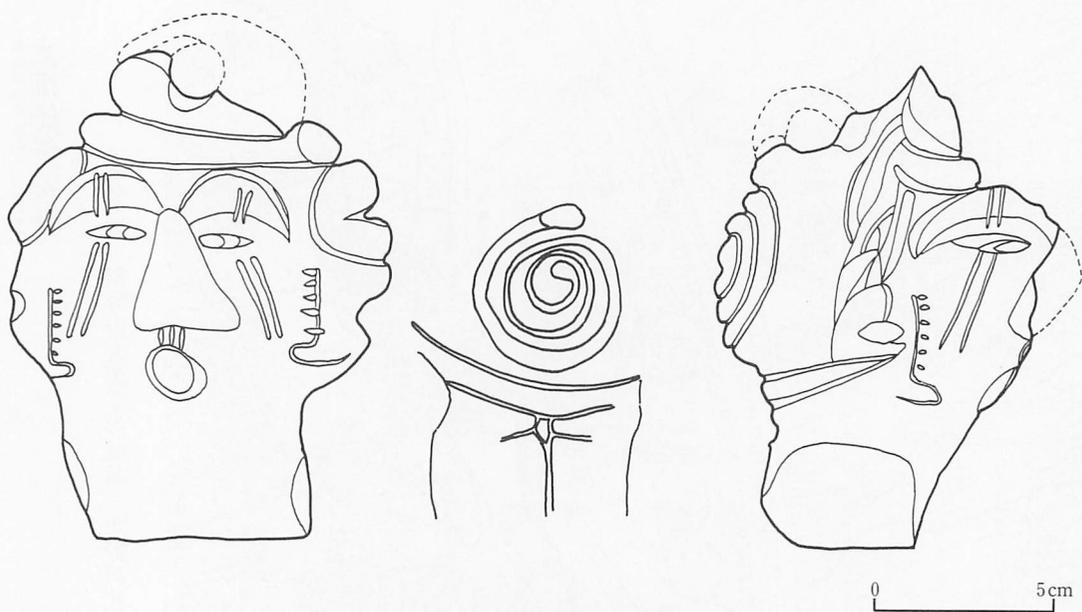
位置図

位置と立地 内野山Ⅳ遺跡は、内野山Ⅱ遺跡の東南方五〇〇mのところに位置し、同Ⅲ遺跡は、内野山Ⅳ遺跡の東南方四〇〇mのところに位置する。これらの遺跡の立地する愛鷹山尾根の末端に、顔面把手付土器を出した尾畑遺跡がある。

発見と調査 この両遺跡は、内野山Ⅰ・Ⅱ遺跡と同じように、昭和四〇年（一九六五）頃、県立沼津商業高等学校郷土研究部が踏査し、その後、芹沢充寛らが踏査して、縄文時代の土器片を採集している。

現状 現在は山林となっている。

文献 富沢内野山Ⅰ遺跡と同じ



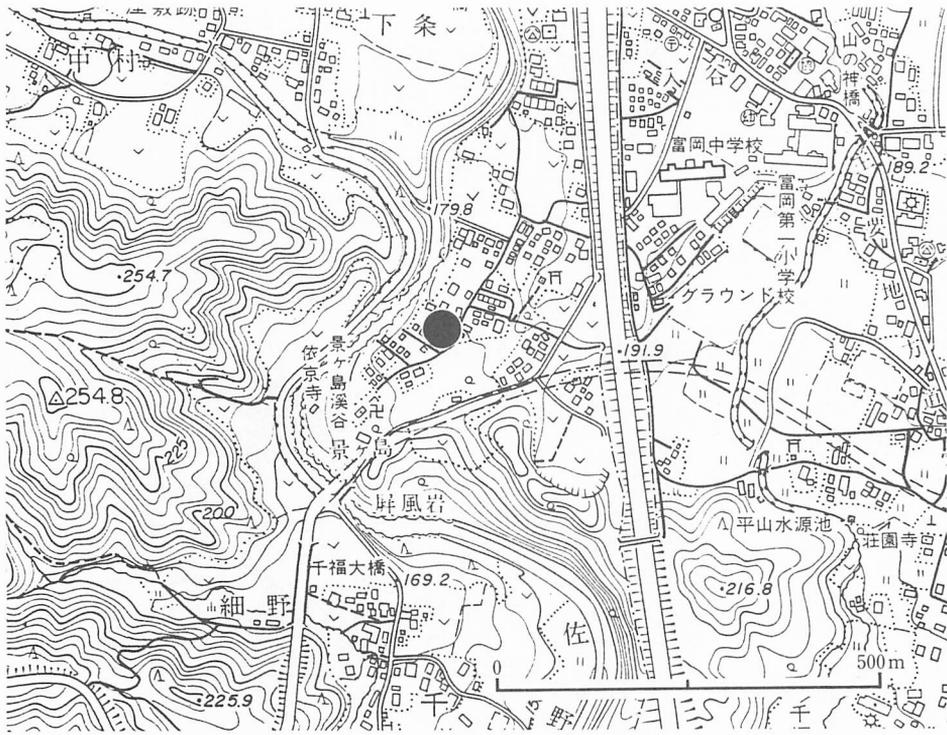
大畑熊野神社顔面土器実測図



大畑熊野神社顔面土器

景ヶ島東遺跡
けいがしまひがし

所在地 裾野市御宿字景ヶ島東四八七番地ほか



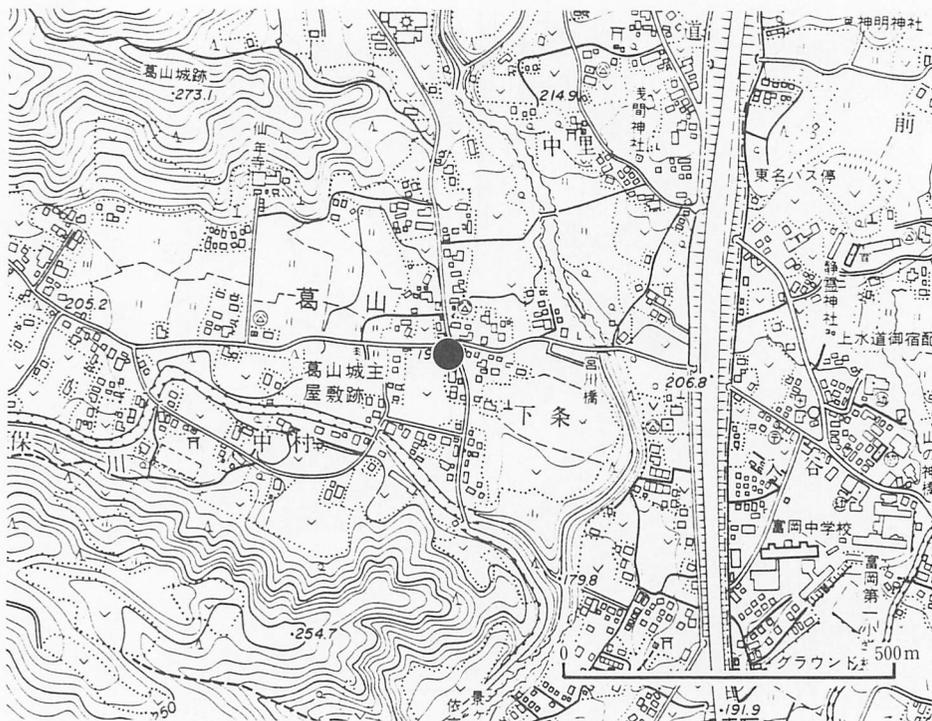
位置図

位置と立地 愛鷹山の東麓が千福細野地区で、佐野川により切断され、東側に台地状の地形が形成されているが、その台地地形の海拔一九〇m付近に位置する。この遺跡は、北方の上川、中里遺跡に続く、富士山麓の最も南に位置する縄文時代遺跡と考えられる。

発見と調査 昭和五〇年代に、芹沢充寛、井上輝夫らによって踏査され、縄文時代の土器と、古墳時代の土師器片を採集している。

現状 大部分が住宅地となっている。

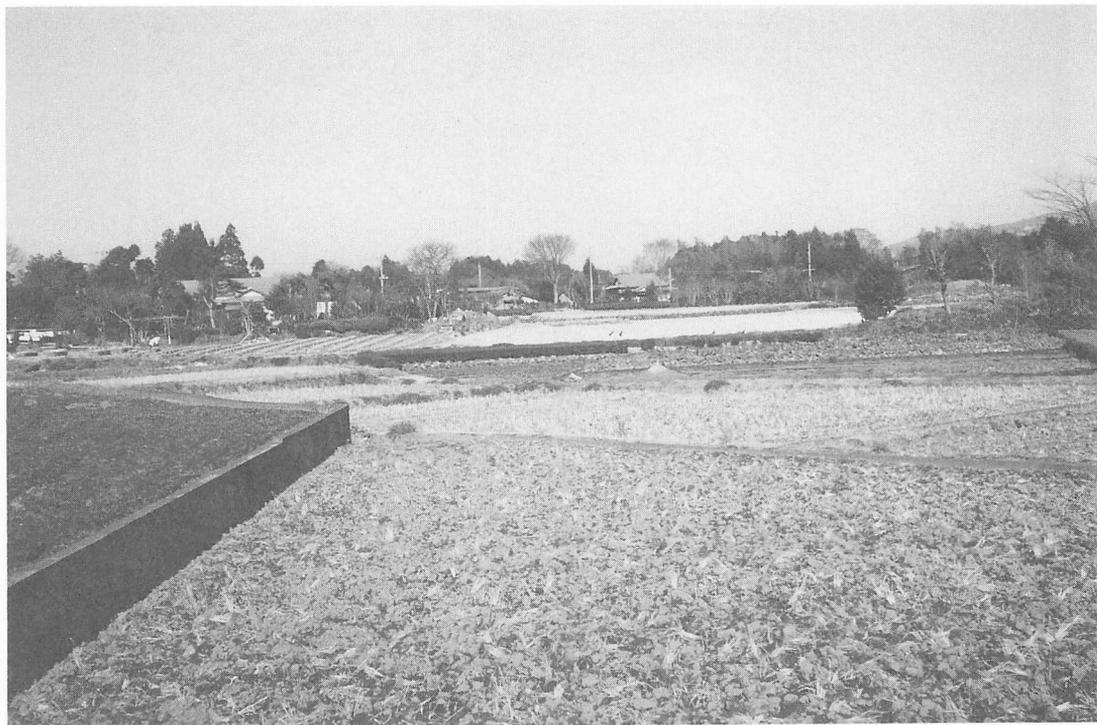
所在地 裾野市葛山字下条五七〇番地ほか



位置図



遺跡範囲図

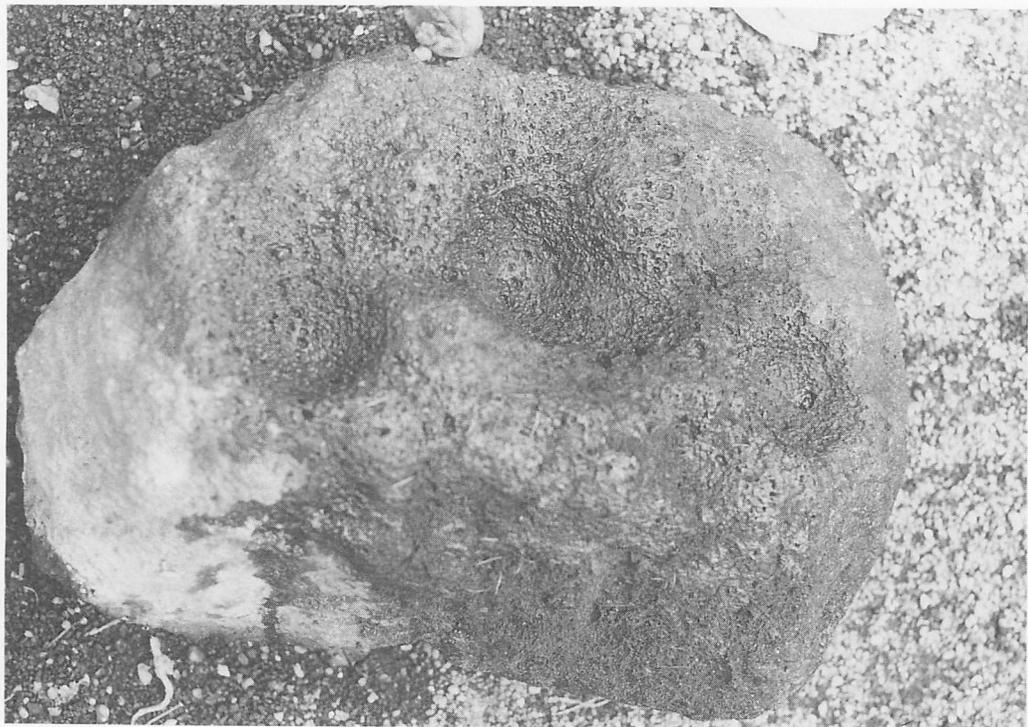


下条遺跡遠望

位置と立地 葛山は愛鷹山から東へ延びる愛宕山（条山）尾根と、南の琴比羅山尾根にはさまれた入谷地形をなしており、東へ扇状に開けて末端は佐野川の深い溪流に区切られている。入谷の南側には、琴比羅山尾根の裾部に沿って、常時、水流のある大久保川が流れ、佐野川に合流している。葛山の入谷には、西側の愛鷹山に入る谷間より東側の佐野川に向かって、上城、中村、下条と連続した集落が形成されているが、この下条区の字北村、辻、馬場地区に、土器、石器の出土する地点があり、これらを総括して下条遺跡とした。

発見と調査 昭和四〇年代、ここに古くからある中世の葛山居館跡内の北西隅において、畑の耕作中、土器、石器類を発見しており、また辻区においても、工事中、土器片が出土し、馬場区では以前から土器片の出土することが知られていた。平成二年（一九九〇）、葛山居館跡内B号井戸址の発掘調査中、排土から土器片が検出されている。

遺物 すべて採集されたものである。図の1は、胎土に若干の砂を含み焼き締まる。表面に斜行の貝殻腹縁による条痕文を施し、裏面は横走の頭著な条痕の整形がみられる。2は、胎土に白色石粒を含み、よく焼き締まる。斜行の条文が施される。1は縄文時代早期後半の条痕文土器と思われるが、2は時期不明である。3～8は、胎土に頭著な白色石粒を含み、かつ砂目が多く、内外面ともざらつく。隆起線、粘土紐の貼付、沈線によって文様が構成される。10には、ハの字の連続文を施す。12は、口縁下に二本の平行沈線を入れる。9・11・13は、無文の口縁部で、9・11は大きく内側に湾曲し、うち11は山形口縁となるらしい。13は外方に大きく開き、口縁は折返して平縁帯をつくる。

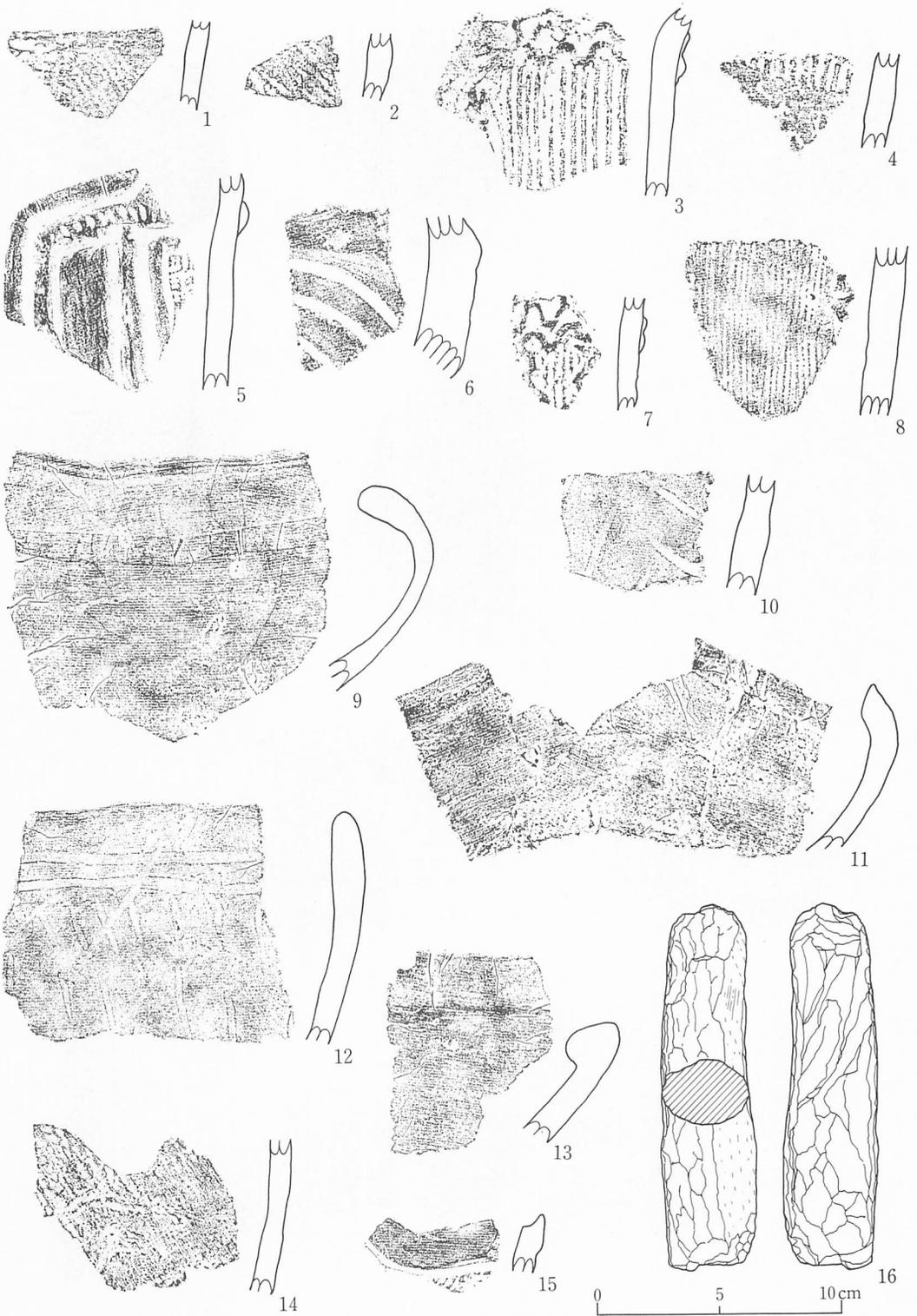


一色原遺跡出土凹石（長谷川博宅庭）

9～13までは、縄文時代中期後半に属するものと思われる。14は、やや薄手で、胎土に白色石粒を含み、荒い砂目でよく焼き締まる。地文に縄文を施し、その上から不連続な沈線でナデつけている。15は、胎土に多量の白色石粒を含み、砂目が多い。硬く焼き締まる。内外面とも研磨され赤褐色を呈し、部分的に黒斑がみられる。沈線が施される。14・15は、縄文時代後期の土器片と思われる。16は、棒状の打製石斧と思われる。石質は安山岩。

遺跡の特徴 本遺跡のすぐ北側に葛山一色原遺跡があり、佐野川右岸の台状地に形成された遺跡の一つとしてよからう。縄文時代早期後半と中期から後期に連続する遺跡と考えられる。

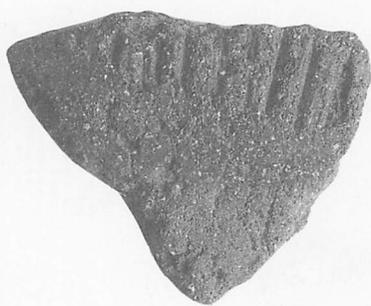
現状 住宅地と水田、畑地となっている。



下条遺跡採集土器拓影・石器実測図



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

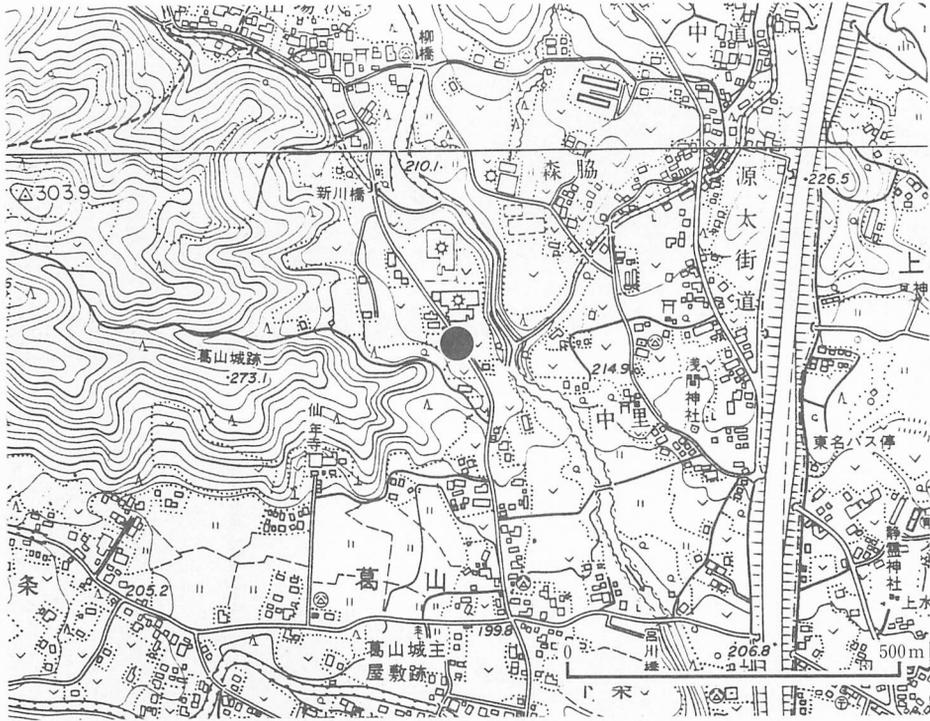


16

下条遺跡採集土器・石器

一色原遺跡

所在地 裾野市葛山字一色原一〇九一番地ほか



位置図



遺跡範囲図



一色原遺跡近景

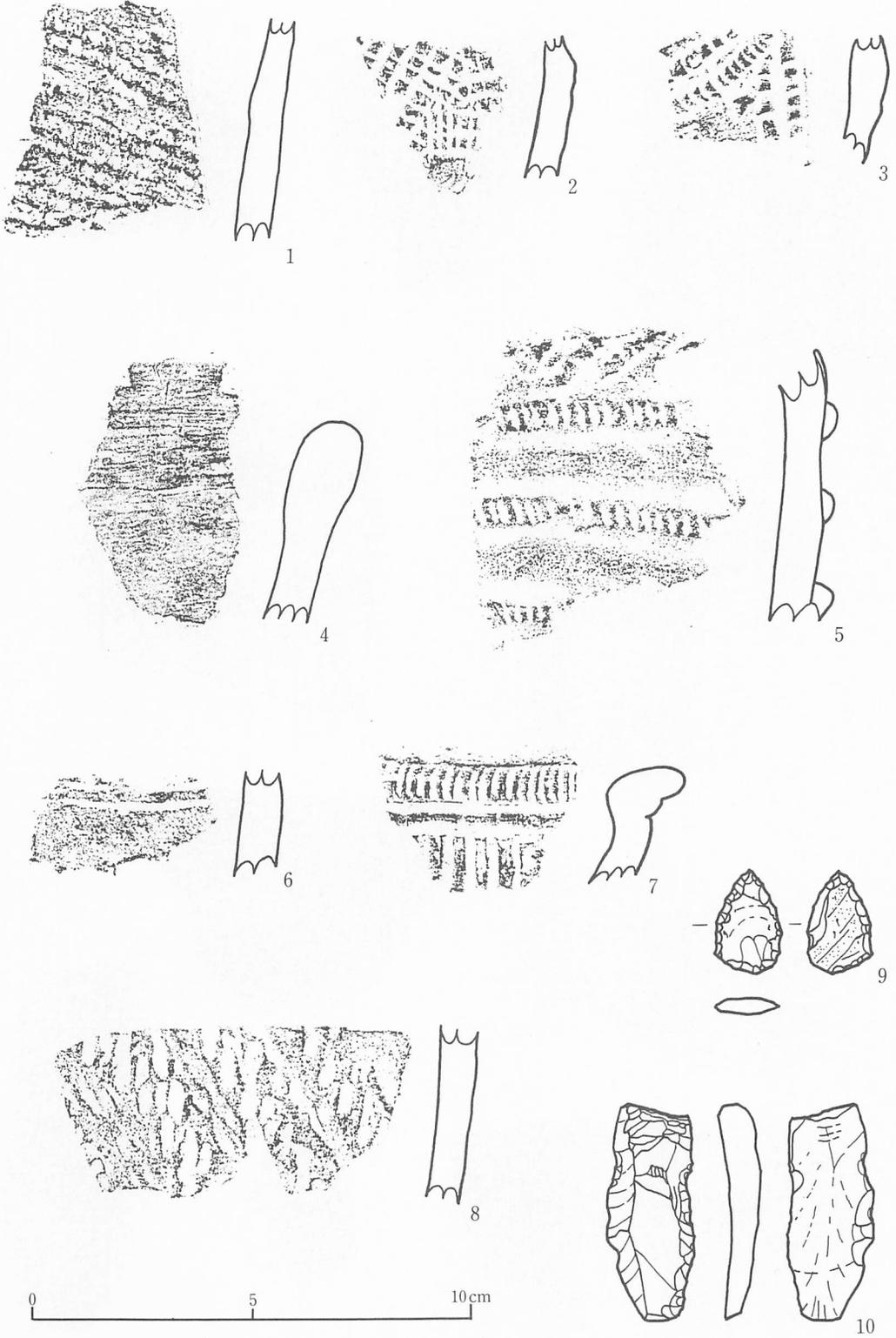
位置と立地 愛鷹山から東方へ延びる尾根の末端が、いったん切れて、東側の佐野川との間に、一色原という狭い台状地形が形成されているが、本遺跡は、この台状地形の海拔二一四mのところの位置している。

発見と調査 この一色原から土器片の出土することは、土地の人によって古くから知られていたが、昭和四〇年代の後半から、芹沢充寛、瀬川裕市郎らによって踏査されている。

遺物 すべて表面採集されたものである。図の1は、胎土に若干の白色石粒を含み、裏面は顕著な赤褐色で硬く焼き締まる。斜行の縄文が施される。2～4は、粘土紐を貼りつけ、その上を半截した竹管で、押しきした連続の爪形文を施す。5は、爪形文と沈線で文様を構成する。6は、口縁部で無文、7は、二条の平行沈線を施す。8は、不連続な沈線で文様を構成する。2～4までは縄文時代前期、5・6は、同中期、7・8は、同後期に属するものと思われる。図の9・10は石器で、9は黒曜石製の石鏃、10は硬質頁岩の剝片の片側に、細かい加工をして刃を作り出している。

遺跡の特徴 資料は少ないが、縄文時代前期、中期、後期の重複した遺跡としてよからう。

現状 工場敷地、住宅地、芝畑となっている。



一色原遺跡表面採集土器・石器実測図



1



2



3



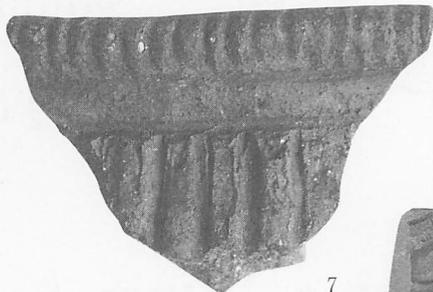
4



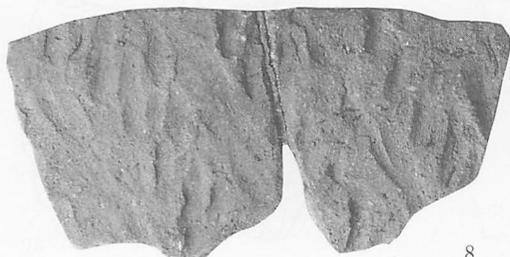
5



6



7



8



9

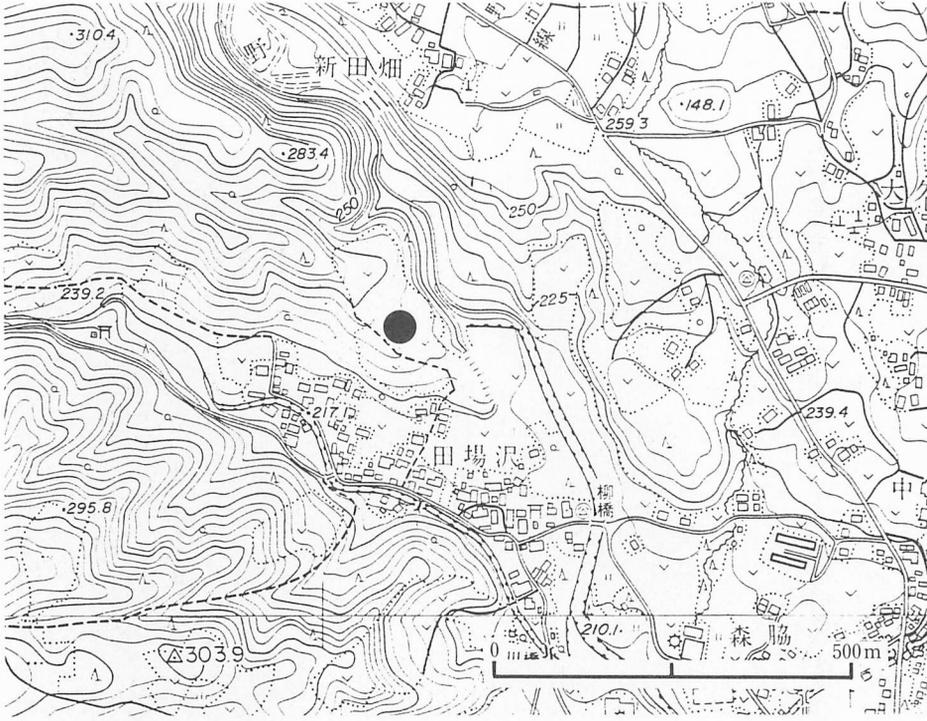


10

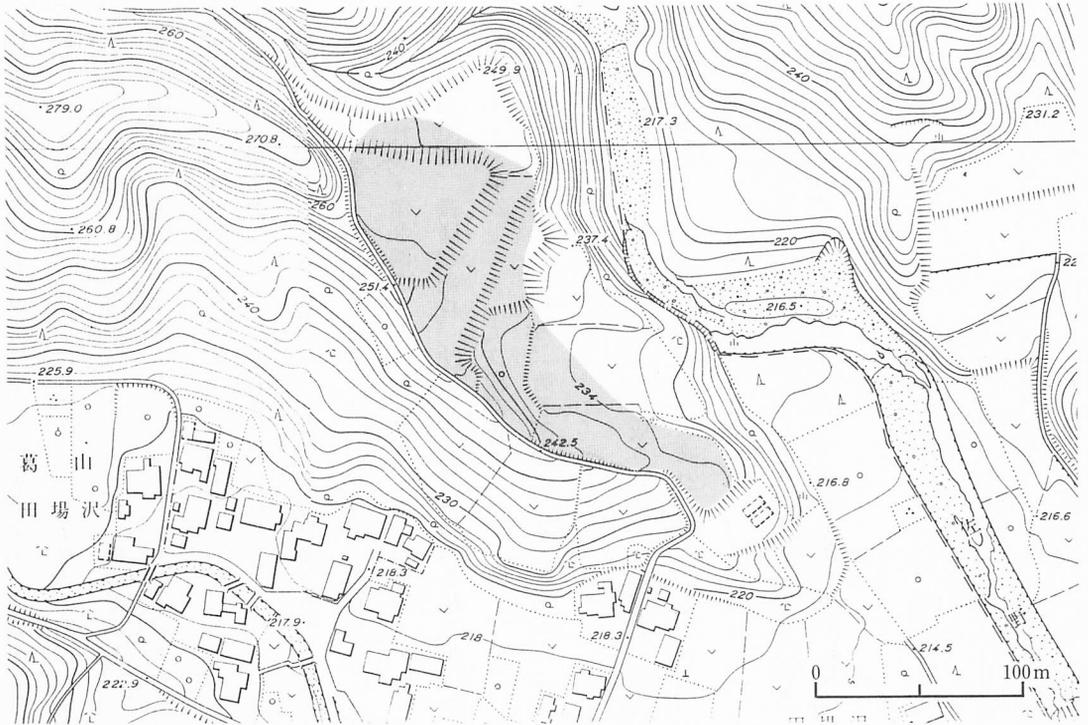
一色原遺跡表面採集土器・石器

40 田場沢裏山遺跡

所在地 裾野市葛山字田場沢一〇〇一番地ほか



位置図



遺跡範囲図

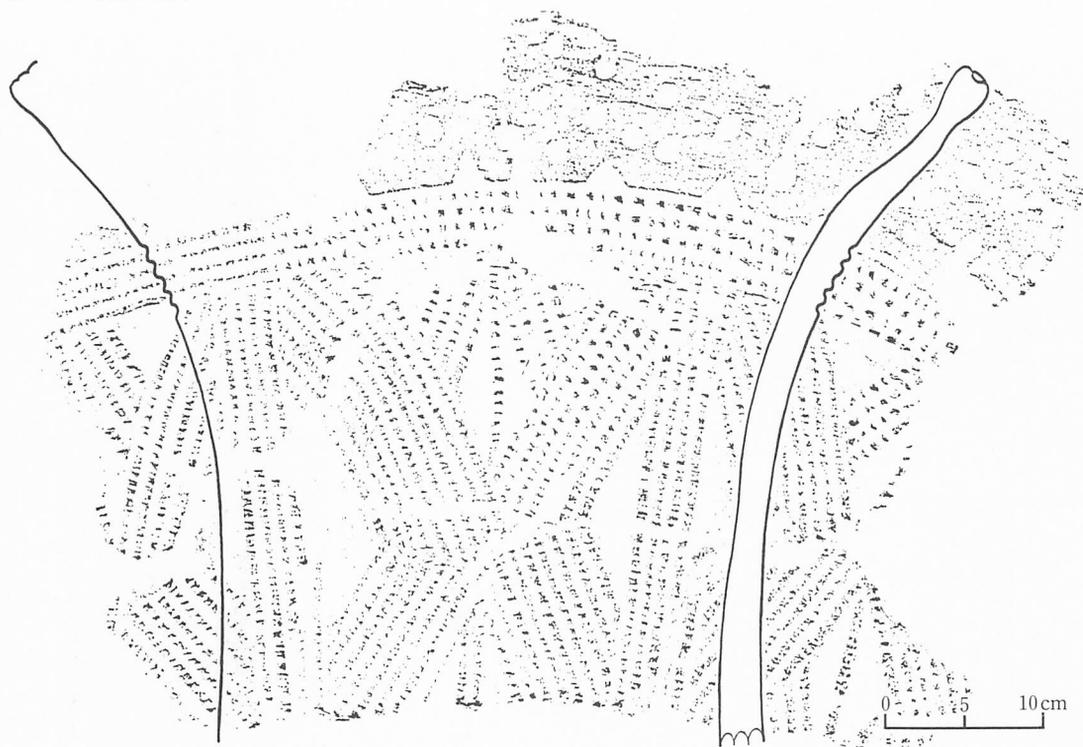


田場沢裏山遺跡遠望

位置と立地 愛鷹山から東方に延びる尾根の末端、田場沢集落の北側裏山、海拔二五〇mの丘陵上に位置する。北東側に佐野川、南側に田場沢の沢谷に挟まれ、丘陵上は小さい平坦部が続いている。

発見と調査 本遺跡は、土地の人によって古くから土器や石器が出土することが知られていたが、昭和四〇年代の後半から中村孝一、芹沢充寛、瀬川裕市郎らによって踏査されている。

遺物 図に示した土器、石器は、すべて表面採集されたものである。第2図4は、縄文と楯円押型文の土器で、縄文時代早期前半に属するものと思われる。第2図5～26、第3図1～24、第4図1～20、第5図1～18までは、微隆起細線、沈線文、刺突文、絡条体圧痕文、貝殻の腹縁による条痕などによって文様が構成される土器で、縄文時代早期後半に属するものと思われる。第5図19は、隆帯に押捺の連続刻み文をつけたもの、第6図2～18までは、薄手またはやや薄手で、焼きは硬い。刺突文、沈線文等で文様が構成される。この土器も縄文時代早期後半に属するものと思われる。第6図21、第7図1～11は、幅広い沈線、羽状の縄文で文様が構成されるもの、第7図12～14は、竹管を半截した器具で押引して爪形文を施したもの、第7図15～17は、地文に縄文を施したもの、第7図18～25、第8図1～3は、細かい連続した爪形文で文様を構成する。第8図5～8は、沈線文に円文をはり付けて文様を構成し、口縁に連続突起帯をつけ、その間に円浮文を置く。第9図1～5は、地文に縄文を施し、隆起帯に押捺文を入れる。第9図3は、小形壺で斜行の荒い縄文を施す。以上の土器は、縄文時代前期に属するものと思われる。第9図4、7～15までは、沈線文を



第1図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影

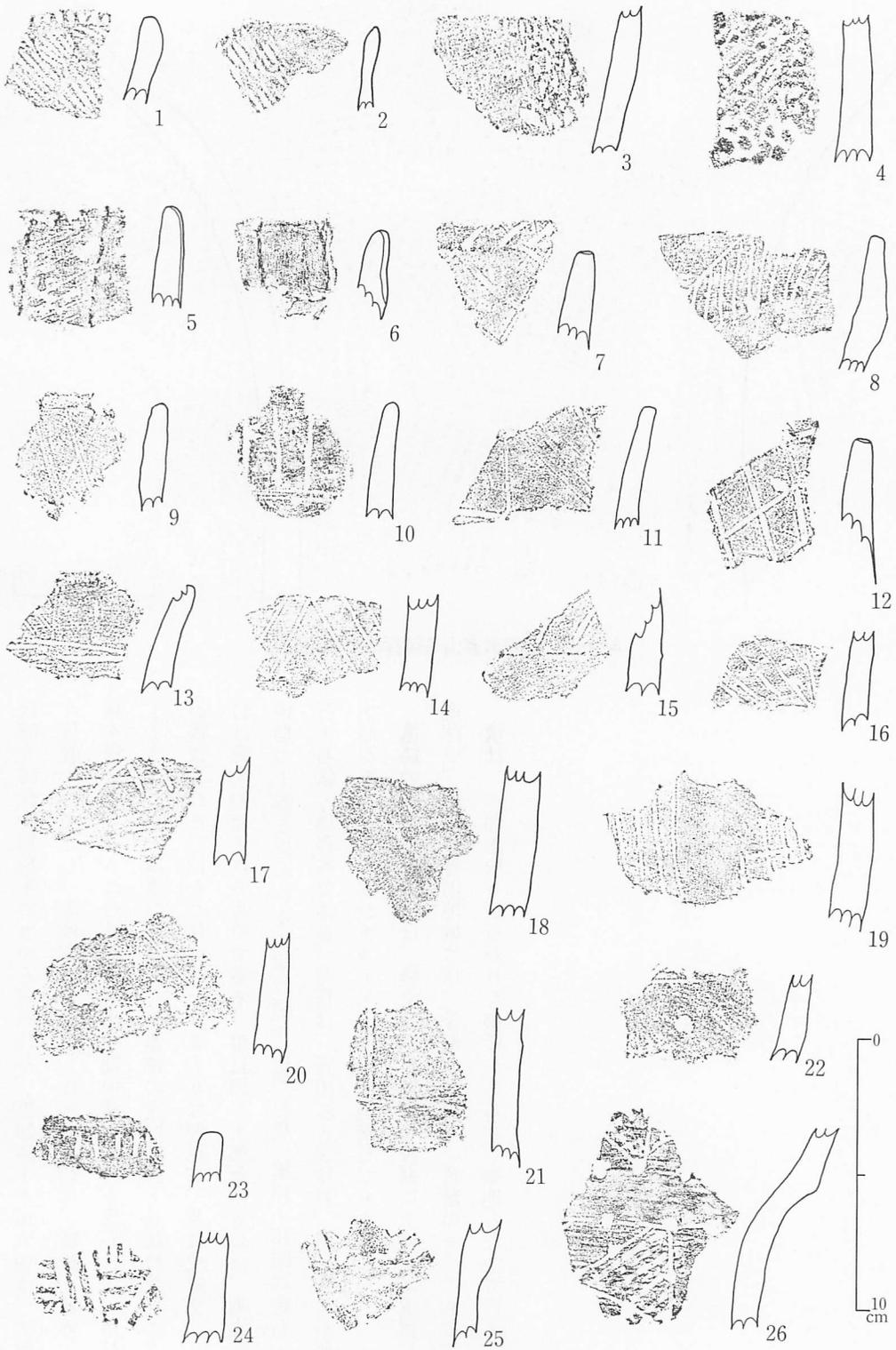
主体として文様を構成する土器で、胎土に雲母を含んでいる。これらは縄文時代中期前半のものと思われる。第10図1～16・19は、半截した竹管で押しきし、各種文様を構成したもの、15は、隆線と沈線で文様を構成する。これらは縄文時代中期中葉の土器と思われる。第11図1～3は、やや薄手の土器で、不連続の荒い沈線と点状の沈線で文様が構成される。12もこれに近い。4～6は押点文、8は沈線文、9・11は縄文の施されるものである。第11図の大部分のものは、縄文時代後期の土器と思われる。第12図は打製石斧、第13～15図は磨石・凹石・石鏃・搔器等である。石質は、安山岩・玄武岩、第15図の右側の小形石器は、4・5がチャート、ほかは黒曜石である。

遺跡の特徴

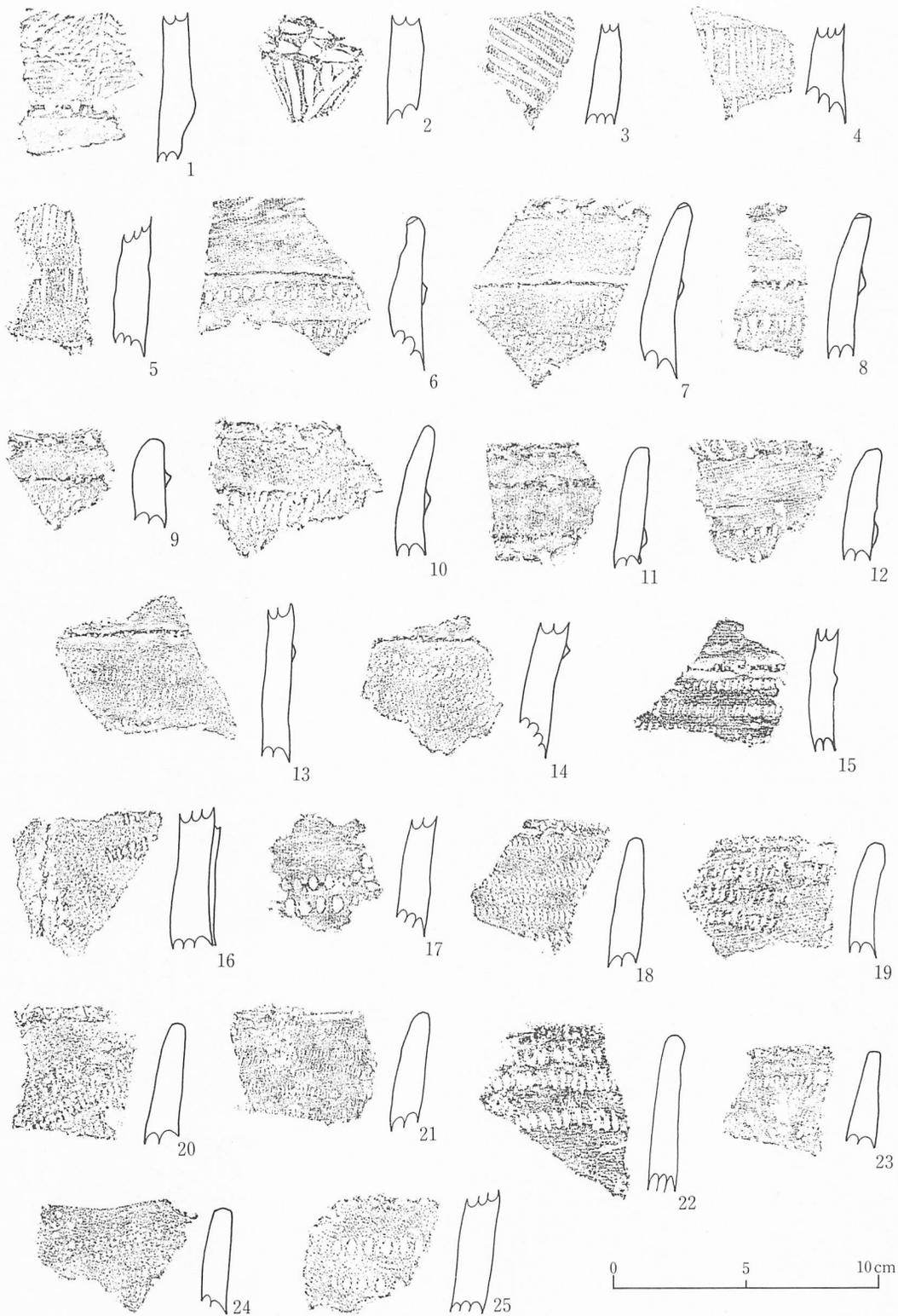
本遺跡は、縄文時代早期から後期にまで及ぶ重複した遺跡で、特に裾野市地域では、後期の数少ない遺跡の一つである。

現状

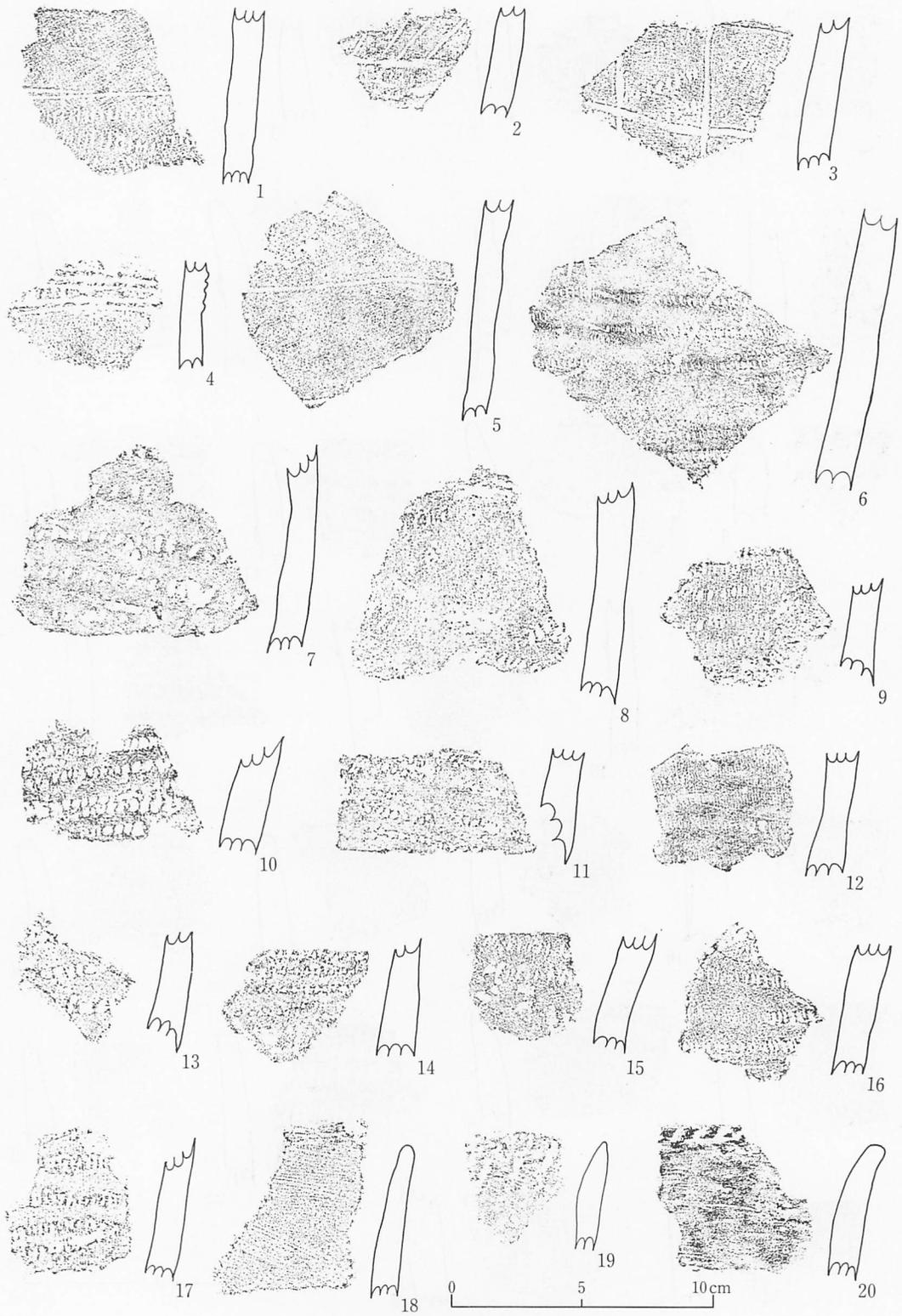
一部土取りが行われた個所があるが、畑地となっている。



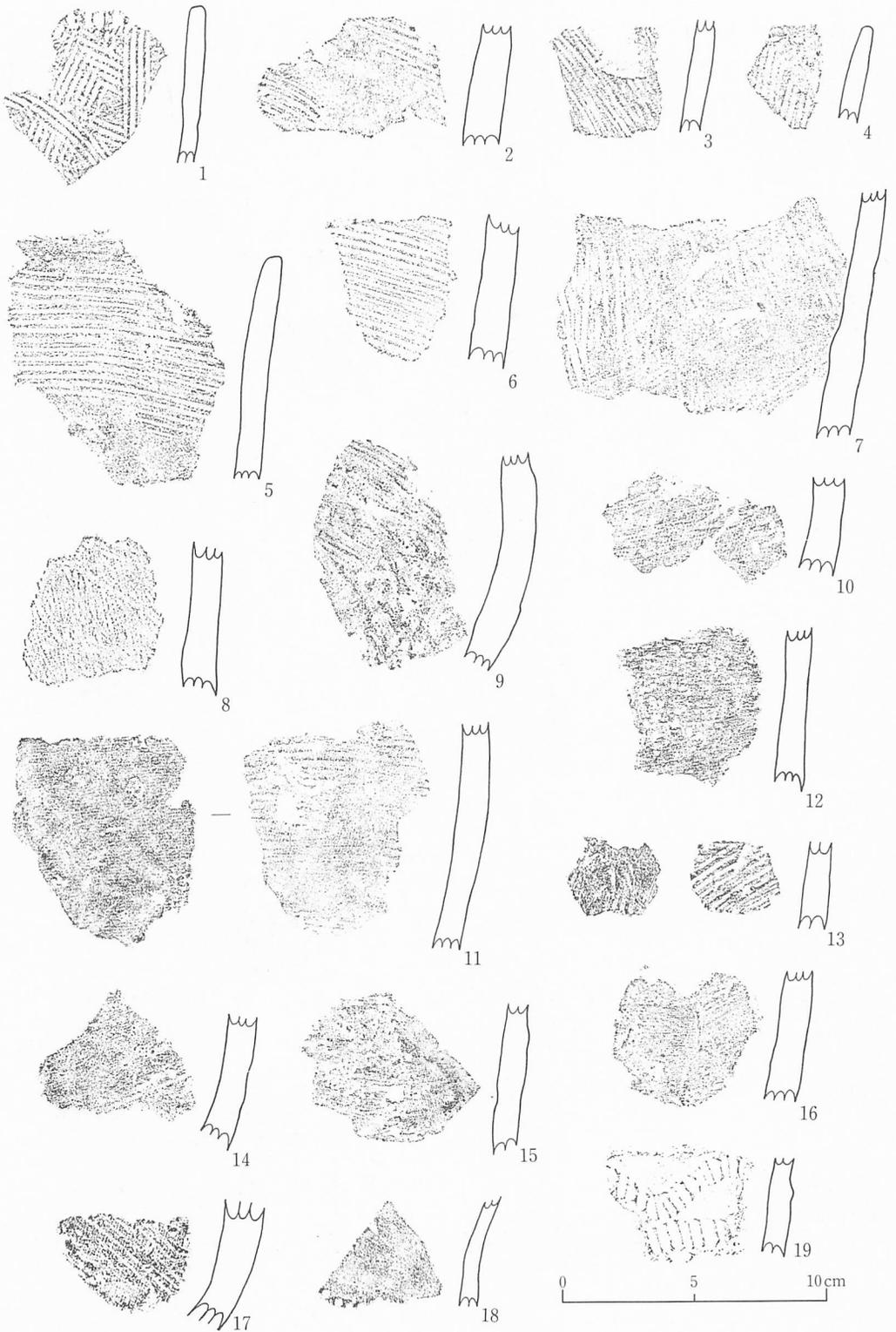
第2図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



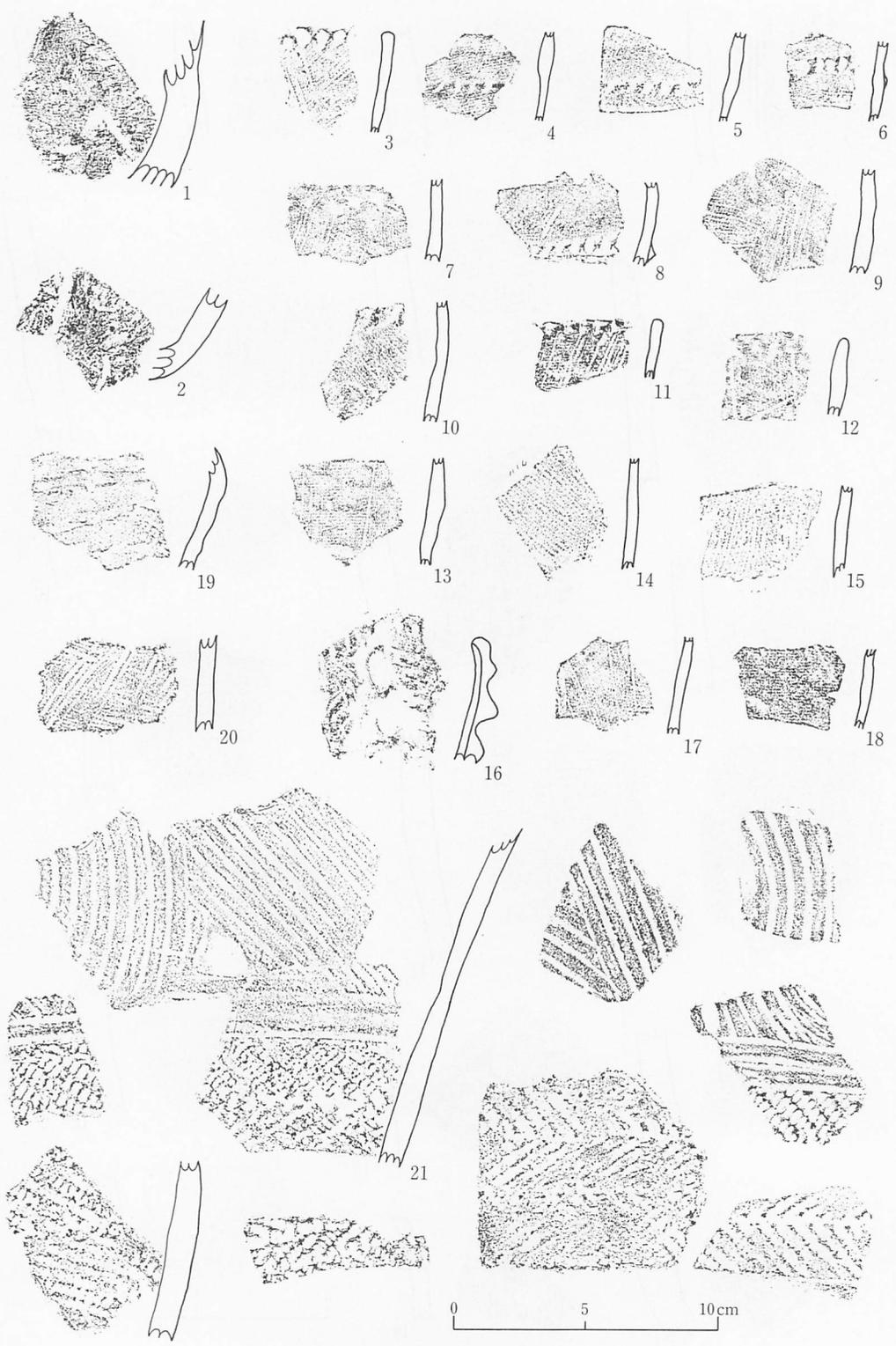
第3図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



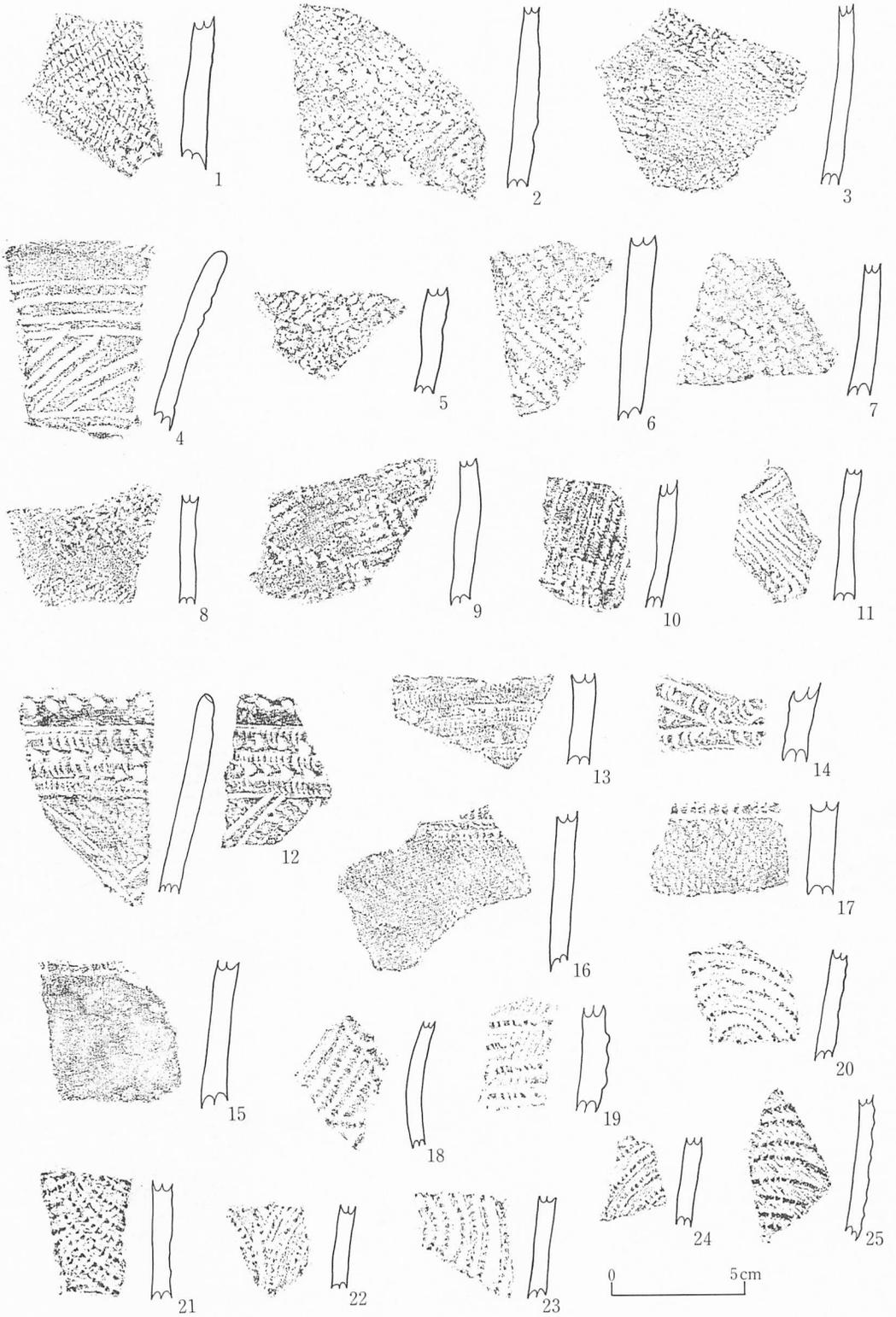
第 4 图 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



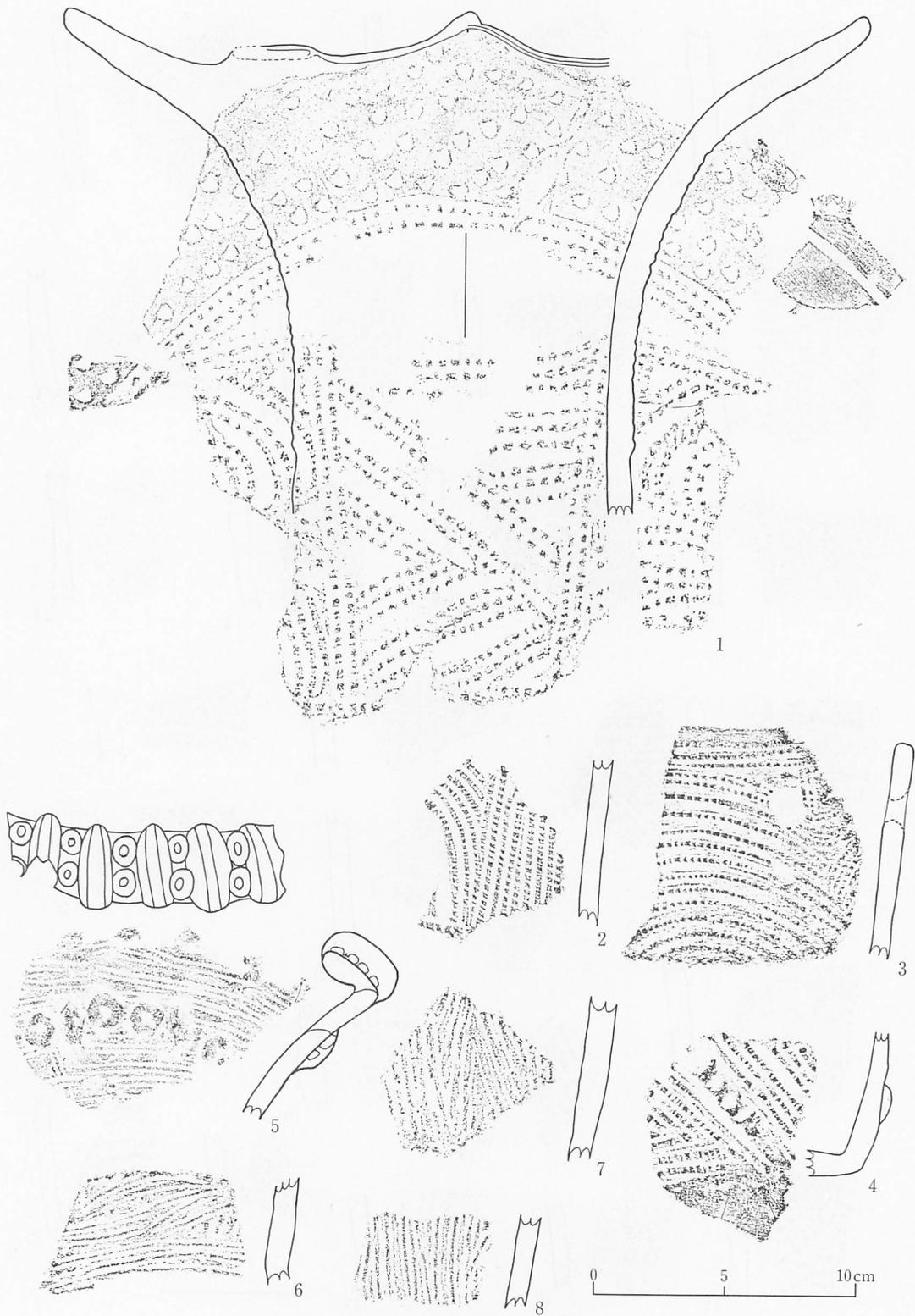
第5図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



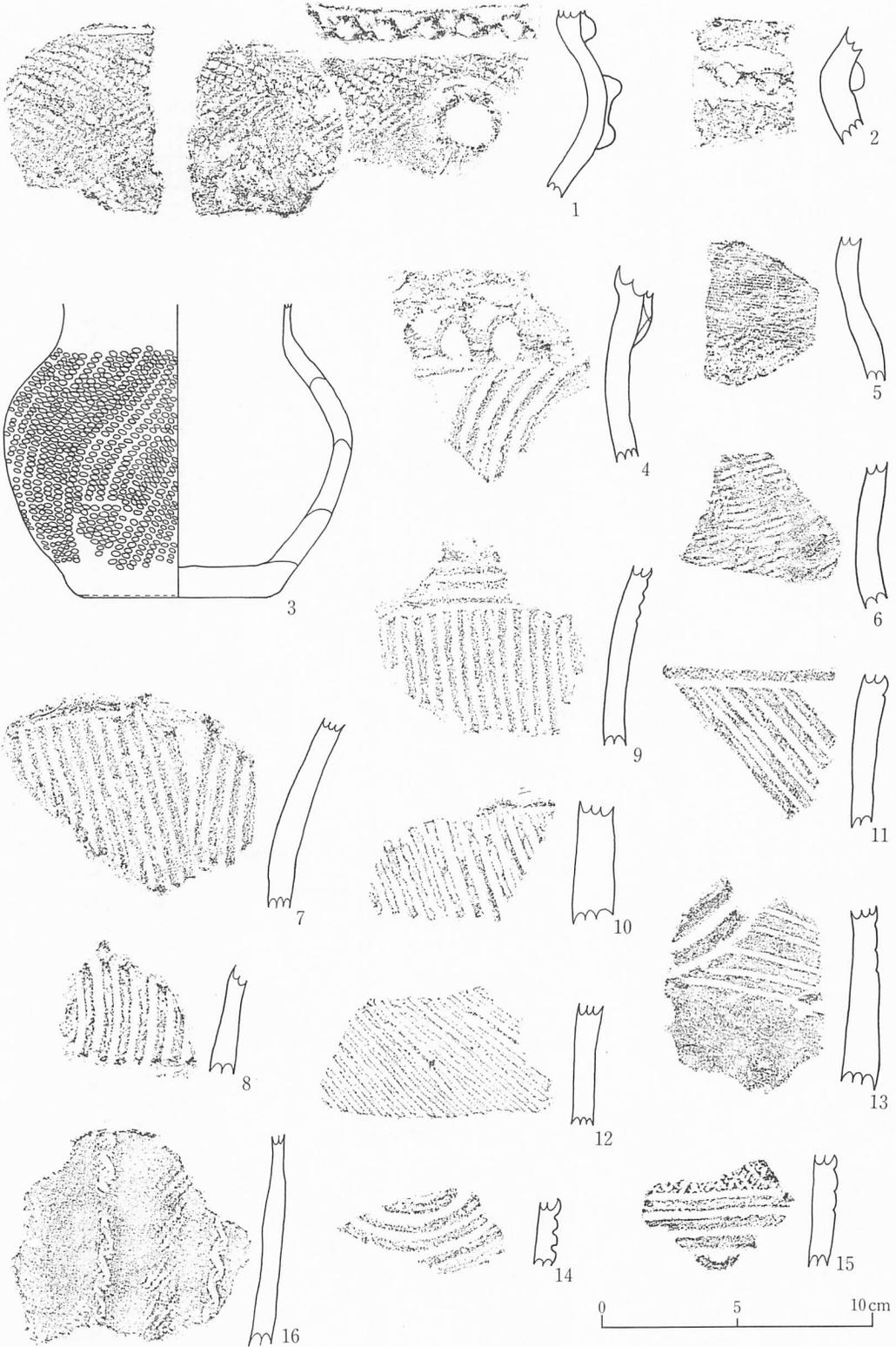
第6図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



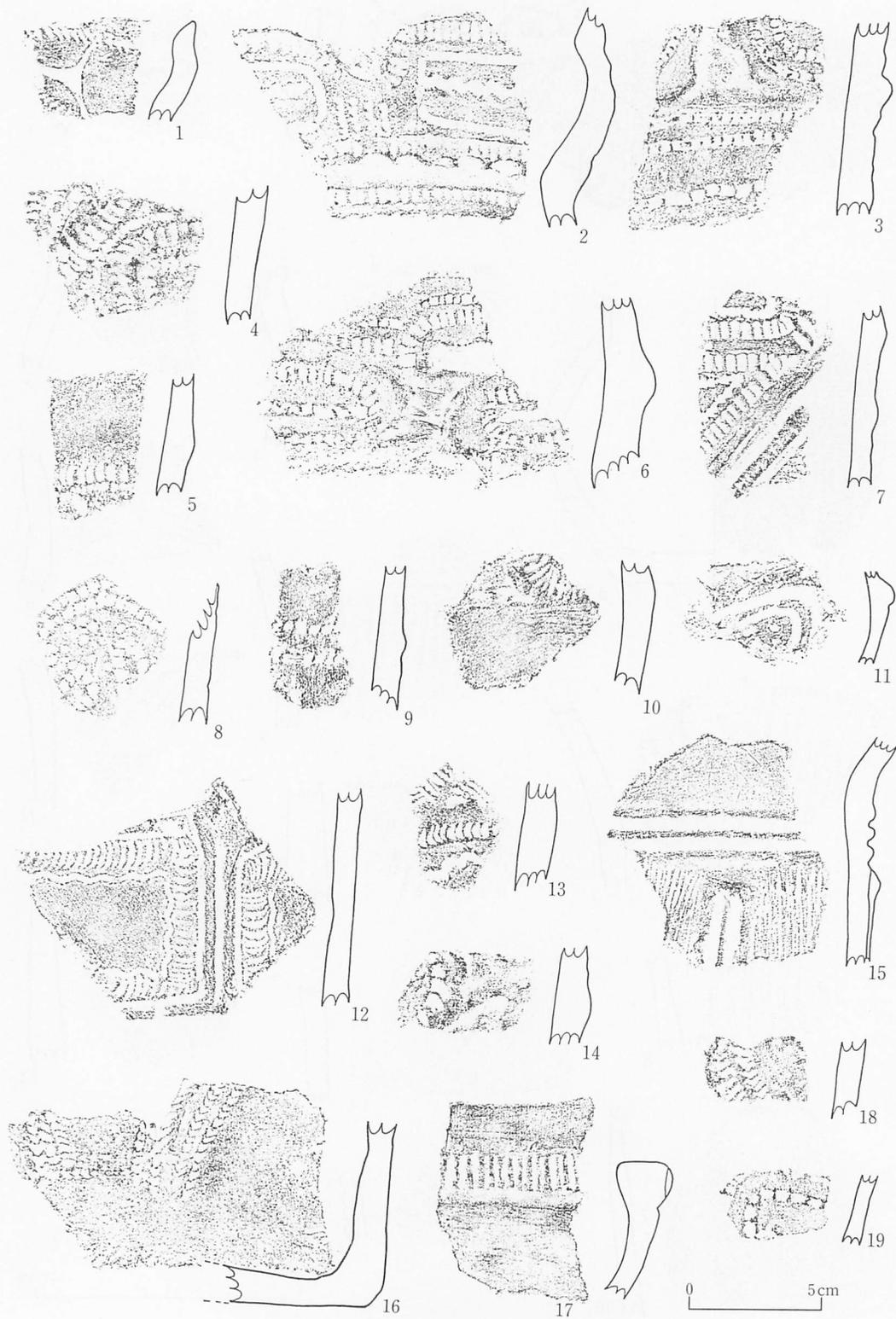
第7図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



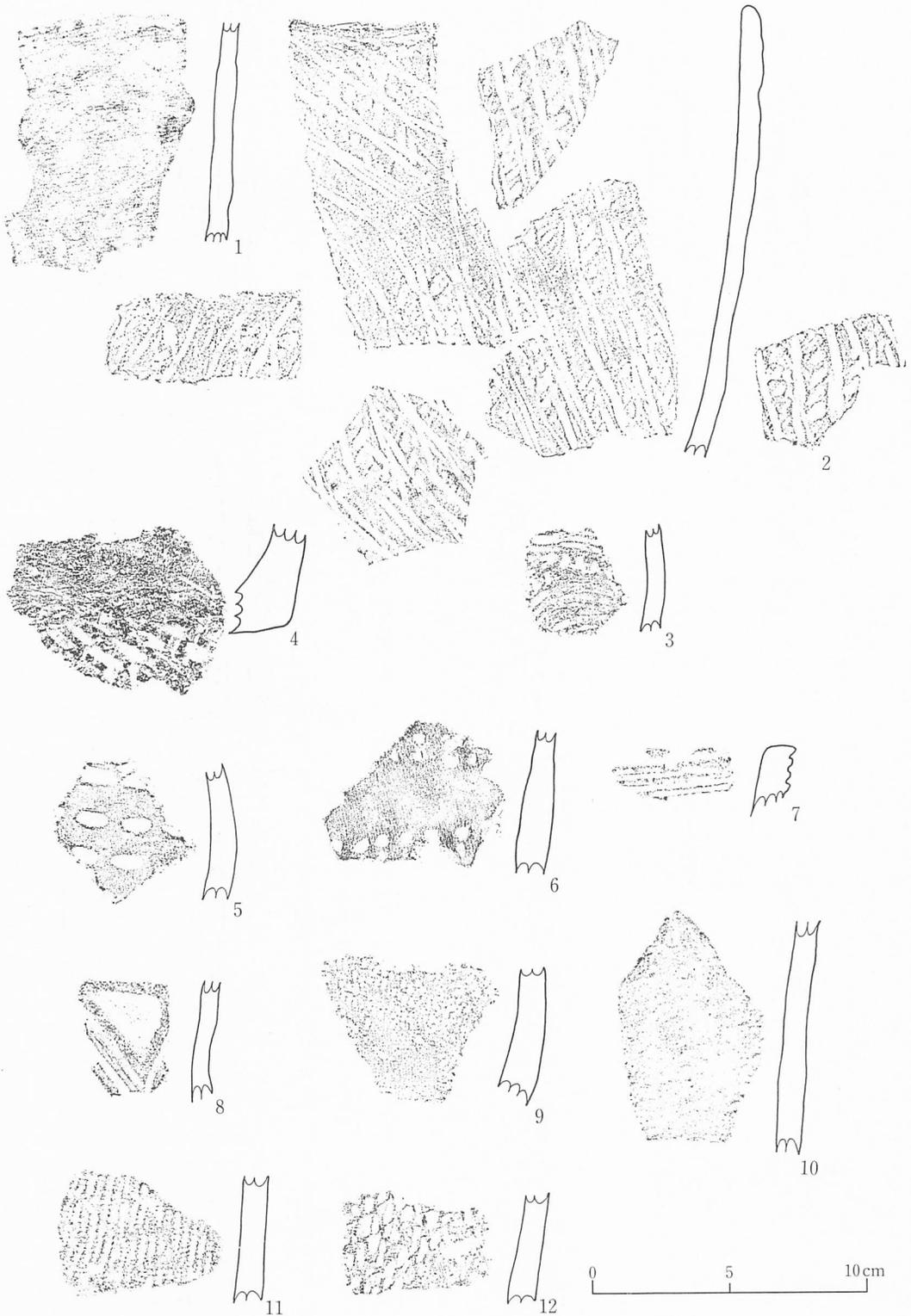
第 8 图 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



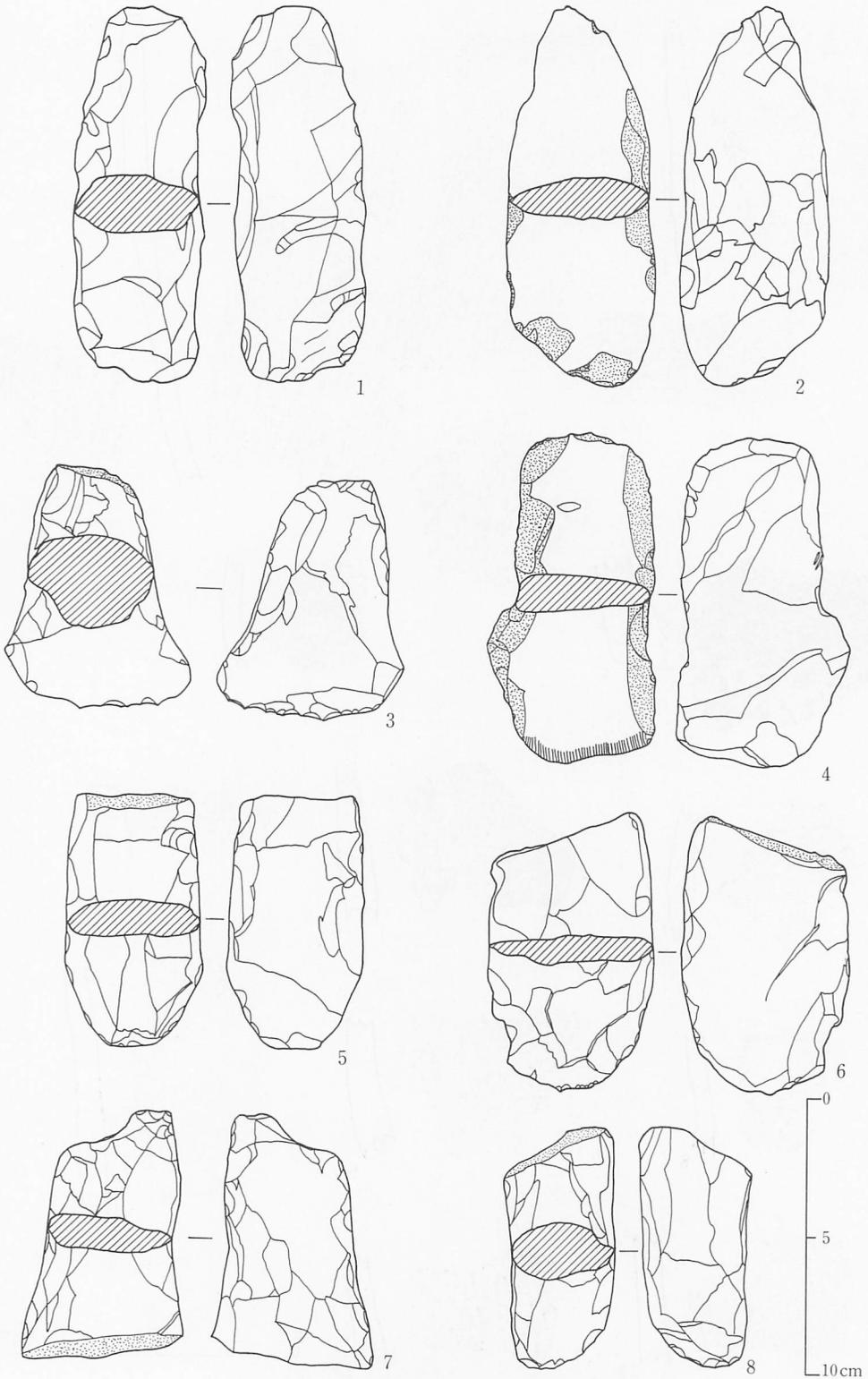
第9図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影・実測図



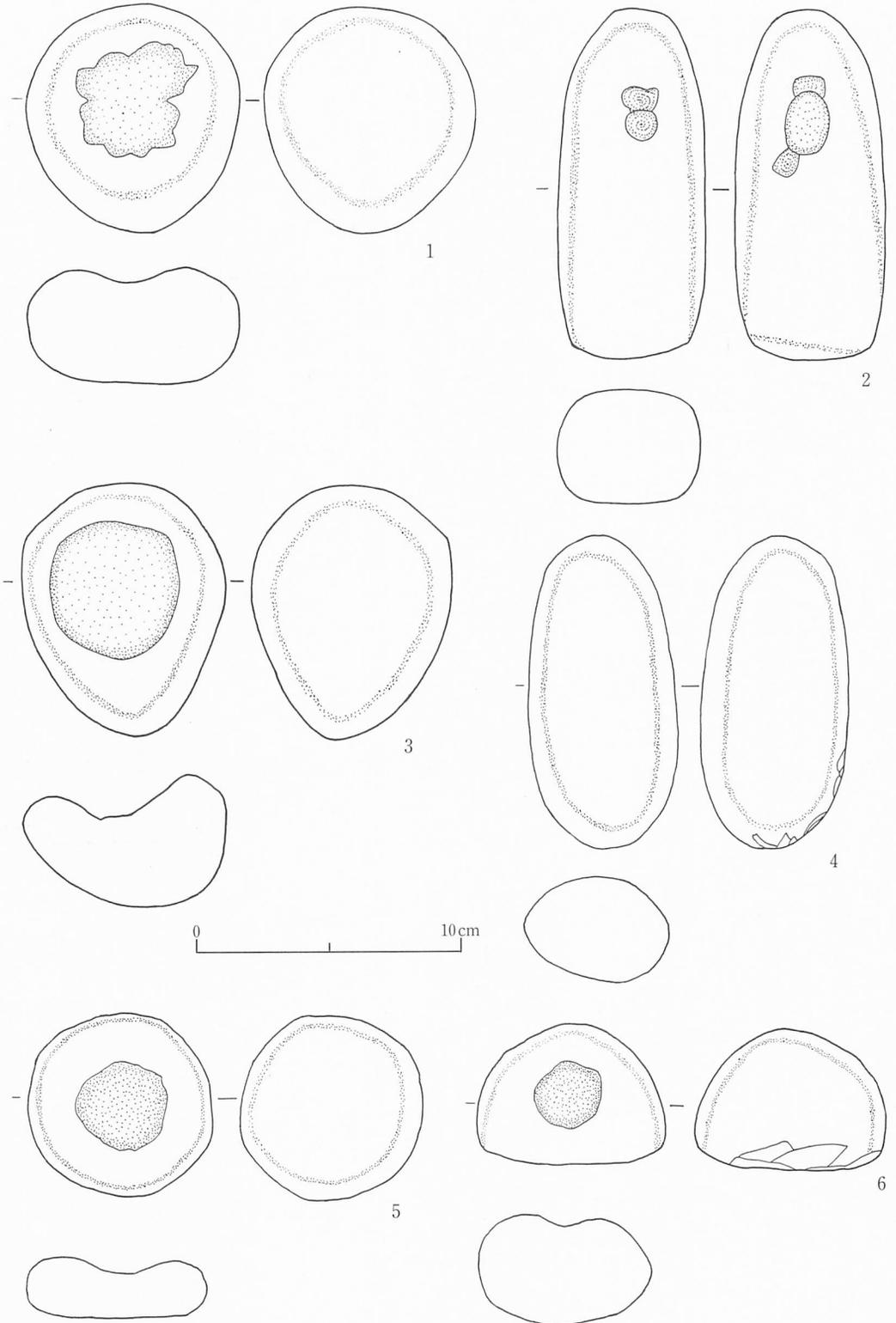
第 10 図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



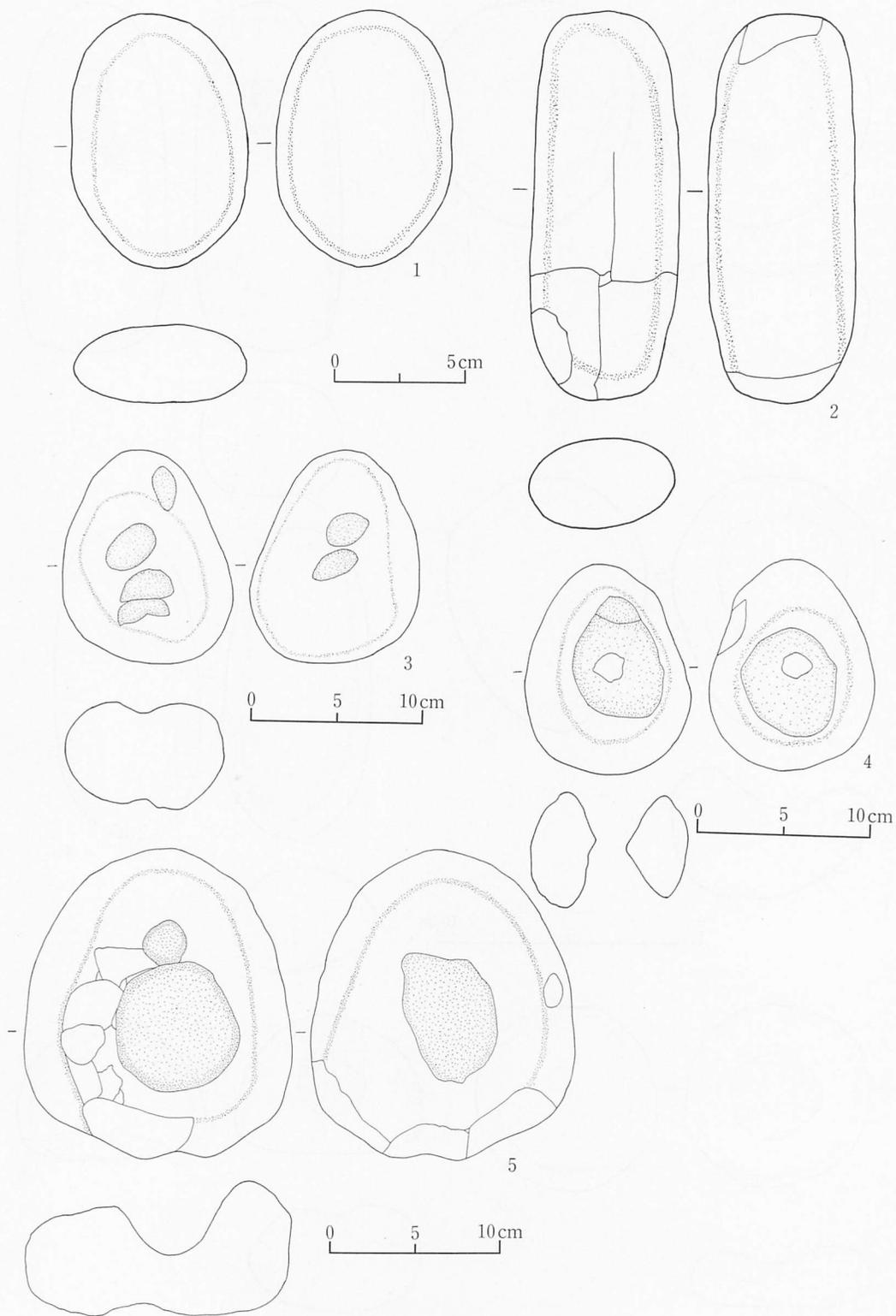
第11図 田場沢裏山遺跡採集土器拓影



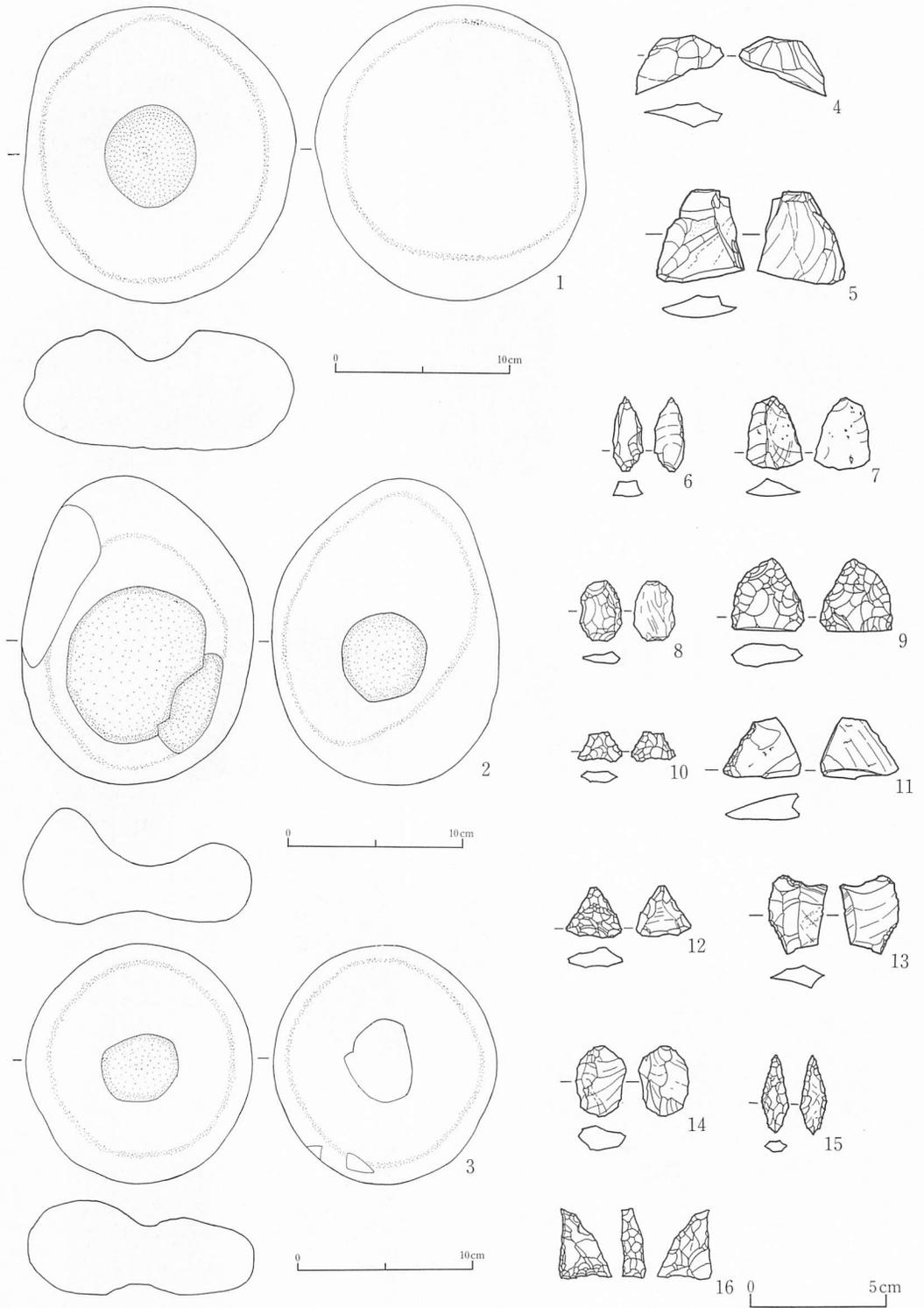
第 12 図 田場沢裏山遺跡採集石器実測図



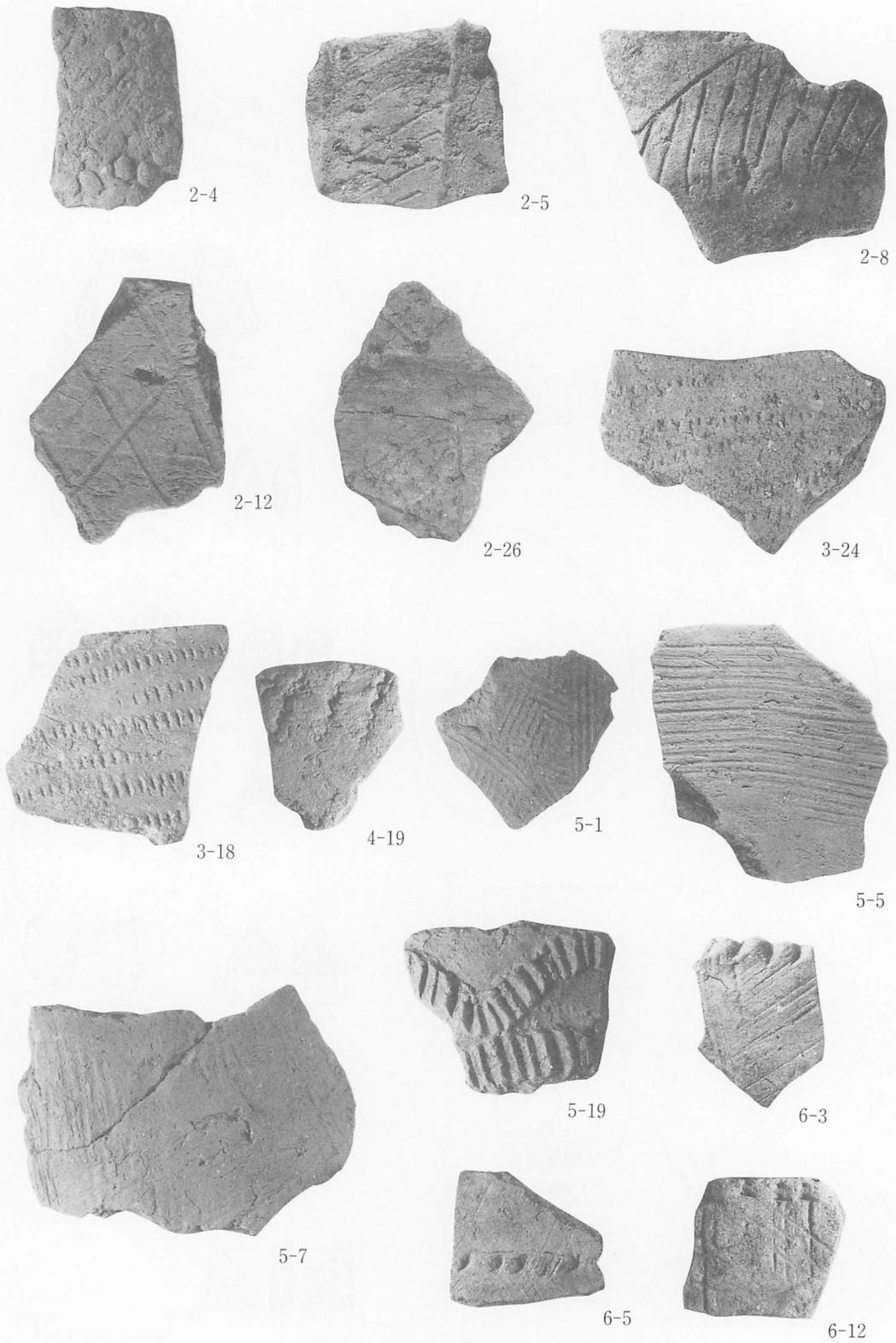
第 13 図 田場沢裏山遺跡採集石器実測図



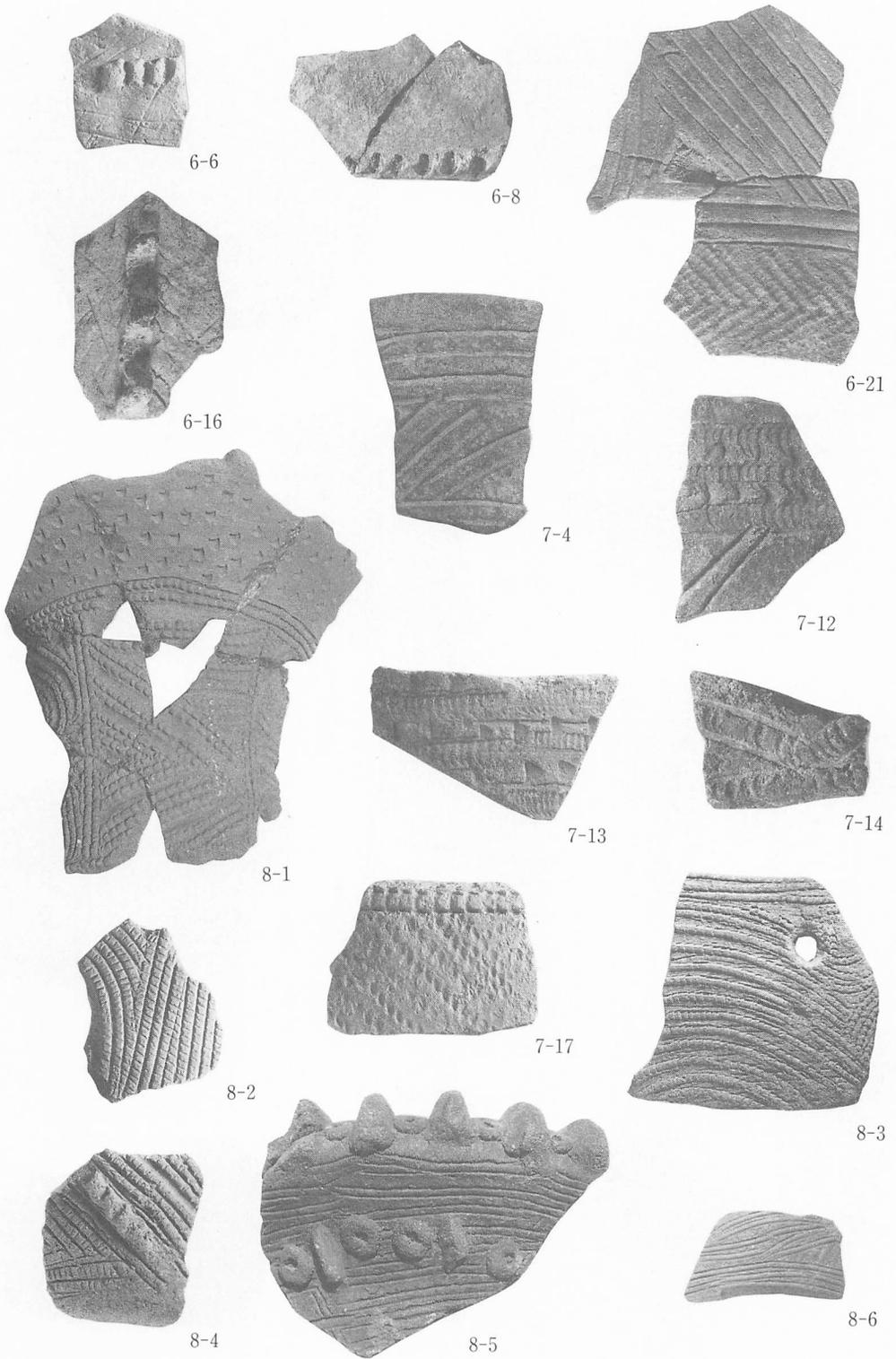
第 14 図 田場沢裏山遺跡採集石器実測図



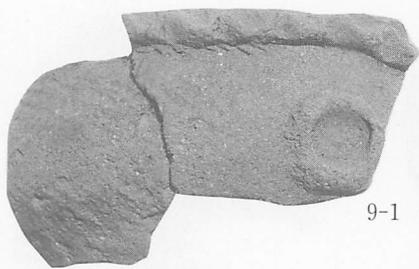
第 15 図 田場沢裏山遺跡採集石器実測図



図版1 田場沢裏山遺跡採集土器



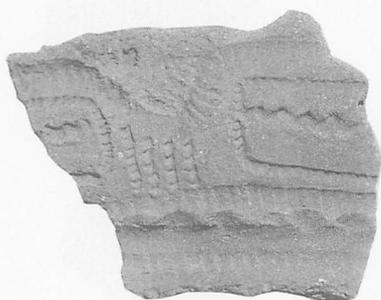
図版2 田場沢裏山遺跡採集土器



9-1



9-3



10-2



10-3



10-6



10-12



10-15



10-16



11-2



11-10



11-12

图版 3 田場沢裏山遺跡採集土器



12-2



12-3



12-4



12-5



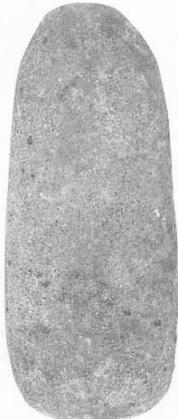
12-6



12-7



12-8

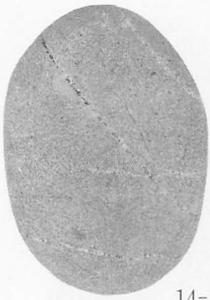


13-2



14-2

図版4 田場沢裏山遺跡採集石器



14-1



13-1



13-3



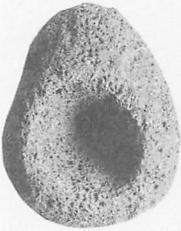
13-5



13-6



15-2



14-4



14-5



15-4



15-5



15-6



15-7



15-8



15-9



15-10



15-11



15-12



15-13



15-14



15-15

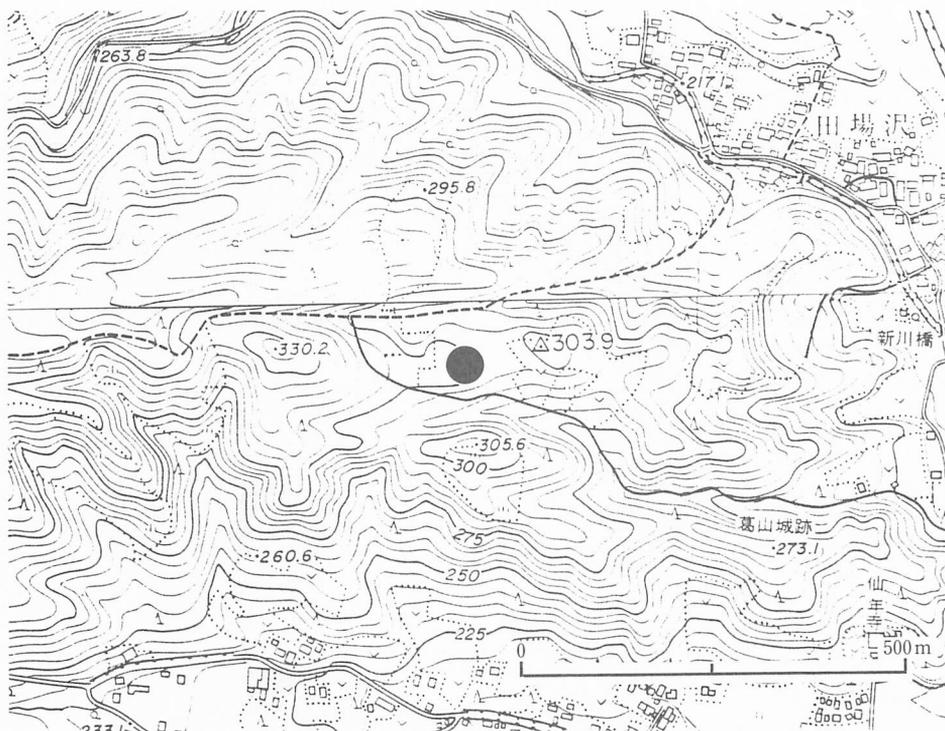


15-16

図版 5 田場沢裏山遺跡採集石器

藤畑遺跡 ふじはた

所在地 裾野市葛山字藤畑



位置図

位置と立地 愛鷹山から東方の葛山地区へ延びた尾根稜部の、海拔三〇〇mの平坦部に位置する。葛山一色原から伯母子沢を約七〇〇mほどさかのぼった尾根上の藤畑にある。

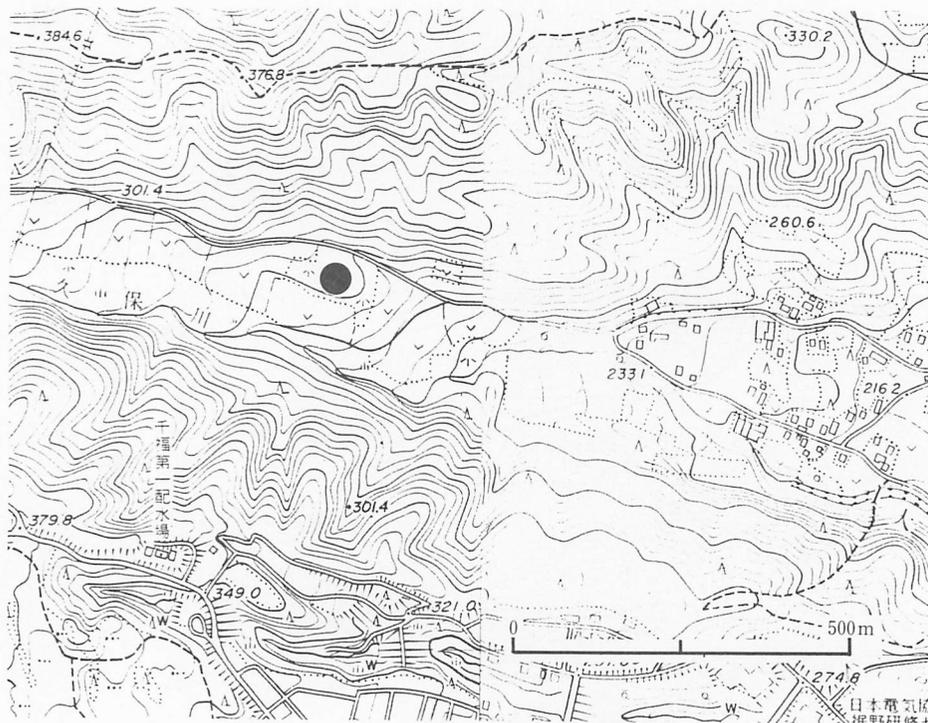
発見と調査 昭和五〇年代に、裾野郷土研究会の芹沢充寛、中村孝一が踏査し、縄文時代の土器片を採集している。

現状 山林と一部畑地となっている。

文献 「上川遺跡」の遺跡分布一覧表に記載

上城山居遺跡
かみんじょうさんきよ

所在地 裾野市葛山字上城山居



位置図

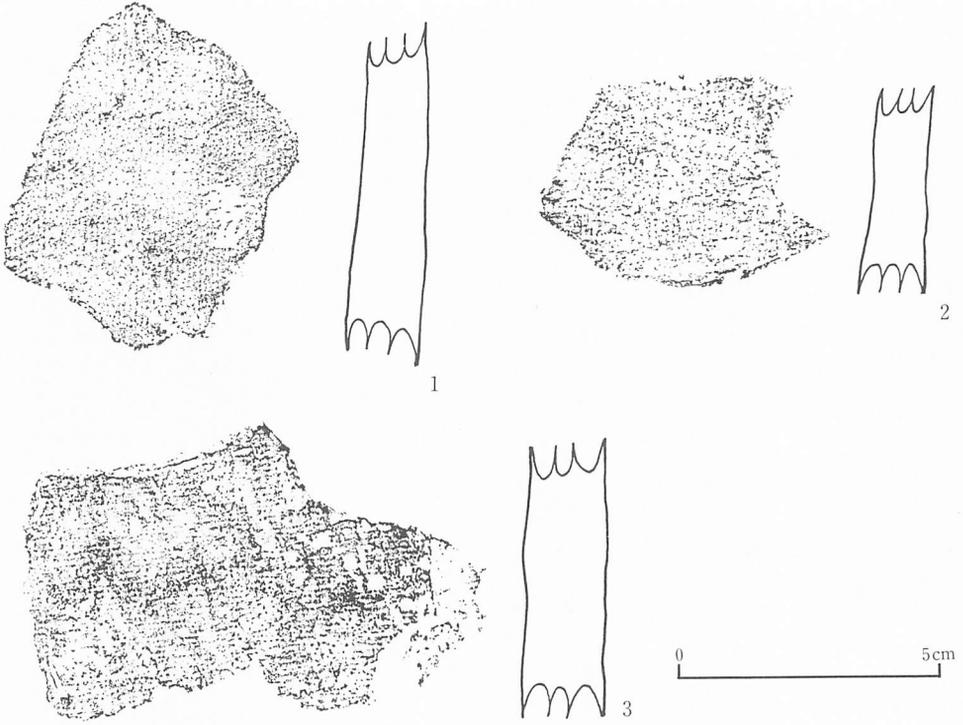
位置と立地 葛山の入谷を流れる大久保川は、愛鷹山に向かって上城から、南側の千福ニュータウン尾根の脚部に沿って沢谷となり、北側の尾根との間に幅二〇〇mないし一〇〇mの緩傾斜地が形成されている。本遺跡は、このゆるい傾斜面の海拔二七〇m付近に位置する谷間の遺跡である。

発見と調査 昭和四〇年代の後半、芹沢充寛が葛山地区の遺跡踏査中、土器片を表面採集し、遺跡として確認した。

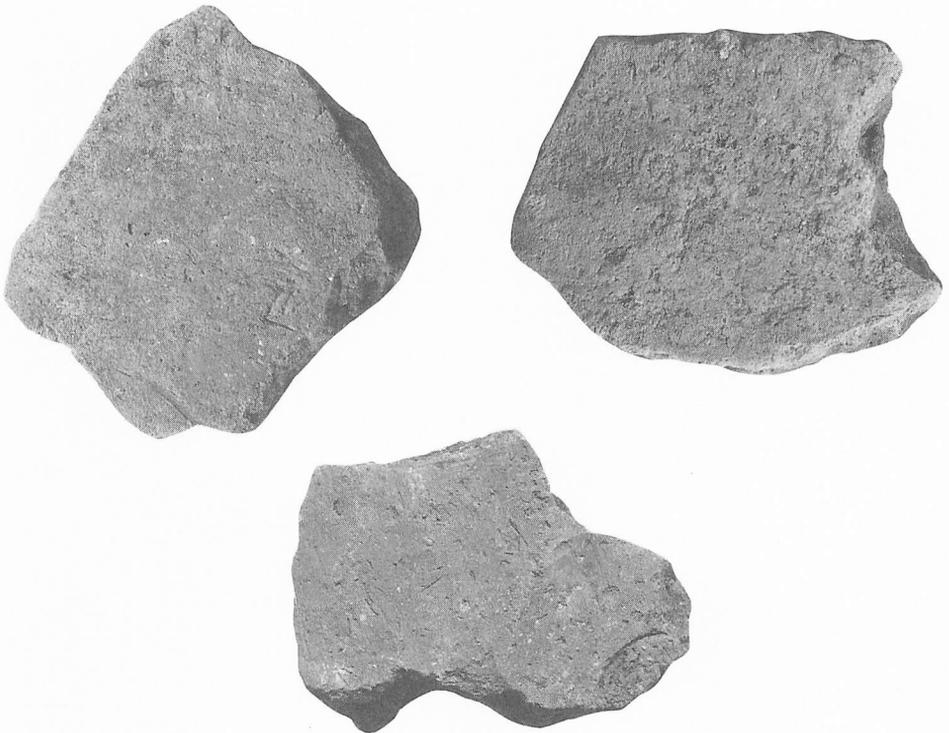
遺物 表面採集したものである。図の1、3はともに、胎土に繊維を含み、1は粗砂粒を多量に含む。すべて無文の破片であるが、1にはヘラ状器具による整形痕がみられる。縄文時代早期に属するものと思われる。

遺跡の特徴 裾野市内の縄文時代遺跡の大部分は、丘陵、台地上に位置しているが、本遺跡は茶畑大入遺跡と同じように、谷間の緩傾斜地にある。

現状 畑地である。

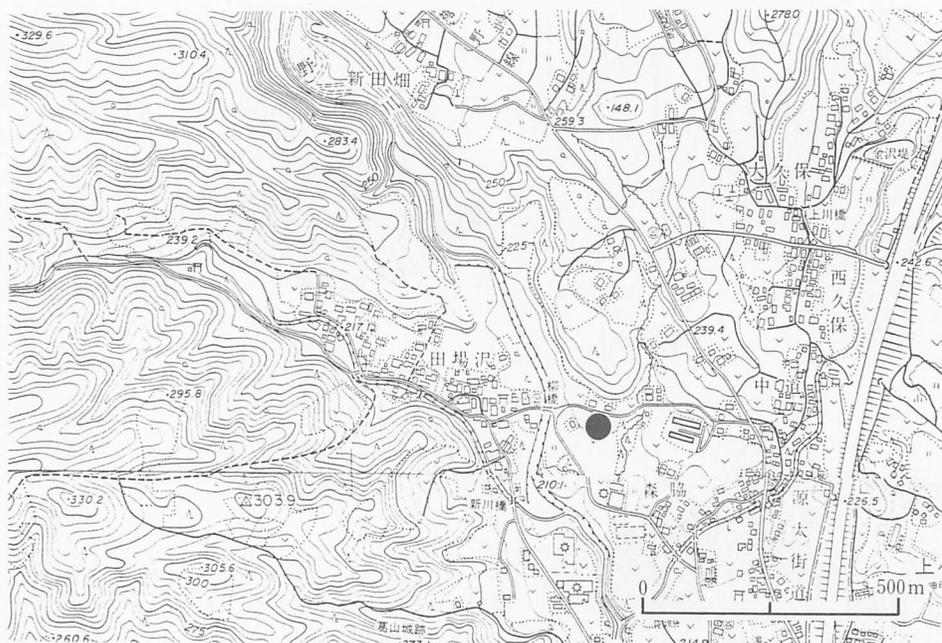


上城山居遺跡採集土器拓影



上城山居遺跡採集土器

所在地 裾野市葛山字柳島九一二番地ほか



位置図



遺跡範囲図



柳島遺跡遠望

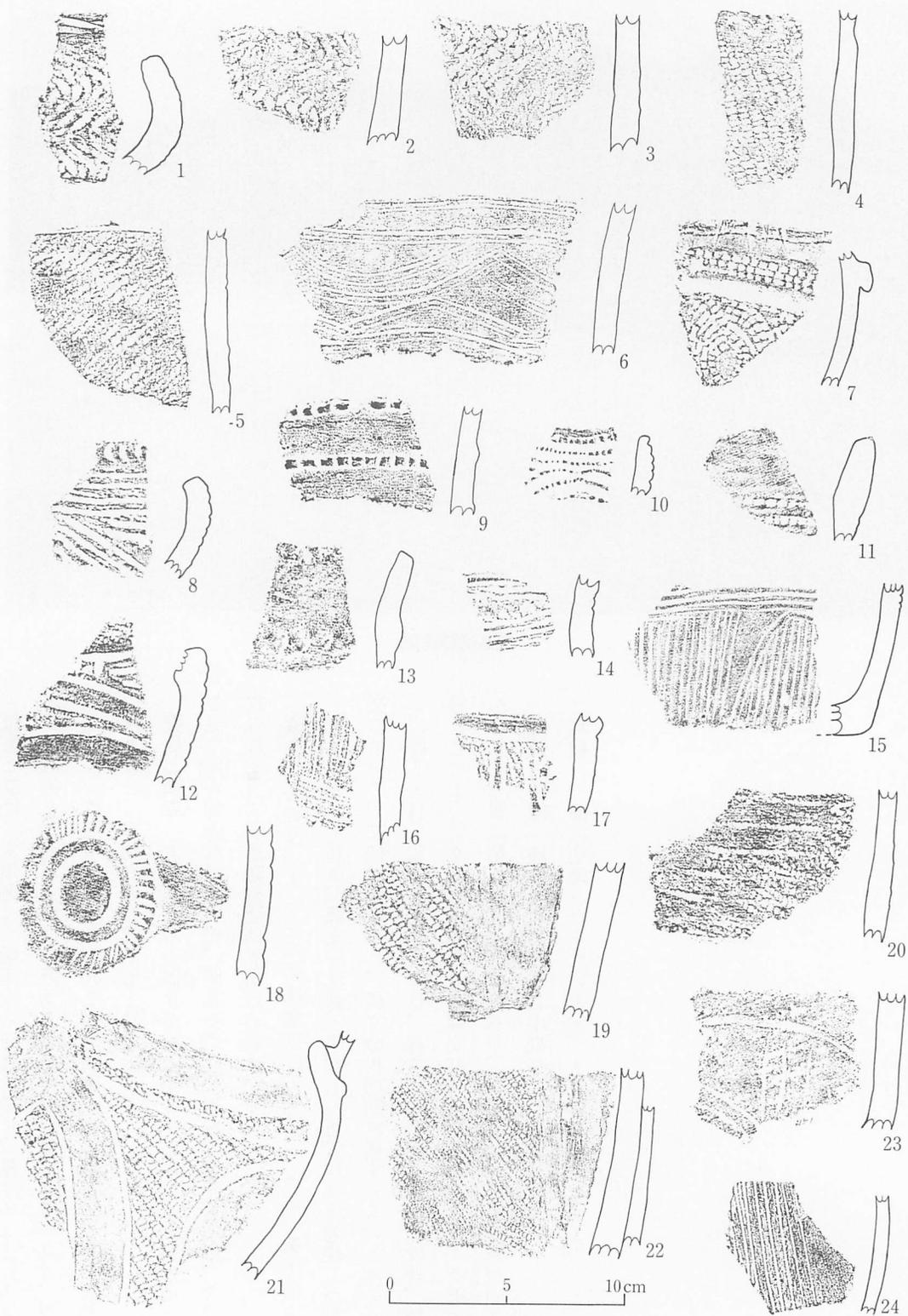
位置と立地 本遺跡は、愛鷹山の東麓末端に位置するようにみえるが、愛鷹山を北東から東側を区切る佐野川の溪流の東側にあり、富士山麓側に位置している。佐野川と金沢方面から流れ下る沢谷の合流点に挟まれた、三角形の台状地形上に立地する。

発見と調査 本地区から土器片が出土することは、土地の人によって早くから知られていたが、昭和四〇年代以後、瀬川裕市郎、芹沢充寛らによって、遺跡確認踏査が行われている。

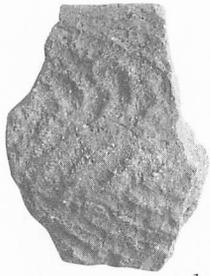
遺物 遺物は、すべて表面採集されたものである。第1図の1と4・6・9・10は、縄文と沈線、半截した竹管による連続した押引文によって、文様が構成され、縄文時代前期に属するものと考えられる。同7・11・12・15と24までは、縄文、連続角押引文、沈線、隆起線などによって文様が構成され、縄文時代中期に属するものとしてよからう。石器(第2図)には磨製石斧、打製石斧が採集されている。

遺跡の特徴 縄文時代前期から中期後半の遺跡である。

現状 一部は宅地となっているが、大部分は畑地である。



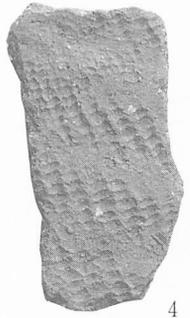
第1图 柳島遺跡採集土器拓影



1



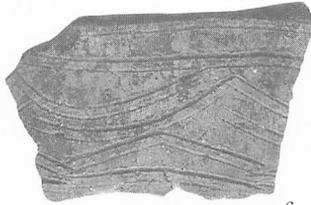
2



4



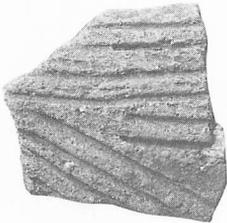
5



6



7



8



10



12



14



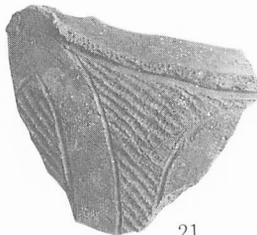
15



17



18

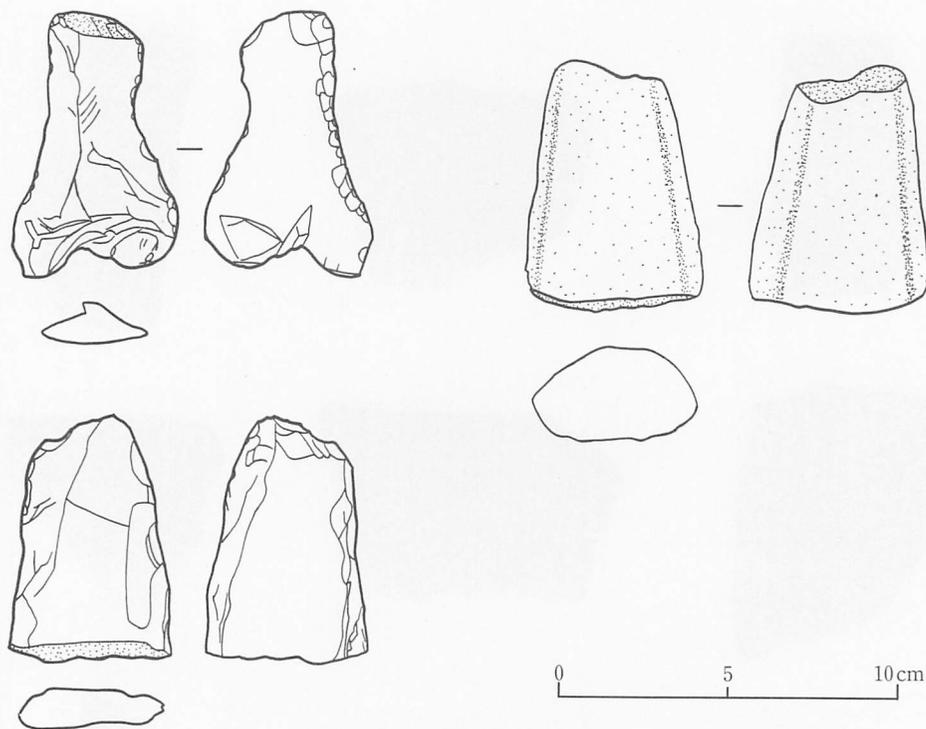


21



22

柳島遺跡採集土器



第2図 柳島遺跡出土石器実測図

(用語解説)

縄文 撚った紐を複数撚り合わせて縄とし、土器面に押し付けたり、転がしてできた文様を縄文という。撚り方や組み方によってさまざまな種類の縄文ができる。縄文時代の全期間を通じて、代表的な文様となっている。

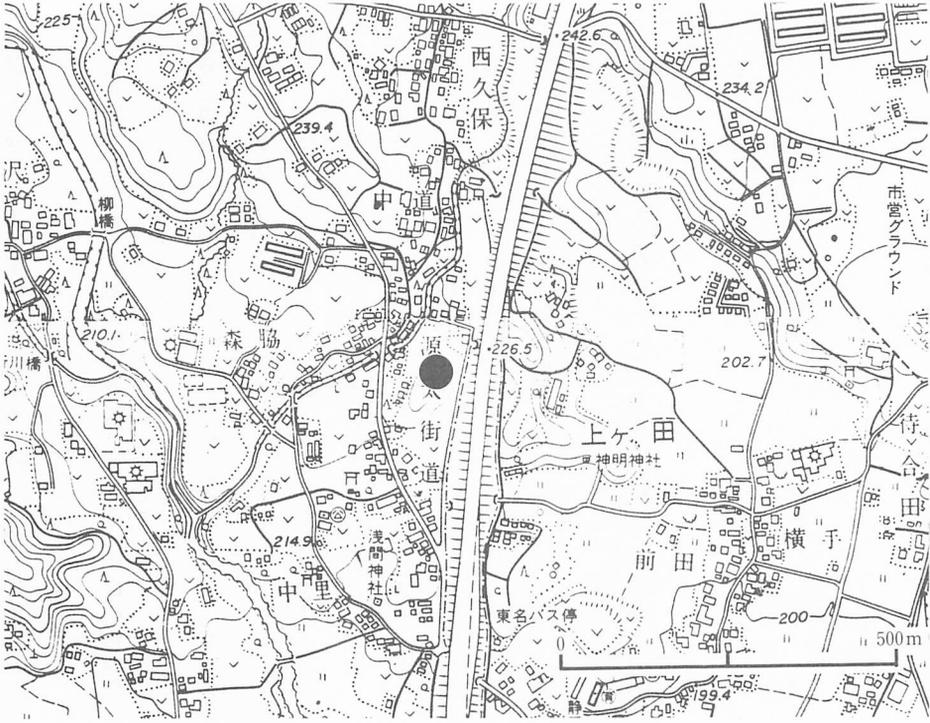
隆起線文 細い粘土紐を土器面に貼り付け、断面が三角形になるように整形したものを微隆起線、細隆起線といい、早期後半の土器にみられる。大小の粘土紐を土器面に貼り付け、文様や装飾、文様区画にしたものを隆起線、隆起帯、隆起線文帯などといい、断面が盛り上がったものや、平たい紐状になったものなど種類が多い。中期土器の主な文様となっている。

絡条体圧痕文 撚紐をコイル状に棒に巻きつけて、土器面に押し付けてできた細粒列点状の文様をいう。早期後半の土器文様の一つである。

貝殻条痕文 赤貝のようなギザギザのある貝殻の腹縁を使って、土器面に縦、横、斜方向や交差、鋸歯、山形などの条痕をつけたものをいう。また貝殻の口縁部を土器面に押し付け、ギザギザの連続した線文や山形、鋸歯、波状の文様を貝殻腹縁文といい、早期後半の土器文様の一つとなっている。

44
中里遺跡
なかざと

所在地 裾野市葛山字中里八二〇番地ほか



位置図



遺跡範囲図

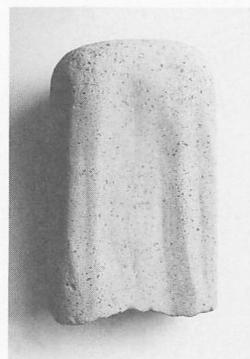
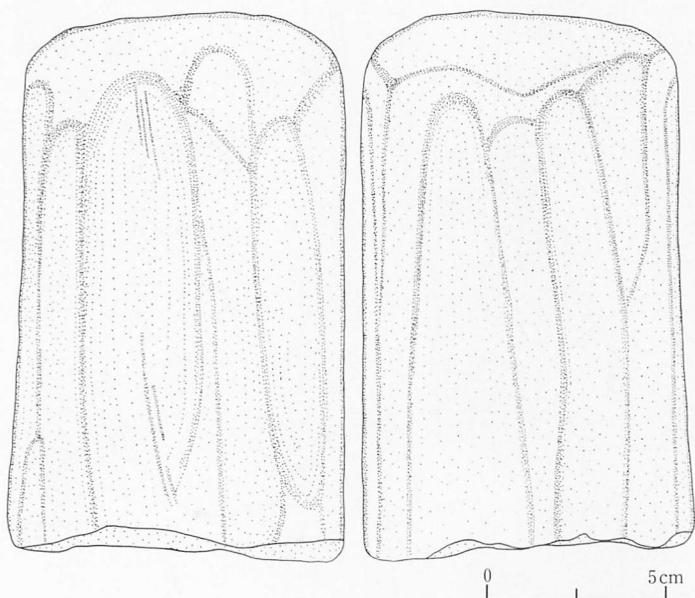
位置と立地 富士山東南の山麓末端地域には、馬背状の低丘陵がいくつか枝状に分かれて存在するが、本遺跡は裾野市金沢上川遺跡が位置する丘陵の南に続く、葛山中里地区の海拔二二六mの台地化した地形のところに位置する。

発見と調査 本遺跡は、昭和五〇年代の後半、芹沢充寛、井上輝夫らによって踏査されている。

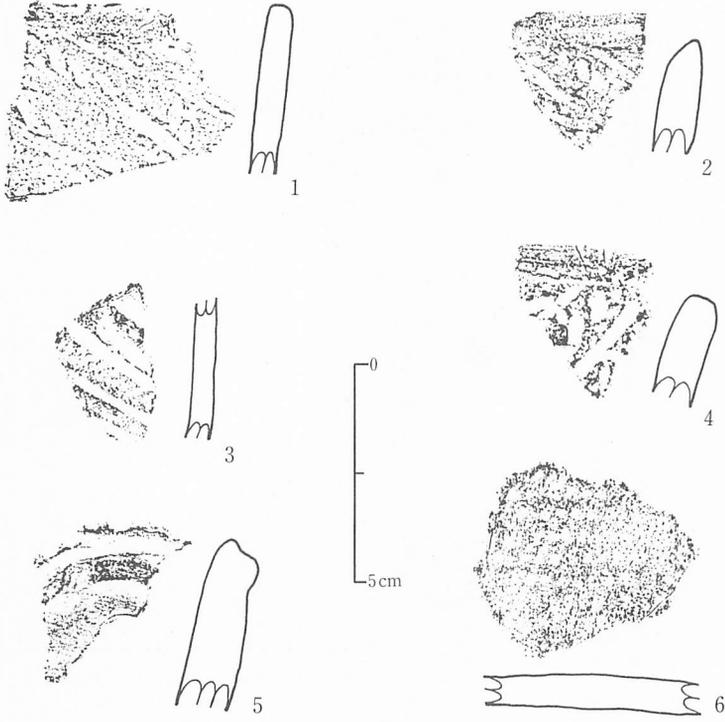
遺物 すべて表面採集されたものである。第2図の1・2・4は、沈線と点状押捺文によって、文様が構成される。3は、地文に縄文が施され、沈線によって文様が構成され、やや薄手である。5は、隆起線がみられる。6は、網代文の底部である。すべて縄文時代後期に属する土器と思われる。第1図は、何条かのへこみが入った石器で、凹面に磨り痕があり、大形の砥石であろうとしてよからう。石質は安山岩である。

遺跡の特徴 裾野地域における数少ない縄文時代後期の遺跡の一つとしてよい。

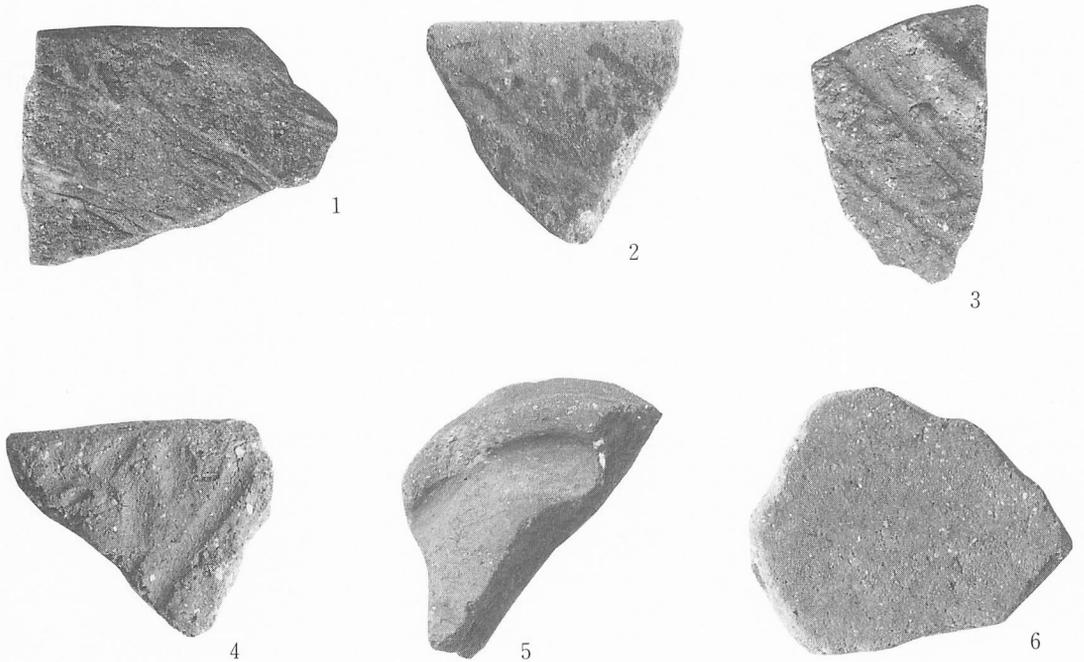
現状 遺跡の東側は、東名高速道路となっている。現在、そのほかの部分は宅地化されている。



第1図 中里遺跡採集砥石状大形石器



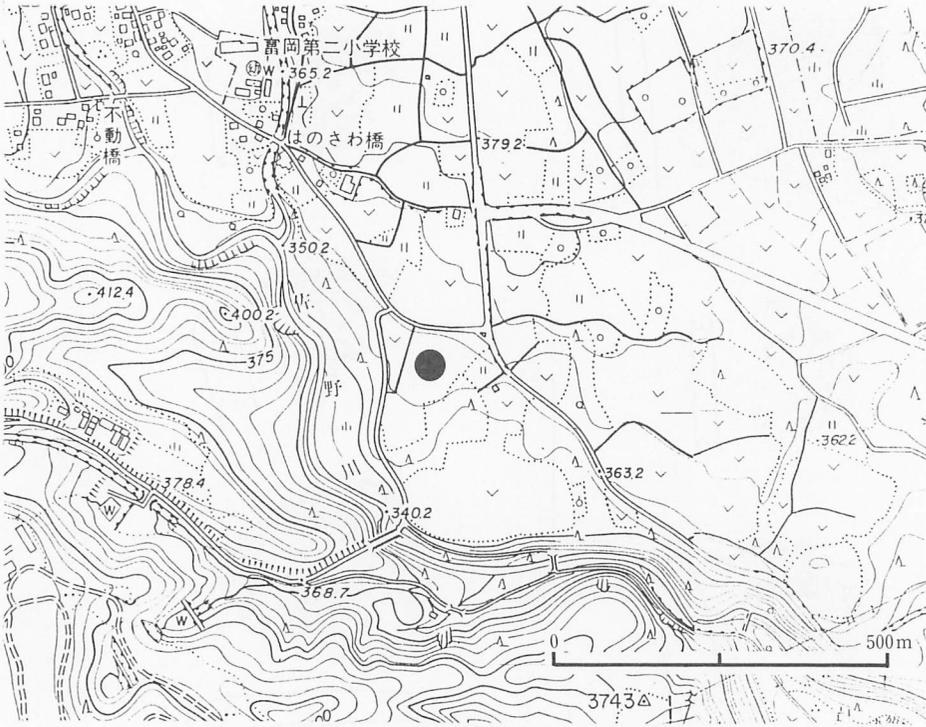
第2図 中里遺跡採集土器拓影



中里遺跡採集土器

一本杉下遺跡
いつぼんすぎした

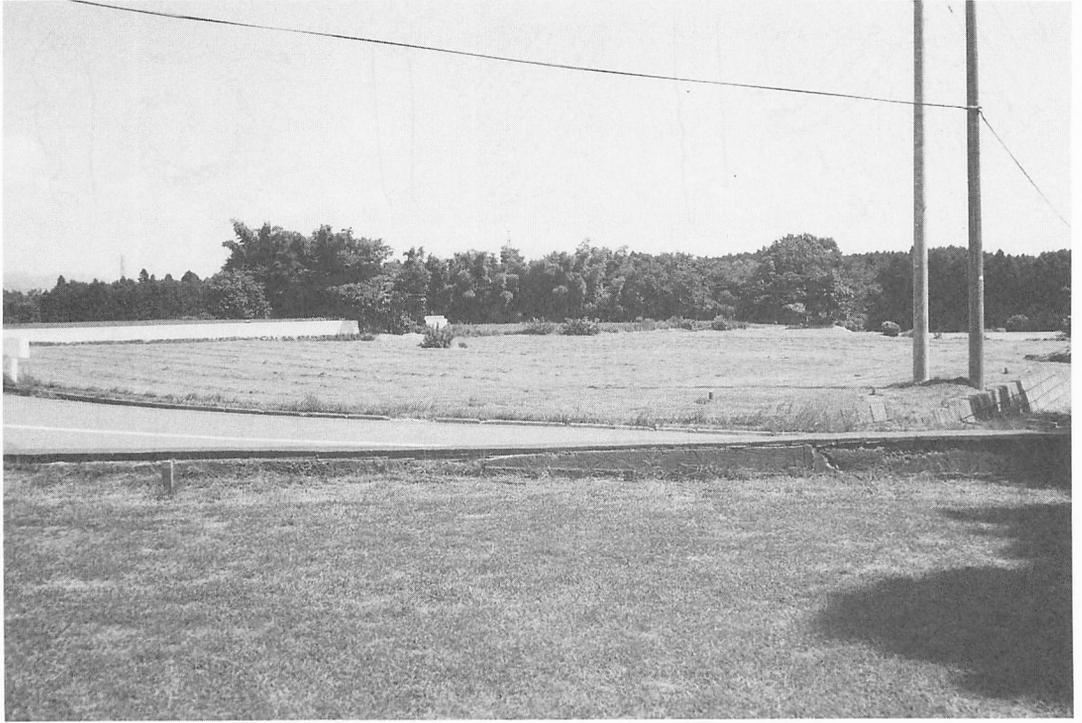
所在地 裾野市下和田字一本杉下



位置図



遺跡範囲図



一本杉下遺跡遠望

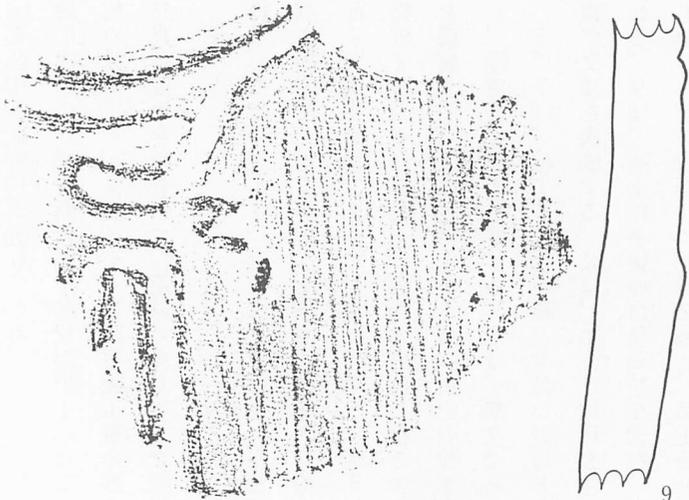
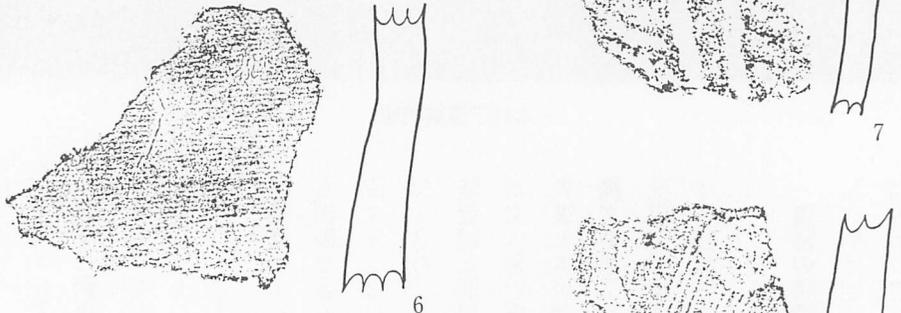
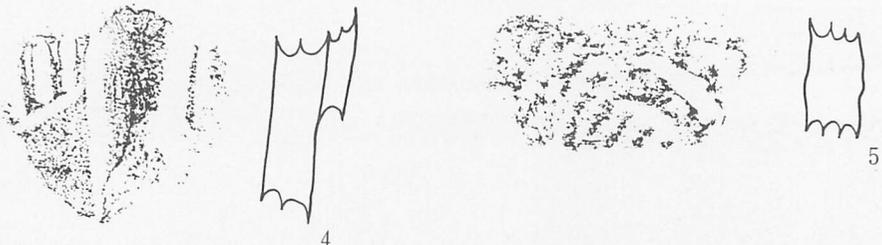
位置と立地 富士山東南麓の裾部が下和田地区で愛鷹山塊と接する一本杉下の海拔三六三mの平坦地に位置する。西側から南側をめぐって、富士山麓と愛鷹山を区切る佐野川が流れている。

発見と調査 昭和四〇年代に、縄文時代の土器片が出土したことがあるが、昭和五〇年代の後半、ゴルフ場へ至る道路建設工事の際に土器片が出土し、芹沢充寛が現地を踏査して、遺跡であることを確認した。

遺物 すべて表面採集したものである。図の1は、胎土に白色石粒と細砂を含み、よく焼き締まる。地文に縄文を施し、沈線で文様を構成する。2は、やや薄手で縄文を地文とする。3は、胎土に若干の雲母を含む。渦状文を構成する。4は、胎土に雲母と白色石粒を含む。隆起線と沈線で文様を構成する。5は、胎土に多量の白色石粒を含む。地文に荒い縄文を施し、隆線で文様を構成する。6は、無文である。表裏とも研磨されている。7は、胎土に白色石粒と少量の雲母を含む。縄文を地文とし、沈線で文様を構成する。8は、胎土に細砂を含む。沈線と引掻文が施される。9は、胎土に多量の白色石粒を含む。内面は研磨されている。半截の竹管で引掻状に沈線を施し、粘土紐を貼付して文様を構成する。以上、縄文時代中期後半の土器と思われる。

遺跡の特徴 須山大坂遺跡と共に富士山麓に位置する遺跡で、遺物包含層は地表下の深いところにあり、表面採集は難しい。縄文時代中期後半の遺跡としてよからう。

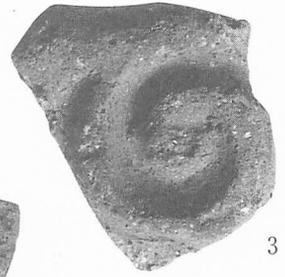
現状 大部分は芝畑となっている。



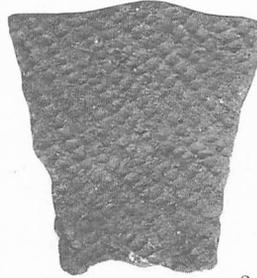
一本杉下遺跡採集土器拓影



1



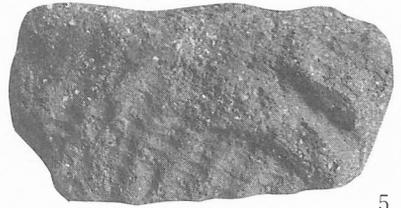
3



2



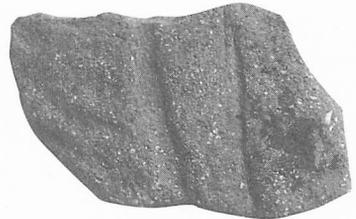
4



5



6



7



9

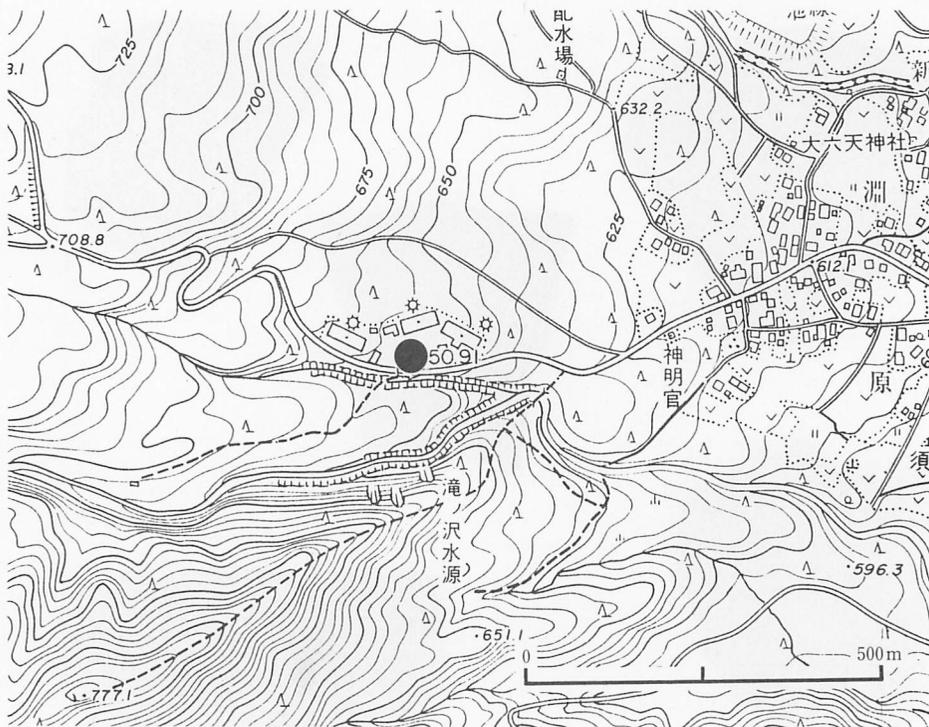


8

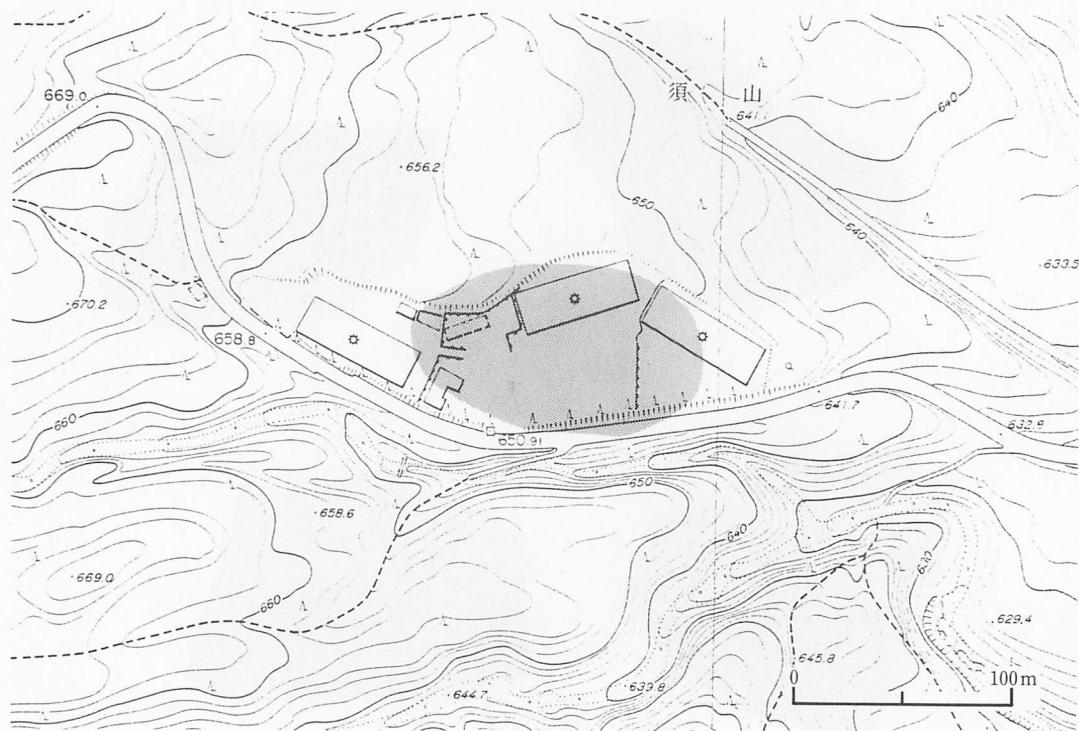
一本杉下遺跡採集土器

須山大坂遺跡
すやまおさか

所在地 裾野市須山字大坂一九九五番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 富士山の東南麓の裾部が愛鷹山の北麓と接する、須山大坂の海拔六五〇mの高所に位置する。南側に佐野川のカレ沢があるが、沢底には湧水地点がみられる。

発見と調査 昭和五〇年（一九七五）一月、県道十里木須山線の側溝工事中、小島辰夫が発見した。地元在住の渡辺徳逸の話によると、昭和三〇年（一九五五）頃、県道建設工事中にも、同地点で土器が出土したという。

層序 小島辰夫によると、第一層は黒土層、第二層は茶褐色火山灰層、第三層は黒褐色火山灰層、第四層は赤土層で、土器の発見された層は第三層であるとする。

遺物 図と写真に示したものだけであるが、胎土に小石粒と若干の白色石粒を含み、硬く焼き締まる。縦と斜行の沈線がすき間なく施され、半截した竹管による三条の条線文帯が入る。縄文時代前期後半の土器と思われるが、同中期前半のものとする意見もある。

遺跡の特徴 土器出土地点は、昭和三〇年（一九五五）、県道の建設工事の時点で、すでに原地表を約二mほど削土しているとのことである。したがって昭和五〇年（一九七五）の工事の際、現地表下一mほどのところから土器が発見されたとするので、実際には原地表下三mの層に包含されていたことになる。富士山麓の縄文時代遺跡は、地表下深いところに埋没しており、本遺跡もその一つであるとしてよかろう。本遺跡は、市内縄文時代遺跡としては、現在のところ最高地点にある。

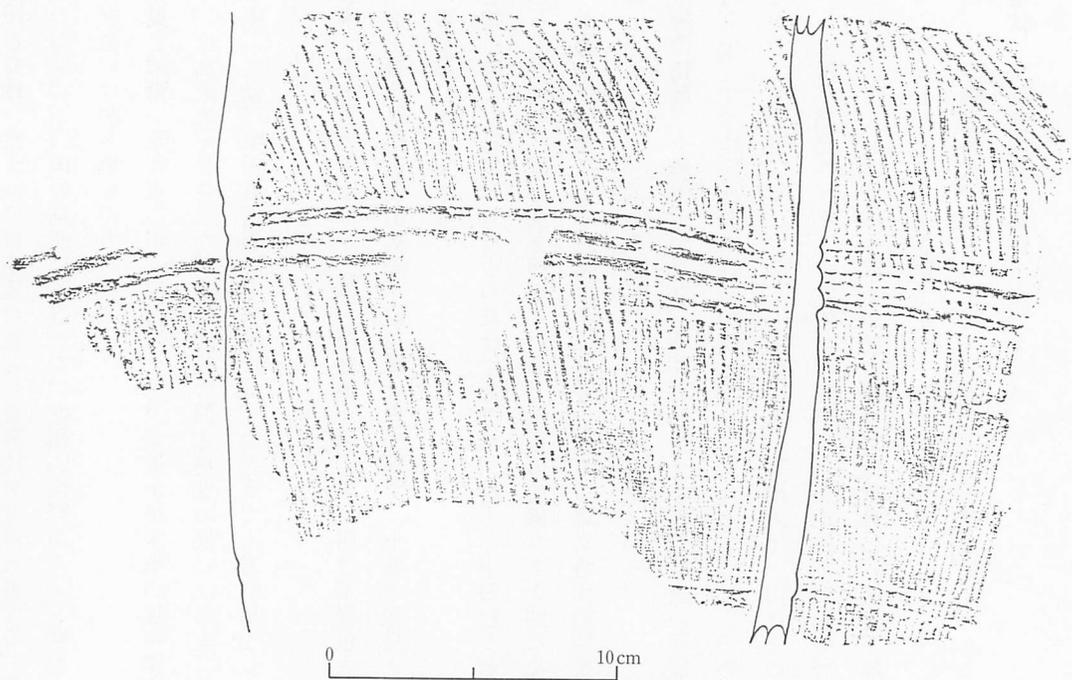
現状 工場敷地及び道路となっている。

（用語解説）

下吉井式土器 縄文時代早期の土器型式。神奈川県横須賀市下吉井遺跡を標識遺跡とする。器形は、口縁が外に開き底部は尖底や平底の土器。文様は口縁に沿って一々二本の刻みがある隆線を配し、口縁下に横走りする刺突文や押しつぶしをもつ隆線を施し、口縁は波状の沈線文を施したもの、隆線をおきかえたものがある。

木島式土器 縄文時代早期末々前期初頭の土器型式。静岡県庵原郡富士川町木島遺跡を標識遺跡とする。器形は尖底の深鉢で器壁はきわめて薄い。平縁または波状口縁で、文様は粘土紐を貼りつけたり、格子状の沈線文が施文される。分布は近畿東部から東海・中部地方を中心に南関東におよぶ。

関山式土器 縄文時代前期の土器型式。埼玉県蓮田市関山貝塚を標識遺跡とする。器形は深鉢、浅鉢で平縁または波状の口縁をもち平底または上底である。胎土は繊維を大量に含み、文様は、羽状縄文、ループ文、細紐縄文で、口縁部には平行沈線や瘤文が施されている。



須山大坂遺跡出土土器拓影



須山大坂遺跡出土土器